

明治大学大学院文学研究科

2014 年度

博士学位請求論文

氏族仏教と国家仏教の相克

— 南山城における仏教の受容と展開 —

Rivalry between “Clan Buddhism” and State Buddhism

—Acceptance and Development of Buddhism in Southern Yamashiro Province of Ancient Japan—

学位請求者 史学専攻

中 島 正

氏族仏教と国家仏教の相克

一 南山城における仏教の受容と展開 一

本文目次

序 章	1
第一節 国家仏教の内実と問題の所在	1
第二節 南山城における仏教文化の概要	6
第一部 仏教の受容とその主体	11
一 南山城における古墳と寺院 一	
第一章 仏教の受容と南山城の前方後円墳	13
はじめに	13
第一節 椿井大塚山古墳と三角縁神獣鏡	15
第二節 椿井大塚山古墳の被葬者像	29
第三節 椿井大塚山古墳での二つの墓前祭祀	36
第二章 歴史認識の成立と横穴式石室の導入	41
はじめに	41
第一節 南山城における横穴式石室の導入と展開	42
第二節 南山城の古代氏族	51
第三節 南山城における古墳と寺院	54
第三章 仏教の受容と渡来人	63
はじめに	63
第一節 高麗寺と推古朝の寺四十六所	64
第二節 高句麗移民の痕跡	71
第三節 山背絵師と高麗寺跡出土観音菩薩像線刻平瓦	81
第二部 国家仏教の完成と在地寺院	89
一 南山城における古代寺院とその出土瓦 一	
第一章 飛鳥白鳳寺院の創建	91
はじめに	91
第一節 7世紀の伽藍配置	92

第二節	南山城における伽藍造営の伝播	98
第三節	南山城における古瓦の特質	108
第四節	蟹満寺と丈六金銅仏の謎	121
第五節	白鳳の山林寺院 山瀧寺	136
第二章	二つの都城と古代寺院	145
	はじめに	145
第一節	恭仁宮と京の実態	146
第二節	恭仁宮大極殿施入前の山背国分寺	159
第三節	橘諸兄と井手寺の造営	169
第四節	平城京の造営と奈良山瓦窯跡群	181
第三章	国家仏教の完成と崩壊	187
	はじめに	187
第一節	日本靈異記と山寺	188
第二節	山背における播磨国府系瓦出土の背景	197
第三節	南山城における平安初期古瓦の様相	212
第四節	神仏習合の寺院	220
終 章		231
	参考文献一覧	237
	既発表論文対応	251
	日本語論文要旨	253
	韓国語論文要旨	256
	英語論文要旨	259

挿 図 目 次

第 1 図	南山城の遺跡図	9
第 2 図	椿井大塚山古墳墳丘測量図	22
第 3 図	椿井大塚山古墳後円部墳丘測量図	23
第 4 図	椿井大塚山古墳出土銅鏡①	24
第 5 図	椿井大塚山古墳出土銅鏡②	25
第 6 図	椿井大塚山古墳出土銅鏡③	26
第 7 図	椿井大塚山古墳出土銅鏡④	27
第 8 図	椿井大塚山古墳築造前後の土器	28
第 9 図	椿井大塚山古墳と黒塚古墳の石室	33
第 10 図	三角縁神獸鏡の同範・同型鏡分有関係図	34
第 11 図	鉄製冠帽	35
第 12 図	三角縁仏獸鏡の表現	35
第 13 図	椿井大塚山古墳前方部の祭祀痕跡	39
第 14 図	椿井大塚山古墳後円部の祭祀痕跡	39
第 15 図	椿井大塚山古墳前方部の祭祀痕跡出土土器	40
第 16 図	椿井大塚山古墳後円部東側出土古墳時代後期以後の土器	40
第 17 図	山城の後期古墳分布図	47
第 18 図	山城の首長墳①	48
第 19 図	山城の首長墳②	49
第 20 図	山城の横穴式石室	50
第 21 図	南山城の古代氏族	53
第 22 図	山城の古代寺院分布図	60
第 23 図	山城の古代寺院一覧	61
第 24 図	山城の古瓦	62
第 25 図	山背・近江以東の初期寺院分布図	68
第 26 図	山背・近江と東国の寺々の瓦①	69
第 27 図	山背・近江と東国の寺々の瓦②	70
第 28 図	木津川と高麗寺	78
第 29 図	高麗寺伽藍復元図	78
第 30 図	高麗寺金堂跡	79
第 31 図	高麗寺金堂跡瓦積基壇	79
第 32 図	高麗寺出土飛鳥期軒丸瓦	80
第 33 図	高麗寺出土川原寺式軒瓦	80

第 34 図	高麗寺跡出観音菩薩像線刻平瓦	86
第 35 図	仏像線刻瓦出土遺跡一覧	87
第 36 図	高麗寺跡出土軒丸瓦（高麗寺 KMM41 型式）	87
第 37 図	主要な寺院の伽藍配置 ①	96
第 38 図	主要な寺院の伽藍配置 ②	97
第 39 図	南山城の伽藍配置	97
第 40 図	南山城の古代寺院出土軒丸瓦拓影	106
第 41 図	高麗寺・蟹満寺における伽藍整備過程	107
第 42 図	南山城の寺院造営過程	107
第 43 図	山背の「高句麗系」軒丸瓦	111
第 44 図	山背の素弁系軒丸瓦 ①	111
第 45 図	山背の素弁系軒丸瓦 ②	112
第 46 図	高麗寺跡出土軒丸瓦	118
第 47 図	高麗寺式と周辺の川原寺式軒丸瓦	119
第 48 図	高麗寺跡出土軒平瓦	119
第 49 図	山背の額面施文軒平瓦	120
第 50 図	蟹満寺旧境内発掘調査図	131
第 51 図	天神川沖積低地横断面図	132
第 52 図	蟹満寺金堂跡発掘調査図	132
第 53 図	蟹満寺旧境内出土軒瓦同範関係一覧	133
第 54 図	蟹満寺旧境内出土軒丸瓦の型式	134
第 55 図	蟹満寺旧境内出土軒平瓦の型式	135
第 56 図	山瀧寺跡出土軒瓦型式一覧	143
第 57 図	S rH 2 1, 2 2 型式軒平瓦	144
第 58 図	恭仁京と泉津周辺の遺跡	155
第 59 図	恭仁宮跡復元図	156
第 60 図	恭仁宮関係略年表	157~158
第 61 図	恭仁宮と山背国分寺	166
第 62 図	山背国分寺金堂（恭仁宮大極殿）の規模	167
第 63 図	恭仁宮と山背国分寺造営時軒瓦の主要な組合せ	167
第 64 図	恭仁宮式文字瓦同印例拓影	168
第 65 図	恭仁宮（山背国分寺）出土軒瓦同範関係一覧	168
第 66 図	井手寺跡伽藍計画図	176
第 67 図	井手寺跡出土軒丸瓦 ①	177
第 68 図	井手寺跡出土軒丸瓦 ②	178
第 69 図	井手寺跡出土軒平瓦	179

第70図	井手寺跡出土施釉垂木先瓦	-----	180
第71図	南山城の瓦窯跡一覧	-----	183~185
第72図	『日本鑑異記』に記載のある山寺	-----	193
第73図	奈良県内古代山寺一覧	-----	194~195
第74図	京都府南部古代山寺一覧	-----	195~196
第75図	高麗寺跡出土8・9世紀軒丸瓦型式一覧	-----	209
第76図	高麗寺跡出土8・9世紀軒平瓦型式一覧	-----	210
第77図	播磨国外で出土した播磨国府系瓦	-----	211
第78図	高麗寺跡出土播磨国府系瓦	-----	211
第79図	恭仁宮・山背国分寺造當時軒瓦の主要な組合せ	-----	218
第80図	山背国分寺軒丸瓦の系譜	-----	218
第81図	山背国分寺軒平瓦の系譜	-----	219
第82図	山背国分寺系列軒丸瓦の展開	-----	219
第83図	山背国分寺系列軒平瓦の展開	-----	219
第84図	神雄寺跡発掘調査図	-----	224
第85図	神雄寺仏堂跡発掘調査図	-----	225
第86図	神雄寺塔跡発掘調査図	-----	226
第87図	神雄寺曲水状池跡出土軒瓦	-----	227
第88図	神雄寺曲水状池跡出土土師皿	-----	228
第89図	神雄寺曲水状池跡出土鼓胴・歌木簡	-----	229

序 章 氏族仏教と国家仏教

第一節 国家仏教の内実と問題の所在

1. 「国家仏教」の視点

「日本仏教の特色の一は、その国家的なることである」(辻善之助 1944)とする主張は、『日本書紀』欽明天皇13年壬申(552)10月の条、百済の聖明王からわが国に仏教が伝えられたとする記事が、国家から国家へという「仏教公伝」を宣言し、あたかも、わが国の仏教がその伝来の当初から「国家仏教」として出発したとする前提に依拠している。なお、『元興寺伽藍縁起並流記資材帳』や『上宮聖徳法王帝説』にはその年時を戊午年(588)とし、百済が都を熊津(公州)から泗沘(扶余)に遷した年(百済本記第四 聖王16年)に対応する。いずれにせよ欽明朝の6世紀中頃には、百済から仏教が「公」に伝えられたと考えるのである。ところが、『日本書紀』が「仏法之始自茲而作」と記述しているのは、敏達天皇13年(584)条の蘇我馬子の仏舎利信仰についてであり、翌14年には「大野丘の北塔」(『元興寺縁起』に記す「止由良佐岐の刹柱」)を建立しているが、いずれも天皇とは関係しない。まして、敏達天皇は『日本書紀』で「不信仏法」と評されているのである。そして、ついに丁未の変に勝利した蘇我馬子は、崇峻天皇元年(588)、飛鳥真神原の地で、列島初の本格的な七堂伽藍をもつ法興寺(飛鳥寺、元興寺)の建立に着手するのである。この飛鳥寺建立をもって「国家仏教成立の記念碑」(井上光貞 1971)とする意見もあるが、大和朝廷の周辺で仏教受容を積極的に開始したのは、蘇我馬子であり、天皇国家の仏教受容とは言えない。天皇中心の仏教受容の主張がなされはじめるのは、皇極天皇4年(645)6月の反蘇我クーデターによって政権を掌握した大化新政権の成立からである。ここに、日本仏教の主導権は蘇我氏から皇室に移り、国家仏教への道が開かれたといえよう。

『日本書紀』大化元年(645)8月癸卯の条には、法興寺に使いを送り僧尼を集め、孝徳天皇の詔として、欽明朝以来の蘇我稲目・馬子による仏教の信奉は天皇の命によるものであったこと、法興寺の銅・繡本尊は馬子が推古天皇のために造ったものであること、馬子の仏教顕揚・恭敬僧尼を孝徳天皇が継承すると宣言している。そして、天皇家の大寺(百済大寺)から各地の豪族の氏寺まで、すべての寺院の経済援助を今後は天皇が行うこと、すなわち仏教興隆の主導権が完全に蘇我氏から天皇に帰したことを宣言しているのである。従来より、「国家仏教」とは、国家が公的に仏教を受容し、国家から国家へというかたちで伝わっていく、中国を中心とした冊封体制下の東アジア仏教圏共通の形態と理解される。しかし、大化改新で中大兄皇子がまず法興寺を占拠したのは、法興寺が「官寺」ではなく蘇我氏の「私寺」であったことを物語り(田村圓澄 1969)、『日本書紀』が編纂されるころには天皇国家の仏教受容が確立し、「仏教が最初から天皇によって受容された」とする記述の背景には、天皇に

よる中央集権国家の成立とその修史という事態がある」（二葉憲香 1962）のである。したがって、一般に、この大化改新から平安仏教成立までの時代を広い意味で「国家仏教の時代」「奈良仏教の時代」といい、その前代を「氏族仏教の時代」「飛鳥仏教の時代」と呼ぶ。欽明朝の仏教伝来当時、日本の国内事情はいまだ中央集権体制をつくりあげる途上にあり、大化改新によって、「公伝仏教」本来の展開が始まると考えるのである。しかし、厳密に言えば、天皇が国家権力を背景として仏法統制と仏法興隆の主導権を名実ともに確立するのは、壬申の乱に勝利を納め（672年）、「大君は神にしませば」と歌われた天武天皇の時代になってからである。

仏教史の時代区分は、伝統的に飛鳥・奈良・平安・鎌倉という政治史の区分をそのまま援用して呼ばれる場合がある。これはそのまま、氏族仏教・国家仏教・貴族仏教・民衆仏教という呼び方に対応して理解される。しかし、田村圓澄は、「国家仏教とは、律令国家の仏教の謂」であり、「国家仏教は律令国家の頂点に位置する天皇の公的な仏教受容に対応する」（田村圓澄 1969）とし、律令国家確立期の天武朝に国家仏教の成立を捉えた。つまり、「国家仏教」＝「律令国家仏教」と捉えるのである。

『日本書紀』天武天皇元年（673）、天皇は即位の年の暮れに造高市大寺司を任命し、高市大寺（大官大寺、後の大安寺）の造営に着手している。この寺は、父の舒明天皇が発願し母の皇極天皇がその造営を継承した百濟大寺の後身であり、天武天皇によって飛鳥の地に移されることとなったのである。その後、同4年（676）、大旱魃に際して天武天皇は諸国に使者を派遣して神々に雨を祈るとともに、僧尼を招いて祈雨の法会をもうけた。また、諸国で『金光明経』や『仁王経』の護国経典を説かしめ、全国規模での国家仏教が行われている。そして、天武天皇14年（685）3月、「諸国、家ごとに仏舎を作りて、及ち仏像及び経をおきて礼拝供養せしむ」とする詔が発せられた。この「諸国の家」の解釈については、「国民の私宅」（家永三郎 1947）や「地方豪族の氏寺」（秋山龍蔵 1932）など諸説あるが、天武天皇4年2月に従来の諸寺への賜地を廃し、同9年（680）4月には国の大寺二・三以外の諸寺は「官司治むるなかれ」として、諸寺の食封にも30年の期限を設けるなど一連の施策をみれば、これは大寺から氏寺までのすべての寺院の財政援助をうたった大化元年（645）8月の詔の重大な変更であり、内実はどうあれ氏寺（私寺）の明らかな否定である。「諸国の家」は私寺を指すのではなく「諸国の国衙ごとに……」と解釈すべきである。ならば、「天武朝は仏教伝来以来の氏寺を基盤とする仏教を脱し、中央の大寺と国衙単位の地方仏教施設による全国官寺体制の仏教をめざした」

（速水侑 1986）と考えるべきであろう。なお、角田文衛はこの「諸国の家」の解釈を整理し、後の「国分寺」の前身として「国府寺」の存在を想定している（角田文衛 1996）。持統天皇8年（694）5月、藤原京に遷った持統天皇は、諸国に『金光明経』を送り置き、毎年正月に当国の官物を布施として読経することを命じている。これは、先の諸国仏舎造営を前提とした措置であろう。

仏法統制と仏法興隆の主導権を名実ともに確立した天武朝は、官寺制の整備により「中央集権的国家仏教」を志向したと考えられる。天武天皇6年（677）8月、飛鳥寺に設齋した際、詔して親王諸王群卿に対し出家者一人を賜った。また、同9年（680）には皇后の病に対して一百人を度し、朱鳥元年（686）の天皇の病に際して一百人を出家させている。天皇は、祭祀や祈願の手段として、僧尼

を欲するままに得度出家させることができるのである。律令制の完成期である天武・持統朝において、僧尼統制の法制的整備が進められ、大宝僧尼令、養老僧尼令へと整備・継承されていくが、「僧尼令」のめざすところは国家に奉仕する淨行者としての僧尼集団の形成と保全にあった。持統天皇 10 年（696）、恒例の『金光明經』講読に関し、毎年 12 月の晦日に淨行者 10 人の年分度者の出家得度が定められている。こうした「官僧」と呼ぶべき僧尼の身分は、得度・受戒の手続きを官が統制し管理・証明することにより保証されるのである。律令国家は、僧侶・寺院の統制や保護育成を行うことで、いわゆる仏教の功德も国家の安寧や秩序に合致することを目標として、国家が仏教を独占する体制を確立するのである。

律令国家の仏教政策の根幹をなすものは、官僧集団の形成と官寺体制の整備にある。先述したようにその志向はすでに天武朝にあり、後に聖武朝の諸国国分寺体制の基本構想となるのである。しかし、官寺体制の頂点に立つ官大寺は、先に見たように天武天皇 9 年（680）4 月に制度化されるもののその内実は明らかでなく、翌月には京の内（飛鳥付近）の 24 の寺に布施を行い、天武天皇崩御に際してなされた無遮大會は五つの寺（大官・飛鳥・川原・小墾田・豊浦・坂田）に設けているのである。これが「仏教伝来以来の氏寺を基盤とする仏教を脱し」た状況（速水侑 1986）と言えるのであろうか。大官大寺（高市大寺）や川原寺以外はすべて蘇我氏を基盤とする前代創建の寺院である。大宝年間に至って、藤原京の四大寺として大官大寺、薬師寺、元興寺、弘福寺（川原寺）が固定化し、平城遷都（710）にともない靈龜～養老年間での大官大寺（大安寺）、薬師寺、元興寺、興福寺の移転と中央官大寺制の整備が進展する。なお、推古天皇 32 年（624）では、すでに列島内の寺 46 所を数えたとしているが、これら寺の所在地はほぼ畿内に限定され、現在 30 ヶ所程度の候補地があげられており（帝塚山大学考古学研究所 2004）、『扶桑略記』によると持統天皇 6 年（692）、天下の諸寺は 545 ヶ寺に達し、推古 32 年から約 70 年で十倍以上に増加したことになるのである。7 世紀後半代の天武・持統期（白鳳期）が、本格的な伽藍整備を伴う氏寺の造寺活動の大きなピークなのである。その波及は陸奥国から肥後国の範囲に及び、当時の国家領域の大半をカバーする。律令国家がめざす官寺体制の整備に逆行する諸国の豪族による氏寺の増加に対し、『続日本紀』霊龜 2 年（716）5 月、元正天皇はいわゆる「寺院併合令」の詔を発した（佐久間竜 1980）。これは、諸国の私寺を地域単位に整理統合し、律令政府の統制下に編入することで、護国仏教の一翼を構成させようとするものである。また、平城遷都後の 8 世紀の前半になると、ようやく仏教が民間に浸潤し新しい民衆仏教が芽生え始める。当然、律令政府は、民間仏教に対して「僧尼令」的立場から厳しい禁圧の態度をとることとなる。特に、養老元年（714）4 月、同 6 年（722）7 月の詔では、国家への奉仕とは別次元の功德を説く行基集団や民間布教者への弾圧がなされる。しかし、天平期にはいると、養老 7 年（723）の「三世一身法」に刺激され土地開墾を進める有力豪族層に支えられた民間仏教の存在を、律令国家も否定できなくなってきたのである。結局、天平 7 年（735）6 月の勅で「寺院併合令」は撤回され、かつて「小僧」と蔑称された行基についても天平 3 年（731）8 月の詔で「行基法師」に従う優婆塞・優婆夷の入道を許し、同 13 年（741）10 月の恭仁京内の架橋完成に際してはその協力により 705 人の優婆塞

の得度が許され、同17年(745)正月に行基は教界の最高位である大僧正となるのである。ここに来て、天武朝以来の律令国家仏教は大きく変質することとなる。

天平13年(741)2月、律令国家が目指した国家仏教のひとつの到達点である諸国国分寺体制は、国分僧寺と国分尼寺からなる官立二寺建立の詔として、その理念と全体像が示された。しかし、この聖武朝における国分寺建立の構想は、天平9年(737)3月の丈六釈迦三尊像と『大般若経』の造写が諸国に命じられたことにはじまり、同12年6月の七重塔建立と『法華経』書写、同年9月の観世音菩薩像と『観世音経』の造写、恭仁京遷都後の同13年正月の釈迦丈六像造立の料として封三千戸の施入が諸国に命じられたことを前提としており、ついに、同年2月の『最勝王経』書写と金字『最勝王経』の七重塔内安置や僧寺・尼寺の名称・寺領・僧尼の定数・願文の細目を定めることにより、諸国国分寺の建立はようやく具体化するのである。そして、天平15年(743)10月、聖武天皇は紫香楽宮で菩薩の大願として大仏建立詔を発した。ところが、このとき聖武天皇は自らを「三宝の奴」と称しているのである。本来、天皇は民族宗教的神祇祭祀の最高司祭者であり、大化改新によって仏教という新たな宗教的権威も獲得するが、仏教の場合は僧尼という聖職者集団に法会を委ねなければならない。『日本書紀』が孝徳天皇を「仏法を尊び神道を軽りたまう」と評したのは、両者の均衡を保つことの困難さを示している。神道祭祀の大綱を定めた「神祇令」と僧尼を統制するための「僧尼令」は、ともに現人神である天皇の宗教的権威を構成し一元化するためのものであった。しかし、天平期の国家仏教がめざしたのは、天武朝以来の天皇の宗教的権威を背景としたものではなく、超国家的な「仏教国家」の建設にむかっていた(速水 1986)。その背景として、天災による飢饉と疫病の流行、新羅との対外的緊張、支配層内部での対立抗争や反乱、そして聖武天皇や光明皇后といった君主の人格など、様々な要素が考えられるが、民間への仏教の普及の意義は大きい。大仏建立は、人民を知識とする国家的規模の「知識結」により実現するのである。そして、民間への仏教の普及は、在来の神祇信仰の変質と仏教の融合を促し、神は「護法菩薩」となり、あるいは「神身離脱」して仏法に帰依することで「神仏習合」していく。天平勝宝元年(749)12月、7月に即位したばかりの孝謙天皇は、聖武太上天皇、光明皇太后とともに東大寺へ行幸し、「神我れ天神地祇を率い、いざないて必ず(大仏を)成し奉らん」と託宣して上京した宇佐八幡神を迎えているのである。天平神護元年(764)正月、淳仁天皇を廃した称徳天皇は出家した天皇として重祚し、同年11月の詔で自らを、第1に「三宝に供奉り」次には「天社・国社の神等をもゐやびまつり」とし、「神等をば三宝より離けて触れぬ物そとなも人の念ひて在る。然れども経を見まつれば仏の御法を護りまつり尊びまつるは諸の神たちにいましけり」として、自らと神を仏に従属させている。仏教国家への道は、僧侶の政治介入と造寺等国費の浪費が重なり、最終的には道鏡の出現によって比較的短期間で破綻した。

「国華」とも称せられた国分寺の造営は、決して順調に進捗したわけではない。天平19年(747)、天平勝宝8歳(756)には造営の督促令が出され、ようやく天平勝宝8歳の聖武太上天皇崩御を画期として造営は急速に進展する(川尻秋生 2013)。造営の主体となったのは、天平15年の墾田永年私財法の下で大土地所有をめざす郡司ら地方豪族層であり、彼らに支えられた民間仏教のエネルギーを国

家仏教に取り込むことで初めて可能となるのである。天武朝が志向し霊龜2年の「寺院併合令」がめざした官僧集団の形成と官寺体制の整備は、本来対立すべき氏寺（私寺）の造営主体である地方豪族層の協力により進展した。律令国家がめざした国家仏教のひとつの到達点である諸国国分寺体制は、旧寺転用・新造を問わず地方豪族に支えられ、後に国分寺が衰退・焼失した場合、定額寺や有力私寺をもってこれに代えることが一般化する。国分寺における国家仏教は、その願文の内容からして天皇家と支配者層の祖霊追善と五穀豊穡にあり、氏族仏教との共通性が高い。これは、地域共同体の氏寺で行われる内容を国分寺という形に置き換えたに過ぎないのである。そして、国分二寺の僧尼は、神祇や祖霊に饗宴国家の助力を祈念する官僧集団を形成する。

宝亀元年（770）8月、「神祇の護るところ、社稷の祐るところ」により道鏡一派が追放されると、光仁・桓武朝では次の平安新仏教へとつながる新たな仏教政策を開始する。延暦元年（782）には造法華寺司を、同8年（789）には聖武朝以来の国家仏教興隆の象徴であった造東大寺司を廃し、同2年には私寺の新設や既存寺院への田宅園地施入を禁じている。そして、「僧尼令」的秩序への回帰を進め、清浄な僧尼・教団の育成のための統制を強化するが、そこで理想とされるのは「僧尼令」的とは言い難い行基のような山林修行者的・実践的な浄行禪師なのである。ここに最澄・空海の登場を促した背景があった。律令国家の頂点に位置する天皇の宗教的権威の一部を構成することにより成立する国家仏教は、護国仏教を実践する平安の実践仏教の登場により終焉をむかえた。仏教は、天皇の宗教的権威からようやく独立し、仏法と王法は分立するのである。

2. 問題点の所在

以上、「国家仏教」の視点から古代の日本仏教史を概観した。しかし、国家仏教の定義は実に曖昧であり、一応、大化改新から平安仏教の成立までを広い意味での「国家仏教」の時代と認識され、古代国家権力による仏教の保護と統制を基本的な要素として定義される。しかし、この古代国家の始点を律令国家体制の成立に求めるならば、狭義の「国家仏教」の時代は天武朝以後の奈良時代に限定され、「奈良仏教」と同義となる。さらに、律令国家体制の頂点にある天皇の宗教的権威を構成する神祇と仏教の一元化が揺らぎ分裂する天平期以後を除くと、真の意味での「国家仏教」の時代は、天武朝以後の奈良時代前期（霊龜・養老年間）までに限定されるのである。逆に、「国家」というものをより幅広く捉え、蘇我氏が天皇の外戚として当代ならぶもののない政治的地位を確立し、法興寺において仏教の保護統制という国家的な役割をになったと評価すれば、推古朝まで「国家仏教」の形成を遡らせることは可能である（藺田香融 1976）。法興寺は蘇我氏の氏寺ではあっても、天武・持統朝でさえ官大寺として特別な存在であった。さらに、国家から国家へとするいわゆる「公伝」のあり方を、天皇の仏教受容の如何に関係なく考えるならば、欽明朝に「国家仏教」の起点を置くこともあながち無理とは言えないのである。ならば、「国家仏教」の内実はどうであろうか。

中央集権的律令国家体制を確立した天武朝は、先述したように、中央の大寺と国衙単位の地方仏教施設による全国官寺体制を志向して氏寺（私寺）を否定するが、天武・持統朝（白鳳期）は氏寺の造

營が全国に爆発的に波及する時期である。奈良時代前期（霊亀・養老年間）には、「寺院併合令」により氏寺の整理統合政策を推進するが、官僧集団の形成と官寺体制の整備が行われた国分寺造営事業の最終的な推進者は、三世一身法、墾田永年私財法の下で力をつけた郡司ら地方豪族層であり、彼らこそ各地の氏寺（私寺）の造営主体者なのである。日本古代の仏教は、国家権力により保護・統制がなされる従来の「国家仏教」の視点だけではその実相に迫ることはできない。むしろ、「国家仏教」と「氏族仏教」の相克のうちに、その実像があらわれるのではないだろうか。

本論では、考古学的研究手法により、現在の京都府南部地域の南山城における仏教遺跡を対象として、「国家仏教」と「氏族仏教」の相克を視点とする仏教文化の受容と伝播の過程を追うことにより、その特異性と普遍性を論述する。

第二節 南山城における仏教文化の概要

京都市以南の旧山城国は、ほぼ宇治川～淀川をさかいとして、北半を北山城、南半を南山城と呼ぶ。したがって、南山城の範囲は、旧巨椋池以南の木津川流域をさすものとしてとすることができる。しかも、どうやら律令制以前にヤマシロと呼ばれた地域は、この南山城の地であった。このことは、『日本書紀』神功皇后摂政元年三月五日条に、忍熊王を撃とうと進軍した武内宿禰の記事で、宇治川北岸の菟道の地と山背の地を区別していることや、『古事記』仁徳天皇条、『日本書紀』仁徳天皇三十年九月十一日条で、現在の木津川をヤマシロ川とよんでいることからわかる。山城国は、はじめ「山代国」と記されていたが、大宝令の制定（701）とともに「山背国」と表記が変わり、延暦十三年（794）の平安遷都によって「山城国」と改まる。10世紀前半に完成した『延喜式』や『和名類聚抄』では、山城国に乙訓・葛野・愛宕・紀伊・宇治・久世・綴喜・相楽の八郡の存在が記されているが、これらの郡域はすでに8世紀初頭には成立していたものと考えられ、このうち久世・綴喜・相楽の三郡が南山城に含まれる。

南山城の仏教遺跡を考える場合、仏教文化の導入期にあつてその地理的環境と渡来人の存在は大きな意義をもつ。時の中央政権が所在する大和国と地方をつなぐ大動脈である大和川と木津川にあつて、奈良山に接する木津川の屈曲部はまさに北の玄関口であり、南山城の地は人と文化が行き交う重要地点である。にもかかわらず、『記・紀』には武埴安彦に代表されるこの地での反乱伝承が頻出する。3世紀末、三十数面の三角縁神獣鏡が出土した椿井大塚山古墳（山城町教育委員会 1998, 1999）の出現以後、5世紀代には強大な地方勢力は久津川古墳群に引き継がれる（龍谷大学文学部考古学資料室 1972）が、その勢力が衰退した6世紀代には、古墳で見る限りこの地域での大きな勢力は存在しない。7世紀初頭の仏教文化導入期、南山城は既存の中小勢力と「今来」の渡来人が混在する地域であつた。そのような中、この地で蘇我氏との強固な結びつきをもって、高麗寺が造営されるのである。その背景となっているのは、強力な地域支配勢力による新たな祖先崇拜のシステム導入としての寺院造営で

はなく、新たな理念としての仏教文化の受容に適した渡来人としての役割と中央政權の強い意思によるものと考えられる。

日本列島における仏教文化の導入期、旧來の豪族たちの伝統的な富と力を基盤とした「氏姓制度」による秩序は、蘇我氏への権力の集中により淘汰され、結果的に東アジア全体の共通秩序である「律令制」導入へと大きく動き出す。交通の要衝である南山城においては、旧來の勢力はすでにこの時期に弱体化しており、時の中央政權の新たな政治秩序を柔軟に受け入れる素地を持っていた。しかも、モザイク状の地域勢力は、それぞれに新たな秩序の受容体となるのである。その端緒は高句麗系渡來氏族・高麗（狛）氏により開かれる。

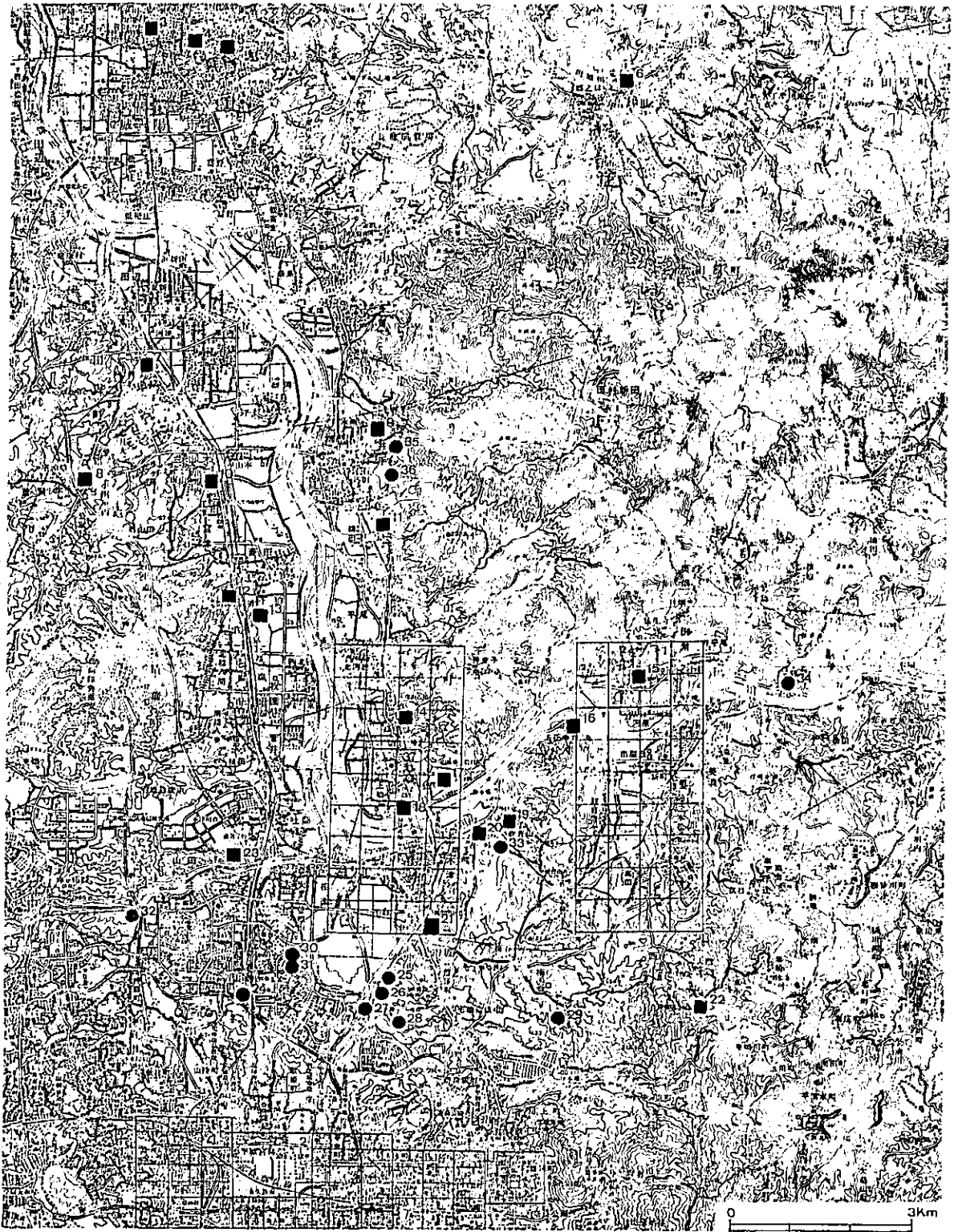
南山城における飛鳥白鳳期の寺院造営の伝播は、常に高麗寺（田中重久 1938・1944、梅原末治 1939、山城町教育委員会 1989、木津川市教育委員会 2011）を出発点とする。飛鳥寺（奈良国立文化財研究所 1958）や川原寺（奈良国立文化財研究所 1960）と大津宮周辺寺院（小笠原好彦・田中勝弘・西田弘・林博通 1989）との軒瓦の同範関係は、時の中央政權の強い関与を示しており、この状況は平城京・恭仁京・国分寺の造営とも連動する。南山城における中核寺院の存在は、一貫してその官的要素の強さを示しており、氏族の枠を越えた寺院ネットワークを当初の段階からすでに備えていたようである。このことは、我が国の仏教文化受容の特色として説かれることの多い「氏族仏教から国家仏教へ」とする図式が、この南山城では極めて早い段階で成立していた可能性を示している。あるいは、この図式そのものが存在しないのかもしれない。氏寺としての性格が希薄であることは、この地域の古代寺院における大きな特色とすることが可能である。高麗寺、蟹満寺（山城町教育委員会 1995）、平川廃寺（城陽市教育委員会 1971・1974・1975）の様相には、注目すべきものが特に多い。

奈良時代、諸国国分寺体制が成立すると、南山城の寺院ネットワークにも変化が生じる。国単位での仏教統制の体制が国分寺を中心として成立し、中央政權の強い意思を背景とした中核寺院や官立寺院と中小の在地寺院との二極化が進行するものの、中央政權の意思を介した山背国衙の影響が大きくなるようである。そして、この影響は、神仏習合と相まって山間部に立地する境界の寺に広がる新たな寺院ネットワークを形成していくのである。このことは、従前からの飛鳥白鳳創建寺院の変質を促し、新たに創建された寺院との結び付きを生じさせた。特に、特別な験力を得るため、あるいは特別な儀礼（法会）を必要とする聖地（境界、湧水、岩座等）に開かれた寺院には、すでに新たな時代の仏教への期待が感じられる。国家仏教の完成を示す山背国分寺（中谷雅治・磯野浩光 1991）や井手寺（井手町教育委員会 2014）に対し、笠置寺（笠置町教育委員会 1990）、普賢寺（田辺町教育委員会 1982）、神雄寺（馬場南遺跡）（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2010、木津川市教育委員会 2014）の存在意義は大きい。特に、神雄寺においては、日常的な湧水（聖水）の祀りとともに、特別な儀礼（大規模な燃燈供養、歌会（仏前唱歌）、舞楽等）の様相が明らかとなり、仏堂からは多量の塑像片が出土している。古代寺院における法会の実態を知る貴重な遺例である（中島正 2010c）。また、奈良山丘陵一帯には、平城宮・京や京内の大寺造営のために多くの瓦窯が構築された。木津川

市内には大規模な瓦製作工房（上人ヶ平遺跡）をもつ市坂瓦窯跡や五陵池東瓦窯跡・梅谷瓦窯跡・音如ヶ谷瓦窯跡・瀬後谷瓦窯跡（以上、(財)京都市埋蔵文化財調査研究センター 1999）・鹿背山瓦窯跡（(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2009）が営まれ、奈良市には歌姫瓦窯跡・歌姫西瓦窯跡・山陵瓦窯跡・押熊瓦窯跡・中山瓦窯跡（以上、奈良国立文化財研究所 1979）が、相楽郡精華町には乾谷瓦窯跡・得所瓦窯跡（以上、精華町 1989）がある。奈良時代、奈良山丘陵に集中的な官窯体性が完成したのである。奈良山以外では、玉川北岸の井手町石橋瓦窯跡（井手町教育委員会 2003）や南側の岡田池瓦窯跡（井手町史編纂委員会 1983）もこの時期の瓦窯である。

平安時代になると、都が北山城に移転し南山城の政治的重要性は低下する。それにともない、この地域の奈良時代以前創建寺院は衰退していく。かわって、奈良の地に残った東大寺・興福寺・春日大社の庇護のもと、山間部に新たな寺院が勃興する。木津川市加茂町には岩船寺・淨瑠璃寺・海住山寺・随願寺（以上、加茂町 1988）、相楽郡和東町に金胎寺（和東町 1995）が創建され、笠置町の笠置寺や京田辺市の神奈備寺（高橋美久二 1991）が復興する。高麗寺や蟹満寺近傍でも、東方の山中に東大寺三論宗の別所・光明山寺（山城町 1987、山城町教育委員会 2001b）が栄え、修験道の靈地として神童寺が経営された（山城町 1987）。

南山城における古代寺院の普遍性と特異性は、仏教文化導入の初期にあつてはその先取性にある。そこには、交通の要衝としての木津川の存在と、渡來人を介した地域勢力のモザイク状構造があつた。しかし、その先取性は中央政權の強力な意思のもと、氏族仏教の中にある官的要素を当初から予感させるものであつた。このことは、諸国国分寺体制の成立にあつても、国衙の管理体制へのスムーズな順応を可能としたのである。



1. 恭仁宮跡 2. 平城宮跡 3. 平川廃寺 4. 久世廃寺 5. 正道廃寺 6. 山瀬寺跡 7. 興戸廃寺
8. 普賢寺 9. 井手寺跡 10. 三山木廃寺 11. 蟹崎寺 12. 下泊廃寺 13. 里廃寺 14. 松尾廃寺
15. 山背園分寺跡 16. 法華寺野遺跡 17. 高麗寺跡 18. 泉橋寺 19. 鹿山寺跡 20. 燈籠寺廃寺
21. 神雄寺跡 22. 釈迦寺跡 23. 樋ノ口遺跡 24. 山陵瓦窯跡 25. 上人ヶ平遺跡 26. 御陵池東瓦窯跡
27. 歌姫瓦窯跡 28. 瀬後谷瓦窯跡 29. 板谷瓦窯跡 30. 音如ヶ谷瓦窯跡 31. 歌姫西瓦窯跡
32. 乾谷瓦窯跡 33. 鹿背山瓦窯跡 34. 銭司遺跡 35. 石橋瓦窯跡 36. 岡田池瓦窯跡 37. 山背園衛?

第1図 南山城遺跡位置図

第一部 仏教の受容とその主体

一 南山城における古墳と寺院 一

第一章 仏教の受容と南山城の古墳文化

はじめに

欽明朝のいわゆる仏教公伝以前、日本列島にはすでに仏教が「私伝」というかたちで伝えられている。『扶桑略記』には、継体天皇 16 年壬寅（522）に渡来した司馬達止（等）が大和国高市郡坂田原に草堂を結び、仏像（大唐の神）を礼拝供養したとする『坂田寺縁起』を引用している。この年時には異説もあるが、司馬達止のような渡来系氏族のあいだでは道教的な思想や仏教も信仰されていたことであろう。また、『日本書紀』上巻「三宝を信敬しまつりて現報を得る縁 第五」には、敏達朝に排仏派の物部守屋が「今、国家に災いを起すは隣国の客神の像をおのが国の内に置くによる。……すみやかに豊国に棄て流せ」として、難波の堀江に流す描写がある。さらに、『日本書紀』用明天皇 2 年（587）では、病床の天皇のもとに「豊国法師」が招かれている。この豊国が九州の豊国（豊前・豊後）であるならば、当時、仏教が大和への「公伝」とは別に、九州に根付いていた可能性があるのである。

考古学的には、列島最古の本格的寺院である飛鳥寺造営のため、百済から寺院建築資材としての瓦の製作技法が導入されるが、ほぼ同時期の 6 世紀末の時期の瓦が北部九州で出土している。現段階では寺院での使用を裏付ける根拠はないが、注目される。福岡県大野城市・春日市・太宰府市にまたがる牛頸窯跡群のうち、神ノ前 2 号窯跡（太宰府市教育委員会 1979）や月ノ浦 1 号窯跡（大野城市教育委員会 1993）から出土した瓦は、飛鳥寺出土例とはまったく別系統の製品で、『日本書紀』宣化天皇元年（536）条にみる「那津官家」に比定される那珂遺跡からも出土する（福岡市教育委員会 1994）。また、大分県中津市の伊藤田窯跡群内の跡ヶ迫 1 号窯跡で生産された瓦は、福岡県築上郡新吉富村の中桑野遺跡に供給されたようである（村上久和・吉田寛・宮本工 1987）。これらの遺跡は、後の律令期に筑前・豊前となる地域であり、前記の豊国伝説を考えると、実に示唆的である。

このような仏教の公伝・私伝とは別に、仏像表現を施した器物はすでに初期の古墳からも出土する。中国で仏教の普及が本格的に始まる三国時代から西晋代には、鏡背に仏像表現がある例があり、特別に仏像夔鳳鏡、画文帯仏獣鏡、三角縁仏獣鏡と呼ばれる。このうち、画文帯仏獣鏡、三角縁仏獣鏡は日本列島内での出土に限られており、現在までに 20 面近くが確認され、多くの同范・踏み返し鏡が存在するという（川西宏幸 1991）。こうして、4・5 世紀には舶載鏡を介して素朴な仏教の流伝がはじまるのである。このことをもって仏教という独自の宗教を当時の倭人たちが理解したかは疑わしいが、仏（神）に対して神聖な対象として意識したことは否定できない。

本章では、南山城の仏教文化を論じるに当たり、まず、その前史となる古墳時代の様相を椿井大塚山古墳を通して概観する。この古墳から出土した三角縁獣文帯二神二獣鏡は、連珠の頭光をそなえた仏坐像を神像とともに配した仏獣鏡（山城町教育委員会 1998）なのである。しかし、このことをも

って仏教の受容と位置づけることはできない。「邪馬台国を盟主とする倭国の時代」から「ヤマト王権の時代」への変革期に登場した椿井大塚山古墳では、王権の近くで重要な役割を演じた人物としての被葬者像が考えられる。しかも、『記・紀』には、初代のヤマト王権に拮抗しその権威を篡奪しようと企てた勢力がこの南山城に伝承され、箸墓古墳や柳本行燈山古墳などの王陵との結びつきが伝えられている。ここで、この南山城を舞台とする伝承の出発点として注意すべきは、椿井大塚山古墳での「もう一つの墓前祭祀」がなされた5世紀後半の時代なのである。明らかに、継続的な墓前祭祀を必要としない椿井大塚山古墳の築造時とは異なり、「王統譜」のような歴史認識（伝承）を必要とする新たな時代の幕開けである。飛鳥時代から奈良時代の仏教信仰の主流が「祖霊追善」であったことは、よく説かれることであるが、寺院における「祖霊追善」の行事を代表するのが「盂蘭盆会」である。まさに古墳における「墓前祭祀」と共通するのである。

『日本書紀』推古天皇2年（594）2月丙寅朔条に「皇太子及び大臣に詔して、三寶を興し隆えしむ。是の時に、諸臣連等、各君親の恩の為に、競ひて佛舎を造る。即ち是れを寺と謂う。」として、「三宝興隆詔」が発せられる。「君」すなわち君主と「親」すなわち父母および祖先に対する「恩」に報いるために「寺」を作る行為は、『盂蘭盆経』に説くところの「七世父母報恩」の祖先信仰と族長層の祖先崇拜の結びつきを前提としているのである。「三宝興隆詔」は、祖霊供養と倭王への報恩を不即不離の関係として結びつけており、飛鳥仏教の国家仏教的側面を示しているといえよう。歴史認識の成立と祖霊供養の観念は、仏教受容の前提となるのである。

椿井大塚山古墳での「もう一つの墓前祭祀」がなされた5世紀後半の時期、南山城において古墳主体部に横穴式石室が導入される。しかも、「王統譜」のような歴史認識（伝承）を必要としたこの時期、おそらくは偉大なる特別な祖霊として椿井大塚山古墳を選択し、祖霊として崇拜した勢力が存在したのである。南山城における仏教文化の受容を論じるにあたり、椿井大塚山古墳から始めねばならない理由はここにあるのである。この地で新たな墓制としての横穴式石室を導入した勢力は、椿井大塚山古墳に何を観念し、歴史認識を成立させたのであろうか。仏教文化受容の背景から論を進めることとする。

第一節 椿井大塚山古墳と三角縁神獣鏡

京都府南部の南山城における本格的な古墳の造営は、木津川市の椿井大塚山古墳（前方後円墳，全長 175m）（山城町教育委員会 1998，1999）をもって開始される。続いて近傍には前期中葉の平尾城山古墳（前方後円墳，全長 110m）（近藤喬一編 1990）や椿井天上山古墳（山城町教育委員会 2000c，2001c）が築かれ、前期後葉には北河原稻荷山古墳（円墳，直径 30m）（岩井武俊 1905）や木津川対岸の相楽郡精華町鞍岡山 3 号墳（円墳，直径 40m）（精華町 1989）は前期末葉に造営された。かわって、中期になると木津川南岸の木津川市木津の内田山古墳群（木津町 1984），市坂の上人ヶ平古墳群（（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991），吐師七つ塚古墳群（木津町 1984）が営まれるが、すでにかつての勢いはない。この時期の南山城地域の覇権は、城陽市の久津川古墳群の被葬者が握ったものと思われる（龍谷大学文学部考古学資料室 1972）。

椿井大塚山古墳は、かつて律令制以前にヤマシロと呼ばれた現在の南山城地域の南端に位置し、平野を貫流する木津川東岸の丘陵端部にその偉容をとどめる。墳頂からは木津川を透して平城山の低丘陵を間近に眺めることができ、まさにその位置は大和への北の玄関口に相当する。

1953 年（昭和 28）、この古墳を寸断する現在の J R 奈良線の法面拡張工事が実施され、同一墓域内と考えられる竪穴式石室や礎床？から、三角縁神獣鏡三十数面を含む 40 面近い銅鏡や夥しい量の副葬品が発見されたことは、考古学史上の事件としてあまりにも有名である（山城町教育委員会 1998）。副葬品等出土状況の詳細は工事中の発見のため伝聞にとどまるが、その様相はまさに奈良県天理市の黒塚古墳（前方後円墳，全長 130m）（奈良県立橿原考古学研究所編 1999）を彷彿とさせるものであっただろう。しかも、当時、椿井大塚山古墳の三角縁神獣鏡、特に各地の古墳に分布される同範鏡の存在に注目した小林行雄は、そこに古代史上の意義をみいだし、古墳の発生と古墳時代の成立について論究した（小林行雄 1955）。この小林理論が、その後の古墳時代研究を飛躍的に前進させたことは、いまさら言うまでもないことである。

1. 椿井大塚山古墳の築造過程

墳丘は、かつて所謂「丘尾切断型」の典型とされてきた（山城町教育委員会 1998）が、木津川が形成した上下二段の段丘面にそれぞれくびれ部の段丘崖を境として後円部と前方部を造り分け（山城町教育委員会 1999）、ほぼ東西方向に主軸をもつ墳丘の両側を深い谷が開析している。なお、墳丘背後の谷筋には、南北に活断層（玉水断層）が走っており、前期古墳の立地として注目される。

古墳の形状は、墳丘北側と西側の道路にその裾のラインを明瞭にとどめ、前方部の墳端が湾曲し撥形に開く特徴を示している。発掘調査（山城町教育委員会 1999）では、後円部四段（東側三段）、前方部二段の段築構造がほぼ明らかとなったが、墳丘の裾は後円部東側以外では確認できていない。現状での規模は、全長約 175m，後円部直径約 110m，前方部長約 80m，前方部墳端幅約 76m となり、

高さは後円部約 20m、前方部約 10m程度であったと考えられる。なお、後円部が正円とはならず、墳端で大きく縮小される点については、低い東側最下段裾のラインは北側へいくにしたがって徐々に広がり、階段状に高度を下げながら下から二段目葺石斜面裾のラインに接続する。また、この調査では、二段目テラス下に厚さ約 1mの盛土が存在することを確認しており、最下段が岩盤の削出しだけではなく、盛土による整形も行われていたことを確認した。前方部においては、墳頂平坦面で墳丘の中軸線にそって延びる幅約 2mの黄褐色粘土によるベルト状の盛土を確認した。この盛土は延長 10mメートル分を検出しており、前方部中央を墳端まで貫くと予想される。この盛土の性格については、中軸線そのものを明示している可能性が高く、前方部の築造工事が設計図上の中軸線に基づく正確な施工であったことを暗示している。だとすると、後円部の墳端が縮小された状況は地形に制約された施工上の省略とすることができよう。

よって、発掘調査により得られたデータから当初の墳丘設計図を復元すると、後円部の設計図上の墳端は東側の崖上端付近となり、全長 190m程度の規模を想定することができる。このことは、椿井大塚山古墳が奈良県桜井市の箸墓古墳（全長約 280m）の相似形とする説を裏付けるもので、共通する設計図の存在を示唆している（京都大学考古学研究室 1989）。

椿井大塚山古墳の築造時期については、前方部北側のテラス面で出土した土器資料で考えることができる。これらの土器は、墳丘築造後程なくして前方部での祭祀に使用された可能性が高く、いわゆる庄内式期から布留式期にかけてのものである。器種としては、高坏・器台・壺の他に甕の破片が含まれる。なお、これらの土器は、箸墓古墳周濠内から出土した墳丘築造時のもの（奈良県立橿原考古学研究所編 1997）とほぼ同時期と考えられ、墳丘の築造規格のみならず、築造時期においても箸墓古墳との関連が注目されるのである。発掘調査の結果、椿井大塚山古墳が定形化した初期の大型前方後円墳であることを改めて確認することができた。ここでは、この古墳がどのように築造されたか、その過程を復元してみたい。

椿井大塚山古墳については、かつて、自然地形としての尾根の形状をうまく利用して墳丘を整形した、いわゆる丘尾切断家形の典型とみなされてきた。しかし、墳丘の断割り調査の結果、後円部の上二段分のほとんどが盛土であり、後円部墳端の切り通し風の地形も、もともとの段丘崖に沿った南北方向の谷地形であることが判っている。したがって、後円部上二段分の基盤の高さは、標高約 50mの平坦な段丘面であり、その上に約 10m分の盛土が施されたことになる。前方部については、墳頂の断割り調査で、標高約 42m付近に基盤としての段丘面が存在することを確認しており、ほぼ上一段分を盛土とすることができよう。

したがって、墳丘の築造作業は、まず、この二面の基盤に後円部の中心と前方部の中軸ラインを設定することから開始されたものと考えられる。当然、この円の中心と基軸の設定により、設計図に基づく墳丘裾のラインが決定する。

後円部北側においては、下から二段目葺石斜面直下で段丘の礫層や大阪層群の粘土層が、一段目で花崗岩の岩盤が露出し、また、この段で葺石斜面裾のラインに沿った岩盤の削り出しと一部に盛土を

確認している。前方部においては、北側の一段目斜面で段丘の砂層が露出し、南側裾付近では墳丘の盛土がなされていた。これらのことから、後円部の下二段と前方部の一段目が、地山の削り出しと盛土によって整形された様子を見ることができるのである。

後円部上二段の盛土の状況については、主に花崗岩の真砂土（山砂）が使用されており、段築の裾に沿ったドーナツ状の堤から内部に土砂を流し込むようにして築いたものと考えられる。上一段目の裾の直径約 76m、最上段裾で約 56m、墳頂平坦面で約 37m となり、26 度程度の傾斜角をもって約 5 m の段を重ねている。

なお、後円部中央南北方向に設置された竪穴式石室は、内法寸法で長さ 6.9m、幅 1.1m、高さ約 3 m を測り、石室を構築するための墓壇は、上面で長さ約 21m、幅約 13m、深さ約 5m に達する。ここで注目すべきは、竪穴式石室の基底面の高さである。この高さは、墳丘最上段裾の高さに相当し、墓壇の構築が、あたかも最上段盛土の開始段階ですでに準備されていたかの様相を呈している。ならば、この古墳の竪穴式石室が他と比べて異常に高い特徴も、この築造過程を復元することにより頷けるのである。

したがって、後円部の中心点に設置される竪穴式石室の位置は、最上段の構築と同時に定められ、周囲から投入される土砂により現出された播り鉢を整形することによって、墓壇ができ上がる状況を復元することができる。墳頂部での調査では、墓壇斜面に沿って人頭大の粘土ブロックを重ねた箇所を確認しており、土壌積みによる墓壇斜面の構築が行われた可能性がある。

墓壇内部の調査では、墳頂表土下約 1.6m で ベンガラを塗布した面を検出しており、この面が予想される石室天井石の被覆面の深さに相当することから、遺体埋葬後、墓壇を埋め戻すまでの間に、何らかの祭りが行われたことがわかる。

前方部においては、盛土の状況が後円部とは異なり、縄文時代後期から弥生時代にかけての土器を多量に含む腐食土が多量に用いられる。この状況は、盛土土砂の採取場所が明らかに後円部とは異なることを示しており、これが、後円部と前方部の構築時期の差もしくは作業区分の別を反映しているものと考えられる。

盛土の仕方は、前方部中軸線と考えられる黄褐色粘土によるベルト下から基盤面にかけて山砂による水平堆積であるのに対して、その外側は外向きの傾斜をもち、後円部とは明らかに異なる様相をもつ。ただ、中軸線下の盛土が他と異なる点は、明らかに中軸線を意識した盛土作業が行われたことを示している。

葦石を積む作業については、盛土の斜面を保護する意味でも、盛土作業と並行して行われたものと考えられる。その場合の作業通路としては、幅約 2m のテラスが活用されたことであろう。葦石斜面には、縦・横方向に方形の升目状の石の並びを見ることができ、作業単位の痕跡をとどめている。盛土の技術だけではなく、墓込めを用いた葦石の技術やあくまでも石の荷重を垂直方向にうけるための墳丘裾の階段状処理など、前代とは隔絶した最新技術が結集されている。石室の埋設が完了し盛大な祭りが行われた時、後円部墳頂平坦面の裾には、大型の二重口縁甕を樹立していた。これら甕の破

片は、最上段の葺石斜面からテラスにかけて多く出土しており、その置かれ方を復元することができる。また、後円部墳頂だけではなく、前方部のテラスでも小規模な祭祀が行われている。発掘調査の結果から、椿井大塚山古墳の築造過程の復元を行なった。定形化した大型前方後円墳の初源期において、しかも、三角縁神獣鏡大量埋納の古墳として、その築造技術・築造過程の復元は重要と考える。

2. 椿井大塚山古墳の副葬品

長大な竪穴式石室内外から出土した副葬品の様相は、この古墳の性格を考えるにおいて顕著な傾向を示しており、総数 400 点にも及ぶその内容は豊富である。注目される多量の鏡は、後漢から魏代に属する内向花文鏡 2 面、画文帯神獣鏡 1 面、方格規矩鏡 1 面と 33 面もの三角縁神獣鏡（京都大学保管資料 32 面、京都教育大学保管資料 1 面、他に京都府立山城郷土資料館保管資料は都大学保管資料と接合できることが確認されている）の合計 37 面まで現在確認されている（山城町教育委員会 1998）。さらに、こまかな破片が残り、また発見当時回収しきれなかった鏡もあったことが予想されるため、その数は 40 面近くあったと考えられる。他には、小札革綴冑や甲などの武具、20 本前後の刀剣類や約 200 点もの鉄鏃などの武器、多種多量の農工漁具が含まれ、鏡のみならず、まさに鉄のすべての品目の所有者・管掌者としての古墳の被葬者像を表している。

石室内の状況については、工事中の発見であったため、多くの遺物が工事関係者の手により持ち出され、その詳細は不明であった。今日、黒塚古墳の調査成果が椿井大塚山古墳の石室内の様相を彷彿とさせ、ようやく椿井大塚山古墳の石室内の状況が復元されつつある。ここで注目すべきは鏡の副葬の仕方である。石槨の輪郭に沿って棺外に立て並べられたのは三角縁神獣鏡と方格規矩鏡の二種となり、画文帯神獣鏡のみが棺内にあった可能性が高い。だとしたら、石室外の礎床から出土したとされる 3 面の鏡とは、内向花文鏡と他 1 面が残ることとなる。この礎床については、石室と同一墓域内の可能性が高く、副槨と考えられる。いずれにしても、三角縁神獣鏡の扱いが後漢鏡である内向花文鏡や画文帯神獣鏡と異なる様相は、宝器としてよりも葬送儀礼用の道具としての性格を強くもつことと関わるのであろう。なお、黒塚古墳において北壁に 1 面のみ置かれていた波文帯龍虎鏡は椿井大塚山古墳と同範であり、やはり三角縁の中でも特別な存在と考えられる（奈良県立橿原考古学研究所編 1999）。ただ、三角縁神獣鏡が葬式の道具ではあっても、その量は明らかに被葬者の権威の大きさを象徴するものであり、当時の畿内を中心とする勢力は、これらの鏡を一括管理しながら鏡を配布することによって、自らの王権の確立と拡張を図ったものと考えられる。

椿井大塚山古墳出土鏡鑑

長宜子孫内行花文鏡	1	後漢初期
内行花文鏡	1	
方格規矩四神鏡	1	正 L 字外周突線 cf 青龍三年（235 年）

(三角縁神獸鏡)	(面数)	(表現)	(同范鏡番号)	(同范鏡出土古墳)
吾作五神四獸鏡	1	表現 1	14	伝奈良都介野
吾作四神四獸鏡	2	〃	19	福岡石塚山, 広島中小田 1 号, 兵庫西求女塚, 大阪万年寺山
櫛歯文帯四神四獸鏡	2	〃	23	奈良円照寺裏山
張氏作四神四獸鏡	1	〃	18	香川西山, 伝愛知奥津社, 奈良黒塚(21 号鏡)
張氏作三神五獸鏡	1	〃	10	香川奥 3 号, 兵庫権現山 51 号, 静岡連福寺, 伝群馬 三本木, 泉屋(2), 奈良黒塚(16, 18 号鏡)
獸文帯同向式神獸鏡	1	表現 2	6	岡山湯迫車塚, 三重久保, 静岡上平川大塚
獸文帯四神四獸鏡	1	〃	40	伝鳥取社村付近
獸文帯四神四獸鏡	1	〃	35	宮崎持田, 岐阜龍門寺 1 号
獸文帯四神四獸鏡	1	〃	36	岡山上沼
獸文帯四神四獸鏡	3	〃	27	福岡神蔵, 山口竹島御家老屋敷, 神奈川白山
獸文帯四神四獸鏡	1	表現 3	44	愛媛広田神社上(2), 奈良桜井茶臼山
鋸歯文帯四神四獸鏡	1	〃	43	大分赤塚, 京都南原, 奈良桜井茶臼山
獸文帯三神三獸鏡	1	〃	60	福岡原口, 同天神森, 同石塚山(2), 同御座 1 号?, 大分赤塚
面文帯五神四獸鏡	1	表現 6	30	福岡那珂八幡, 岡山湯迫車塚, 伝奈良富雄丸山, 7-77
吾作四神四獸鏡	1	表現 7	16	奈良新山, 奈良黒塚(22 号鏡)
吾作三神五獸鏡	1	〃	12	兵庫西求女塚, 伝岐阜可児市, 千葉城山 1 号
吾作三神五獸鏡	2	〃	13	兵庫権現山 51 号, 伝愛知百々町, 奈良黒塚(4 号鏡)
唐草文帯四神四獸鏡	1	表現 4	25	兵庫吉島(2), 奈良宝塚, 滋賀雪野山, 静岡赤門上, 東博, 奈良黒塚(24 号鏡)
陳是作四神二獸鏡	1	〃	9	岡山湯迫車塚(2), 兵庫権現山 51 号, 神奈川真土大塚山
獸文帯二神二獸鏡	1	表現 5	51	京都・百々ヶ池
獸文帯四神四獸鏡	1	〃	24	大阪・石切
吾作徐州銘四神四獸鏡	1	表現 14	20	兵庫権現山 51 号, 同西求女塚, 奈良宝塚, 岐阜内山 1 号
張是作四神四獸鏡	1	〃	なし	
波文帯盤龍鏡	1	盤	4	大阪黄金塚, 愛知奥津社, 奈良黒塚(17 号鏡)
陳氏作四神二獸鏡	1 片	表現 8	45	滋賀・古富波山

櫛歯文を欠く外区のみ1片

以上計31面

ほかに獣像、小人、捩座乳の各細片があり、また、伝椿井吾作三神五獣鏡1(表現1同範鏡番号12)がある。いずれも、上記のものに該当せず、2面追加して計33+ α 面となる。

3. 椿井大塚山古墳の築造年代

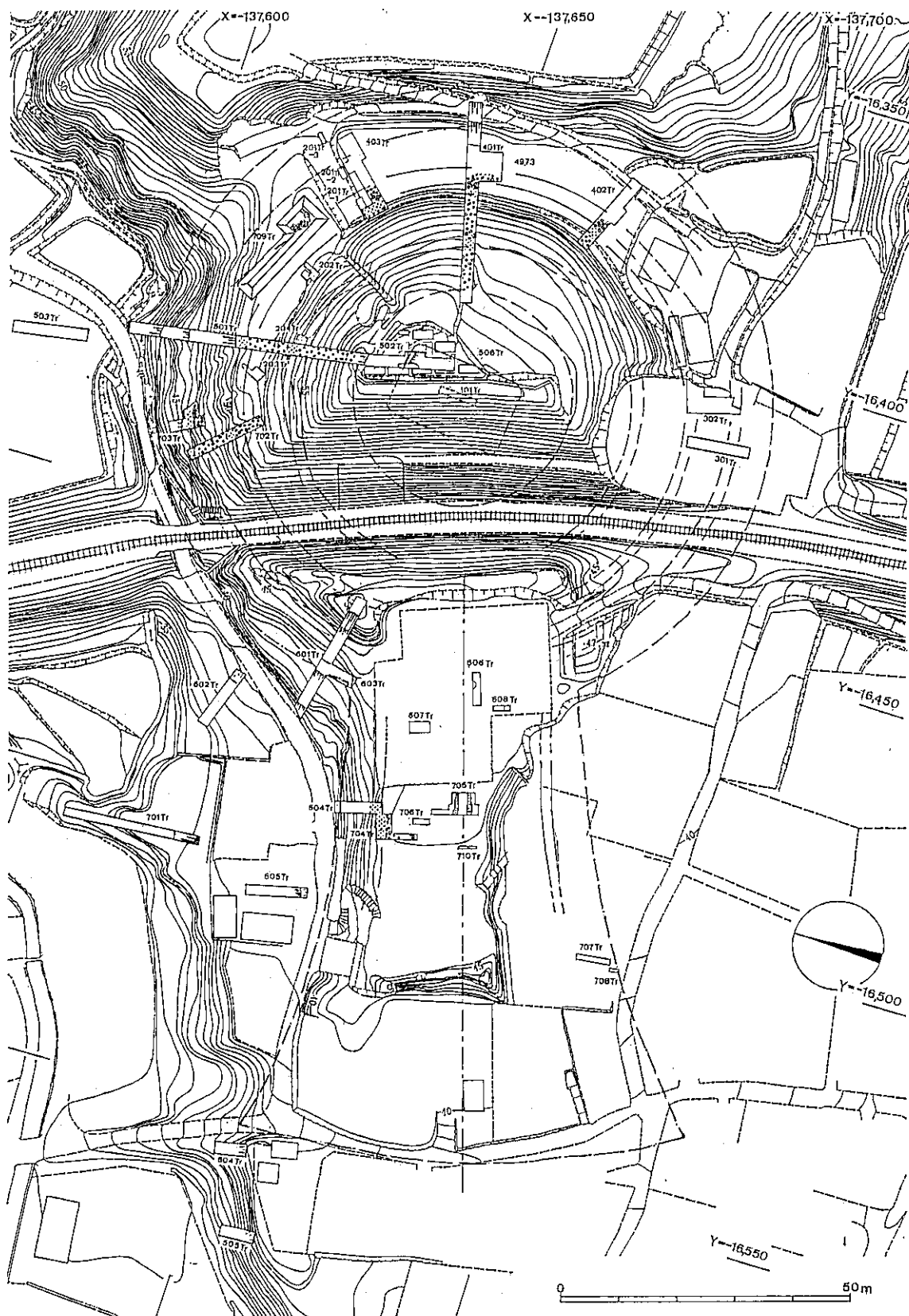
椿井大塚山古墳における墳丘の規模等確認調査(平成7～10年度)では、墳丘盛土内外から多くの土器資料を得ている(山城町教育委員会 1999)。前方部の盛土内からは北白川C式、北白川上層1式、中津式、福田KⅡ式、篠原式、長原式など縄文時代中期末から後・晩期の土器が出土しており、後円部盛土内からは弥生時代末(畿内第V様式)から古墳築造時の土器を多く含むことと対照的である。これは、盛土の採取場所・墳丘の整形場所の差を反映しており、墳丘が立地する2段の段丘面それぞれの歴史に対応している。ここでは、古墳の築造時期を示す土器類について概観する。ここに紹介する土器は、弥生時代の土器から所謂庄内、布留式土器までを含んでおり、当古墳の築造時期を前後するものとする。出土土器は、墳丘盛土内のものと盛土や葦石の崩落により堆積した層から出土したもの、墳丘の裾やその周囲から出土したものに大別できる。前者が築造過程での祭祀やその後の墳丘上での祭祀の状況を反映し、後者が築造作業に従事した人々の生活や周囲での祭祀の状況をより強く反映するものと考えた。

第8図①に示す土器は、後円部墳丘斜面葦石および盛土崩落土中から得たもので、二重口縁壺の口縁部である。いずれも口径25cm以上(机上復元を含む)と大型で、装飾を持たないという一定の規格性を認めることができる。おおむね、筒状の頸部から一次口縁が外反し二次口縁がさらに大きく外反する形態をとり、器壁が約7mmと厚い。また、1は2以下のものとは異なり、一次口縁と二次口縁を境に明瞭な屈曲を持たないという個体差がある。調整は内外面ともハケのみでミガキは施さない。頸部内面には、絞り痕をハケでナデ消した跡があるが、体部との接合の際、頸部を差し込んだことにより生じたものであろう。頸部以下の形態については、良好な資料が得られていないため不明な点が多い。ただし、体部についてはほぼ球形を呈すると考えられる。内面には横方向のヘラケスリが施される。底部形態については、比較的残存しやすい突出平底片が周辺で出土していないことから、丸底かと推測しておきたい。胎土については、大きく2種類に分類できる。ひとつ(2)は、赤褐色を呈し6mm以上のチャート・長石粒を含む焼成の良い土器である。今一つ(1・4)は、黄褐色を呈するもので同じく3mm以下のチャート・長石粒を含んでいる。後者の内外面には赤色顔料が塗布されているのが特徴である。

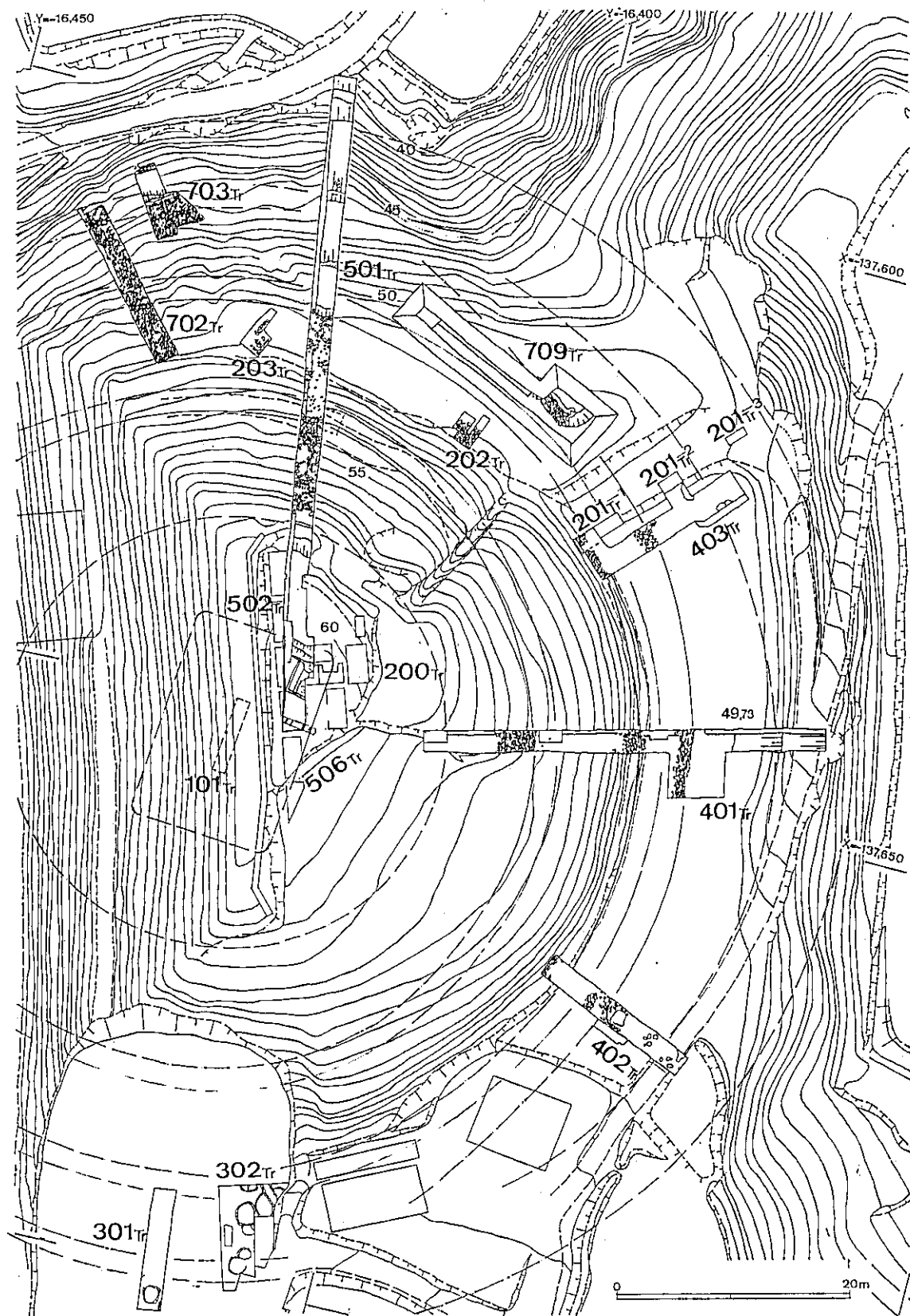
第8図②は、後円部東側堀割り部付近出土の土器で、墳丘表土・盛土内に含まれていたものと考えられるが、墳丘造成作業中のものも一部含むかと考えている。壺・高杯・甕・器台などがあり、弥生時代後期中葉のものを含んでいる。壺には、二重口縁壺(2～4)と、広口壺(1・16)がある。3は大型ではあるものの二次口縁の立ち上がりは短く装飾は施さない。外面には浅い多条沈線様の筋が見られるが、横ナデの際の当て布痕跡かと見られるもので、擬凹線ではない。器台は3点(1・6・8)が

あり、1 は壺として図化した。口縁が横方向に大きく外反する器台になると考えられる。外端面下方に粘土をつぎたして大きく肥厚させている。接合部には指圧痕が残り仕上げが粗い。また、端面には単位が一定しない波状文が施されている。6 の筒形器台は軸部で直径 6.5cm を測り、脚部と口縁部が大きく外反する比較的大型のものである。脚部との変換点付近にのみ三方のスカシが穿たれている。8 は、杯部中央が閉じられていないが高杯と同様の形態を持つものである。高杯は、脚柱部が遺存する個体のみであるが、製作方法に共通点が見られる。いずれも、柱部を螺旋状に絞って整形し、脚部を内面から接合している。最終調整を丁寧には施さないためよく観察できる。甕には畿内第Ⅴ様式系の突出平底片（5）と、いわゆる布留系甕・布留傾向甕と呼んでよいもの（15）がある。15 は生駒西麓産の胎土を持つもので、図化には机上復元を行っている。口縁は内湾気味に立ち上がり、端部は丸く単純に収める。体部は、やや肩の張った球形を呈すると見られ、外面はハケ（肩部横ハケ）、内面は頸部からやや下がったところから横方向のヘラケズリが施されている。なお、底部内面には指頭圧痕が残る。

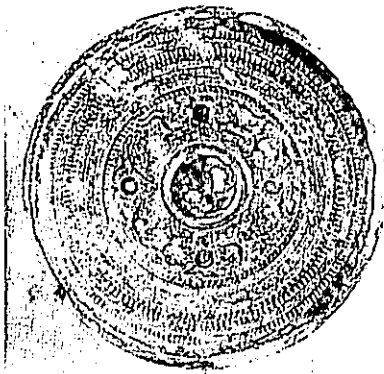
以上、古墳後円部の調査で得られた土器を概観したが、明らかに墳丘築造前の弥生土器を除外すると、古墳築造時の土器様相は、所謂庄内から布留式土器への過渡期の土器（布留式Ⅰ式）と考えて差し支えないものである。



第2図 椿井大塚山古墳墳丘測量図（山城町教育委員会 1999 より転載）



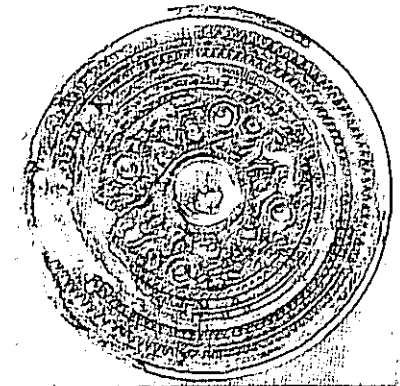
第3図 樺井大塚山古墳後円部墳丘測量図（山城町教育委員会 1999 より転載）



1 波文帯龍虎鏡



2 天王日月・猷文帯変形重列式神猷鏡



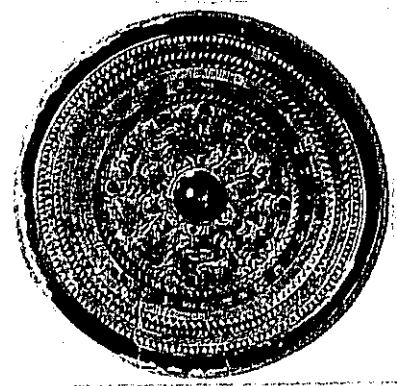
3 陳是作四神二猷鏡



4 張氏作三神五猷鏡



5 吾作三神五猷鏡



6 吾作三神五猷鏡



7 (6と同範)

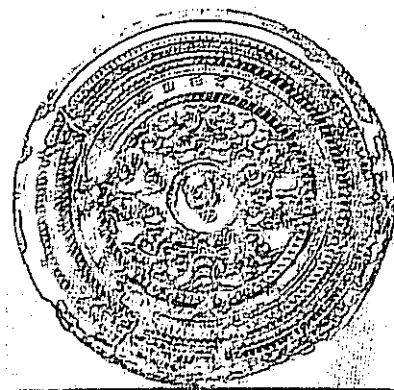


8 吾作五神四猷鏡

第4図 椿井大塚山古墳出土銅鏡① (山城町 1990 より転載)



9 吾作四神四獣鏡



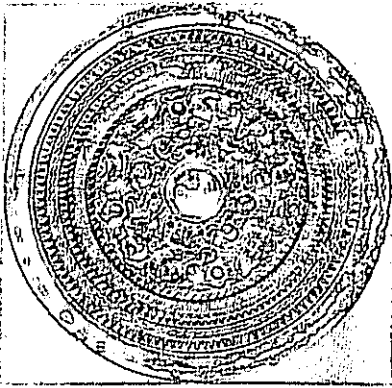
10 吾作四神四獣鏡



11 (10と同範)



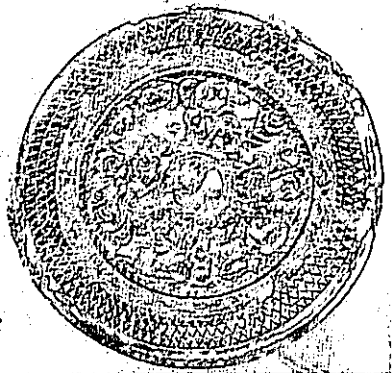
12 張氏作四神四獣鏡



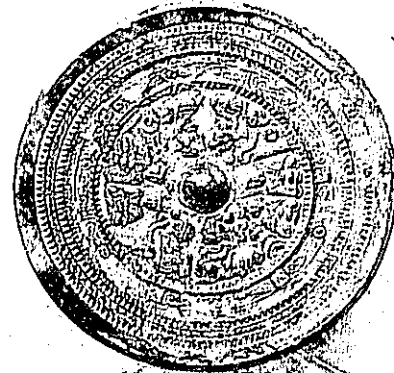
13 櫛齒文帯四神四獣鏡



14 (13と同範)

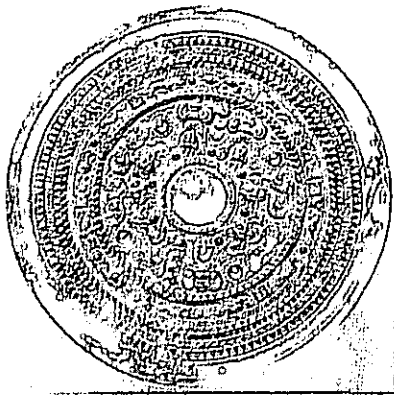


15 吾作徐州銘四神四獣鏡

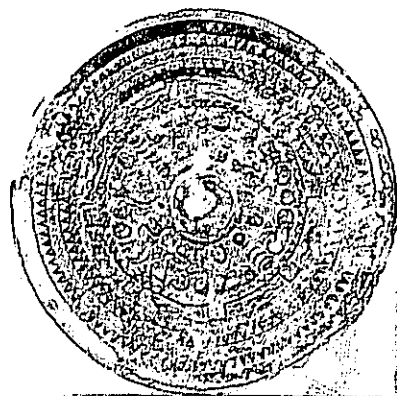


16 天王日月・唐草文帯四神四獣鏡

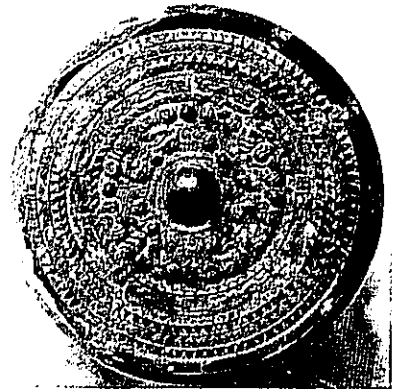
第5図 椿井大塚山古墳出土銅鏡② (山城町 1990 より転載)



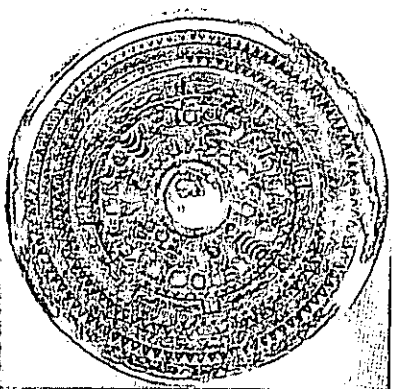
17 天王日月・猷文帯四神四獣鏡



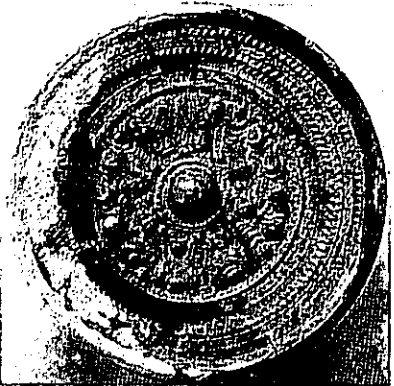
18 天王日月・猷文帯四神四獣鏡



19 (18と同范)



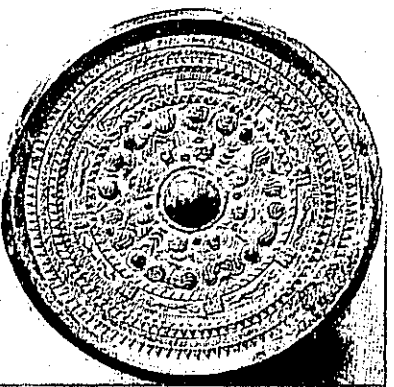
20 (18・19と同范)



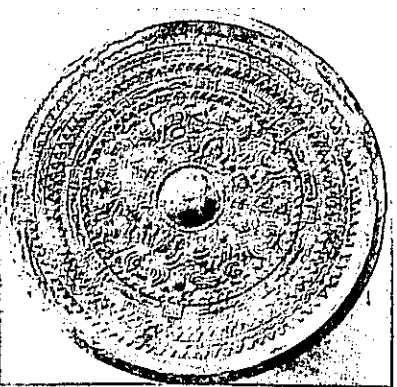
21 張是作四神四獣鏡



22 猷文帯五神四獣鏡

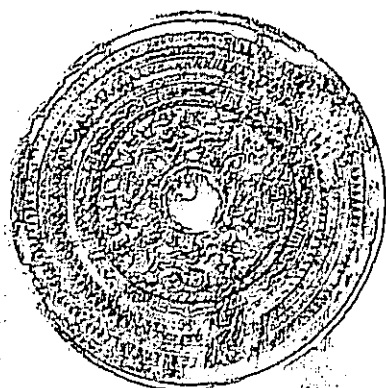


23 天王日月・猷文帯四神四獣鏡



24 天王・日月・猷文帯四神四獣鏡

第6図 椿井大塚山古墳出土銅鏡③ (山城町 1990 より転載)



25 天王・日月・獣文帯四神四獣鏡



26 天王日月・鋸歯文帯四神四獣鏡



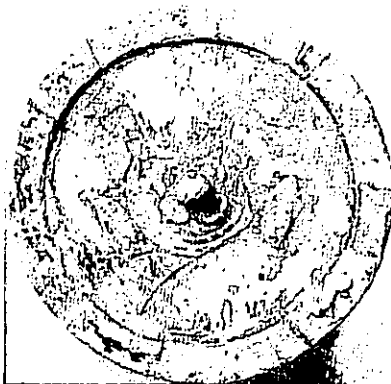
27 天王日月・獣文帯四神四獣鏡



28 天・王・日・月・獣文帯二神二獣鏡



29 天王日月・獣文帯三神三獣鏡



30 内行花文鏡

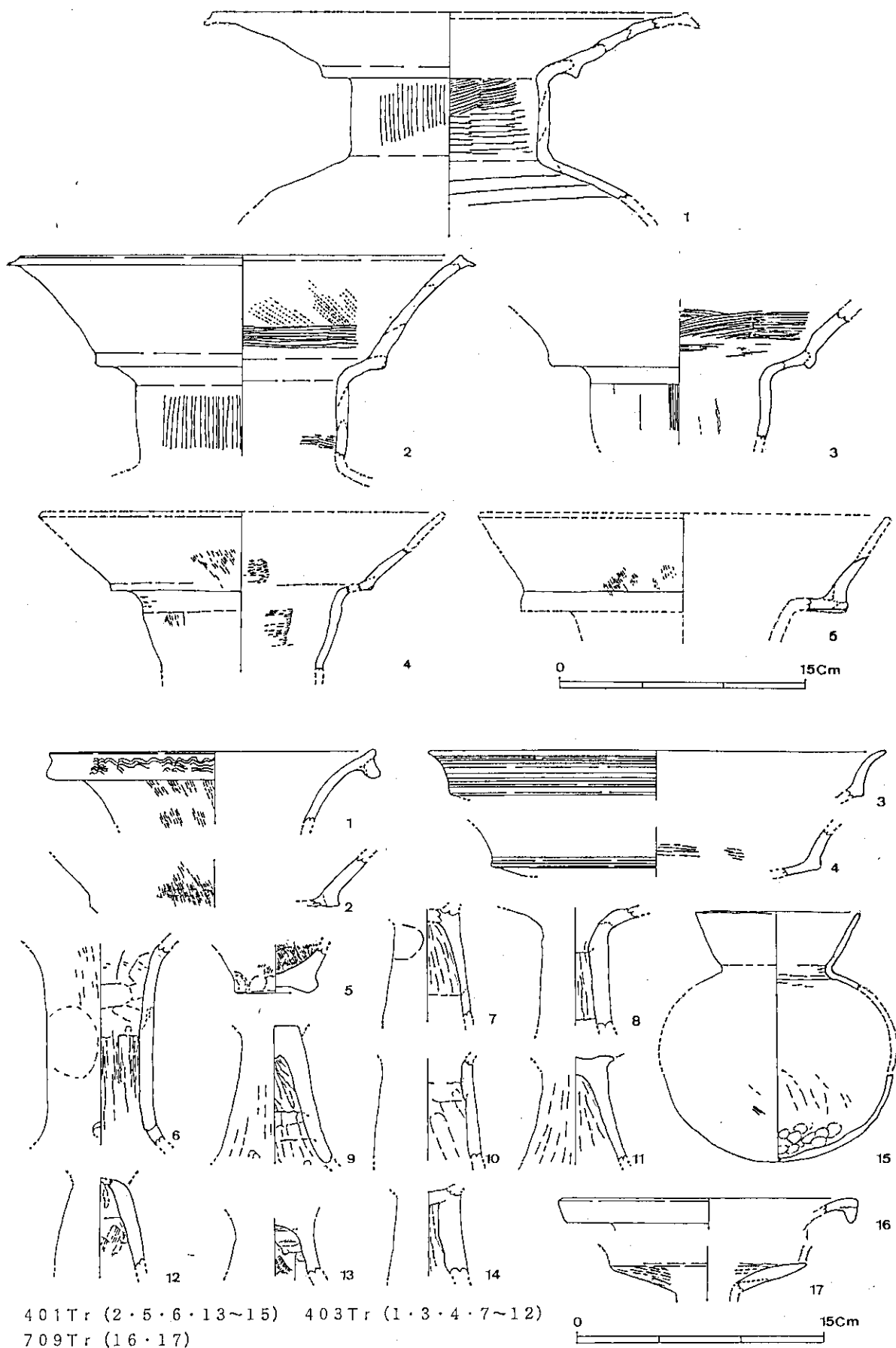


31 方格規矩鏡



32 画文帯神獣鏡

第7図 椿井大塚山古墳出土銅鏡④ (山城町 1990 より転載)



第8図 椿井大塚山古墳築造前後の土器 (山城町教育委員会 1999 より転載)

第二節 椿井大塚山古墳の被葬者像

1. 墳丘からみた被葬者像

椿井大塚山古墳は、全長約 175mを測る前期古墳では山城地方最古最大の前方後円墳である（山城町教育委員会 1999）。周辺の前方後円墳では、その造営時期を広く 4 世紀代に求めても、同じ相楽東部の平尾城山古墳(110m)（近藤喬一編 1990）や綴喜西部の八幡西車塚古墳(115m)（梅原末治 1919b）、八幡東車塚古墳(94m)（梅原末治 1920a）、石不動古墳(75m)（梅原末治 1955）、飯岡車塚古墳(81m)（梅原末治 1920b）などの全長 100m前後の前方後円墳のほか、綴喜郡の大住南塚古墳(71m)や大住東塚古墳(66m)（以上、梅原末治 1922a）、久世郡の西山 1 号墳(75m)（堤圭三郎 1964）などの前方後方墳も存在するが、その古さ・規模は他を凌駕しており点位的な様相をもつ。北山城の檜原から淀川水系の向日丘陵に目を転じて、前方後方墳の元稲荷古墳(94m)（向日市教育委員会 2014）や前方後円墳の一本松塚古墳(85m)（梅原末治 1920c）、天皇ノ杜古墳(83m)（財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1989）、五塚原古墳(91m)（小野山節編 1981）、寺戸大塚古墳(94m)（梅原末治 1923c）、妙見山古墳(120m)（梅原末治 1922b）、鳥居前古墳(70m)（都出比呂志他 1990）とその古さ・規模は傑出している。ここに示された墳丘の規模は、明らかに木津川流域・淀川流域で突出しており、単に首長墳としての位置付けが可能だとしても、その存在は単独で系列が後に続くことはなく、在地の勢力としての性格は希薄とすべきであろう。

古墳時代前期前半（3 世紀後半～4 世紀前半）の後の大和地域に目を転じると、東南部の「おおやまと」（山辺）に王墓ないし王墓級の大型前方後円墳が 6 基ある。箸墓古墳(278m)（奈良県立橿原考古学研究所編 1997）、西殿塚古墳(234m)、柳本行燈山古墳(242m)、渋谷向山古墳(310m)、桜井茶臼山古墳(207m)、メスリ山古墳(224m)である（以上、近藤義郎編 1992 のデータによる）。これら全長 200mを越す大型前方後円墳に次ぐ規模の古墳は、黒塚古墳(130m)（奈良県立橿原考古学研究所編 1999）、中山大塚古墳(130m)（奈良県立橿原考古学研究所 1996）、馬口山古墳(110m)（近藤義郎編 1992）など、全長 140mを越える古墳はない。椿井大塚山古墳については、後円部が正円ではなく尾根（段丘崖）の削り出しが大きく省略されており、当初設計通り後円部を正円に復元すると全長 190m程度となろう（山城町教育委員会 1999）。この規模は、ヤマトの古墳時代前期前半の王墓ないし王墓級の大型前方後円墳に準ずるものとして評価できる。

墳丘の構造は、かつて所謂「丘尾切断型」の典型とされてきたが、発掘調査の結果、墳丘を乗せる二段の平坦な段丘面に盛土して整形したものと判明した。したがって、墳丘の多くは盛土であり、後円部と前方部の比高差は約 15mにも及ぶ。葺石をもつ段築は、後円部で 4 段、前方部で 2 段以上を確認している。この墳丘の形態は、前方部がなお明らかとなっていないが、最古の巨大古墳とされる箸墓古墳の 2/3 相似形となる可能性が指摘されている。後円部は 2/3 規模で 4 段築成の各段がほぼ一致し、前方部の墳端の位置や先端が撥形に開く点も整合する。しかも、墳丘の高さや後円部と前方部

の比高差もほぼ一致し、立体的にも極めて高い整合性をもつのである。箸墓古墳と椿井大塚山古墳との類似性は高く、その被葬者像を考える上で大きな注目点となる。

埋葬主体部の構造は、内法寸法で長さ 6.9m、幅 1.1m、高さ約 3mにも及ぶ竪穴式石室で、高野槇製の割竹形木棺を粘土床で受けるというものである。粘土棺床の下部は、礫敷と板石による入念な基礎固めがなされている。石室の方位は古墳の主軸とはことなり南北に設定され、長さ約 21m、幅約 13m、深さ約 5mの巨大な方形墓壇の底面から、石室は板石の平積により築き上げられている。石室の天井は、大型で長方形に加工された板状の天井石を並べて密封され、内部は漆黒の闇となる。これに対して大和東南部の黒塚古墳、中山大塚古墳、下池山古墳（前方後方墳 全長 120m）（奈良県立橿原考古学研究所編 1997）などは、いずれも石室壁体を持ち送りにして小型の板石で蓋をする形式であり、大型天井石の用例は桜井茶臼山古墳にある。このことは、「おおやまと」（山辺）の王墓ないし王墓級の大型前方後円墳と黒塚古墳や中山大塚古墳などの中型古墳との格の違いとみるか、桜井茶臼山古墳毀階以後の石室構造と考えるべきか半然としない。

2. 三角縁神獸鏡と被葬者像

1894 年（明治 27）、前方部と後円部を東西に分断する鉄道（現在の JR 奈良線）の敷設工事が実施されたが、それ以前の江戸時代後期にはすでに前方部の宅地化は進んでおり、その損壊状況からか後円部のみが「大塚」として認識されていた。ただ、藤原百川墓との伝承が示すように、「貴人の墓」としての素朴な被葬者像が伝えられていたことは興味深い（京都府 1884）。その後、明治 38 年、岩井武俊がはじめてこの古墳を学会に紹介している（岩井武俊 1905）。1953 年（昭和 28）、古墳を寸断する鉄道の法面拡幅工事が実施され、偶然に見つかった竪穴式石室や礫床から、三角縁神獸鏡 30 数面を含む 40 面近い銅鏡や夥しい量の副葬品が出土したことは、考古学史上の事件としてあまりにも有名である（山城町教育委員会 1998）。しかも、これら三角縁神獸鏡を中心とした小林行雄の論考（小林行雄 1955）は、その後の古墳時代研究を飛躍的に前進させ、三角縁神獸鏡のもつ意義と椿井大塚山古墳の被葬者像を決定的なものとして印象付けた。

椿井大塚山古墳の三角縁神獸鏡、特に各地の古墳に分有される同範鏡の存在に注目した小林行雄は、そこに古代史上の意義をみいだそうとした（小林行雄 1961）。すなわち、魏が卑弥呼の遣使に応じて下賜すべく特別に鑄造した三角縁神獸鏡は、いったん大和に保管され、椿井大塚山古墳の被葬者によって、九州から関東におよぶ各地の首長に配布されたもので、その配布活動が、大和の勢力を中核とする広範な政治秩序を創始したものと考えた。ここに、列島の広範な政治秩序の中核において、その権威の伝達者（配布者）としての椿井大塚山古墳の被葬者像が描かれたのである。今日では、庄内期以前の巨大墳丘墓の調査が進展し、さらに、天理市黒塚古墳での三角縁神獸鏡大量出土など、古墳の発生とそれに果たした三角縁神獸鏡の役割について、多くの点で小林理論の修正が迫られている。

椿井大塚山古墳の石室内の状況については、工事中の発見であったため、その詳細は不明であったが、黒塚古墳などの調査成果によって椿井大塚山古墳の石室内の状況を復元することが可能となった。

ここで注目すべきは鏡の副葬の仕方である。黒塚古墳の様相から復元すると、石室の輪郭に沿って棺外に立て並べられたのは三角縁神獸鏡と方格規矩鏡の二種となり、画文帯神獸鏡のみがその遺存状態の良さからも棺内にあった可能性が高い。また、黒塚古墳では、石室北面に椿井大塚山古墳と同範・同型の波文帯盤龍鏡が1面のみ立てかけられていた。三角縁神獸鏡と方格規矩鏡の共伴については、高槻市の安満宮山古墳（高槻市立埋蔵文化財センター 2000）で魏の年号である青龍3年（235）銘の方格規矩四神鏡が三角縁神獸鏡とともに出土しており、その関連が注目される。また、椿井大塚山古墳と黒塚古墳で型式の判明している三角縁神獸鏡（椿井大塚山古墳31面、黒塚古墳33面）を比較すると、両古墳で9型式の同範関係（椿井大塚山古墳10面、黒塚古墳11面）が成立しており、3割以上の非常に高い同範比率となる。椿井大塚山古墳と黒塚古墳における鏡の副葬状況や時期には、極めて近似した状況がみられるのである（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館他 2001）。しかし、鏡面の向きは両者で正反対となる。椿井大塚山古墳では鏡面を棺の外側に向け、黒塚古墳では棺に向けているのである。もし、棺を囲む副葬品としての役割を三角縁神獸鏡が辟邪として担うとしたら、鏡面は外側に向けて棺を守るべきであろう。黒塚古墳ではむしろ閉じ込めているように見えるのは、考えすぎであろうか。いずれにしても、この様相は、椿井大塚山古墳と黒塚古墳における被葬者の性格を暗示する。なお、椿井大塚山古墳に三角縁神獸鏡（天・王・日・月・獸文帯四神四獸鏡 M24 号鏡）があることはすでに記したが、黒塚古墳からも神人龍虎画像鏡（黒塚8号鏡）に菩薩や飛天の表現が見られるのである。石室外の礫床から出土したとされる3面の鏡については、内向花文鏡2面が候補となる。この礫床については、石室と同一墓域内の可能性が高く、副室と考えられる。これは、巨大な墓域内に石室と副室が併ぶ下池山古墳（奈良県立橿原考古学研究所編 1997）の副室から出土した内向花文鏡の様相を想起させるものである。

以上のことから、小林行雄が描いた三角縁神獸鏡の配布仲介者としての椿井大塚山古墳の被葬者像は、そのまま黒塚古墳の被葬者像と重なることとなり、三角縁神獸鏡の同範・同型鏡分有関係図は二大拠点をもつこととなった。その同時代性を考えるならば、倭国（後のヤマト王権?）にとって、いずれかが三角縁神獸鏡頒布の管掌者であり、他一方が特別な受領者となるであろう。いずれにしても、椿井大塚山古墳の被葬者像は、前方後円墳体制成立期における畿内政権中枢部の人物として誤りはない。ところで、副葬品に含まれる鉄製品の復元により、花卉形装飾付鉄製品の存在が明らかとなった（京都大学考古学研究室 1989）。その形は三角縁神獸鏡などに見られる神像の被物（三山冠）と類似し、仮に冠を被って横たわる被葬者の姿を想像するとき、武人とは異なる宗教的権威の保持者としての被葬者像が、具体的イメージとして湧き上がるのである。

3. 反乱伝承

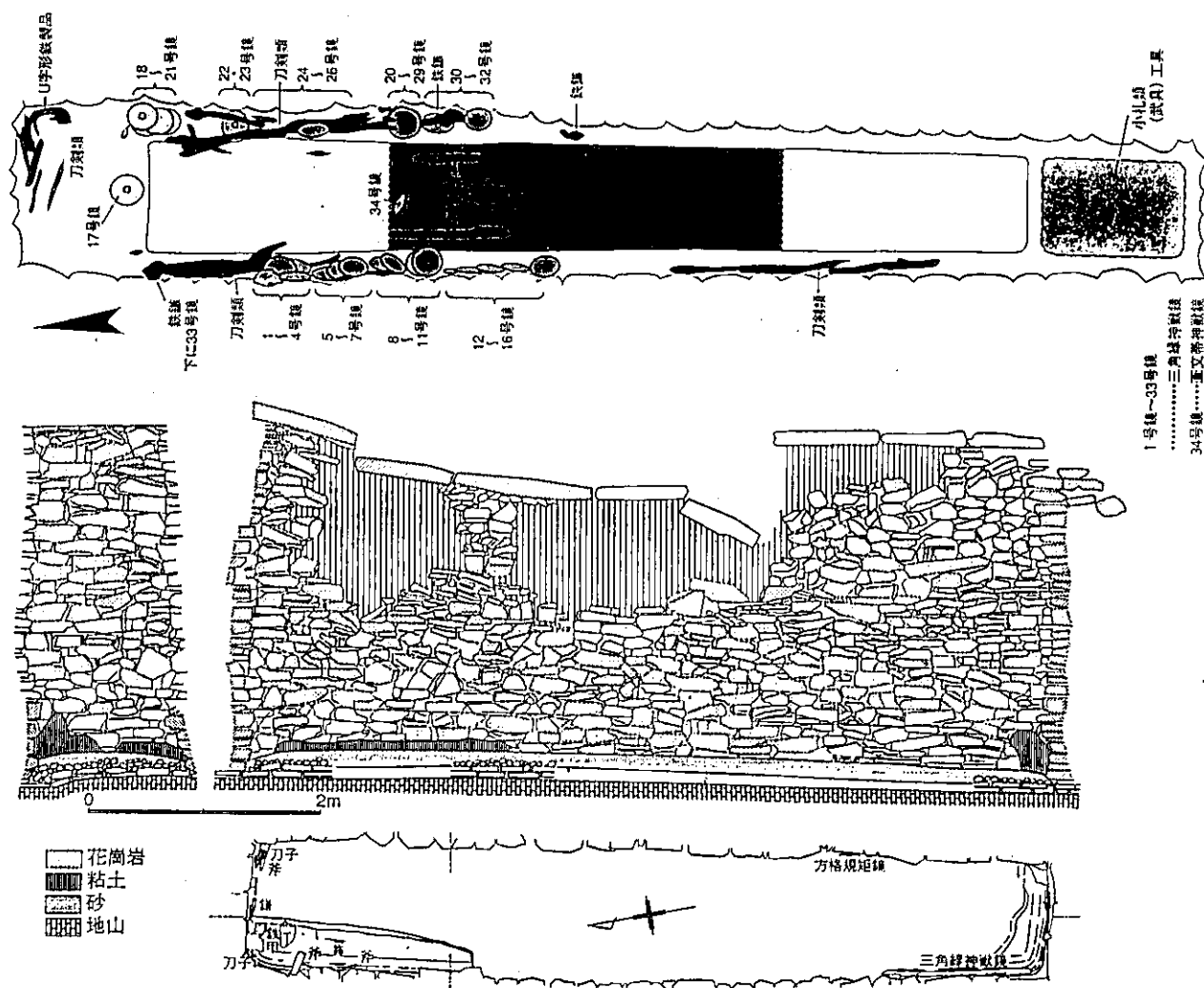
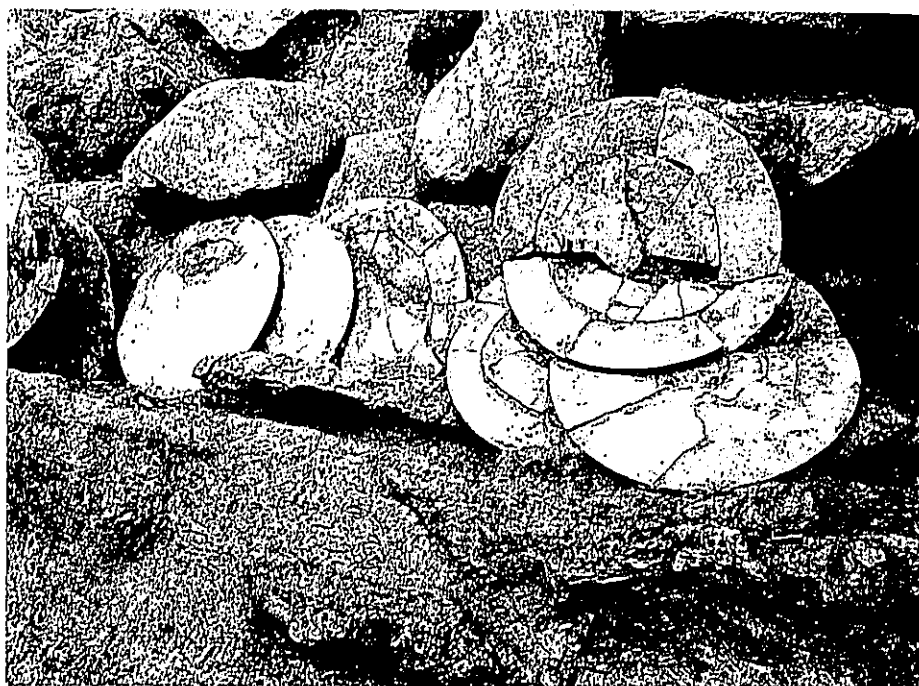
『古事記』に崇神天皇代のこととして、「山代之幣羅坂」が登場する。この坂は奈良山を越えて大和から山城国にいたる般若寺越えの道の坂で、現在も木津川市市坂に「幣羅坂神社」が鎮座する。『古事記』では、四道將軍のひとり大毘古命が高志国に下る際、この地で不思議な歌を歌う少女に出あう。

まさにこの歌こそが健波邇安王の叛乱を予兆するものだったのである。なお、『日本書紀』でも、同様の話が人物表記を変えて記されており、少女の登場場面も「和珥坂上」と場所を変えているが、割注に山背「平坂」とする説を記している。また、『古事記』上巻でも、黄泉国とこの世を分ける坂のことを「黄泉比良坂」(ヨモツヒラサカ)と記し、死者の国と生者の国を分ける国境の坂を表している。地理的な境界と宗教的(精神的)な境界の違いはあるが、奈良時代以前の王宮の所在地である大和からみると、やはり奈良山は異界へ赴く長いトンネルだったのである。また、『日本書紀』崇神天皇十年九月条には、奈良山の地名起源説話としても、武埴安彦(『古事記』では健波邇安)討伐の記事がある。これは、那羅山(奈良山)に布陣した大彦(『古事記』では大毘古)らの軍勢が、奈良山の草木を踏みなら(平)したため、そこが後に「那羅山」(ナラヤマ)と呼ばれるようになったとするもので、同様に、両軍が河をはさんで対峙したその河が「挑河」(イドミガワ)と名付けられ、それが訛って現在の木津川の古名である泉河(イツミガワ)となったともしている。また、敗れた武埴安彦の軍勢の死体が累々として横たわる地が「羽振苑」(ハフリソノ)で、現在の相楽郡精華町祝園(ホウソノ)にあたり、「伽和羅」(現在の京田辺市河原)や「屎禪」(枚方市楠葉)などの地名起源説話も紹介している。まさに、この反乱伝承は南山城が舞台となっているのである。

この伝承の登場人物をみると、まず、初代のヤマト王権の王と考えられる崇神天皇は、『日本書紀』に「御肇国天皇」、『古事記』で「初国所知らしし御真木天皇」と記し、「はづくにしらすスメラミコト」と修飾されている。陵墓としては柳本行燈山古墳が比定されている。不思議な少女の歌の意味を解説したのは、『日本書紀』では崇神天皇の姑で大物主神の妻である「倭迹迹日百襲媛命」であり、陵墓として箸墓古墳が比定されている。そして、南山城に勢力を持つ武埴安彦は崇神天皇の庶兄にあたり、ヤマト王権の成立期における動乱の主役となっているのである。『記紀』が編纂された奈良時代にあってもなお、大和東南部の王墓と南山城の椿井大塚山古墳を結びつける伝承が記憶されていたのである。

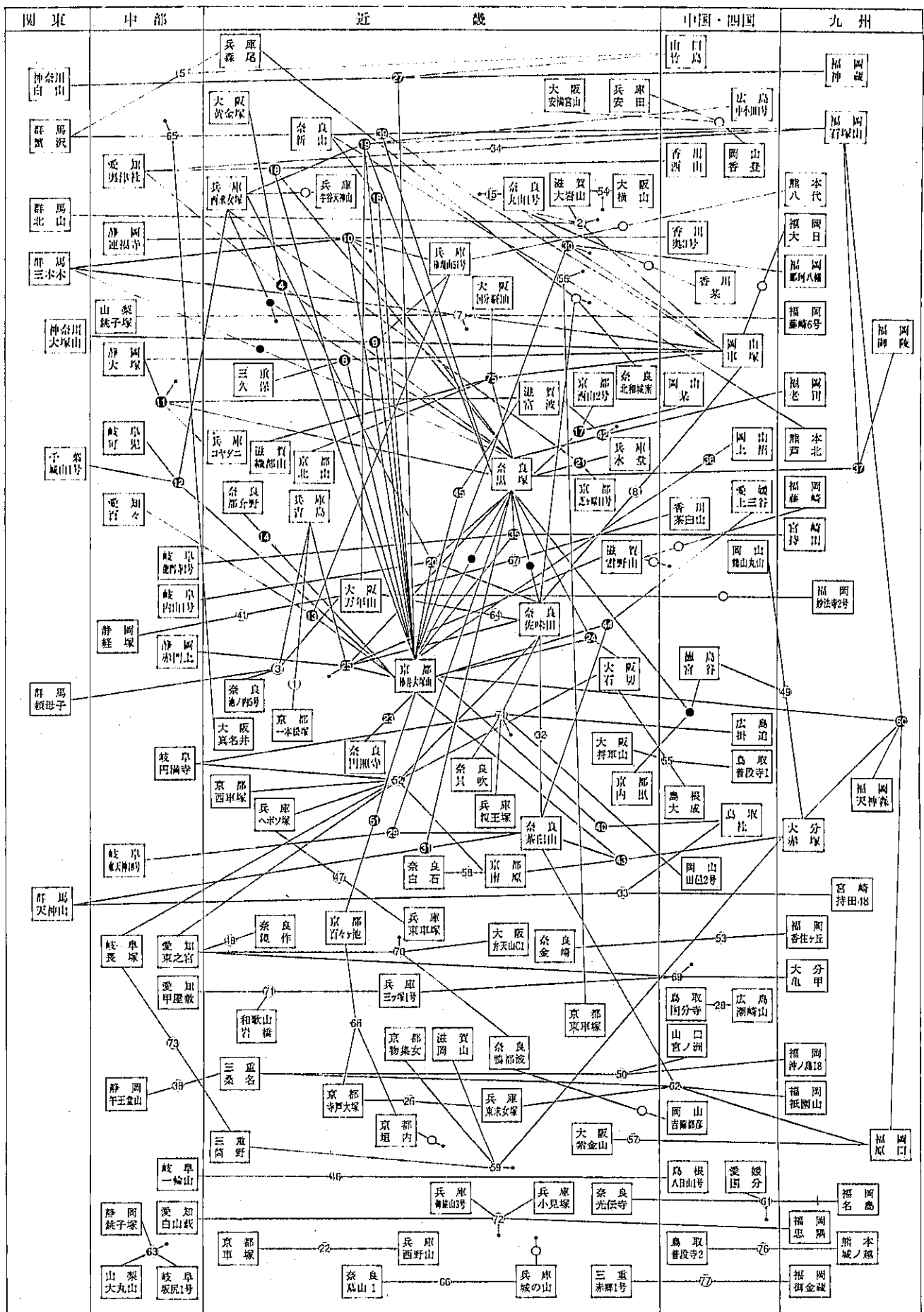
かつて小林行雄が描いた三角縁神獸鏡の配布仲介者としての椿井大塚山古墳の被葬者像は、そのまま黒塚古墳の被葬者像と重なることとなり、いずれかが三角縁神獸鏡頒布の管掌者であり、他一方が特別な受領者となるであろう。しかし、大和東南部の王墓と南山城の椿井大塚山古墳を結びつける伝承をみると、三角縁神獸鏡の配布仲介者とする以上の結び付きを感じる。「邪馬台国を盟主とする倭国の時代」から「ヤマト王権の時代」への変革期、初代のヤマト王権に拮抗しその権威を篡奪しようと企てた勢力がこの南山城に伝承され、しかも箸墓古墳や柳本行燈山古墳などの王陵との結びつきが伝えられているのである。椿井大塚山古墳の被葬者像として、王権に連なる宗教的権威の保持者でもある武埴安彦のような人物をイメージすることは、無謀であろうか。

いずれにしても、「ヤマト王権の時代」への変革期の倭国において、王権の近くで重要な役割を演じた人物として、椿井大塚山古墳の被葬者像を描くことは可能であろう。



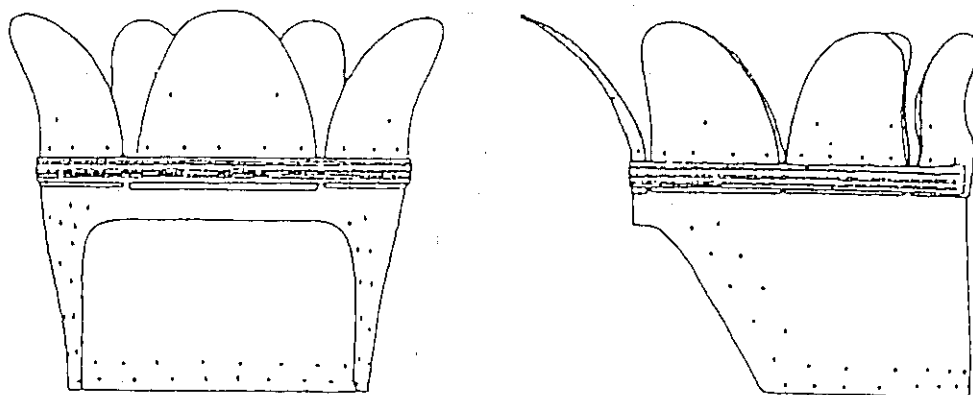
第9図 樺井大塚山古墳と黒塚古墳の石室

(奈良県立橿原考古学研究所付属博物館他 2001 より転載)



第10図 三角縁神獣鏡の同范・同型鏡分有関係図

(奈良県立橿原考古学研究所付属博物館他 2001 より転載)



第11図 鉄製冠帽

(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館他 2001 より転載)



神像の冠 [黒塚29号鏡]

第12図 三角縁仏獣鏡の表現

第三節 椿井大塚山古墳での二つの墓前祭祀

第一節で見たように、椿井大塚山古墳における墳丘の規模等確認調査（平成 7～10 年度）（山城町教育委員会 1999）では、墳丘盛土内外から多くの土器資料を得ている。前方部の盛土内からは縄文時代中期末から後・晩期の土器が出土しており、後円部盛土内からは弥生時代末（畿内第Ⅴ様式）～古墳築造時の土器を得ている。これは、盛土の採取場所・墳丘の整形場所の差を反映しており、墳丘が立地する 2 段の段丘面それぞれの歴史に対応していた。ここでは、古墳築造以後の土器類について概観し、この古墳に対する「墓前祭祀」の状況を考えてみたい。

1. 古墳築造直後の祭祀

古墳後円部（東側 3 段、北側 4 段）の築造過程で見たように、後円部の上 2 段はすべて盛土であり、最上段の裾の高さが墓壙基底面の高さに対応する。そして、この高さから築かれた竪穴式石室（内法寸法で南北 6.9m×東西 1.1m×高さ約 3m）は、上端で南北 21m×東西 13m、深さ約 1.6m の墓壙中央に大きく口を開けることとなる。この段階で墓壙内にベンガラ塗布がなされており、遺骸の埋葬や王位継承にともなう何らかの祀りがあったようである。その後、巨大な板石によって石室は密封され、墓壙は完全に埋められて墳頂には大型の二重口縁壺型土器が配置されるのである。おそらくはこの段階でも何らかの祀りが行われたと考えられるが半信としない。ところが、2 段築成の前方部北側の上部 1 段裾テラス面で、小規模ながら土器を使った祭祀の痕跡が見られるのである（第 13 図）。祭祀の目的等は不明であるが、葺石の根石に面して直径 30cm 程度のサークル状に残存する配石があり、その内外からまとまって土器（第 15 図）が出土した。

出土土器の器種としては、壺・高杯・器台・小型の甕がある。壺には無飾の二重口縁壺、加飾の二重口縁壺、直口壺がある。高杯には脚柱部など 4 点があるが、形態などにバリエーションがみられる。大型で比較的杯部の深い口縁をもつタイプのものには、柱部が中実で表面に縦方向のミガキのみを施すタイプと、柱部に心棒を使用して中空にし表面に横方向のミガキのみを施すタイプがある。小型の高杯には、柱頂部を粘土塊で充填し塞ぐタイプのものと、杯部内外面に放射状のミガキをもち柱頂部を塞がないタイプのものがある。甕には、口縁を「く」の字状に外反させ端部をやや肥厚させるタイプと、端部をややつまみあげるものがある。前者の外周縁部には横ハケが、内面にはヘラケズリが施される。壺の一部は盛土内からの紛れ込みと考えられる古墳築造前夜のものも含むが、他は一括性が高く、後円部墳頂付近で出土した大型の二重口縁壺型土器と同様、古墳築造後の早い時期の所産である。

後円部で見られる大規模な埋葬と王位継承にともなう祀りとは別に、前方部の片隅では小規模な祭祀が行われていたのである。これを墳丘の築造過程におけるある段階の祭祀と考えるか、後の古墳時代後期に見られる墓前祭祀に類似したものとするべきかどうかは判断を保留すべきであろう。

2. もう一つの墓前祭祀

古墳築造後の早い段階での祭祀が行われた後、椿井大塚山古墳では継続的な祭祀を含む人間の営みは見られない。この忘れられた古墳からは、その後、古墳時代後期と中世以後の遺物（第16図）が出土している。古墳後円部東側の墳丘段築が1段分省略されていることはすでに記したが、この付近では自然の段丘崖裾を整形して掘割状になっており、近世以後、水田化されている。それ以前の13世紀後半（鎌倉時代）には、この付近は古墳の周溝状に滞水しており、灰釉陶器、大和型の瓦器碗、東播系の埴鉢、土師皿や倒木等をまじえて1.5m以上の暗灰色粘質土が堆積していた。したがって、低い段築最下段は、現状で水田下に完全に埋没している。

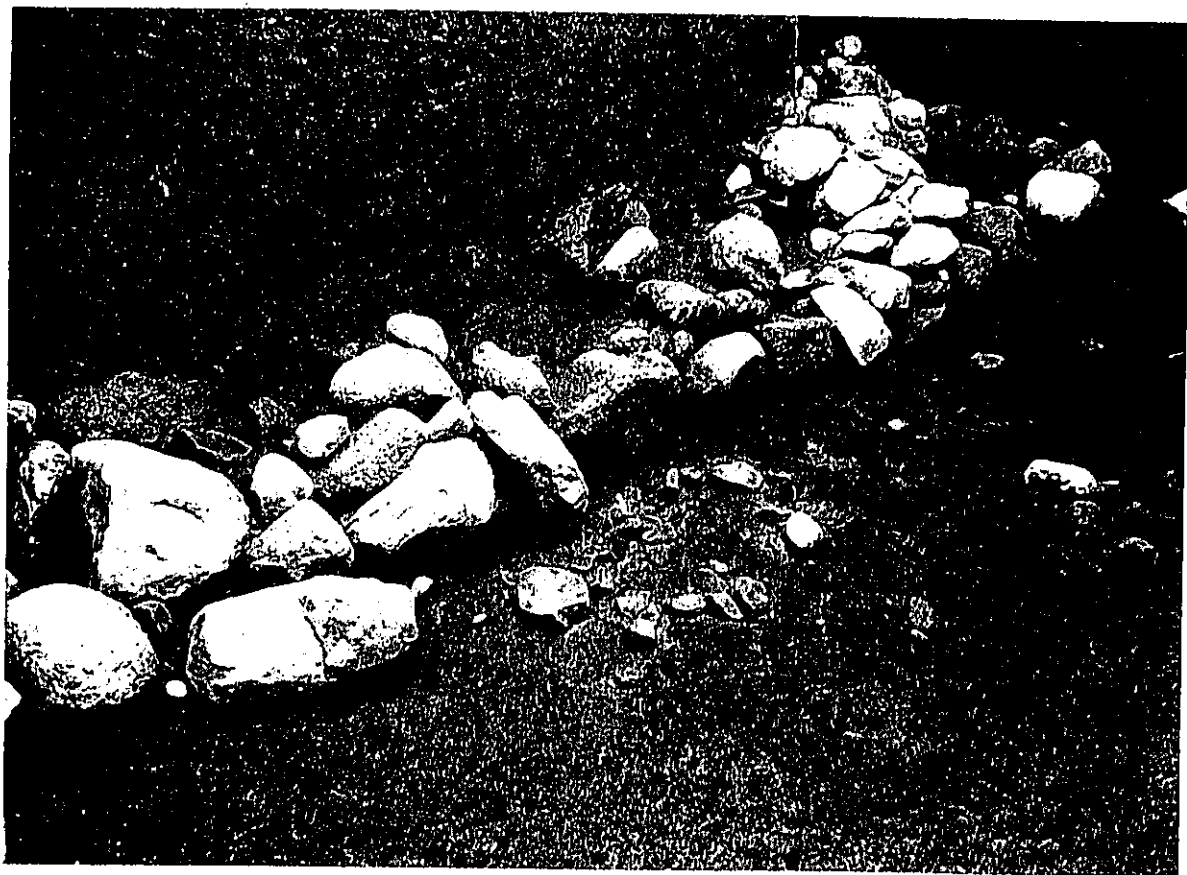
当該地の発掘調査では、この最下段葺石裾の根石直上から、仰向けにした須恵器杯蓋の中に滑石製紡錘車が入った状態で、あたかも祀られたように出土しているのである（第14図）。この須恵器杯蓋は陶邑編年のTK47段階のもので、近くからは同時期の杯身も出土しており、セットの可能性が高い。また、別の箇所からは大型化したTK10段階の杯身や円筒埴輪片も出土している。椿井大塚山古墳周辺には、横穴式石室を内蔵した後期の群集墳（西ヶ峰古墳群、宮城谷古墳群、松尾古墳群、田護池古墳群 他）が分布しており（山城町教育委員会 1989）、横穴式石室墳としては比較的早いこの時期に群集墳の形成が開始されるのであろう。しかし、根石直上で風化してぼろぼろになった花崗岩の葺石になかば埋もれるようにして置かれていた須恵器杯蓋と滑石製紡錘車の様相は、あたかも横穴式石室内に副葬でもしたように見える。5世紀後半に新たな墓制として横穴式石室を採用した群集墳の形成者たちにとって、巨大な前方後円墳に埋葬された偉大なる被葬者こそ、拝むべき偉大なる祖霊としての観念が芽生えたのかもしれない。このことは、偉大なる祖霊に対する継続的な墓前祭祀を必要としない前中期古墳の王たちとは異なる、新たな時代の幕開けである。このような事例は、近隣の八幡市美濃山のヒル塚古墳（4世紀後半、一辺52.4m、方墳）（八幡市教育委員会 1990）でもみられ、樹立された円筒埴輪内から後世の須恵器杯が出土している。この古墳は、木津川・宇治川が合流する旧巨椋池に突出して築かれており、交通の要衝にある。現在、旧巨椋池は江戸時代に干拓が行われ、かつての姿はない。

椿井大塚山古墳に見られるこの様相は、後期古墳での墓前祭祀とは明らかに異なり、そこにはまったく連続性がない。このことは、すでに前節で見たように、椿井大塚山古墳が明らかに木津川流域・淀川流域で突出しており、その存在は単独で系列が後に続くことはなく、在地の勢力としての性格は希薄なのである。にもかかわらず、墓前祭祀を擬したような行為が行われていることを、どう解釈すべきであろうか。この地域における横穴式石室の導入期、新たな墓制とともに特別な祖霊を必要とした新たな勢力があったとすべきであろう。「邪馬台国を盟主とする倭国の時代」から「ヤマト王権の時代」への変革期に、初代のヤマト王権に拮抗しその権威を簒奪しようと企てた勢力がこの南山城に存在したとする『記・紀』の伝承は、それが同一のものであるかどうかは別として、5世紀後半段階のこの地域にも伝承として存在した可能性がある。ここで「もう一つの墓前祭祀」とした理由は、ここ

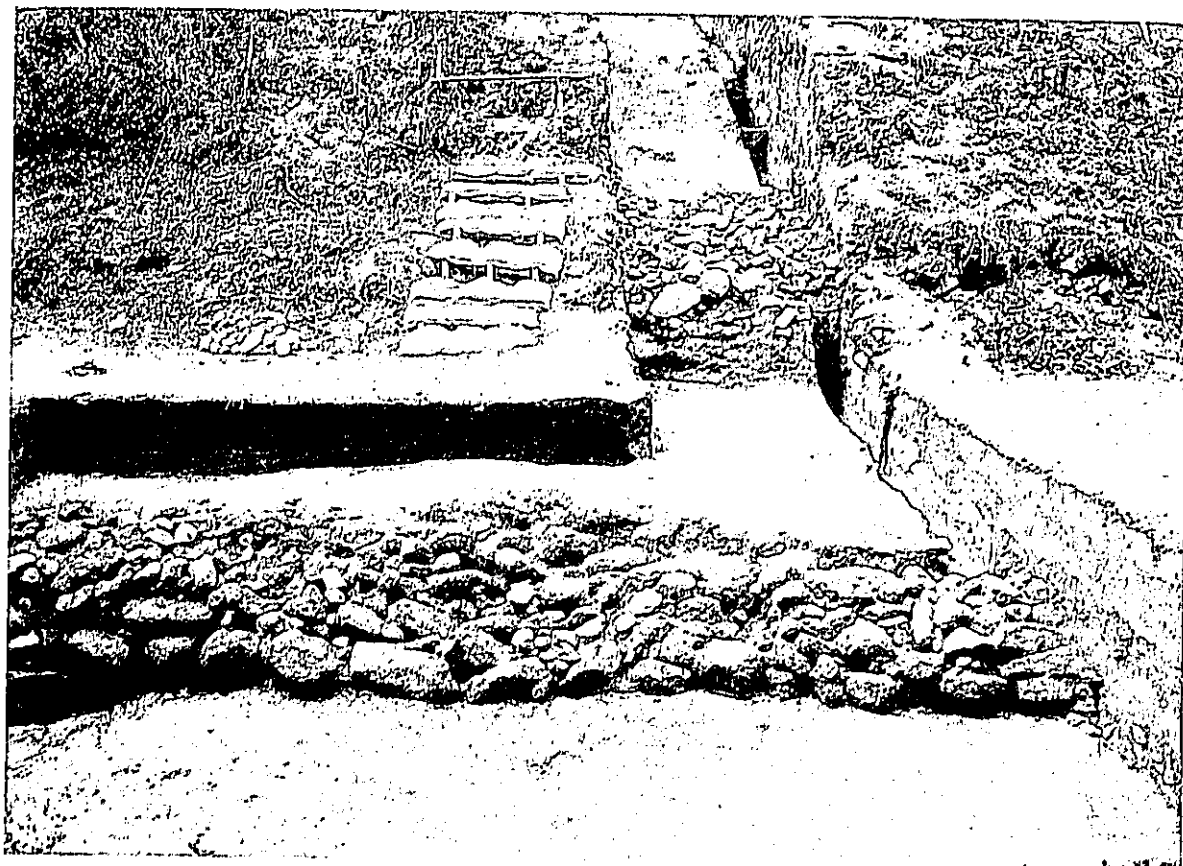
にあるのである。

5世紀の倭国は、いわゆる『宋書』倭国伝に登場する「倭の五王（讃・珍・済・興・武）」の時代である。五王のうち、最後の「武」に比定されるのが『記・紀』の雄略天皇であり、その時代は、椿井大塚山古墳で「もう一つの墓前祭祀」が行われた頃にあたる。この頃の同時代資料としては、埼玉県行田市の「稲荷山古墳出土金錯銘鉄剣」と、熊本県和水町の「江田舟山古墳出土銀錯銘太刀」があることは有名である。それぞれ金・銀の象嵌で銘が刻まれており、ともに「獲加多支鹵（ワカタケル）」の名がみえる。これは、『古事記』に「大長谷若建」、『日本書紀』に「大泊瀬幼武」と記された雄略天皇（オオハッセノワカタケル）のことである（白石太一郎 2009, 吉村武彦 2010）。特に、稲荷山古墳出土金錯銘鉄剣には、「斯鬼（シキ）宮」に宮をかまえる雄略天皇の「辛亥年（471）」のとき、「杖刀人首」として天皇に仕える「乎獲居（オワケ）」の始祖が「意富比埴（オオヒコ）」であることが記されている。このオオヒコ（『古事記』では「大彦」、『日本書紀』では「大毘古」）については、崇神天皇代の四道將軍のひとりであり、南山城での武埴安彦の反乱を鎮圧した將軍なのである。つまり、稲荷山古墳の被葬者であるオワケは雄略天皇に仕える武人であり、その8代前の始祖が崇神天皇に仕えたオオヒコであるとする「王統譜」が、この鉄剣に記されている。このオワケの系譜は、「ヤマト王権の初代の王」と関連付けて伝承されているのである。『記・紀』に記された伝承は、5世紀の後半には成立していたようである。

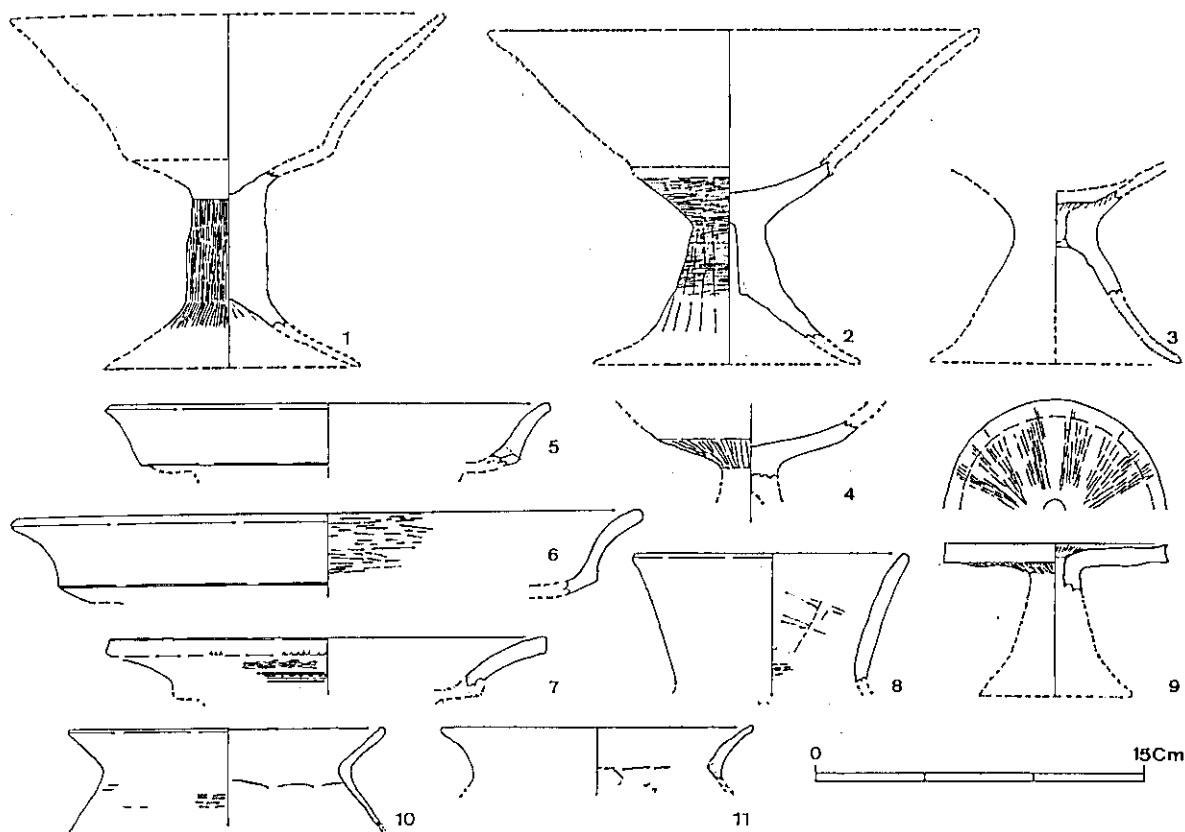
ならば、椿井大塚山古墳での「もう一つの墓前祭祀」は、この時期の歴史認識（伝承）を背景として、この地域での新たな墓制である横穴式石室の導入期に行われたものと考えられるのである。



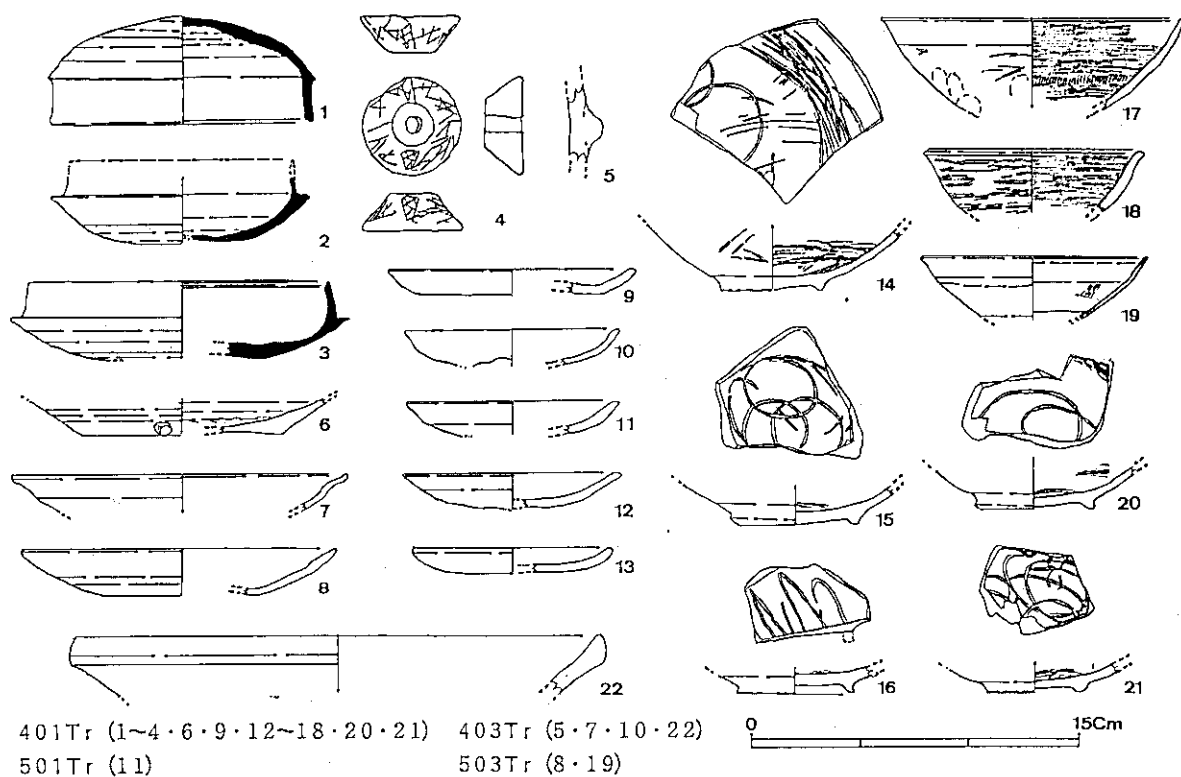
第13図 椿井大塚山古墳前方部の祭祀痕跡（山城町教育委員会 1999 より転載）



第14図 椿井大塚山古墳後円部の祭祀痕跡（山城町教育委員会 1999 より転載）



第15図 椿井大塚山古墳前方部の祭祀痕跡出土土器（山城町教育委員会 1999 より転載）



第16図 椿井大塚山古墳後円部東側出土古墳時代後期以後の土器
（山城町教育委員会 1999 より転載）

第二章 歴史認識の成立と横穴式石室の導入

はじめに

かつて石田茂作は、飛鳥時代の寺の付近には多くの古墳があることから、「古墳と寺と氏族とは不可分の三角関係に於いて考えねばならぬ」と指摘している（石田茂作 1934）。また、考古学的にも菅谷文則が「氏寺と古墳は七世紀前半以前は共存しており、寺院建立は古墳造営を拒否するものではない」としている（菅谷文則 1973）。これは、初期の寺院と終末期の古墳は矛盾対立するものではなく、豪族層の共通の信仰基盤に共存していると考えるのである。したがって、古墳の機能を継承する氏寺の発生は、古墳から寺院へのスムーズな転換が行われたと単純化すべきではなく、むしろ共通の信仰基盤に立脚するものとして共存したとすべきであろう。

古墳時代を通じて各地で形成された首長墓の系譜は、中期での前方後円墳の巨大化をピークとして後期で小型化する傾向がある。ここには、地域差・時期差はあるものの、群集墳の形成と横穴式石室の導入を契機とする場合が見られるのである。古墳の副葬品は、中期になると宝器から祭器へと変化するが、これが古墳の被葬者をいわば神的なものと意識する観念の誕生と解釈するならば、中期古墳の大型化も理解可能である。巨大な墳墓を築造しなければならないような少数の特殊身分の被葬者は、神格化によって祖先神となるのである。こうして発生した祖先神は、後期になると大和朝廷の中央集権化にともなう氏族制度の再編の過程で氏神（靈異神）＝祖先神と観念され、歴史認識（伝承）を生ぜしめるのである。

『日本書紀』推古天皇元年（593）正月15日、法興寺（飛鳥寺）の塔心礎に仏舎利が埋納される。この時、心礎周辺に置かれたものが後に発掘されており、勾玉・管玉・小玉等の玉類、金環、銀環、金・銀の延板・小粒、金銅製飾金具類、青銅製馬鈴、蛇行状鉄器、挂甲、刀子等が出土している（奈良国立文化財研究所 1958, 飛鳥資料館 1986）。それらは、まさに同時代の古墳の副葬品そのものと言ってもよいほどのものである。そして、推古天皇14年（606）、法興寺に丈六本尊を安置した年以來、寺ごとに4月8日と7月15日に設齋したと『日本書紀』は記している。これが「灌仏会」と「盂蘭盆会」の始まりである。飛鳥時代から奈良時代の仏教信仰の主流が「祖霊追善」であったことは、よく説かれることであるが、寺院における「祖霊追善」の行事を代表するのが「盂蘭盆会」である。まさに古墳における「墓前祭祀」と共通するのである。

本章では、南山城における横穴式石室導入の様相を概観し、新たな歴史認識を成立させたこの地域の古代氏族と仏教文化受容の契機について述べることにする。そこには、断絶した首長系譜と新たな勢力によるモザイク構造があり、仏教文化の受容を容易にした特異性があったのである。

第一節 南山城における横穴式石室の導入と展開

1. 山城地域の古墳時代首長系譜

山城盆地中央部では、木津川・宇治川・桂川の三川が合流して淀川となるが、その合流地点にはかつて巨椋池があり、盆地を南北に二分していた。古墳時代、この地域でも複数の首長墓の系譜が存在し、栄枯盛衰を繰り返していた。

巨椋池以北の北山城では、桂川右岸の長岡・向日・榎原の三地域で4世紀に始まる首長系譜をみることができる(都出比呂志 1974)。前方後円墳である向日市の元稲荷古墳(向日市教育委員会 2014)は、この地域最古の首長墳とみなされ、椿井大塚山古墳(山城町教育委員会 1998, 1999)と同様に大和東南部の箸墓古墳(奈良県立橿原考古学研究所編 1997)との類似性が指摘されている。ここには、五塚原古墳(小野山節編 1981)、寺戸大塚古墳(梅原末治 1923c)、妙見山古墳(梅原末治 1922b)と続く全長100mを越す前方後円墳の首長系譜を4世紀代にたどることができる。元稲荷古墳に遅れて長岡・榎原の地域でも首長系譜が新たに誕生する。長岡では、4世紀の後半に元稲荷古墳と同じ前方後円墳である長法寺南原古墳(梅原末治 1937, 長岡京市教育委員会 1992)が出現し、5世紀前半の盾形周濠をもつ恵解山古墳(120m)(長岡京市教育委員会 1981)をピークとする前方後円墳の系譜があり、規模は縮小するものの6世紀中頃まで首長系譜をたどることができる。榎原では、長岡にやや先行して一本松塚古墳(梅原末治 1920c)が出現し、4世紀末の天皇ノ杜古墳(83m)(財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989)をピークとする前方後円墳の系譜があり、長岡と同様に規模は縮小するものの6世紀中頃までの首長系譜をたどることができる。ここで特筆すべきは、これらの地域で首長墳の衰退にかわって、5世紀後半から嵯峨野に新たな前方後円墳の系譜が登場し、6世紀後葉の蛇塚古墳(全長75m?)(梅原末治編 1938)まで続くのである。渡来系氏族・秦氏の登場である。なお、東部の伏見にも、4世紀末に前方後円墳の黄金塚2号墳(140m)が出現するが、その系譜は次の黄金塚1号墳(全長100m)(以上、花園大学文学部考古学研究室 1997)までしか続かない。この地域で新たに巨大前方後円墳が出現するのは、6世紀初頭の継体朝との関連が指摘される宇治の五ヶ庄二子塚古墳(112m)(宇治市教育委員会 1992)である。

南山城では、3世紀後半に定形化した巨大前方後円墳として後の相楽郡に椿井大塚山古墳が出現するが単発的で、4世紀初頭の平尾城山古墳(近藤喬一編 1990)、瓦谷1号墳(財団法人京都市埋蔵文化財調査研究センター 1997)で前方後円墳の造営は途絶える。かわって、4世紀代には綴喜郡に八幡西車塚古墳(梅原末治 1919b)、八幡東車塚古墳(梅原末治 1920a)、石不動古墳(梅原末治 1955)、飯岡車塚古墳(梅原末治 1920b)、などの全長100m前後の前方後円墳も出現するが、5世紀代にはほぼ帆立貝形・円墳・方墳となり、永続性はない。5世紀になると久世郡に久津川古墳群が出現し、箱塚古墳(90m)、車塚古墳(180m)、芭蕉塚古墳(143m)(以上、城陽市 1999)と巨大前方後円墳の首長系譜が続く。これら巨大古墳の周囲には、墳形・規模とも様々な中小の古墳が従属する状況

は、河内・和泉の大王墓とその周辺の様相と酷似しており、中期古墳の秩序の成立を反映するものと考えられている。南山城全体でみても、久津川古墳群の巨大前方後円墳が最高首長として卓抜しているのである（龍谷大学文学部考古学資料室 1972）。5世紀後葉、芭蕉塚古墳を最後に南山城では巨大前方後円墳は途絶え、小規模な前方後円墳の築造が散発的にみられる程度である。

古墳時代後期、山城では嵯峨野の前方後円墳による首長系譜以外、宇治二子塚古墳を除き、目立った首長の出現はみられない。

2. 山城地域の後期古墳

山城において古墳時代後期で唯一首長系譜がたどれるのは、北山城は嵯峨野の前方後円墳である。天塚古墳（梅原末治 1922c）は周濠・陪塚・埴輪を持つ全長 71m の前方後円墳で、3 つの主体部を持つ 6 世紀前半築造の古墳である。初葬段階の主体部構造等は不明であるが、後円部とくびれ部に 2 つの横穴式石室を残している。秦河勝墓ともされる蛇塚古墳は全長 70m の前方後円墳で、主体部として全長 19m にもおよぶ巨石を使用した両袖式の横穴式石室を内蔵している。このような巨石墓としては、周辺に円墳であるが双ヶ丘 1 号墳（径 45m）や大覚寺円山古墳（径 50m）、御堂ヶ池 1 号墳（径 30m）（以上、京都大学考古学研究会 1971）がある。北山城の群集墳としては、桂川流域に左岸の嵯峨野古墳群（京都大学考古学研究会 1971）の他、右岸に松尾山古墳群、西芳寺古墳群（以上、京都大学考古学研究会 1967）が形成される。北山城の乙訓地域では、物集車塚古墳（向日市教育委員会 1988）が全長 48m の前方後円墳で、後円部の右片袖の横穴式石室には組み合わせ式の家型石棺が安置されていた。また、全長 46m の前方後円墳である井ノ内稻荷塚古墳（大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団 2005）は、後円部に右片袖の横穴式石室を内蔵し、前方部には木棺直葬の主体部をもつ古墳である。ともに 6 世紀前半の築造である。乙訓地域の群集墳としては、大枝山古墳群（財）京都市埋蔵文化財研究所 1989b）や福西古墳群（京都市開発局洛西開発室 1970）が知られており、ともに 30 基程度の横穴式石室を内蔵する小型古墳群である。

北山城でも宇治川以北の地域は、嵯峨野の前方後円墳で同様、古墳時代中期に目立った首長系譜の見られない地域であるが、6 世紀前半、宇治に二子塚古墳が突如出現する。この古墳は、全長 112m の墳丘に 2 重の周濠をもつ前方後円墳である。墳形は継体天皇の墓とされる高槻市今城塚古墳（高槻市立埋蔵文化財調査センター 2007, 2008）の 2/3 規模をもつ相似形で、巨石を用いた横穴式石室を内蔵していたようである。なお、宇治川右岸の丘陵上に形成された小幡古墳群（京都府教育委員会 1985）は、総数 120 基を越す山城最大の群集墳である。二子塚古墳の出現を契機として、6 世紀半ば以降に形成されたものであろう。他には、醍醐古墳群（京都市文化観光局 1986）、旭山古墳群（財）京都市埋蔵文化財研究所 1981）などの終末期古墳が、東山から醍醐にかけて群集墳として形成される。

南山城の古墳時代後期は、中期とは一転して大型の前方後円墳が築かれなくなる。卓抜した最高首長として巨大前方後円墳を築き君臨した久津川古墳群の周辺地域では、宇治市広野の坊主山 1 号墳

(45m) (京都府教育委員会 1965), 城陽市青谷の青山古墳 (25m), 石神 1 号墳 (40m), 丸山 1 号墳 (30m) (以上、城陽市 1999) で前方後円墳が築かれるが、その衰退は歴然としている。他には、相楽郡の木津川市山城町の天竺堂 1 号墳 (27m) (京都府埋蔵文化財研究会 2000) が前方後円墳であり、奈良山丘陵の音乗ヶ谷古墳 (奈良文化財研究所 2005) が全長 22m の帆立貝式古墳である。ところで、南山城の後期古墳を特徴づけるのは、その地域相である。古墳の主体部として積極的に横穴式石室を採用する地域、木棺直葬に固執する地域、横穴墓が稠密に分布する地域に分けることができるのである。久津川古墳群が営まれた後の久世郡域では木棺直葬を主体とする古墳が引き続き卓越してみられ、相楽郡域と木津川右岸の綴喜郡域では積極的に横穴式石室を採用する。そして、木津川左岸の綴喜郡北半域では横穴墓が稠密に分布するのである。

山城における古墳時代後期は、北山城で嵯峨野に新たな卓抜した首長系譜が誕生し、後の宇治郡に単発的な首長が登場するが、南山城では中期の卓抜した首長系譜が途絶えたあと、モザイク状の地域支配がなされたようである。

3. 南山城の横穴式石室墳

後の畿内とその周辺地域において最も古いとされる横穴式石室は、現在のところ大阪府藤井寺市の古市古墳群中にある藤の森古墳 (帝塚山考古学研究所 古墳部会 1990) とされている。その後 5 世紀末葉までに奈良県桜井市の桜井公園 2 号墳 (伊達宗泰・小島俊次 1959) や同県葛城市の寺口忍海古墳群 (E - 21, D - 27 号墳) (千賀久編 1988), 橿原市新沢千塚 221 号墳 (伊達宗泰編 1981) の他、大阪府柏原市の高井田山古墳 (柏原市教育委員会 1996) や木津川市の天竺堂 1 号墳などの小型古墳に採用される。大型の前方後円墳に横穴式石室が採用されるのは、6 世紀になってからである。

山城地域において最も早く横穴式石室を採用したのは、南山城の天竺堂 1 号墳 (京都府埋蔵文化財研究会 2000) である。木津川市山城町上狛天竺堂に所在する天竺堂古墳群は、木津川を望む中位段丘上に立地し、史跡高麗寺跡に隣接する。検出した 3 基の古墳のうち、丘陵南西端に立地する 1 号墳は、前方部を北に向けた全長 27m を測る前方後円墳で、後円部 2 段、前方部 1 段の築成をもつ。後円部テラス面には円筒埴輪を巡らせ、一段低い前方部には多数の形象埴輪を樹立していた。埋葬主体は南面する右片袖の横穴式石室で、玄室の内法寸法で長さ約 3.6m × 幅約 1.7m の規模をもつ。初葬では粘土床に長さ 2.7m × 幅 0.8m の船形木棺を安置し、棺内から五獣形鏡 1 枚の他、3,000 点を超すガラス玉 (栗玉・小玉), 碧玉製管玉, 瑪瑙製・琥珀製勾玉など豊富な玉類が出土した。初葬の時期は 5 世紀の末 (陶邑編年 TK 4 7) と考えられ、後に小型の組み合わせ石棺をもつ二次埋葬が 6 世紀前半 (MT 1 5) に行われている。3 号墳は周溝をもつ 1 辺約 15m の方墳で、やはり 5 世紀の末頃 (TK 4 7) に高坏を用いた墓前祭を行っているが、横穴式石室を内蔵していた可能性は低い。なお、天竺堂古墳群から木津川をはさんで対岸にある精華町森垣外遺跡 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1999b) は、この時期の渡来系工人集団が居住した集落跡である。

車谷古墳群 (山城町 1987, 山城町教育委員会 1989, 2002a, 木津川市教育委員会 2009) は、木

津川市山城町綺田車谷・地獄谷に所在する横穴式石室墳を主体とする後期の群集墳である。白鳳寺院蟹満寺の東方山中には、車谷南古墳群・光明山古墳・山際古墳群と合わせ、総数40数基の古墳を確認している（山城町教育委員会 1989）。丘陵突端部に位置する車谷42号墳は、木棺直葬の主体部や小石室と埴輪の樹立を確認しており、馬具や鉄刀などの鉄製品や玉類を副葬していた。周囲からは、TK47段階の須恵器が採取されている。近接する43号墳は、墳丘自体はすでに失われていたが、やはりTK47段階の須恵器が出土している（木津川市教育委員会 2009）。尾根の頂部に築かれた車谷2号墳は直径18mを測る円墳で、左片袖式の横穴式石室を内蔵している。石室規模は、やや胴張に玄室で長さ4.6m×幅2.0～2.2m、羨道幅0.9mを測る。MT15段階の築造である。尾根稜部に築かれた山際1号墳は、直径24mを測る円墳で円筒埴輪を樹立している。玄室幅2.2mを測る横穴式石室からはMT15ないしTK10段階の須恵器が出土している。埴輪は川西編年のV期に相当する。他には、車谷9号墳・40号墳や車谷南2号墳で横穴式石室玄室に板石を積んでいる古式の様相をもつものがある。なお、車谷2号墳南側の24号墳石室内からはTK217段階の須恵器とともに飛鳥編年Ⅲ～Ⅳの土師器が出土した。これを最終の副葬とするなら7世紀後半まで古墳としての機能がみられ、24号墳南側には小型石室をもつ単葬墓が同時期まで構築されていた（山城町教育委員会 2003）。車谷古墳群の形成はTK47段階からはじまるが、MT15段階で横穴式石室を採用して7世紀後半まで継続するのである（木津川市教育委員会 2009）。

車谷古墳群から天竺堂古墳群・千両岩古墳群（山城町 1987, 山城町教育委員会 1989）にいたる木津川市山城町域東方山中には、現在まで170基程度の後期古墳を確認しており、稠密に分布する。椿井大塚山古墳の後円部堀に置かれた須恵器もTK47段階のものであり、周囲の群集墳の形成もこの段階から始まると考えられる。しかし、天竺堂古墳群や車谷古墳群でみたように、初期の段階では横穴式石室と木棺直葬が混在あるいは木棺直葬が先行しており、群集墳としての出発時期と横穴式石室の導入時期にはやや時間差が存在するようである。

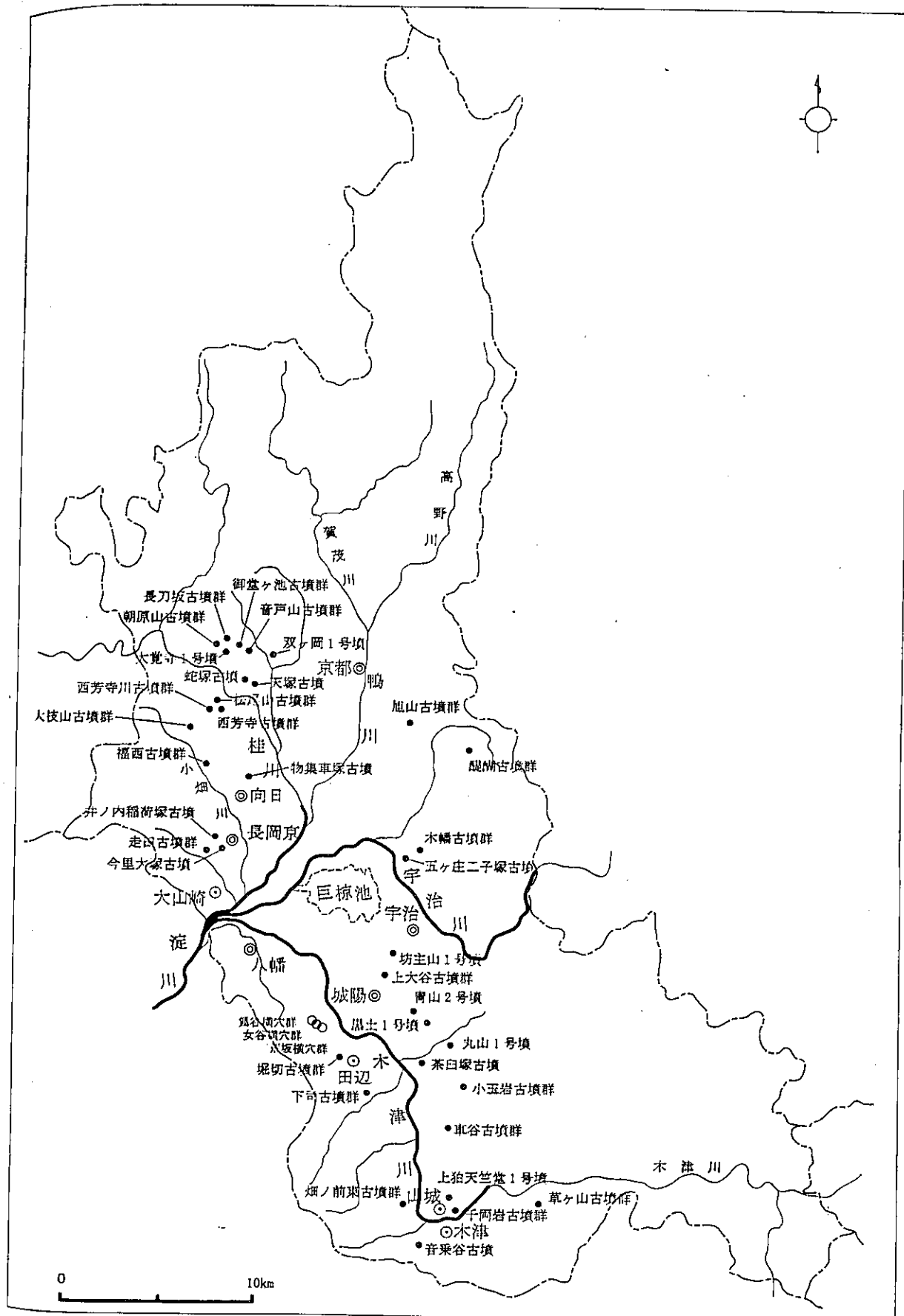
久津川古墳群南側に近接する城陽市胃山古墳群のうち2号墳は、左片袖式の横穴式石室を内蔵した小型の前方後円墳である。胃山古墳群に7基の古墳が確認されているが、2号墳が最も古く、MT15段階から群集墳が形成される。青谷地区では黒土1号墳（城陽市教育委員会 2001）が巨石を使用した両袖式の横穴式石室を内蔵しており、MT85からTK43段階の築造であり、この時期の首長墳と考えられる。また、綴喜郡井手町の小玉岩古墳群（井手町教育委員会 1979）は、標高310mの丘陵頂部付近に築かれた列石をもつ終末期の小方墳群である。木津川市山城町の神童子稲葉古墳群（山城町教育委員会 1989）のうち稲葉5号墳（山城町教育委員会 2001）は、右片袖式の横穴式石室内に組み合わせ式石棺をもつ7世紀中頃の楕円形墳である。城陽市南半部の青谷から木津川市山城町までの木津川右岸域は、小型の横穴式石室墳を主体とする群集墳が広範囲に形成されている。その期間は、5世紀の末から7世紀代の長期間におよぶのである。

木津川左岸域では、右岸域より遅れて横穴式石室を主体とする群集墳が形成される。相楽郡精華町の畑ノ前古墳群（精華町教育委員会, 財団法人 古代学協会 1987）、畑ノ前東古墳群（精華町 1996）

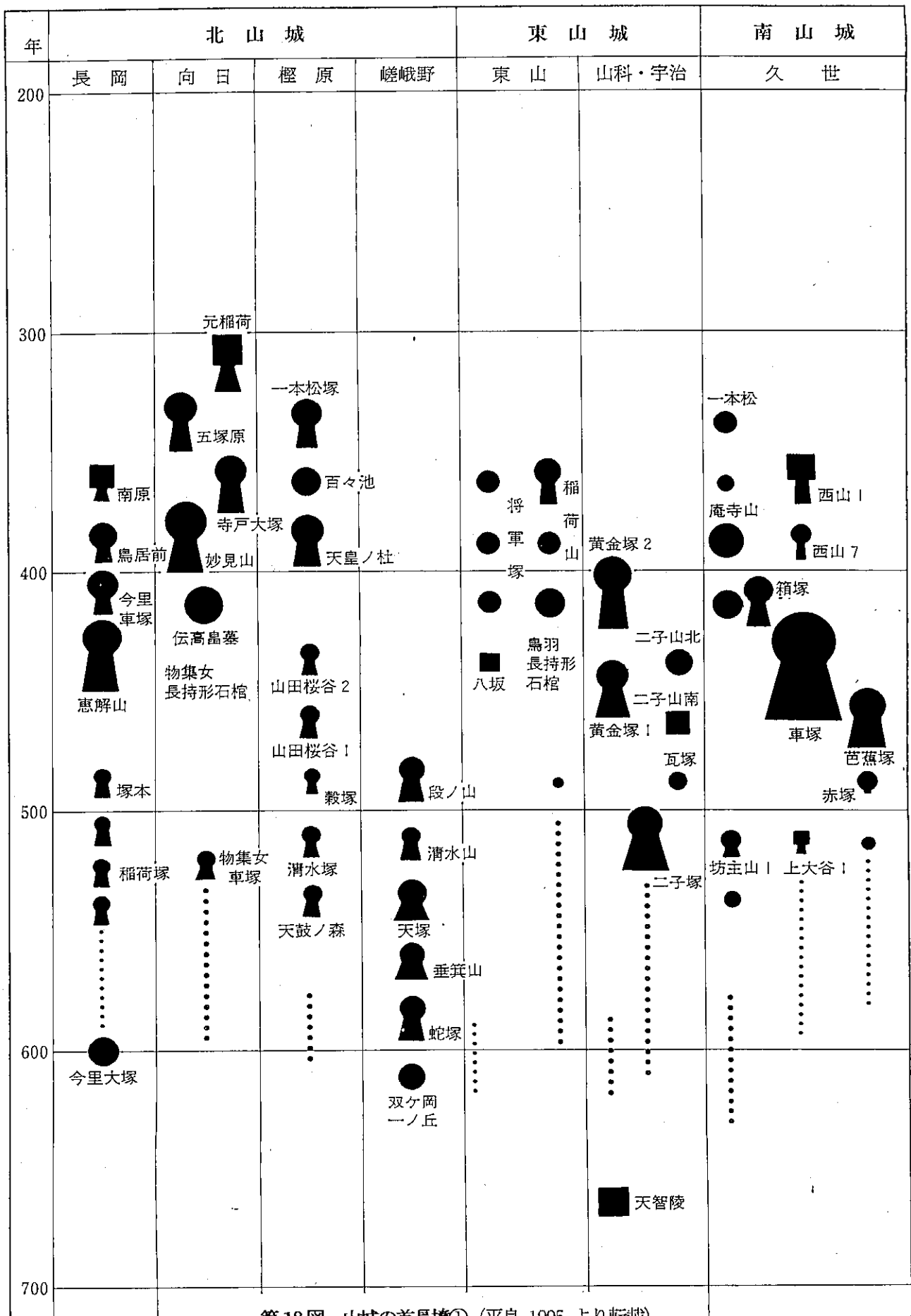
は10数基の横穴式石室墳で構成されており、6世紀後半～7世紀前半にかけて営まれた小型円墳を主体とする群集墳である。埋葬主体部の確認できる畑ノ前3・4・7号墳は右片袖式の横穴式石室をもち、壁材として花崗岩の割石を使用している。畑ノ前東4・5号墳は畑ノ前3・4・7号墳と同様に花崗岩の割石を使用した横穴式石室で、畑ノ前東3号墳は木棺直葬、畑ノ前東1・2・7号墳は川原石を使用した胴張の両袖式横穴式石室を内蔵する。この石室の川原石は炭道部から墳丘裾を連続して巡っており、特殊な構造をもつ。花崗岩割石積みの石室墳は6世紀代、他は7世紀代のものである。なお、使用している花崗岩は、木津川右岸域の石材であることがわかっている（山城町教育委員会 2002a）。

綴喜郡域の京田辺市の下司古墳群（同志社大学校地学術調査委員会 1985）は普賢寺に隣接しており、横穴式石室を主体とする8基の小円墳からなる群集墳である。下司6号墳は両袖式の花崗岩割石を用いた小石室を内蔵し、7世紀前半の単次葬墓である。京田辺市大住の一休寺北方にある掘切古墳群（田辺町教育委員会 1989、京田辺市教育委員会 2006）は、10基の横穴式石室墳と10基の横穴が混在している。この古墳群より北方の綴喜郡北半部は、横穴墓の卓越する地域である。



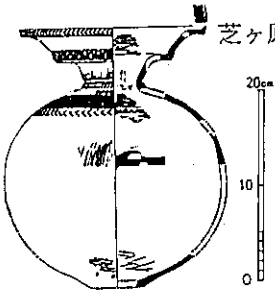












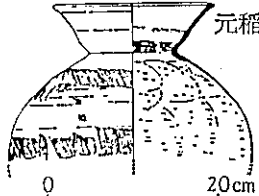
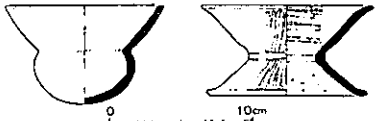




















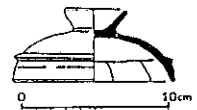
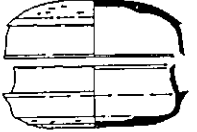




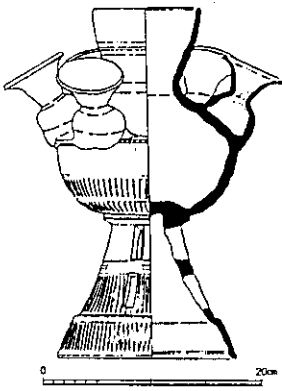
山城地域における横穴式石室の導入は、5世紀末（TK47）の天竺堂1号墳で先駆的に開始され、6世紀前半（MT15）には南山城の群集墳に採用されて拡散する。この時期には北山城の宇治二子塚古墳で卓越した首長墳に横穴式石室が採用され、本格的に北山城の首長系譜に採用されるのは6世紀後半（TK10）以後である。南山城では、卓越した首長墳は存在しないが、中期古墳の不在地域である木津川右岸の久世郡南部から相楽郡域で積極的に新たな墓制としての横穴式石室が採用され、やや遅れて木津川左岸の相楽郡域から綴喜郡南半部に拡散していくのである。



第 17 図 山城の後期古墳分布図 (内田 2007 より転載)

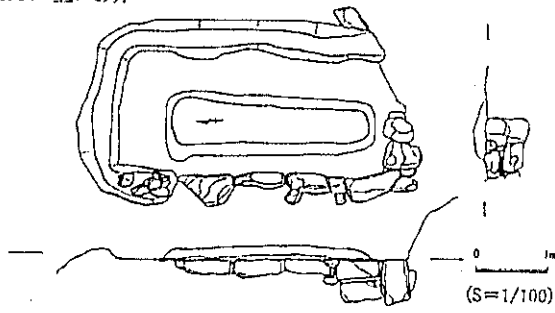


第18図 山城の首長墳① (平良 1995 より転載)

南 山 城			参考とする古墳	備 考
久 世	綴 喜	相 楽		
芝ヶ原12 		砂原山 	黒田 箸墓	芝ヶ原12 
尾塚4  	梅ノ子塚  茶臼山  西車塚  ヒル塚  大住南塚  飯岡車塚 	椿井大塚山  平尾城山  鞍岡山  瓦谷1 	伝日葉酢媛陵	元稲荷  平尾城山 
芝ヶ原11      宮ノ平   	石不動  東車塚  王塚  車塚 	       	コナベ	南栗ヶ塚  上人ヶ平6 
  長池	青山1  丸山1 	今城塚 見瀬丸山	大江山22 
				縮尺 0 200m

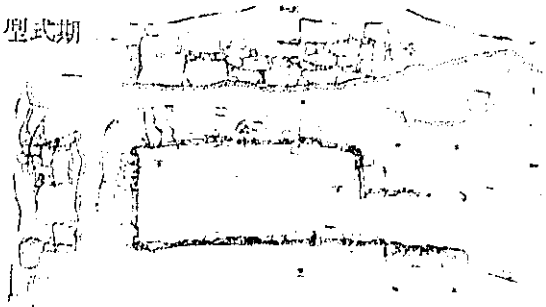
第19図 山城の首長墳② (平良 1995 より転載)

TK47 型式期



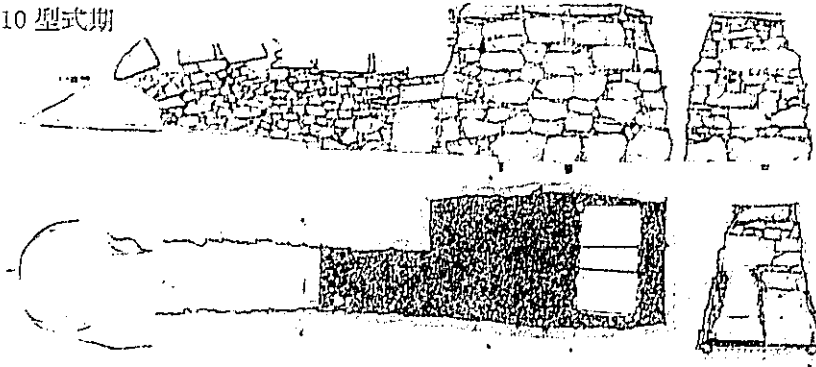
上狛天竺堂 1号墳

MT15 型式期



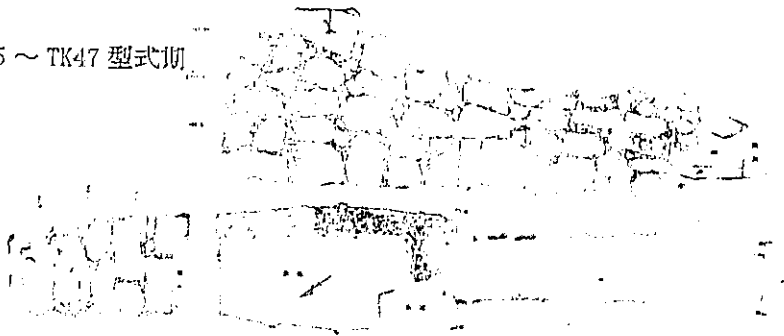
車谷 2号墳

TK10 型式期



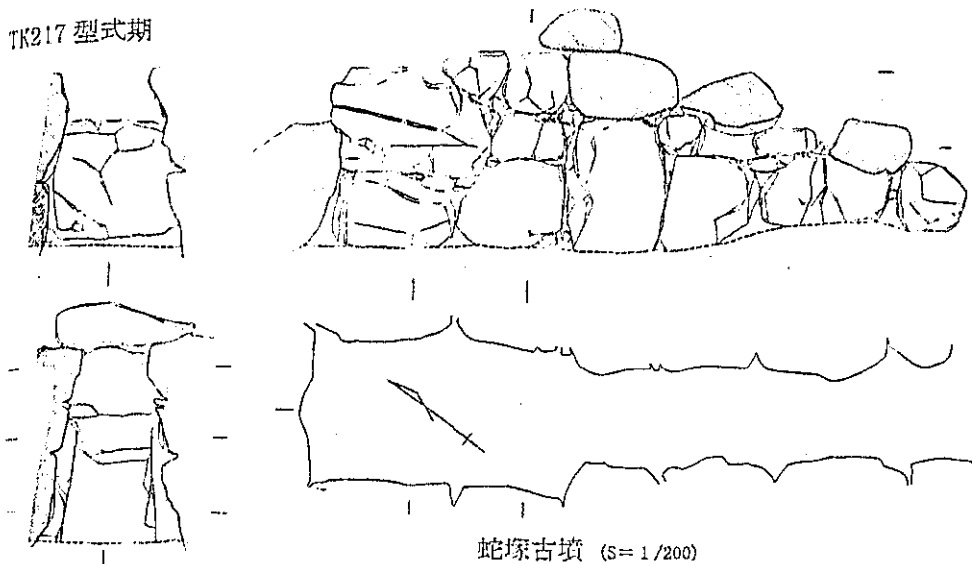
物集車塚古墳

MT85 ~ TK47 型式期

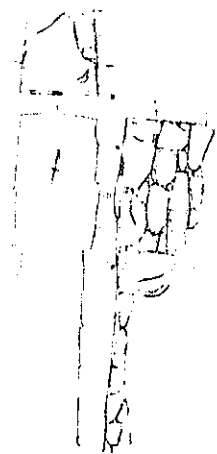


黒土 1号墳

TK217 型式期



蛇塚古墳 (S=1/200)



下司 2号墳
(S=1/160)

第 20 図 山城の横穴式石室 (内田 2007 より転載)

第二節 南山城における古代氏族

1. 南山城の範囲

京都市以南の旧山城国は、ほぼ宇治川から淀川をさかいとして、北半を北山城、南半を南山城と呼ぶ。したがって、南山城の範囲は、旧巨椋池以南の木津川流域をさすものとする事ができる。しかも、どうやら律令制以前にヤマシロと呼ばれた地域は、この南山城の地であった。このことは、『日本書紀』神功皇后摂政元年3月5日条に、忍熊王を撃とうと進軍した武内宿禰の記事で、宇治川北岸の菟道の地と山背の地を区別していることや、『日本書紀』仁徳天皇30年9月11日条で、現在の木津川をヤマシロ川とよんでいることからわかる。

山城国は、はじめ「山代国」と記されていたが、大宝令の制定(701年)とともに「山背国」と表記が変わり、延暦13年(794)の平安遷都によって「山城国」と改まる。10世紀前半に完成した『延喜式』や『和名類聚抄』によれば、山城国に乙訓・葛野・愛宕・紀伊・宇治・久世・綴喜・相楽の八郡の存在が記されているが、これらの郡域はすでに8世紀初頭には成立していたものと考えられる。なお、このうち久世・綴喜・相楽の三郡が南山城に含まれるのである。

2. 南山城の古代氏族

[久世郡]

栗隈(前)氏(栗隈県主)、山背氏(山代国造)、石作氏、水尾氏、黄文氏、並栗氏、日下部氏、六人部氏、秦氏、三輪栗隈氏、水主氏、奈癸氏、葉栗氏、巨椋氏、息長竹原氏、榎室氏

久世郡での居住が明らかな氏族のうち、栗隈(前)氏、山背氏については、律令制以前の倭王権の地域支配の名残として、県主・国造という在地首長名が記されており、貴重である。栗隈県については、『日本書紀』仁徳天皇12年10月条に、「大溝を山背の栗隈に掘りて田に潤く」とあり、栗隈の地は後の栗隈(前)郷で、現在の宇治市広野町・大久保町付近にあたる。山代国造については、『日本書紀』卷第一に、山代直らの祖として「天津彦根命」(『古事記』上巻では「天津日子根命」)を記しており、後の水主郷(城陽市水主付近)の式内社である水主神社に、御祭神として「水主坐山背大国魂命」の名がみえる。この地域は、古墳時代後期には前節でみたように、横穴式石室の導入に消極的で「木棺直葬に固執する地域」にあたる。

黄文氏については、『新撰姓氏録』(山城国・諸蕃・高麗)から高句麗系渡来氏族であり、『日本書紀』推古天皇十二年(604)9月是月条には、「始めて黄書画師・山背画師を定む」とあり、高句麗系渡来人である。また、『日本書紀』欽明天皇二十六年(565)五月条によると、奈羅(八幡市上奈良・下奈良付近)にも高句麗系渡来人の分布していたことがわかる。なお、『新撰姓氏録』には、水主氏、奈癸氏、葉栗氏、巨椋氏、息長竹原氏といった、それぞれ水主郷、那紀郷、羽栗郷、巨椋・麻倉郷竹原里といった郷名・地名を負う氏族がいた。

[綴喜郡]

隼人氏（隼人系氏族）、内氏、石作氏、葦屋氏、錦部氏、甲作客氏、粟田氏、高井氏、多々良氏

綴喜郡では、大住郷（京田辺市大住付近）に関係すると考えられる「隼人計帳」（『正倉院文書』）がある。ここには、隼人系氏族の他に内氏、石作氏、葦屋氏が記されている。この地域以北は、古墳時代後期には前節でみたように、横穴墓の卓越する地域である。

『新撰姓氏録』によると、高井氏、多々良氏といった、それぞれ多可郷、多々羅といった郷名・地名を負う氏族があり、高井氏は高句麗系、多々良氏は任那系の渡来氏族である。また、『古事記』仁徳天皇条には、筒城の韓人の記述があり、百済系渡来人の居住もあったようである。

[相楽郡]

掃守氏、阿刀氏、鴨氏、狛氏、稲峰間氏、客氏、日奉氏、綾部氏、山村日佐氏、出水氏、福当氏、額田氏、土師氏、橘氏、綺氏

掃守氏は相楽郡令、阿刀氏は祝園郷長として名がみえ、賀茂郷の鴨氏、大狛郷・下狛郷の狛氏、稲峰間氏は祝園郷の稲峰間の地名を負う氏族である。山村日佐氏は『新撰姓氏録』で山城国・皇別としているが、百済系渡来氏族である。また、『新撰姓氏録』によると、出水氏、福当氏は左京・諸藩下・高麗で、狛氏と同じ高句麗系渡来氏族である。この地域は、古墳時代後期には前節でみたように、横穴式石室を積極的に導入した地域である。

土師氏は、現在の木津川市に東吐師・西吐師の地名を残しており、綺氏は綺郷（綺田）の地名を、橘氏は綺郷に別業をかまえてここを本拠地としていた。

3. 南山城の白鳳以前建立寺院と古代氏族

[久世郡]

広野廃寺（宇治市）、平川廃寺（城陽市）、久世廃寺（城陽市）、正道廃寺（城陽市）

[綴喜郡]

西山寺跡（八幡市）、志水廃寺（八幡市）、興戸廃寺（京田辺市）、三山木廃寺（京田辺市）、普賢寺跡（京田辺市）、山滝寺（宇治田原町）

[相楽郡]

下狛廃寺（精華町）、里廃寺（精華町）、蟹満寺（木津川市）、松尾廃寺（木津川市）、高麗寺（木津川市）、燈籠寺廃寺（木津川市）、

以上の古代寺院の造営氏族としては、下記の組み合わせが想定されている。

広野廃寺 — 栗隈（前）氏

平川廃寺 — 黄文氏

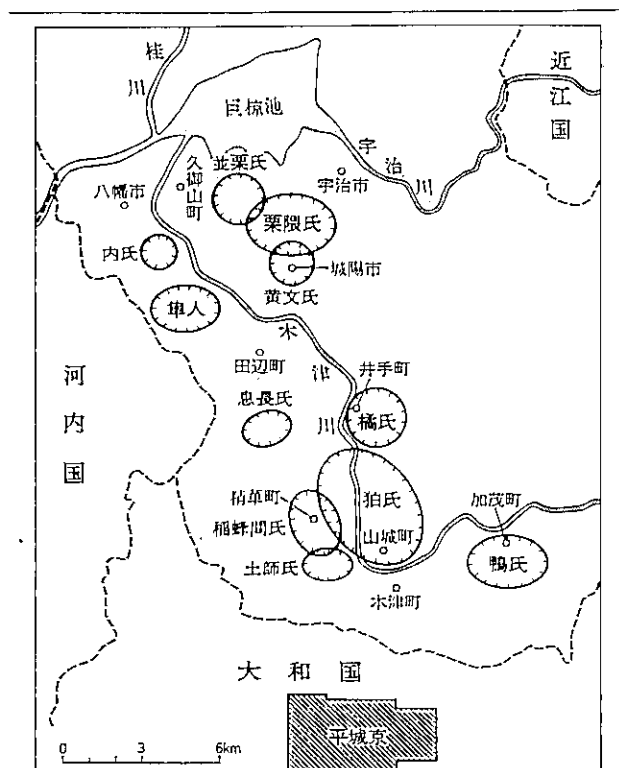
平川廃寺、久世廃寺、正道廃寺 — 山背氏

志水廃寺 — 内氏

普賢寺跡 — 息長氏、百済系渡来氏族（筒城の韓人）、多々良氏（任那系の渡来氏族）

燈籠寺廢寺 一 出水氏

南山城における横穴式石室導入の様相は、そのまま仏教の受容に反映しているのである。



53

第三節 南山城における古墳と寺院

1. はじめに

はじめ「山代国」と記されていたこの地域は、大宝令(701年)の制定により「山背国」と表記が変わり、延暦13年(794)の平安遷都によって、さらに「山城国」と改まる。『延喜式』や『和名類聚抄』によると、山城国に葛野・乙訓・愛宕・紀伊・宇治・久世・綴喜・相楽の八郡の存在が記されているが、これらの郡域はすでに8世紀初頭には定まっていたようである。

ただ、どうやら律令制以前にヤマシロと呼ばれた地域は、現在の南山城でも久世・綴喜・相楽の三郡地域をさしていた。したがって、ここでは、北山城(背)と南山城(背)の区分を、北部五郡と南部三郡に分け、以下、記述していくこととする。

平安遷都前の山背国内には、現在まで約50の寺院が確認されている(第23図)。その分布は、多少の疎密はあっても各郡にくまなく配されており、北山背と南山背でほぼ同数の寺院が存在したようである(第22図)。とはいえ、それらの創建時期や出土する軒瓦などの様相は異なり、そこには、創建氏族の違いや時の中央政権とのかかわりの度合いが、当然反映しているものと考ええる。なお、これらのうち、その創建に渡来系氏族とのかかわりが想定できる寺院は、約半数にのぼる。

ここでは、まず、山背国内の寺院造営の過程を、主として出土する軒瓦の様相から概観し、渡来系氏族に係わる特色を抽出する。その上で、寺院周辺に所在する後期古墳の在り方を検討し、渡来系氏族の要素として、寺院と古墳との有機的な結合を図ることを試みたい。なお、以下、時期を特定する場合を除き、国名表記はすべて山城として記す。

2. 山城国の寺院造営

山城国の寺院造営は、北山城は葛野郡の北野廃寺(藤沢一夫 1938)と南山城は相楽郡の高麗寺(梅原末治 1939a, 田中重久 1938a・1944a, 山城町教育委員会 1989, 木津川市教育委員会 2011)で、ほぼ同時期に開始される。その時期は、蘇我氏の氏寺・飛鳥寺の造営が終了する前後の時期、7世紀第I四半期のことである。しかも、両寺とも、渡来系氏族・秦氏と高麗氏の両拠点に営まれた。

A. 北山城の寺院造営

京都盆地を中心とする北山城は、新羅系渡来氏族・秦氏の圧倒的な勢力圏である。その渡来時期は、応仁朝(5世紀初頭)と考えられ、現在も「太秦」の地名を残し松尾大社のある葛野郡がその拠点となる。この地に営まれた北野廃寺は、『日本書紀』推古天皇11年(603)条にみる、秦河勝創建の蜂岡寺に比定され、蜂岡寺を広隆寺の前身(元広隆寺)とする『広隆寺縁起』では、推古天皇30年(622)の建立としている。

創建期の軒瓦には、蘇我氏の氏寺・飛鳥寺の創建瓦(素弁十弁蓮華文軒丸瓦)に酷似した桜花弁式(花組)のものが3型式(第24図1)あり、他に所謂高句麗系の素弁八弁のもの(第24図2)が知られている。

この高句麗系の製品は、愛宕郡の幡枝元稻荷窯で生産され、范型は宇治郡の隼上り窯（宇治市教育委員会 1983）から移動している。しかも、この隼上り窯で生産された他の高句麗系の製品は、蘇我氏との関係が想定される大和の豊浦寺所用瓦である。

続いて、葛野郡に広隆寺（田中重久 1944b）が創建される。北野廃寺が元広隆寺であるか否かは別として（網伸也 1995）、現広隆寺が秦氏の寺であることは疑いない。創建期の軒丸瓦には、素弁八弁のものが3型式あり、うち2型式（第24図3）が飛鳥寺という星組の末裔で、他は高句麗系のもの（第24図4）である。いずれも北野廃寺の製品より後出的で、瓦当文様の系譜にも違いがみられる。他には、表採資料として、乙訓郡の柄岡廃寺（小田切淳 1987）と山崎廃寺（林享 1987）で7世紀前半の軒瓦が出土している。なお、柄岡廃寺の資料は、河内国茨田郡の楠葉平野山窯跡（平野山窯、楠葉東遺跡第五瓦窯跡）（財）枚方市文化財研究調査会 1980、八幡市教育委員会 1985）の製品である可能性が高いという。

北山城においては、確実に7世紀前半まで遡り得る寺院は、今のところ北野廃寺と広隆寺以外にはない。他は、7世紀第IV四半期以後の創建と考えられ、乙訓郡の二寺がやや遡り得る可能性を残すにすぎない。このことは、この地域の寺院造営の初期において、蘇我氏と関係を持ち得る程の氏族、あるいは、仏教文化を積極的に受容すべき氏族が、秦氏以外になく、しかも、秦氏の影響力が絶大であったことによるのであろうか。

7世紀の第IV四半期以後、北山城の寺院造営は一気に活発化する。その嚆矢となるのが愛宕郡の北白川廃寺（梅原末治 1939b）である。この寺跡は和爾氏と同族の栗田氏の氏寺と考えられている。創建時に使用された山田寺式の軒丸瓦（第24図8）は、山背国で出土する山田寺式の最古型式で、後に特異な周縁文様をもつ「北白川廃寺式」（山田寺垂式）の祖型となる。なお、北白川廃寺式の製品の一部は洛北の岩倉窯（財）京都市埋蔵文化財研究所 1980, 1996）で生産され、北野廃寺や広隆寺でも出土する。愛宕郡は鴨県主（鴨氏）の勢力圏とされるが、栗田氏の他に、出雲氏の氏寺・出雲寺や高句麗系渡来氏族の八坂造氏の法観寺（八坂寺）、山代国造氏の珍皇寺（以上、田中重久 1938b）などもあり、秦氏と混在する。なお、法観寺からは、近江地域との関連を示唆する幅線文縁の素弁軒丸瓦が出土しており、注目される。

紀伊郡は、葛野郡と並び秦氏の居住が濃厚な地域である。特に稻荷から深草にかけての地域が、その拠点と考えられ、おうせんだう廃寺・がんぜんだう廃寺・深草寺跡（以上、（財）京都市埋蔵文化財研究所 1980, 1996）がある。

宇治郡については、宇治氏の勢力圏であるが、やはり和爾氏と同族の大宅氏・小野氏や中臣氏、道守氏、百済系渡来氏族の岡屋公氏の居住が知られている。ここで注目されるのが、大宅氏の氏寺と考えられる大宅廃寺（梅原末治 1920d）である。創建期に使用された紀寺式軒丸瓦（第24図11）は、愛宕郡・紀伊郡・宇治郡に広く分布する紀寺式の祖型であり、当初、重弧文軒平瓦とセットであったものが、藤原官式の偏向唐草文軒平瓦と組み合わせられて広まった。紀寺式軒丸瓦の出土は、愛宕の北白川廃寺・法観寺、紀伊郡のおうせんだう廃寺・がんぜんだう廃寺・深草寺跡・板橋廃寺、宇治郡の大宅

廃寺・法琳寺跡・醍醐御霊廃寺（以上、財団法人古代学協会・古代学研究所編 1994）でみられる。なお、大宅廃寺の藤原宮式軒平瓦は、近江産と考えられている藤原宮 6646A 型式を模倣している。

他に、宇治郡では大鳳寺（宇治市教育委員会 1987a）が、南山背地域で濃密な分布を示す川原寺式軒丸瓦を創建期に使用しており、紀伊郡の御香宮廃寺（（財）京都市埋蔵文化財研究所 1980）とともに異質である。また、百済系渡来氏族・岡屋氏の氏寺に比定される岡本廃寺（宇治市教育委員会 1987b）は、川原寺式の亜式といえる軒丸瓦を創建期に使用している。これらの寺院には、南山背の影響がみられる。

乙訓郡については、他の氏族の存在も知られているが、秦氏の居住が濃厚な地域である。葛野郡と接する檜原廃寺（京都府教育委員会 1967a）は、八角形の瓦積塔基壇をもち、創建時には重弁八弁の特異な軒丸瓦（第 24 図 12）が使用される。この「檜原廃寺式」とも呼ばれる型式は、北野廃寺・広隆寺から出土する高句麗系の軒丸瓦か山田寺式を祖型とし、この系統は乙訓郡の宝菩提院廃寺・乙訓寺・山崎廃寺で採用され、愛宕郡の北白川廃寺でもわずかに出土する（高橋美久二 1970a）。他には秦弁系の軒丸瓦が宝菩提院廃寺（高橋美久二 1987）・乙訓寺（京都府教育委員会 1967b）・山崎廃寺で創建期に使用されており、愛宕・紀伊・宇治の三郡とは異った地域色をもつ。

B. 南山城の寺院造営

北山城の秦氏に対して、南山城は、高麗（百）氏を中心とした高句麗系渡来氏族の偏在する地域であった。秦氏らの「古渡り」に対して、雄略朝以後の「今来」の渡来人と考えられる。

『日本書紀』欽明天皇 31 年（570）夏 4 月 2 日条には、高句麗の使節が越の海岸に漂着した記事がある。この使節は、船で琵琶湖を縦断し宇治川・木津川を通して、山背の高麗館（相楽館）に迎え入れられた。南山城における寺院造営は、この古代の迎賓館に程近い相楽郡の高麗寺をもって開始される。

高麗（百）氏の氏寺とされる高麗寺跡からは、飛鳥寺の創建瓦（素弁十弁蓮華文軒丸瓦）と同範の桜花弁式（花組）のものが 2 型式（第 24 図 5）出土している。胎土・焼成とも飛鳥寺出土例に同じものがあり、飛鳥寺に供給すべく生産した製品が、高麗寺にもたらされたと考えられる。そこには、蘇我氏と高麗氏との密接な関係がうかがわれ、7 世紀第 I 四半期における創建は疑いない。

高麗寺の創建以後、南山城においては、7 世紀中頃までに各郡で寺院の造営が開始される。

まず、久世郡で注目されるのは、栗隈（前）氏（栗隈県主）と山代（背）氏（山背国造）の存在である。国県制度の実態については、種々議論のあるところであるが、いずれにしろ、大化前の古い段階で強い郡域支配が行われていた。久世郷では、近接して久世廃寺（城陽市教育委員会 1976, 1980, 1981）・正道廃寺（城陽市教育委員会 1993）・平川廃寺（城陽市教育委員会 1971, 1974, 1975）の 3 ケ寺が、7 世紀中頃までに造営を開始する。

久世廃寺の創建に使用された素弁八弁の軒丸瓦は、大和の奥山廃寺で出土する製品（第 24 図 6）と同範で、綴喜郡に接する河内国茨田郡の楠葉平野山窯の製品である。なお、この窯では、摂津四天王寺の創建瓦も焼成している。このように、久世廃寺は、楠葉平野山窯・奥山廃寺を通して蘇我氏や上宮王家と繋がりをもつ。正道廃寺からは、久世廃寺例よりやや後出的な要素をもつ同文の製品が出土し、

平川廃寺からは、飛鳥時代末期様式の素弁八弁の製品が出土している。

なお、久世郡には、高句麗系渡来氏族・黄文(書)氏の居住も知られており、平川廃寺の創建氏族にあてるとある説もある。

綴喜郡については、大住郷に関係すると考えられる「隼人計帳」『正倉院文書』があり、隼人系氏族の居住や内氏、高句麗系の高井氏、任那系の多々良氏などが存在した。また、綴喜郷は、継体天皇の簡城宮の推定地であり、息長氏の居住を推定する説がある。綴喜郡では、志水廃寺（八幡市教育委員会 1978）・普賢寺（田辺町教育委員会 1982）・三山木廃寺（田辺町教育委員会 1982）がいち早く造営を開始し、やや遅れて西山廃寺（足立寺）（八幡市教育委員会 1971）が創建される。

普賢寺・三山木廃寺から出土する素弁八弁の軒丸瓦(第24図7)は、肉厚の花弁の先端をわずかに反転させ、整った表現をもつ同範品である。

相楽郡については、大狛郷・下狛郷の高麗(狛)氏の他に、出水氏・福当氏などの高句麗系渡来氏族の存在が知られており、その濃密な分布が予想される。高麗寺の創建以後、木津川を挟んで対岸の水泉郷には、燈籠寺廃寺（木津町 1984）が造営される。創建時には、普賢寺・三山木廃寺同範例が用いられ、高麗寺よりも、むしろ綴喜郡との関連が深い。

寺院造営の初期において、南山城の様相は北山城と異なり、ほぼ三郡並立の状態と言えよう。このことは、秦氏と高麗氏の勢力の違いであり、蘇我氏との関わり方の違いとも言えようか。南山城においても、7世紀第IV四半期に伽藍造営の大きな変革が訪れる。その出発点は、やはり高麗寺から始まった。

高麗寺では、天智天皇の大津宮遷都(667)を前後して、瓦積基壇による大規模な伽藍整備が実施される。使用された軒瓦はすべて川原寺式であり、大和の川原寺創建瓦(A類)の同範例(第24図9)とその退化型式(高麗寺式)である。この高麗寺式は相楽郡を中心に分布し、郡内の蟹満寺（山城町教育委員会 1995、蟹満寺釈迦如来坐像調査委員会 2011）・松尾廃寺（天沼俊一 1926）・泉橋寺（田中重久 1938b）が同範品を、下狛廃寺（田中重久 1938b）・里廃寺（星野献二 1981, 2000）・綴喜郡の山瀧寺（宇治田原町教育委員会 2006）が同文品を用いて創建され、久世郡の正道廃寺でも同文例が採用される。なお、蟹満寺において、高麗寺式とともに大和紀寺創建瓦(第24図10)同範例が創建時に使用されており、山城国における紀寺式導入の初例となる。

他には、久世郡の平川廃寺で高麗寺式とは系譜の異なる川原寺式が採用され、同郡の広野廃寺（(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996）では、宇治郡の岡本廃寺と同様に、川原寺式正式の製品を用いて造営が開始される。

綴喜郡については、川原寺式・紀寺式ともみられず、北山城の乙訓郡同様、独自の様相を示す。

以上、山城国の寺院造営の在り方を概観した結果、

1. 大和飛鳥寺の造営以後、7世紀前半の寺院造営初期の段階
2. 近江朝遷都・壬申乱以後、7世紀後半の段階

で大きな違いが見られる。

1. 山城国の寺院造営の端緒を開くのは、渡来系氏族・秦氏と高麗氏である。その拠点は山城国の南北両端にあり、蘇我氏・上宮王家との密接な関係が伺える。ただ、その渡来時期にもよるのであるうか、両者の勢力・影響力には格段の差がある。前者が広域的であるのに対して、後者は拠点的である。北山城においては、北野廃寺・広隆寺以来、造寺活動に空白期間がみられる。それに対し南山城では、在地の勢力も大きく、久世郡では蘇我氏・上宮王家と直接的な交渉がみられ、綴喜郡では独自の勢力による造寺活動が続く。
2. 7世紀後半になると、北山城では山田寺式を採用した北白川廃寺と紀寺式を採用した大宅廃寺が拠点となり、南山城では川原寺式の高麗寺や平川廃寺、紀寺同範の蟹満寺が寺院造営・伽藍整備の拠点となる。これら標準型式の分布が、中央政権との政治的な関係を示すことは、多くの先学が認めるところである。ただ、北山城の乙訓郡と南山城の綴喜郡については、ここでも独自の展開を見せる。渡来系氏族としての性格が、在地勢力と融和・均質化した段階と言えようか。

3. 寺院造営の背景

ここでは、造寺活動の背景として、周辺に形成された古墳(主に後期・終末期古墳)を補足的に概観し、渡来系氏族との関わりをみることにする。

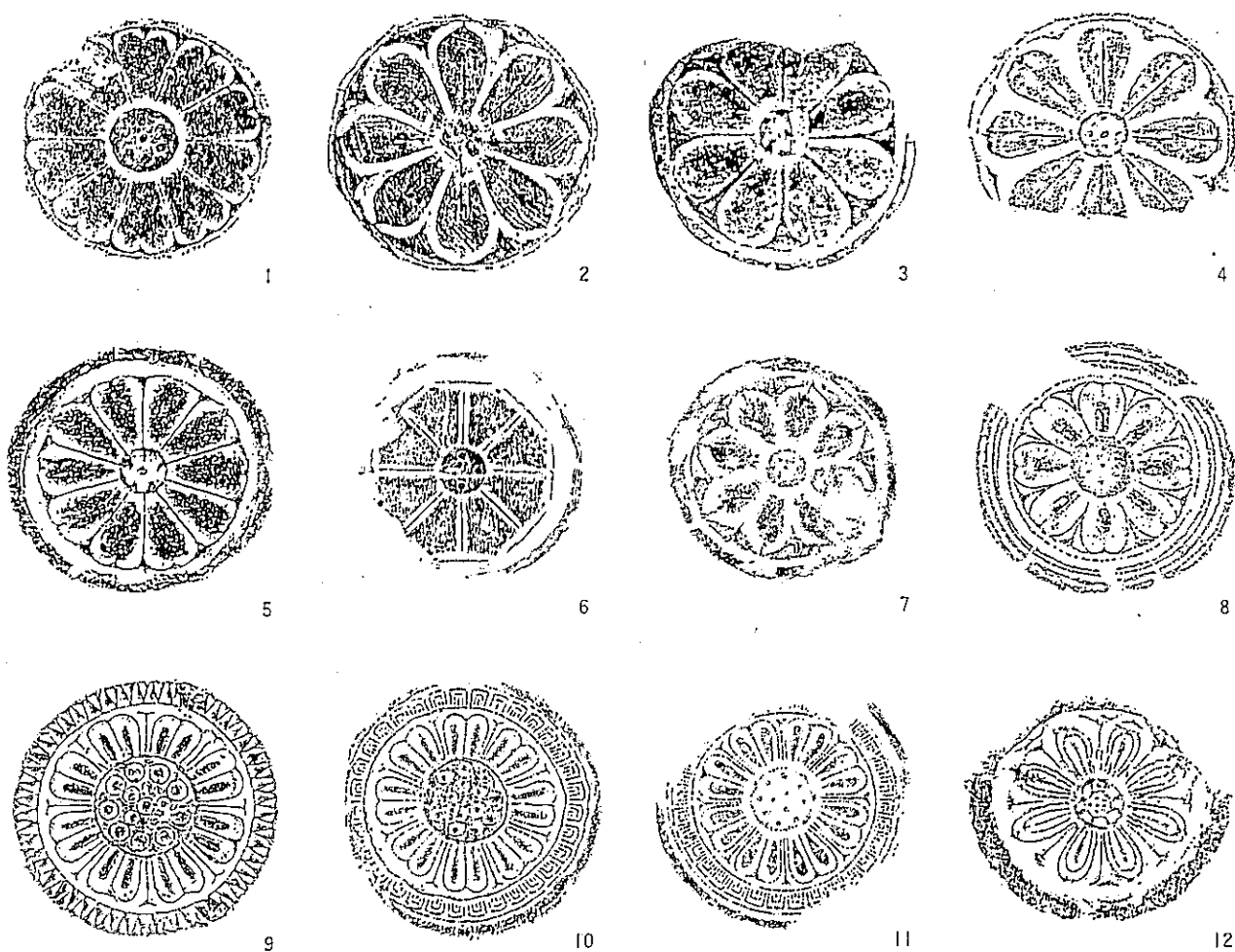
北山城では、北野廃寺・広隆寺に程近い嵯峨野丘陵一帯に、5世紀後半から突如として前方後円墳が出現する。なかでも蛇塚古墳(梅原未治編 1938)は全長70mをこし、巨大な横穴式石室が露出する。これらは秦氏の首長墓と考えられ、蛇塚古墳の被葬者を秦河勝とする説がある。それに対して桂川右岸の乙訓地域では、前期初頭の元稲荷古墳以来連綿と続く首長墓が、5世紀後半から急速にその規模を縮小する。葛野・乙訓地域では、新興の秦氏の勢力拡大と在地勢力の駆逐・融合の過程は明らかである。

また、中小の横穴式石室を内蔵する群集墳としては、桂川左岸の丘陵に御堂ヶ池古墳群(京都大学考古学研究会 1971)、福西古墳群(京都市開発局洛西開発室 1970)、音戸山古墳群(京都市文化観光局 1984)が、右岸に西芳寺古墳群(京都大学考古学研究会 1967)、大枝山古墳群(財)京都市埋蔵文化財研究所 1989b)などが形成され、西芳寺古墳群の東にある松室遺跡からは、秦氏の「葛野大堰」に関連すると考えられる大溝が検出されている。なお、御堂ヶ池古墳群、音戸山古墳群などにみられる外護列石の存在は、渡来系の技術として注目される。紀伊郡は、乙訓郡同様、前期以来古墳の築かれた地域であるが、中期の黄金塚1・2号墳以後は顕著な古墳はみられない。6世紀代において秦氏が、完全に北山城の覇権を握った結果であろう。

宇治郡では、山科盆地周辺に旭山古墳群(財)京都市埋蔵文化財研究所 1981)、醍醐古墳群(京都市文化観光局 1986)、中臣十三塚古墳群(京都市文化観光局 1985)など後期から終末期にかけての群集墳が形成される。特に旭山古墳群、醍醐古墳群は、7世紀代の横穴式石室をもつ小型方墳がほとんどで、列石はなく周溝で区画する。類例は近江の横尾山古墳群などにみられるが、音戸山古墳群と

郡名	番号	寺院名	法号・別名・推定寺院名	所在地	発願者・造営氏族・その他	創建年代
葛野郡	1	北野廃寺	蜂岡寺(本広隆寺) (野寺・常住寺・願室)	京都市北区北野白梅町	秦河勝・秦氏	7世紀第Ⅰ四半期 (推古11or30)
	2	広隆寺	秦公寺・蜂岡寺・葛野寺・ 葛野秦寺	京都市右京区太秦蜂岡町	秦河勝・秦氏 秦氏寺？ 大酒神社	7世紀第Ⅱ四半期 (移転？)
乙訓郡	3	檜原廃寺		京都市右京区檜原内垣外町	八角瓦積塔基壇(高麗系)	7世紀第Ⅳ四半期
	4	南春日町廃寺		京都市西京区大原野春日町	秦氏？石作氏？大蔵神社	8世紀
	5	吉備寺廃寺		向日市上植野吉備寺	秦氏？長岡郷	8世紀？
	6	宝菩提院廃寺	仏基林山願徳寺・座光堂	向日市寺戸西垣内	秦氏？長岡寺？向神社	7世紀第Ⅳ四半期
	7	乙訓寺	法皇寺・法皇禪寺	長岡京市今里	秦氏？六人部氏？乙訓神社	7世紀第Ⅳ四半期
	8	新岡廃寺		長岡京市友岡	田辺氏？百済系？新岡郷	7世紀第Ⅰ四半期？
	9	山崎廃寺	観音寺	大山崎町大山崎	秦氏？山崎郷	7世紀第Ⅱ四半期？
	10	山崎院跡		大山崎町大山崎	塔心礎	8世紀？
愛宕郡	11	出雲寺跡	御霊寺	京都市上京区御霊堅町	出雲氏 上御霊神社	7世紀末～8世紀初
	12	北白川廃寺	粟田寺・円覚寺？	京都市左京区北白川大堂町	粟田氏(王仁系)百済系	7世紀第Ⅲ四半期？
	13	法親寺	八坂寺	京都市東山区八坂上町	八坂造・高麗系 八坂の塔	7世紀第Ⅲ四半期？
	14	珍皇寺	愛宕寺・來定寺	京都市東山区小松町	山代淡海・山代氏？	8世紀
紀伊郡	15	おうせんどう廃寺	法禅院・檀尾寺	京都市伏見区深草鞍ヶ谷町	行基創建？稻荷神社	7世紀末～8世紀初
	16	がんせんどう廃寺	法恩寺	京都市伏見区深草谷口町	判大納言の道場？	7世紀末～8世紀初
	17	深草寺跡	法長寺	京都市伏見区深草田谷町	行基創建？	7世紀末～8世紀初
	18	板橋廃寺		京都市伏見区醍醐下板橋町	秦氏？	7世紀末～8世紀初
	19	御香宮廃寺		京都市伏見区桃山御香宮	秦氏？御香宮神社	7世紀末～8世紀初
宇治郡	20	大宅廃寺	大宅寺・山階寺	京都市山科区大宅鳥井脇町	中臣鎌足・中臣(藤原)氏？ 大宅氏(王仁系)百済系	7世紀第Ⅳ四半期
	21	元屋敷廃寺		京都市山科区大塚本屋敷町	宇治氏？	7世紀末～8世紀初
	22	法琳寺跡		京都市伏見区小栗栖北谷町	定恵・藤原氏？常暁	7世紀第Ⅳ四半期
	23	醍醐御霊廃寺		京都市伏見区醍醐西大路町	藤原氏？宇治氏？	7世紀末～8世紀初
	24	小野廃寺		京都市伏見区醍醐大高町	小野氏(王仁系)百済系	7世紀末～8世紀初
	25	岡本廃寺		宇治市五ヶ庄岡本	岡屋公氏(岡屋郷)・百済系	7世紀末～8世紀初
	26	大鳳寺跡		宇治市菟道西中	宇治氏？	7世紀第Ⅳ四半期
久世郡	27	広野廃寺		宇治市広野東裏	栗隈氏(栗隈県主)栗前郷	7世紀末～8世紀初
	28	平川廃寺		城陽市平川古宮	黄文氏・高麗系 久世郷	7世紀第Ⅱ四半期
	29	正道廃寺		城陽市寺田正道	山背氏(山代国造)久世郷	7世紀第Ⅱ四半期
	30	久世廃寺		城陽市久世芝ヶ原	山背氏(山代国造)久世郷 久世神社	7世紀第Ⅱ四半期
綴喜郡	31	西山廃寺(足立寺)	(河内国茨田郡楠葉郷)	八幡市八幡男山長沢	和氣清磨？	7世紀第Ⅲ四半期
	32	志水廃寺		八幡市八幡月夜田	有智郷・内氏？	7世紀第Ⅱ四半期
	33	美濃山廃寺		八幡市美濃古寺	有智郷・内氏？内神社	7世紀末～8世紀初
	34	興戸廃寺		京田辺市興戸山添	中臣酒屋連氏 酒屋神社	7世紀末～8世紀初
	35	普賢寺(簡城寺)	長息山普賢教法寺 (観心山親山寺・観音寺)	京田辺市普賢寺下大門	長息氏・新羅系 良弁 (簡城の韓人)・百済系 多々良公氏・任那系	7世紀第Ⅱ四半期
	36	三山木廃寺		京田辺市宮津佐牙垣内	山本郷・高麗系？	7世紀第Ⅱ四半期
	37	山瀬寺跡		宇治田原町荒木	田原郷	7世紀第Ⅳ四半期
相楽郡	38	井手寺跡	円提寺	井手町井出西高月	橘諸兄・橘氏	8世紀
	39	里廃寺	百済寺・法光寺	精華町下柏里垣外	恵井 下柏郷(高麗系)	7世紀第Ⅱ四半期
	40	下柏廃寺	柏寺	精華町下柏拝田	山村？下柏郷(高麗系)	7世紀第Ⅳ四半期
	41	蟹満寺	蟹満多寺・紙幡寺・蝦蟇寺・ 栗上寺・蟹幡寺	木津川市山城町綺田浜	秦河勝・和賀・秦氏？ 高麗系？綺郷(綺氏？)	7世紀第Ⅳ四半期
	42	松尾廃寺		木津川市山城町椿井松尾	大柏郷(高麗系)	7世紀第Ⅳ四半期
	43	高麗寺跡	柏寺	木津川市山城町上柏高麗寺	柏僧恵弁・柏氏・高麗系	7世紀第Ⅰ四半期
	44	泉橋寺	橋寺・泉橋院	木津川市山城町上柏西下	行基 大柏郷(高麗系)	7世紀第Ⅳ四半期
	45	燈籠寺廃寺	(山背国分尼寺)	木津川市木津宮ノ裏	水泉郷・出水氏(高麗系)	7世紀第Ⅱ四半期
	46	鹿山寺跡		木津川市鹿背山古寺	水泉郷	8世紀
	47	樋ノ口遺跡	山田寺？	木津川市相楽城西	土師郷・土師氏・稲蜂間氏	8世紀
	48	神雄寺跡	(馬場南遺跡)カムノヲ寺？ (山背国分尼寺・猿原離宮)	木津川市木津天神山・糠田	橘氏・光明皇后	8世紀
	49	法華寺野遺跡		木津川市加茂町法花寺野西	加茂郷・加茂氏 瓦窯	8世紀
	50	山城国分寺跡		木津川市加茂町例幣中切	恭仁郷 恭仁宮	8世紀
	51	釈迦寺跡		木津川市加茂町西小上	白鳳小金銅仏出土	7世紀末？
	52	笠置寺		笠置町笠置笠置山		7世紀後半？

第23図 山城の古代寺院一覧



1・2 北野廃寺, 3・4 広隆寺, 5・9 高麗寺跡, 6 大和奥山廃寺 (久世廃寺同范), 7 三山木廃寺 (普賢寺, 燈籠寺廃寺同范), 8 北白川廃寺, 10 大和紀寺跡 (蟹満寺同范), 11 大宅廃寺, 12 檜原廃寺

第三章 仏教の受容と渡来人

はじめに

『日本書紀』雄略天皇7年(562)年(歳条)には、百済からの渡来技術者らを「今來才伎」(イマキノテヒト)と記し、「陶部高貴、鞍部堅貴、画部因斯羅、錦部定安那錦、訳語(オサ)卯安那ら」を「新漢」(イマキノアヤ)としている。この5世紀後半の渡来人をあえて「今來」と表現する意識は、それ以前の渡来人を「古渡」とみなす『日本書紀』編者の観念が反映してだけではなく、この時期の技術革新の様子を表していると言えよう。陶部は須恵器生産の技術者であり、須恵器自体は5世紀の早い時期に後の畿内でも生産を開始しているが、5世紀の末には広く普及することとなる。鞍部は馬具などの金属加工にかかわる工人集団であり、馬の飼養にも大きく貢献したであろう。画部は絵かき集団であり、宮殿の荘厳に活躍したものと考えられ、錦部は綾や錦といった複雑な織物技術の発展に活躍したようである。ここで注目すべきは、「訳語卯安那」が「今來才伎」に入っていることである。訳語は通訳の技術だけではなく、漢字を媒介とする記録や外交に大きく貢献したことは疑いない。列島における歴史認識の成立にはたした渡来人の役割は、極めて大きいのである(上田正昭 1985, 1991)。「獲加多支箇(ワカタケル)」の時代に「稻荷山古墳出土金錯銘鉄剣」や「江田舟山古墳出土銀錯銘太刀」などの金石文が列島内に出現することは、決して偶然ではない。この時代以後の記録(伝承)が、後の『日本書紀』『古事記』『万葉集』などの編纂の基礎となったと考えられるのである。

飛鳥時代の仏教の担い手として、渡来系の人々の存在が大きいことは、すでに多くの先学が指摘しているところである(田村圓澄 1969)。『日本書紀』敏達天皇13年(584)、蘇我馬子が百済伝来の弥勒などを請うけ、鞍部村主司馬達等と池部直氷田に修行僧を探させ、高麗の還俗僧恵便を師として司馬達等の娘嶋、漢人夜菩の娘豊女、錦織壺の娘石女を出家させた。ここに登場する鞍部村主司馬達等は、雄略朝に渡来した「新漢鞍部堅貴」の子孫かどうかは定かではないが、村主は漢人に多い姓である。池部直氷田は、東漢氏一族であり、恵便や尼となる三人の少女を含め、すべて渡来系氏族である。また、崇峻天皇元年(588)にはじまり推古天皇4年(596)に完成したとする法興寺(飛鳥寺)に居住した僧は、高句麗僧の慧慈と百済僧の慧聰であり、本尊の釈迦如来坐像の製作は鞍作鳥である。なお、「元興寺露盤銘」では鞍部伽羅爾、山西(カワチ)都鬼としているが、いずれにしても渡来系の仏師なのである。飛鳥時代ばかりではなく、天平時代においても渡来系の人々は仏教の発展に大きく貢献している。

本章では、まず、推古朝の寺46所の実態について確認し、仏教文化受容に果たした渡来人の役割について考えてみる。その上で、彼ら渡来人の末裔についても、技術者集団としての側面からその足跡を追ってみることとする。

第一節 高麗寺と推古朝の寺四十六所

1. はじめに

欽明朝における所謂「仏教公伝」以後、七堂伽藍を備えた列島最初の寺院として飛鳥寺が建立される。『日本書紀』推古天皇 32 年 (624)、「三宝興隆詔」から 30 年後のこの年に寺と僧尼を調査したところ、寺院総数四十六所、僧八百十六人、尼五百六十九人、併せて一千三百八十五人いたと記している。

この四十六所の比定については、戦前に石田茂作が遺跡遺物の考古学的研究で知りうるもの四ヶ寺、文献から知りうるもの三ヶ寺、計四九ヶ寺の飛鳥時代建立寺院をあげている (石田茂作 1944)。戦後では、福山敏男が推古・舒明朝のころと推定しうるもの十四、飛鳥末から白鳳初期のもの二二、白鳳初期のもの十九の計五五ヶ寺をあげ (福山敏男 1968)、稲垣晋也は、飛鳥時代前期と推定しうる寺院一六 (大和 10, 山城 2, 河内 3, 摂津 1)、飛鳥時代後期 (太子没後) と推定しうる寺院一九 (大和 10, 山城 2, 河内 5, 播磨 1, 備中 1) をあげている (奈良国立博物館 1970, 稲垣晋也 1971)。

この飛鳥寺造営を契機とした寺院造営の波及は、山城 (代) 国において、南端の相楽郡高麗寺と北端の葛野郡北野廃寺から開始される。しかも、その當まれた地は、高句麗系渡来氏族伯 (高麗) 氏と新羅系渡来氏族秦氏の両拠点であった。そして、その時期は、高麗寺跡から出土する飛鳥寺創建期軒丸瓦同范例からみて、7 世紀初頭にはすでに開始されており、あたかも飛鳥寺造営が示す仏教文化受容の確実な合図を待っていたかの様相を呈している。その後、山城国内では、相楽郡に隣接する久世郡、葛野郡に隣接する乙訓郡に寺院造営が波及し、7 世紀中ごろまでには綴喜郡に及ぶ。

ただし、この時期までに成立し、あるいは造営に着手したであろう寺院が、主要堂塔 (塔、金堂、講堂他) を備えた「伽藍」と呼べるような体裁を整えたかどうかは疑問である。伽藍と呼べるような形態が確実に認められるのは、今のところ 7 世紀の後半に至ってからである。それ以前に端緒を見出せる寺院においても、この時期に伽藍が整備されたと考えられるものがほとんどである。したがって、当時はまだ捨宅仏教、草堂仏教の時代であり、寺院を予想させる瓦の出土によってのみ予想可能であり、現状ではその検討こそが唯一の方法と言えよう。

したがって、ここで推古天皇 32 年 (624) 段階での寺院四十六所を考えるにあたっては、単弁蓮華文軒丸瓦が出現する舒明朝の百濟大寺造営開始 (639 年) 前の素弁系軒瓦の検討を通して、逆に該当する初期寺院の存在を可能性として示したい。ここで対象とする寺院は、山城を中心として近江以東の地域を対象とする。

2. 山城の初期寺院

高麗寺跡 (木津川市山城町上粕) (梅原末治 1939a, 田中重久 1938a・1944a, 山城町教育委員会 1989, 木津川市教育委員会 2011) 相楽郡。高句麗系渡来氏族伯 (高麗) 氏の氏寺と考えら

れ、同氏の本地大狛郷に小字高麗寺の地名を残す。付近には、『日本書紀』欽明天皇 31 年 (570) 条の高句麗使節を迎え入れた高城館 (相楽館) が営まれたと考えられ、近江から宇治川・木津川を通じて大和に至る基点である。伽藍は大和川原寺同範軒丸瓦 KmM2 1 (川原寺 A) やその退化型式 (高麗寺式) により瓦積基壇を用いて整備されるが、先行型式として花組の大和飛鳥寺同範軒丸瓦 KmM1 1 A, 1 1 B (飛鳥寺 I, A) が出土する。なお、飛鳥寺 A, B 型式は飛鳥寺での出土点数は少なく、奈良市姫寺廃寺から飛鳥寺、奈良市海竜王寺や高麗寺へ搬入された可能性が指摘されている。

里廃寺 (相楽郡精華町下狛) (星野猷二 1981, 2000) 相楽郡。高麗寺同様、狛氏の拠点のひとつと考えられる下狛郷に営まれ、かつて法光寺址として紹介された。伽藍は高麗寺式軒丸瓦により瓦積基壇を用いて整備されるが、先行型式として百済系の聚弁式軒丸瓦が出土している。小振りな製品で T 字間弁と弁端の返りの表現がみられ、奥山久米寺式の系譜にある。

燈籠寺廃寺 (木津川市木津) (木津町 1984) 相楽郡。木津川を挟んで高麗寺対岸の水泉郷に営まれた燈籠寺廃寺は、やはり高句麗系渡来氏族出水氏の拠点で、山背国分尼寺に比定する説もあるが詳細は不明である。土壇周辺からは、いわゆる百済系で三山木廃寺・普賢寺出土例と同範の弁端がわずかに尖った肉厚の花弁をもつ軒丸瓦が採集されている。また、一点のみではあるが、ほぼ直線額で瓦当部をわずかに肥厚した大振りの忍冬様唐草軒平瓦が出土しており、あるいは百済大寺における型押忍冬唐草文軒平瓦の存在を考慮するとき、あまりにも示唆的である。

三山木廃寺 (京田辺市宮津) (田辺町教育委員会 1982) 綴喜郡。山本郷に所在し、額面施文軒平瓦を用いて 7 世紀後半に伽藍が整備されたと考えられるが詳細は不明である。前記燈籠寺廃寺、普賢寺同範例が出土しており、外縁に一条の圈線がめぐる。この圈線の存在については、燈籠寺廃寺同様、百済大寺との関連が予想される。

普賢寺 (京田辺市普賢寺) (田辺町教育委員会 1982) 綴喜郡。長息山普賢教法寺あるいは筒城寺とも記されており、新羅系渡来氏族長息氏の氏寺である可能性があり、郷名を冠する寺院である。詳細は不明であるが、塔跡は川原寺式系の軒丸瓦により瓦積基壇を用いて整備されたようである。やはり、先行型式として燈籠寺廃寺、三山木廃寺同範例が出土している。

志水廃寺 (八幡市八幡) (八幡市教育委員会 1978) 綴喜郡。有智郷に所在し、内氏との関連が考えられる。やはり瓦積基壇が検出されており、川原寺式軒丸瓦の段階に整備されたようである。先行型式には、燈籠寺廃寺、三山木廃寺、普賢寺同範例に似た聚弁の軒丸瓦や、河内衣縫廃寺や船橋廃寺同範の獣面文軒丸瓦がある。

西山廃寺 (八幡市八幡) (八幡市教育委員会 1971) かつての河内国茨田郡楠葉郷に所在し、和氣清麻呂創建の足立寺に比定する説がある。瓦積基壇が検出されており、いわゆる百済系や高句麗系の軒丸瓦が出土している。前者は彫りの浅い平板な製品であり、後述する乙訓寺例に近似する。後者は楔形間弁をもつ。

久世廃寺 (城陽市久世) (城陽市教育委員会 1976, 1980, 1981) 久世郡。久世郷に所在し、山背氏 (山代国造) との関連が考えられる。川原寺式軒丸瓦段階以後の大規模な瓦積基壇塔跡が、久

世神社境内で検出されている。先行型式には、奥山久米寺式の奥山廃寺ⅡD同范例が出土しており、楠葉平野山窯の製品である。

正道廃寺（城陽市寺田）（城陽市教育委員会 1993） 久世郡。久世郡衙に比定されている正道官衙遺跡に隣接する寺院跡と考えられるが、実態は不明である。高麗寺式軒丸瓦の出土量が多く、この段階での伽藍整備が予想される。先行型式には奥山久米寺式を持つが、弁端の珠点を消失している。また、楔形間弁をもつ高句麗系のものが2型式ある。

鞆岡廃寺（長岡京市友岡）（小田切淳 1987） 乙訓郡。鞆岡郷に所在する鞆岡廃寺については、「田辺史牟也毛」銘平瓦の出土により、百済系渡来氏族田辺氏と関連するとする説がある。長岡京内の寺院であるが、表採資料に星組の四天王寺ⅠA（斑鳩寺4A）同范例があり、楠葉平野山窯の製品である可能性が高い。

乙訓寺（長岡京市今里）（京都市教育委員会 1967b） 乙訓郡。長井郷に属す京内の寺院である。西山廃寺例に近似した百済系の平板な軒丸瓦が出土している。

山崎廃寺（乙訓郡大山崎町大山崎）（林享 1987） 乙訓郡。山崎郷に所在するが詳細は不明である。出土資料には、星組の系譜にある百済系の軒丸瓦があるが、弁端の珠点をすでに消失している。船橋廃寺式の特徴をもつ。

北野廃寺（京都北区北野白梅町）（藤沢一夫 1938） 葛野郡。新羅系渡来氏族秦氏の拠点葛野郡に営まれた北野廃寺は、『日本書紀』推古天皇11年（603）条にみる秦河勝創建の「蜂岡寺」や「葛野秦寺」に比定する説があり、蜂岡寺を広隆寺の前身（元広隆寺）とする『広隆寺縁起』では、推古天皇30年（622）創建としている。瓦積基壇を用いた伽藍整備は遅れるが、創建期の軒丸瓦は花組の飛鳥寺創建瓦酷似例2種と高句麗系1種がある。これらは河内元稲荷窯と北野廃寺窯の製品で、後者は隼上り窯Dと同範である。瓦範のみの移動が指摘されている。

広隆寺（京都市右京区太秦蜂岡町）（田中重久 1944b） 葛野郡。北野廃寺が元広隆寺であるかどうかは別にして、現広隆寺が秦氏の寺であることは誤りない。7世紀後半の基壇地業が確認されており、この時期に伽藍整備がなされたのであろう。創建期の軒丸瓦には退化の進んだ星組の末裔2種と楔形間弁をもつ高句麗系の1種がある。

3. 近江以東の初期寺院

衣川廃寺（滋賀県大津市堅田衣川町）（滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会 1975） 南湖西岸の滋賀郡真野郷に営まれた衣川廃寺は、和邇系氏族の中でも近淡海国造（近江臣氏）が造営に関ったとする説がある。伽藍は7世紀後半に整備されるが、先行型式には外縁の厚い弁端の珠点を消失した奥山久米寺式のものや、いわゆる高句麗系、古新羅系のものがある。

穴太廃寺（滋賀県大津市穴太・唐崎）（林 博通 1989） 南湖西岸の滋賀郡大友郷に営まれた穴太廃寺は、地名からも渡来系氏族穴太村主氏の本拠地と考えられている。発掘調査では、天智朝の再建伽藍に先行する方位の異なった伽藍が確認されており、やはり時期的に先行する高句麗系の軒

丸瓦が出土している。この型式については、北野廃寺や隼上り窯の高句麗系との関連が指摘されている。

小川廃寺（滋賀県神埼郡能登川町小川）（西田 弘 1989） 北湖東岸に位置する小川廃寺についての詳細は不明であるが、桜花弁式の花組の特徴をもつ軒丸瓦が表採されている。拓本のみが知られており、詳細は不明である。

寺谷廃寺（埼玉県比企郡滑川町羽尾）（屋間孝志 2000） 武蔵国寺谷廃寺は特殊な存在である。伽藍等不明であるが、桜花弁式の花組の特徴をもつ古式の軒丸瓦が3種確認されている。近接する平谷窯から供給されたと考えられている。

4. まとめにかえて

山城・近江以東の初期寺院を概観した。

山城においては、高句麗系渡来氏族狛（高麗）氏の拠点として高麗寺が、新羅系渡来氏族秦氏の拠点として北野廃寺が、飛鳥寺花組同範あるいは同文の軒丸瓦を用いて創建される。これらの型式は他に波及することはない。むしろ、次の第2段階は、四天王寺造営を目的とした楠葉平野山窯の生産を契機として、柄岡廃寺で星組の四天王寺ⅠA（斑鳩寺4A）同範例が用いられ、別にこれを祖型として広隆寺の創建がなされたものと考えられる。この星組の波及は、柄岡廃寺からおそらく山崎廃寺に展開したのであろう。また、同窯で生産された奥山久米寺式は、久世廃寺で奥山廃寺ⅡD同範例を用いて創建がなされ、正道廃寺、里廃寺へと波及したと考えられる。続く第3段階は、隼上り窯で生産された楔形間弁をもつ高句麗系の出現であろう。隼上り窯では、豊浦寺の塔の建立に用いられた弁間点珠の軒丸瓦生産終了後、楔形間弁をもつ上記の瓦が生産されたと考えられており、範が移動して北野廃寺へ、そこから伝播して広隆寺へ波及したようである。また、この波及は近江の穴太廃寺に及んだ可能性がある。

いずれにしても、推古天皇32年（624）段階での寺院四十六所に該当する寺院は、山背の高麗寺、北野廃寺、広隆寺があり、他にも柄岡廃寺、里廃寺がその可能性を残す。武蔵の寺谷廃寺や近江の小川廃寺については、態度を保留せざるをえない。

最後に、2003年に帝塚山大学考古学研究所が実施したシンポジウム「推古朝の四十六か寺をめぐって」での議論をもとに、寺四十六所の比定を行う。

大和を担当した花谷浩氏は、飛鳥寺、斑鳩寺、片岡王寺、豊浦寺、坂田寺、橘寺、和田廃寺（葛城尼寺）、法起寺（池尻尼寺）、中宮寺、奥山廃寺（小治田寺）、檜隈寺、西安寺、平群寺、姫寺、海竜王寺、横井廃寺、願興寺、巨勢寺、古宮遺跡の計19ヶ寺と、候補地として日向寺、只塚廃寺、比蘇寺、長林寺の4ヶ寺をあげている。

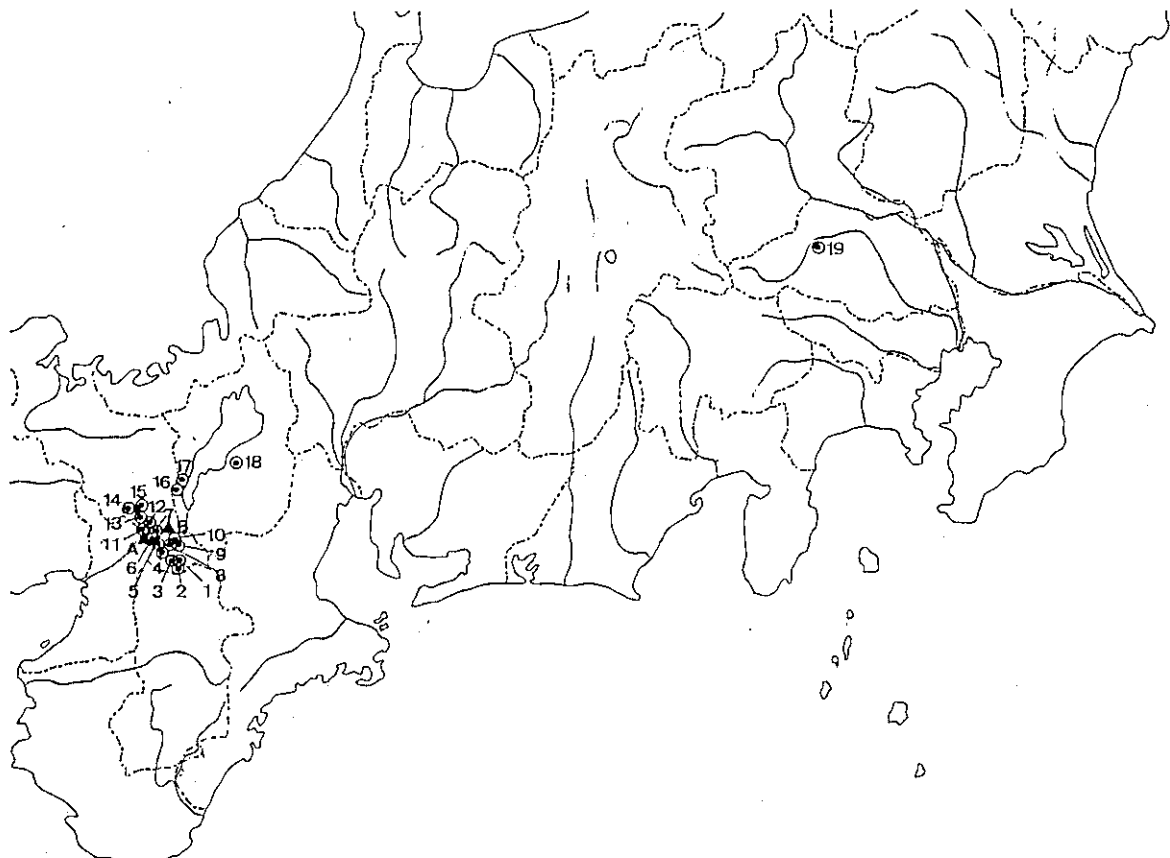
摂津・河内・和泉以西を担当した大脇潔氏は、四天王寺、新堂廃寺、衣縫廃寺、船橋廃寺、龍泉寺の計5ヶ寺をあげ、『日本書紀』記載の大別王の寺に将来の発見を期待した。

山背・近江以東を担当した中島正は、高麗寺、北野廃寺、広隆寺の計3ヶ寺をあげ、柄岡廃寺、里

廃寺の他に久世廃寺，正道廃寺，衣川廃寺を候補地としたがその可能性は低い。

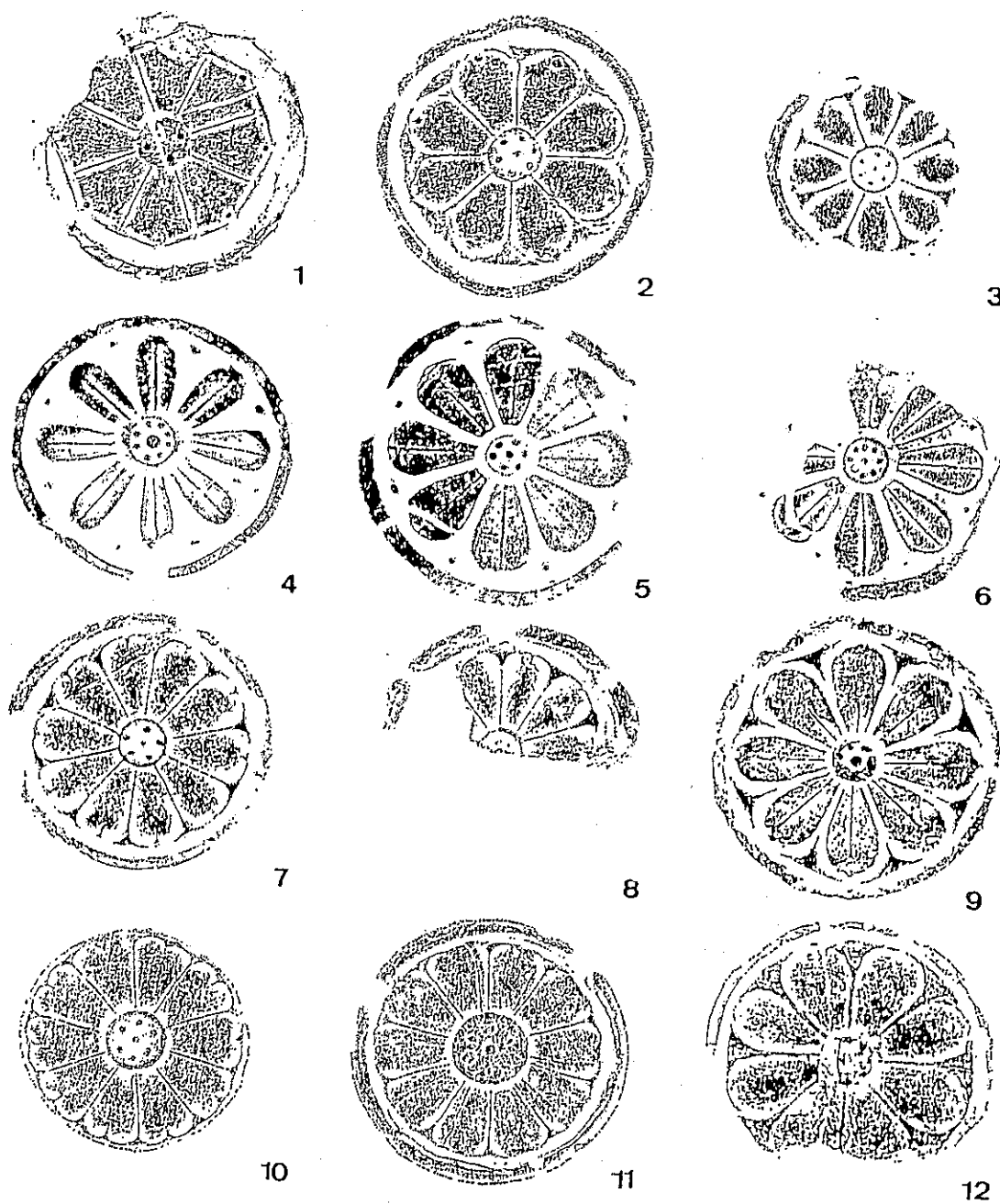
したがって、現時点で確実に「推古天皇 32 年（624）段階での寺四十六所」に該当する遺跡は、27ヶ所、候補地を含めると 34 ヶ所となった。その範囲は、後の畿内の範囲におさまるのである（帝塚山大学考古学研究所 2004）。

以上の考古学的な検討は、あくまでも「推古天皇 32 年（624）段階での寺四十六所」を、出土瓦を根拠として比定したものである。しかも、この時代までに造られたと考えられる遺構の検出は皆無に近く、建築資材としての瓦のみを根拠とした結果なのである。当然、はじめに記したように、当時の状況を捨宅仏教，草堂仏教の時代とするならば、瓦葺建物のまったく存在しない仏堂を寺として勘定することも可能である。ましてや、僧・尼とみなす基準すら曖昧なのである。ただ、『日本書紀』示す推古天皇の「三宝興隆詔」から 30 年にして、「寺院総数四十六所，僧八百十六人，尼五百六十九人，併せて一千三百八十五人」とする数字は驚異的なのである。



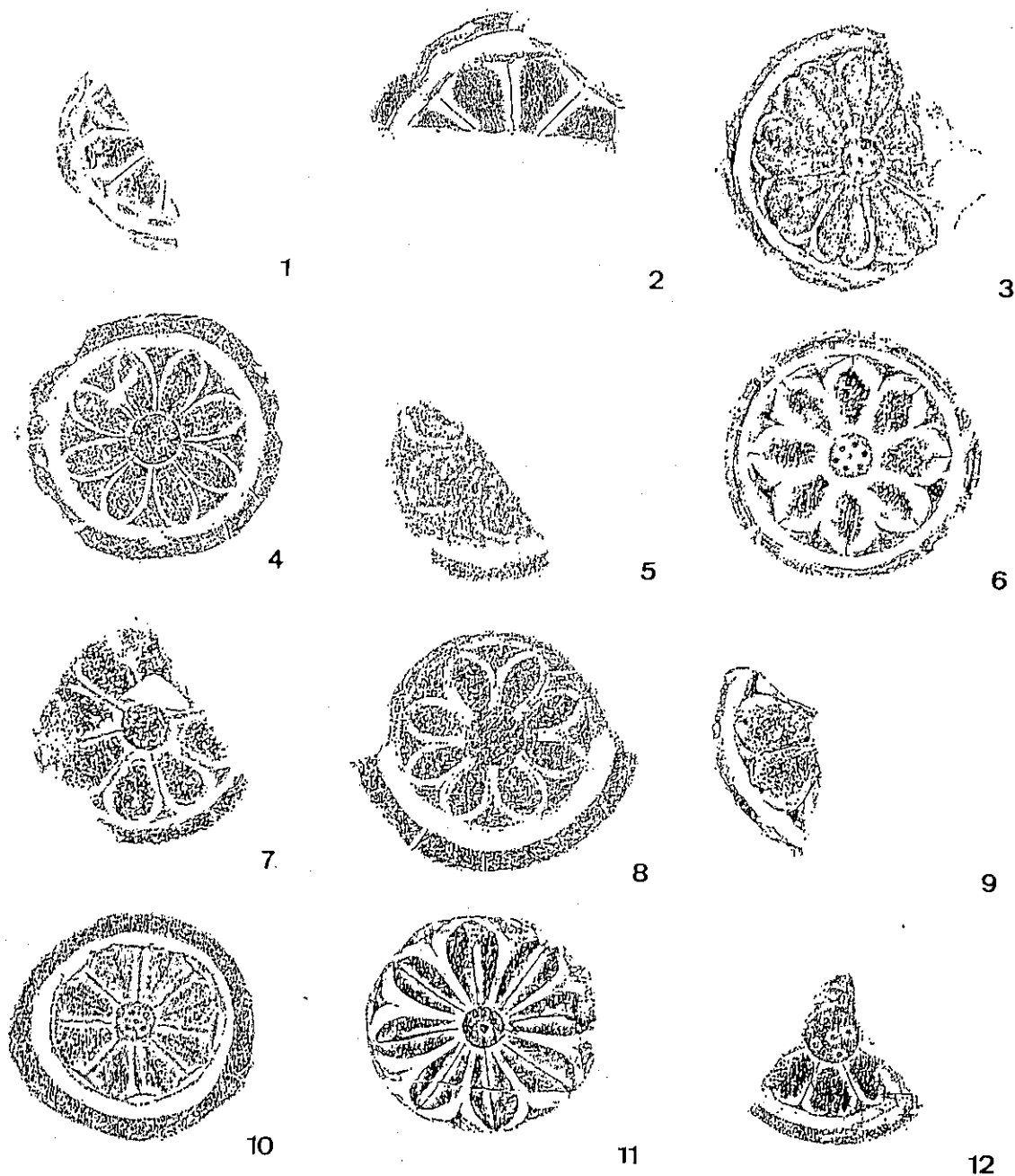
- | | | | | |
|-----------|----------|----------|----------|----------|
| A. 楠葉平野山窠 | B. 隼上り窠 | 1. 高麗寺跡 | 2. 燈籠寺廃寺 | 3. 里廃寺 |
| 4. 三山木廃寺 | 5. 普賢寺 | 6. 志水廃寺 | 7. 西山廃寺 | 8. 正道廃寺 |
| 9. 久世廃寺 | 10. 平川廃寺 | 11. 山崎廃寺 | 12. 鞆岡廃寺 | 13. 乙訓寺 |
| 14. 広隆寺 | 15. 北野廃寺 | 16. 衣川廃寺 | 17. 穴太廃寺 | 18. 小川廃寺 |
| 19. 寺谷廃寺 | | | | |

第 25 図 山背・近江以東の初期寺院分布図（帝塚山大学考古学研究所 2004 より転載）



1. 奥山廃寺ⅡD (楠葉平野山窯) 2. 斑鳩寺4A (楠葉平野山窯)
 3. 豊浦寺ⅠB (隼上り窯) 4. 豊浦寺ⅣA (隼上り窯) 5. 豊浦寺ⅤA (隼上り窯)
 6. 豊浦寺ⅤB (隼上り窯) 7. 飛鳥寺Ⅰ (高麗寺同範) 8. 高麗寺 (飛鳥寺A同範)
 9. 隼上りD (北野廃寺同範) 10. 北野廃寺a種 11. 北野廃寺b種 12. 広隆寺a種

第26図 山背・近江と東国の寺々の瓦① (帝塚山大学考古学研究所 2004 より転載)



- | | | | | |
|----------|----------|---------|---------|----------|
| 1. 里廃寺 | 2. 久世廃寺 | 3. 正道廃寺 | 4. 西山廃寺 | 5. 志水廃寺 |
| 6. 普賢菩薩寺 | 7. 山崎廃寺 | 8. 乙訓寺跡 | 9. 鞆岡廃寺 | 10. 衣川廃寺 |
| 11. 穴太廃寺 | 12. 寺谷廃寺 | | | |

第27図 山背・近江と東国の寺々の瓦② (帝塚山大学考古学研究所 2004 より転載)

第二節 高句麗移民の痕跡

『日本書紀』欽明天皇 31 年 (570)、越の海岸に漂着した高句麗の使節は、「近江の北の山」を越え、船で琵琶湖を縦断して宇治川を下り木津川を遡って、南山城（京都府南部）の高槻館に迎え入れられ、相楽館において饗応されている。これは、倭国（大和王権）と高句麗との正式な国交を示す最初の記事である。この時、高句麗では平原王が王位にあったが、隣国新羅では真興王の治世下で国力が強大化しており、新羅・百済との対抗上、高句麗は倭国との緊密化を企図したものと考えられる。その後、使節が携えた国書は、『日本書紀』敏達天皇元年（572）、敏達天皇の百済大井宮に送られて解読されるが、使節内の内紛により返書を持たずして帰国することとなる。この古代の迎賓館ともいえる高槻館（相楽館）が設けられた地（『和名類聚抄』にいう山城国相楽郡大狛郷・相楽郷・下狛郷）は、現在の京都府木津川市・相楽郡精華町に所在し、ちょうど大和王権中枢部が所在する大和国への北の玄関口に相当する。

貞観 3 年 (861) の『日本三代実録』に記す大伴氏の家記によると、『日本書紀』欽明天皇 23 年 (562) の大伴狭手彦の高句麗攻略記事と関連して、この時の俘囚が山城国の狛人となったとしている。また、『日本書紀』欽明天皇 26 年 (565) には、高麗人の頭霧利耶陸らによる九州の筑紫への渡来記事があり、彼らは山城国に安置されて、畝原・奈羅・山村の高麗人の祖となったことを記している。なお、奈羅はかつての久世郡那良郷（現在の京都府八幡市上奈良・下奈良）にあたり、畝原・山村はかつての大狛郷・下狛郷付近のことを指していると考えられる。山城国においては、京都盆地を中心とする北山城地域（京都市・乙訓郡域・宇治市北部）が新羅系渡来氏族・秦氏の勢力圏であるのに対し、宇治川・巨椋池以南の南山城は、かねてより、高槻館（相楽館）が設けられる以前から高句麗系の人々の偏在する地域だったのである。

高句麗移民が日本列島に渡来するルートとしては、「頭霧利耶陸らの渡来記事」に見るような、朝鮮半島から対馬海峡を横断して北九州に上陸するという方法の他に、冒頭の「高句麗使節来朝記事」に見るような、高句麗東岸から対馬海流や北西の季節風を利用して直接日本海（東海）を渡り北陸に上陸する方法が存在した。『日本書紀』によれば、敏達天皇 2・3 年 (573・574)、天智天皇 7 年 (668) 来朝の高句麗使節は、いずれも越の沿岸に到着している。高槻館（相楽館）が設けられた相楽郡は、北陸地方と大和を結ぶ交通ルートの要衝に位置しており、七世紀初頭、ここに高句麗移民の精神的シンボルとして高麗寺が建立されるのである。しかも、この寺は、渡来氏族狛（高麗）氏の氏寺として創建されたと考えられている。

1. 高麗寺の概要と周辺の遺跡

史跡 高麗寺跡は、京都府木津川市山城町上狛に所在し、西流する木津川が奈良山の低丘陵に阻まれていっきに流れを北に転じるその内懐に位置している。段丘上に築かれた伽藍は南面し、眼前に迫る

木津川の雄大な流れを透かして間近に見える奈良山の峠を越せば、そこはもう大和国である。

周囲を水田に囲まれた高麗寺の寺域は、東西約 190m、南北約 180mの規模をもち、主要基塔を含む伽藍中核部 5,195.22 m²の土地が、昭和 15 年（1940）8 月 30 日付けで国の史跡指定を受けた。寺域周辺には、高麗寺に付属する高麗寺瓦窯跡（山城町教育委員会 1989b）、高井手瓦窯跡（山城町教育委員会 2000a）等の生産遺跡や、寺院造営氏族の居館跡を含む高麗寺の広域の経済基盤としての上狛東遺跡（山城町教育委員会 2000b）があり、北側背後の丘陵には、天竺堂古墳群・蓮池古墳群・千両岩古墳群等の初期横穴式石室をもつ群集墳がある。特に、天竺堂 1 号墳（全長約 27m の前方後円墳 5 世紀末）は、大和川流域の高井田山古墳（大阪府柏原市）とともに大和への横穴式石室導入の嚆矢となった遺跡であり、石室内からはガラス製玉類等 3,000 点以上の装身具が出土した。また、木津川対岸の森垣外遺跡（相楽郡精華町）は、この頃の大壁住居を含む渡来系の集落であり、韓式土器や馬骨、製塩土器等が出土している（（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1999b）。

高麗寺の名が初めて文献に登場するのは、九世紀前半に奈良薬師寺の僧景戒が著した『日本霊異記』に、天平年中のこととして高麗寺僧栄常の記事があり、『今昔物語集』他にも同様の説話が収録されている。また、『播磨増位山随願寺集記』（姫路市随願寺蔵）には中世の縁起ではあるが、天平 15 年（743）3 月、興福寺・薬師寺・播磨増位寺の僧等が内裏（崇仁宮）で読経した後、増位寺僧栄常が高麗寺（崇仁京右京に位置）から戻らなかったとしている。これは『続日本紀』の同年 3 月 4 日条に、一月から四九日間四九人の衆僧を金光明寺に集めて行った金光明最勝王経講読の行事が終わり、衆僧を慰労したとする記事と関連するようである（高橋美久二 1998）。なお、この地には現在も「高麗寺」の地名を残しており、かつての相楽郡大狛郷に属していた。

奈良時代以前（8 世紀末以前）の山城国内には、現在までに約 50 の寺院が確認されている。その分布は、多少の疎密はあっても国内各郡に限らず配されており、北山城と南山城でほぼ同数の寺院が存在したようである。とはいえ、それらの創建時期や出土する軒瓦などの様相は異なり、そこには、創建氏族の違いや時の中央政権とのかかわりの度合いが、当然反映しているものと考えられる。なお、これらのうち、その創建に渡来系氏族とのかかわりが想定できる寺院は、約半数にのぼるのである。

山城国の寺院造営は、北山城は葛野郡の北野廃寺（京都市右京区）と南山城は相楽郡の高麗寺で、ほぼ同時期に開始される。その時期は、蘇我氏の氏寺・飛鳥寺（奈良県明日香村）の造営が終了する前後の時期、7 世紀第 I 四半期のことである。しかも、両寺とも、渡来系氏族・秦氏と高麗氏の両拠点に営まれていた。

2. 高麗寺跡の発掘調査

高麗寺跡では、国史跡指定に先立つ昭和 13 年（1938）の二度にわたる調査（Ⅰ期）（田中重久 1938a・1944a、梅原末治 1939a）や指定後の昭和 59～63 年度（1984～88）の寺域確認調査（Ⅱ期第 1～5 次）（山城町教育委員会 1989b）、平成 17～21 年度（2005～09）の史跡整備に伴う基礎調査（Ⅲ期第 6～10 次）（木津川市教育委員会 2011）に及ぶ発掘調査が実施された。なお、高麗寺の創

建は飛鳥時代の7世紀初頭に遡るが、七堂伽藍が整備されるのは白鳳期の7世紀後半のことである。したがって、発掘調査で確認できる遺構のほとんどは、7世紀後半以後のものとなる。

高麗寺の伽藍は、東に塔、西に金堂を配した所謂法起寺式の配置である。中樞部の塔・金堂・講堂はすべて整美な瓦積基壇で、塔・金堂は周囲に玉石敷を、講堂は石積の下成基壇と石敷を付設している。講堂両翼から派生し塔・金堂を囲む回廊は、低い石積基壇をもつ単廊で、金堂正面の西に偏って設けられた中門にいたる。中門の正面には礎石建八脚の南門が設けられており、南門・中門・金堂が南北一直線に並ぶ法起寺式でも特異な伽藍配置となる。南門両翼には堅固な築地塀を構築しているが、東門は掘立柱の八脚門であり、木津川に面した南側以外は一本柱塀等で寺域を区画していたようである。僧坊等他の諸堂については不明であるが、講堂背後の地域に配置されたのであろう。寺域北東部には院内金属工房が、南西部には寺院内瓦窯（高麗寺1・2号窯跡）も置かれていた。

7世紀後半の白鳳期に整備された主要堂塔のうち、まず、その規模・構造がある程度発掘調査により判明している塔・金堂・講堂と回廊跡について、それぞれを比較しながら概略を述べ、その位置関係について整理する。記述に際して用いる造営尺度は、唐尺（1尺＝29.7cm）である。なお、塔・金堂はほぼ真北に主軸をそろえるが、講堂は北に対して1度40分東に傾く。

塔・金堂・講堂基壇は、すべて瓦の平積を基本とする瓦積基壇であるが、塔・金堂基壇は地覆石を用いずに整地面から直接に瓦を積上げてその周囲に石敷を廻らすのに対して、講堂基壇はやや外方に張り出した地覆石を用いてその周りに石積の犬走りを設け、さらにその周りに石敷を廻らしている。各堂塔の基壇規模については、塔が一边約12.7m（43尺）の正方形、金堂が東西約16.0m（54尺）×南北約13.4m（45尺）の瓦積をもち、それぞれその周りに幅約1.65m（5.5尺）の石敷が廻る。講堂基壇は瓦積で東西約23.7m（80尺）×南北約19.5m（66尺）となり、その周りに幅約0.75m（2.5尺）の犬走りを設けるが、さらに外側の石敷規模は不明である。この講堂に取り付く回廊基壇は石積の外装をもち、講堂基壇側面のやや南側に直行して接続する幅約5.4m（18尺）の規模をもつ。各堂塔の基壇高については、塔で1.5m（5尺）、金堂で1.2m（4尺）、講堂で0.6m（2.5尺）、回廊基壇は講堂接続部から徐々に降って0.3m（1尺）程度となろう。基壇上の建物構造については、金堂・講堂・回廊基壇において礎石あるいはその据付穴を確認しており、その概要を知ることができる。金堂では桁行23尺（7尺・9尺・7尺）×梁間14尺（7尺・7尺）の身舎四面に8尺幅の庇が廻る構造を、講堂では桁行39尺（13尺・13尺・13尺）×梁間25尺（12.5尺・12.5尺）の身舎四面に13尺幅の庇が廻る入母屋造の構造を復元した。講堂に接続する北回廊は、梁間約3.0m（10尺）で桁行西側5間、東側6間の8尺等間となり、講堂は1間分西に偏ることとなる。

各堂塔の位置関係については、並立する塔と金堂の向い合う基壇石敷の縁と縁で約5.2m（17.5尺）の間隔をもち、塔と東回廊を結ぶ幅1.8m（6尺）の石敷長さ4.8mや回廊基壇内側の石組側溝幅を勘案すると、ほぼ塔・金堂の間隙と塔・東回廊間距離は一致する。この数値（17.5尺）は、予想される金堂基壇石敷と西回廊基壇の内法寸法にも当てはまり、塔・金堂・東西回廊の間隔を揃えた伽藍設計があったようである。しかもこの間隙の寸法は、塔基壇瓦積辺長の4倍にあたる東西回廊基壇内法幅

(43 尺×4=172 尺) から石敷を含めた塔・金堂の東西規模 (54 尺+65 尺=119 尺) を差し引いた寸法 (53 尺) をさらに間隙 3 で割り戻した値に相当する。なお、講堂基壇の南北中軸線は、ほぼ金堂基壇の石敷東辺を通過しており、ここから西回廊基壇外縁までがほぼ 100 尺、東回廊基壇外縁までで 108 尺となる。また、回廊の南北規模については中門・南回廊が未検出であるが、南門・中門間に敷設された幅 6 尺の石敷参道を検出しており、およそその位置が特定できる。その規模はほぼ東西規模に等しく、回廊の形状は正方形に近いものとなる。

寺域を画する遺構としては、南門と南辺築地跡、東門跡、西辺礫敷溝を検出している。北辺の遺構については未検出であるが、字界付近に想定でき、南北 600 尺×東西 650 尺の規模が考えられる。

段丘端部に検出した南門跡は伽藍整備期当初のものではないが、桁行 20 尺 (6 尺・8 尺・6 尺) ×梁間 12 尺 (6 尺・6 尺) の規模をもつ小振りな八脚門である。屋根の両妻には建物とは不釣り合いな大型三尺鴟尾が据えられていた。基壇はほとんど高さをもたず石列をもって区画する程度で、南北約 6.5 m (22 尺) ×東西約 8.3m (28 尺) の規模をもつ。南門と中門をつなぐ石敷参道は南門基壇内に入り込んでおり、ほぼ石敷の幅 (6 尺) が扉の幅に対応する。なお、検出した石敷参道下層には白鳳当初の石敷が遺存しており、検出した南門跡についても当初の南門基壇上に嵩上げて再構築されている。南門両翼に接続する築地塀は白鳳当初のものであり、基底幅約 5 尺の規模をもつ。南門の主軸は北に対して 1 度程度西に傾くが、築地塀の法線は地形に沿って大きく約 4 度 27 分西に傾いている。掘立柱の東門は桁行 20 尺 (6 尺・8 尺・6 尺) ×梁間 14 尺 (7 尺・7 尺) の規模をもち、南辺築地に対応してか、北に対して約 3 度西に傾く。寺域西限を画すと考えられる礫敷溝は寺域南西部で検出しており、上層幅で約 5m、深さ 1m 以上を測る。底面は平坦で礫・瓦片が敷き詰められていた。おそらくは、この溝の東側に接して区画施設が設けられていたであろう。

他には、講堂基壇背後の東西溝に橋脚状の檜丸太が立てられており、寺域北東部で風鐸鋳型や金属片を含む廃棄遺構や礫敷整地層を確認した。また、寺域周辺部では、北西部で掘立柱の建物群を、南東部で高麗寺瓦窯 (1~3 号窯) を検出している。

3. 高麗寺の沿革と諸堂塔の変遷

高麗寺の創建は、蘇我馬子による飛鳥寺創建軒丸瓦 (素弁十弁蓮華文軒丸瓦) と同範品 (KmM1 1A・B) が使用される飛鳥時代 (七世紀初頭) に小規模な寺院として出発するが、発掘調査では当該期の明確な遺構はいまだ確認できていない。なお、塔跡基壇は白鳳期瓦積外装の内側に石積を内包しており、この石積が飛鳥創建期の基壇外装なのか、瓦積が基壇内部から受ける土圧を緩和するための施設なのかで、意見が分かれている。また、飛鳥寺創建軒丸瓦同範品の使用建物を、高麗寺とは別の高城館 (相楽館) 内の仏堂に求める意見もある (小笠原好彦 2005) が、7 世紀初頭段階で瓦葺建物をもつ官衙の確認例はなく、高麗寺の草創期のものと考えべきである。いずれにしても高麗寺は、『日本書紀』推古天皇 32 年 (624) 条にある国内の寺四六所のひとつとすることができよう。

高麗寺創建瓦のうち KmM1 1A 型式は、飛鳥寺 I 型式と同範であるが、飛鳥寺における範改刻前

後の a・b 段階や外縁の広い c 段階の製品がそれぞれ出土している。また、いまひとつの KmM1 1 B 型式は飛鳥寺 A 型式同範で、姫寺廃寺（奈良県奈良市）や海龍王寺（同）で主体的に使用された製品である。高麗寺の創建に関しては、飛鳥寺の造営と密接に連動していることがわかるのである。しかも、飛鳥寺 1 型式の最終段階の製品が高麗寺に存在することは、飛鳥寺の完成が予想される 609 年までに、飛鳥寺から高麗寺への瓦の搬入と高麗寺の創建を求めることができる。

高麗寺の伽藍整備は、天智天皇発願の川原寺（奈良県明日香村）金堂創建瓦と同範品（複弁八弁蓮華文軒丸瓦）により大津宮遷都（六六七年）前に開始され、瓦積基壇を用いた南山城の寺院造営の先駆けとなる。伽藍整備期に使用された軒丸瓦は、川原寺同範瓦（KmM2 1）とそこから派生した高麗寺式（KmM2 2～2 7）の製品であり、これらの型式変化とその出土比率から主要堂塔の造営過程を知ることができる。伽藍は、金堂→塔→講堂→中門・南門・南辺築地の順に整備され、周辺の寺観も徐々に整えられたようである。

高麗寺式軒丸瓦の祖型である KmM2 1 型式は、川原寺 A 類と同範であるが、川原寺金堂の造営途中の早い段階で荒坂瓦窯（奈良県五条市）から範が移動し、高麗寺造営のための瓦窯で使用される。その後、大津宮遷都にともない宮周辺に造営された崇福寺（滋賀県大津市）や南滋賀廃寺（同）の瓦窯へ範は移動する（金子裕之 1983）。高麗寺の伽藍整備は、天智朝の仏教政策と大津宮遷都に連動するのである。しかも、川原寺式軒丸瓦と瓦積基壇をとまなう寺院造営は、その後、天武・持統朝を通じて全国に波及するのである。

そもそも高麗寺の伽藍配置は、「川原寺式伽藍配置」から「法起寺式伽藍配置」へ変化する初例と考えられるが、南門・中門・金堂が南北一直線に並ぶ特異な構造となる。このことは、創建期高麗寺の配置が影響した結果とも考えられる。

蘇我氏との密接な関係により創建され、天智朝の直接的な関与により整備された高麗寺の伽藍は、奈良時代（八世紀代）になっても平城宮の外港である泉津（京都府木津川市）に面した寺院として、また恭仁京内の寺院として維持整備されるが、その重要性は多彩な平城宮式軒瓦の出土に示される。このことは、聖武朝を中心とした奈良朝の仏教政策と連動することは明らかである。その高麗寺において恭仁京遷都以後、大規模な修理事業が行われるのは、奈良時代末から長岡京期にかけての時期である。この時期、塔・金堂基壇瓦積の南面に石の階段が設置され、石敷も小石で嵩上げされて周囲には素掘りの溝が設けられる。そして、南門の建替えと同時に中門・南門の塼尾も新調され、中門に続く石敷参道も嵩上げされて新たに敷設されている。また、高麗寺 3 号瓦窯、高井手瓦窯が新たに築かれてこの修理事業は推進されるが、そのために高井手瓦窯には、称徳天皇創建の西隆寺（奈良県奈良市）創建軒平瓦の範が導入されるのである（山城町教育委員会 2000a）。この大規模な修理事業には、『続日本紀』延暦一〇年（七九一）四月一四日条の記事が関連すると考えられる。この所謂「山背国の浮図修理令」に象徴される桓武朝の仏教政策の影響は、南山城の古代寺院において散見できる。おそらく高麗寺における播磨国府系瓦の導入についても、この時期の状況として理解可能である（中島正 1990a・1990b）。

高麗寺の伽藍は桓武朝における大規模な修理を最後として廃絶するが、その時期は定かではない。ただ、講堂跡の一部で基壇が焼けた火災痕を確認しているが、他の堂塔では確認できていない。鎌倉時代初頭（13世紀初頭）、寺城内各所で瓦溜の形成等大幅な造成による地形の改変が行われており、この段階で高麗寺は完全にその姿を消したと考えられる（木津川市教育委員会 2011）。

まとめ

いわゆる欽明朝における「仏教公伝」以来、長い争乱を経て崇峻天皇元年(588)、ようやく飛鳥真神原に飛鳥寺(法興寺)の造営が開始される。『日本書紀』にはこれ以前にも、欽明天皇14年(553)の「吉野寺(比蘇寺)」, 敏達天皇6年(577)の「難波の大別王の寺」, 同13年(584)の「石川精舎」, 同14年(585)の「大野丘の北塔」が登場し、草堂や捨宅寺院だけではなく、新たな堂塔の建築がすでになされていたことがわかる。しかし、いわゆる七堂伽藍を備えたような本格的寺院としての造営は、飛鳥寺が最初であり、その後、推古天皇32年(624)にはすでに寺四十六所を数えたとしているが、この頃でも基壇上に建つ瓦葺建物で構成された本格的寺院が飛鳥寺以外に存在していた可能性は低い。しかも、この頃創建されたことが出土瓦等で確認されている寺においても、本格的に伽藍が整備され寺容が整うのは、7世紀中葉以降と考えられるものがほとんどである。また、これら寺の所在地はほぼ畿内に限定され、現在30ヶ所程度の候補地があげられているが、そのほとんどが蘇我氏、上宮王家、渡来系有力氏族を造営主体とすることが指摘されている。なお、『扶桑略記』によると、持統天皇6年(692)、天下の諸寺は545ヶ寺に達しており、推古32年から約70年で約十二倍に増加したこととなる。7世紀後半代の白鳳期が、本格的な伽藍整備を伴う造寺活動の大きなピークなのである。しかもその波及は陸奥国から肥後国の範囲に及び、当時の国家領域の大半をカバーする。そして、奈良朝の国分二寺造営に至って完結するのである。

高麗寺が造営された南山城は、朝鮮半島と大和を結ぶ日本海ルートの一環に位置しており、かねてより、高句麗系の人々の偏在する地域だった。そして、七世紀初頭、高句麗移民の本拠地としての「大泊郷」に、彼らの精神的シンボルとして高麗寺が建立されるのである。この時期は、日本列島における寺院造営の草創期にあたり、時の最有力氏族であり積極的な仏教政策を主導した蘇我氏との密接な関係のもとになされている。当然、新来の仏教受容の素地は、旧来の豪族と異なる彼ら「渡来人」の政治的基盤の脆弱性に由来するであろうし、『日本書紀』推古天皇12年(604)秋9月是月条にある「黄書画師」「山背画師」を定めたとする記事に関連して、彼らの技術者集団としての有益性が、より大和王権との結びつきを深めた結果と考えられる。ならば、日本仏教文化の草創期における高麗寺の実態とは、どのようなものであったのか。発掘調査では、東西に並ぶ塔・金堂をもつ法起寺式伽藍配置でありながら、中門・南門を金堂正面に偏って配した構造であることや、白鳳期伽藍整備後の伽藍内部を不自然に貫く南北大溝が存在することを明らかにしている。これらは、金堂を中心とした飛鳥期伽藍の構成や、創建期寺域の外郭施設の名残と考えられ、高麗寺のみならず、草堂段階にあった日本列島の初期寺院にあって、その実態解明への糸口となった。

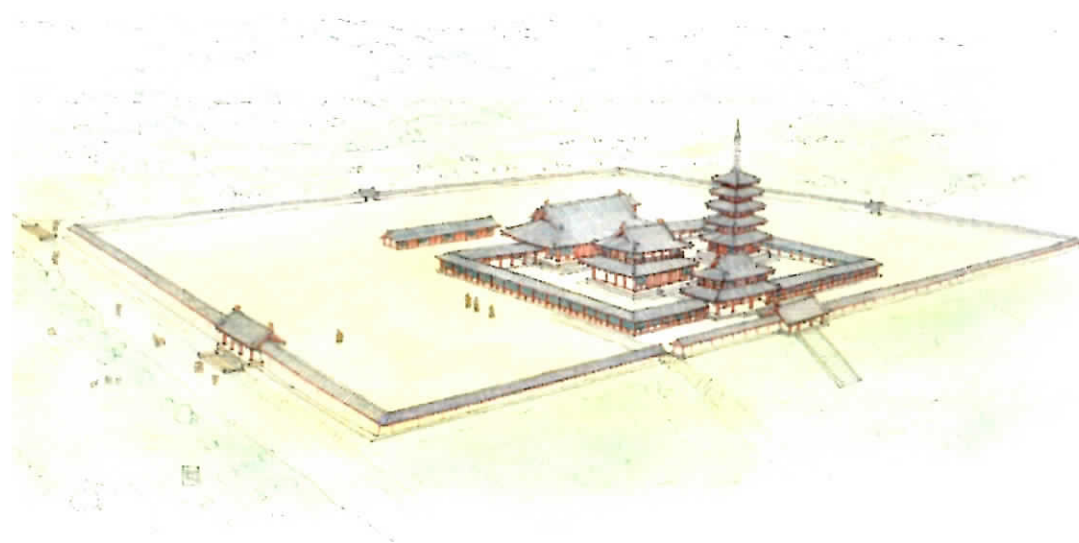
高麗寺の伽藍が整備された時期、半島では、660年の百済滅亡とそれに続く復興運動も、663年の白村江の敗戦により潰えた。この戦乱により倭国へ亡命した多くの百済の皇族・貴族が天智朝に迎えられ、大津宮遷都（667年）へとつながることは周知の通りである。高句麗もまた、668年、唐・新羅連合軍によってついに滅亡し、朝鮮三国の興亡は新羅による統一で終焉するのである。日本国内では、六七二年の壬申の乱を経て、天武天皇による天皇制と律令制が確立していく。高麗寺の伽藍整備は、激動の半島・国内情勢と決して無縁ではない。高麗寺の位置は、朝鮮半島と大和を結ぶ日本海ルート上の要衝であるばかりか、倭京と大津京を結ぶ結節点でもあった。しかもこの地は、高麗（狗）氏を中心とする渡来系氏族の拠点であり、半島情勢に対して最も敏感に反応する人々が居住するのである。

高麗寺の伽藍は、川原寺式や南滋賀廃寺式の一塔二金堂式の配置から、法起寺式の配置へと変化する端緒と考えられる。このことは、高麗寺式軒丸瓦の祖型である川原寺同範軒丸瓦の範の移動過程、南側側面に舍利孔をもつ塔心礎の形態が崇福寺と同一である点、高麗寺講堂のプランが川原寺式や南滋賀廃寺式における中金堂に近似する点等によって導かれる。しかも、高麗寺講堂の基壇外装は特異な三重構造となっており、予想される軒の深さからも、通常の講堂とは異なる格の高さを示していた。三重に荘厳された講堂基壇は、中金堂から講堂への変化を、川原寺式から法起寺式伽藍配置への変化として示しているのである。高麗寺の伽藍整備は、法起寺式伽藍配置・川原寺式軒丸瓦・瓦積基壇のセットとして、七世紀後半における列島規模での寺院造営の爆発的増加の端緒に位置付けられる。

高麗寺の存在は、高句麗移民の痕跡であるばかりか、日本の律令国家形成と仏教文化形成に果たした渡来人の功績として、日本列島の歴史に大きな足跡を残しているのである。



第28図 木津川と高麗寺



第29図 高麗寺伽藍復元図 (早川和子氏 作画)



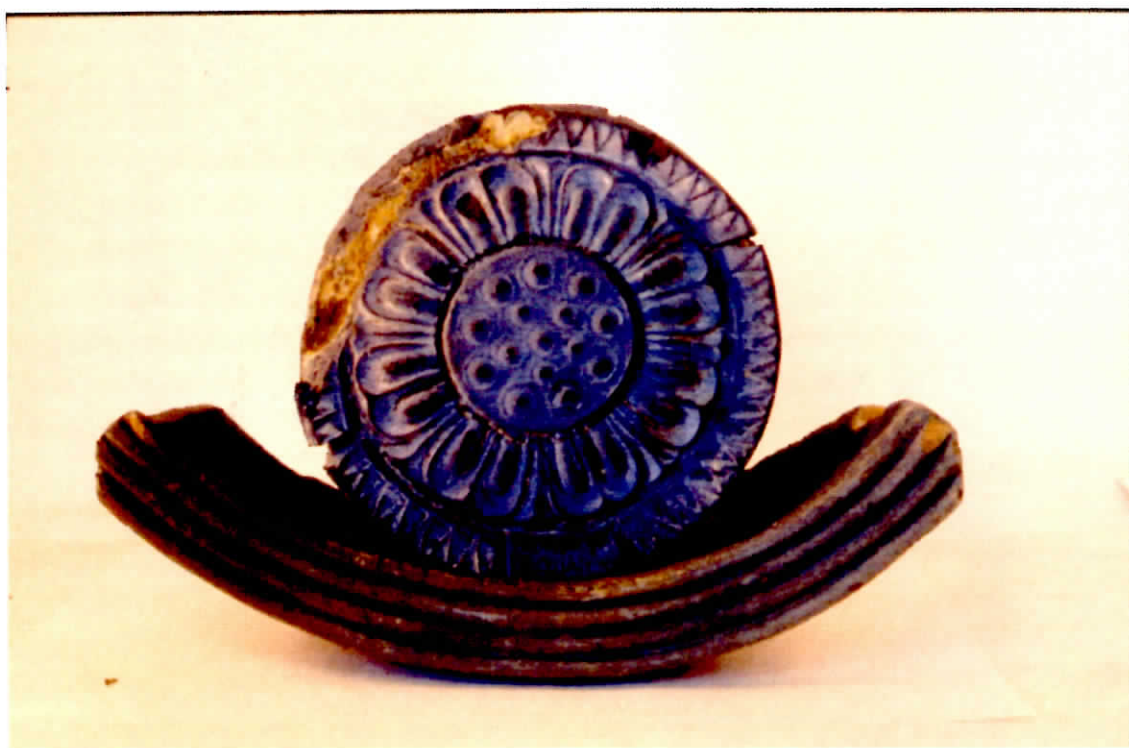
第30图 高麗寺金堂跡



第31图 高麗寺金堂跡瓦積基壇



第 32 図 高麗寺出土飛鳥期軒丸瓦



第 33 図 高麗寺出土川原寺式軒瓦

第三節 山背画師と高麗寺跡出土観世音菩薩像線刻平瓦

はじめに

瓦の面に文字・記号・絵画などを書（描）いたり、押印したものがある。これらのうち、銘書、指書、刻印、押型、墨書などで文字を記入した瓦を総称して文字瓦と呼んでいる。これら文字瓦には様々な意味・機能が付与されており、瓦の生産に携わる工人や集団とその管理者、あるいは注文主体にとつての明確な施文目的を窺うことが可能である。ところが、瓦の面に何らかの絵画的表現が見られるもの（画像碑は除外）については、多くの場合たとえその表現対象が判別できたとしても、表現目的を明確にするには困難がともなう。当然、軒瓦の瓦当文様に見られるような装飾的意味や、他の製品と区別するための分別機能をそこに求めることはできない。したがって、絵画的表現が施された瓦の多くは、文字瓦の多くが内包するであろう目的性の欠如という面から、一般に「戯画瓦」と呼ばれる。

絵画的表現が施された瓦は、古代のものに限っても今日までに多数の出土が知られている。表現対象も様々であり、人物、動物、植物、器物、風景などがある。しかし、これらの表現は多くの場合稚拙であり、対象の判別が不能のものも多く見られる。また、多くの場合、瓦の製作途中で描かれるため、瓦工人の手慰みとして評価されている。つまり、一般に絵画的表現が施された瓦とは戯画瓦であり、「瓦工人による落書きの産物」なのである。

ここに紹介する一片の平瓦は、京都府木津川市山城町に所在する高麗寺跡から出土したものがある。平瓦の凹面には仏像が線刻されており、断片ではあるが残存部分から聖観音菩薩像と識別できる。線は簡略化されているものの、仏像の図像的表現に熟知したものでなければ描くことは困難である。したがって、ここに紹介する瓦が通常の戯画瓦とはやや趣を異にするものであることがわかる。以下、高麗寺跡出土仏像線刻瓦の図像表現・年代・出土状況等を整理し、その背景について検討を試みたい。

1. 高麗寺跡出土仏像線刻瓦

ここに紹介する仏像線刻瓦の出土位置は、金堂瓦積基壇北東端付近であり、各時代・各種の瓦が混在する瓦堆積層中より出土した。この瓦堆積層は、近接する塔と金堂瓦積基壇の間に厚く堆積しており、出土状況からこの瓦がいずれの堂塔に伴うかは、にわかに断じ難い。この瓦は厚さ 2 cm 前後の薄手の平瓦片であり、全体に摩滅が著しい。凸面には縦位の粗い縄叩きが施されており、端部近くに叩き具の縁の痕跡を留めている。凹面には横位の磨り消しが施され布目圧痕等を留めない。端面の面取りは凹面側のみ施されている。胎土には白色の砂粒および黒色の混入物を包含しており、焼成は軟質で、表面は炭化粒の付着により黒色を呈し、いぶし焼き風である。なお、仏像は生瓦の成形後、乾燥前の段階で描かれている。

仏像は平瓦の凹面に広端側を上にした状態で描かれており、目から上の頭部を残すのみで、全貌は不明である。残存部には、円光、化仏、宝冠、宝冠台、地髪、白毫、眉、眼、眼窩などが陰刻されてお

り、全体に磨滅が著しく線が途切れたり消えかかっている部分もあるが、宝冠上に化仏を戴くことからして聖観世音菩薩像を表現していることは明らかである（猪川和子 1980）。

描線には鉄線描とは異なる勢いが感じられ、鋭い小刀状の道具を用いて一気に描いている。表現は簡略化しているものの結跏趺坐する化仏の簡潔な線や、白毫、眉、眼、眼窩などの勢いをもった表現に手慣れた筆の運びをみることができる。また、宝冠台に施された無造作な縦の刻線や宝冠台の横方向の線と地髪線の線の重複、化仏円光の線の引き直しなどには気ままな雰囲気が見える。このように画面に残る表現はわずかではあるが、描線は闊達で一気に描いたとはいえ仏像各部の特長を的確に捉えている。

ただ、画面の磨滅による描線の消失や小刀状の道具を用いたためにおこる曲線の歪みなどから、一部に半然としない表現が見られる。例えば、宝冠の装飾は、化仏を中心にして左右対称の単位文様を配することで構成されているようであるが半然としない。おそらくは、左右端部に他の蓮弁様の表現とは異なった表現が見られることから、三面宝冠を描こうとしているのであろう。他には、化仏周辺に飛雲状の表現を見るが、磨滅がひどく断片的である。

ところで、観世音（聖観世音）菩薩とは、文殊、普賢、勢至などとならび次の生涯で仏陀となるべき最高位の菩薩であり、補処の菩薩と称される。いずれも独尊で表わされるが、三尊形式をとる場合には、釈迦如来では文殊と普賢、阿彌陀如来では観音と勢至の二菩薩を脇侍とするのが通例である。本資料では、断片ながらやや右なめ前方を向いている状態が描かれており、三尊形式をとった場合の観世音菩薩の位置と符号する。ただ、本資料の場合、一枚の平瓦に三尊を描く余裕はない。

2. 仏像線刻瓦他遺跡出土例

仏像とは、狭義には仏教の開祖である釈迦如来をはじめとする如来（仏陀）の像のことであるが、一般には如来像に菩薩、明王、天部の諸尊像を加えて仏像と称している。そして、これら仏像には、仏教的な理想化のために種々の超人的な身体的特長や特有の持ち物が定められており、それらが可能な限り造形化される。したがって、通常の人物像とは異なった表現が成されていることは言うまでもない。いわゆる古代のもので瓦の面に絵画的表現が施された例は多いが、そのうち仏像あるいは仏像様に描いたものは意外と少ない。管見の限りでは 8 例を知るのみである。

多賀城政庁跡出土例（宮城県多賀城跡調査研究所・宮城県教育委員会 1982）は如来坐像であり、仏像は上半と右半分を欠くが、蓮華座、光背、衣文様の表現が見られる。茨城廃寺出土例（石岡市教育委員会 1982）も如来坐像であり左半分を残す。画面には衣文の襷と台座が表現されている。武蔵国分寺出土例（内藤政恒 1957, 1961）は、布目圧痕を留めたままの平瓦凹面に仏像様の表現を見る。やはり半ば欠失しているが、仏龕風の面線内に坐像を描いているようである。高井田廃寺出土例（大阪府教育委員会 1984, 大阪府立泉北考古資料館 1984）は、倚坐の仏像を中心に光焰が表現されているのであろうか。

上記 4 例については、おそらく仏像というものを見たことがあるという程度の人物が描いたもので

あろう。表現は実に稚拙であり、光背や台座など遠くからでも目に付く部分の輪郭を表現したにすぎない。また、坐像・倚坐像として描かれてはいても、仏像本来の理想化された特長などは、ほとんど理解されていないようである。仏像というよりは仏像様の表現というべきであろう。

肥後国分僧寺跡出土例（鹿児島県歴史資料センター・黎明館 1990）は、推定僧房跡東側の瓦溜から出土したもので、足部をわずかに欠失するもののほぼ全体が窺える資料である。頭部には宝冠状の表現と垂髪がみられ、胸であわせた両手の持物は宝珠であろうか。腰から下の裳は簡単な縦線で表わし、周囲には天衣と思われる縦線が描かれている。表現は稚拙であるが、全体に漂う女性的な雰囲気から吉祥天像と考えられている。

先記4例と比較するならば、明らかに仏像細部の表現が加わるため、仏像を真近かに見たことがある者が描いたのである。しかし、その仏像理解は、仏象の雰囲気表現を越えるものではない。

小栗栖瓦窯跡からは2点の断片が出土している。一つは、財団法人・古代学協会の調査により2号窯灰原から出土したもの（植山 茂 1985）であり、今一つは、京都考古学研究会により3号窯付近の土取り場崖面で採取されている（京都考古学研究会 1982）。両者とも平瓦凸面に仏像の一部を篋先で描いており、接合不能であるが同一個体と思われる。前者には顔の一部が残り、眼、眉、鼻、頭髪が表わされている。波線状の頭髪は垂れ下がり垂髪となる。後者には立像下半身の一部が残っており、衣の襷や飾り紐、瓔珞が表わされている。飾り紐は中央でリボン様に結ばれ、放射状に垂れる3本の瓔珞は円文を繋いで表現されている。全体では菩薩の立像を描いたものであろう。

なお、小栗栖瓦窯で生産された瓦は、近隣の法琳寺と醍醐御霊廃寺に供給されている。ともに7世紀末の創建期に使用された瓦である（植山茂 1985）。この仏像線刻瓦についても、小栗栖瓦窯で焼成されたものであり、7世紀末段階の実年代が与えられる。また、断片的ながらもその仏像表現からは白鳳小金銅仏の面影を窺うことができる。

四天王寺講堂跡出土例（四天王寺文化財管理室 1986）は、行基葺式の丸瓦凸面にやはり陰刻されたものである。丸瓦広端を下にした状態で瓦面いっぱいには仏像の胸から頭部にかけてを描いており、頭頂部と顔の左半分を欠くものの、白毫、眉、眼、眼窩、鼻、口、耳、三道が表わされている。白毫は半ば欠失しているが、大きく垂れた耳や三道はまぎれもなく仏を表現している。篋描きとはいえ抑揚のある筆線はいきいきとしており、極端にデフォルメされた顔は豊かな表情をもつ。仏といえども巧みに戯画化するたくましい表現意欲がそこにはある。

なお、この仏像線刻瓦は、四天王寺第1次講堂の落下屋蓋を構成していた瓦の中の一枚であり、おおむね7世紀後半段階のものとすることができる（藤沢一夫 1965）。

小栗栖瓦窯跡出土例、四天王寺講堂跡出土例については、仏像の着衣や身体的特長が表現されており、たとえ瓦工人の手によるものとしても、ひごろ仏像と真近かに接する機会のある者が描いたのであろう。四天王寺講堂跡出土例に至っては、仏像の形を借りて戯画化する余裕さえ窺えるのである。

ただ、小栗栖瓦窯跡出土例、四天王寺講堂跡出土例ともに高麗寺跡出土例と比較した場合、仏像としての図像的情報量の差は歴然としている。先述したように、仏像というものが仏教的に理想化され

た種々の超人的な身体的特長や特有の持ち物を可能な限り造形化しているものだとすると、断片的資料ながら高麗寺跡出土例に見る図像的情報量の稠密さは、通常の戯画瓦の域を越えている。たとえ真近かに仏像を模写したとしても、通常の瓦工人が理解し咀嚼できる表現ではなかろう。だとしたら、仏像の図像表現を熟知した者として画工を想定することは十分に確からしいといえよう。

3. 高麗寺跡出土仏像線刻瓦の年代

高麗寺跡出土仏像線刻平瓦は、高麗寺 3 号瓦窯の製品と思われる。同窯跡から出土した平瓦片には、胎土に白色の砂粒を多く混入し、軟質の焼成でいぶし焼き風のものが多く見られる。また、これらの平瓦は、薄手で凸面に縦位の粗い縄叩き痕を残し、粗く乱れた布目圧痕を凹面に留めている。以上の特長は上記仏像線刻瓦と一致する。

高麗寺瓦窯は、高麗寺に付属する生産遺跡として寺域東辺に隣接している。現在までに 3 基の瓦窯跡を確認しており、すべて段丘縁辺部の緩い傾斜地に築かれている。うち 3 号瓦窯はロストル式の平窯で焼成室奥壁部のみを検出した。窯体のほとんどは市道高麗寺線下に埋もれており全貌は不明である。焼成室の規模は、奥壁の幅約 2.7m と大型で 8 本の分焰壁を設けている。分焰壁の幅はそれぞれ 0.2m 前後で焰道の幅は分焰壁よりもやや狭い。焰道床から分焰床までの高さは約 0.2m と低く、通焰孔などの付設はみられない。後世の削平により壁体の構造は不明であるが、周辺から多量のスサ入り窯壁片が出土している。

ロストル式の平窯は 8 世紀後半代に出現することが知られており（毛利光俊彦 1983）、その典型例が平城宮付属瓦窯である山背音如ヶ谷瓦窯（奈良国立文化財研究所 1979）や大和歌姫瓦窯（藤沢一夫 1961）である。これらの窯は高麗寺の南方奈良山丘陵にあり、天平宝字年間（757～763）における法華寺阿彌陀浄土院の造営に関する瓦窯である。音如ヶ谷瓦窯 1 号窯は分焰壁が 8 本で高麗寺 3 号瓦窯と同じであるが、焼成室幅は約 2.2m とやや狭い。歌姫瓦窯では分焰壁が 7 本となり焼成室幅約 2.2m を計る。平安京付属瓦窯では、平安時代初頭から中期にかけて分焰壁 6 本で焼成室幅 2m 前後のものが多い（藤沢一夫、堀江門也 1968、近藤喬一 1978）。以後は、窯の小型化が趨勢であろう。高麗寺 3 号瓦窯の構造はやや古式の様相を呈している。

高麗寺 3 号瓦窯で生産された軒瓦には、高麗寺 KMM41 型式軒丸瓦がある。この型式は、内区に複弁 14 弁の花弁を配し、中房には 1+6 (7) の蓮子を置く。外区内縁の珠文は 14 個で、外縁は低く素文である。瓦当径は約 17cm を計り、範は浅く外縁にかぶさる。胎土には砂粒を多く含み、焼成は軟質でいぶし焼き風のものを見る。高麗寺跡では塔跡からの出土量が多く、塔の補修に関連して生産されたものと考えられる。他遺跡での同範例の出土を聞かない。

高麗寺 KMM41 型式軒丸瓦は、平城宮式軒瓦との同範関係が顕著な奈良時代以後の高麗寺にあって、平城宮式系の文様系譜上に位置しない点で特異な型式である。しかも、他の平城宮式同範軒瓦を中心とした都城系・国府系同範軒瓦が、その出土量からして高麗寺への供給を主目的とした製品ではないのに対して、高麗寺 KMM41 型式軒丸瓦は高麗寺への供給を目的に高麗寺 3 号窯で生産されたもので

ある。ちなみに、高麗寺跡から出土した奈良時代以後の軒瓦は、軒丸瓦で 11 型式 14 種類、軒平瓦で 10 型式 12 種類を数える。このうち、他遺跡との同范関係がなく高麗寺への供給を目的としたことが明らかなものは、軒丸瓦で 3 型式 3 種類、軒平瓦で 1 型式 1 種類である。

高麗寺 KMM41 型式軒丸瓦の生産が塔の修造に関連する可能性はすでに述べたが、発掘調査の結果からは塔の建立以来大規模な修造が行われた時期は、ほぼ 8 世紀末から 9 世紀初頭段階に限定して考えることができる。この時期には、塔・金堂基壇の周囲に排水溝を設け、基壇外周を巡る石敷きを高くするなどの造作が行われ、基壇南辺中央には石積の階段が設置される。したがって、高麗寺 3 号瓦窯の操業と高麗寺 KMM41 型式軒丸瓦の生産の一時点として、8 世紀末から 9 世紀初頭の塔の修造時期を当てることは妥当と思われる。

以上のことから、高麗寺跡出土仏像線刻瓦の製作時期は、高麗寺 3 号瓦窯の操業時期に対応しており、その製作に係る契機として高麗寺の塔の修復事業が考えられるのである。

まとめ

高麗寺跡出土仏像線刻瓦の出土状況・図像表現・年代について整理し、若干の検討を試みた。この瓦に見られる図像表現は実に精緻であり、断片的資料ながら通常の戯画瓦の域を越えている。このことから、仏像の図像表現を熟知した者として画工の存在を想定してみた。

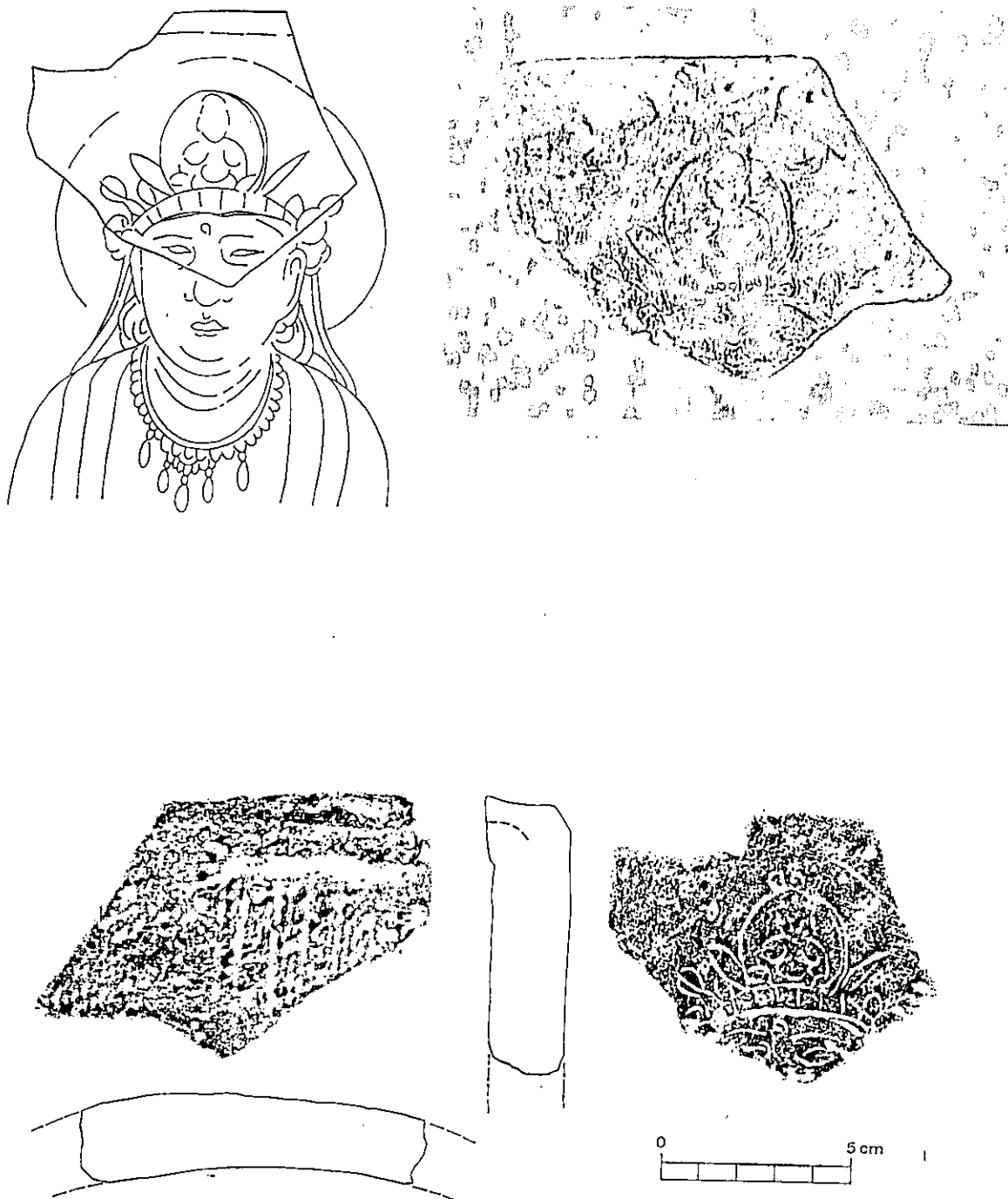
また、この仏像線刻瓦の製作年代については、高麗寺 3 号瓦窯跡出土平瓦との同一性から、同瓦窯の操業時期に対応するものと考えられる。しかも、高麗寺 3 号瓦窯で生産したことが確実な高麗寺 KMM41 型式軒丸瓦は、高麗寺の塔の修復事業に積極的に使用されている。この修復時期については、発掘調査により 8 世紀末から 9 世紀初頭の実年代が与えられる。

仮に、この仏像線刻瓦の製作が高麗寺の塔の修復事業に関連したものであるとすると、この時期の修復事業には画工が参画していた可能性がある。『続日本紀』延暦 10 年（791）4 月 18 日の条に「山背国部内諸寺浮圖経年稍久破壊处多。招遣使咸加修理焉。」とある。これによって、桓武朝における仏教政策の一環として山背国内諸寺の塔（浮圖）の修理が行われている。高麗寺の場合、上記詔に象徴されるような国家的な意志を背景として、播磨国府系の瓦がこの時期に供給されたと考えられ、これも塔の修復事業と連動するものであろう（中島正 1990b）。大規模な塔の修復が行われているのである。

高麗寺跡出土仏像線刻瓦が塔の修復事業に関連するか否かは別にしても、天平期の数少ない線刻画資料の様式を引き継ぐ貴重な資料（百橋明穂 1983）であることは間違いない。現在、天平期の線刻画資料としては、東大寺の大仏蓮弁毛彫蓮華蔵世界図や同じく東大寺の二月堂光背などしか残っておらず、しかも、本資料が大仏蓮弁に現わされた菩薩像に酷似している点は重要である。

ところで、『日本書紀』雄略天皇 7 年（573）歳条には、百済からの渡来技術者らを「今来才伎」として「画部因斯羅」をあげている。推古天皇 12 年（644）4 月には「黄書画師、山背画師を定む」とあるが、この黄書画師は高句麗系の渡来人たちである。この黄書氏が伝統的に画師の技法を継承したことは知られており、山背国久世郡の人として画工師画部黄文川主が東大寺大仏殿の天井板の彩色を手掛けてい

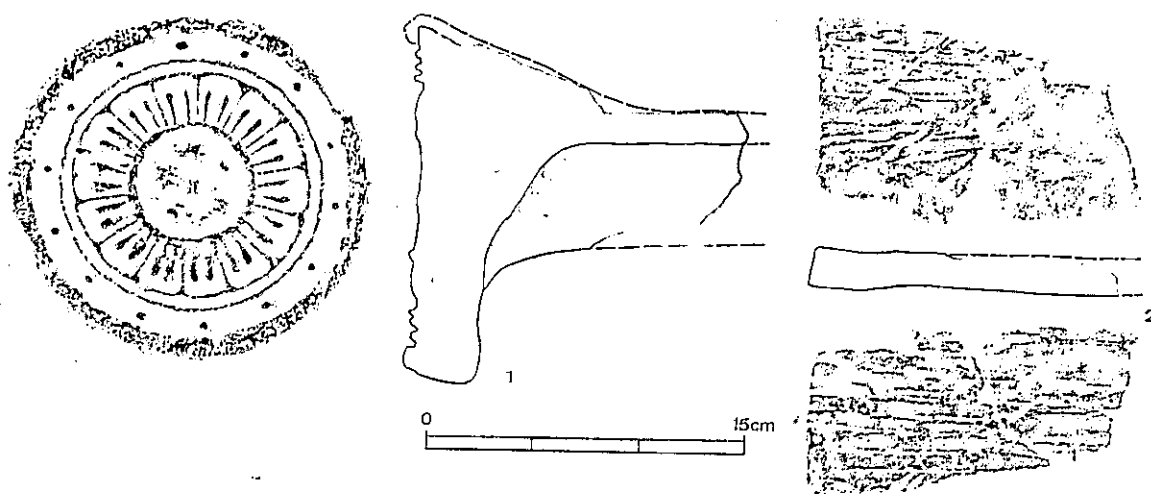
る。高麗寺跡出土仏像線刻瓦にも、このような高句麗系渡来氏族の伝統があったのかもしれない。



第34図 高麗寺跡出土観世音菩薩像線刻平瓦

旧国名	遺跡名	住 所	画 題	瓦の 種類	画面	時 代	文 献	備 考
陸奥	多賀城跡	宮城県多賀城市浮島字 宮前	如来像 (座像)	平瓦	凸面	8世紀前半	多賀城 1982	政庁跡
常陸	茨城麿寺 (小目代麿寺)	茨城県石岡市小目代	如来像 (座像)	丸瓦	凸面	7世紀後半?	石岡市 1982	金堂?
武蔵	武蔵国分寺跡	東京都国分寺市西元町	仏像(?)	平瓦	凹面	8世紀後半	内藤 1957	塔跡
山城	小栗栖瓦窯跡	京都府京都市伏見区小 栗栖丸山	菩薩像 (立像)	平瓦	凸面	7世紀末	植山 1985 京都考 1982	2号窯 3号窯
山城	高麗寺跡	京都府相楽郡山城町大 字上狛小字高麗寺 他	観音菩薩像	平瓦	凹面	8世紀末~ 9世紀初頭	山城町 1989	塔・金堂跡
河内	高井田麿寺 (鳥坂寺)	大阪府柏原市高井田戸 坂	仏像(?) (倚座像)	平瓦	凸面	7世紀後半	大阪府 1968	
摂津	四天王寺	大阪府大阪市天王寺区 元町	仏 面	丸瓦	凸面	7世紀後半	藤沢 1965 四天王寺 1986	第1次講堂 跡
肥後	肥後国分僧寺 跡	熊本県熊本市出水	吉祥天像 (立像)	丸瓦	凸面	8世紀末以 後	熊本県立美術館 1985 黎明館 1990	推定僧房跡

第35図 仏像線刻瓦出土遺跡一覧



第36図 高麗寺跡出土軒丸瓦(高麗寺 KMM41 型式)

第二部 国家仏教の完成と在地寺院

— 南山城における古代寺院とその出土瓦 —

第一章 飛鳥白鳳寺院の創建

はじめに

飛鳥・白鳳時代の豪族層が建立した寺を「氏寺」、その仏教を「氏族仏教」とよぶのは、単に氏族がその寺院を経済的に維持し、仏教を信仰したという意味にとどまらない。これは、『孟蘭盆経』に説くところの「七世父母報恩」の祖先信仰が、族長層の祖先崇拜に結びついたもので、氏神の信仰に対応する。既述したように、古墳の造営と寺の建立はなんら矛盾しないのである。むしろ、地域共同体共通の盤を祀る新たな形態と考えれば、その受容は容易である。したがって、仏教受容の端緒は渡来系氏族が開くとしても、渡来系氏族のみが氏寺の造営氏族ではないのである。

特に、南山城においては、旧来の勢力はすでにこの時期に弱体化しており、時の中央政権の新たな政治秩序を柔軟に受け入れる素地を持っていた。しかも、モザイク状の地域勢力は、それぞれに新たな秩序の受容体となるのである。その端緒は高句麗系渡来氏族・高麗（狛）氏により開かれる。

『日本書紀』推古天皇 2 年（594）2 月丙寅朔条に「皇太子及び大臣に詔して、三寶を興し隆えしむ。是の時に、諸臣連等、各君親の恩の為に、競ひて佛舎を造る。即ち是れを寺と謂う。」として、「三宝興隆詔」が発せられる。天皇の仏教主導の真偽は別にしても、推古朝における「氏寺」の増加は、厩戸皇子や蘇我馬子によって進められた。本来、寺院・伽藍とは、僧侶が修行する清浄な場所であり、具体的にはその主要建物を指す。奈良時代に流行した南都六宗では、塔・金堂・講堂・食堂・経蔵・鐘楼・僧房を七堂伽藍と呼ぶが、これら機能分化した宗教施設を完備した寺院は、おそらく推古朝の飛鳥時代では飛鳥寺以外に存在しない。推古段階における寺院造営の拡大は極めて限定的であり、後の畿内の範囲を超えるものではない。しかも、推古朝まで遡る建築資材としての瓦の出土はあっても、この時期まで遡る寺院としての遺構の検出は、極めて例外的なのである。したがって、この段階は、地域共同体の首長層がだれでも寺院建立に着手できたとする段階には達していない。

ただ単に仏像を祀る建物をもって「寺」、剃髪した僧形の人をもって「僧」とする段階から、ある程度定式化した主要堂塔の配置が見られる建物群をもって「寺院」、聖と俗との境界がある程度はつきりして「得度」を経た者が「僧尼」とするような観念が成立した段階にいたって、寺院造営は大きく進展する。地域共同体の首長層がだれでも寺院建立に着手できるようになるのは、7 世紀後半になってからである。『古事記』が閉じる推古朝から次の舒明朝以後、寺院造営は爆発的に地方へ拡散する。しかも、考古学的には、この段階に至って、瓦葺きの基壇建ち建物遺構群として「寺院」を認識できるのである。

仏教文化の受容は、伽藍造営の伝播という形をとって進展する。このことは、飛鳥時代にすでに仏教文化を受容した後の畿内の地域にあっても、確実な「伽藍」が営まれていくのである。

第一節 7世紀の伽藍配置

いわゆる欽明朝における「仏教公伝」以来、長い争乱を経て崇峻天皇元年（588）、ようやく飛鳥真神原に飛鳥寺（法興寺）の造営が開始される。『日本書紀』にはこれ以前にも、欽明天皇14年の吉野寺（比蘇寺）、敏達天皇6年の難波の大別王の寺、同13年の石川精舎、同14年の大野丘の北塔が登場し、草堂や捨宅寺院だけではなく、新たな堂塔の建築がすでになされていたことがわかる。しかし、いわゆる七堂伽藍を備えたような本格的寺院としての造営は、飛鳥寺が最初であり、その後『日本書紀』推古天皇32年（624）にはすでに寺46所を数えたとしているが、この頃でも基壇上に建つ瓦葺建物で構成された本格的寺院が飛鳥寺以外に存在していた可能性は低い。しかも、この頃創建されたことが出土瓦等で確認されている寺においても、本格的に伽藍が整備され寺容が整うのは、7世紀中葉以降と考えられるものがほとんどである。また、これら寺の所在地はほぼ畿内に限定され、現在27～34ヶ所の候補地があげられている（帝塚山大学考古学研究所 2004）。なお、『扶桑略記』によると持統天皇6年（692）、天下の諸寺は545ヶ寺に達しており、推古32年から約70年で十倍以上に増加したことになる。7世紀後半代の白鳳期が、本格的な伽藍整備を伴う造寺活動の大きなピークなのである。しかもその波及は陸奥国から肥後国の範囲に及び、当時の国家領域の大半をカバーする。そして、国分二寺の造営に至って完結するのである。

ここでは、7世紀代における寺院造営の様相をその伽藍配置の実態に即して概観し、伽藍配置変遷の背景を整理することとする。

1. 伽藍配置の分類

寺院を構成する建物配置に関する類型、すなわち伽藍配置については、現在に法灯を継ぐ摂津四天王寺や大和法隆寺・法起寺・薬師寺・興福寺・東大寺、筑前観世音寺などの古代寺院のほか、大和飛鳥寺・川原寺・大官大寺や近江南滋賀廃寺などの発掘調査で判明した寺院跡を加えて、その名を冠した型式名を用いることが慣例となっている（鈴木嘉吉 1974）。日本におけるこの古代寺院の伝統的な分類は、主に塔と金堂の配置状況に主眼をおいたもので、石田茂作によってその基盤がつけられた。石田は、塔を中心に三金堂を配した飛鳥寺式伽藍配置から塔・金堂を縦列に配した四天王寺式、回廊内に二塔を並置した薬師寺式、回廊外に二塔を置く東大寺式への変化を想定し、仏舎利を納めた塔から仏像を安置した金堂へと重点が移動し塔の信仰が衰退した結果と説明した（石田茂作 1978）。

伽藍配置から仏教教義を明らかにしていく研究は石田以来の蓄積をもつが、森 郁夫は、飛鳥寺式から四天王寺式、一塔二金堂式の川原寺式、回廊内に東に金堂・西に塔を並置する法隆寺式、薬師寺式と続き東大寺式と同様に回廊外に二塔を置く大安寺式にいたる変化を整理し、その変化の要因を朝廷における鎮護国家のための仏教観の推移に求めた（森郁夫 1998）。菱田哲郎は、伽藍配置と特定の仏像に対する信仰との関係を整理し、金堂内の仏像の方位性を重視した伽藍配置の分類から、川原寺式

(ⅠC類) や川原寺式から中金堂を省略した観世音寺式(ⅡA類)と阿弥陀仏、法隆寺式(ⅢB類)と薬師仏の関係を示し、謫居思想としての仏教の普及とその伝播過程を追った(菱田哲郎 2005)。

上原真人は、仏舍利や仏像を祀る塔・金堂などの空間(仏地)と僧侶が生活し修行する講堂・食堂・僧(尼)房・鐘楼・経蔵などの空間(僧地)を区分し、両者の関連を回廊の閉じ方によって分類した(上原真人 1986)。それは、回廊が金堂にとりつき講堂は回廊外にあるもの(A型)、回廊が金堂・塔を囲んで閉じ講堂は回廊外にあるもの(B型)、回廊が講堂にとりつくもの(C型)、回廊が講堂の背後で閉じ回廊内に講堂・金堂・塔を含むもの(D型)の4種であり、回廊内の建物配置により細分している。A型は金堂前面に儀式空間を確保する方向で変遷し、僧地では講堂を中心として三面僧房のような定型化がみられるのに対し、B・C型では金堂前面の儀式空間という意識が希薄で、僧地も定型化していない。なお、B型に関しては、塔・金堂の周囲を巡る儀礼との関連を予想している。

かつて石田茂作が『東大寺と国分寺』(石田茂作 1959)のなかで構想した主要伽藍以外の付属施設をも含めた寺院空間での議論が、近年、上総・下総・武蔵・下野・但馬・安芸国分寺などの発掘調査成果で現実のものとなっている。坂詰秀一は、伽藍の修理や経営のための施設である政所などの空間である俗地も含め、仏・僧・俗地全体を考慮した伽藍配置の設定を強調している(坂詰秀一 1982)。また、国分寺に関する議論からは、山路直充が寺院の空間を寺院地・伽藍地・付属地に大別して分析することで国分寺の空間構成を分類し、特に大衆院の位置関係を重視することで宗教空間と運営空間の分離に着目した(山路直充 2011)。さらに、従来の伽藍配置論をこえた寺院地の議論は、官衙と国分寺、山林寺院を含めた広い空間にその視野を広げ(上原真人 2011)、国をこえた五畿七道のまとまりにも新たな地平を開くこととなった(菱田哲郎 2013)。

2. 7世紀代の様相

以上、伽藍配置を考える場合の主な視点を略述したが、7世紀中葉以降に各地で爆発的な増加をみせる造寺活動のピークにあたり、その契機となった百済大寺、川原寺の造営について概観する。まず、『日本書紀』舒明天皇11年(639)、百済大寺(吉備池廃寺)の造営が天皇自らの発願により開始される。ここで使用された単弁八弁蓮華文軒丸瓦を祖型とする山田寺式軒丸瓦は、同13年(641)に造営を開始した山田寺における定型化を経て、全国へと波及する。吉備池廃寺の発掘調査では、法隆寺式伽藍配置の大要が判明しており、この伽藍配置の祖型が百済大寺にあったことがわかった。また、この調査で出土した軒平瓦には、法隆寺若草伽藍(斑鳩寺)所用の型押忍冬文軒平瓦と同範のスタンプが使用されており、法隆寺との密接な関係をうかがわせる。法隆寺式伽藍配置については、上原分類B3型・菱田分類ⅢB類に該当する。次に、川原寺についてみることにする。川原寺の創建については諸説あるが、大津宮遷都前の天智天皇代(662~667)創建説が最も有力である。造営に使用した複弁八弁蓮華文軒丸瓦を祖型とする川原寺式軒丸瓦は、さきにみた山田寺式同様、全国に波及して造寺活動の契機となる。一塔二金堂式の川原寺式伽藍配置は西金堂を東面させるが、大津京内の南滋賀廃寺では南面し、山中の崇福寺でも尾根は分かれるが同様の配置となる。川原寺式から南滋賀廃寺式

への変化は明らかで、上原分類A 2型で定型化した三面僧坊をもつ。川原寺式や南滋賀廃寺式伽藍配置の中金堂が講堂に変化した形態が観世音寺式や法起寺式伽藍配置であり、上原分類のA 2型からC 2型への移行と捉えることができる。なお、金堂の方位を重視する菱田分類では、川原寺式（I C類）から観世音寺式（II A類）を介在させて法起寺式（II B類）伽藍配置への変化を捉えている。

7世紀後半における寺院造営の各地への波及に際し、法隆寺式あるいは法起寺式伽藍配置を採用する例は、その配置が判明しているものの過半数に達する（菱田哲郎 2005）。にもかかわらず、中央の大寺においてこの型式を採用する例はほとんどなく、「氏寺型」と評価（鈴木嘉吉 1974）されるゆえんである。これらの伽藍配置はともに7世紀中葉に成立した官寺のそれを源流としており、山田寺式・川原寺式軒丸瓦の波及と連動する。

3. 南山城における寺院造営

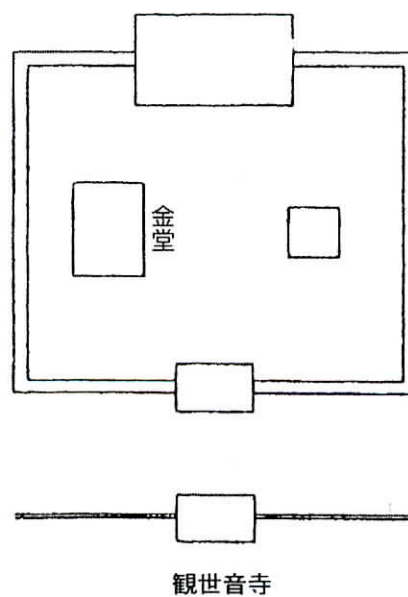
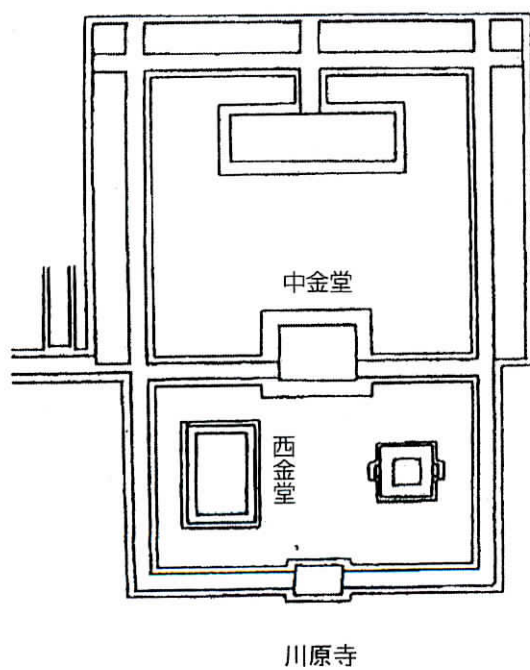
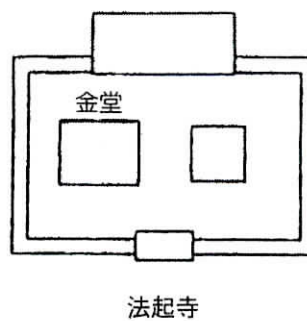
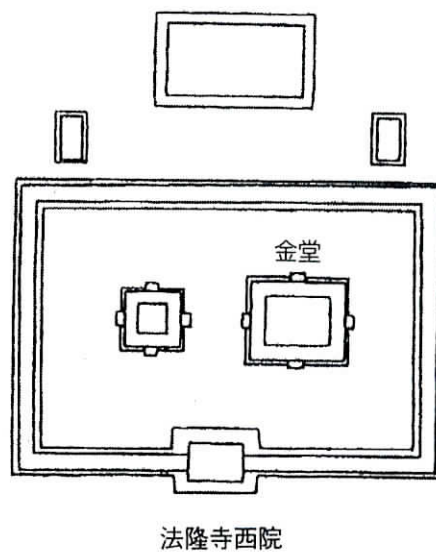
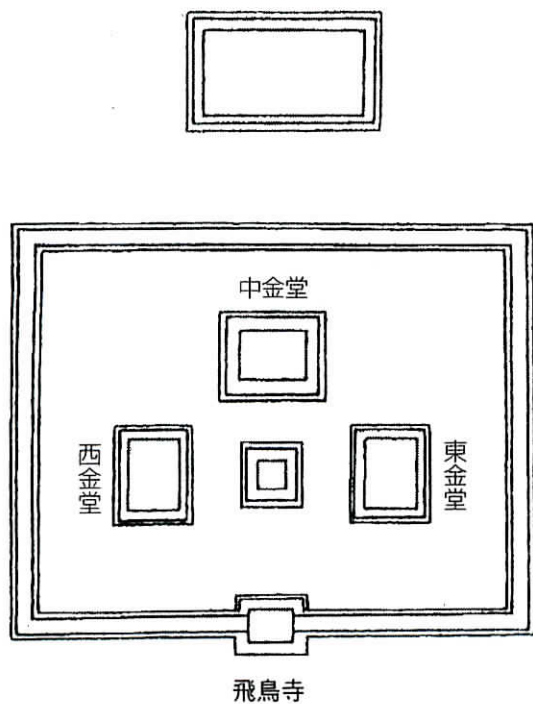
ここでは、高麗寺跡（木津川市）と隣接する平川・久世廃寺（城陽市）の二者をとりあげ、南山城における7世紀代の寺院造営と伽藍整備の実際について考えてみる。高句麗系渡来氏族である高麗（狛）氏の拠点と考えられる高麗寺跡からは、飛鳥寺創建期の素弁十弁蓮華文軒丸瓦（花組）同范例が出土しており、7世紀初頭に創建されたことがわかる。しかし、伽藍が整備されるのは7世紀後半に降り、川原寺創建期の同范例（A種）を主体として法起寺式の伽藍が整えられる。伽藍整備の開始時期については、川原寺や近江崇福寺・南滋賀廃寺同范軒丸瓦にあらわれた范キズの比較から、大津宮遷都（667）前であることがわかっている。高麗寺の伽藍は、南面横に舍利孔をもつ塔心礎の形態が崇福寺と同じであり、瓦積基壇の採用など大津京の寺院との共通点が多い。また、講堂が5間×4間という正方形に近い特異な規模である点は、基本的に川原寺・南滋賀廃寺の中金堂の規模を踏襲しており、川原寺式・南滋賀廃寺式伽藍配置との近縁関係や法起寺式伽藍配置への変化を明瞭に示している。なお、高麗寺における川原寺創建期同范軒丸瓦は、南山城の寺院に分布する高麗寺式軒丸瓦の祖型であり、この地域における川原寺式軒丸瓦の波及は、高麗寺の伽藍造営を契機としている。

平川廃寺からはいわゆる高句麗系楔型間弁をもつ軒丸瓦が出土しており、その創建は7世紀前半に遡る。しかし、伽藍の整備はやはり7世紀後半に降り、退化した山田寺式や川原寺式軒丸瓦を用いて法隆寺式の伽藍が整えられたようである。ここから南に500mほど離れて久世廃寺がある。ここからは奥山廃寺式や平川廃寺同様の高句麗系軒丸瓦が出土しており、その創建はやはり7世紀中頃に遡る。伽藍整備についてもやはり平川廃寺と連動しており、山田寺式や川原寺式軒丸瓦を用いて7世紀後半に降る。伽藍配置だけは平川廃寺と異なり、法起寺式となっている。このように二ヶ寺が近接して立地する例は比較的西日本に多く、飛鳥寺・豊浦寺例をあげるまでもなく僧寺・尼寺の関係を平川廃寺・久世廃寺にあてはめることはできまいか。ならば、法輪寺・法起寺が法隆寺式・法起寺式伽藍配置であることにもうまく符合する。なお、造営氏族については、高句麗系渡来氏族である黄文連氏をあてる説がある。

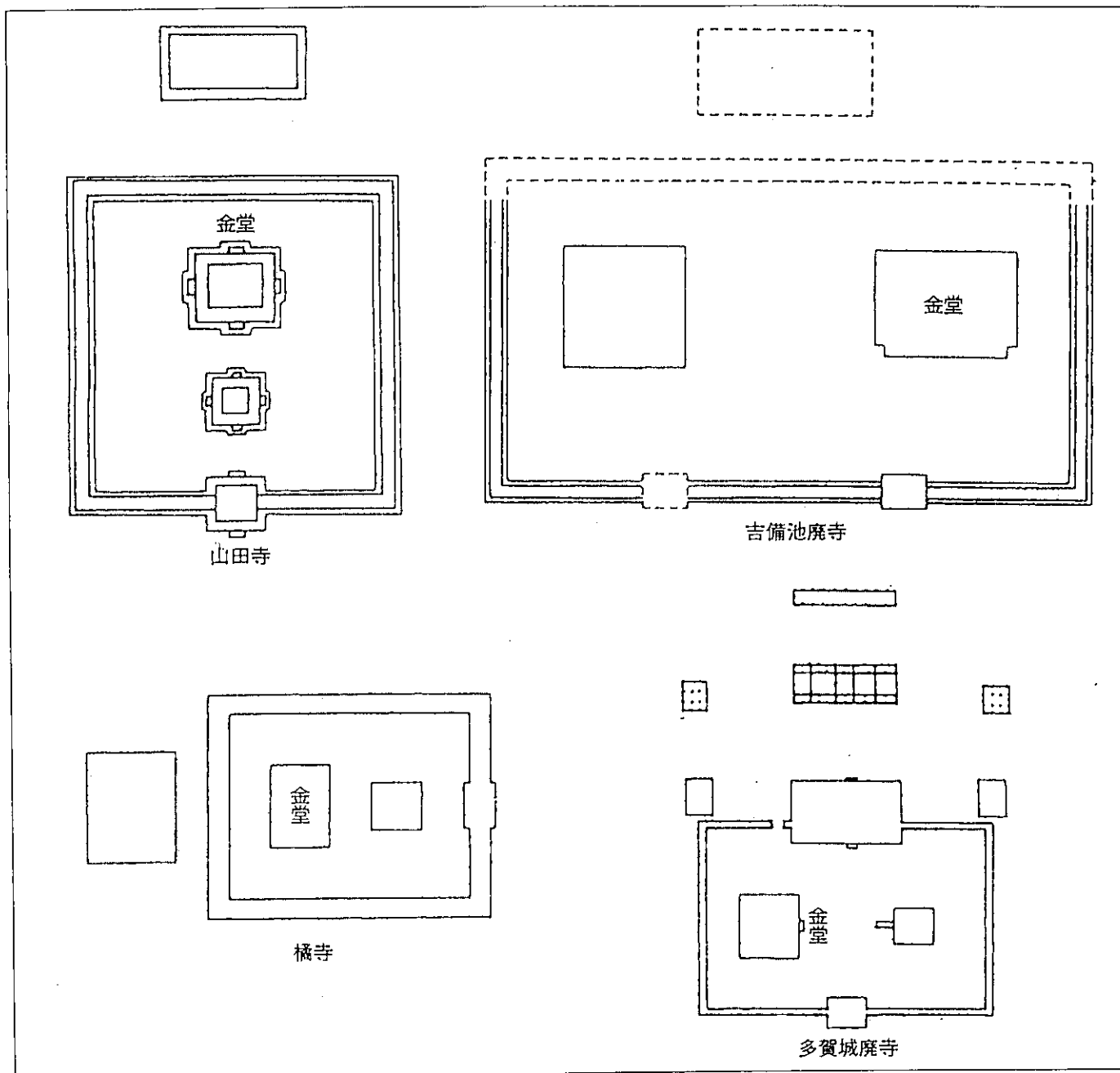
このように、高麗寺と平川・久世廃寺については、7世紀前半にすでに寺院造営の端緒が開かれ、

本格的な伽藍整備は7世紀後半に至ってからであり、ともに高句麗系渡来氏族による造営が想定されるという共通点がある。伽藍配置については、高麗寺に関しては川原寺式から法起寺式伽藍配置への移行が明らかであり、伽藍配置・軒瓦の双方からその共通点を追うことができる。平川廃寺については、山田寺式軒丸瓦の使用という点で山田寺式の祖型である百濟大寺の法隆寺式伽藍配置との共通点を追うことは可能である。しかし、久世廃寺については、平川廃寺との共通点は多いが法起寺式の配置をとっており、高麗寺のような明確な対応はみられない。むしろ、平川廃寺・久世廃寺に関しては、近接した二寺の対応（セット）関係が、伽藍配置・軒瓦の系列に優先している状況を観取できるのである。7世紀後半における寺院造営の拡散は、一律な系統論では律しきれず、時間の経過と地域の実情に左右されていた。

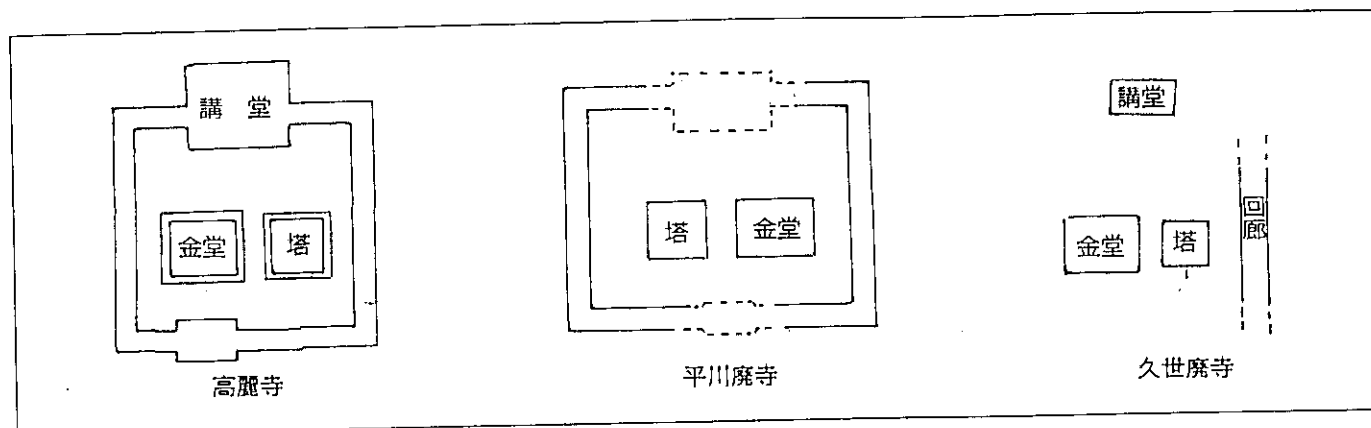
7世紀における寺院造営を伽藍配置という側面から、特に法隆寺式・法起寺式伽藍配置の成立から追ってみた。この時期の伽藍配置は、三塔一金堂式の伯耆上淀廃寺例をあげるまでもなく独自の配置をもつ寺院もあるが、その多くは朝廷における大寺の造営と連動して波及する。しかし、その波及はけっして一律のものではない。地方豪族層がきそって造寺活動を開始する背景には、鎮護国家のイデオロギーが地方支配の機能として浸透したことにより、仏教を中心とした政治体制の成立が観取できる。



第37図 主要な寺院の伽藍配置①



第38図 主要な寺院の伽藍配置 ②



第39図 南山城の伽藍配置

第二節 南山城における伽藍造営の伝播

はじめに

欽明朝における所謂仏教公伝以後、『日本書紀』崇峻天皇元年（588）には、七堂伽藍を備えた最初の寺として、蘇我氏の氏寺・飛鳥寺の造営が開始される。この飛鳥寺の造営を契機とした寺院造営の地方への波及は、山城国では高槻館に程近い相楽郡の高麗寺をもって嚆矢とする。高麗寺跡からは、飛鳥寺創建期の桜花弁式聚弁十弁蓮華文軒丸瓦同范例が二型式出土しており、予想される飛鳥寺の造営終了時期（609年）前後には、高麗寺の造営が開始されたものと考えられる。その後、程なくして北山城の葛野郡で北野廃寺が造営される。ここでも、飛鳥寺創建期の桜花弁式軒丸瓦に近似した二型式の製品が出土しており、同じ北山城の愛宕郡にある岩倉幡枝瓦窯の製品であることが確認されている。

このように、山城国内の寺院造営は7世紀初頭にすでに始まっており、あたかも、飛鳥寺造営が示す仏教文化受容の確実な合図を待っていたかのように、南山城の高麗寺と北山城の北野廃寺が相次いで建立される。しかも、その営まれた地は、渡来系氏族高麗（狛）氏と秦氏の両拠点であった。続いて、南山城の久世郡に久世廃寺・正道廃寺が、北山城の葛野郡に広隆寺が造営され、さらに、7世紀中頃までには相楽郡に燈籠寺廃寺、綴喜郡に三山木廃寺・普賢寺・志水廃寺、久世郡に平川廃寺が造営を開始したものと考えられる。山城国内、少なくとも南山城においては、三郡（相楽郡・綴喜郡・久世郡）すべてで造寺活動がみられる7世紀中頃を、寺院造営の一つのピークとして捉えることができよう。

ただし、この時期までに成立し、あるいは造営に着手したであろう寺院が、七堂伽藍とは言わないまでも主要堂塔（塔・金堂・講堂他）を備えた「伽藍」と呼べるような体裁を整え、あるいは「伽藍計画」をもって造営に着手していたかどうかは疑問である。少なくとも現段階では、発掘調査などによって、7世紀前半まで確実に遡り得る瓦葺き建物跡（基壇？）は確認されておらず、出土する古瓦の検討から、その建物（寺院）の存在が裏付けられているのみである。おそらくは、小規模な瓦葺き建物が一棟か、あるいはその周囲に掘立柱の建物が付随するような形態であったのであろう。主要堂塔が軒を連ね、伽藍と呼べるような形態が確実に認められるのは、今のところ7世紀後半に至ってからである。それ以前に端緒を見いだせる寺院においても、この時期に伽藍が整備されたと考えられるものが多い。そして、北山城の宇治・紀伊・愛宕・乙訓郡においては、この時期に寺院造営の端緒が開かれたものと考えられる。

ここでは、この7世紀後半を、山城国において伽藍造営が本格化する画期と捉え、特にその伝播の過程を、南山城地域においてこの時期に盛行する川原寺式軒丸瓦を中心に概観し、伽藍造営の実態について考察したい。

1. 川原寺式軒丸瓦伝播の定点

川原寺式軒丸瓦とは、言うまでもなく大和の川原寺創建期に使用されたものを標識とする、面違鋸齒文縁複弁八弁蓮華文軒丸瓦とその退化型式を言う。山城国内では、特に相楽郡・久世郡の古代寺院に集中して出土し、相楽郡の高麗寺跡・蟹満寺・泉橋寺・松尾廃寺・里廃寺・下狛廃寺、久世郡の平川廃寺・久世廃寺・正道廃寺・広野廃寺、綴喜郡の山滝寺跡・普賢寺で確認されている。なお、北山城においても、宇治郡の大鳳寺跡、紀伊郡の御香宮廃寺、乙訓郡の宝菩提院廃寺でこの型式が出土する。山城国内における川原寺式軒丸瓦出土の偏在ぶりは明らかであろう。

南山城、特に相楽郡・久世郡における川原寺式軒丸瓦の稠密な分布については、以前から「壬申乱の論功行賞」的な要因を想定する説（高橋美久二 1970）や「川原寺の寺領」との関連で捉える説（山崎信二 1983）、時の政権中枢部（官）における「主要交通路の確保」の過程を示すとする説（森郁夫 1986）などが唱えられ、その政治的・経済的な意義付けがなされてきた。ただ、これら諸説の可否については一先ず措くとして、まず、現在までの種々の調査で集積されている成果を確認しておくこととする。

先記した川原寺式軒丸瓦を出土する寺院のうち、今日までの発掘調査で、伽藍の状態がほぼ判明しているのは高麗寺跡（梅原末治 1939a, 田中重久 1938a・1944a, 山城町教育委員会 1989b, 木津川市教育委員会 2011）・平川廃寺（城陽市教育委員会 1971, 1974, 1975）・久世廃寺（城陽市教育委員会 1976, 1980, 1981）・大鳳寺跡（宇治市教育委員会 1987a）であり、伽藍の一部が検出されている蟹満寺（山城町教育委員会 1995, 蟹満寺釈迦如来坐像調査委員会 2011）・広野廃寺（宇治市教育委員会 1991）のほかは、実態は不明であるが古瓦の様相が判明している正道廃寺（城陽市教育委員会 1993）がある。なかでも高麗寺跡については、川原寺式軒丸瓦の原型式である大和川原寺創建期軒丸瓦の同範例が、伽藍整備において主体的に使用されており、しかもその退化型式は「高麗寺式」と呼ばれ、瓦当文様や製作技術に共通性のみられるものが南山城を中心に分布するのである（森下衛 1988, 菱田哲郎 1998）。また、高麗寺式の同範例は、近隣の蟹満寺からも出土しており、範や製品の移動順序・時期を知ることができる（金子裕之 1983, 蟹満寺釈迦如来坐像調査委員会 2011）。

ここでは、まず高麗寺跡・蟹満寺から出土する軒瓦について検討し、山城国における川原寺式軒丸瓦の導入時期とその型式変化の過程を明らかにしたい。

高麗寺跡 高麗寺跡は、木津川を望む河岸段丘上に立地しており、『日本書紀』中にその名が記され、現在も高麗寺の地名を残している。伽藍配置は所謂法起寺式と考えられ、過去の調査によりほぼ 200m 四方の寺域が確定した。ここからは飛鳥時代から平安時代にわたる古瓦が出土しており、最古例は大和飛鳥寺創建期の素弁十弁蓮華文軒丸瓦 2 型式と同範（KmM1.1A・B）である。しかし、高麗寺の伽藍が本格的に整備されるのは、次の白鳳時代になってからである。

調査により確認している塔・金堂・講堂には、瓦葺基壇が採用されている。伽藍整備期の軒丸瓦はすべて川原寺式で、範の違いから 8 型式に分類した。伽藍整備当初から造営の主体をなす型式は、大和川原寺出土 A 類と同範（KmM2.1）であり、他（KmM2.2～2.8）はすべてこの退化型式であ

る。セットとなる軒平瓦はすべて型挽きの重弧文軒平瓦である。

塔・金堂・講堂跡の調査では、伽藍整備期軒丸瓦出土総数のうち95%以上をKmM2 1～2 4の四型式が占めており、これらの型式が造営の主体であったことがわかる（山城町教育委員会 1989）。また、文様構成・製作技法の相違からA系統（KmM2 1・2 2）、B系統（KmM2 3・2 4）を区別した。A系統の製品は、瓦当文様の彫りが深く中房半径と弁区長が等しいのに対して、B系統は文様の彫りが浅く平板で中房径も菱縮している。また、前者は各部の調整をケズリで仕上げるものが多いのに対して、後者はナデを主体とし、未調整のものも多く、枷型の痕跡を明瞭に残すものがある。A系統の中での型式変化は明らかであり、KmM2 1からKmM2 2への変化は蓮子数の減少にある。また、KmM2 1からB系統への変化は、中房径の縮小として現れる。

なお、型式の前後関係が明らかなKmM2 1・2 2の各堂塔における出土比率をみると、金堂跡において前者が62.6%、後者が16.5%であったものが、塔跡では両者の出土比率がほぼ拮抗し、講堂跡に至って前者が11.9%、後者が54.8%と逆転する。これは、明らかに金堂→塔→講堂という造営順序を反映しており、一連の工事として造営が進められたことを示す。

続いて、中門・南門の造営段階に至ると、KmM2 1～2 4に比して瓦当文様の退化傾向が明らかなKmM2 5と2 6が積極的に使用される。KmM2 5は間弁の先端が花卉と接し、中房径が弁区長にほぼ等しいA系統。KmM2 6は間弁を失い単弁十六弁となっているが、中房径の小さなB系統の製品である。各系統内での出土比率の変化をみると、A系統ではKmM2 1が47.4%と相対的に占有率を増すが、KmM2 2が11.5%と使用量を減らし、替ってKmM2 5が17.9%とその不足分を補完する。B系統では、KmM2 4の使用停止に伴い相対的な占有率を減じるが、KmM2 3が12.8%と一定の使用量を保持し、新たにKmM2 6が9.0%の使用を示す。なお、高麗寺においては、中門・南門造営時に新たな要素としてKmM2 5と2 6の積極的な使用が開始される点を重視し、塔・金堂・講堂の造営段階から中門・南門の造営への移行をもって、前者を伽藍造営の第Ⅰ段階、後者を第Ⅱ段階と区別した。ただ、この第Ⅰ段階・第Ⅱ段階の区別は、高麗寺伽藍造営の中断を意味するものではなく、一連の造営における画期と捉えたい。

以上のことから、高麗寺の伽藍造営の過程を軒丸瓦の変遷でみると、

1. 高麗寺の伽藍造営は、川原寺同範例（KmM2 1）をもって開始される。
2. 瓦当文様の変化は一系のものではなく、A・B二系統のなかであるいは相互の影響を受けながら変化する。したがって、形式的に後出的要素をもつB系統の範も伽藍造営の比較的早い段階で出現する。
3. 伽藍造営の経過は、両系統の型式変化と漸移的な使用状況の変化により把握できる。具体的には、より主体的な使用状況を示すA系統の変化（KmM2 1→2 2→2 5）が、金堂→塔→講堂→中門・南門という建立順序を端的に示す。
4. 伽藍造営は軒丸瓦でみる限り間断なく進展しており、造営の長期化・中断はなかったものと考ええる。このことは、造営の当初から中門・南門の造営に至るまで、多少の増減はあっても一貫したK

mM2 1の主体的な使用状況に変化がない点、そして、3. にみる造営経過が漸移的な使用状況の変化で把握できる点を根拠としている。

蟹満寺 次に、蟹満寺の状況についてみてみよう。高麗寺跡と同じ木津川市山城町に所在する蟹満寺は、高麗寺がかつての大泊郷に属すのに対して北の綺郷に属している。『今昔物語』にも登場する蟹満寺縁起と国宝の丈六金銅仏はつとに有名である。なお、この丈六金銅仏については、その来歴と造立年代をめぐって、今も「蟹満寺論争」が展開されている（蟹満寺釈迦如来坐像調査委員会 2011）。

発掘調査では、金堂と考えられる白鳳時代の瓦積基壇建物跡（SB101）と東回廊の一部と考えられるSC201を検出したが、伽藍配置等は不明である。創建期には、大和の紀寺創建期軒丸瓦と同範品（KmM2 1）や高麗寺同範の三型式（KmM2 2・24・26）が含まれる（山城町教育委員会 1995）。

瓦積基壇建物跡周辺からは、調査により多量の白鳳期軒丸瓦が出土したが、87.9%までがKmM2 6同範例で占められており、この建物の創建瓦であることは疑い得ない。他の同範例（KmM2 2・24）の出土は、わずかである。高麗寺跡出土KmM2 6と蟹満寺同範例を比較すると、範キズおよび範の摩耗具合は、明らかに高麗寺例の方が進行しており、蟹満寺における最終段階の製品が高麗寺の伽藍造営第2段階で使用されていることがわかる。このことは、蟹満寺の少なくとも瓦積基壇建物の創建が、高麗寺の中門・南門造営に先立つものであることを示している。なお、蟹満寺出土の他の高麗寺同範例についても、高麗寺の伽藍造営第Ⅱ段階において、その使用量が半減、または停止している状況を考えると、蟹満寺の造営が高麗寺の造営に連動していることが理解できるのである。

ところで、高麗寺同範例が出土する遺跡は蟹満寺だけではない。他には高麗寺と同じ大泊郷の泉橋寺（山城町教育委員会 1989b）・松尾廃寺（天沼俊一 1926）からKmM2 2同範例が、蟹満寺と同じ綺郷の涌出宮遺跡（山城町教育委員会 2001b）からKmM2 6同範例が出土している。しかし、これらの遺跡の実態は不明であり、ここでは検討の対象外とする。

ここまでは、高麗寺跡出土川原寺式軒丸瓦の検討を通して、伽藍の整備状況と同範例の様相を概観した。次に、それらの年代的な位置づけを試みたい。

高麗寺の創建時期は、KmM2 1の年代を検討することにより決定できる。この型式は、天智天皇元年（662）から天武天皇2年（674）までの間に創建されたとされる川原寺の創建瓦（川原寺A類）と同範関係にある。川原寺におけるこの型式は、創建期軒丸瓦（川原寺A・B・C・E類）の中でも最も古式の技法痕跡しか残さないことが知られている。このことは、川原寺造営の初期の段階でその使用が停止されたことを示している。なお、川原寺例と高麗寺同範例を比較すると、明らかに製作技法が異なり、範の摩耗状態にも差が生じている。例えば、川原寺例の使用されている丸瓦が玉縁式であるのに対して高麗寺例が行基式であり、また、川原寺例が瓦当裏面を中凹みにするのに対して高麗寺例ではすべて平らに仕上げている。範の状態は、実見した限り川原寺例が摩耗のほとんどないシャープな状態であるのに対して、高麗寺例では川原寺例とほとんど遜色のない状態のものから範の摩耗

がかなり進んだものまでを含んでいるのである。このことから、当初、川原寺への供給を目的としたこの型式の生産が川原寺造営の早い段階で終了し、その後、範の傷みがほとんど進行していない状態で、範のみが別の工人集団の手に渡り、そして、高麗寺の造営に使用されたと考えられる。ならば、高麗寺の創建は、川原寺の創建にさほど遅れることなく開始されたものとしてよからう。

ところで、この川原寺A類（KmM2 1）同範例は、わずかではあるが高麗寺以外にも近江の崇福寺・南滋賀廃寺で出土する。これらの寺院は、天智天皇の大津宮遷都（667年）に伴い、穴太廃寺（第Ⅱ期）や三井寺前身寺院などとともに宮の周囲に造営されたと考えられ、壬申乱（672年）によって廃都となるまでにはかなり造営が進んでいたようである。これら大津宮周辺寺院では、川原寺例に比してやや中房の小さな古式の川原寺式軒丸瓦が主に使用されており、製作技法も異なる。これらと川原寺のものとの時期的な前後関係については、議論の余地を残すが、川原寺A類同範例に関しては、高麗寺例よりもさらに範の劣化が進んでおり、範キズを生じている。範は、大和から山城そして近江へと移動しているのである。また、高麗寺における川原寺式軒丸瓦の型式変化は、明らかに中房の縮小化傾向を示しており、大和の川原寺式と近江のそれとの前後関係を示唆していると言えよう（上原真人 1996）。

以上のことから、高麗寺の伽藍造営は、遅くとも壬申乱までにある程度の進展をみたものと解釈できる。670年前後にその始点をもつものと言えよう。次に蟹満寺の創建時期について考えてみる。先に検討したように、蟹満寺の造営開始時期は、高麗寺の伽藍造営第Ⅱ段階に先立つものである。しかも、高麗寺の伽藍造営には、工事の長期化・大幅な中断はなかったと考えられる。なお、通常の伽藍造営には、順調なものでも20数年の歳月が必要と言う。ならば、蟹満寺の伽藍造営開始時期は、680年代後半頃に求められよう。高麗寺・蟹満寺の伽藍造営は、南山城における伽藍造営の定点となる。

2. 伽藍造営の伝播

山城国内において、南山城に偏在する川原寺式軒丸瓦には、高麗寺跡出土の一連の退化型式と文様や断面形に共通性のみられる瓦がある。これらについて範と製作技術の双方から詳細な検討を行った菱田哲郎は、その瓦を製作した工人集団の系列を「高麗寺系列」、製品としての軒丸瓦を「高麗寺系軒丸瓦」と呼び、その展開過程を考察した。そこで把握している高麗寺系軒丸瓦とは、相楽郡の里廃寺出土例・下狛廃寺出土例、久世郡の正道廃寺出土例、綴喜郡の山滝寺跡出土例であり、他に近江の蒲生郡に所在する雪野寺跡出土例をあげている。

これら高麗寺系軒丸瓦の特徴を整理すると、

1. 瓦当文様の割付比が「中房径＝弁区長＋周縁幅」であり、間弁の形状が丫字状を呈し
2. 顎面に範および伽型の痕跡をよく留め
3. 瓦当裏面をナデで仕上げる点

などである。これらのうち、中房の蓮子の特徴から、雪野寺例が高麗寺跡出土KmM2 3に、他はKmM2 4に対応させている。

ところで、これら高麗寺系軒丸瓦として抽出した製品に対応するK mM2 3とK mM2 4、および本来は蟹満寺への供給を主目的として生産されたであろうK mM2 6は、高麗寺跡においてB系統の製品として分類したものである。高麗寺におけるB系統の製品の出土比率は、金堂で20.9%、塔で32.0%、講堂で30.9%、中門・南門地域で21.8%とほぼ二～三割の占有率を示しており、七～八割を占めるA系統の製品に対して、たえず補足的な使用状況に止まる。このことは、A系統の製品を生産する工人集団が、高麗寺への供給を主目的とした集中的な性格をもつものに対して、B系統の製品を生産する工人集団は、高麗寺に対する一定のシェアを確保しているとはいえ、より拡散的な性格をもっていたと解釈できる。よって、菱田が抽出した「高麗寺系列」の工人集団とは、高麗寺B系統の工人集団であり、「高麗寺系軒丸瓦」とは、高麗寺B系統の軒丸瓦にほかならないのである。

だとしたら、高麗寺系列の工人集団が活発に活動する時期、つまり、高麗寺系軒丸瓦が拡散する時期は何時であろうか。これに関しては、蟹満寺の造営状況が参考となる。すでにみたように、蟹満寺の創建は、高麗寺の伽藍造営第Ⅱ段階（中門・南門造営時）に先立ち、その動きと連動していた。しかも、高麗寺の伽藍造営第Ⅱ段階において姿を消すK mM2 4は、蟹満寺においてその同範例が出土し、南山城に分布する高麗寺系軒丸瓦の特徴と対応するのである。よって、高麗寺系軒丸瓦が拡散する時期は、ほぼ蟹満寺の創建と期を一にすると考えられる。

次に、高麗寺系以外の川原寺式軒丸瓦について検討する。久世郡の平川廃寺出土例と宇治郡の大鳳寺跡出土例は、瓦当文様の構成が川原寺式軒丸瓦の原型式に近似した様相をもつ。とはいえ、平川廃寺例では周縁が平縁状となっており、大鳳寺例では中房の蓮子周環が失われ、花卉と間弁の先端は接続している。原型式からの明確な飛躍と言えよう。なお、これらについては、その所属年代の解釈に大きな開きをもつ。

ところで、平川廃寺からは山田寺式の軒丸瓦が出土する。これは、蓮弁輪郭線が消え間弁が中房に達する後出的な製品である。同様のものは正道廃寺や山滝寺跡からも出土しており、先にみた高麗寺系軒丸瓦と大きな年代の開きはないと考える。ならば、平川廃寺の川原寺式例についても、高麗寺系軒丸瓦が拡散する時期に相当する年代観がえられよう。大鳳寺例についても、同様の年代を与えて大過あるまい。

ここまで、南山城とその周辺の宇治郡の川原寺式軒丸瓦を概観し、そのおおよその年代観を示した。ただ、この地域には、他にも川原寺亜式とでも呼ぶべき製品がある。次にこれらについて若干触れておこう。平川廃寺・久世廃寺・広野廃寺からは、平川廃寺式と呼ばれる周縁の鋸歯文を凸面や凹線で表現した型式のものが出土する。これらについては、先にみた平川廃寺出土の川原寺式例から派生したとする見解が唱えられているが、これらには内区と外区の間一条の圈線を設けるような、広野廃寺式とでも呼ぶべきまったく別の要素を含むものがあり、先の平川廃寺例からは派生し得ないものである。むしろ、これらの製品の弁の様相は法隆寺式に近く、宇治郡の岡本廃寺（B）や法琳寺跡出土例との関連を考えるべきであろう。7世紀末葉から8世紀初頭の年代が考えられる。

また、綴喜郡の普賢寺出土例のように、中房の蓮子の配列を六角形にし、平縁に線鋸歯を巡らす特

異なるものや、宇治郡の岡本廃寺例のような薬師寺式の周縁を除いたようなものもある。7世紀末葉の製品であろう。以上、南山城の川原寺式軒丸瓦とその亜式とも呼ぶべき製品を概観した。続いて、各々の寺院のなかでのこれらの位置づけを検討したい。

今日までの発掘調査で、伽藍の様相がほぼ明らかになっている寺院のうち、高麗寺については、塔・金堂・講堂を含む主要伽藍のすべてが、川原寺同范例と高麗寺系軒丸瓦によって整備されている。また、久世廃寺については、塔・金堂・講堂の建立で主体を占めるのは、川原寺亜式の製品である。大鳳寺では金堂のみの検出であるが、出土瓦の大半を川原寺式が占め、創建瓦として認定できる。蟹満寺についても、金堂と考えられる瓦積基壇建物跡を検出しているが、高麗寺系軒丸瓦が圧倒的多数を占める。平川廃寺については、川原寺式軒丸瓦を含む白鳳期のものは、伽藍の周辺部からの出土に止まり、瓦積基壇の塔・金堂は奈良時代後期のものと言う。正道廃寺は、郡衙に付属した寺院跡と考えられているが、実態は不明である。ただ、古瓦の出土量からは、高麗寺系軒丸瓦の段階での伽藍整備が予想されている。岡本廃寺については、瓦積基壇の金堂と塔・講堂が検出され、川原寺亜式が伽藍の主体を占める瓦である。広野廃寺については、堂・塔の検出はないが、やはり川原寺亜式が造営に使用されている。なお、里廃寺・山滝寺については、一部発掘調査は実施されているが、里廃寺では百濟末期様式の素弁蓮華文軒丸瓦が、山滝寺跡では山田寺式の軒丸瓦が採集されている。

以上のことから、南山城とその周辺では、川原寺式あるいはその亜式の導入を契機として、伽藍造営が展開したと考えられる。時期的には、天智朝で造営を開始する高麗寺を例外として、七世紀末頃がそのピークとなる。単なる宗教拠点としての寺院ではなく、七堂伽藍が求められた時期と言えよう。

まとめ

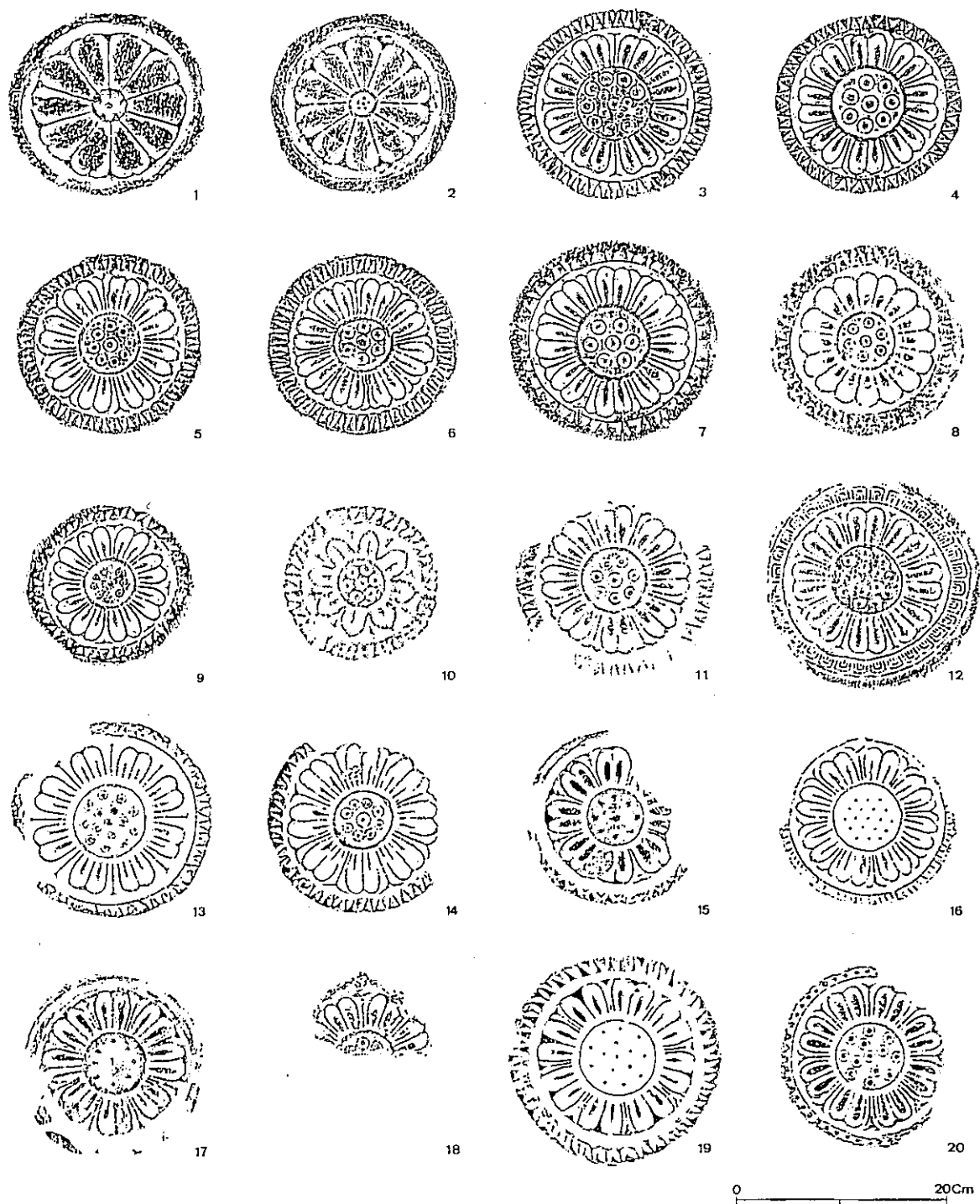
高麗寺跡と蟹満寺から出土する川原寺式軒丸瓦の検討を通して、南山城の伽藍造営の実態について考えてみた。その結果、山城国における七堂伽藍の造営は、今のところ高麗寺の伽藍整備をもって開始されたと考えられ、あたかも、天智天皇の大津宮遷都以後、宮周辺に営まれた諸寺の造営と連動するような様相を呈していた。このことは、大和→山城→近江という川原寺創建期の瓦範の移動に象徴される。

そして、南山城における伽藍造営の伝播は、まず、高麗寺系軒丸瓦（高麗寺B系統）を用いて普及する。その場合の定点となるのが、高麗寺同范例を出土し、高麗寺に近接する蟹満寺であった。この伝播は、高麗寺の伽藍造営第Ⅱ段階に連動する。

その後の展開については、検討不足であるが、久世郡広野廃寺・宇治郡岡本廃寺あるいは綴喜郡の諸寺のように、別の要素を加えて整備されていく。

なお、蟹満寺からは、大和の紀寺創建期軒丸瓦同范例が出土しており、山城東北部の宇治郡・紀伊郡・愛宕郡に偏在し、南山城三郡に分布する川原寺式と対をなす紀寺式軒丸瓦導入の契機であった可能性がある。だとすると、この地域への伽藍造営の伝播を考える場合に重要となろう。ただ、現段階では想像の域を出ない。

南山城における伽藍造営の伝播の実態について検討したが、主たる検討の対象とした高麗寺については、その創建の段階から一貫して山城国の拠点であった。そして、高麗寺の伽藍整備が終盤に差し掛かった頃、この地に近接して、新たな拠点寺院が出現する。蟹満寺である。このことは、天智そして天武・持統と続く国家仏教の形成期にあつて、その意志の本質と伝播の実態がいかなるものであるかを探るためのモデルとなろう。



高麗寺跡 (1: KmM11A 2: KmM11B 3: KmM21 4: KmM22 5: KmM23

6: KmM24 7: KmM25 8: KmM26 9: KmM27 10: KmM28)

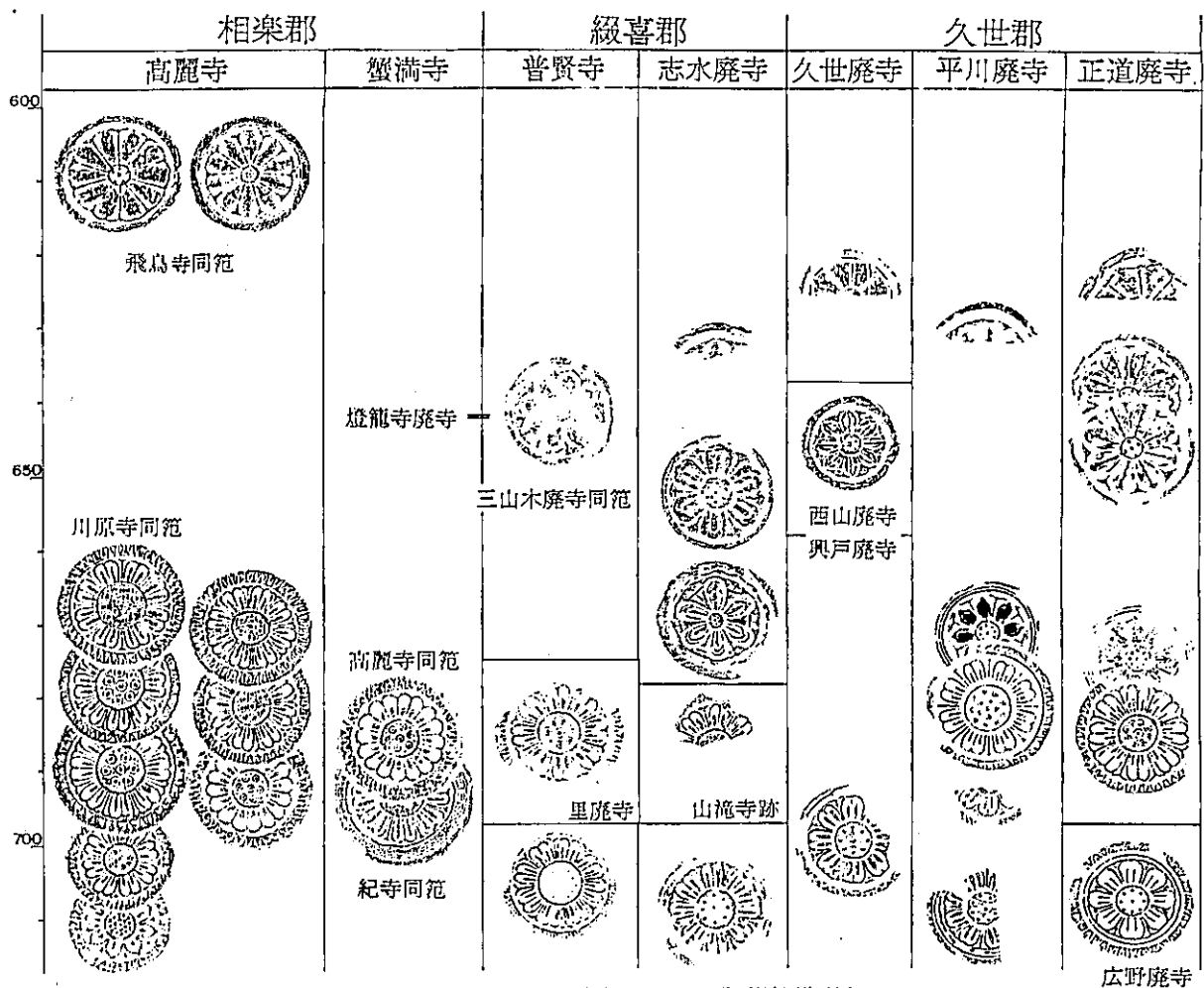
里麿寺 (11) 蟹崎寺 (12: KmM21) 平川麿寺 (13: C型式) 正道麿寺 (14: VIII型式)

久世麿寺 (15) - 普賢寺 (16) 志水麿寺 (17) 山滝寺跡 (18) 大鳳寺跡 (19: NM01)

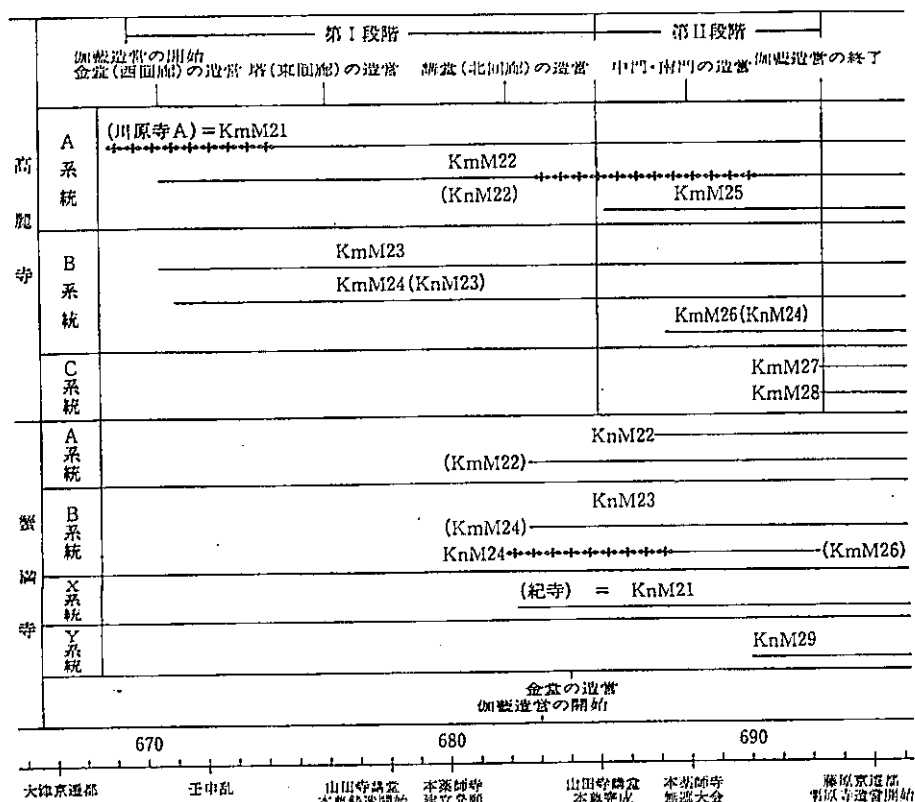
岡本麿寺 (20: NM01)

なお、同范関係の明らかなものは、他遺跡出土完好例を用い、一部合成復元

第40図 南山城の古代寺院出土軒丸瓦拓影



第41図 高麗寺・蟹満寺における伽藍整備過程



第42図 南山城の寺院造営過程

第三節 南山城における古瓦の特質

1. 山田寺式軒丸瓦導入以前の古瓦の様相

本節では、まず、山城における本格的な伽藍造営以前の状況について、飛鳥末期様式の軒丸瓦を通して再確認する。ここでは、通常、川原寺式に先行すると考えられる山田寺式軒丸瓦の導入について、山城地域の状況を概観する。

言うまでもなく、所謂「船橋廃寺式」軒丸瓦の最大の特徴は、素弁の端が尖って花卉の反転を表現し、中房の輪郭が丸みをもつか半球状を呈する点にある。これらの特徴は豊浦寺講堂の創建瓦ⅢAや斑鳩寺7Aなどにみられ、後に単弁型式の「木之本廃寺式」軒丸瓦へと繋がる。しかし、山城においては、今のところ「船橋廃寺式」と呼べる型式の導入・展開は確認できていない。したがって、ここでは「船橋廃寺式」に名を借りて、「花組」「星組」の百濟系や「豊浦寺式」の高句麗系、「奥山久米寺式」などを除く素弁系軒丸瓦を取り上げ、山田寺式導入前の状況を概観したい（奈良国立文化財研究所 2000）。

平安遷都前の山背国内には、現在までに約50ヶ寺の古代寺院が知られているが、そのうち、出土した軒瓦からみて7世紀中頃までに創建されたと考えられる寺院は10ヶ寺余りである。これら寺院の造営は、まず北山背は葛野郡の北野廃寺、南山背は相楽郡の高麗寺で開始される。創建時に使用された瓦は、ともに桜花卉式の「花組」で、高麗寺のものは飛鳥寺Ⅰ型式同範、北野廃寺のものは飛鳥寺近似例である。葛野郡の広隆寺は「星組」、乙訓郡の鞍岡廃寺は四天王寺ⅠA型式同範の「星組」、久世郡の久世廃寺は奥山廃寺ⅡD型式同範の「奥山久米寺式」、同郡正道廃寺も「奥山久米寺式」を用いて創建された。また、宇治郡の集上り窯は豊浦寺の瓦窯として「豊浦寺式」の高句麗系、現八幡市の河内国茨田郡楠葉平野山窯は四天王寺の瓦窯として「星組」の製品などを生産していた。

以下に検討する素弁系軒丸瓦は、すでに存在する上記型式からの影響をうけており、その在り方は一様ではない。

軒丸瓦の様相

山崎廃寺（乙訓郡 大山崎町大山崎 第44図1）（林亨 1987）

山崎宝寺付近採集と伝わるもので、弁端がやや尖り中房に丸みをもつ。楠葉平野山窯で焼成した四天王寺ⅠAに近似するが、弁端の殊点を持たない。蓮子の有無は不明。丸瓦の接合位置は高いようで凹面の補足粘土は少ない。軟質の焼成で灰白色を呈す。

乙訓寺（乙訓郡 長岡京市今里 第44図2）（京都府教育委員会 1967b）

素弁系のもの2型式のうち、第44図2は弁の隆起を欠き、蓮弁と楔状間弁の輪郭を同一の凹線で表現している。弁端は尖り中房はわずかに丸みをもって隆起する。蓮子数は不明。薄手の製品で、丸瓦との接合位置は高く凹面側の補足粘土は少ない。焼成は軟質で淡灰褐色を呈す。3は弁にポリウム

をもち、間弁の先端は中房に達する。弁端はやや尖り中房はわずかに丸みをもつ。中房周縁に細溝を巡らせ、蓮子数1+4。三重弧文軒平瓦とのセットが考えられている。

正道庵寺（久世郡 城陽市寺田 第45図1・2）（城陽市教育委員会 1993）

正道庵寺は、近傍の久世庵寺創建瓦（奥山庵寺ⅡⅠ同範）を祖型とする「奥山久米寺式」を創建瓦とするが、第45図1・2のような所謂「高句麗系」のものも出土している。1は文様の彫りが深く花弁中央の稜線は明瞭である。中房の突出は高く1+4の蓮子は花弁稜線に対応して割り付けられている。丸瓦の接合位置は内区外縁に沿っており、凹凸両面の補足粘土は比較的多めで、凸面側を平行タタキで整える。瓦当裏面はナデで平坦に仕上げ、縁に沿った強い指ナデを施す。この製品は楔形間弁の高句麗系準上り窯Ⅰ（第43図1～3）を祖型としているようで、瓦当が厚くなる段階に対応する。焼成は軟質で淡褐色を呈す。2は1に比べ文様の彫りが浅く花弁の先端にやや丸みをもつ。丸瓦の接合位置は高く、凹面側の補足粘土は多めである。調整はナデを主体としており、範は外縁にかぶさる。1に後続する型式である。焼成は軟質で、黄褐色を呈す。

平川庵寺（久世郡 城陽市平川 第45図3）（城陽市教育委員会 1971, 1974, 1975）

3は文様の彫りが比較的大きく、花弁の端が尖り反転を表現している。弁中央の稜線も比較的大きく明瞭である。中房はなで肩に盛り上がり1+9の蓮子を変則的に配す。丸瓦の接合位置は比較的高く、摩滅のため調整は不明であるがナデを主体としているようである。軟質の焼成で黄褐色を呈す。

西山庵寺（河内国茨田郡 八幡市八幡 第45図4）（八幡市教育委員会 1971）

瓦当文様は乙訓寺例（第44図2）に似るが異範である。瓦当は厚く側面は回転ナデで仕上げる。接合部凹面側の補足粘土は比較的多めで、裏面はナデで平坦に仕上げ縁に沿った強い指ナデを施す。焼成は硬緻で灰色を呈す。他に、高句麗系準上り窯Ⅰの退化型式が存在する。

志水庵寺（綴喜郡 八幡市八幡 第45図5）（八幡市教育委員会 1971, 江谷寛 1978）

5はやや肉厚の花弁の先端を尖らせている。文様の特徴は以下の第45図6～8に近い。摩滅のため調整は不明。焼成は軟質で灰白色を呈す。

三山木庵寺（綴喜郡 京田辺市宮津 第45図6）（田辺町教育委員会 1982）

6は肉厚で弁端がわずかに尖った花弁をもち、中房は台形に突出して1+6の蓮子をもつ。第45図6～8は同範。摩滅のため本例では判然としないが、外縁に一重の圈線がめぐる。細部の調整は不明であるが、瓦当裏面を中窪みに仕上げている。焼成は軟質で灰白色を呈している。

普賢寺（綴喜郡 京田辺市普賢寺 第45図7）（田辺町教育委員会 1982）

7は6と同範。外縁上の圈線が明瞭である。接合する丸瓦は端部未加工のままベタ付けしており、凸面側の補足粘土は少ない。

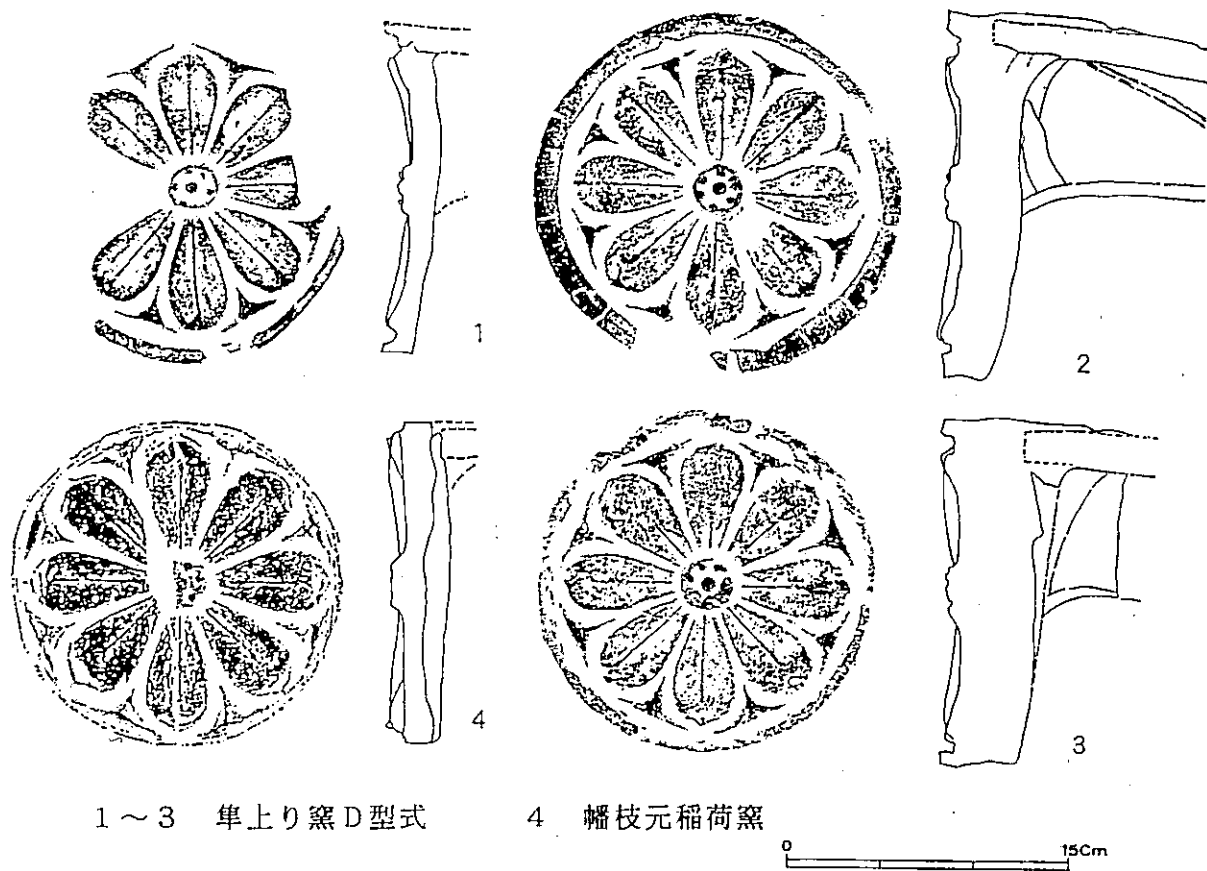
燈籠寺庵寺（相楽郡 木津川市木津 第45図8）（木津町 1984）

8は6・7と同範。摩滅しており細部の調整は不明であるが、範は周縁にかぶさる形式である。接合状況は7と同様。焼成はやや硬質で淡灰色を呈している。

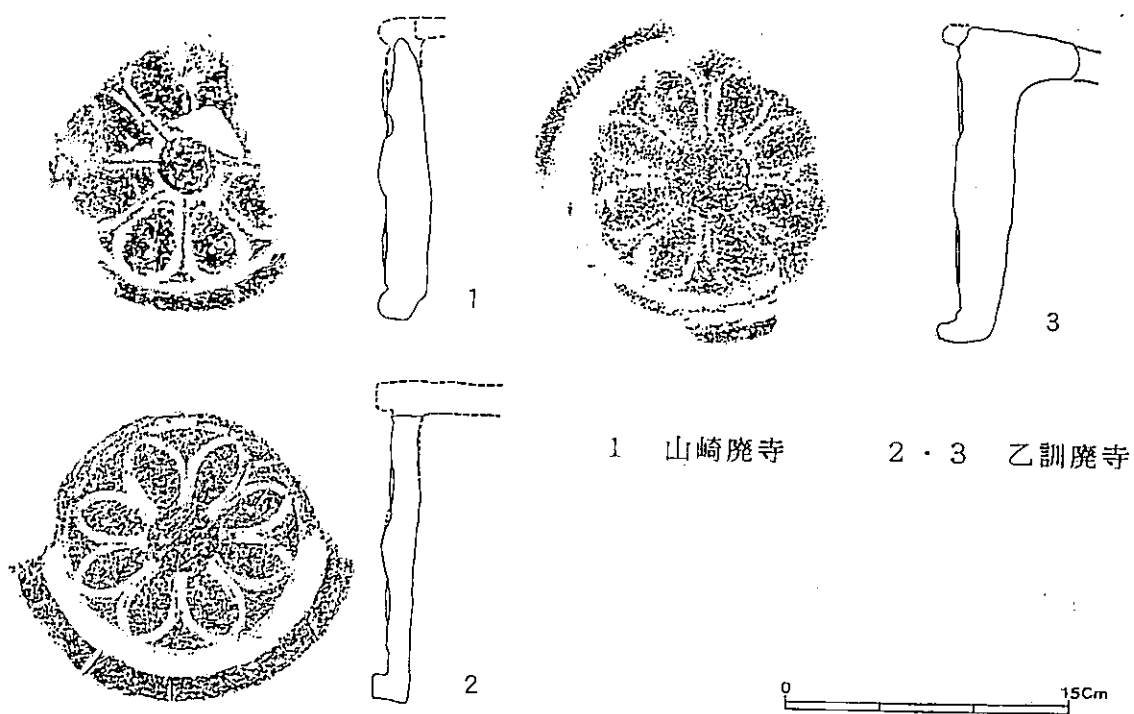
山城における「船橋廃寺式」軒丸瓦類似資料を概観したが、それぞれの地域で異なった展開を示していることがわかる。ここでは、それらを列記してまとめにかえたい。

1. 基本的に「星組」の系譜をひく楠葉平野山窯に近い西山廃寺や乙訓郡の乙訓寺、山崎廃寺例は、「船橋廃寺式」に比較的似た様相をもつ。このことは、奥山久米寺式から派生する「船橋廃寺式」の状況に似る。なお、西山廃寺には高句麗系隼上り窯D型式の退化型式と考えられる瓦が存在するが、楔形間弁が殊点に変化しており、その展開は決して一様ではない。
2. 高句麗系の楔形間弁をもつ隼上り窯D型式は、豊浦寺へは搬入されず山背国内で独自の展開をする。窯跡に近い久世郡の正道廃寺、平川廃寺例は、高句麗系の楔形間弁をもち、隼上り窯D型式に近似する。ただ、正道廃寺例は中房の蓮子が1+4で、近傍の久世廃寺創建瓦の奥山久米寺式の影響も看取できる。また、平川廃寺例の中房が比較的大きいのも、その影響であろう。
3. 木津川左岸に分布する綴喜郡の志水廃寺、三山木廃寺、普賢寺、燈籠寺廃寺例は、三山木廃寺以下3例が同範であり、志水廃寺例も近似している。中房以外は「船橋廃寺」式の特徴をもつが、外縁に圈線をもっている。この圈線は「木之本廃寺式」の吉備池廃寺式を初例としており、それ以後の製品である。おそらくは、1の山崎廃寺、乙訓寺例の系譜を引く展開として理解できよう。

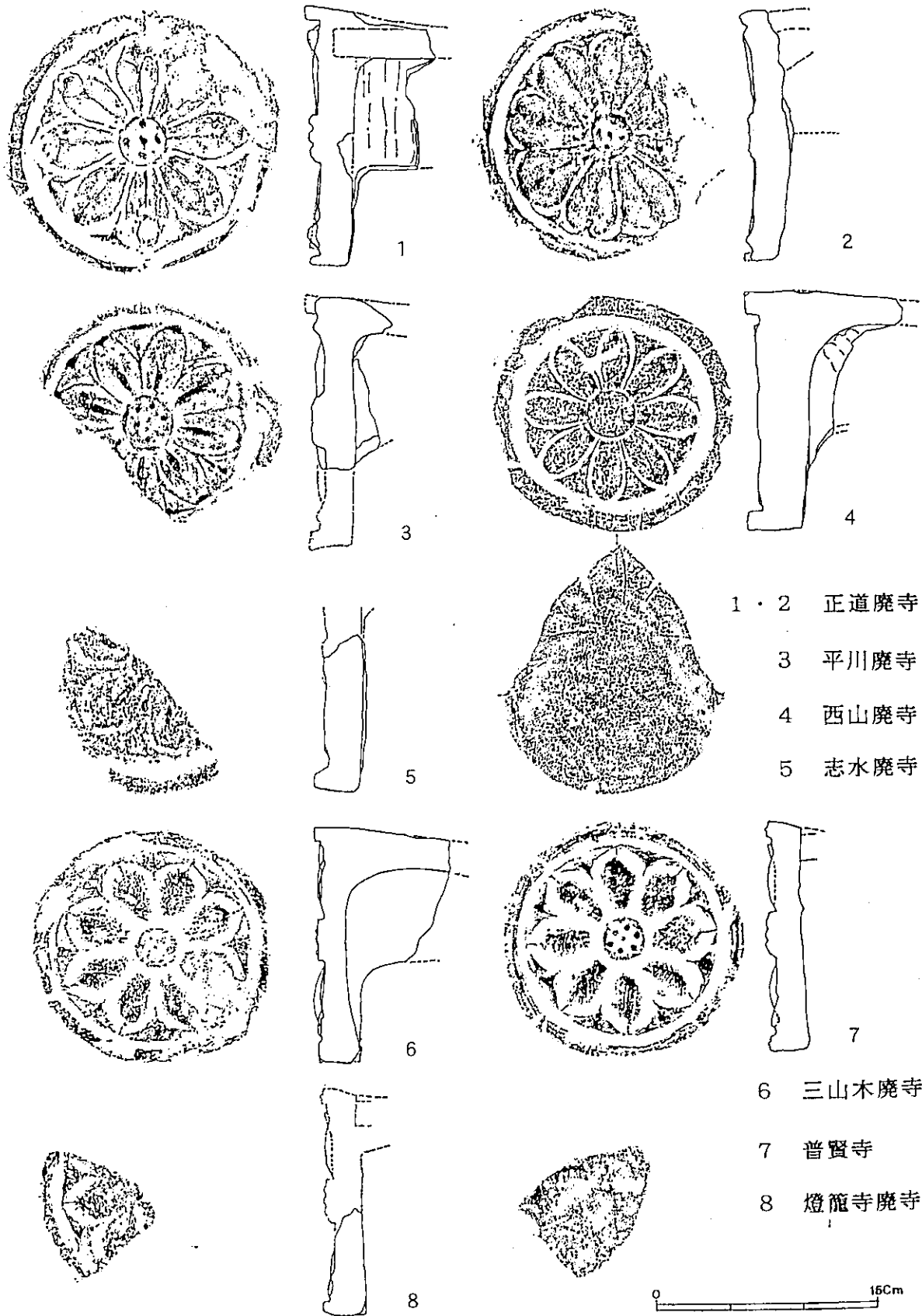
以上のことは、杉本宏氏が隼上り窯出土資料を通して検討した「山背国の寺院では、楔形間弁高句麗系は、百済系と併用されていると考えてよい。」とする結論（杉本宏 1998）に一致し、上原真人氏が「隼上り窯における軒丸瓦の変遷は、(中略)しかも、瓦当径が大きくなった「高句麗系軒丸瓦」は、軽寺式の百済系軒丸瓦の瓦当文様にも共通性がある。」とする指摘（上原真人 1996）にもあう。山城における「船橋廃寺式」的な展開と言えないだろうか。



第43図 山城の「高句麗系」軒丸瓦



第44図 山城の素弁系軒丸瓦 ①



第45図 山城の素弁系軒丸瓦 ②

2. 川原寺式軒瓦の様相

宇治川、旧小原池以南の南山城地域、特に相楽郡・久世郡における川原寺式軒丸瓦の稠密な分布については、以前から「壬申乱の論功行賞」による天武天皇方の分布を想定する説（高橋美久二 1970）や、「川原寺の寺領」との関連で捉える説（山崎信二 1983）、時の政権中枢部における木津川という「主要交通路の確保」を示すとする説（森郁夫 1986）などが唱えられ、その政治的・経済的な意義付けが成されてきた。その分布を見ると、南山城では相楽郡の山城町高麗寺跡・蟹満寺・泉橋寺・松尾廃寺・涌出宮遺跡、精華町里廃寺・下狛廃寺、久世郡の城陽市久世廃寺・正道廃寺・平川廃寺、宇治市広野廃寺、綴喜郡の京田辺市普賢寺、八幡市志水廃寺、宇治田原町山滝寺跡があり、北山城では宇治郡の宇治市大鳳寺跡・岡本廃寺、紀伊郡の京都市御香宮廃寺、乙訓郡の向日市宝菩提院廃寺がある。山城国内における川原寺式軒丸瓦の偏在ぶりは明らかである。しかも、この川原寺式軒丸瓦が盛行する時期は、山城国内において伽藍造営が本格化する画期とも重なる。これは、瓦積基壇の採用をもって顕著な傾向を示すのである。

山城における川原寺式軒丸瓦の伝播は、高麗寺の伽藍整備をひとつの大きな核として展開する。高麗寺の伽藍整備では、川原寺式軒丸瓦の基準となった大和川原寺創建期軒丸瓦（A、B、C、E類）のうちA類同範例（KmM21）（金子裕之 1983）が主体をなし、その退化形式（KmM22～28）が使用された。これらと同範あるいは文様や断面形に共通性が見られる一群をもって、高麗寺式あるいは高麗寺系列軒丸瓦の呼称が与えられている（菱田哲郎 1988）。なお、山城における川原寺式軒丸瓦の展開には、高麗寺以外に原型に近い製品を出土する平川廃寺、大鳳寺跡を核とする一群（森下衛 1988）が見られる。これらについては別稿に譲るとして、ここでは、高麗寺式軒丸瓦を中心に他は補足的に扱うこととしたい。また、ここで主題となる造瓦技法については、大和川原寺で採用されたと考えられる「枷型」を用いた軒丸瓦製作技法（星野猷二 1981）が、この地域の川原寺式伝播と明瞭な形で重なる点や、川原寺式の在地化（高麗寺式）の過程において、いわゆる「額面施文軒平瓦」（竹原伸仁 1992）がこの地域で新たに展開した可能性が高い点を重視する。

A 高麗寺式軒丸瓦の様相

大和川原寺A類を祖型とする高麗寺式軒丸瓦の特徴は、瓦当文様の割付比の特徴が高麗寺における間弁のY字からγ字化への退化と中房の縮小傾向によく対応し、額面の枷型痕跡をよく留め、瓦当裏面を基本的にナデて仕上げる点などにある。高麗寺との同範関係をもつ遺跡には、同町内の泉橋寺・松尾廃寺・涌出宮遺跡・蟹満寺があり、範は異なるが同一の特徴をもつ軒丸瓦出土遺跡には、同じ相楽郡の里廃寺・下狛廃寺、久世郡の正道廃寺、綴喜郡の山滝寺跡や近江の蒲生郡誓野寺跡が知られている。まず、高麗寺跡出土例（第46・48図）から概観する。

KmM21 大和川原寺A類同範。奈良県五条市荒坂瓦窯で生産された製品（A類）は、ここから川原寺創建当初に同寺へ供給されるが、早い段階で範が移動し、高麗寺伽藍整備のための瓦窯

から高麗寺へ製品が供給されたと考えられる。川原寺例でのこの型式は、丸瓦部に玉縁式を用い瓦当裏面を中窪みに成形するのに対し、高麗寺例では、行基式の丸瓦部と平埴に仕上げた瓦当裏面をもつ。また、範の状態は、明らかに高麗寺例で川原寺例より磨耗が進行しており、近江の崇福寺、南滋賀廃寺でさらに範の劣化した製品が出土している。このことから、天智天皇の大津宮遷都（667年）前後の時期をもって、高麗寺伽藍整備開始の定点とすることができよう。

範は外縁の外側にかぶさる形態のもので、枷型を使用している。顎面はケズリ調整により枷型の痕跡をほとんど残さないが、文型と枷型の隙間からはみ出した粘土の突起をわずかに留めるものがある。第46図1は瓦当厚4cm前後のもので、裏面に枷型の厚さに対応した粘土板を重ねている。丸瓦との接合に際しては接合箇所指頭で溝をつくり、補強粘土は凹凸両面とも比較的少ないが凸面側にキザミを施すものがみられる。各部の調整はケズリを主体としナデで仕上げる。2は瓦当厚3cm前後のもので、1に比べ薄手の丸瓦を使用している。接合に際しては補強粘土を比較的多めに使用し、丸瓦凹凸両面にキザミを施したものがみられる。各部の調整はケズリの後ナデで仕上げる。3は瓦当厚2.5cm前後と薄手で、使用する丸瓦も小振りである。補強粘土は少なく各部の調整はナデを基本とする。1→2→3への変化と時期差がみられる。

KmM2 2 KmM2 1に後続する型式で、中房半径と弁区長が等しく花卉の割付も正確である。中房の蓮子を1+7に配し、外縁の面違鋸歯文の傾斜はKmM2 1と逆である。範には枷型を使用するが、KmM2 1同様顎面にケズリ調整が施される。断面形状・製作技法はKmM2 1の2の段階に対応する。同範例は、泉橋寺、松尾廃寺、蟹満寺から出土しており、伝大和法起寺例がある。

KmM2 3 KmM2 1・2 2に比べ中房が縮小し、1+8+8の蓮子を配す。瓦当下端厚は2.5cm前後と一定しており、外周には枷型痕を明瞭に残すものが多い。各部の調整はナデを基調としており、随所に指頭王痕を残す。

KmM2 4 範の割付はKmM2 3に等しく、中房に1+6の蓮子を配す。瓦当はKmM2 3よりやや薄手で枷型を使用するが、文型の径より枷型の径の方が大きいようで、顎面の枷型痕をケズリ落としているものが多い。各部の調整はナデを基調とする。同範例が蟹満寺から出土している。

KmM2 5 中房はKmM2 2より縮小するがKmM2 3・2 4より大きく、1+6の蓮子を配す。瓦当下端厚は2.5cm前後と一定し、外周には枷型痕を明瞭に残すものが多い。瓦当は薄く中房付近で2.0cm未満のものが多い。丸瓦部の接合に際して施す補強粘土は少なく、瓦当裏面は縦方向のナデ、顎面は未調整である。

KmM2 6 間弁が完全に消失して単弁16弁となっている。中房はKmM2 3・2 4よりさらに縮小し、突出した中房に1+6+6の蓮子を配す。KmM2 5同様、瓦当下端厚は2.5cm前後と一定し、外周には枷型痕を明瞭に残すものが多い。瓦当は薄く中房付近で2.0cm未満のものが多い。丸瓦部の接合に際して施す補強粘土は多く、各部の調整はナデを基調とし、随所に指頭王痕を残す。同範例は、蟹満寺の他、涌出宮遺跡、光明山寺跡から出土する。

KmM2 7 他に比して瓦当径、中房径ともに縮小しており、間弁も萎縮している。突出した中房には1+8の蓮子を配し、外縁の面邊鋸歯文の傾斜はKmM2 2と同じである。瓦当下端厚は3.0cm程度で一定しているが、栴型使用の有無は不明。部分的にナデ調整が施される。

KmM2 8 瓦当径 11.6 cmを測る小型瓦である。複弁が単弁化し、間弁の退化も著しい。黄褐色を呈する軟質の製品で、ほとんど調整はみられない。

次に、高麗寺同範例以外の高麗寺式軒丸瓦（第47図）について、高麗寺同範例との比較により検討する。

里麿寺（相楽郡精華町里）（星野猷二 2000） 2000年度の精華町による調査では、金堂と考えられる瓦積基壇建物跡が検出され、多量の屋瓦が出土している（中島正 2010d）。先行型式もわずかに存在するが、造営の主体は第47図1の高麗寺式一型式のみであった。瓦当文様の割付比や間弁の様相は KmM2 3・24に近似するが、中房の蓮子は1+7に配す。大振り・厚手の製品で、瓦当下端厚は3.0cm前後と一定している。外周には栴型痕を明瞭に残すものが多く、各部の調整はナデを基調とし、瓦当裏面を平坦に仕上げる。高麗寺B系列の特徴をもつ。

下狛麿寺（相楽郡精華町下狛）（田中重久 1938b） 第47図2は近傍の鞍岡神社付近で採集されたもので、1と同範の可能性が高い。高麗寺B系列の特徴をもつ。

正道麿寺（城陽市寺田）（城陽市教育委員会 1993） 寺院としての遺構は未検出であるが、正道官衙遺跡東辺から第47図3（正道遺跡Ⅷ式）の高麗寺式が多量に出土した。素弁式、山田寺式等の先行型式もわずかに出土するが、この高麗寺式が圧倒的で、伽藍造営の主体であることがわかる。瓦当文様の割付比や間弁の様相は KmM2 3・24に近似するが、中房の蓮子は1+8に配す。やや大振りの製品で、瓦当下端厚は2.5cm前後と一定している。栴型痕を残しナデ調整を施す点は、やはり高麗寺B系列の特徴である

これら以外にも宇治田原町の山滝寺跡（宇治田原町教育委員会 2006）で高麗寺式が出土するが詳細不明。中房が縮小したB系列の製品であろう。また、滋賀県竜王町の雪野寺（柏倉亮吉 1937）の製品は、当文様の割付比や間弁の様相は KmM2 3・24に近似する（菱田哲郎 1988）。栴型痕を残しナデ調整を施す点は、やはり高麗寺B系列の製品である。

以上、高麗寺同範以外の高麗寺式を概観したが、すべて高麗寺B系統の製品であることがわかる。この状況は、高麗寺伽藍整備で安定供給を続けてきた KmM2 4が、中門・南門造営段階で姿を消し、替わって蟹満寺で主体的に使用された KmM2 6が、この段階で補助的に使用される状況と関連する可能性を考慮したい。

B 額面施文軒平瓦の様相

高麗寺跡において、川原寺式軒丸瓦に伴う軒平瓦（第48図）は、すべて重弧文（無文、三～五）の

製品であり、その主体は大和川原寺同様、型挽き四重弧文軒平瓦である。弧線の凹凸はシャープで立体感をもつが、KmM2 8に対応する小型瓦もある。

ここでは、高麗寺式軒丸瓦を出土する他遺跡での軒平瓦の状況を概観する。その場合、特に顎面施文軒平瓦（第49図）のあり方について注目したい。下顎面に何らかの文様が施された重弧文系の顎面施文軒平瓦については、山背特に南山城地域で隆盛し、各地に波及・展開したことが指摘されている（竹原伸仁 1992）。これらはすべて7世紀後半～8世紀初頭の所産と考えられ、顎面に直線文を基調とした突帯あるいは沈線を施すなどの特徴を有している。

蟹満寺（木津川市山城町綺田）（山城町教育委員会 1995、蟹満寺釈迦如来坐像調査委員会 2011）
先記したように蟹満寺造営に際しては、KmM2 2・24・26の高麗寺同范例が使用されるが、その主体となる KmM2 6は高麗寺本来の型式ではない。伴う軒平瓦の大半は、高麗寺同様、大和川原寺の原型に近い段顎の押し引き四重弧文軒平瓦である。この中にわずかではあるが、4の四重弧文系顎面施文軒平瓦が含まれる。薄い段顎には、平行する三条と二条の低い直線突帯を、型挽きで施文している。竹原伸仁氏分類のⅡB類にあたる。

里廃寺（相楽郡精華町里）（星野猷二 2000）
蟹満寺同様、ほぼ高麗寺式のみで造営が成されたと考えられる里廃寺では、立体感の乏しい段顎の四重弧文軒平瓦の他に、1・2・5の顎面施文軒平瓦が使用されている。1は、瓦当面に五重弧、顎面に四条の断面台形の直線突帯を、型挽きで施文している。竹原分類ⅡB類。2は、瓦当面に三重弧、顎面に二条単位の沈線を計四条施している。同ⅢB類。5は、瓦当面に四重弧、薄い顎面に七条の直線突帯を型挽きで施文している。同ⅡB類。なお、下狛廃寺から発掘調査で出土している6も、顎面施文軒平瓦である。

正道廃寺（城陽市寺田）（城陽市教育委員会 1993）
高麗寺式以外に先行する山田寺式等も一定の割合で出土する正道廃寺では、直線顎の重弧文軒平瓦顎面に高い突帯を設けるものがある（10）。先行する山田寺式を出土する近傍の平川廃寺（3）や、船橋廃寺式系の軒丸瓦を出土する綴喜郡の三山木廃寺（11）、志水廃寺（9）においても同様である。これらは、竹原分類ⅠA、ⅠB類に相当する。

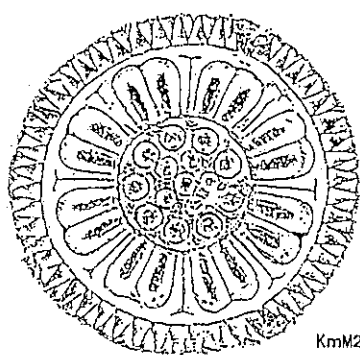
山滝寺跡（綴喜郡宇治田原町荒木）（宇治田原町教育委員会 2006）
正道廃寺同様、高麗寺式以外の先行型式をもつ山滝寺跡例（8）は、段顎の瓦当面に四重弧、顎面に五条の低い直線突帯を型挽きで施文している。竹原分類ⅡB。

高麗寺においてはまったく見られなかった顎面施文軒平瓦が、范の移動により密接な関係をもつ蟹満寺でわずかではあるが出土し、ほぼ高麗寺式のみで造営された里廃寺で多様な展開を見せる。また、船橋廃寺式・山田寺式系の先行型式をもつ寺院においては、やや先行する可能性をもつが、顎面施文軒平瓦を伴って伽藍整備が進行するようである。ここでは、高麗寺式の展開＝在地化の進行とする観点から、顎面施文軒平瓦の様相を概観した。

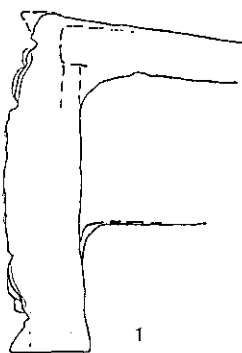
山城における川原寺式軒丸瓦の展開について、高麗寺式軒丸瓦の拡散と在地化の過程という側面から考えてみた。

高麗寺の伽藍造営は、大和川原寺 A 型式同範軒丸瓦 (KmM2 1) をもって大津宮遷都 (667 年) 前後の時期に開始され、一貫して A 系列軒丸瓦 (KmM2 1・2 2・2 5) が造営の主体となる。造営途中で案出された B 系列の軒丸瓦は、供給量全体の 2～3 割を占めるが、決して主体的な使用はなされず、高麗寺式として南山城地域を中心に各寺院へ拡散していく。この現象は、同一の技術伝統をもつ工人集団の拡散と捉えることができよう。その時期は、蟹満寺金堂の造営が進行し、KmM2 6 として高麗寺の中門・南門造営に蟹満寺から範が移動した時期に対応する。南山城における伽藍造営のひとつの画期と捉えることが可能である。

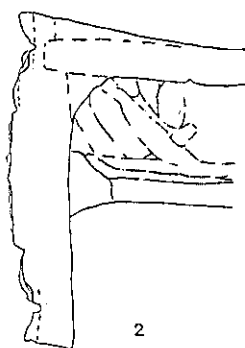
高麗寺 B 系列の拡散は、同時に高麗寺式としての在地化の現れである。久世郡、あるいは綴喜郡周辺で案出されたのであろうこの地域特有の顎面施文軒平瓦は、高麗寺式しかほとんど用いない蟹満寺や里麿寺でも出土し、時期的に先行する船橋麿寺式・山田寺式系の在地的技術伝統と融合する。いずれにしても、山城における川原寺式軒丸瓦の展開は、伽藍造営の需用を満たすため、大和の最新の技術とそれ以前から育っていた在地の技術が融合することによって波及したものと考えられる。



KmM21



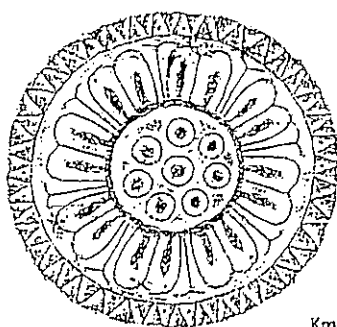
1



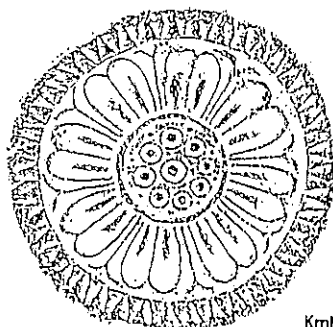
2



3



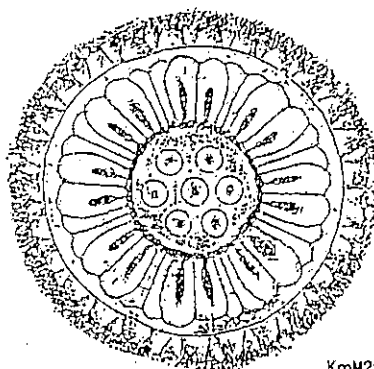
KmM22



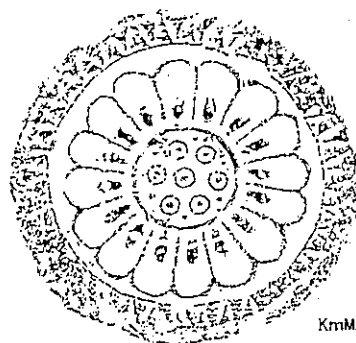
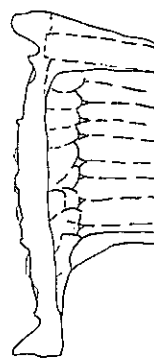
KmM23



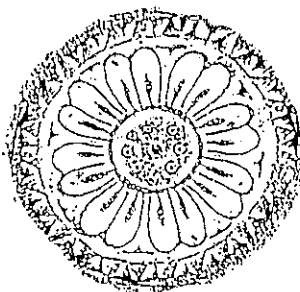
KmM24



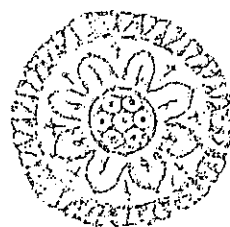
KmM25



KmM26

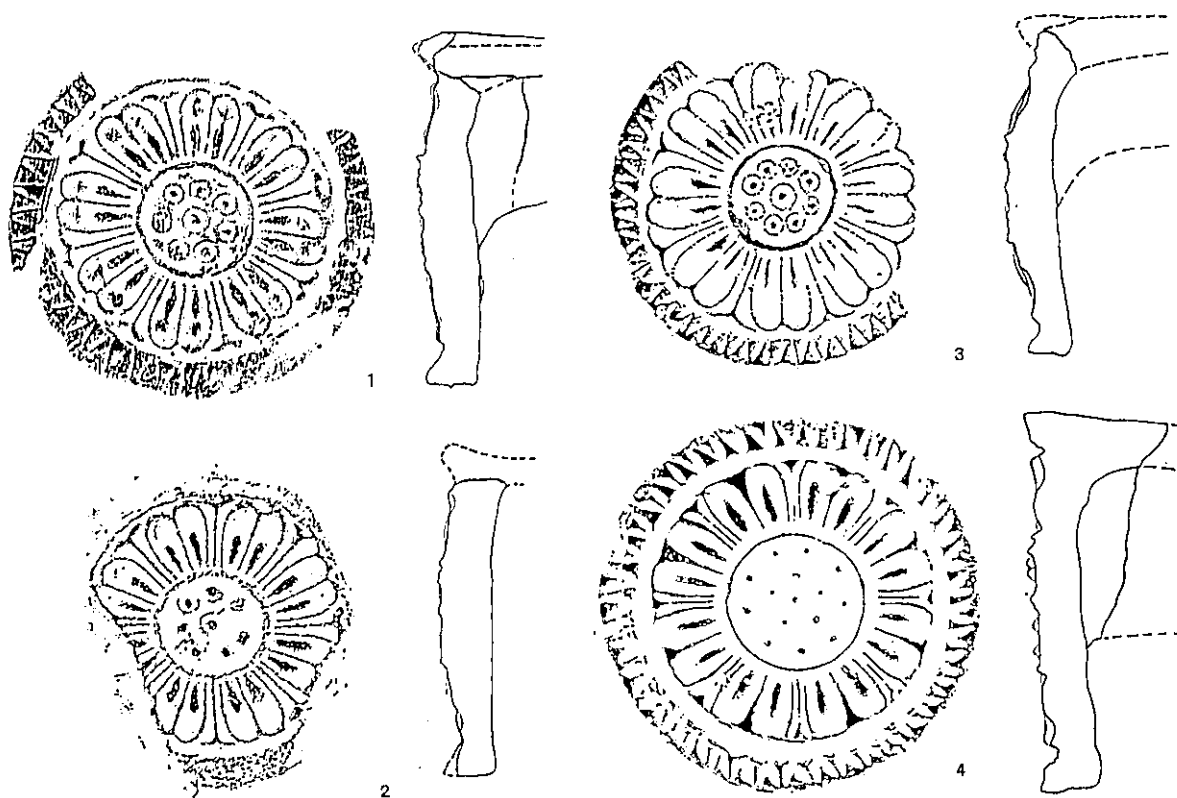


KmM27

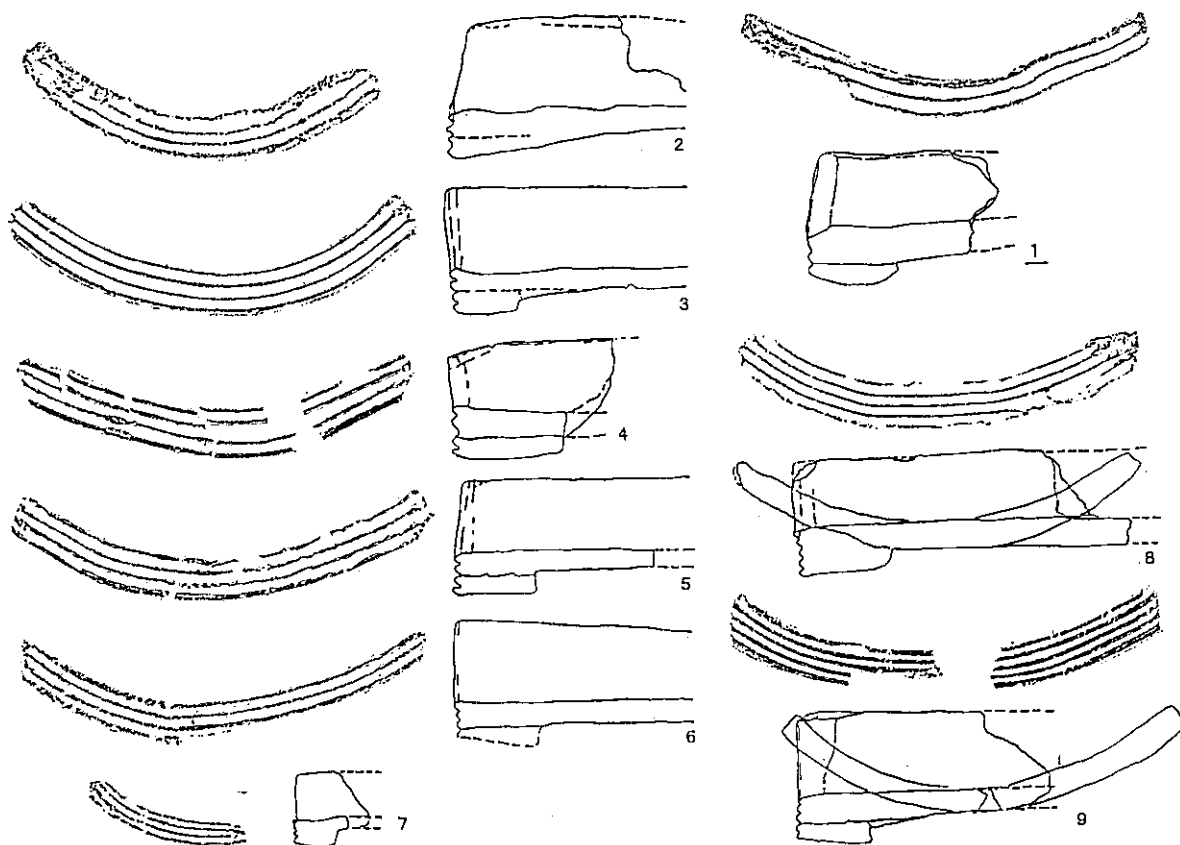


KmM28

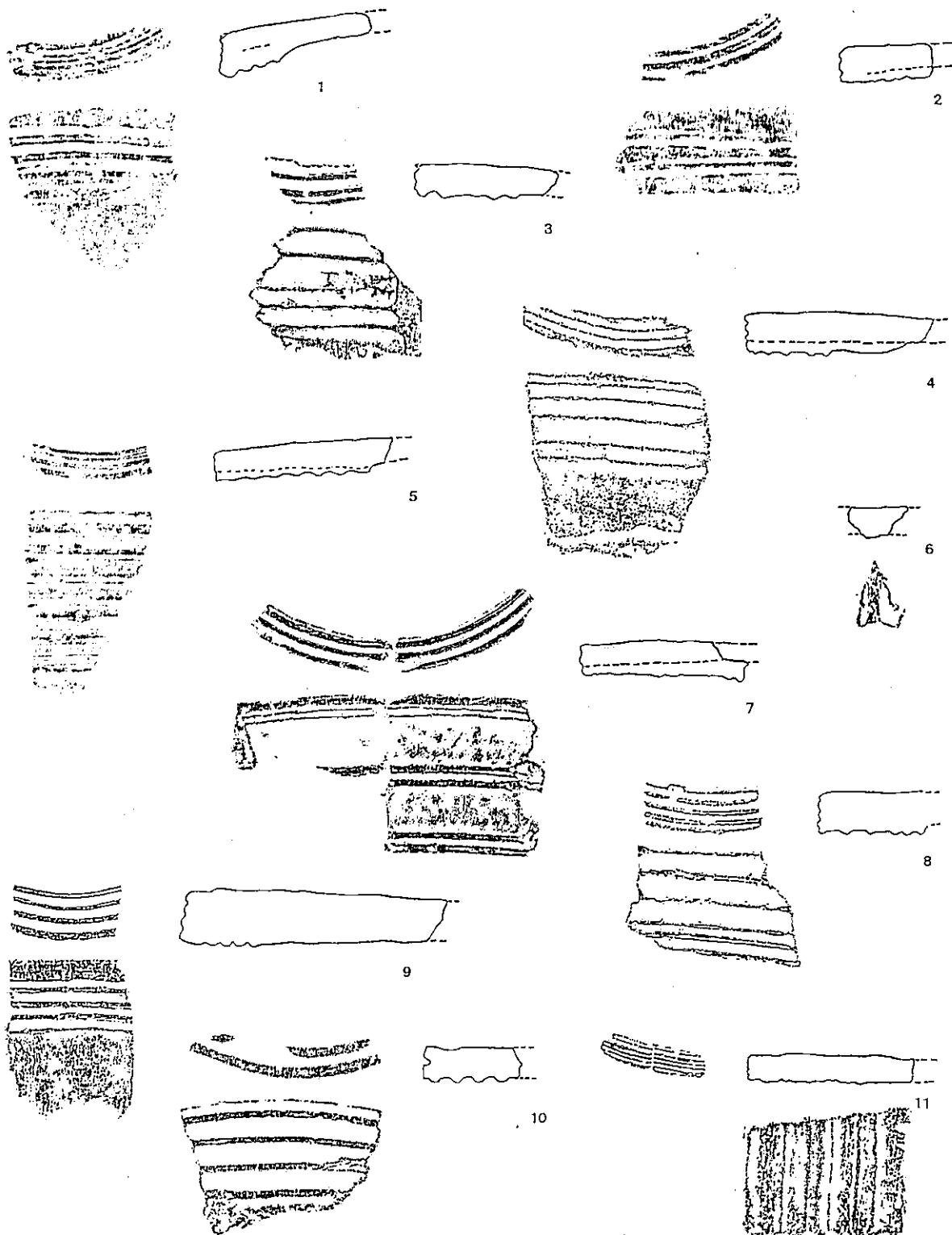
第46图 高麗寺跡出土軒丸瓦



第47図 高麗寺式と周辺の川原寺式軒丸瓦
(1 里麿寺、2 下狛麿寺、3 正道麿寺、4 大鳳麿寺)



第48図 高麗寺跡出土軒平瓦



(1・2・5 里麿寺、3 平川麿寺、4 蟹満寺、6 下柏麿寺、
7 久世麿寺、8 山滝麿寺、9 志水麿寺、10 正道麿寺、11 三山木麿寺)

第49図 山城の鄂面施文軒平瓦

第四節 蟹満寺と丈六金銅仏の謎

1. 蟹満寺の位置と環境

(1) 蟹満寺の位置と地理的環境

京都府木津川市山城町綺田浜 36 番地に所在する真言宗智山派の寺院・蟹満寺は、京都府南部の南山城地域を貫流する木津川の東岸に位置し、木津川の支流・天神川南岸に接する尾根の突端に立地している。記録では、長久 4 年(1043) 頃に成立した『大日本国法華経験記』や『今昔物語集』などに、蟹にまつわる寺号起因説話(蟹満寺縁起) が収録されており、現在の蟹満寺も蟹供養放生会を催す寺院として著名である。境内の本堂には、中央に国宝本尊の丈六像を、脇壇には蟹にまつわる縁起の本尊である木造聖観世音菩薩坐像(重美) を祀っている。

蟹満寺が所在する木津川市は、京都府最南端の相楽郡の中核をなし、南の低丘陵・奈良山を介して奈良市に接する。その範囲は、天平 12 年(740) 遷都の恭仁京の京城をほぼ占め、宮(大養徳恭仁大宮) が置かれた瓶原の地と平城宮とは、直線距離にして約 10 km と至近の位置にある。蟹満寺が所在する合併前の旧山城町は、昭和 31 年(1956) に棚倉村・高麗村・上狛町の合併により成立し、棚倉村は、明治 33 年(1889) に平尾村と綺田村が合併して出来上がったものである。この綺田(か)の地名は、承平年間(931~938)に成立した『和名類聚抄』に記す相楽七郷のひとつ蟹幡(加無波多) 郷に由来し、蟹満寺の寺名も古く蟹満多寺・紙幡寺と記されていることから、本来の寺名は郷名を冠して「かみ寺」と訓じられたものであろう。なお、蟹幡郷には、『延喜式』に綺原坐健伊那大比売神社・和伎坐天乃夫岐売神社が記されており、かつての棚倉村の範囲に相当し、南の相楽郡大狛郷、北の綴喜郡多可郷に接していた。この地は、かつての恭仁京右京北郊の地であり、古北陸道に面した交通の要衝とすることができる。

ところで、木津川市北部・山城町域の地形は大きく分けて、東半部を広く覆う山地、山地縁辺部に木津川とその支流が形成した河岸段丘群(台地)、木津川が形成した河谷平野(低地) に区分できる。山地は、地表に露出すると風化作用にたいへん弱い花崗岩でできているものが多く、森林の乱伐により大量の土砂が下流の木津川本流に堆積し、川床が上昇した結果、天井川が形成される。盆地が狭い南山城地域では、生産活動の基盤である木津川氾濫原を確保するために木津川には高い堤防が築かれ、木津川を挟んで各支流の河川が人為的に整備されていく過程で、江戸時代後期、天井川化が急速に進行していくのである。木津川東岸のこの地域では、北から渋川・天神川・不動川・鳴子川の 4 河川が天井川化し、周辺に微高地を形成している。特に、蟹満寺背後の天神川では、18 世紀以後、5.0~6.5 m にも及ぶ急激な河床レベルの変化があった。しかも、昭和 28 年(1953)の南山城水害の被害は甚大で、中世以前の地形把握をますます困難にしている。

(2) 蟹満寺論争

従来行われてきた「蟹満寺論争」には、主として二つの争点があった。一つは、仏像様式の解釈上の問題から、本尊釈迦如来坐像の白鳳造立説と天平説の対立があり、いま一つは、蟹満寺釈迦像の伝来についての疑念である。したがって、従来の論争では、釈迦像の造立時期を白鳳とするか天平とするか、ならば、その時期に創建され、この仏像に相応しいこの寺院から運ばれたのか、そこに焦点が当てられてきたと言っても過言ではない。その根底には、「蟹満寺釈迦像ほどの優秀な仏像が、単なる地方寺院である蟹満寺に、創建当初から伝来するはずはない」とする前提があったことは事実である。それでもなお、ただ一人、田中重久のみが蟹満寺境内から出土する白鳳期の古瓦を根拠に、「蟹満寺旧仏説」をとらえた（田中重久 1938）が、ほとんど顧みられることはなかった。

蟹満寺旧境内における考古学的な調査は、平成2年(1990)の現蟹満寺庫裏の建替えに伴う事前調査を出発点として、今日まで7次に及ぶ確認調査と、別に周辺の関連調査を実施している。これらの調査では、現蟹満寺本堂および庫裏の地下に白鳳期の東西棟瓦積基壇建物跡が遺存しており、予想される巨大な建物規模からはこれが金堂跡と考えられること、そして周辺部の調査からは、かつて方二町にも及ぶ広大な寺域を有していたことなどが半明している。しかも、この金堂跡のほぼ中央には、今日もなお、蟹満寺釈迦像が鎮座し続けているのである。このことは、かつて角田文衛が、東方山中に栄えた東大寺の別所である光明山寺の考古学的・文献学的調査成果を根拠に、地元で伝承のあった蟹満寺本尊の「光明山寺本尊説」を退けたように（角田文衛 1936）、また、中野玄三が、近傍の飛鳥創建寺院である高麗寺跡の発掘調査成果を根拠に、角田の「高麗寺本尊説」を明快に退けたように（山城町 1987）、蟹満寺旧境内の発掘調査成果は、現蟹満寺本尊の「蟹満寺旧仏説」をほぼ決定づけたと言っても過言ではない。なお、恭仁宮跡（山背国分寺跡）や井手寺跡の今日までの発掘調査成果からは、山背国分寺旧仏説（杉山二郎 1961）や井手寺旧仏説（足立康 1944）も、すでに根拠のない憶測であることは明らかである。

ところで、有名な「法隆寺再建・非再建論争」や「薬師寺論争」については、若草伽藍の発掘調査や藤原京本薬師寺の発掘調査成果により、法隆寺西院伽藍としての再建（島田敏男 2007）や本薬師寺と平城薬師寺の同時併存の実態（花谷浩 1995）が明らかとなり、考古学的にはほぼ決着をみたとされている。しかし、それでもなお、前者にはいまだ建築様式論的な疑念が残り、後者には本尊台座等に関する疑念が完全に払拭されたわけではない。同様に、「蟹満寺論争」においても、「白鳳創建寺院としての蟹満寺」と「蟹満寺伝来の本尊像」が無関係であることを証明できない限り、他の寺からの移座説は論理的に成立しないことは明らかであるにもかかわらず、それでもなお、なぜ、この地に「蟹満寺釈迦像ほどの優秀な仏像が伝来するのか」とする当初からの疑念は、依然、残るのである。

今後も蟹満寺に関する考古学的調査の可能性は大きく、課題は山積している。そして、その考古学的調査の意義は、まさにこの疑念に対する答えの提示に他ならない。蟹満寺と蟹満寺本尊像を巡る謎は、白鳳創建寺院としての蟹満寺に、今も優秀な丈六金銅仏が伝来するという事実を出発点として、新たな「蟹満寺論争」を生むこととなった。憶測ではない事実の積み重ねにこそ、「蟹満寺論争」の前進が約束されているのである。

2. 蟹満寺旧境内の伽藍構造と範囲

(1) 蟹満寺旧境内の伽藍構造

蟹満寺旧境内の伽藍配置については、平成2年度の第1次調査以来7次におよぶこれまでの調査(山城町教育委員会 1995, 木津川市教育委員会 2008)でも判然としないが、検出した金堂跡(SB101)と東回廊跡(SC101)の規模・位置関係からは、南面し、塔・金堂を並置する法隆寺式・法起寺式の配置とは考えられず、また、金堂正面に塔を配した四天王寺式とする調査成果も得ることはできていない。なお、金堂西側に北回廊が取り付けられないことから、回廊が背後の講堂に取り付くか金堂・講堂間を通ると考えられる。薬師寺式あるいは大官大寺式のような配置についても検討すべきであろう。

① 金堂跡(SB101)

金堂跡と考えられる瓦積基壇建物跡については、平成2・18・19年度(第1・6・7次)に調査を実施した。基壇外装の瓦積は上下2段の階段構造となっており、基壇の南北規模は下壇の瓦積で17.8m(60尺)、上段で17.2m(58尺)を測る。上・下段瓦積の間隔は1尺と狭く、下段瓦積の高さは平瓦の平積で4枚程度、約10cmと低い。上段の瓦積には近接して裳階と考えられる礎石が遺存しており、その上面まで瓦が積まれたとすると1尺程度の高さがあつたようである。また、基壇上面では、根石を伴う礎石の据付け痕跡と礎石が元位置から動いて落とし込まれた状態で出土しており、この礎石を据付け位置に復元すると、その高さは上段瓦積上面より2尺程度高くなってしまふ。このことから、裳階と考えられる礎石列と底の柱列との間にもう1段の段差が必要となるのである。したがって、基壇の高さは、下段瓦積の底面を当初の境内面の高さとする、約1m程度となろう。このように礎石の高さが異なる類例としては、上成・下成基壇にそれぞれ礎石をもつ奈良県明日香村の飛鳥寺東・西金堂が想起される。基壇の東西規模については確定できていないが、平成19年度第7次調査で連続する基壇盛土を東辺部で確認しており、東西棟であることは明らかである。なお、基壇の方位は真北に対して4°30'程度西に偏しており、基準尺は唐尺(天平尺)で1尺=0.297mが用いられている。また、この基壇方位は、宝暦9年(1759)建立の前本堂にも踏襲されていたことは示唆的である。

建物規模については、梁行の規模からして2間×5間の身舎四面に庇が付く構造が予想され、柱間寸法は梁行44尺(9尺・13尺×2・9尺)、桁行78尺(9尺・12尺×5・9尺)で、その四周に6尺幅の裳階が廻る構造を復元した。ならば、基壇の東西規模は下段の瓦積で約28m(94尺)となろう。なお、基壇外装の瓦積は特に西・南側で一様に二次焼成を受けて赤変しており、焼土の整地層が基壇上面を覆う。金堂建物が焼失したことは明らかである。

白鳳創建金堂の焼失時期については、平安初頭での瓦の差替え時期を上限としており、鎌倉期には基壇周囲に上層幅3m以上の堀(SD101)が造られたようで、瓦積は足元を掬われるように外方に滑っていた。その後、室町期には、堀の埋没後墓地化が進行したようで、多量の羽釜等骨蔵器が出土する。そして、基壇北辺に井戸(SE101)が掘られ、江戸期には基壇西側に石垣(SA101)を構築している。

宝暦9年建立の旧本堂下層の状況については、小規模な建物(S B701)が本尊台座を覆うように存在していたようである。その西側には、近接して円形の前栽石組(S X601)と敷石列(S X602)があり、S B701では地鎮が行われている。宝暦台座石組直下で検出した土壌(S K701)は本尊の据付痕跡と考えられ、周囲八方の小土壌群はS K701とともに鎮壇遺構(S X701)の可能性をもつ。これらの遺構は、直接、白鳳創建期の基壇版築層を掘込むが、当初の須弥壇等痕跡は確認できていない。宝暦9年直前の状況である。なお、台座の状況は、昭和28年(1953)の南山城水害により破損し、その後、補強のため周囲をコンクリートで覆う修理がなされていた。礎石の転用等の有無を確認するとともに台座を覆うコンクリートの除去作業を行ったが、台座そのものはかつて「石垣状に積まれた」様相は失われ水害時の改変が著しく、基底石のみが宝暦9年段階の状況をとどめていた。

巨大な白鳳基壇の存在と丈六本尊像とを直接に結びつける遺構の検出には至らなかったが、丈六本尊像に相応しい金堂規模は、両者の結びつきを示唆するものである。

② 回廊跡(S C201)

金堂跡基壇東方では、東回廊基壇の一部と考えられる地山削出しの高まりを検出した(202Tr)。検出箇所は基壇の東辺部で、花崗岩の割石列を外装としていたようである。金堂基壇西辺からこの割石までの距離は約50.8m(171尺)を測り、予想される金堂南北中軸線からで124尺、左右対称だとすると東西回廊基壇外側でほぼ250尺の規模となる。南回廊については、207Trと206Trの間に道路をはさんで1.5m以上の段差がみられることから、この上段にその位置を求めた。また、講堂跡と北回廊については、昭和28年の南山城水害の土砂が5m以上も堆積しており調査不能であるが、水害前は、現蟹満寺境内より一段低い茶畑であったという。いずれにしても、天神川が屈曲する内懷に主要堂塔を配置するような伽藍設計が存在したようである。伽藍中枢部の状況は、金堂以外ほとんど不明である。

(2) 寺域

蟹満寺旧境内北辺部(天神川北側)については、平成5・6年度の第3・4次調査や平成20年度の北綺田地区圃場整備事業に伴い発掘調査を実施している。これらの調査では、蟹満寺創建以来の地形環境の変化をたどることができた。古代蟹満寺の遺構群は、弥生時代中期の末頃(畿内第Ⅳ様式)を下限とし鎌倉時代を上限とする沖積低地に存在しており、13世紀前半から15世紀後半までは天神川による浸食を受けていることがわかった。現在の天神川が天井川化する年代は、18世紀後半をもって上限とし、現在の天神川河道にそって厚く堆積する天井川地形の骨格が形成されるのである。金堂基壇(S B101)北側で検出した井戸(S E101)は、天神川の水位が低下した時期の遺構であり、現在の天神川河道にそって厚く堆積する黄褐色砂礫層内から出土する京焼茶碗や肥前の染付(波佐見焼)は、天神川の急激な成長期(18世紀後半)の遺物である。この間、5.0~6.5mにも及ぶ急激な河床レベルの変化があったのである。そして、昭和28年の南山城水害では、天神川南側に大量の土砂が堆積することとなり、蟹満寺の寺観はさらに変化した。今まで周囲より一段高かった蟹満寺現境内は、周囲と同じ高さとなり、背後には高い壁が出現したのである。

寺域北辺の調査では、東西方向に並行する柵列(S A301・302)や溝(S D405・406)を検出してお

り、寺域北辺を画する可能性をもつ遺構である。特に2条の溝は、ともに幅約3m・深さ約1m、心心間5.5mを測り、間に約3m(10尺)の平坦面を残す。溝埋土からは7世紀後半代の土器が多量に出土しており、金堂東西中軸線からの心心間距離で約21.4m(720尺=2町)と理想的な位置にある。また、東側山裾付近では、七世紀後半から八世紀代の掘立柱建物群が密集しており、蟹満寺の伽藍造営期に重なる。建物は比較的小規模で、総柱の倉庫と考えられるものもあり、寺域縁辺部の雑舎群の様相と評価できる。ここからは、片面のみ三文字の墨書をもつ付札木簡が1点出土しており、[殿料カ]と読める。他には、墨書土器や円面硯・転用硯、漆が内面に付着した長頸蓋片などが出土した。墨書土器には、「殿」「殿坏」銘をもつ須恵器坏や「殿物」「不見女」銘をもつ土師器坏などがある。これらは、蟹満寺造営氏族に係る文字資料と考えられる(木津川市教育委員会 2009)。

寺域東・西・南辺については不明であるが、東辺については丘陵が迫っており、延喜式内社の綺原坐健伊那大比売神社境内付近が目安となろう。いづれにしても、金堂を中心とした100尺方眼が、伽藍設計の基準として考えられる。

3. 蟹満寺出土遺物の概略

蟹満寺旧境内の発掘調査で出土した遺物の大半が金堂跡(SB101)で出土した瓦類であり、他は土師器・須恵器等の土器類である。瓦類には白鳳期から近・現代のものまで含むが、大半が古代蟹満寺にかかるものであり、他は近世以降のものである。

(1) 軒丸瓦(11型式16種)

KnM2 1(復弁8弁蓮華文軒丸瓦)。緩く内傾する外縁に雷文を巡らした所謂「紀寺式」軒丸瓦である。金堂(SB101)と東回廊(SC201)の間に1点のみ出土した。奈良県明日香村の紀寺跡(小山廃寺)出土例と同範。同廃寺出土例には4型式以上の同文異範の存在が知られているが、本品は最も古式の金堂跡出土例と同範である。近隣での同範例の出土はなく、他には奈良県明日香村の川原寺跡出土例(奈良国立文化財研究所 1960)がある。

KnM2 2(復弁8弁蓮華文軒丸瓦)。内傾する外縁に面違鋸歯文を巡らした所謂「川原寺式」軒丸瓦である。金堂基壇西辺の瓦堆積層から2点出土した。奈良県明日香村の川原寺跡出土A型式同範例(高麗寺KmM2 1)を原型とする所謂「高麗寺式」の製品で、木津川市高麗寺跡出土KmM2 2型式(以下、高麗寺跡出土軒丸瓦は型式番号を用い「KmM2 2」と略称)と同範である。高麗寺跡においてこの型式は、川原寺同範のKmM2 1に直属する製品で、特に講堂の建立にあたって主体をなす型式である。

KnM2 3(復弁8弁蓮華文軒丸瓦)。やはり「高麗寺式」の製品でKmM2 4同範。金堂基壇西辺の瓦堆積層から1点のみ出土した。高麗寺跡においてこの型式は、伽藍整備当初から使用されたKmM2 1・2 2とは異なり、やや遅れて副次的に用いられている。高麗寺以外、他遺跡での出土を聞かないが、木津川対岸の相楽郡精華町里廃寺出土例(星野猷二 2000)は、文様構成・制作技法が類似している。

KnM2 4 (単弁 16 弁蓮華文軒丸瓦)。「高麗寺式」の製品でKmM2 6同範。発掘調査では、金堂周辺から現在までに 130 点以上出土しており、金堂創建瓦であることは明らかである。また、金堂瓦積には、基壇の装飾としてこの型式が瓦当面を表にして挟み込まれていた。高麗寺跡においてこの型式は、中門・南門造営に際して補足的に使用されており、伽藍南東部に隣接して築かれた高麗寺 1・2号瓦窯の製品であることが予想される。なお、蟹満寺においては、一堂一型式に近い状態でこの型式が使用されており、長期にわたる瓦当範の使用による範キズの進行状況を辿ることができた。範キズは、キズのまったくない状態から、まず中房中心の蓮子周環にキズを生じ、続いて二重目の蓮子周環から弁区に接する界線にかけてキズが生じる。高麗寺出土例では、蟹満寺例の最終段階よりさらにキズが進行し、摩耗も著しい。このことは、蟹満寺の創建が高麗寺の中門・南門造営段階に先立つことを示しており、蟹満寺造営のために新調されたこの型式の範が、高麗寺の伽藍造営終盤にいたって高麗寺瓦窯へ移動したことを証明している。蟹満寺の創建は、高麗寺の伽藍整備と連動しているのである。

KnM2 9 (複弁 5 弁蓮華文軒丸瓦)。金堂基壇西辺の瓦堆積層から 2 点のみ出土した。他遺跡での同範例の出土を聞かない。川原寺式の退化型式と考えられる。

KnM3 1 (複弁 8 弁蓮華文軒丸瓦)。平城宮 6291Aa 型式同範。金堂基壇西辺の瓦堆積層から 2 点のみ出土した。天平 12 年(740)の恭仁京遷都前の製品である。なお、高麗寺跡例(KmM3 7)や薬師堂古墳出土例は、範を彫り直した後のAb 段階の製品であることが知られている。

KnM3 2 (複弁 9 弁蓮華文軒丸瓦)。平城宮 6318Ab 型式同範。KnM3 1 同様、恭仁京遷都前の製品である。金堂基壇西辺の瓦堆積層から 1 点のみ出土した。

KnM3 3 (複弁 8 弁蓮華文軒丸瓦)。平城宮 6282Bb 型式同範。金堂基壇西辺の瓦堆積層から 7 点出土した。天平 16 年(744)の恭仁京廃都・平城京遷都後の製品である。

(2) 軒平瓦 (11 型式 16 種)

KnH2 1 (素文軒平瓦)。すべて顎部の形体は段顎であるが瓦当面の施文を省略している。製作技術の特徴は四重弧文KnH2 3 Aと同じである。金堂(SB101)基壇西辺の瓦堆積層から 2 点のみ出土した。なお、高麗寺跡からも同様の製品(KmH2 1)が出土している。

KnH2 3 A (四重弧文軒平瓦)。段顎の瓦当面には、丸みを帯びたやや浅い型挽き四重弧を施文している。発掘調査では現在まで 400 点以上も出土しており、金堂跡出土軒平瓦全体の 9 割以上を占める。KnM2 4 とのセット関係は明らかである。なお、この型式には、通常とは逆に平瓦狭端側に瓦当を設けた例が散見され、軒平瓦製作技法の倒錯がみられる。

KnH2 3 B (四重弧文軒平瓦)。瓦当面にはやや尖りぎみの凸線を 4 条、粘土帯の貼り付けにより肥厚した直線顎の顎面にも丸みを帯びた凸線を 5 条型挽き施文した所謂「顎面施文軒平瓦」である。瓦当面と顎面の施文具は明らかに異なっており、顎面の施文は 5 条同時に行っている。金堂基壇西辺の瓦堆積層から 2 点出土した。なお、下顎面に何らかの文様が施された重弧文系の顎面施文軒平瓦については、特に南山城地域で隆盛し、各地に波及・展開したことが指摘されている。これらはすべて

7世紀後半～8世紀初頭の所産と考えられ、顎面に直線文を基調とした凸線あるいは沈線を施すなどの特徴を有している。近傍では、相楽郡南草野町の里麿寺・下狛麿寺、綴喜郡宇治田原町の山滝寺跡で蟹満寺例に近似した製品が出土している。これは、高麗寺式軒丸瓦の波及と寺院造営の拡散過程が連動した結果と考えられる。

K n H 3 1 (均整唐草文軒平瓦)。平城宮 6681 E 型式同範。金堂基壇西辺の瓦堆積層から 3 点出土した。恭仁京遷都前の製品で、奈良市の押熊瓦窯でこの範が使用されたことが知られている。

K n H 3 2 (均整唐草文軒平瓦)。平城宮 6721 C 型式(恭仁宮 K H 0 4 A) 同範。金堂基壇西辺の瓦堆積層から 2 点出土した。恭仁宮造営時に新調した製品である。

K n H 3 3 (均整唐草文軒平瓦)。平城宮 6726 E 型式同範。金堂基壇西辺の瓦堆積層から細片が 1 点のみ出土した。この型式には、宝亀元年(770)の光仁天皇即位以後、延暦 3 年(784)の長岡京遷都までの年代が与えられている。

K n H 4 1 (均整唐草文軒平瓦)。C 字上向内に十字様の花頭形を垂飾した中心飾りをもち、平城宮 6689 型式に近似しているが、むしろ山背国分寺創建期の軒平瓦(恭仁 K H 0 2)を祖形とする製品である。所謂「山背国分寺系列」の軒平瓦で、金堂基壇西辺の瓦堆積層から 4 点出土した。

K n H 4 2 (均整唐草文軒平瓦)。C 字上向内に肥厚した花頭形を垂飾した中心飾りをもち、巻きの強い蕨手に特徴をもつ「山背国分寺系列」の軒平瓦で、金堂基壇東辺から東回廊の間で 1 点のみ出土した。

(3) 土器類

発掘調査で出土した土器類の大半が現在の蟹満寺境内＝金堂跡(S B 101)周辺から出土した中・近世土器である。屋瓦の変遷でみる限り、金堂の最後の補修(平安時代初頭)以後の焼失から室町期(15 世紀)に至るまで、本格的な瓦葺建物は再建されていない。それ以後も宝暦 9 年(1759)の旧本堂建立までは停滞しており、近世瓦のほとんどがこの時期以後のものである。しかし、出土土器の様相をみると、蟹満寺の法灯は脈々と続いていたことがわかる。

金堂の焼失以後、基壇の周囲には堀(S B 101)が掘られるが、埋土からは 12 世紀末から 13 世紀代の和型瓦器碗・皿、土師器小皿、須恵器(東播系の片口捏鉢・甕)等が出土する。その後、堀が完全に埋没し墓地化する時期は、大量に出土する蔵骨器と考えられる土師器土釜でみると 14 世紀末か、早くても 14 世紀中頃の常滑の甕、あるいは副葬品と考えるならば 14 世紀前半と考えられる龍泉窯系青磁の碗の時期が候補となる。この墓地の最盛期は 15 世紀代にあり、土師器土釜、瓦質捏鉢の大半がこの時期のものである。墓地としての終末は、土師器鍋等からみて 16 世紀末から 17 世紀初頭と考えられ、18 世紀代には石塔墓となって現境内北側に後退したようである。

4. 発掘調査からみた蟹満寺の沿革

蟹満寺における発掘調査は想定する伽藍のほんの一部にすぎないが、主要堂塔を含む伽藍中核部の範囲は、天神川南側の現蟹満寺境内から南側に限定して考えることができる。だとすると、蟹満寺境

内で検出した瓦積基壇建物跡(S B101)は、その規模・構造からして金堂跡と考えられ、蟹満寺の創建時期を検討する場合、有効かつ唯一の検討材料となる。しかも、本尊を祀る金堂の盛衰が伽藍全体の沿革を考えるうえでの枢要であることは、いうまでもない。

(1) 蟹満寺の創建

発掘調査によりS B101周辺から出土した軒丸瓦(11型式16種)、軒平瓦(7型式8種)のうち、白鳳期の様相をもつものは、軒丸瓦138点(K n M2 1～2 4, 2 9)、軒平瓦409点(K n H 2 1, 2 3 A・B)を数え、全体の9割以上を占める。なかでもK n M2 4(132点)、K n H 2 3 A(405点)の組合せは他を凌駕しており、S B101 創建期の組合せであることはすでに述べた。なお、白鳳期軒瓦のうち、K n M2 1～2 4は他遺跡との同範関係が明らかであり、特にK n M2 2～2 4は、発掘調査による各型式の位置付けがある程度判明している高麗寺跡出土例との比較が可能である。高麗寺と蟹満寺での各型式の対応関係は、K m M2 2 = K n M2 2, K m M2 4 = K n M2 3, K m M2 6 = K n M2 4である。

飛鳥時代に創建された高麗寺は、白鳳時代になって本格的な伽藍が整備される。この伽藍整備期の軒丸瓦が面違鋸歯文縁をもつ川原寺式(K m M2 1～2 8)であり、その原型となる型式が大和川原寺跡出土A類と同範のK m M2 1である。これら一群の型式はK m K 2 1からの退化型式であり、その出土比率は高麗寺における諸堂塔の建立順序を反映している。K m M2 1～2 4の4型式は塔・金堂・講堂造営の主体となる型式で、その出土量は全体の9割以上を占める。ところが、続く中門・南門の造営段階になるとK m M2 2(K n M2 2)、K m M2 4(K n M2 3)が減少し、型式的に退化が著しいK m M2 5、K m M2 6(K n M2 4)の出土量が増加するのである。つまり、高麗寺の伽藍造営後期中門・南門の造営段階では、K m M2 1～2 6の6型式が造営の主体となっており、K m M2 5、2 6の生産を拡大することによって伽藍造営を維持したことがわかる。しかも、K m M2 6は、範キズの進行状況の比較から、本来、蟹満寺造営のために新調された製品(K n M2 4)であった。蟹満寺の造営は、高麗寺の造営と連動しているのである。

高麗寺の伽藍整備時期については、K m M2 1(川原寺A類同範)の製作年代の検討によって決定可能である。川原寺は天智天皇元年(662)から天武天皇2年(674)までの間に創建されたとされ、創建期軒丸瓦中最古の型式とされるA類は、奈良県五条市の荒坂瓦窯で生産されるが、操業初期の段階でこの型式の生産は停止している(金子裕之 1983)。川原寺出土例と高麗寺出土例を比較すると、明らかに高麗寺例の方は範の摩耗が進行しており、後出のものである。しかも、川原寺例の丸瓦部がすべて玉縁式であるのに対して、高麗寺例はすべて行基式となっていることは、荒坂瓦窯から高麗寺伽藍整備のための瓦窯へ範が移動したことを示しており、工人集団の移動を伴うものではないことを知る。そして、範の摩耗がさらに進行した段階の製品が、わずかではあるが近江の崇福寺、南滋賀廃寺でも出土するのである。これらの寺院は、天智天皇の大津宮遷都(667)に伴い宮の周囲に造営されたと考えられ、他に穴太廃寺(Ⅱ期)や三井寺前身寺院、大津廃寺等も営まれた。これらの寺院では、川原寺同範例よりも中房の委縮した退化型式が出土しており、製作技法も異なる。この型式変化は「高麗

寺式」の変化と同じであり、後出傾向として把握可能である。したがって、瓦範の移動が大和→山城(代)→近江である以上、高麗寺伽藍整備の始点は、天智朝でも大津宮遷都を前後する時期に求めることができるのである。

ならば、蟹満寺の創建時期はどうであろうか。古代寺院の造営期間については、最短でも20年、長くて100年以上もかかる例がある。しかし、高麗寺においては、諸堂塔の造営に際し一貫してKmM21(川原寺A類同範)が主体的地位を占めており、伽藍の造営が長期に及んだとは考えられない。しかも、KmM26(KnM24)の範の移動が蟹満寺→高麗寺である以上、蟹満寺の創建は7世紀の末葉を大きく下ることはないと考えられる。

7世紀末葉に創建された蟹満寺は、紀寺(小山廃寺)や高麗寺との同範関係をもつ点において、大和・山城の中核寺院と結びついており、巨大な金堂を建立する素地を持っていたのであろう。

(2) 蟹満寺の罹災

蟹満寺金堂が焼失していることはすでに記したが、その範囲は広範囲に及んでおり、発掘調査では西辺から南辺のほぼ中央付近までの瓦積が二次焼成を受けて赤く変色しており、焼土が堆積していた。その時期については、SB101の最後の屋根の補修時期から類推することが可能である。検討の対象となるのは、軒平瓦のKnH41・42である。セットとなる軒丸瓦を欠いているが、いずれも所謂「山背国分寺系列」の製品である。天平18年(746)9月、恭仁宮大極殿は山背国分寺に施入され、国分寺(僧寺)の造営が開始される。この時、使用された瓦は山背国分寺造営官司(＝国衙系瓦屋)の製品であり、以後の屋根の補修等にもこれらの製品が使用されるが、同一文様系譜をもつ軒瓦が南山城に広く分布する。これが「山背国分寺系列」の製品である。

『弘仁式』によると、国分二寺において正月八日から十四日まで『最勝王経』の転読が行われ、同じ時期に部内の諸寺僧を僧寺に請じて吉祥悔過を修することとなっている。神護景雲元年(767)に始まる吉祥悔過は、神祇の祈年祭に相当する一国の最も重要な仏事である。ところが、山城国の吉祥悔過は『続日本後紀』によると、弘仁13年(822)から国分寺で修することをやめて国庁で修していたものを、承和11年(844)からは旧に復して国分寺で修学せしめたとある。長岡京遷都ともなつて国衙が相楽郡から葛野郡へ、さらに平安京遷都により乙訓郡へ移動したことで、国衙からかなり離れた瓶原の地で吉祥悔過を修することの不都合から生じたことであろうが、また旧にもどしているのである。おそらくは、遷都と国衙の移動により生じた国分寺の衰退に対し、寺側の復興運動があったものと考えられる。まさに、蟹満寺で出土するKnH41・42の製品は、9世紀中頃の山城国分寺復興時期に相当するのである。

9世紀中頃以後、SB101は罹災する。この時の被害が甚大であったことは、その後の復興が遅々として進まない状況からみて想像に難くない。現本尊像の罹災痕跡とこの時のSB101の罹災が関連するかどうかは別稿に譲るとして、仮に現本尊像がSB101の内部に安置されていたならば、相当な被害を受けたことであろう。

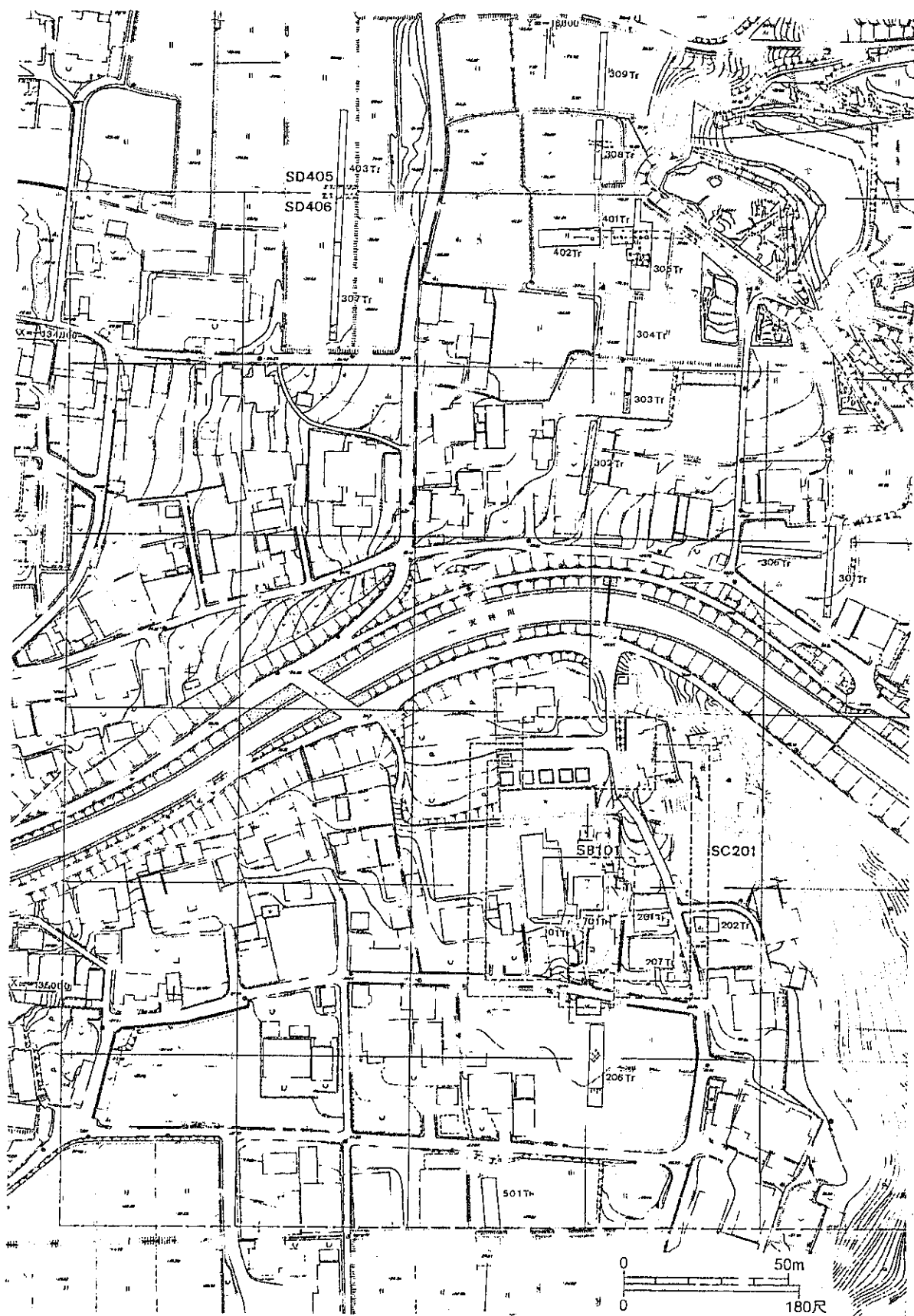
(3) 罹災以後の蟹満寺

罹災以後の蟹満寺については、「寛正四(年)」(1463) 銘の文字瓦や軒丸瓦K n M 6 1 A・B, 軒平瓦K n H 6 1 ~ 6 3 を遡る時期の瓦が出土しないことからみて、この時期まで、瓦葺の建物が周囲に存在しなかったことは明らかである。しかし、『伝燈広録』には長治2年(1105) に伝法灌頂を受けた静養の伝として、現本尊とその本堂を「光明山懺悔堂」とする記述があり、東方山中にかつて栄えた東大寺の別所・光明山寺の存在が、蟹満寺の延命に大きく関与したことは明らかである。

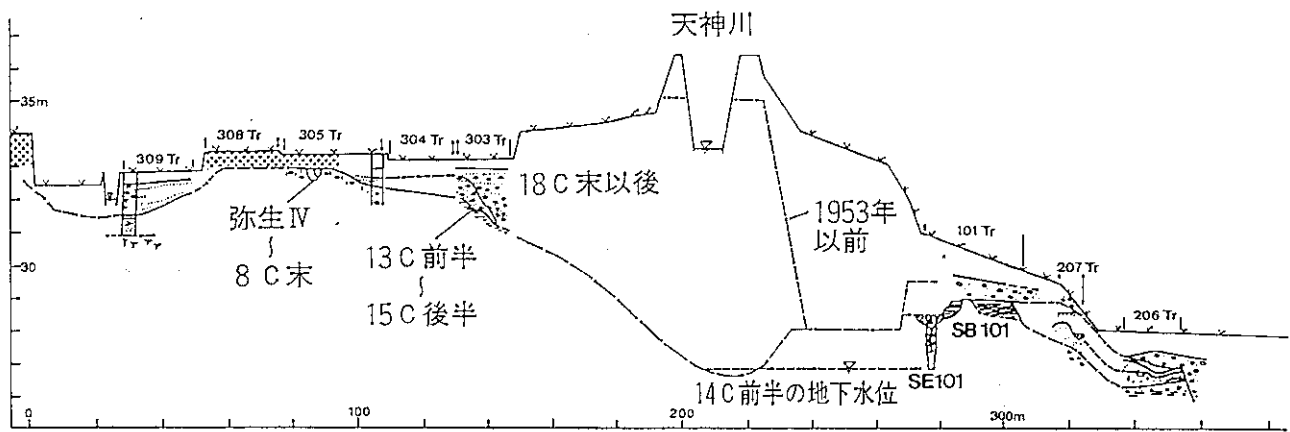
光明山寺については、10 世紀後半に創建され 11 世紀中葉に東大寺三論宗の別所として再興したようで、12 世紀には最盛期を迎え多くの浄土教家を輩出している。この時期には広大な寺地を摂関家から認知されていたが、13 世紀後半から 14 世紀初頭にかけて、近隣の古川荘と激しい境相論を繰り返している。光明山寺の発掘調査では、12 世紀末の源平の争乱期以後、南都復興と連動した伽藍の再整備の状況を明らかにすることができた。その時期は 13 世紀後半であり、東大寺第四代大勧進である円琳が、仁治三年(1242) に再建に着手した東大寺三面僧坊に関連した瓦が使用されている。東大寺の復興事業と連動して、別所である光明山寺の整備もなされたのであろう。なお、東大寺三面僧坊関連瓦を使用する建物や房院は、南北朝の動乱期である 14 世紀中頃に焼亡している。元弘元年(1331)、笠置に籠る後醍醐天皇を攻めるため、幕府軍が光明山寺の裏を進軍する様子が『太平記』に見えるが、このような戦乱に巻き込まれた可能性が考えられる。その後、衰微した寺運は 17 世紀初頭には尽きることとなるのである。

光明山寺の勃興により命脈を保った蟹満寺は、光明山寺の衰退により 15 世紀代に再興していく。S B 101 周辺の墓地化は、古代寺院から光明山寺の一子院の立場を脱して、ようやく地域の寺院としての歩を進めた時代と言えよう。本堂・庫裏・墓地がセットとなるような、近世的な檀越寺院の萌芽と言えようか。

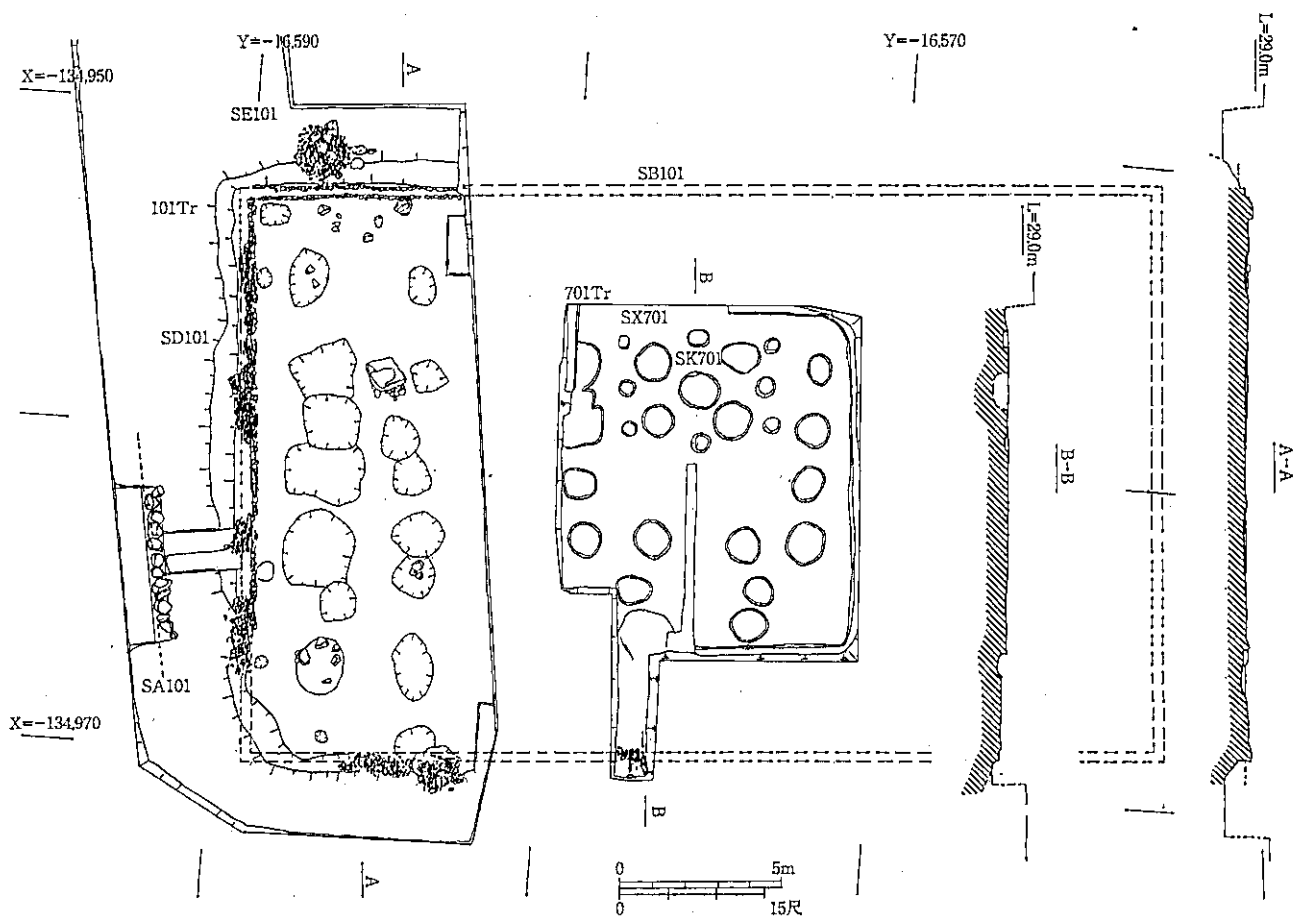
S B 101 周辺の墓地としての終末は、出土土器の様相から見て 16 世紀末から 17 世紀初頭と考えられ、18 世紀代には石塔墓となって現境内北側に後退したようである。宝暦9年(1759) 建立の旧本堂下層からは、前代の本堂と考えられる小規模な建物(S B 701) が本尊台座を覆うように存在し、その西側には、近接して円形の前栽石組(S X 601) と敷石列(S X 602) の存在を確認した。宝暦9年前代の本堂は、かつての本尊台座をひとまわり大きくした程度の規模しかなく、敷石列(S X 602) はおそらく西側の庫裏とつなぐ通路であつたろう。江戸時代、真言宗の寺院として再興された蟹満寺は、宝暦9年、旧本堂の建立によって、ようやく寺観を整えたと言えそうである。正徳元年(1711) の『山州名跡志』には、平成22年建立の現本堂同様、釈迦像が本堂の本尊でその脇壇に聖観音蔵が安置されていたと記している。



第50図 蟹満寺旧境内発掘調査図



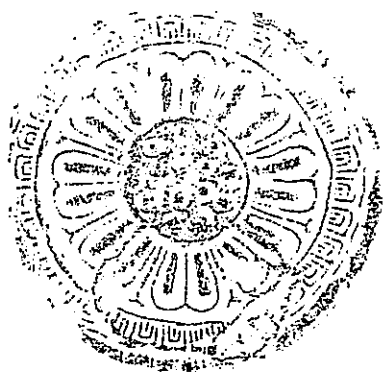
第51図 天神川沖積低地横断面図



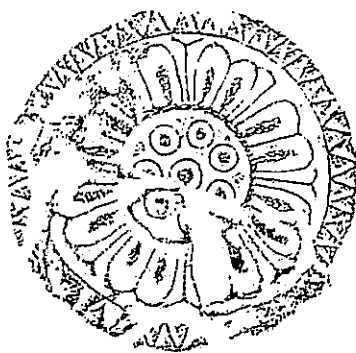
第52図 蟹満寺金堂跡発掘調査図

	蟹満寺	高麗寺	平城宮	恭仁宮	長岡宮	平城京及び京内・大和諸寺院	南山城諸寺院他	瓦 窯	その他
軒		KmM11A				飛鳥寺・豊浦寺・和田廃寺・古宮遺跡		(飛鳥寺瓦窯)	
		KmM11B				姫寺廃寺・海龍王寺・飛鳥寺			
	KnM21					紀寺(小山廃寺)・川原寺			
		KmM21				飛鳥寺・大官大寺		(荒坂瓦窯)	崇福寺・南滋賀廃寺
	KnM22	KmM22				法起寺	泉橋寺・松尾廃寺		
		KmM23							
	KnM23	KmM24					上狛東遺跡		
		KmM25							
	KnM24	KmM26					蟹満寺・涌出宮遺跡・光明山寺跡	高麗寺1・2号窯	
		KmM27							
		KmM28							
	KnM29								
		KmM31							
		KmM32		KM05			久世廃寺・上津遺跡・山背国分寺		甲可寺・近江国衙
		KmM33A	6320Aa	KM01			井手寺跡・平川廃寺・上津遺跡・木津北遺跡	(石橋瓦窯)	
		KmM33B	6320Ab			平城京・唐招提寺法華寺・薬師寺	井手寺・上津遺跡・木津北遺跡		平等院
		KmM34A	6282Ha	KM02A		平城京・法華寺	平川廃寺・井手寺・上津遺跡		
		KmM34B	6282Hb	KM02C		平城京・法華寺・大官大寺			
	KnM32		6318Ab			平城京・海龍王寺			
	瓦 KnM33	KmM34C	6282Bb		○		松尾廃寺・山滝寺跡・木津北遺跡		堀原寺
		KmM35				平城京			本町遺跡・古大内遺跡・落地道跡・小犬丸遺跡
		KmM36	6285B	KM03C		平城京・法華寺・法隆寺	平川廃寺・法華寺野遺跡、樋ノ口遺跡		
	KnM31	KmM37	6291Ab	KM15	○	平城京・唐招提寺・秋篠寺・西隆寺・額安寺・法隆寺	木津北遺跡・薬師堂古墳周辺		平安宮・北野廃寺
		KmM38	6225A	KM19	○	平城京・唐招提寺・西隆寺・法華寺・興福寺	久世廃寺・木津北遺跡	(中山瓦窯)	平安宮・広隆寺
		KmM39	6311C						
	KnM34								
		KmM41						高麗寺3号窯	
		KmM42						高井手1号瓦窯	
		KmM43						(高井手瓦窯)	
平	KnH21	KmH21							
		KmH22							
	KnH23A	KmH23A							
		KmH23B							
		KmH23C							
	KnH23B								
		KmH24							
	KnH31		6681E			平城京・法華寺		押熊瓦窯	
		KmH31	6685C		○	平城京			
		KmH32	6691A	KH01	○	平城京・唐招提寺・薬師寺・法華寺・興福寺・大安寺・東大寺・法隆寺・大官大寺	平川廃寺・久世廃寺・井手寺・上津遺跡・木津北遺跡・岡田加茂鋳銭司跡	岡田池瓦窯・石橋瓦窯跡	平安京・西寺
		KmH33	6732C		○	平城京・興福寺・東大寺	木津北遺跡	市坂瓦窯	平安京
		KmH34A			7721				宝菩提院・乙訓寺・北野廃寺・櫻原廃寺・平安宮・平安京・百濟寺・冷泉院
	KnH32	KmH34B	6721C	KH04A	○	平城京・東大寺・法華寺・西大寺・秋篠寺・西隆寺・海龍王寺	井手寺跡・平川廃寺・久世廃寺・里廃寺・正道廃寺・上津遺跡・木津北遺跡、樋ノ口遺跡		
		KmH34C							本町遺跡・古大内遺跡、落地道跡
		KmH35	6725A			平城京・唐招提寺			
	KnH33		6726E		○	平城京			
		KmH36	6761A			平城京・西隆寺・西大寺	樋ノ口遺跡	高井手1号瓦窯	
		KmH37					鹿山寺		本町遺跡・古大内遺跡、落地道跡・小犬丸遺跡
		KmH38	6801A		○		木津北遺跡		平安京
	KnH41						西山廃寺・普賢寺・正道廃寺		
	KnH42			KH14		薬師寺	平川廃寺・久世廃寺		
		KmH41				唐招提寺		(新芦屋瓦窯)	
		KmH42						高麗寺3号窯	

第53図 蟹満寺旧境内出土軒瓦同範関係一覧



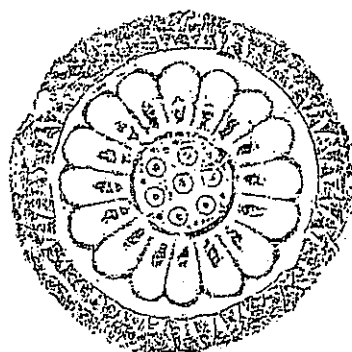
KnM21



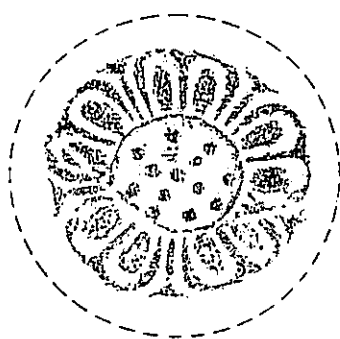
KnM22



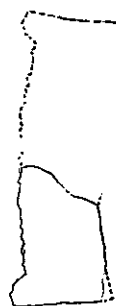
KnM23



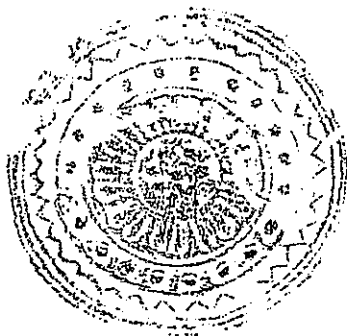
KnM24



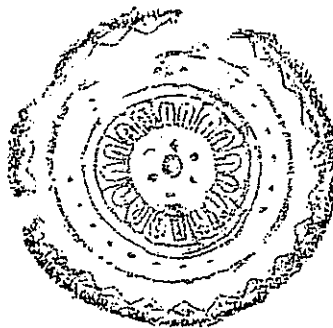
KnM29



KnM31

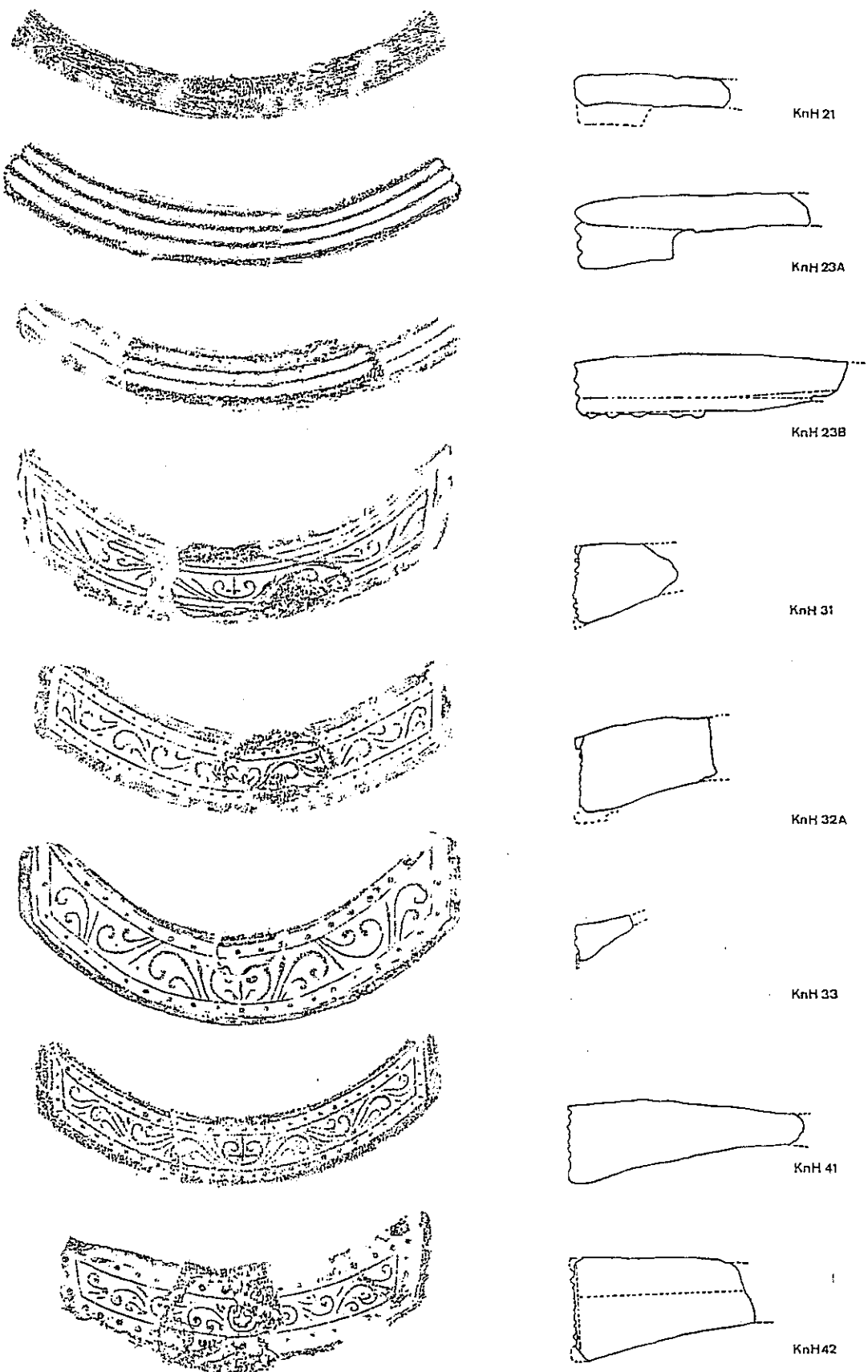


KnM32



KnM33

第54図 蟹満寺旧境内出土軒丸瓦の型式



第 55 図 蟹満寺旧境内出土軒平瓦の型式

第五節 白鳳の山林寺院 山瀧寺

南山城には山中に立地する白鳳創建の寺院が 2 箇所ある。京田辺市の普賢寺（田辺町教育委員会 1982）と綴喜郡宇治田原町の山瀧寺（佐藤虎雄 1930・1932, 光島市太郎・川勝政太郎 1930, 高橋美久二 1974, 宇治田原町 1980, 宇治田原町教育委員会 2006）である。他には相楽郡笠置町の笠置寺（笠置町教育委員会 1990）に白鳳創建とする縁起があるが、定かではない。普賢寺は山背と河内を結ぶ間道沿いにあり、山瀧寺は山背と近江を結ぶ田原道沿いにある。『續日本紀』天平宝字 8 年（764）9 月、惠美押勝乱に際し、宇治道を通して近江へ逃れる惠美押勝を追う孝謙上皇の追討軍は、この田原道を通して先回りに成功し瀬田橋を焼くのである。

ここでは、綴喜郡宇治田原町荒木に所在する山瀧寺の出土遺物を概観し、南山城における白鳳の山林寺院の様相を考察する。

1. 軒瓦（第 56 図）

平成 13～17 年度にわたる宇治田原町の発掘調査（宇治田原町教育委員会 2006）で出土した瓦類には、白鳳期から現代までのものが含まれる。しかし、古代以来の山瀧寺の建物配置・寺域等まったく判っていない現状では、すべての出土瓦を山瀧寺に係る建築資材とすることはできない。また、同様に、文献資料に見る「山瀧寺」が白鳳創建以来の連続性をもった寺院とすることには、多くの疑問が残る。とはいえ、建築資材としての瓦の出土は、古代寺院としての「山瀧寺」の存在を明瞭に証明しており、たとえ少量の細片であろうとも創建以来の沿革を雄弁に語る資料である。

ここでは、宇治田原町が保管する過去の表採資料や個人蔵の資料も含めて紹介する。なお、これら資料のうち何点かは散逸し現在所在不明となっているが、過去の掲載論文等から転載し補った。また、軒瓦型式一覧では、可能な限り反転・展開復元を行っている。軒丸瓦で 6 型式 6 種、軒平瓦で 5 型式 5 種を確認している。

A. 軒丸瓦

S r M 2 1 いわゆる山田寺式の単弁蓮華文軒丸瓦。発掘調査では、中央公民館敷地東側の 501Tr 瓦溜（SX501）から瓦当表面が剥離した剥片の状態で 1 点のみ出土した。出土品は、子葉の表現が不明瞭で間弁の起伏も乏しく、山田寺式としての退化が明らかに進んだ段階と言えよう（菱田哲郎 2000）。焼成は軟質で胎土は精良、2 次焼成を受けて黄灰色を呈している。他遺跡との同範関係は不明である。なお、近隣では、城陽市の平川廃寺・正道官衙遺跡（正道廃寺）で山田寺式の軒丸瓦が出土している。

S r M 2 2 いわゆる川原寺式が南山城地域で独自の変化を遂げた高麗寺式の複弁 8 弁蓮華文軒丸瓦。発掘調査では、中央公民館敷地南側の 203Tr から間弁と花卉の一部を残す剥片が 1 点のみ出土した。他には、かつて同範かと思われる資料が紹介されているが、現在は所在不明である。やや

小振りの中房に周環を持つ蓮子を1+8に配していたことがわかる。残る間弁・花卉の彫りは浅く線的に表現されており、ヴォリュームを欠く。焼成は軟質で胎土は精良、火中しており表面黄灰色を呈している。細片のため、他遺跡との同范関係は不明である。なお、同様の高麗寺式軒丸瓦は、木津川市山城町の高麗寺跡をはじめ、同町蟹満寺・松尾廃寺・泉橋寺、精華町の下狹廃寺・里廃寺、城陽市の正道官衙遺跡（正道廃寺）や滋賀県蒲生郡竜王町の雪野寺跡で出土している（中島 正 2003）。

S r M 3 1 複弁8弁蓮華文軒丸瓦。平城宮 6282B b 型式軒丸瓦と同范。これは、恭仁京廃都後の平城京造営に使用された型式で、平城宮瓦編年の第Ⅲ期に位置付けられる。山瀧寺跡では、最も多く出土する型式で 501Tr 瓦溜（SX501）からまとまって5点が出土し、過去の採集品でも確認されていた。瓦当文様は、花卉が短く中房の歪みと圈線の消失に特徴をもち、蓮子・花卉に范キズを生じている。筒部との接合に際しては、凹凸両面に多量の補足粘土を使用し、瓦当裏面の接合線は円弧状を呈す。胎土には多量の砂粒を混入しており、焼成は軟質で内部灰色を呈すが表面炭化粒の付着により黒色のものがある。同范例は、平城宮京と京内の諸寺、恭仁宮、長岡宮、近隣の井手町井手寺跡、木津川市の蟹満寺・松尾廃寺・高麗寺跡、山城・木津町間の木津北遺跡（木津川河床）や淀川沿いの大阪府高槻市梶原寺で出土している。なお、6282B b 型式瓦范改刻前の B a 型式は、平城宮京と京内の諸寺・長岡宮・平安宮の他、木津北遺跡や京田辺市の三山木廃寺で出土している。

S r M 4 1 複弁8弁蓮華文軒丸瓦。いわゆる重弁形式で新羅系の文様構成をもつ。現在、所在不明。

S r M 4 2 複弁8弁蓮華文軒丸瓦。いわゆる平安後期南都系の製品である。山瀧寺跡では **S r M 3 1** に次いで多く出土する型式で、501Tr 瓦溜（SX501）から2点が出土し、過去の採集品でも確認されていた。瓦当文様は、中房に1+8の蓮子を配し花卉端からいきなり外区が立ち上がり平縁となる。范は外縁まで及ばない形式のため外縁の幅・高さは一定せず、ケズリで平坦に仕上げる。凹凸両面の補足粘土はそれほど多くはなく、ナデて仕上げる。胎土にはわずかに砂粒を混入するが精良で焼成は硬質、町保管資料では青灰色を呈し、501Tr 瓦溜（SX501）出土資料では2次焼成を受けて黄灰色を呈している。同范例は聞かないが、同系統の製品は南都の諸大寺や宇治市平等院で出土している。

S r M 5 1 巴文軒丸瓦。内区の巴を欠失しておりその形状は不明であるが、外区内縁珠文帯外側に圈線をもちやや小粒の連珠を配す。中央公民館敷地南側の 203Tr から1点のみ出土した。胎土には白色の微砂を混入するが焼成はやや硬質で内部黄灰色、表面燻しにより黒色を呈している。

S r M 7 1 巴文軒丸瓦。おそらく右回りの三つ巴を主文とし、圈線のない大粒の珠文帯と幅広の外縁をもつ。近世山瀧寺のものであろうか。203Tr から1点のみ出土した。

B. 軒平瓦

S r H 2 1 三重弧文軒平瓦。段額の瓦当面には深く幅広の型挽き三重弧を施文している。中央公民館敷地北側の 101Tr、東側の 501Tr 瓦溜（SX501）から各1点が出土した。過去の採集品であるが第4図1は瓦当部を完存し、瓦当面幅約27.0 cm、高さ4.5 cmを測る大型品で、幅7.5 cmの顎面

には平瓦凸面に残る格子タタキ痕と同じタタキが密に施されている。501Tr 瓦溜 (SX501) から出土した 2 は、顎に貼り付けた粘土帯が剥離した製品で、接合面には同様のタタキ痕が残る。胎土には微砂を混入し焼成はやや軟質、内部は灰色を呈すが表面は火中して黄灰色となっている。

S r H 2 2 四重弧文軒平瓦。段顎の狭い瓦当面には密に型挽き四重弧を施文し、顎面にも型挽きで 8 本の凸線を施す。山瀧寺跡では、最も多く出土する型式で中央公民館敷地南側の 203・301 Tr で各 1 点、東側の 501Tr 瓦溜 (SX501) から 3 点が出土し、過去の採集資料にも多い。確認している資料では、瓦当面、顎面の施文具はそれぞれ同一で、顎面凸線も少なくとも 6 本で 1 単位の施文が行われている。そして顎背後にも 2 条の凸線が施されている。なお、瓦当面・顎面の施文は同時に行っている可能性が考えられる。501Tr 瓦溜 (SX501) から出土した製品では、接合に際して平瓦凸面に格子状のキザミを施している様子が接合面に転写されている。胎土には白色の砂粒を混入するが焼成は堅緻で、青灰色を呈している。同様に 501Tr 瓦溜から出土した 3 は、2 次焼成を受けて黄灰色を呈している。なお、本型式に特徴のないいわゆる顎面施文軒平瓦は、南山城地域に広く分布しており、特に直線的な凸線を施す例は、同じ綴喜郡で京田辺市三山木廃寺、八幡市志水廃寺、久世郡の城陽市正道官衙遺跡 (正道廃寺)・平川廃寺・久世廃寺、相楽郡の精華町里廃寺・下狛廃寺、山城町の蟹満寺で出土している。中でも里廃寺・下狛廃寺・蟹満寺例とは、施文方法が近縁関係にある (中島 正 2003)。

S r H 4 1 連巴文軒平瓦。平安後期播磨系文様構成をもつ製品である。浅顎の瓦当面には左回り二つ巴を連ね、その間隙に上下から対向する半裁花文を覗かせた意匠であろう。中央公民館敷地北側の 101Tr から 1 点のみ出土した。全体の文様構成は不明であるが、右側 3 分の 1 程度を残す小型瓦である。凹面にはやや粗い布目圧痕を留め、凸面には縦方向の細い縄タタキ痕を残している。胎土には白色の砂粒を混入し、焼成はやや軟質で灰色を呈している。同範例は不明であるが、宇治市平等院から同一意匠の製品が出土している。

S r H 5 1 連珠文軒平瓦。浅顎の瓦当面には、一文字の中心飾りから左右に 6 個以上大粒の珠点を配している。向かって左側の範キズは広く進行しており、中心飾りも不鮮明である。ウ冠の文字であろうか。凹面には布目圧痕を留め、凸面には凹型代の痕跡を留める。中央公民館敷地西側の 201Tr から 2 点、南側の 203Tr から 1 点が出土した。201Tr 出土の第 5 図 2 および 203Tr 出土の 3 は、ともに胎土に多くの白色砂粒を混入し焼成は良好、灰色を呈している。同範例等は不明である。

S r H 7 1 均整唐草文軒平瓦。瓦当面に雲母片の付着をみる近世瓦。203Tr から 2 点出土した。

2. 瓦類のまとめ

以上、本遺跡から出土した瓦類について概観したが、ここでは瓦類のセット関係や年代観、出土状況等をまとめ、出土瓦から見た山瀧寺の沿革について若干の考察を試みたい。ただし、はじめにことわったように、本遺跡の調査状況は、寺院関連遺構が未検出であること、瓦類の出土が散発的であること等、通常の瓦葺建物をもつ寺院中心部の様相とはやや異なる。したがって、ここで行う考察は、

質的にも量的にも極めて限定的なものであることをご理解いただきたい。また、文永9年(1272)の「山瀧寺雜掌訴状」(『禪定寺文書』)にはじめてその名が見える「山瀧寺」が、遺跡としての山瀧寺跡と完全に同一かどうかについてもここでは考察の範囲外とする。

通常、寺院跡の調査では、出土する瓦類のうち形式的に他と比べ古式であり、しかも一定の出土量を占める型式を創建瓦と認定する。山瀧寺跡においては、軒丸瓦のS r M 2 1・2 2型式、軒平瓦のS r H 2 1・2 2型式が最も古式の製品であることは明らかである。また、極めて限定的な遺構ではあるが501Tr瓦溜(SX501)での瓦の出土状況は、S r H 2 1・2 2型式に伴う格子タタキの平瓦がほぼ半数を占めており、一定の出土量を確保する。ただ、他遺跡での状況から判断して重弧文軒平瓦とのセット関係が明らかなS r M 2 1・2 2型式の出土量はわずかであり、特定できる丸瓦の量も少ない。また、S r M 2 1型式については501Tr瓦溜(SX501)でS r H 2 1・2 2型式と共伴するが、S r M 2 2型式との共伴関係は確認できていない。しかし、むしろ1点ではあっても、軒丸瓦S r M 2 1と軒平瓦S r H 2 1・2 2型式との共伴関係が確認できたことを幸運とすべきであろう。現段階では、軒丸瓦S r M 2 1・2 2型式、軒平瓦S r H 2 1・2 2型式をもって、山瀧寺創建期軒瓦候補の一群としたい。以下、軒丸瓦の二型式を中心として創建期の状況を概観する。

大和の吉備池廃寺・木之本廃寺の単弁8弁蓮華文軒丸瓦を祖型とする山田寺式軒丸瓦は、全国に波及する過程で変化し各地において独自の変遷をとげる。山城地域においては京都市の北白川廃寺例が最も原型式に近く、南山城では城陽市の平川廃寺・正道官衙遺跡(正道廃寺)例にやや退化傾向が見られる。同範関係にある城陽市の二遺跡出土例と細片であるが山瀧寺S r M 2 1を比較すると、前者は内区外側の圈線をかすかに残すものの花卉の輪郭線は完全に消失しているのに対し、後者は内区外側の圈線を消失しているが花卉の輪郭線は留めている。両者は異範であるが、山田寺式としての退化傾向は顕著である。なお、北白川廃寺例については、文様・製作技法から大和山田寺例との対比が可能であり、山田寺塔の建立が行われる670年代との対応関係が考えられる。よって、山瀧寺S r M 2 1については、北白川廃寺例以後の7世紀第IV四半期にその時期を求めたい。

次に川原寺式の山瀧寺S r M 2 2型式について検討する。南山城における川原寺式軒丸瓦の展開については、高麗寺式軒丸瓦の拡散と在地化の過程から追うことが可能である。相楽郡山城町の高麗寺跡では、現在までに8型式の川原寺式軒丸瓦(K m M 2 1~2 8)を確認しているが、その伽藍造営は大和川原寺A種同範軒丸瓦(K m M 2 1)をもって大津宮遷都(667年)前後の時期に開始され、一貫してA系列軒丸瓦(K m M 2 1・2 2・2 5)が造営の主体となる。それに対してB系列軒丸瓦(K m M 2 3・2 4・2 6・2 7)は、高麗寺伽藍造営の主体とはならず、「高麗寺式」として南山城地域に拡散していく。その時期は、山城町の蟹満寺創建に主体的に使用された軒丸瓦(K n M 2 4)の範が、高麗寺中門・南門の造営に際してK m M 2 6として使用された時期をひとつの定点とする。したがって、間弁の形状がr状となる山瀧寺S r M 2 2についても、高麗寺式軒丸瓦の拡散期に対応した7世紀第IV四半期のうちで考えることができる。なお、同範関係は不明であるが、中房の蓮子が1+8となる正道官衙遺跡(正道廃寺)例と山瀧寺S r M 2 2は同文関係にある。

ところで、山瀧寺S r H 2 2型式軒平瓦にみる額面施文の形状は、同じ高麗寺式軒丸瓦をもつ蟹満寺、精華町里廃寺・下粕廃寺と近縁関係にあることはすでに述べた。また、三重弧文のS r H 2 1型式軒平瓦についても、重弧の形状は洗練されたそれとはかけ離れており、原型式に近い山田寺式や川原寺式に伴う四重弧文軒平瓦との時期差は歴然としている。高麗寺式軒丸瓦の拡散と額面施文軒平瓦の成立、そして在地化の時期に対応する。

以上の検討から、山瀧寺跡における川原寺式S r M 2 2と型式的に先行する山田寺式S r M 2 1との間には、積極的な時期差を求めることはできず、このことは軒平瓦S r H 2 1・2 2型式についても同様であった。軒丸瓦S r M 2 1・2 2型式、軒平瓦S r H 2 1・2 2型式をもって、山瀧寺創建期軒瓦の一群と認定する。

7世紀第IV四半期のうちに創建された山瀧寺は、その後、傷んだ屋根瓦の取り替え・補修を行いながら維持されていく。ここでは、本遺跡調査で唯一括性の高い501Tr瓦溜(SX501)出土瓦を中心に創建以来廃絶に至る経過を概観したい。SX501は、町立中央公民館南東に隣接する瓦集積遺構で、上層を近世・近代の攪乱が覆うものの中央公民館敷地へ向かって広がることが予想される。検出範囲はその一部であるが、2次焼成を受けた瓦類がまとまって出土しており、あたかも火災を蒙った建物が崩れ落ちたか、あるいは火事場の瓦礫をその後一括投棄したかの様相をもつ。いずれにしても、その出土瓦の様相は、焼失直前の建物屋根の状況を反映していると考えられる。SX501から出土した軒瓦のうち最も新しい製品は、平安後期の軒丸瓦S r M 4 2型式である。それ以前のは軒丸瓦S r M 3 1型式のみであり、この型式が最も多く出土することはすでに述べた。軒丸瓦S r M 3 1とS r M 4 2との予想される年代差は400年にもおよび、この間にまったく瓦の挿し換えがなされなかったとはとても考えられない。建物としての断絶があったのであろうか。今後の調査でその間を埋める資料の追加を待つしかないが、ここでは2次焼成を受けた一括資料としての遺構の状況を重視したい。

創建後の山瀧寺は、8世紀後半に至り軒丸瓦S r M 3 1を用いて、比較的規模の大きな屋根の葺き替え工事がなされている。この段階では軒丸瓦の大半が取り替えられ、丸・平瓦も半数近くが交換されている。しかし、軒平瓦の挿し換えはなかったようで、S r M 3 1(平城宮6282B b)型式軒丸瓦と通常セット関係にある平城宮6721型式系軒平瓦や当該期の製品は確認できていない。したがってこの段階では、時代の異なる平城宮式軒丸瓦S r M 3 1型式と重弧文軒平瓦S r H 2 1・2 2型式が、屋根の上で共存していたことになる。なお、S r M 3 1型式同范例が南山城地域に広く分布するように、平城宮6282型式系軒丸瓦と6721型式系軒平瓦はセットとなって、木津川・淀川水系の古代寺院を中心として広く分布する。この稠密に分布する軒瓦の一群は、かつて高橋美久二が「山背国式瓦」と評し、都城での使用を前提とした瓦との区別を唱えた。さて、その後の山瀧寺は、長い空白期間を経て、平安後期の12世紀代に軒丸瓦S r M 4 2型式を用いて小規模な瓦の挿し換え工事が行われている。どうやら、これを最後にSX501に係る建物は焼亡したようである。なお、軒丸瓦S r M 4 2型式と軒平瓦S r H 4 1型式が時期的にセットとなる可能性をもつが、S r H 4 1は火中しておらずSX501からは離れた公民館北側の101Trから出土している。したがって、焼亡前の屋根の状況は、

軒丸瓦S r M3 1・4 2型式と重弧文軒平瓦S r H 2 1・2 2型式が軒を飾っていたことになる。これは、あくまでも2次焼成を受けた一括資料としてのSX501出土瓦の状況を重視した結果である。なお、建物の出火原因については、平治の乱による兵火と考えられる。平治元年(1159)12月、平氏側と激しく対立していた源義朝は内裏を占拠して平治の乱をおこした。信西(藤原道憲)は宇治田原の大道寺へ乱を逃れたが、この地で自害したという。その時、山瀧寺、大宮神社、大道寺、双栗天神社等をはじめ多くの民家を焼失した、と伝えられている。ならば、軒丸瓦S r M4 2型式や軒平瓦S r H 4 1型式の時期は、平治元年を下限年代とすることができようか。

SX501出土瓦に係る建物焼亡後の山瀧寺については、文永9年(1272)の「山瀧寺雑掌訴状」(『禅定寺文書』)に見える「山瀧寺」に係るであろう瓦が出土している。鎌倉時代後期と考えられる巴文軒丸瓦S r M5 1型式と連珠文軒平瓦S r H 5 1型式や、近世後期の巴文軒丸瓦S r M7 1型式と唐草文軒平瓦S r H 7 1型式である。平治の乱による焼亡後の山瀧寺再建に伴う瓦であろう。出土瓦からはこれ以上のことはわからないが、いずれにしても往時の威容はなく山瀧寺の衰退は明らかである。

以上、簡単ではあるが、瓦から山瀧寺の沿革をたどってみた。ただし、その作業は、量的にも質的にも極めて限定された考古資料から描かれたものであることははじめに述べた通りである。

2. まとめと課題

創建に関する課題 なぜ、この宇治田原の地に白鳳寺院が創建されたのか。『日本書紀』欽明天皇31年(570)夏4月2日条には、高句麗の使節が越の海岸に漂着した記事がある。この使節は船で琵琶湖を縦断し宇治川(瀬田川)・木津川を通して山背の高城館(相楽館)に迎え入れられた。この記事を見るまでもなく、近江と山城を結ぶルートには、古くより山科から逢坂山をこして琵琶湖に至るコースとこの宇治川コースがある。また、『続日本紀』には、藤原仲麻呂(恵美押勝)の乱に際し、天平宝字8年(764)、宇治道を通して近江に逃れる仲麻呂一行とは別に、追手が田原道を通して先回りし、勢田橋を焼いた記事がある。山瀧寺のある荒木の地は、この田原道上にあり、いわば交通の要衝としての位置付けが可能である。ならば、山瀧寺創建瓦のひとつである川原寺式軒丸瓦S r M2 2型式と同じ高麗寺式の瓦が琵琶湖東岸の警野寺跡から出土する点については、南山城と近江を結ぶ「高麗寺式軒丸瓦の田原ルート」を考えるうえで重要である。また、山田寺式軒丸瓦S r M2 1型式についても、北白川廃寺と近江の山田寺式軒丸瓦との関係とは別に、城陽市の平川廃寺・正道官衙遺跡(正道廃寺)例と近江の山田寺式を結ぶ視点を与える可能性がある。額面施文軒平瓦の問題も同様である。いずれにしても、今後の資料の増加を待たなければならない。ただ、これらの課題が整理され、田原ルートの重要性が指摘できても「なぜ、この宇治田原の地に白鳳寺院が創建されたのか。」という課題の解決には至らない。歴史的な必然性、契機の解明が必要である。山間立地寺院(山岳寺院)としての性格付けも重要な課題である。

ところで、宇治田原の地には、天智天皇の第七皇子・施基皇子(田原天皇)にかかる伝承がある。皇子が田原の高尾の地に邸宅を構え、後に荒木の里に移したとするような記事は正史にあらわれない

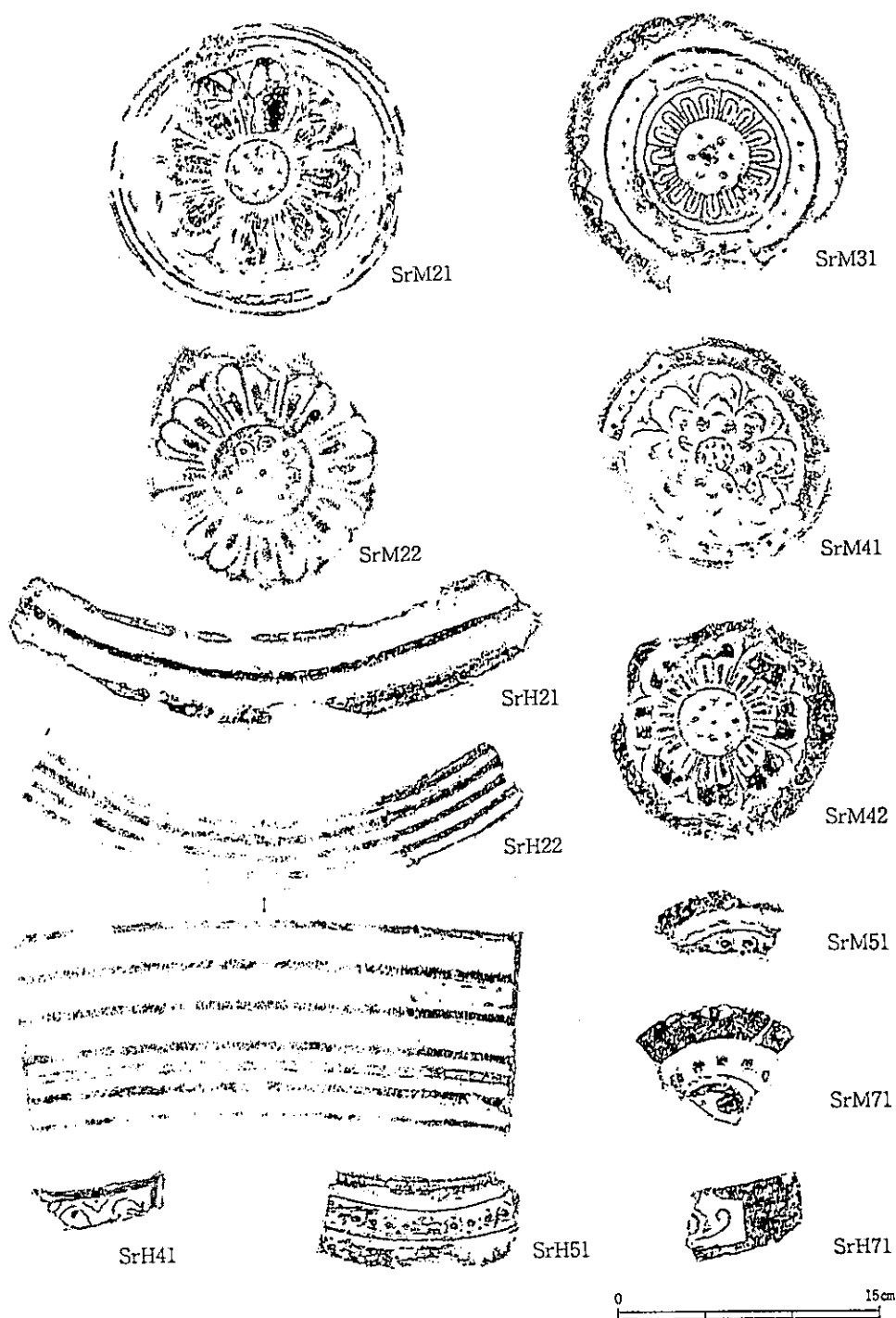
が、霊亀元年(717)の薨去後に田原天皇社が設けられ、場所は移動しているものの「田原天皇社跡」として伝えられている。なお、現在、田原天皇の御陵は、春日山の南の高円山にある田原陵に治定されている。もし仮に山瀧寺が施基皇子により創建されたとするならば、不遇を託つ皇子の隠棲の地に営まれた寺院として相応しい雰囲気をもつ。また、施基皇子の第六子白壁王は後に即位して光仁天皇となるが、この宝亀元年(770)の即位により長く断絶していた天智天皇の皇統が復活し桓武天皇へと続く。ちょうど光仁天皇即位の時期が、山瀧寺で大規模な修造がなされた時期に対応する。しかし、余程の僥倖に恵まれない限り、この課題を解決すべき資料は出土しないであろう。

伽藍に関する課題 山瀧寺の伽藍構造および規模に関して、現状ではまったくわかっていないが、501Tr 瓦溜 (SX501) の状況からは、ほぼ現在の中央公民館敷地内に伽藍の中心建物(瓦葺建物)があることはまちがいない。ここを中心とした一町(360 尺)四方面度の寺域を想定することができる。しかし、これまでの調査状況からは、他に複数の瓦葺建物が存在する状況は確認できていない。ただ、ある時期の土石流等により他の建物遺構が深く埋没している可能性を否定することもできない。地形的な制約もあるが、今後の広い範囲での発掘調査を期待したい。いずれにしても、中央公民館敷地内での調査が鍵を握ることは確かである。

なお、伽藍の形態については、通常の平地性伽藍の延長上で想定する以外に、特定の持仏堂等からの発展形態、いわゆる山岳寺院としての性格を示す伽藍形態等様々な可能性を考慮する必要がある。その場合、京田辺市の普賢寺や八幡市の美濃山院寺等立地環境に近い寺院との比較検討が重要であろう。今後の課題である。

平安時代以後に関する課題 山瀧寺跡では、平城宮式軒丸瓦 SrM3 1 型式と平安後期の SrM4 2 型式や SrH4 1 型式との間に長い空白期間が存在する。7 世紀第IV四半期のうちで創建された山瀧寺がはたして平安後期まで存続するのか、あるいは南山城地域における平安遷都前創立寺院の多くがそうであるように、平安遷都をひとつの契機として廃絶していくのか、これはこの地に存在する白鳳創建寺院と「山瀧寺」と呼ばれた寺院との連続性の問題であり、大きな課題である。この点に関しては、山瀧寺跡の調査だけではなく、町内の禪定寺他との比較検討が必要となろう。

東大寺別当をも務めた平崇上人開基の禪定寺は、摂関家の庇護のもと杣山一千町歩を含む広大な所領を有し、永延元年(987)の大房造立以後、大伽藍が整備されていく。山瀧寺がいつ頃から禪定寺の支配下に組み込まれたかは不明であるが、延久 3 年(1071)に禪定寺が平等院の末寺となる頃には支配が及んだようである。現在、禪定寺周辺にも開発の波が押し寄せているが、禪定寺周辺における考古学的な調査は、それ自体著名な山岳寺院の実態解明に寄るところ大ではあるが、山瀧寺との関係においても重要である。たとえば、同范関係が不明な山瀧寺 SrM4 2 型式や SrH4 1 型式、そしてこれらに先行する型式や後続する型式の解明が、有機的に禪定寺と山瀧寺との関係を結びつけていくことであろう。これらの関係は、山城町の光明山寺と蟹満寺との関係にも似て、大きな意義をもつ。古代寺院から中世寺院への移行の実態解明は、大きな課題である。



第56图 山瀧寺跡出土軒瓦型式一覽



第57图 Srh2 1, 2 2型式軒平瓦

第二章 二つの都城と古代寺院

はじめに

律令国家による僧尼統制の法的整備は、「僧尼令」の制定により完成した。現存する『養老令』は天平勝宝9歳(757)に施行されたが、「神祇令」の次に全27条からなる「僧尼令」がおさめられている。この「僧尼令」の基本姿勢は、律令国家が仏教を国家の体制秩序に組み込み、国家への奉仕を義務付けるもので、清浄な官僧集団の形成と保全がしめされている。この体制こそ、天武朝が志向した官寺・官僧体制なのである。当然、既存の氏寺に対しては否定・抑制の立場をとることとなる。しかし、南山城においては、氏寺の公(官)的側面を増幅する方向にあった可能性がある。天平18年(746)に恭仁宮が廃都となり山背国分寺に施入されるまで、南山城の既存寺院がその機能を果たしていたと考えられるのである。南山城の拠点寺院として抽出された高麗寺、平川廃寺がその候補の要件を満たしていた。既存の氏寺の中には、官寺的な側面がみられるのである。

ところで、律令国家の成立は、必然的に都市を生み出すこととなる。藤原京や平城京の造営には、近江国の田上山やその他の檜材が大量に利用された。これらの材木は筏に組んで瀬田川(宇治川)を下り、巨椋池から泉川(木津川)を遡上させて泉津に集められ、そこから奈良山を越えて奈良盆地へと運ばれた。これらの材木は都城ばかりではなく、京内外の諸大寺の造営や維持にも用いられ、後の木津と呼ばれる泉津には大量の材木が集積していた。ここは、官の港湾施設だけではなく大安寺や薬師寺などの木屋所も設けられ、一大港湾都市となるのである。当然、ここに陸揚げされるのは材木だけではない。大量消費地としての都城を維持するための様々な物資が集積することとなる。後の長岡京における山崎津、平安京における淀津に見るように、藤原京から平城京、そして恭仁京への遷都は、都市の経済・流通機能を充足させるための「津」を求めた移動と考えられるのである。そして、都城には政治的、流通・経済的機能だけではなく、宗教的機能も充足される必要がある。

平城京・恭仁京の遷都は、南山城の宗教的様相にも大きな影響を及ぼすこととなる。本章では、都城周辺における都市的景観のなかで、南山城の古代寺院を捉えることとしたい。

木津川周辺の宗教的景観を眺めると、俗地としての泉津の対岸には、泉橋で連結された泉橋寺や隆福尼院があり、台地上にはかつてより南山城の中核寺院である高麗寺が威容を誇っていた。高麗寺の対岸には泉津と接して、賀世山西道沿いに燈籠寺廃寺があり、鹿背山の台地上には鹿山寺、宮のある左京には、恭仁京の中核的宗教施設としての金光明寺が所在し、宮の背後には海住山寺が聳え立っていたであろう。さらに木津川を上流に遡れば、霊峰笠置山の笠置寺がある。泉橋を下れば木津川沿いに松尾廃寺・里廃寺・下粕廃寺・蟹満寺が薈を競い、井手寺に至るのである。そして、平川廃寺・久世廃寺・正道廃寺がもう一つの拠点を形成していた。木津川沿いの南山城には聖地と俗地が交互に展開する様相が見られるのである。

第一節 恭仁宮と京の実態

はじめに

天平12年(740)12月15日、聖武天皇は三十年間続いた平城京を捨て、突然、恭仁京(大養徳恭仁大宮)へ遷都する。藤原広嗣の乱を契機とするかのような平城京出奔(東国行幸)の途中、聖武天皇は同行していた右大臣橘諸兄を恭仁京造営のために先発させ、わずか九日間で遷都が行われた。これだけの時間ではほとんど建物らしいものが造れるはずもなく、翌13年の元日朝賀の式は「宮垣未だ就らず。繞すに帷帳をもつてす」というありさまであった。

遷都以来、平城宮の建物を移建し、あしかけ四年の歳月をかけて推進した恭仁宮の造営は、その間に着手した紫香楽宮造営もあって、天平15年(743)12月に突然中止される。そして、翌16年2月に難波宮への遷都宣言がなされ、さらに翌17年5月にはわずか一年で難波宮を捨て、天平12年以来5年にして宮都はふたたび平城京にもどるのである。恭仁京の歴史は、天平16年2月の廃都宣言、同17年5月の東西市の移動によって完全に終わる。そして天平18年(746)9月、恭仁宮大極殿は山背国分寺に施入され、国分寺としての新たな歴史が始まるのである。

ここでは、聖武天皇の彷徨五年の間に営まれた恭仁・難波・紫香楽宮と廃都された平城京を比較しながら、現時点での考古学的調査成果を整理し、恭仁宮・京の実態について概観したい。ただ、恭仁京においては宮における一定の調査成果はあるが、京に関する調査は皆無である。よって本文では、京内を貫流する大動脈・木津川の水運とその中心的港湾施設である泉津や行基における架橋活動、宗教施設としての高麗寺を中心とした京内外の寺院、橘諸兄の相楽別業と石橋・岡田池両瓦窯の生産活動を中心に再評価し、そこから見出される都市的景観から、改めて恭仁京の実態を捉えなおしてみたい。

1. 恭仁京の様相

恭仁京遷都 京都府の最南端相楽郡の木津川市にかつて営まれた恭仁京は、遠く三重県の名張に源流をもつ木津川が相楽郡東部を西に向かって貫流し、いま一度流れを北に転じるその内懐に営まれた都である。木津川はさらに北流して巨椋池に注ぎ、ここで宇治川・桂川と合流して淀川となり大阪湾にいたる。恭仁京の南側に連なる寧楽山の低丘陵は、かつての大和と山背国を隔てる境界であり現在も木津川市と奈良市を隔てる府県境であるが、木津川という大和の北の玄関口にいたる中継地でもあった。予想される京城には、三角縁神獣鏡三十数面が出土した古墳時代前期初頭の史跡椿井大塚山古墳や、大和川流域の高井田山古墳(大阪府柏原市)とともに大和への横穴式石室導入の嚆矢となった天竺堂1号墳、渡来系氏族高麗(狛)氏の氏寺とされる飛鳥時代創建の史跡高麗寺跡などがあり、この地が律令制以前から大和と地方を結ぶ重要な結節点であったことを知る。奈良時代になっても、山陰・山陽・北陸・東山道がこの地で結束し、また平城京の外港(泉津)が置かれて水陸交通の要衝

であった。そして、寧楽山丘陵一帯には宮殿・寺院所用の瓦を生産した窯址群が築かれ、木津川上流には和同開珎を鑄造した銭司遺跡がある。まさに産業・交通の両面で都を支えた地域なのである。

恭仁宮が営まれた木津川市東部の加茂町瓶原地域は、平城宮から寧楽山を越えて直線距離で約十キロメートルと至近の位置にある。ここは急峻な笠置山地を抜けた木津川が開放されて平野に注ぐ最初の地であり、和銅元年（708）に元明天皇が行幸した岡田離宮や平城遷都以後、元明・元正・聖武天皇が度々訪れた鸕原離宮が営まれた地でもある。現在、これら離宮の所在は不明であるが、上流に切立つ断崖や川の景観を眺める風光明媚な景勝の地として選ばれたのであろう。ところが、天平12年（740）12月、聖武天皇は、彷徨の末なじみのこの地に突然都を移したのである。

恭仁京遷都の直接の原因は、この年九月に挙兵の報がもたらされた藤原広嗣の乱である。天平9年（737）、政敵長屋王を倒し政権を独占していた藤原四子が天然痘とみられる疫病に冒され、相次いで病死する。政治的影響力を失った藤原氏にかわって国政に大きな発言力をもったのが、翌年右大臣となった橘諸兄である。広嗣の乱は、藤原氏の政権奪還を意図した直接的な聖武一諸兄体制批判なのである。疫病の流行による社会不安と広嗣の乱に象徴される政界の混乱を一気に収束させる有効な手段として、恭仁京遷都が断行されたと考えられる。しかし、直接の原因が広嗣の乱であり平城京を捨てるが必要であったとしても、最終的な目的である聖武天皇の専制的な政治体制を確立するためには、遷都先がどこであってもよいはずはない。二ヵ月近い彷徨の末、なぜこの地を選んだのであろうか。その理由については、先に記した交通の要衝である点や聖武天皇旧知の土地であることのほか、橘諸兄の相楽別業が近くにあり自らの勢力圏でもある相楽郡への遷都を諸兄が主導したとする喜田貞吉の説（喜田貞吉 1915）や地勢が唐の副都洛陽に似ているため陪都としてこの地が選ばれたとする瀧川政次郎の説（瀧川政次郎 1967）、大仏建立のための仮の都であったとする瀧浪貞子の説（瀧浪貞子 1991）などがある。なお、瀧浪は聖武天皇の東国巡行を壬申の乱における大海人皇子の行動を追体験するものと評価しており、偉大な祖としての天武天皇の模倣としている。

ところで、奈良時代以前の宮都においては、神話・伝承の時代は別として、単都制・複都制への志向の違いはあったとしても、いずれも大和の地から軸足を外すことはなかったし、外し得なかったと言えよう。平城京は大和北端の地への移動ではあったが、寧楽山を越えることはできなかった。この遷都を都市機能充実のための必要条件として津を求めて移動したと仮定するならば、恭仁京遷都によって初めて大和の地に津を確保し得たものとするができる。なぜなら、恭仁宮がたとえ山背国にあったとしても、そこは正式には「大養徳恭仁大宮」なのである。このことは、大和国が本来の宮都の所在地であるとする意識のあらわれであるか否かは別として、確実に宮都の軸足が大和国からずれたことを示している。なお、大養徳の国号表記は天平9年（737）から同19年（747）まで用いられる。恭仁京遷都は、短期間とはいえ、桓武天皇による長岡京遷都によって完全に宮都の軸足が山城国へ移る先駆けとすることはできまいか。

宮の造営 『続日本紀』によると恭仁宮の造営は、天平12年（740）12月6日、橘諸兄による九日後に迫った遷都に向けての整備から始まり、同15年（743）12月26日の突然の造作中止によって

終結する。平城宮の大極殿などを移築して造営した恭仁宮は、実質三年にして新たに着手した紫香楽宮造営の影響もあって廃都の方針が下されたのである。これだけの間にどれだけの造営があったのであろうか。京都府教育委員会では、昭和48年(1973)以来今日にいたるまで宮域での発掘調査を継続実施しており(京都府教育委員会 2000)、旧加茂町(平成19年 木津町・山城町と合併して木津川市)教育委員会による昭和61年(1986)以来の調査もある。なお、これらの調査はすべて足利健亮の歴史地理学的研究(足利健亮 1973, 1983)を基礎としており、その検証を出発点としている。以下、これら今日までの調査成果を概観したい。

宮の範囲については各辺で大垣の痕跡が確認されており、心心間距離で東西約560m(1800小尺強)・南北約750m(2500小尺強)の規模をもつ。ただし、長方形プランをもつ各辺の歪みは大きく、特に東面南門以南の大垣は大きく東に逸れている。この規模は、正方形プランをもつ平城宮の東張り出し部を除く面積と比較しても三分の一程度にすぎない。宮城門として検出している遺構は東面南門のみであり、朱雀門は未検出である。天平14年(742)8月5日、大宮垣築造の功により、秦下嶋麻呂が破格の昇進をとげる。遷都直後の元日朝賀の式では、「宮垣未だ就らず。繞すに帷帳をもってす」というありさまであったのが、ようやくこの年、宮の外観を整えたのである。

恭仁小学校の北側に残る大極殿の土壇は、天平18年(746)、山背国分寺に施入されて金堂となったものである。現在も原位置をとどめる花崗岩製の礎石二基と移動または転用された凝灰岩製の礎石六基が残っている。発掘調査では、国分寺金堂の最終段階の姿を検出しているが、基壇の外装は瓦積で基壇正面には乱石積の中央階段を付設していた。正確な規模等は不明であるが、瓦積の南北規模で約28m(94尺)を測り、東西約53m程度が予想されている。建物は桁行九間×梁間四間の入母屋造りに復元可能で、この規模からは「大極殿並びに歩廊」を壊して運んだとする文献記載通り、平城宮第一次大極殿の移設が行われたと解釈されている。だとしたら、当初の基壇は凝灰岩による壇上積基壇と考えてよからう。なお、最近の調査では、大極殿院東回廊西側の礎石据付穴の一部が確認されており、やはり文献記載通り「歩廊」の移設があったとすると、平城宮での調査成果から複廊式の築地回廊が復元でき、東西築地の心心間距離で480尺(400大尺)の大極殿院規模が予想されている。ただ、この値は後述する朝堂院の東西規模と齟齬をきたしており、今後の検証が必要である。後殿および回廊の南北規模・閤門の位置などは不明である。

朝堂院については、築地塀ではなく掘立柱塀で東・西・南三方を区画しており、その規模は東西約125m(420尺)を測るが、東辺南側で大きく東に逸れており東面大垣の歪みに対応する。朝堂院の南側には朝集殿院が設けられ、それぞれで南門が確認されている。朝集殿院の規模は北辺で430尺、南辺で450尺、南北270尺となり、五間門として南門が復元されている。なお、朝堂院北辺の状況が不明のため判然としないが、朝堂院の南北規模は250m程度と考えられる。現段階では、区画内部の朝堂建物の存在すら確認できていない。大極殿院・朝堂院ともに平城宮に比べて大幅に縮小されている。

大極殿北方の内裏地区においては、掘立柱塀で区画された二つの地区が東西に並置されていた。内裏西地区と呼ぶ区画は、東西約97.9m(330尺)、南北約127.4m(430尺)の規模をもち、ほぼ同規

模と考えられる東地区同様、正殿の可能性をもつ東西棟の大型掘立柱建物を内包している。建物相互の性格や各地区の役割など不明な点が多い。

以上のように、恭仁宮に関してはいかに短期間の造営だとしても、平城宮に比べて規模は縮小され施工上の歪みも顕著である。これらの施工が本格施工を前にしたとりあえずのものであったのか、当初からの設計であったのかの判断は保留するとして、宮の造営に際しては大幅な土地の改変はなされておらず、旧来の地形にうまくコンパクトに収めた感がある。

京城に関しては次節で述べるが、宮城の調査に伴い条坊関連の遺構がいずれも部分的ではあるが検出されている。宮南面大路（二条大路）南北両側溝、宮東面大路（東一坊大路）東西両側溝、朱雀大路東側溝がそれである。天平13年（741）7月10日、新都建設の槌音が響くなか、聖武天皇は元正太上天皇を木津川河頭に迎える。このとき辿った道は朱雀大路だったのか。あるいは二条大路だったのであろうか。このころ工事に着手し同年10月16日には、二条大路の西端から木津川対岸に向けての架橋工事が終了する。また、翌年の8月13日には朱雀大路を下って対岸への大橋建設が開始されるのである。まさに恭仁京は、橋で連結された水上都市として建設されたのである。

2. 恭仁京の外観

天平13年（741）9月12日条の恭仁京宅地班給記事には、賀世山西道より以東を左京・以西を右京とするとある。この賀世山西道こそ木津川市木津町の鹿背山西麓の道であり、ここから東の木津川市加茂町側に左京、山城町・木津町側に右京が展開するのである。このことは、天平17年（745）5月6日条に紫香樂から発した聖武天皇が「恭仁京の泉橋に至る」とする記事からも、その広がりを知ることができる。

足利健亮は、この京城に南北九条・東西八坊の平城京のプランをあてはめ、右京中軸線を山城・木津町にそれぞれ呼び名を残す「作り道」に、左京中軸線を大極殿の中軸線に求めて条坊の復元を行った。その結果、木津町鹿背山付近に京内ではあるが条坊の敷かれていない方形の区画を設け、その東西に左京と右京を分割するという画期的な学説となったのである（足利健亮 1973, 1983）。ただ、恭仁宮独自ともすべき小規模な宮城が確定した今日、足利説京城の修正を余儀なくされている。それでもなお、京城に関する考古学的データが決定的に不足している現状では、足利説は唯一の拠所でありその有効性はゆるがない。

ここでは、恭仁京がいわゆる「不整形都城」「非条坊制都城」であるか否かは別として、京とその周辺における都市的要素を探りたい。その場合の切り口は、交通、宗教、生産と消費の三点である。

泉津と泉橋 藤原京や平城京の造営には、近江国の田上山そのほかの檜材が利用された。これらの材木は筏に組んで瀬田川～宇治川を下り、木津川を遡上させて泉津に集められ、そこから寧楽山丘陵を越えて奈良盆地へと運ばれた。これらの材木は、都城ばかりではなく京内外の諸大寺の造営や維持にも用いられ、後に木津と呼ばれる泉津には大量の材木が集積していた。泉津は、平城京への材木供給基地として外港の役割を担うのである。平城環都後の天平19年（747）の「大安寺伽藍縁起并流記

資材帳」には、山背国相楽郡にある荘園のひとつとして「一泉木屋并藺地二町 東大路 西薬師寺木屋 南自井一段許退於北大河之隈」とあり、泉津には大安寺だけではなく薬師寺の木屋所も並んであったことがわかる。泉津には、諸司・諸大寺が軒を連ねて拠点構えていたのである。一方、ここに拠点を持たない中小の寺院や官司は、購入することによって用材を賄った。しかもここに陸揚げされるものは材木だけではない。様々な物資が売買され、流通していたことであろう。ついに恭仁京は、この経済流通の拠点を手中に収めたのである（中島 正 2009）。

泉津の範囲については不明であるが、木津川南岸の木津町域に広く展開していたと考えられる。そして、その跡が上津遺跡・木津遺跡・木津川河床の木津北遺跡などである。なかでも上津遺跡は、1970年代後半に宅地開発に伴う発掘調査が実施されており、市司関連の官衙遺跡としてある程度その様相を知ることができる（木津町教育委員会 1980）。木津川の自然堤防上に立地し御霊神社周辺の宮ノ裏地域に広がる遺跡からは、恭仁京存続期を含む奈良時代の多量の土器・瓦類が出土しており、特に三彩を含む鉛釉陶器や墨書土器・硯・銭貨・帯金具・海老錠の鍵などは、官衙的性格を示している。なお、出土瓦には「泉」とヘラ書きされた丸瓦の破片があり、泉津を暗示する遺物である。

大量の物資が陸揚げされる泉津は、南北に縦貫する北陸道が渡河する地でもあり水陸交通の要地である。多くの官人や市人、そして港湾・建設・運搬労働者が集住する地は、多くの貧困都市民を生み出すと同時に潜在的な労働力も確保する。救済されるべき民衆と潜在的労働力の結集する場こそ、僧行基の活動拠点となるのである。当初、行基の布教活動は国家から禁止されていたが、一転して土木工事の組織者としての能力が認められて大仏造立などの国家的な土木・建設事業にも手腕をふるい、天平17年（745）正月21日の詔で大僧正にまで任じられた。前年の11月13日によく漕ぎ着けた大仏の体骨柱建立の功によるものであろうか。

泉津の対岸、山城町の上粕にある泉橋寺は、行基創建の四九院のひとつ発菩薩院泉橋院（泉橋院）を前身としており、別に隆福尼院と泉布施屋があった。これら二寺は、『行基年譜』によると恭仁京造都直前の天平12年（740）に建てられており、翌年の3月には泉橋院で聖武天皇と行基が対面している。やはり『行基年譜』には泉大橋（泉橋）も記されており、泉橋・泉橋院・泉布施屋がセットで造営されたことがわかる。聖武天皇にとっては、恭仁京の造営において行基による民衆の組織力はぜひとも必要であった。前節で記した天平13年10月16日の左京における木津川の架橋記事では、行基の名こそ登場しないが「畿内および諸国の優婆塞らを役し、成るに随って得度させること七五〇人」とあり、行基集団の公認が架橋事業の見返りであった可能性が考えられる。だとしたら、行基の実力を見抜き恭仁京造営に役立てた人物こそ、橋諸兄に違いない。

橋諸兄と相楽別業 恭仁京遷都直前の天平12年5月10日、聖武天皇は橋諸兄の相楽別業に行幸する。この別業の所在地は現在比定できていないが、諸兄が井手左大臣とも呼ばれることから、木津川市北西の山城町に接する現在の綴喜郡井手町に求める説が有力である。なお、この地域はかつての相楽郡の北端にあたり、聖武天皇の東国巡行最終日にとどまった玉井頓宮もこの付近に営まれていた。

この地を西流する木津川の支流玉川の北岸で、平城遷都により藤原京から移された大官大寺（後の

大安寺)の創建瓦を生産した石橋瓦窯跡が発見された(井手町教育委員会 2003)。当然、ここで生産された瓦は、木津川を遡って泉津で陸揚げされ、大安寺へ運ばれたのである。実はこの窯跡こそ、泉津にあった大安寺の木屋所とともに相楽郡に所在するいまひとつの荘「棚倉瓦屋」なのである。遺跡の規模などは不明であるが、平成十八年に「史跡大安寺旧境内」の附指定を受けている。「大安寺伽藍縁起并流記資材帳」では、この瓦屋の四至を「東谷上 西道 南川 北南野大家界之限」としており周囲の状況とよくあう。ここでいう北の「南大家野」については明らかでないが、天平十九年当時存在した「大家」といえば諸兄の別業以外に想定できるものはなく、玉川北岸の台地上に相楽別業を比定できそうである。なお、この台地上には、やはり橘諸兄創建と考えられる井手寺跡の礎石が散在しており、寺院と邸宅が並んで営まれていたことになる。

井手寺跡に関しては、平成15年度から井手町教育委員会による継続的な調査が実施されている(井手町教育委員会 2014)。伽藍配置の概要はまだ不明であるが、凝灰岩の破片が多数出土していることから、主要建物基壇の外装は凝灰岩による壇上積と考えられ、整美な石敷の参道も確認されている。また、平成一八年度調査では、食堂背後の盛殿が僧坊跡の可能性をもつ礎石建物を検出しており、大規模な伽藍が予想される。出土遺物では、三彩の方形槿先瓦が出土しており、寺院としての格調の高さを示している。出土軒瓦は、平城宮式のものが主体を占め、玉川南方の石垣地区にある岡田池瓦窯跡の製品と同範関係が顕著である。なお、岡田池瓦窯跡については調査が行われていないため詳細は不明であるが、窯体の一部が確認されている。平城宮式の瓦を生産した窯跡であり、恭仁宮跡出土軒瓦との同範関係をもつ。恭仁宮所用瓦を生産した「西山瓦屋」の候補地としてよからう。恭仁京が置かれた相楽郡の北端にある橘諸兄の拠点には、単なる地方寺院とは考えられない格式をもった井手寺が建立され、天皇の行幸をうけるだけの壮大な邸宅を構えていた。しかもその近くには、官の大寺である大安寺の瓦生産拠点「棚倉瓦屋」や官窯としての岡田池瓦窯跡があり、木津川という流通手段も確保している。

他には、恭仁京造営前後の遺跡として右京の南西にある樋ノ口遺跡(相楽郡精華町)も注目される遺跡である。離宮あるいは寺院と考えられ、木津川の左岸で古山陰・山陽併用道に近く、大量の緑釉陶器や二彩・三彩陶器が出土した。

高麗寺と京内の寺院 恭仁京とその周辺には、遷都前から存続している寺院がある。実態のある程度わかるものでは山城町域の高麗寺跡、木津町域の燈籠寺廃寺がそれである。燈籠寺廃寺は一基の土壇を残しており、周囲からは飛鳥時代末期様式の素弁蓮華文軒丸瓦が採集され、発掘調査では白鳳期の軒平瓦も出土しているが詳細は不明である。それ以外には右京城の山城町に松尾廃寺や木津川対岸の精華町に里廃寺があり、井手寺の南方には白鳳の大金銅仏を本尊とする蟹満寺がある。奈良時代創建の寺院では、行基に関連する泉橋寺(泉橋院)や隆福尼院、木津町鹿背山の鹿山寺があるが、泉橋寺以外その実態は不明である。その他、『続日本紀』に度々登場する金光明寺についても詳細は不明であるが、左京木津川北岸の朱雀大路に面してあったと推定されている。なお、その対岸の加茂町法華寺野は国分尼寺推定地であり、先述の燈籠寺廃寺もその候補地となっている。あらゆる宗教施設は、近

接するか一定の距離を隔てた俗地や別の聖地の存在によってその性格が規定されるが、京内の寺院は仏法を通して国家鎮護に協力することが義務付けられている。

飛鳥時代創建の高麗寺については、『日本霊異記』に天平年中のこととして高麗寺僧榮常の記事があり、『今昔物語集』他にも同様の説話が収録されている。また、『播磨増位山随願寺集記』（姫路市随願寺蔵）には中世の縁起ではあるが、天平15年（743）3月、興福寺・栗師寺・播磨増位寺の僧等が内裏（恭仁宮）で読経した後、増位寺僧榮常が高麗寺から戻らなかったと記している。これは『続日本紀』の同年3月4日条、一月から四九日間四九人の衆僧を金光明寺に集めて行った金光明最勝王経転読の行事が終わり、衆僧を慰労したとする記事と関連するようである。これは、高麗寺が直接この行事に関わったわけではないが、高麗寺が京内の寺院となったことで生じた播磨増位寺との交流を知ることができる（高橋美久二 1998）。なお、高麗寺跡の近年の発掘調査では、通常鴟尾を載せることのない南門に大振り鴟尾を飾っており、いかに木津川の面した正面観を意識したかがわかる。また、出土瓦には、恭仁宮造営時所用の軒丸・軒平瓦や特徴的な文字瓦が含まれており、恭仁京造営と連動した寺院整備がなされているのである。これら一群の瓦は「西山瓦屋」の製品であり、先に岡田池瓦窯跡をその候補地としてあげた。しかし、出土瓦からみて恭仁宮造営と密接な関連がうかがえるのは、北に遠く隔たった城陽市の平川廃寺や先に記した井手寺、京内の高麗寺であり、京内の寺院がすべて恭仁宮造営と連動した整備がなされたとは限らないのである。

京内木津川周辺の宗教的景観を眺めると、俗地としての泉津の対岸には、泉橋で連結された泉橋寺や隆福尼院があり、台地上にはかつてより南山城の中核寺院である高麗寺が威容を誇っていた。高麗寺の対岸には泉津と接して、賀世山西道沿いに燈籠寺廃寺があり、鹿背山の台地上には鹿山寺、宮のある左京には、恭仁京の中核的宗教施設としての金光明寺が所在し、宮の背後には海住山寺が聳え立っていたであろう。さらに木津川を上流に遡れば、霊峰笠置山の笠置寺がある。泉橋を下れば木津川沿いに松尾廃寺・里廃寺・蟹満寺が薈をきそい、井手寺に至るのである。木津川沿いの京内には聖地と俗地が交互に展開するのである。

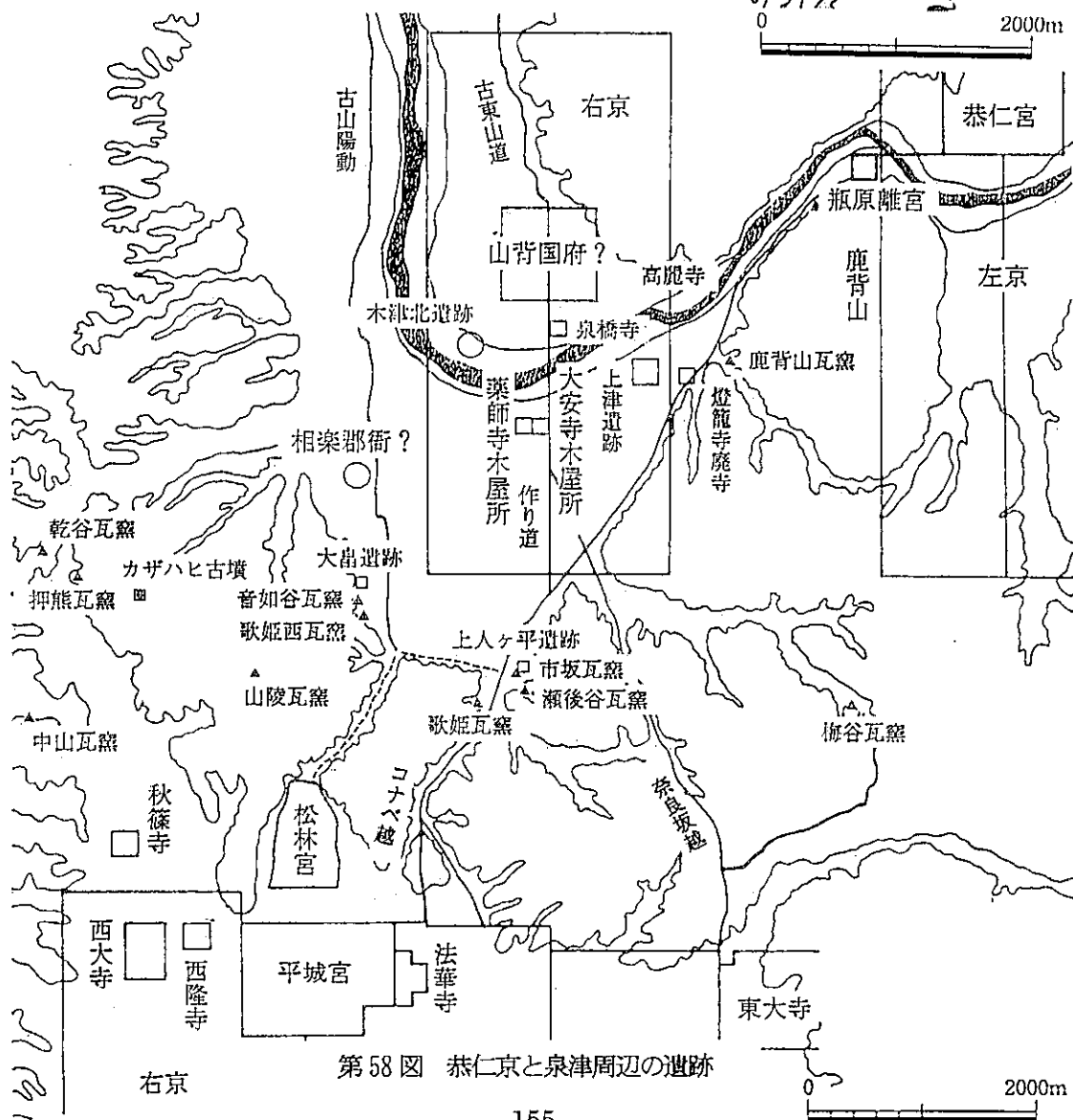
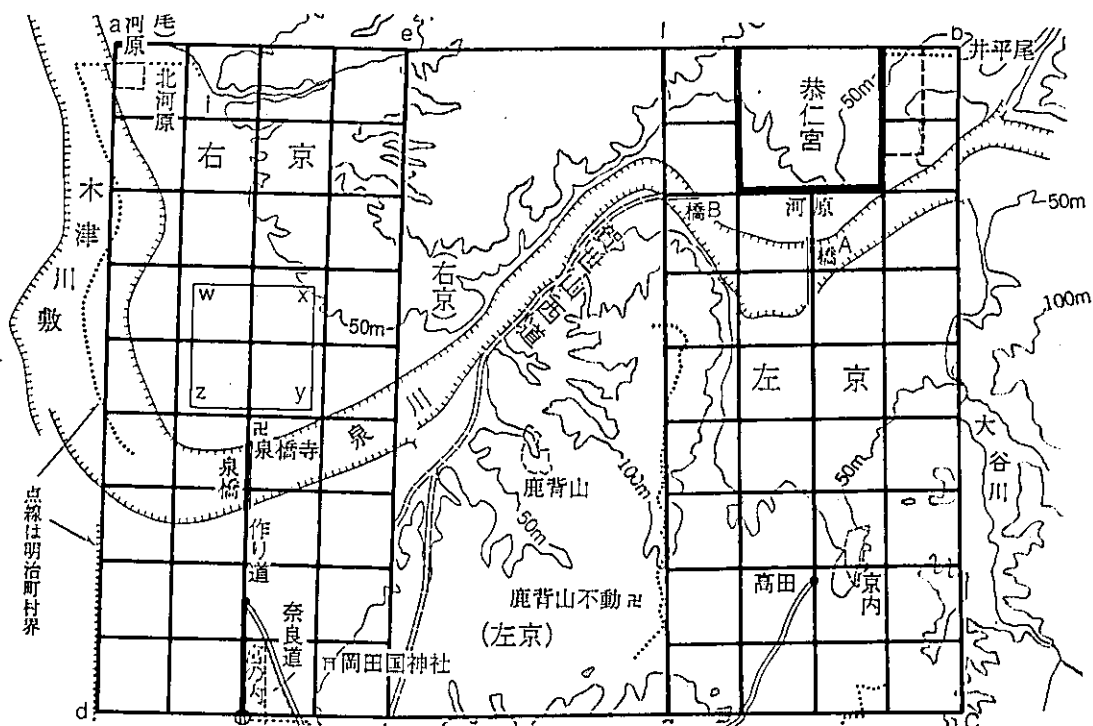
3. 大養徳と難波・紫香楽

皇都難波宮 恭仁京遷都後の聖武天皇は、彷徨五年と言われるように恭仁・難波・紫香楽をまさに逡巡する。天平16年（744）閏正月1・4日、天皇は都をどこにするかの意見を百官のみならず市人にまで問うている。この世論調査の結果は、百官では恭仁支持・難波支持でわれるが市人では圧倒的に恭仁京支持の結果となった。それにもかかわらず、紫香楽宮滞在中の聖武は同年2月24日、突然難波宮を皇都とすると宣言するのである。聖武朝難波宮は、恭仁京遷都前の神亀3年（726）知造難波宮事任命から翌年の造営開始によりすでに造作を進めており、天平4年（732）頃に完成したようである。同6年（734）には宅地の班給も行われていた。つまり難波宮は、恭仁京遷都の十数年前から、正都平城京に対し大極殿・朝堂院を完備した「副都」として造営されていたのである。偉大な皇祖天武天皇への憧憬は、難波宮造営からすでに始まっていたと言えよう。ところが、難波宮皇都宣言の翌天平17

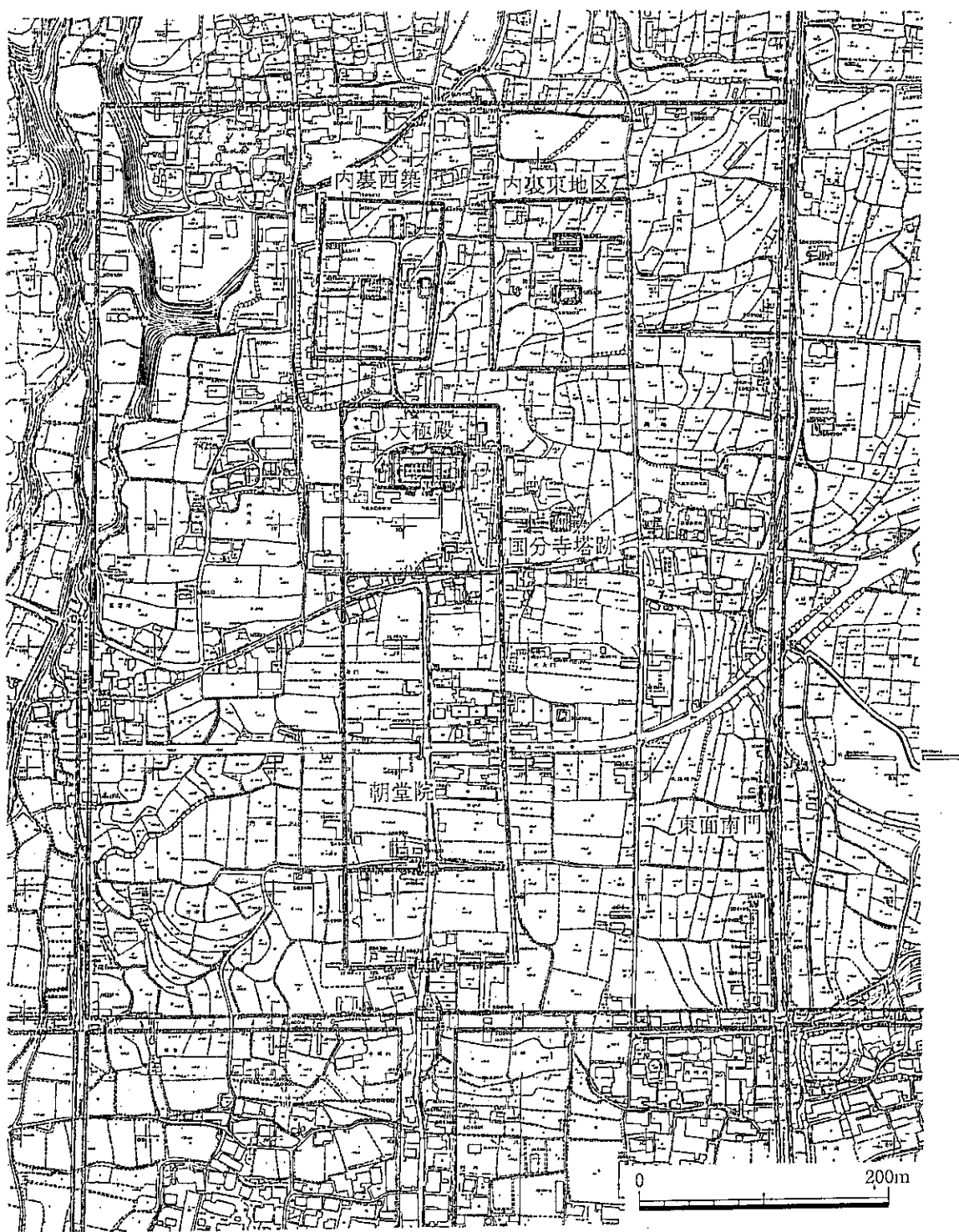
年5月2日、難波・平城のいずれを都とすべきかを諸司の官人に問い、同4日には平城京四大寺の衆僧に同じ内容の問いを發した。聞くまでもなく平城京遷都の意見が圧倒的であった。同月10日、恭仁宮に戻っていた聖武天皇は京の市人が平城京へ大移動する様子を見て、翌日には平城京へ行幸している。この頃、すでに紫香樂での大仏建立を断念した天皇は、平城京の東郊に大仏の造立を開始しており、8月28日には難波宮へ行幸し、9月19日には難波宮へ皇族を招集し平城宮の駅鈴と内外の印を移した。大勢はすでに平城京遷都に決しているにもかかわらず、聖武天皇は紫香樂に替えて平城京を仏都とし、あくまでも難波宮の正都化にこだわったのである。しかし、同月25日には平城京へ戻り、12月15日には恭仁宮の兵器を平城宮へ移すことにより、事実上の平城京遷都と彷彿五年は完了するのである。

難波宮は、朝堂院朝堂が八堂であり、平城宮の一二堂を正式とするならばやはり「副都」としての位置付けが理解できる。しかし、突然の難波宮皇都宣言から平城京遷都にいたる難波宮への聖武の最後のこだわりは、いったい何に起因するのであろうか。平城京に対する忌避だけでは説明のつかない何かがあるはずである。そのヒントは、恭仁宮大極殿の北に隣り合わせて造られたふたつの内裏にありそうである。すでに記したように、恭仁京遷都後まもなくの天平13年(741)7月10日、聖武天皇は元正太上天皇を木津川河頭に迎える。ふたつの内裏のいずれか一方が元正太上天皇のためのものであろう。恭仁宮では、先帝と現帝の内裏が並ぶ特異な構造となったのである。その後、聖武天皇が大仏建立のために紫香樂への行幸を繰り返すうち、元正太上天皇は橘諸兄とともに難波宮へ移っていた。天平16年の突然の難波宮皇都宣言は、紫香樂宮における大仏建立への理解を得るため、難波にある元正太上天皇と橘諸兄に対する不承不承の妥協であったと考えられるのである。しかし、紫香樂宮での大仏建立が挫折してもなお、平城京での大仏建立に執念を燃やす聖武天皇は、あくまでも仏都と他の都の分離にこだわったようである。難波宮は、このような聖武天皇と元正太上天皇との確執に翻弄された「帝都」なのである。

恭仁京東北の道 ならば、そこまで聖武天皇が執念を燃やした大仏建立と仏都建設に恭仁京はどう関わるのであろうか。天平14年(742)2月5日、「恭仁京の東北の道を開き、近江国甲賀郡に通わす」とある。その後四回にわたる恭仁京～紫香樂宮往復はすべてこの恭仁京東北の道が使用されている。このルートは、恭仁宮東北部から木津川市加茂町の口畑・奥畑・石寺を通って相楽郡和東町の原山・湯船を抜け、甲賀市信楽町の中野・長野から甲賀寺の谷を抜けて紫香樂宮跡のある宮町遺跡にいたる山道である。このルートの開削が恭仁京遷都の直後から始まったとしても、天皇の行幸を可能とするほどの整備には多くの労力を費やしたことであろう。そして、同年8月27日の第一回目の行幸を前にして同月11日には造紫香樂難宮司が任命され、以来三回目の行幸までは大仏造頭の候補地を自ら視察し官人らへの披露と同意を得るためのものであった。とうとう四回目の行幸の間、天平15年10月15日には、大仏造頭の詔が發布されるのである。そして同月19日には恭仁京の架橋活動の功のあった行基ら智識の協力を得て、甲賀寺の寺地が開かれる。なお、一連の聖武天皇による紫香樂行幸は、当地における廬舎那仏造像と甲賀寺の造営を目的としており、宮の造営はあくまでもそれらを推進するた



第58図 恭仁京と泉津周辺の遺跡



第59図 恭仁宮跡復元図

年号	天皇	西暦	月	日	事 項
和銅元	元明	708	9	22	山背国相楽郡岡田離宮に行幸する。
和銅3	〃	710	3	10	都を平城に遷す。
和銅4	〃	711	正	2	はじめて都亭駅を置き、相楽郡には岡田駅を設ける。
和銅6	〃	713	6	23	麩原離宮に行幸する。
和銅7	〃	714	閏2	22	麩原離宮に行幸する。
霊元	元正	715	3	1	麩原離宮に行幸する。
〃	〃	〃	7	10	麩原離宮に行幸する。
神元	聖武	724	2	4	聖武天皇即位する。
神龜2	〃	725	3	4	三香原離宮（麩原離宮）に行幸する。〔万葉集4—546〕
神龜4	〃	727	5	4	麩原離宮に行幸する。
天平8	〃	736	3	朔	麩原離宮に行幸する。
天平11	〃	739	3	2	麩原離宮に行幸する。
〃	〃	〃	3	23	（聖武）天皇と（元正）太上天皇、麩原離宮に行幸する。
天平12	〃	740	5	10	天皇、右大臣（橘諸兄）の相楽別業に幸す。宴飲酣暢なる時、大臣の男無位奈良麻呂に従五位下を授ける。
〃	〃	〃	5	12	天皇（相楽別業から平城）宮に還る。
〃	〃	〃	9	3	藤原朝臣広嗣、反乱を起こす。
〃	〃	〃	10	29	伊勢国に行幸する。鈴鹿王・藤原朝臣豊成を（平城宮の）留守とする。
〃	〃	〃	11	3	10月29日の大將軍大野朝臣東人らの奏により、10月23日に広嗣が捕えられたことを天皇が知る。
〃	〃	〃	12	6	右大臣橘宿禰諸兄、遷都に備えて山背国相楽郡恭仁郷を整備する。
〃	〃	〃	12	14	天皇、永津嶋宮から山背国相楽郡玉井嶋宮に至る。
〃	〃	〃	12	15	天皇前にあつて恭仁宮に幸し、はじめて京都を作る。太上天皇皇后後にあつて至る。
天平13	〃	741	正	朔	はじめて恭仁宮にて朝賀を行う、宮垣いまだならず。
〃	〃	〃	正	11	伊勢大神宮はじめ七道諸社に（恭仁宮）遷都のことを報告する。
〃	〃	〃	正	16	大極殿に御して宴を百官の主典以上に賜う。
天平13	聖武	741	3	24	国分寺・国分尼寺造営の詔がでる。
〃	〃	〃	閏3	9	使を遣わして、平城宮の兵器を麩原宮に運ばせる。
〃	〃	〃	閏3	15	留守大野朝臣東人・藤原朝臣豊成らに詔があり、今から以後、5位以上のものは勝手に平城に住してはならぬ、平城に現在いるものは今日のうちに（恭仁へ）還れと命じる。
〃	〃	〃	5	6	天皇、河南に行幸して校獵を視る。
〃	〃	〃	7	10	（元正）太上天皇、新宮に移る。天皇河頭に迎える。
〃	〃	〃	7	13	群臣を新宮において宴し、女樂高麗樂を奏させる。
〃	〃	〃	8	28	平城の2市を恭仁京に移す。
〃	〃	〃	9	4	遷都のため、左右京の百姓の調徂・四畿内の田租を免す。
〃	〃	〃	9	8	勅して、遷都をもって天下に大赦す。また、大養徳・伊賀・伊勢・美濃・近江・山背等の行宮に供奉した郡は今年の調を収公しないこととする。また、智努王・巨勢朝臣奈麻呂の2人を造宮卿とする。
〃	〃	〃	9	9	（恭仁）宮造営のため、大養徳、河内、摂津、山背4か国から役夫5500人が徴発される。
〃	〃	〃	9	12	木工頭智努王・民部卿藤原朝臣仲麻呂・高岳連河内・主税頭文忌寸黒麻呂の4人を遣わして、京都の百姓の宅地を班給し、賀世山西道より以東を左京、以西を右京とする。
〃	〃	〃	10	16	賀世山の東河に橋を造らせる。7月より始めて今月に成る。畿内および諸国の優婆塞らを役し、成るに随つて得度させること計750人。
〃	〃	〃	11	21	右大臣橘宿禰諸兄の奏により、勅して、（恭仁宮を）大養徳恭仁大宮と号する。
天平14	〃	742	正	朔	大極殿未完成のため、假殿の四阿殿で朝賀をおこなう。石上・榎井両氏はじめて大橋檜を樹てる。
〃	〃	〃	正	7	天皇、城北苑に幸して五位以上を宴し、祿を賜うこと差あり。特に造宮の功により、造宮卿智努王に東施60疋・綿300屯を賜う。
〃	〃	〃	正	16	天皇、大安殿に群臣を集め宴す。また大宮に入る区域の百姓20人に爵一級を賜い、郡内に入る者は男女を問はず物を賜う。
〃	〃	〃	2	朔	天皇、皇后宮に群臣を集めて宴す。正四位上巨勢朝臣奈麻呂に従三位、従五位上坂上忌寸犬養に正五位下、正八位上藤原朝臣八重に外従五位下を授く。
〃	〃	〃	2	5	宴訖つて祿を賜うこと差あり。
〃	〃	〃	2	5	（恭仁）新京の宮室未完成のため、新羅使を大宰府で饗応し、放還する。この日、はじめて恭仁京東北道を開いて、近江国甲賀郡に通じさせる。
〃	〃	〃	4	20	天皇、皇后宮に御して五位以上を宴す。祿を賜うこと差あり。河内守従五位上大伴宿禰祐志備に正五位下、皇后宮亮外従五位下中臣熊凝朝臣五百嶋に従五位下を授く。
〃	〃	〃	8	5	大宮垣築造の功により、造宮録正八位下秦下嶋麻呂が従四位下の位と、太秦公の姓ならびに錢100貫・綿100疋・布200端・綿200屯を賜わる。
天平14	聖武	742	8	11	近江国甲賀郡紫香樂村に行幸しようと、造宮卿智努王・造宮輔高岡連河内ら4人を造離宮司とする。
〃	〃	〃	8	12	石原宮に行幸する。
〃	〃	〃	8	13	宮城以南の大路の西頭と麩原宮の東との間に大橋をつくるため、諸国に錢を賦課する。
〃	〃	〃	8	25	大隅・薩摩等の仕丁は、全員（恭仁）京に集める事が定められる。

第60図 恭仁宮関係略年表

年号	天皇	西暦	月	日	事 項
天平14	聖武	742	8	27	紫香樂宮に行幸する。鈴鹿王・巨勢朝臣奈岳麻呂・紀朝臣飯麻呂を（恭仁宮の）留守とする。大伴宿禰牛養・藤原朝臣仲麻呂を平城の留守となす。
〃	〃	〃	9	4	即日、紫香樂宮に至る。
〃	〃	〃	9	12	天皇（紫香樂宮から）恭仁京に還る。
〃	〃	〃	9	17	大いに風雨して、宮中の屋増および百姓の屋舎を壊る。
〃	〃	〃	11	5	（恭仁の）左右京および畿内の班田使が任命される。
〃	〃	〃	12	16	（恭仁の）左右京ならびに畿内の今年分の田租が免じられる。
〃	〃	〃	12	29	地震がある。
天平15	聖武	743	正	朔	紫香樂宮に行幸する。
〃	〃	〃	正	2	右大臣橘宿禰諸兄を遣わして、事前に恭仁宮に還らせる。
〃	〃	〃	正	3	紫香樂宮より（恭仁宮に）還る。
〃	〃	〃	正	7	天皇、大極殿に御して、百官の朝賀をうける。
〃	〃	〃	正	12	天皇、大安殿に御して、五位以上の官人を宴す。禄を賜うこと差あり。
〃	〃	〃	正	13	城の東北にある石原宮樓に御して、百官および有位の人等に餐をたまう。
〃	〃	〃	3	4	金光明最勝王經の読經のため、金光明寺衆僧を請う。
〃	〃	〃	4	3	金光明寺で、金光明最勝王經の読經がおわる。
〃	〃	〃	4	3	紫香樂に行幸する。橘宿禰諸兄・巨勢朝臣奈岳麻呂・紀朝臣飯麻呂を（恭仁宮の）留守となし、多治比真人木人を平城宮の留守となす。
〃	〃	〃	4	16	天皇（恭仁）宮に還る。
〃	〃	〃	5	5	群臣を内裏にて宴する。皇太子（阿倍内親王）自ら五節を拜う。
〃	〃	〃	5	27	磐田を永年私財とすることを許す。
〃	〃	〃	6	30	参議民部卿藤原朝臣仲麻呂左京大夫を兼ね、鴨朝臣角足、右京亮に任じられる。
〃	〃	〃	7	3	天皇、石原宮に御して、華人等を饗応する。
〃	〃	〃	7	26	紫香樂宮に行幸する。橘宿禰諸兄・鈴鹿王・巨勢朝臣奈岳麻呂・紀朝臣飯麻呂を留守とする。
〃	〃	〃	10	15	天皇・庭舎那仏の造営を發願する。
〃	〃	〃	10	16	東海・東山・北陸3道25国の今年の調庸等の物はみな紫香樂宮に納めることにする。
〃	〃	〃	10	19	天皇、紫香樂宮に御す。庭舎那仏像を造り奉らんために、はじめて寺地を開く。
〃	〃	〃	11	2	ここにおいて行基法師、弟子らを率いて衆徒を勧誘する。
〃	〃	〃	12	24	天皇（紫香樂宮から）恭仁宮に還る。
天平15	聖武	743	12	26	はじめて平城の器仗を選び、恭仁宮に収め置く。
天平16	〃	744	閏正	朔	平城の大極殿ならびに歩廊を壊って恭仁宮に遷し造ること4年、その功わずかにおわり、用度の費す所計るべくもない。ここに至って更に紫香樂宮を造る。よって恭仁宮の造作を停める。
〃	〃	〃	閏正	4	百官を朝堂に集めて、恭仁・難波二京いずれを都とするかを問う。その結果、恭仁京の便宜を陳べたものは五位以上24人、六位以下157人、難波京の便宜を陳べたものの五位以上23人、六位以下130人であった。
〃	〃	〃	閏正	9	巨勢朝臣奈岳麻呂・藤原朝臣仲麻呂を市に遣わして、市人に都をどこに定めるかを問う。その結果、難波を願う者1人、平城を願う者1人以外は皆恭仁京をもって都とすることを願った。
〃	〃	〃	閏正	11	（恭仁京の）京職から命じて諸寺と百姓の舎宅を作らせる。
〃	〃	〃	閏正	13	難波宮に行幸する。
〃	〃	〃	2	1	安積親王年17にして薨す。
〃	〃	〃	2	2	少納言茨田王を恭仁宮に遣わして、駅鈴、内外の印をとらせる。
〃	〃	〃	2	2	巨勢朝臣奈岳麻呂、留守官に給う所の鈴印を持って難波宮に詣る。鈴鹿王・小田王・大伴宿禰牛養・大原真人櫻井・穂積朝臣老を恭仁宮の留守とし、紀朝臣清人・巨勢朝臣嶋村を平城宮の留守とする。
〃	〃	〃	2	20	恭仁宮の高御座ならびに大衡を難波宮に運ぶ。また使を遣わして、水路をとって兵庫の器仗を運漕させる。
〃	〃	〃	2	21	恭仁京の百姓で、難波宮に移住しようとするものの移住を許す。
〃	〃	〃	2	24	三嶋路をとって紫香樂宮に行幸する。太上天皇および左大臣橘宿禰諸兄は難波宮に留まる。
〃	〃	〃	2	26	勅して、難波宮をもって皇都とし、京戸の百姓が意のまま往來することを許す。
〃	〃	〃	3	14	金光明寺の大般若經を紫香樂宮の運搬する。
〃	〃	〃	11	13	甲賀寺にはじめて庭舎那仏像の体骨柱を建てて。
天平17	〃	745	5	2	地震があり、京師の諸寺をして17日を限って最勝王經を転読させる。この日、太政官、諸司の官人らを召してどこを京とするか問うたところ、皆平城に都すべしと言った。
〃	〃	〃	5	3	地震がある。恭仁宮の掃除を造宮輔桑公嶋麻呂にさせる。
〃	〃	〃	5	5	地震があり、日夜止まず。この日、天皇、恭仁宮に還る。
〃	〃	〃	5	6	地震がある。天皇の一行が恭仁京泉橋に至った時に、百姓が道の左で拝謁して万歳と称した。この日恭仁宮に到る。
〃	〃	〃	5	10	地震がある。平城宮で大般若經を読ませる。この日、恭仁京市人が平城に徙る。
〃	〃	〃	5	11	この日天皇、平城に行幸する。
〃	〃	〃	12	15	恭仁宮の兵器を平城に運ぶ。
天平18	〃	746	9	29	恭仁宮大極殿を国分寺に施入する。
天平勝宝8	孝謙	756	5	2	聖武太上天皇、寝殿の崩じる。

※出典は注記のないもの以外『続日本紀』による。〔京都府教育委員会 2000〕年表より抜粋。

第二節 恭仁宮大極殿施入前の山背国分寺

はじめに

天平12年(740)12月15日、聖武天皇は三十年間続いた平城京を捨て、突然、恭仁宮(大養徳恭仁大宮)へ都を移す。藤原広嗣の乱を契機とするかのような平城京出奔(東国行幸)の途中、天皇は同行していた右大臣橘諸兄を恭仁宮造営のために先発させ、わずか九日間で遷都が行われた。遷都以来、平城宮の建物を移建し、あしかけ四年の歳月をかけて推進した恭仁宮の造営は、その間に着手した紫香楽宮造営もあって、天平15年(743)12月に突然中止される。そして、翌16年2月に難波宮への遷都宣言がなされ、さらに翌17年5月にはわずか一年で難波宮を捨て、天平12年以来5年にして宮都はふたたび平城の地にもどるのである。恭仁京の歴史は、天平16年2月の廃都宣言、同17年5月の東西市の移動によって完全に終わる。そして天平18年(746)9月、恭仁宮大極殿は山背国分寺に施入され、国分寺としての新たな歴史が始まるのである。

ところで、天平13年(741)2月24日、恭仁宮において、いわゆる「国分寺建立勅」が発せられる。この勅は、天平9年(737)3月の丈六釈迦三尊像と『大般若経』の造写が諸国に命じられたことにはじまり、同12年6月の七重塔建立と『法華経』書写、同年9月の観世音菩薩像と『観世音経』の造写、恭仁京遷都後の同13年正月の釈迦丈六像造立の料として封三千戸の施入が諸国に命じられたことを前提としており、ついに、同年2月の『最勝王経』書写と金字『最勝王経』の七重塔内安置や僧寺・尼寺の名称・寺領・僧尼の定数・願文の細目を定めることにより、諸国国分寺の建立はようやく具体化する。そして、天平18年、山背国分寺への恭仁宮大極殿施入が行われるのである。

ならば、少なくとも、聖武天皇による天平13年の国分寺建立勅以来、天平18年の恭仁宮大極殿施入にいたる間、山背国の金光明四天王護国寺(国分僧寺)はどこに計画され、建立に着手したのであろうか。あるいは、着手すらしていなかったのであろうか。このことは、天平19年、天平勝宝8年(756)の二度におよぶ遅滞した国分寺造営の督促からして、あり得ることであろう。また、あるいは、大養徳(大和)国における金光明寺(東大寺)が、天平14年に前身の金鍾寺(金鷲寺)から改称したものであるように、山背国の既存寺院がその前身としてその役割を果たしていたのであろうか。いずれにしろ、国分寺の立地条件は、国衙にほど近い好処が選ばれたはずであり、山背国においても天平9年以降の聖武朝における一連の仏教施策を実行すべき場が必要である。なお、恭仁宮跡が所在する木津川市加茂町瓶原の地に「光明寺塚」の存在を『京都府相楽郡史』(京都府教育委員会相楽郡部会 1926)が記しており、恭仁宮跡南方の加茂町河原集落付近に大極殿施入前の「金光明寺」跡を比定する説がある。また、山背国分尼寺の所在地についても諸説あるが、その地名から木津川対岸の加茂町法花寺野里にあてるとの説が古くからあり、現在も「斐原離宮国分尼寺遺蹟参考地」の石碑が建つ。しかし、最近では、木津川市木津宮ノ裏の燈籠寺廃寺をあてる意見もある(岩井照芳 1980)。

ここでは、山背国における聖武朝の仏教施策の一様相を、天平18年の山背国分寺への大極殿施入以

前に焦点を当て、概観したい。なお、先行研究(中谷雅治・磯野浩光 1991)では、恭仁宮大極殿施入後の山背国分寺を「瓶原国分寺」と呼び、山城国分寺伝承地も含め他と区別している。検討の対象とする地域は、主に木津川周辺の南山城地域であり、この地域の古代寺院出土瓦と恭仁宮・国分寺跡出土瓦との比較を通して、寺院造営のあり方を見る。ここでの視点は、山背国分寺の他国にない特異な造立形態から、それ以前・以後の顕在化のうちに南山城の古代寺院を位置づけることにある(同志社大学歴史資料館 2010)。

1. 恭仁宮(山背国分寺)跡の概要

恭仁宮が営まれた木津川市東部の加茂町瓶原地域は、平城宮から寧楽山を越えて直線距離で約 10 kmと至近の位置にある。ここは急峻な笠置山地を抜けた木津川が開放されて平野に注ぐ最初の地であり、和銅元年(708)に元明天皇が行幸した岡田離宮や平城遷都以後、元明・元正・聖武天皇が度々訪れた麩原離宮が営まれた地でもある。現在、これら離宮の所在は不明であるが、上流に切立つ断崖や川の景観を眺める風光明媚な景勝の地として選ばれたのであろう。そして、天平 12 年、聖武天皇は、なじみのこの地に突然都を移したのである。恭仁宮の北には海住山寺を抱く山々が連なり、北東の和東へ続く谷道は信楽へと通じ、西側の木津川上流には和同開珎を鋳造した錢司鑄錢司跡がある。南側の大野山は鹿背山へと連なり、恭仁京を右京と左京に分ける鹿背山西道となる。そして、この右京の中核として泉津が存在するのである。

昭和 32 年(1957)、「山城国分寺跡」は国の史跡に指定され、平成 19 年には「史跡恭仁宮跡(山城国分寺跡)」への史跡名称変更と同時に、宮城全体の東西約 560m×南北約 750mへの指定拡大の作業が現在も木津川市の手によって継続されている。発掘調査は、予備調査を経て昭和 49 年(1974)以来、京都府教育委員会により現在も継続実施されている(京都府教育委員会 2000)。

調査で判明した宮の範囲は、各辺で大垣の痕跡が確認されており、心心間距離で東西約 560m(1800 小尺強)・南北約 750m(2500 小尺強)の規模をもつ。ただし、長方形プランをもつ各辺の歪みは大きく、特に東面南門以南の大垣は大きく東に逸れている。この規模は、正方形プランをもつ平城宮の東張り出し部を除く面積と比較しても三分の一程度にすぎない。宮城門として検出している遺構は東面南門のみであり、朱雀門は未検出である。天平 14 年(742)8 月 5 日、大宮垣築造の功により、秦下嶋麻呂が破格の昇進をとげる。遷都直後の元日朝賀の式では、「宮垣未だ就らず。纔すに帷帳をもってす」というありさまであったのが、ようやくこの年、宮の外観を整えたのである。

山背国分寺の金堂及び回廊は、多少の改変はあるものの、恭仁宮大極殿及び大極殿院回廊(歩廊)がほぼそのまま転用されたものと考えられている。金堂基壇は瓦積の外装をもち、東西 53.1m(177 尺)×南北 28.2m(94 尺)×高さ約 1.5m(5 尺)の規模で、建物は東西 9 間(44.7m)×南北 4 間(19.8 m)の規模をもち、柱間は桁行 149 尺(15 尺・17 尺×7・15 尺)×梁間 66 尺(15 尺・18 尺×2・15 尺)と復元されている。恭仁宮当初の基壇外装が凝灰岩による壇上積であったか否かは別としても、かつての大極殿にふさわしい巨大な建物であることは疑いない。回廊跡については、複廊式の築地回廊(梁

間 12 尺×2, 桁行 15.5 尺等間)が復元でき、東西築地の心の間距離で 480 尺(400 大尺)の東西規模がほぼ確定した。回廊南北規模については不明であるが、外周で 500 尺程度と予想され、中門については大極殿院南門がそのまま転用されたのであろう。

講堂については、大極殿院の後殿を造り替えて再利用したものか、北回廊の外側に新設した可能性もあるが半然としない。

塔は、花崗岩製礎石を 17 個中 15 個まで原位置にとどめており、巨大な七重の塔が存在したことを知る。礎石は心礎も含めすべて出臍をもつ柱座が造り出されており、方 3 間(9.8m)の柱間は 32 尺(10.25 尺・11.5 尺・10.25 尺)となる。基壇外装は基底部が石積となっており、金堂と同様に瓦積であった可能性をもつ。石積基底部の周囲には 0.6m(2 尺)幅の石敷の犬走が設けられていた。基壇規模は一辺 17m(57 尺)×石敷からの高さ 1.2m(4 尺)程度となる。塔跡の周囲からは素掘溝が検出されており、塔心礎から溝内肩までが約 50 尺の位置で四周を廻ることがわかっている。この溝内からは多量の瓦片が出土しており、塀のような区画施設によって塔院を形成していたことを知る。なお、塔心礎は、金堂南北中軸線からほぼ 350 尺の位置にあり、両者間には明確な伽藍計画があったことを示している。

伽藍の外周施設については、築地塀が囲繞していたものと考えられ、東西 910 尺×南北 1,100 尺の伽藍規模が予想されている。他には、寺域北辺部で掘立柱建物跡群が検出されており、三面僧坊を構成している可能性がある。

山背国分寺の伽藍配置は、金堂前面に広い儀式空間を確保している点において、国分寺等官寺に共通する特徴を備えている。金堂に回廊が接続するかどうかは確定できていないが、大極殿院からの連続した形態が維持されたものであろう。講堂背後には三面僧房のような定型化が行われたと考えられる。

2. 恭仁宮(山背国分寺)跡出土瓦の様相

山背国分寺への大極殿施入により、恭仁宮跡の中心部は国分寺境内となるが、金堂は基壇外装が瓦積に作り変えられるものの、回廊や中門は大極殿院築地回廊(歩廊)や大極殿院南門が転用されている。それに対して、塔・塔院築地塀、寺域外周の築地塀、南門等は、廃都後に新造されたものである。これら恭仁宮転用建物と国分寺新造建物に使用された瓦には明らかな違いがみられ、造瓦にたずさわった造営組織の差異を反映している。上原真人は、前者を恭仁宮造営官司(＝中央官衙系瓦屋)、後者を山背国分寺造営官司(＝国衙系瓦屋)の製品と明快に説明した(京都府教委 1984)。当然、国分寺においても国衙系瓦屋の製品が使用されたことであろう。

ところで、これら恭仁宮造営時に使用された軒瓦や平城宮式の同范例が、南山城の諸寺でも使用されていることは広く知られている。かつて、森 郁夫は、奈良朝政府による木津川・淀川水系の古代豪族掌握過程にその稠密な分布の意義を求め(森郁夫 1977)、高橋美久二は、この様相を「とくに、平城宮 6282 型式軒丸瓦と 6721 型式軒平瓦の普及は著しく、『山背国式瓦』とでも呼ぶべき様相」と評し

た(京都府立山城郷土資料館 1983)。筆者は、かつて、高橋の『山背国式瓦』の概念を援用して、上原が示した山背国分寺造営官司(＝国衙系瓦屋)の製品と同一文様系譜にあると考えられる南山城の古代寺院出土瓦に、「山背国分寺系列軒瓦」の呼称を与え、高橋の『山背国式瓦』的要素の抽出とその顕在化を試みたことがある(中島 正 1993)。

恭仁宮跡(山背国分寺跡)出土軒瓦の同範関係(第65図)をみると、恭仁宮造営時に新調された製品と平城宮からの搬入品は、大和の諸大寺と南山城の在地寺院に分布するが、山背国分寺造営時に新調された製品と修理用の製品は、大和の諸大寺との同範関係は希薄で、国を超えた近江国や南山城の在地寺院に分布する。この極端な対比は、中央官衙系瓦屋の製品と国衙系瓦屋のものとの違いに由来することは言うまでもない。しかも、山背国分寺には、他の南山城在地寺院とは明らかに異なり、平城遷都後の平城宮式同範例(中央官衙系瓦屋の製品)がほとんどみられないのである。このことは、山背国分寺の経営基盤が他の南山城在地寺院とは明確に異なることを雄弁に語っている。

山背国分寺の経営基盤は、諸国のそれと同様、三宝供養用として僧寺に水田100町、尼寺に50町の寺田が施されていた。『弘仁式』によると、国分二寺において正月八日から十四日まで『最勝王経』の転読が行われ、同じ時期に部内の諸寺僧を僧寺に請じて吉祥悔過を修することとなっている。神護景雲元年(767)に始る吉祥悔過は、神祇の祈年祭に相当する一国の最も重要な仏事である。ところが、山城国の吉祥悔過は『続日本後紀』によると、弘仁13年(822)から国分寺で修することをやめて国庁で修していたものを、承和11年(844)からは旧に復して国分寺で修せしめたとある。長岡京遷都にともなって国衙が南山城から北山城の葛野郡へ、さらに平安京遷都により乙訓郡へ移動したことで、国衙からかなり離れた瓶原の地で吉祥悔過を修することの不都合から生じたことであろうが、また旧にもどしているのである。おそらくは、遷都と国衙の移動により生じた国分寺の衰退に対し、寺側の復興運動があったものと考えられる。しかし、この凋落傾向は止めようがなく、『続日本紀』延暦10年(791)の所謂「山背国の浮図修理令」にともなうと考えられる塔の大規模修理以後、出土瓦でみる限り国分寺の大きな修理はなく、9世紀代の復興期と鎌倉期前半の小修理をみるのみである。

山背国分寺は、吉祥悔過等国分寺機能の一部が他へ移転したとしても、律令制が少なくとも機能していた間は瓶原の地に存続しており、南山城在地寺院との間に密接な関係を保持していた。この関係こそが、諸国国分寺体制成立後の山背国的あり方であり、高橋が言うところの『山背国式瓦』の一樣相として「山背国分寺系列軒瓦」を設定することの意義をもつと考える。言い換えると、それは国衙との関係であり、聖武朝における山背国の仏教政策を反映した国分寺成立前の様相とは大きく異なる。

恭仁宮造営時に新調されたと考えられる軒瓦は、KM0 1-KH0 1, KM0 2A-KH0 4Aのセットであるが、恭仁宮の造営と密接に関連する寺院は、相楽郡の高麗寺・井手寺、久世郡の平川廃寺と限定される。他には、相楽郡の蟹満寺・里廃寺・樋ノ口遺跡、久世郡の久世廃寺・正道廃寺に同範例が一部認められるものの、高麗寺、井手寺、平川廃寺の近傍にはほぼ限られ、木津川東岸が重視されている。それに対して、山背国分寺造営時のセットであるKM0 5-KH0 3, KM0 6-KH0 2や軒丸瓦KM0 7・14と同範関係をもつ寺院は、相楽郡の高麗寺・燈籠寺廃寺・里廃寺、久世郡

の久世廃寺、綴喜郡の三山木廃寺・普賢寺であり、国分寺修理時の軒瓦との同範例をもつ志水廃寺・興戸廃寺を含め、前代には見られなかった木津川西岸の綴喜郡域にその広がりを見るのである。この違いは、前者が恭仁京遷都にともなう聖武朝における、山背国の中核寺院に対する整備援助の側面をもつのに対し、後者は平城遷都と国衙の移転を背景とし、国内の中小規模寺院をも含み対象とした、山背国衙による援助とすることができよう。

しかし、かつて高橋が平城宮 6282 型式軒丸瓦と 6721 型式軒平瓦のセットを『山背国式瓦』とでも呼ぶべき様相と評したように、南山城地域の古代寺院に稠密に分布する中央官衙系同範瓦の様相を、単に中央政府からの個別援助とのみ断じることとはできない。天武朝以来の仏教政策は「家」ごとの行政単位を基本としており、大宝令の成立以後、ましてや諸国国分寺体制の完成を目指した聖武朝においては、国衙の存在を無視した一国の仏事を想定することは難しい。だとしたら、恭仁宮造営時の軒瓦が特定の寺院に用いられる状況についても、国衙の関与・影響を考慮すべきであろう。当然、国衙の移転にともない一国の仏事を修する場が影響をうけたように、国衙と国分寺の位置関係は重要である。

3. 山背国の中核寺院と国衙

山背国衙の位置については、都から半日の行程の地とする『律書残篇』の記事を根拠に、天平 9 年 (737) ころとする編纂時期からして、大和北端に近い南山城にあった可能性が高い。ただ、国号表記が「山代」と記されていることから、平城遷都前の記事とすると、大和南端からの距離を考えても国境に近い相楽郡にあったとすべきであろう。現在、この時期の国衙の推定地としては、木津川市山城町上狛や相楽郡精華町祝園付近とする説等がとなえられているものの確証はない。いずれにしても、瓶原の地に国分寺が造営されたことを考えれば、相楽郡内に求めることの妥当性は高いと言えよう。しかし、その後、山城国衙(治)は葛野郡(京都市右京区太秦付近か)に移転し、さらに『日本紀略』延暦 16 年(797)、長岡京南(乙訓郡大山崎町役場付近)へ、そして『日本三代実録』貞観 3 年(861)、河陽離宮(大山崎町離宮八幡付近)へと、度々場所を変えている。したがって、葛野郡への移転前の国衙の場所が、まったく移動していないと決めつけることはできない。当然、葛野郡への移動や延暦 16 年の長岡京南への移転が、それぞれ長岡京・平安京遷都によるとするならば、恭仁京遷都により国衙が移転してもおかしくはないのである。これらのことを考慮したうえで、聖武朝における山背国の中核寺院(=恭仁宮造営時に新調されたと考えられる軒瓦と同範関係をもつ寺院)の様相を概観する。

高麗寺跡 恭仁京右京に所在し木津川を望み南面する高麗寺は、蘇我馬子による飛鳥寺創建瓦と同範品が使用される飛鳥時代(7 世紀初頭)に小規模な寺院として創建されるが、伽藍整備は天智天皇発願の川原寺金堂創建瓦との同範品により大津宮遷都(667 年)前に開始され、瓦積基壇を用いた南山城の寺院造営の先駆けとなる。伽藍整備期に使用された軒丸瓦は、川原寺同範瓦とそこから派生した高麗寺式の製品であり、伽藍配置は「川原寺式」から「法起寺式」へと変化する初例と考えられるが、南門・中門・金堂が南北一直線に並ぶ特異な構造である。寺域は、東西約 190m、南北約 180m の

規模をもつ。

蘇我氏との密接な関係により創建され、天智朝の直接的な関与により整備された高麗寺の伽藍は、奈良時代になっても平城宮の外港である泉津に面した寺院として、また恭仁京内の大寺として維持され、一貫して山背国の中核寺院であり続けた。伽藍は桓武朝における大規模な修理を最後として凋落の様相を示すが、12世紀代までは何とかその命脈を保ったようである。

高麗寺からは、発掘調査により、恭仁宮造営時に新調された軒瓦のセットが出土している。しかも、恭仁宮式文字瓦である「中臣」(KJ04)、「太麻呂」(KJ16)、「乙麻呂」(KJ14A)銘刻印瓦が出土することは重要である。この種の文字瓦は、恭仁宮造営のために設置された西山瓦屋(所在不明)の製品であり、瓦の品質管理に伴う数量検印として人名印が押捺されたとする有力な説(京都府教委1984)がある。

高麗寺の寺域西方には、近接して前記山背国衙推定地があり、恭仁京右京の中軸線と考えられる「作り道」がこの国衙推定地を貫く。また、この道路の木津川渡河地点には行基により泉橋が架けられ、橋のたもとには行基創建の四九院のひとつ発菩薩院泉橋院(泉橋院)や、隣接して別に隆福尼院と泉布施屋があった。泉橋院と隆福尼院の二寺は、『行基年譜』によると恭仁京造都直前の天平12年(740)に建てられており、遷都後の翌年3月には泉橋院で聖武天皇と行基が歴史的な対面をしている。さらに、高麗寺の木津川対岸には、国分尼寺説のある燈籠寺廃寺が、泉津の市司跡と考えられる上津遺跡に隣接して所在する。燈籠寺廃寺からは、山背国分寺造営時のKM05-KH03同范例がセットで出土しており、国分尼寺説の有力な根拠となっている。

井手寺跡 木津川の東岸、上井手の台地上に立地する井手寺(井堤寺・円堤寺)跡は、井手左大臣 橘諸兄創建と伝える寺院である。木津川の対岸には京田辺市飯ノ岡の丘陵を間近に望み、伽藍の南側は玉川の深い溪谷となっている。この井手寺近郊には、恭仁京遷都前の天平12年(740)に聖武天皇の行幸を得た橘諸兄の相楽別業や、聖武天皇の東国巡行最終日にとどまった玉井頓宮跡の所在も比定されており、恭仁京右京北郊の地とすることができる。伽藍の創建時期については、天平12年の前記行幸記事から、橘諸兄が母(県犬養宿禰橘三千代)の一周忌にちなんで創建に着手したとする意見もあるが、出土屋瓦で見る限り、寺容が整うのは平城遷都後と考えるべきであろう。伽藍配置の大要についてはいまだ判然としないが、凝灰岩による切石積基壇で構成されたと考えられる中心堂塔とともに、食堂、三面僧坊をそなえた様相は、単なる地方寺院とは考えられない格式をもったものであることは明らかである。

出土軒瓦の様相からは、井手寺と恭仁宮・山背国分寺との密接な関係をもつが、恭仁宮造営時に新調された軒瓦セットのうちKM01は表採資料で、発掘調査では改刻後の平城宮6320Ac型式同范例が出土している。恭仁宮式文字瓦としては、「刑部」(KJ01B)銘刻印平瓦や「廣橋」銘の刻印を押捺した丸瓦が出土している。なお、後者は恭仁宮での出土はなく、平城宮のみで同印例数点が確認されている。他には三彩の垂木先瓦も出土しており、貴重である。

平成15年、井手寺南西の玉川の北岸で、平城遷都により藤原京から移された大官大寺(後の大安寺)

の創建瓦を生産した石橋瓦窯跡が発見された。実はこの窯跡こそ、「大安寺伽藍縁起并流記資材帳」に記載のある泉津の大安寺木屋所とともに相楽郡に所在するいまひとつの荘「棚倉瓦屋」だったのである。また、この付近は、葛城王時代から諸兄ゆかりの「蟹幡(綺)郷」に属すと考えられ、橘氏の勢力圏であった。恭仁京が置かれた相楽郡の北端にある橘諸兄の拠点には、官の大寺である大安寺の「棚倉瓦屋」や岡田池瓦窯跡があり、木津川という流通手段も確保しているのである。

平川廃寺 木津川の東岸、宇治丘陵の南裾に形成された扇状地上に立地する平川廃寺は、法隆寺式の伽藍配置をもち、寺域は、東西約175m、南北約115mの規模をもつ。造営氏族については、高句麗系渡来氏族である黄文連氏をあてる説がある。調査では、いわゆる高句麗系楔型間弁をもつ軒丸瓦が出土しており、その創建は7世紀前半に遡る可能性を持つが、伽藍の整備は7世紀後半に降り、退化した山田寺式や川原寺式軒丸瓦を用いて伽藍が整えられたようである。その後、恭仁宮造営時に大規模な修理がなされたようである。塔・金堂基壇はともに瓦積で、塔基壇側面上半分は漆喰で固められていた。廃絶時期は、平安初頭に焼失したものと考えられている。なお、平川廃寺に近接して久世廃寺があるが、ここからは奥山廃寺式や平川廃寺同様の高句麗系軒丸瓦が出土しており、その創建はやはり7世紀前半に遡る。伽藍整備についてもやはり平川廃寺と連動しており、山田寺式や川原寺式軒丸瓦を用いて7世紀後半に降る。伽藍配置は平川廃寺と異なり、法起寺式となっている。

平川廃寺が所在する久世郡で注目されるのは、栗隈(前)氏(栗隈県主)と山代(背)氏(山背国造)の存在である。国県制度の実態については、種々議論のあるところであるが、いずれにしろ、大化前の古い段階で強い郡域支配が行われていた。しかも、久世郷では、近接して久世廃寺・正道廃寺・平川廃寺の3ヶ寺が7世紀中頃までに造営を開始し、その中核に久世郡衙と考えられる官衙施設が展開するのである。この状況は恭仁宮造営以後も継続しており、恭仁宮との同範関係は平川廃寺ほど密接ではないが、久世廃寺・正道廃寺ともに同範例を所持しており、特に久世廃寺は、山背国分寺との同範関係が顕著である。

まとめにかえて

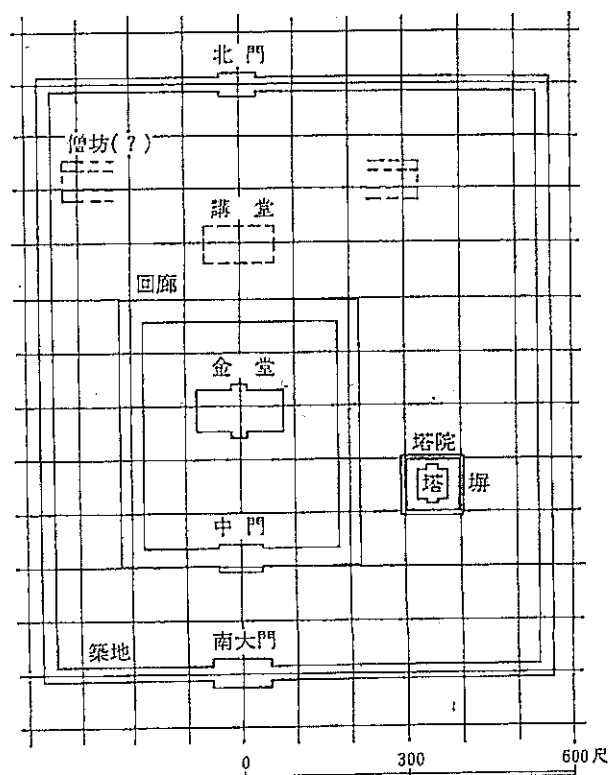
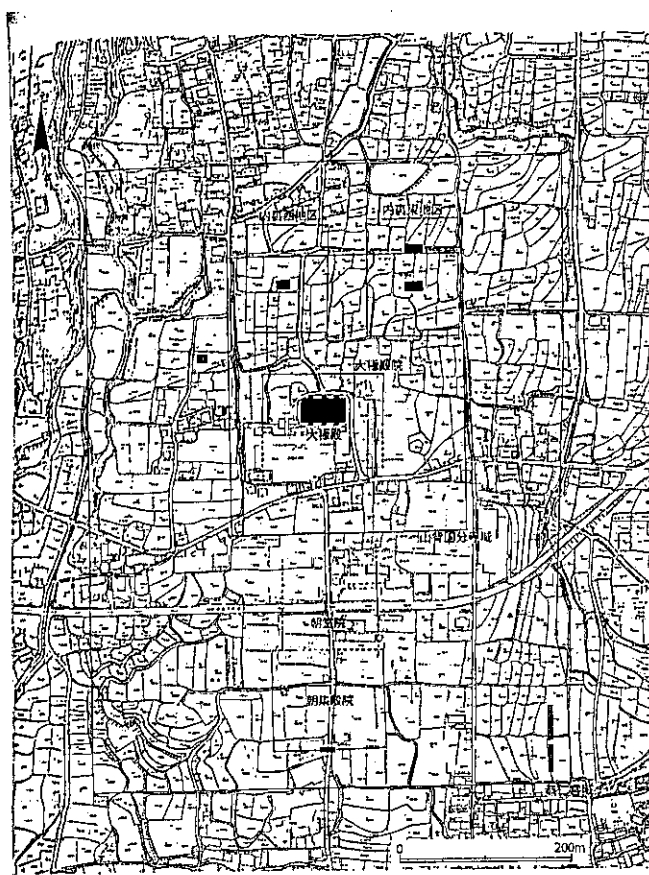
山背国葛野郡への移転前の国衙の所在については不明であるが、恭仁宮造営時に新調されたと考えられる軒瓦と密接な同範関係をもつ寺院は、山背国の中核寺院として、一国の仏事を修するに足る要件を満たしている。その要件とは、朝廷・国衙との密接な関係であり、後の山背国分寺に匹敵する仏教儀礼の場としての素地と言えよう。

高麗寺、平川廃寺は、ともに聖武朝以前から朝廷との特別な関係があり、近接して燈籠寺廃寺、久世廃寺が、山背国分寺との関係を有していた。高麗寺―燈籠寺廃寺、平川廃寺―久世廃寺の関係は、後の国分(僧・尼)二寺の関係を彷彿とさせ、近接する官衙の存在は、その公(官)的性格を示している。井手寺については、橘諸兄との密接な関係が予想されるが、単なる地方寺院とは考えられないその格式は、前代からの寺院を圧倒している。しかもその位置は、相楽郡北端の恭仁京北郊の地であり、近傍には橘諸兄の相楽別業や玉井頓宮の所在も比定されている。葛野・乙訓郡への国衙の移転が、都に

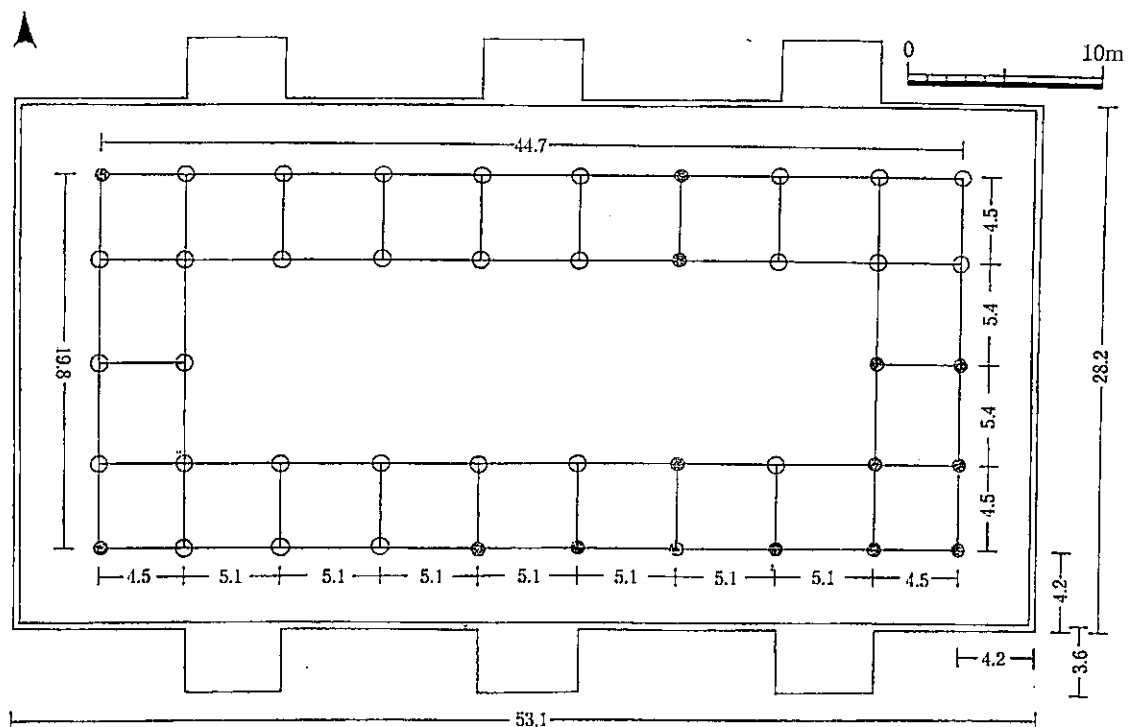
隣接してなされた様相を想起させる。諸国国分寺体制が整う新たな時代の寺院である。なかでも高麗寺については、一国の仏事を修する以上の要件を満たしていると言えよう。

高麗寺は、『日本書紀』に天平年中のこととして高麗寺僧榮常の記事があり、『今昔物語集』他にも同様の説話が収録されている。『播磨増位山随願寺集記』（姫路市随願寺蔵）には中世の縁起ではあるが、天平15年(743)3月、興福寺・薬師寺・播磨増位寺の僧等が内裏(恭仁宮)で読経した後、増位寺僧榮常が高麗寺から戻らなかったと記している。これは『続日本紀』同年3月4日条に、1月から49日間49人の衆僧を金光明寺に集めて行った金光明最勝王經転読の行事が終わり、衆僧を慰労したとする記事と関連するようである(高橋 1998)。この金光明寺については大養徳国金光明寺と信じられているが、高麗寺から出土する播磨国府系瓦(古大内式、本町式)の特異なあり方をみると、前記説話との関連が想起される。高麗寺の木津川対岸には、山背国分寺造営時軒瓦のセットが出土する燈籠寺廃寺があり、国分二寺のあり方に相応しい。恭仁宮大極殿施入前の山背国分寺前身寺院としての可能性を示唆している。

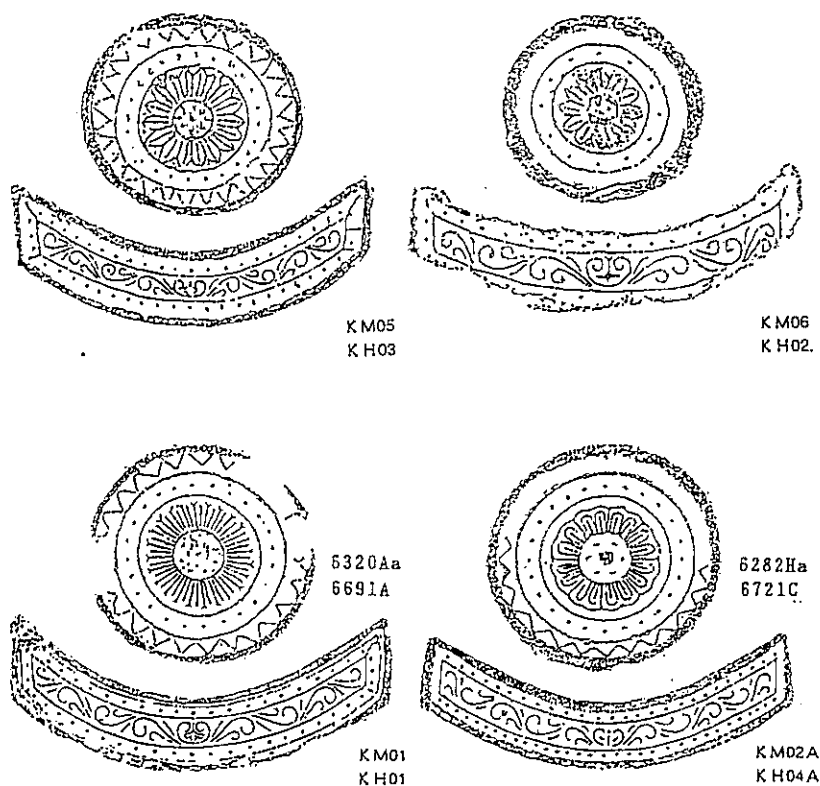
以上、恭仁宮大極殿施入前の山背国中核寺院について、いまだ所在不明の当該期国衙の視点から、その公(官)的性格の抽出を試みた。あくまでも、一国の仏事を修するに足る山背国分寺前身寺院に関する憶測である。



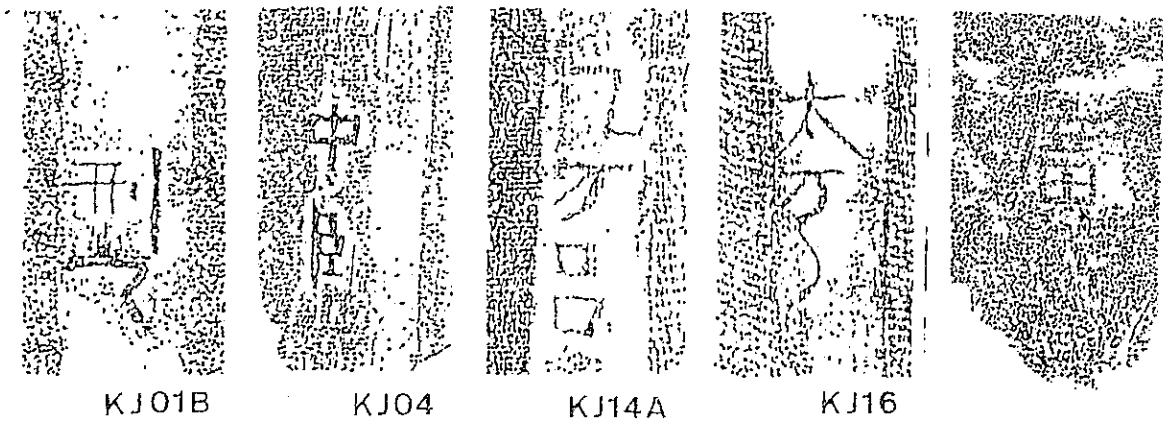
第61図 恭仁宮と山背国分寺



第 62 図 山背国分寺金堂（恭仁宮大極殿）の規模



第 63 図 恭仁宮と山背国分寺造営時軒瓦の主要な組合せ



第64図 恭仁宮式文字瓦同印例拓影

	品名	平城宮	皇極寺	聖武寺	井手寺	久世園寺	早川園寺	泰山城跡寺院	山崎園寺	神護寺院	その他
大	KM01	6250Aa	Ka013A		62944A		○				石橋瓦葺、陶器瓦葺
	KM02A	6261Fa	Ka013A		6404B		○			法華寺	上津通跡
	KM02B	6261Da			6404BA			泰山木蓮寺		法華寺、聖武寺	木津通跡、木津定通跡
	KM03A	6264A								大安寺	
	KM03B	6265A								佛眼通寺、牧師寺、法華寺、 法華寺、法華寺	長閑宮、香知ノ宮瓦葺、大鳥通跡
	KM03C	6265B	Ka013B				○	磯ノ口通跡		法華寺、法華寺	法華寺の通跡
	KM03D	6264E									
	KM04A	6264E								紀伊	
	KM04B	6264C								西陽寺、紀伊	木津定通跡
	KM05	6308A						聖武寺			長閑宮
	KM06	6301B									
	KM13A	6311A						○	神護寺		長閑宮、上津通跡、木津定通跡
大	KM15B	6311B									
	KM16	6291A	Ka013C	Ka013C	6404B				北野通寺	牧師寺、香知園寺、西陽寺、 法華寺、聖武寺	長閑宮、木津定通跡
	KM16	6120A									木津定通跡
	KM19	6225A	Ka013B				○		金剛寺	佛眼通寺、西陽寺、法華寺、 西陽寺	長閑宮、平安宮、中山瓦葺、木津定通跡
	KM02C	6262B	Ka013B	Ka013C				牧師通寺、山崎寺			長閑宮、木津定通跡、牧師寺
	KM08		Ka013C				○	佛眼寺通寺			上津通跡、平安宮、近江園跡
	KM06										
	KM07										
	KM10										
	KM11								聖武寺、聖武通寺		
	KM14						○		泰山木蓮寺、聖武寺、聖武寺		
	大	KH01	6501A	Ka013C	6412		○	○		西寺	佛眼通寺、大文寺、聖武寺、 法華寺、佛眼寺、所文寺、法 華寺、大聖大寺
KH04A		6781C	Ka013D	Ka013C	6403BA	○	○	正通通寺、聖武寺、磯ノ口通跡		西文寺、法華寺、聖武寺、 牧師寺、大文寺、西陽寺	長閑宮、上津通跡、木津定通跡
KH04B		6721A									木津定通跡
KH04C											
KH08A		6663B								法華寺、佛眼通寺土間、西陽 寺、香山宮	
KH08B						627b					
KH08C		6681A							法華寺	法華寺、西陽寺外土間、西陽 寺、法華寺、佛眼通寺	長閑宮、神護瓦葺
KH08D		6683A								大聖寺、聖武寺、西陽寺、法 華寺	長閑宮、平安宮、神護瓦葺、木津定 通跡、上津通跡
KH08E		6693C			6423A	○				法華寺、牧師寺、佛眼通寺	長閑宮、平安宮
KH07		6694K								法華寺、西陽寺、聖武寺	長閑宮、木津定通跡
KH08A		6694C									長閑宮、中山瓦葺、木津定通跡
大		KH08B	6682A			6424					大文寺、聖武寺、西陽寺、佛 眼通寺、西文寺
	KH08C	6684F							法華寺	長閑宮	
	KH10A	6671B							西陽寺		
	KH10B	6671A							西陽寺		
	KH10B	6671A									
	KH12	6686B									
	KH13	6677A							法華寺		牧師西瓦葺
	KH02										
	KH03							佛眼寺通寺			平安宮、近江園跡
	KH06A										平安宮、伊賀園跡
	KH06Ab				6412			西野通寺、近水通寺			
	大	KH09	7789								西陽寺
KH14			Ka013C			○	○		聖武寺	長閑宮	

京都府史1984、京都府史2000、同志社大学文学部1980 以上より

第65図 恭仁宮(山背国分寺)出土軒瓦同範関係一覧

第三節 橘諸兄と井手寺の造営

1. 遺跡と調査の概要

木津川の東岸、上井手の台地上に立地する井手寺(井堤寺・円堤寺)跡は、井手左大臣 橘諸兄創建と伝える奈良朝寺院跡である。木津川の対岸には京田辺市飯ノ岡の丘陵を間近に望み、伽藍の南側は玉川の深い溪谷となっている。この井手寺近郊には、恭仁京遷都前の天平12年(740)に聖武天皇の行幸を得た橘諸兄の相楽別業や、聖武天皇の東国巡行最終日にとどまった玉井頓宮跡の所在も比定されており、南東の丘陵には伝橘諸兄公墓が、北東の玉津岡神社には摂社橘神社が祀られている(井手町史編纂委員会 1983)。文献資料では、『続日本後紀』天長10年(833)10月条の「円堤寺」記載例が初出で、また、「井手寺」の銘をもつ平安時代前期様式の梵鐘が高知県土佐市正念寺に伝えられている(坪井良平 1970)。遺跡の現状は、周囲をのどかな田園風景が包み、寺跡を東西に分断する府道と東井手線沿いに記念碑と四阿が設置され、5個の礎石が集められている。

平成15年、井手寺南西の玉川の北岸で、平城遷都により藤原京から移された大官大寺(後の大安寺)の創建瓦を生産した石橋瓦窯跡が発見された(井手町教育委員会 2003)。実はこの窯跡こそ、「大安寺伽藍縁起并流記資材帳」に記載のある泉津の大安寺木屋所とともに相楽郡に所在するいまひとつの荘「棚倉瓦屋」だったのである。「資材帳」では、この瓦屋の四至を「東谷上 西道 南川 北南野大家界之限」としており、天平19年の資材帳作成当時に存在した「大家」といえば諸兄の別業以外に想定できるものはなく、玉川北岸の台地上に相楽別業が比定できる。したがって、この台地上には、橘諸兄の井手寺と別業が並んで営まれていたこととなり、しかもこの地は、恭仁京右京北郊の地なのである。なお、現在は綴喜郡に属する井手町のうち、玉川以南の石垣地区周辺(かつての石垣村)は、明治5年(1872)に水無村とともに井手村と合併するまでは相楽郡に属しており、玉川北岸の石橋瓦窯跡が相楽郡の荘である棚倉瓦屋だとすると、井手寺の所在する上井手の台地上に相楽別業があることに矛盾はない(中島正 2007a)。また、この付近は、葛城王時代から諸兄ゆかりの「蟹幡(綺)郷」に属すると考えられ、橘氏の勢力圏であった。恭仁京が置かれた相楽郡の北端にある橘諸兄の拠点には、単なる地方寺院とは考えられない格式をもった寺院が建立され、天皇の行幸をうけるだけの壮大な邸宅を構えていた。しかもその近くには、官の大寺である大安寺の瓦生産拠点「棚倉瓦屋」や官窯としての岡田池瓦窯跡があり、木津川という流通手段も確保しているのである。

井手寺跡に関する考古学的な調査は、大正12年(1922)の梅原末治による調査を嚆矢とし、地鎮・鎮壇に伴うと考えられる海獣葡萄鏡や隆平永寶、軒瓦などの出土品が報告されている(梅原末治 1923)。その後、平成13年には、寺域を東西に分断する府道と東井手線の拡幅工事に伴い初めての本格的発掘調査(第1次調査)が京都府により実施され(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2002)、平成15年(第2次調査)からは、井手町による寺域確認調査が継続的に実施された(井手町教育委員会 2014)。

2. 検出遺構の概要

第1次調査(平成15年度)以後、井手町教育委員会によるⅡ期8年に及ぶ寺域確認調査で得られた資料は膨大である。ここでは、現在まで報告されている調査データを概観し、伽藍の概要を復元したい。ただ、基壇外装に使用されたと考えられる多量の凝灰岩や三彩の垂木先瓦等出土遺物の状況からは、単なる地方寺院とは考えられない格式をもった寺院であることは明らかであるが、諸堂塔の規模・構造等はいまだ不明のままである(井手町教育委員会 2014)。したがって、ここでは試論として断片的なデータを繋ぎ合せ、伽藍復元案を提示する(中島正 2010e)。なお、造営尺は、礎石を良好に残すS B501の状況から、天平尺(0.297m/尺)が使用されていることがわかる。

伽藍中枢部の様相 第1次調査および井手町教育委員会による平成15～18年度(第2～5次)調査では、伽藍中枢部の調査が実施されている。第2次調査で検出した巨大な礎石据付あるいは抜取痕跡をもつ東西棟建物基壇(S B201)は、凝灰岩切石積の外装をもつ伽藍の中心建物であることは疑いなく、金堂跡である可能性が高い。また、第3次調査で検出した幅約2.4m(8尺)の石敷通路(S X303)は、S B201の正面に向かって南北に伸びており、これを石敷通路による中軸線とするならば、3間×2間の身舎四面に庇をもつ建物が復元可能である。基壇規模については不明であるが、東西に24m(80尺)程度となろうか。なお、石敷通路(S X303・304)の調査区北端では、直径1m程度に石敷の抜けている部分があり、灯籠等の据付痕跡である可能性がある。

S B201東側で第2次調査時に検出した礎石据付痕跡をもつ建物跡(S B202)は、東回廊の一部と考えられる。東西に並ぶ礎石据付痕跡(梁間10尺)の両側には、基壇外装の抜取痕跡あるいは雨落ちと考えられる南北方向の溝がみられ、西側には石敷(S X201)が広がる。おそらくは基壇の低い幅20尺程度の単廊であろう。中軸とした前記石敷遺構(S X303)中央ラインから基壇内側までで約100尺、現在住宅となっている西側へ折り返せば東西に約200尺の回廊基壇内法寸法が得られる。ただし、検出箇所の南側では、後世の削平によるのであろうか、瓦落の存在以外、S B202の連続性は確認できていない(第3・4次調査)。

回廊内の状況については、石敷通路S X303東側で東西棟の礎石立建物跡(S B401)を検出している。基壇は低く規模は不明であるが、S X303に接続する石敷をもち、3間×2間の身舎四面に庇をもつ建物が復元されている。いずれにしても多量の瓦落がみられ、瓦葺建物の存在は明らかである。ここでもやはり凝灰岩の切石片がまとまって出土しており、外装の石材と考えられている(第3・4・5次調査)。

回廊外では、S B201の北東方で検出した東西棟の礎石立ち切妻造建物跡(S B501)が、極めて良好に遺存していた。建物は7間(10尺等間)×2間(10尺等間)の規模をもち、計12個もの礎石を元位置に残していた。桁行中央間には南北にそれぞれ梁行1間の軒廊が接続しており、南側では1間(10尺)分の礎石を確認している。北側では、軒廊で接続された東西棟の礎石立ち建物跡(S B502)の一部も礎石据付け痕跡として確認しており、北軒廊の規模は桁行3間(10尺等間)であることがわかる。建物S B501・502および南北に接続する軒廊の周囲は幅約0.3m(1尺)の石組排水溝が囲繞しており、南方

向への排水機能をもつ。各建物の基壇はわずかな高まりしか持たず、石組排水溝の内側見切石列を基壇の端とすると、礎石心から1.5～1.7m(5～5.5尺)となり、これが軒の出または螭蛸羽の出となる。これら建物の性格については僧坊とする意見もあるが、その位置・規模からして食堂を構成する建物群とすべきであろう。だとすると、S B 501が盛殿、S B 502が大炊殿であり、S B 501南側に軒廊で繋がれた食堂が存在することとなる。さらに、金堂の背後、食堂の西方には講堂跡の存在が予想され、府道と東井手線の拡張工事で検出した掘立柱建物跡(第1次調査)や東回廊東側で検出した掘立柱建物跡(S B 203)は、三面僧坊を構成する建物群と考えられるのである。

予想される伽藍配置は、大和興福寺にきわめて近似したものとなろう。凝灰岩による切石積基壇によって構成された中心堂塔とともに、食堂、三面僧坊をそなえた井手寺は、まさに橘諸兄でしかなしえないものである。

寺域周辺部の様相 井手町教育委員会による平成19～21年度(第6～8次)調査では、寺域を画する施設の調査が実施されている。西辺部の調査では、南北にはしる町道付近において西辺築地内側の雨落ちと考えられる石組み南北溝(S D 701)を検出しており、その東側に瓦溜りが形成されていた。北辺については、小字中溝を東西にはしる里道沿いに連続する東西溝(S D 601・801)を検出しており、寺域北辺を限る溝と考えられている。南辺については、玉川北岸の崖上を通る東西道(農道)北側において南辺築地内側の雨落溝が検出している。なお、東辺については調査未了であるが、S B 501(盛殿)・S B 502(大炊殿)検出地東側の南北道付近に想定できよう。だとすると、東西規模は金堂跡(S B 201)付近を中軸として約240m、南北にも同規模を想定可能であり、約800尺四方の正方形プランを求めることができそうである。

3. 井手寺の沿革

井手寺の創建については、「続日本紀」天平12年(740)5月10日条に記す聖武天皇の相楽別業行幸記事から、橘諸兄が母(県犬養宿禰橘三千代)の一周忌にちなんで創建に着手し、この日落慶供養が行われたとする意見がある。異父妹にあたる光明皇后も母三千代の一周忌にちなんで、天平6年(734)1月11日に興福寺西金堂を建立しており、藤原不比等夫妻と娘光明皇后の主導によって整えられた草創期の興福寺と井手寺の関連は無視できない。しかし、出土屋瓦で見る限り、I d M 3 4 B—I d H 3 2の創建瓦セット関係は明らかであり、寺容が整うのは平城遷都後と考えるべきであろう。伽藍配置の概要についてはいまだ想像の域を出ないが、出土軒瓦の様相からは、井手寺と恭仁宮・山背国分寺との密接な関係は明らかである。

その後、嵯峨天皇の皇后橘壽智子(檀林皇后)が橘氏の氏神として、梅宮社を円堤寺に祀ったとする記事(「伊呂波字類抄」)があり、井手寺は橘氏の氏寺であると同時に、平安時代には橘氏一族の氏神を祀る梅宮社の神宮寺となっていくようである(胡口靖夫 1977)。なお、この梅宮社は、後に井手の地から葛野川頭の梅津の地(現 梅宮大社)に移されるが、井手の地には末社が残り、現在も井手寺南東に円形柱座を造り出した4個の礎石をとどめる伝梅宮社跡がある。

井手寺の廃絶時期については、発掘調査においても定かにし得ていないが、「左経記」万壽3年(1026)3月13日条にはその荒廃振りが記されており、養和元年(1181)の後白河院宇下文案(新熊野神社文書)に寄進荘園の一つとして円堤寺の名がみえる。そして、近世の地誌類にはその旧跡が示されているのみである。

4. 遺物の概要

井手寺出土遺物のうち、大正12年(1922)の梅原末治による調査関連遺物は京都大学が、後藤柴三郎氏の蒐集品は京都国立博物館(京都国立博物館 1975)が、木村捷三郎氏の蒐集品は京都市埋蔵文化財研究所が收藏保管(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996)しており、府道と東井手線の拡張工事に伴う第1次調査出土資料および井手町による今日までの出土遺物(第2～7次調査分)は、すべて井手町教育委員会で一括管理している。出土遺物の大半は屋瓦類であり、他に土器類や基壇外装に使用された凝灰岩片がある。軒瓦のうち軒丸瓦にはI d M, 軒平瓦にはI d Hの頭記号を付し続く二桁の数字と大文字アルファベット記号により型式設定を行った。他には丸・平瓦や文字瓦、道具瓦(極先瓦)、埴等がある。

軒丸瓦(10型式13種)

I d M3 1 A 4重圈文軒丸瓦。平城宮 6018 B型式同範。同範例は平城宮の他にみられず、瓦当中央の孔は裏面まで貫通している。この点も平城宮例と共通しており、特異な使用が予想される。発掘調査では出土しておらず、京都国立博物館の收藏品にある。

I d M3 1 B 2重圈文軒丸瓦。中心文をもたず断面が太く丸い圈線を巡らす。2重圈は珍しく、同範例の出土を聞かない。発掘調査では出土しておらず、京都市埋蔵文化財研究所の收藏品にある。

I d M3 2 単弁12弁蓮華文軒丸瓦。平城宮 6130 A型式同範。同範例は平城宮の他、近傍の岡田池瓦窯跡や栢ノ木遺跡、木津川市木津北遺跡で出土している。井手寺では瓦当裏面を中窪みにするものと平坦にするものの区別がある。井手寺では伽藍中枢部・食堂地区で出土する。

I d M3 3 単弁11弁蓮華文軒丸瓦。平城宮 6134 C型式同範。同範例は平城京内の他、木津川市木津北遺跡で出土している。井手寺では伽藍中枢部・寺域西辺部北側で出土する。

I d M3 4 A 単弁24弁蓮華文軒丸瓦。平城宮 6320 Aa 型式同範。同範例は平城宮の他、木津川市の恭仁宮跡(KM0 1)・高麗寺跡(KmM3 3 A)・上津遺跡・木津北遺跡、城陽市の平川廃寺で出土している。恭仁宮造営の主体となった瓦であるが、井手寺の発掘調査では出土しておらず、京都国立博物館の收藏品にある。

I d M3 4 B 単弁24弁蓮華文軒丸瓦。平城宮 6320 Ac 型式同範。この型式は、Aa(恭仁宮KM0 1)の範を彫り直して外区外縁の線鋸歯を凸鋸歯に変えたAbを弁区長を短くしてさらに彫り直した後の製品で、同範例が平城京内で出土している。なお、Ab・Ac段階の製品は、平城宮・京や京内の唐招提寺・法華寺・薬師寺の他、木津川市の高麗寺跡(KmM3 3 B)・上津遺跡・木津北遺跡や宇治市の平等院で出土している。井手寺跡では伽藍中枢部で最も出土量の多い型式であり、I d H 3

2とのセット関係が考えられる。

I dM3 5 複弁8弁蓮華文軒丸瓦。平城宮 6282Ha 型式同範。同範例は平城宮・京や京内の法華寺の他、木津川市の恭仁宮跡(KM0 2 A)・高麗寺跡(KmM3 4 A)・上津遺跡、城陽市の平川廃寺で出土している。井手寺跡では伽藍中枢部で出土する。

I dM3 6 複弁8弁蓮華文軒丸瓦。平城宮 6291Ab 型式同範。同範例は平城宮・京や京内の唐招提寺・秋篠寺・西隆寺、大和の額安寺・法隆寺の他、木津川市の山背国分寺跡(KM1 5)・高麗寺跡(KmM3 7)・木津北遺跡・蟹満寺近傍の薬師堂古墳付近で出土している。また、長岡宮、平安京内や京都市北野廃寺でも出土する。井手寺跡では伽藍中枢部で出土した。

I dM3 7 複弁8弁蓮華文軒丸瓦。平城宮 6225A 型式同範。同範例は平城宮・京や京内の唐招提寺・西隆寺・法華寺・興福寺の他、木津川市の高麗寺跡(KmM3 8)・木津北遺跡、城陽市の久世廃寺で出土している。また、長岡宮・京、平安宮や京都市広隆寺でも出土する。なお、この型式は奈良市の中山瓦窯での生産が確認されている。井手寺跡では伽藍中枢部で出土する。

I dM3 8 A 複弁8弁蓮華文軒丸瓦。平城宮 6282Da 型式同範。同文・同範例は平城宮・京や京内の法華寺・海竜王寺の他、木津川市の恭仁宮跡(KM0 2 B)・木津遺跡・木津北遺跡、京田辺市の三山木廃寺で出土している。井手寺では食堂跡で1点のみ出土している。

I dM3 8 B 複弁8弁蓮華文軒丸瓦。平城宮 6282 型式同範。同範例は、井手寺跡では伽藍中枢部で出土した。

I dM4 1 単弁20?弁蓮華文軒丸瓦。瓦当面の文様は平板で中房には1+6の蓮子を配し、外区の珠文は疎である。銀杏状花卉の特徴は近隣の山背国分寺(KM14)や京田辺市三山木廃寺・普賢寺等に類品を持つが、同範例を聞かない。井手寺跡では伽藍中枢部で出土する。

I dM4 2 単弁18?弁蓮華文軒丸瓦。小振りな凸形中房から子葉のない細弁を派生させ、珠文帯には小粒の珠点を疎らに配し、外縁は低く素文で平板な製品である。棒状の花卉の特徴は近隣の山背国分寺(KM1 1)、京田辺市の興戸廃寺・普賢寺等に類例を持つが、同範例を聞かない。発掘調査では出土しておらず、京都市埋蔵文化財研究所の収蔵品にある。

軒平瓦(8型式12種)

I dH3 1 均整唐草文軒平瓦。平城宮 6671C 型式同範。同範例は平城宮や長岡宮の他、木津川市の木津北遺跡で出土している。井手寺では金堂前の石敷通路(SX304)や回廊内建物SB401から出土した。

I dH3 2 均整唐草文軒平瓦。平城宮 6691A 型式同範。同範例は平城宮・京や京内の唐招提寺・薬師寺・法華寺・興福寺・大安寺・東大寺、大和国内の法隆寺・大官大寺の他、木津川市の恭仁宮跡(KH0 1)・高麗寺跡(KmH3 2)・上津遺跡・木津北遺跡・岡田加茂鑄銭司跡や城陽市の平川廃寺・久世廃寺で出土している。また、長岡宮、平安京内や西寺跡でも出土する。なお、井手寺近傍の石橋瓦窯跡・岡田池瓦窯跡でも出土しており、岡田池瓦窯産の製品と考えられる。井手寺跡では各所で出土し、最も出土量の多い型式である。I dM3 4 Bとのセット関係は明らかである。

I d H 3 3 A 均整唐草文軒平瓦。平城宮 6663 Cb 型式同範。同範・同文例は平城宮・京や京内の唐招提寺・秋篠寺、法隆寺の他、恭仁宮、長岡宮、平安宮内や城陽市の久世廃寺で出土でも出土する。なお、井手寺近傍の岡田池瓦窯跡でも出土しており、奈良市中山瓦窯から範が移動した可能性が考えられる。

I d H 3 3 B 均整唐草文軒平瓦。平城宮 6663 D 型式同範。同範例は平城宮・京や木津川市の木津北遺跡で出土している。井手寺跡では伽藍中枢部で出土する。

I d H 3 3 C 均整唐草文軒平瓦。平城宮 6663 H 型式同範。薬師寺の所要瓦で、同範例は平安京内でも出土している。井手寺では寺城西辺付近で出土(第 7 次調査地)した。

I d H 3 3 D 均整唐草文軒平瓦。平城宮 6663 D 型式を模した製品である。あるいは範改刻の可能性をもつ。井手寺跡では伽藍中枢部で出土する。

I d H 3 4 均整唐草文軒平瓦。平城宮 6682 A 型式同範。同範例は平城宮・京や京内の西大寺・大安寺・興福寺・唐招提寺・薬師寺の他、木津川市の恭仁宮跡(KH 0 8 B)・上津遺跡・木津北遺跡、長岡宮跡で出土しており、奈良市の山陵瓦窯で生産が確認されている。なお、井手寺の発掘調査では出土しておらず、京都市埋蔵文化財研究所の収蔵品にある。

I d H 3 5 A 均整唐草文軒平瓦。平城宮 6721 C 型式同範。同範例は平城宮・京や京内の西大寺・西隆寺・秋篠寺・法華寺・海竜王寺・東大寺の他、木津川市の恭仁宮跡(KH 0 4 A)・高麗寺跡(Km H 3 4 B)・上津遺跡・木津北遺跡や木津川市と精華町の境にある樋ノ口遺跡、精華町の里廃寺、城陽市の平川廃寺・久世廃寺・正道廃寺、長岡宮跡でも出土している。なお、井手寺の発掘調査では出土しておらず、京都国立博物館の収蔵品にある。

I d H 3 5 B 均整唐草文軒平瓦。平城宮 6721 J 型式同範。同範例は平城京や京内の法華寺、枚方市の百済寺跡で出土するが、近隣での出土を聞かない。発掘調査では出土しておらず、京都市埋蔵文化財研究所の収蔵品にある。

I d H 3 6 均整唐草文軒平瓦。平城宮 6726 系の製品であるが、巻きの強い蕨手は 4 転し外区の珠文は大粒で疎らである。他遺跡での同範例の出土を聞かない。発掘調査では出土しておらず、京都国立博物館の収蔵品にある。

I d H 4 1 均整唐草文軒平瓦。中心飾りの様相は I d H 3 2 の系譜上にあるが、唐草先端の肥厚した特徴は「旨」の異字体を中心飾りとする恭仁宮(山背国分寺)KH 1 3 に似る。

I d H 4 2 均整唐草文軒平瓦。恭仁宮(山背国分寺)KH 0 5 型式同範。同範例は滋賀県の甲可寺跡、三重県の伊賀国分寺跡の他、八幡市の志水廃寺、京田辺市の興戸廃寺で出土するが、志水廃寺・興戸廃寺・井手寺跡例は恭仁宮例(Aa)の上外区・両脇区を欠く Ab 段階の製品である。井手寺では細片 1 点のみの出土である。

刻印文字瓦

井手寺では、恭仁宮跡出土の K J 0 1 B 型式と同範の「刑部」銘刻印平瓦片が寺城西辺北側で出土しており、他に「廣橋」銘の刻印を押捺した丸瓦片が回廊内建物跡(S B 401)瓦落から 2 点出土してい

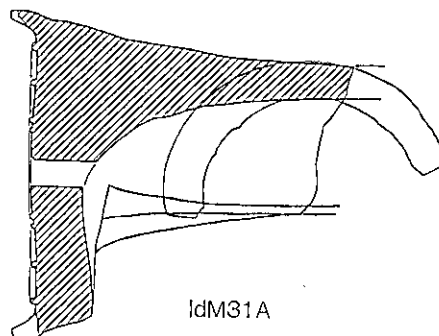
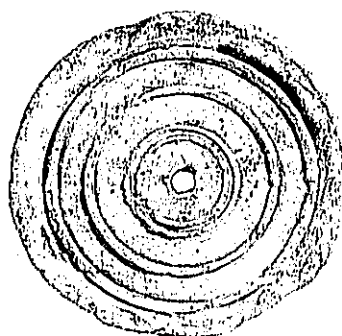
る。これらは、所謂「恭仁宮式文字瓦」であり、前者は恭仁宮の他に平城宮や東大寺で出土するが、後者は恭仁宮での出土はなく、平城宮のみで同印例数点が確認されている。この種の文字瓦は、恭仁宮造営のために設置された西山瓦屋(所在不明)の製品であり、瓦の品質管理に伴う数量検印として人名印が押捺されたとする有力な説がある。

三彩方形種先瓦

一辺約 10.0 cm×厚さ約 0.7 cmの方形表面には、四弁の重弁三葉花文とその間隙を埋める覗き花卉で構成した花文を描いている。手彫りで線刻された花文の構成は基本的に同じであるが、間弁の処理等に違いがみられ、3種類(a・b・c)の原図が存在する。円形の釘穴は中央と四隅の5か所に開けられており、花卉には濃緑色・淡緑色・褐色・白色の釉が施されている。類似例としては、法華寺阿弥陀浄土院出土例がある。

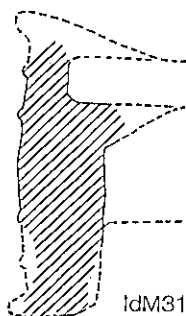


第 66 図 井手寺跡伽藍計画図

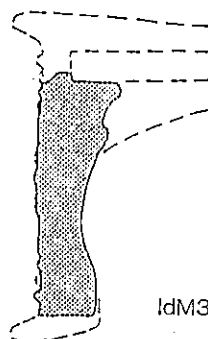
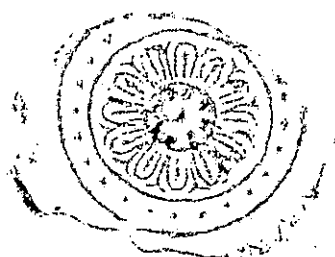


IdM31A

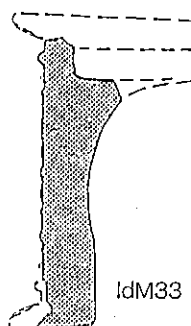
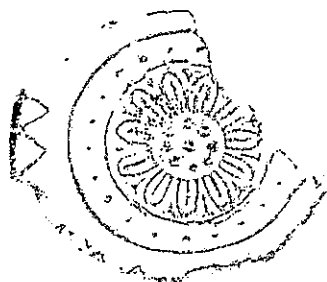
(京都国立博物館所蔵)



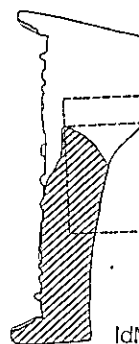
IdM31B



IdM32

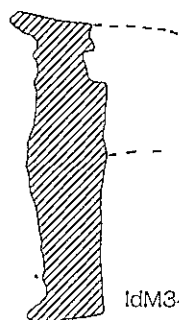
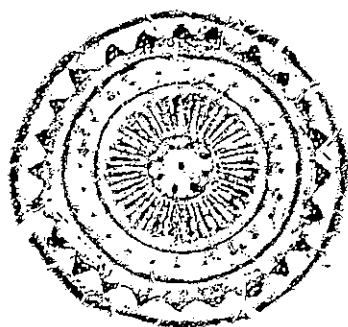


IdM33

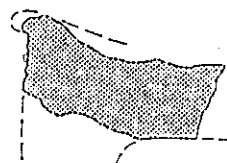
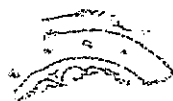


IdM34A

(京都国立博物館所蔵)

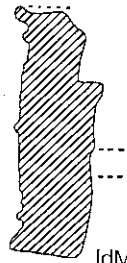
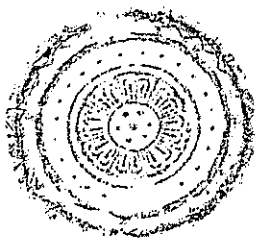


IdM34B

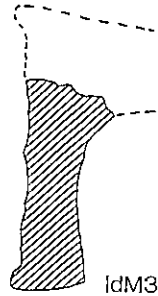
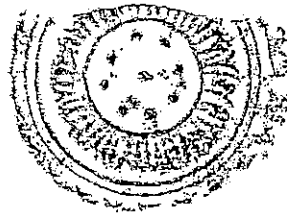


IdM35

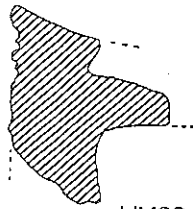
第 67 図 井手寺跡出土軒丸瓦 ①



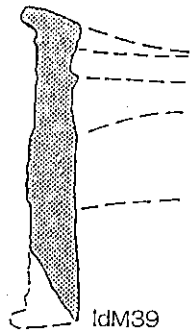
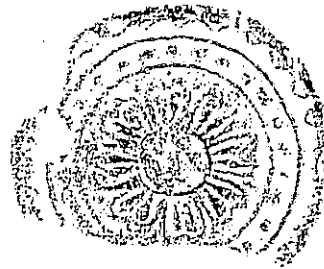
IdM38



IdM37



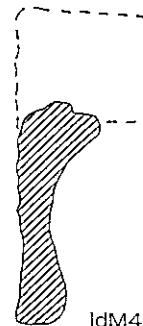
IdM36



IdM39

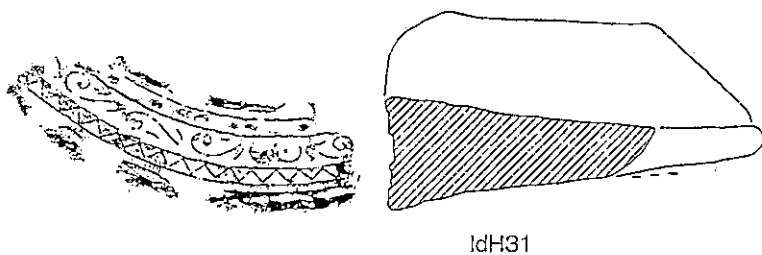


IdM42



IdM41

第68図 井手寺跡出土軒丸瓦 ②



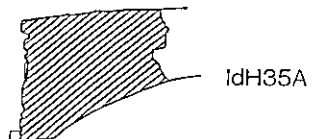
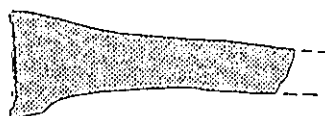
IdH31



(京都国立博物館所蔵)



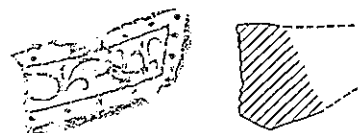
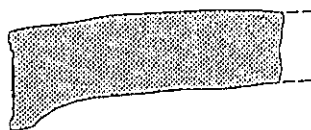
IdH32



IdH35A



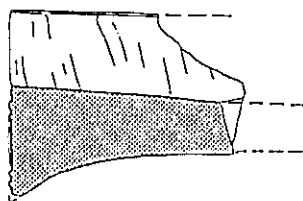
IdH33A



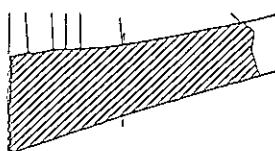
IdH35B



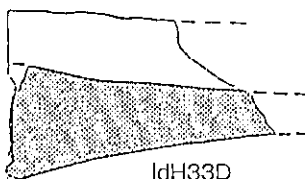
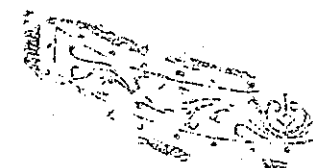
IdH33B



(京都国立博物館所蔵)



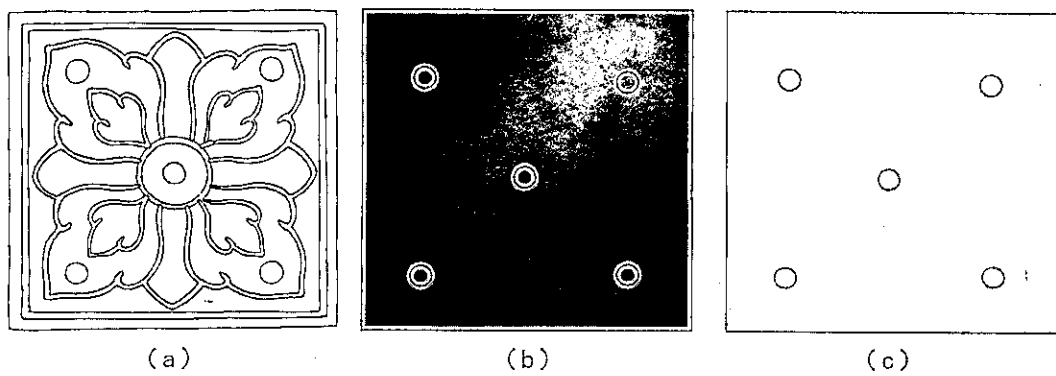
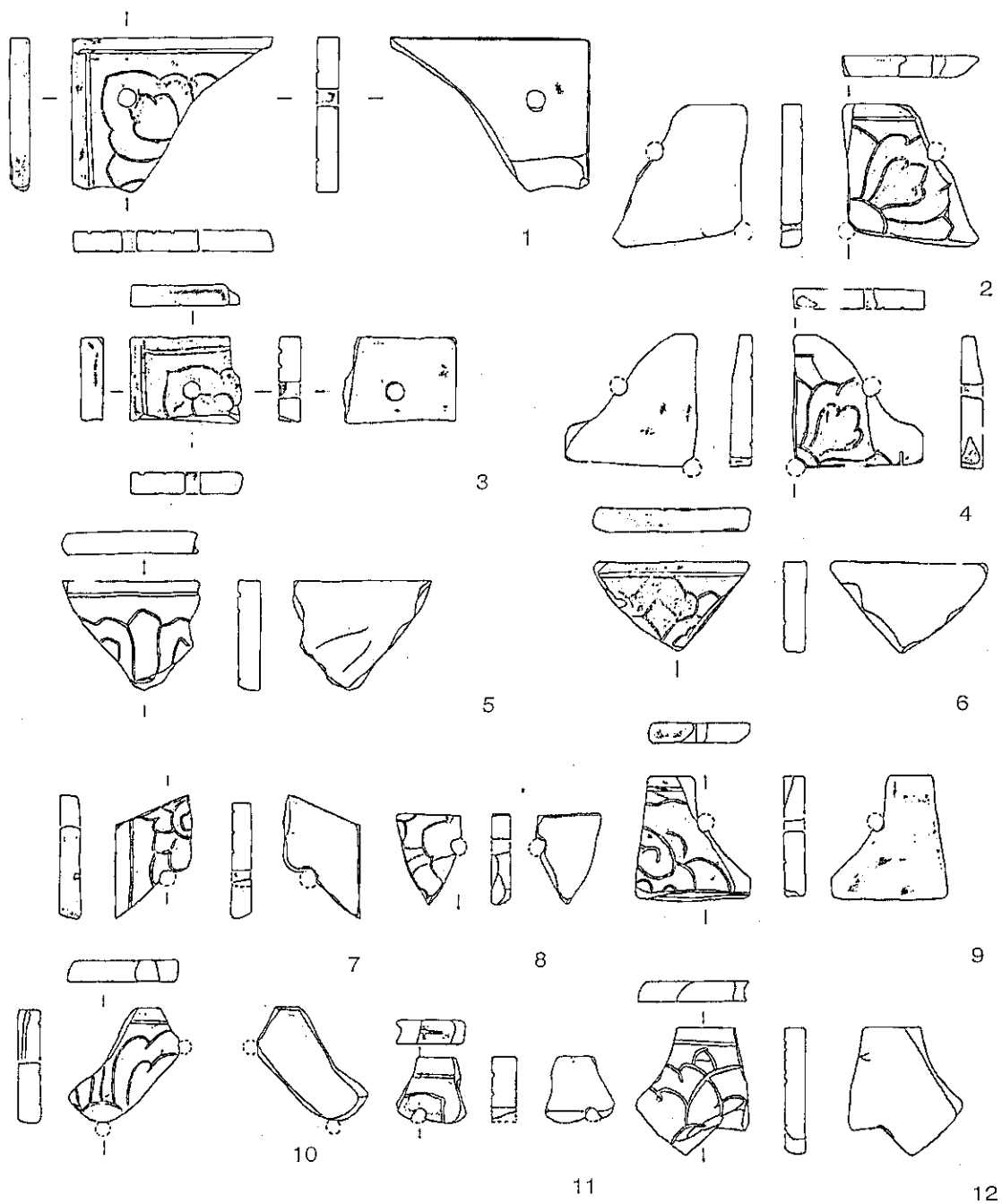
IdH33C



IdH33D



第 69 図 井手寺跡出土軒平瓦



第70図 井手寺跡出土施釉垂木先瓦

第四節 平城京の造営と奈良山瓦窯跡群

1. 奈良山瓦窯跡群の歴史的意義

宮都における本格的な瓦の使用は、持統 8 年（694）の藤原京造営をもって開始される。藤原宮ではその宮都における本格的な瓦の使用は、生産が奈良盆地の縁辺部で確認できるほか、和泉や近江、淡路（洲本市土生寺瓦窯）、讃岐（三野町吉宗瓦窯）などの遠隔地からもたらされていることが知られている。また、藤原宮の中核部では、7 世紀前半代以来の拠点的な窯業地帯である御所市高台・峰寺瓦窯や平群町の安養寺瓦窯、大和郡山市西田中瓦窯などの製品が用いられている。このことは、藤原宮・京の造営に伴う造瓦体制が未成熟なため、旧来の窯業地帯にその生産拠点を求めたものと考えられている。

和銅 3 年（710）に造営された平城宮・京では、奈良山丘陵を中心とした瓦窯で新調された瓦を多く使用しており、藤原京からの搬入・再利用瓦はわずかである。このことは、京内の大寺においても同様である。奈良山丘陵は、平城宮・京と京内の大寺造営のために新設された窯業地帯なのである。

ちなみに藤原京から平安京にいたる宮都の瓦生産をみると、都の存続期間を考慮しても、都の存続期間を考慮しても、藤原京はこれまでの在地型瓦生産をそのまま利用し、後期難波宮や長岡京では一部新たに瓦窯を構築するも、その主体は旧都からの再利用に依存しており、大量の瓦を生産するための本格的な瓦生産体制の組織化を図ったのは、平城京と平安京であったとすることができるのである。

奈良山丘陵における瓦生産は、まず、丘陵西側の中山瓦窯で平城宮第 1 次大極殿院の南門や築地回廊、東櫓に使用された瓦が生産されており、平城宮瓦編年の第Ⅰ－1 期に操業を開始する。この生産体制は、平城宮瓦編年の第Ⅱ－2 期に相当する近隣の山陵瓦窯や押熊瓦窯へと拡大し、宮の造営が継続する。同様に奈良山丘陵東側でも梅谷瓦窯、瀬後谷瓦窯の操業が平城宮瓦編年の第Ⅰ期から開始しており、京内大寺の興福寺や京の整備の用いられるのである。これら宮・京と京内大寺の造営が、当初から奈良山での瓦生産に依存していることは重要である。しかも、その後の継続した宮都の造営においても、瓦生産の拠点は、平城京が存続する限り奈良山を離れることはないのである。

奈良山丘陵の瓦窯跡群は、一貫した平城宮・京と京内大寺の造営の瓦生産拠点であるばかりか、都の造営を担った官営瓦工房の成立を示しているのである。

2. 奈良山瓦窯跡群の概要

平城宮・京の背後、大和と山背の国境の地に奈良山丘陵がある。ここは、奈良市北部から京都府木津川市、相楽郡精華町にまたがる低丘陵で、現在までに 40 箇所をこえる瓦窯・須恵器窯跡の分布が指摘されている。ここで生産された瓦や須恵器は主に平城宮・京へ運ばれており、いわば奈良山丘陵一帯は、平城京を支えた一大窯業地帯であった。特に瓦窯跡は、今日までに 30 基程の発掘調査が実施されており、平城宮・京と京内大寺の造営に果たした奈良山丘陵の瓦窯跡群の役割は極めて大きいと言

えよう。官窯としての位置付けが可能である。

近年確認された五領池東瓦窯、瀬後谷瓦窯、鹿背山瓦窯のように新たに発見され、再評価された瓦窯のあることを考えると、奈良山丘陵にはさらに多くの未知の窯跡があることは容易に想像できる。

奈良市中山瓦窯は、丘陵南斜面を利用して10基の窯が確認されている。窖窯7基のうちには有段式と無段式の別があり、有段式→無段式→平窯への変遷が考えられている。平城宮第1次大極殿院の南門や築地回廊、東楼に使用された瓦が生産されており、平城宮瓦編年の第Ⅰ－Ⅰ期～Ⅱ期に相当する。奈良押熊瓦窯は、小丘陵の西斜面に6基の窯が確認されており、窯構造はすべて平窯である。窯壁材として使用された鬼瓦は山陵瓦窯(2号窯)からも出土している。出土瓦は、平城宮瓦編年の第Ⅱ－Ⅱ期～Ⅳ－Ⅰ期に相当する。

奈良市歌姫西瓦窯は、低い尾根の東南斜面に6基の窯が確認され、音如ヶ谷瓦窯に隣接している。窖窯1基と平窯5基で構成されるが、平城宮瓦編年の第Ⅱ期のものが主体である。奈良市山陵瓦窯は、丘陵南斜面で3基の窯が確認されている。窖窯2基と平窯で構成されており、平城宮瓦編年の第Ⅱ－Ⅱ期に操業を開始しⅢ－Ⅱ期まで継続する。

木津川市音如ヶ谷瓦窯では4基の窯が確認されている。うち2基はロストル式の平窯で、側壁の骨材に歌姫瓦窯の製品が使用されている。窯の操業は法華寺阿彌陀浄土院の創建よりも遡り、平城宮瓦編年の第Ⅲ期に操業を開始している。奈良市歌姫瓦窯は、平窯6基が確認されているが詳細は不明である。

相楽郡精華町の乾谷瓦窯、得所瓦窯は、いずれも日干レンガを使用した平窯であるが詳細は不明である。木津川市梅谷瓦窯は7基で構成された興福寺創建瓦窯である。平城宮瓦編年の第Ⅰ・Ⅱ期に相当する。木津川市瀬後谷瓦窯では5基の窯が確認されており、瓦専業窯と瓦陶兼業窯が混在する。平城宮瓦編年の第Ⅰ・Ⅱ期の窯であり、須恵器や瓦塔も出土している。

木津川市市坂瓦窯は上人ヶ平瓦工房と一体の窯であり、8基のロストル式の平窯で構成される。平城宮大膳式所要瓦を生産した平城宮瓦編年の第Ⅳ・Ⅴ期の窯である。上人ヶ平の瓦工房と市坂瓦窯で生産された瓦は、すべて平城宮に運ばれ、おもに奈良時代後期の大膳職造営のために供給されたようである。したがって、上人ヶ平の瓦工房と市坂瓦窯は、造宮省の管理下にある官営の「造瓦所」あるいは「瓦屋」とすることができる。操業した時期は、天平17年(745)の聖武天皇による平城遷都後の大改修の時期と符号する。上人ヶ平の瓦工房で最も注目されるのは、長大な東西棟建物(9間×4間)が整然と南北に4棟並ぶ掘立柱建物群である。ここでは、生瓦の成形・乾燥が行われ、さらに窯で焼成された製品の品質管理・数量検定もなされた。建物の内部空間(約1,300 m²)では、平瓦にして、およそ1万数千枚の生瓦の乾燥が可能となる。また、この遺跡では、工人たちが暮らす建物や井戸・倉庫も確認されており、官営工房の実態が明らかとなった。

木津川市五領池東瓦窯は市坂瓦窯に近接するが、3基の窯は上人ヶ平瓦工房とは別の工房に属していたようである。平城宮瓦編年の第Ⅳ期の窯である。木津川市鹿背山瓦窯では2基の窯を確認しているが、最終操業では平城宮以外の瓦も生産していた。

地名	番号	瓦窯名	所在地	構造物・瓦構造	築造時期	型式・主供給先・同類例出土遺跡
宇治市	1	南山瓦窯跡	宇治市本郷南山	瓦窯・須恵器窯混在？	8世紀代	不明
	2	北山畑瓦窯跡	宇治市本郷北山畑	瓦窯？	8世紀代	不明
	3	車上り窯跡 1号窯	宇治市英道車上り	周辺に工屑・灰滓あり 瓦陶 半地下式有段登窯 10.8×2.1m 瓦陶周溝 須恵器→瓦寺→須恵器 半地下式無段登窯 9.3×2.2m 右周溝残	7世紀Ⅰ・Ⅱ前半期	高句麗系4型式(A~D) 苗渚系1型式(E) Aは2把 A・B・C・Eは豊浦寺創建瓦 Dは種々窯へ移動して 北野慶寺へ供給 Cは種々平野山窯へ移動 2号窯はD型式のみ焼成、他は全型式焼成
		2号窯		瓦陶一須恵器 地下式？ 有段登窯一無段 10.9×2.0m 右周溝残	"	2号・3号・1号の順に焼成 D型式供給先不明
		3号窯		瓦陶 3号窯に類似？ 約10m 右周溝残	"	
久世郡	4	山本瓦窯跡	宇治市宇治山本	瓦陶 地下式有段登窯 5.8×1.0m	7世紀末	川原寺式 大風寺創建瓦焼成
	5	岡本瓦窯跡	宇治市五ヶ庄岡本	岡本境内内に焼土床面	7末～8世紀初頃	寺院内瓦窯？ 詳細不明
久世郡	6	久世慶寺瓦窯跡	城陽市久世北垣内	登窯？	7世紀？	久世慶寺瓦焼成？ 詳細不明
	7	横道瓦窯跡	城陽市平川横道	平窯？ 久津川車塚古墳 外壁に灰滓	8世紀	平川慶寺瓦焼成？ 詳細不明
八幡市	8	足立寺瓦窯跡	八幡市西山和氣 (河内国茨田郡津葉)	瓦専業 ロストル式平窯 3.4×1.9m (窯体移築)	8世紀後半	西山慶寺(足立寺)瓦焼成？
	9	志水瓦窯跡 1号窯 (2号窯抹消)	八幡市八幡中ノ山	瓦専業 地下式有段登窯 5.2×1.4m	7世紀中頃	志水慶寺創建瓦焼成
	10	英濃山瓦窯跡	八幡市英濃山古寺	瓦専業 ロストル式平窯	8世紀後半	英濃山慶寺瓦焼成？ 詳細不明
	11	津葉平野山瓦窯跡 1号窯 2号窯	八幡市橋本平野山 (河内国茨田郡津葉)	灰原のみ確認 瓦陶窯 地下式無段登窯 幅1.4m	7世紀Ⅰ前半期？ 7世紀Ⅰ前半期	四天王寺創建を契機として開窯 2～4・8号窯は四天王寺へ (第Ⅰ期造営) 素井系軒瓦供給
		3号窯		瓦陶窯 地下式無段一有段登窯 6.7以上×2.0m	"	
		4号窯		瓦陶窯 地下式有段登窯 4.3以上×2.1m	"	
		5号窯		瓦陶窯 地下式有段登窯	7世紀Ⅰ前半期？	
		6号窯		瓦陶窯 地下式有段登窯 2.8以上×1.7m	7世紀Ⅱ前半期	6号窯で焼成の奥山久米寺式土、 奥山慶寺・久世慶寺へ供給
		7号窯		瓦陶窯 地下式有段有段 一無段有段登窯 5.2以上×2.0m	7世紀Ⅲ前半期	7号窯で焼成の山田寺式と重弧 文軒瓦は四天王寺Ⅱ期造営を契 機として生産
		8号窯		瓦陶窯 地下式有段登窯 3.7以上×2.3m	7世紀Ⅰ前半期	
京田辺市	12	三山木慶寺瓦窯跡	京田辺市富津佐牙垣内	瓦専業 地下式有段登窯 大安寺備置瓦座	7世紀末頃？ 8世紀前半	英濃山慶寺瓦焼成 詳細不明 史跡大安寺附指定
		石橋瓦窯跡 1号窯 2号窯 3号窯	井手町井手石橋			
	13	岡田池瓦窯跡	井手町井手岡田	瓦専業 平窯？ 3基？	8世紀後半	6282B 井手寺、正道宮街、樋ノ口遺跡、 高麗寺、豊浦寺、松尾慶寺、上津遺跡、 横原寺、平城宮京、長岡京、平安京 6691A 井手寺、平川慶寺、久世慶寺、 高麗寺、上津遺跡、岡田加茂跡、 南都諸大寺、慈仁宮、平城宮京、長岡京、 平安京、四寺 6721D 平城宮京、長岡京、平安京 平城宮所用瓦焼成
	19	乾谷瓦窯跡	精華町乾谷徳所	瓦専業 平窯数基あり	"	
	20	徳所瓦窯跡	精華町徳所徳所	瓦専業 平窯	"	
	17	法華寺野遺跡瓦窯	木津川市加茂町法華寺野西平	瓦専業 平窯 2基以上	8世紀後半	
	18	岡田庄瓦窯跡	木津川市加茂町北岡田庄	瓦専業 ロストル式平窯	8世紀代？	国分寺瓦窯？ 国分尼寺瓦窯？
	14	高井平瓦窯跡 1号窯	木津川市山城町高井平	瓦専業 平窯	"	
		2号窯		瓦専業 ロストル式平窯	8世紀後半	南都七大寺式鬼瓦8枚窯跡出土 高麗寺塔修理瓦(KmM35.42, KmH36)焼成 KmH36(平成6761A同型) 西隆寺創建瓦窯より瓦移動 灰原よりKmH36同型出土 高麗寺付瓦瓦窯
	15	高麗寺瓦窯跡 1・2号窯	木津川市山城町上柏高麗寺	瓦専業 登窯？前庭共有	7世紀末頃	高麗寺中・南門創建瓦(KmM26)焼成 盤瀬寺の瓦窯より瓦が移動 高麗寺修理瓦(KmM41)焼成
木津川市		3号窯		瓦専業 ロストル式平窯 幅2.7m	8世紀末頃	
		鹿背山瓦窯跡 1号窯 2号窯				
	21	市坂瓦窯跡 1号窯	木津川市市坂上人ヶ平	瓦工房跡(上人ヶ平遺跡) 瓦専業 平窯	8世紀後半	"
		2号窯		瓦専業 ロストル式平窯 2.0×1.4m	"	上人ヶ平遺跡資料を含め同類例をみると 6133A 平城宮京、長岡京、平安京 6133B 木津北遺跡、嵯峨慶寺、平城宮京、 長岡京、平安京 6133C 平城宮京、長岡京 6130B 平城宮、長岡京 6235M 東大寺 6732A 法隆寺、法隆寺、平城宮、長岡京、 東寺 6732C 高麗寺、木津北遺跡、興福寺、 東大寺、平城宮京、長岡京、平安京 6725B 平城宮 6718A 上津遺跡、平城宮 6768E
		3号窯		瓦専業 平窯	"	
		4号窯		瓦専業 平窯 幅約1.0m	"	
		5号窯		瓦専業 平窯 幅約1.0m	"	
		6号窯		瓦専業 平窯 幅約2.2m	"	
		7号窯		瓦専業 平窯 幅約2.0m	"	
		8号窯		瓦専業 ロストル式平窯 2.1×1.6m コ字状周溝	"	

第71図 南山城の瓦窯跡一覧

相	22	五領池東瓦窯跡 1号窯 2号窯 3号窯	木津川市市坂上人ヶ平	瓦専業 ロストル式平窯 1.2×2.1m 1・2号窯 共用の排水溝 瓦専業 ロストル式平窯 1.0×1.9m 瓦専業 ロストル式平窯 1.0×2.0m	8世紀後半 " "	音如ヶ谷瓦窯の操業に遅れて、法華寺阿弥陀淨土院へ瓦を供給 6133A 市坂瓦窯参照 6138A 平城宮 6138B 木津北遺跡、法華寺阿弥陀淨土院、 大安寺、新岡原寺、平城宮京、長岡京 平安京、音如ヶ谷瓦窯 6138F 法華寺、音如ヶ谷瓦窯 6714A 大鳥遺跡、法華寺阿弥陀淨土院、 海龜王寺、平城宮、音如ヶ谷瓦窯、歌姫 瓦窯 6716A 大鳥遺跡、法華寺阿弥陀淨土院、 平城宮、音如ヶ谷瓦窯 6767A 大鳥遺跡、法華寺阿弥陀淨土院、 平城宮、音如ヶ谷瓦窯 6767B 大鳥遺跡、法華寺阿弥陀淨土院、 平城宮、音如ヶ谷瓦窯 6768A 法華寺、音如ヶ谷瓦窯 6768B 大鳥遺跡、平城宮、音如ヶ谷瓦窯 6768C 法華寺、平城宮 6768D 大鳥遺跡、平城宮 6732F 東大寺、平安京 平城宮所用瓦焼成 6284E 紀寺、平城宮 6298A 平城宮 6316S 6664I 平城宮、平安京 6668A 平城宮、歌姫西瓦窯 6700A 平城宮 6679A 法華寺、海龜王寺 6671I 平城宮
				瓦専業 地下式有段登窯 4.5m以上×1.8m 瓦専業 地下式有段登窯 5.3m以上×1.4m 瓦陶兼業 詳細不明 灰原確認 詳細不明 "	8世紀第Ⅰ四半期 " " " "	6284E 紀寺、平城宮 6298A 平城宮 6316S 6664I 平城宮、平安京 6668A 平城宮、歌姫西瓦窯 6700A 平城宮 6679A 法華寺、海龜王寺 6671I 平城宮
				2・3号窯と同一構造？ 瓦専業 半地下式平窯→ 登窯に改修 1.8×2.3m 瓦専業 半地下式平窯→ 登窯に改修 1.8×2.1m 瓦専業 地下式有段登窯 3.5×1.5m 瓦専業 地下式有段登窯 幅1.8m 7号窯と同一構造？ 瓦専業 半地下式平窯 2.6×2.2m	8世紀第Ⅱ四半期 " " " " "	興福寺創建瓦焼成 6301A 興福寺 6301D 興福寺、平城宮 6671A 興福寺、平城宮京 6671K 平城宮
				瓦専業 ロストル式平窯 1.9m×2.1m 排水溝有 瓦専業 ロストル式平窯 1.8m×2.4m 排水溝有 後に幅2.1mに改造 瓦専業 ロストル式平窯 燃焼室のみ残 排水溝有 瓦専業 ロストル式平窯 燃焼室のみ残 排水溝有	8世紀後半 " " " "	1・2と3・4号窯がセット 平城宮所用瓦焼成 音如ヶ谷一五領池東 6314E 法華寺、歌姫西瓦窯、平城宮 6313C 歌姫西瓦窯、平城宮 6137C 大鳥遺跡 6138B 五領池東瓦窯参照 6138G 6285A 大鳥遺跡、唐招提寺、秋徳寺、 法華寺、法輪寺、法隆寺、平城宮、京、 慈仁宮、長岡京、歌姫西瓦窯 6714A 五領池東瓦窯参照 6667A 大鳥遺跡、木津北遺跡、法華寺、 薬師寺、平城宮、京、歌姫西瓦窯 6768A 法華寺 6716A 法華寺阿弥陀淨土院、大鳥遺跡
				瓦専業 半地下式平窯 全長9.5m×幅2m 瓦専業 半地下式平窯 全長4m×幅1.8m 瓦専業 半地下式平窯 全長4m×幅1.5m 瓦専業 半地下式平窯 全長5m×幅2m 瓦専業 半地下式平窯 全長4.5m×幅2m 詳細不明 瓦専業 ロストル式平窯	8世紀後半 " " " " "	歌姫西瓦窯跡→音如ヶ谷瓦窯 近接して7世紀前半～中頃の須恵製窯有 その後、平城宮所用瓦焼成窯築窯 6314E 音如ヶ谷瓦窯参照 6313C 6285A 6667A
奈良 山 丘 陵	20	歌姫西瓦窯跡 1号窯 2号窯 3号窯 4号窯 5号窯 6号窯	奈良市歌姫町	瓦専業 半地下式平窯 全長9.5m×幅2m 瓦専業 半地下式平窯 全長4m×幅1.8m 瓦専業 半地下式平窯 全長4m×幅1.5m 瓦専業 半地下式平窯 全長5m×幅2m 瓦専業 半地下式平窯 全長4.5m×幅2m 詳細不明 瓦専業 ロストル式平窯	8世紀中頃～後半 " " " "	歌姫西瓦窯跡→音如ヶ谷瓦窯 近接して7世紀前半～中頃の須恵製窯有 その後、平城宮所用瓦焼成窯築窯 6314E 音如ヶ谷瓦窯参照 6313C 6285A 6667A
				瓦専業 地下式有段登窯 長2.2m残×幅1.5m 瓦専業 地下式平窯 長1.3m残×幅1.8m 瓦専業 地下式平窯 長1.2m残×幅1.5m 2回の補修有 瓦専業 半地下式平窯 3-A号窯の上に築窯 瓦専業 地下式有段登窯 長2.7m残×幅1.5m 改修有 瓦専業 地下式無段登窯 長4.1m残×幅1.5m 4-A号窯の上に築窯 改修有 瓦専業 地下式無段登窯 長6.1m×幅2.2m 日干煉瓦使用 瓦専業 地下式有段登窯 補修有 瓦専業 地下式平窯 長5.6m残 日干煉瓦使用 6-A号窯の上に築窯 瓦専業 地下式有段登窯 長5.0m残×幅1.9m	8世紀後半 " " " " " " " " " "	平城宮所用瓦焼成 平城宮所用瓦焼成 6225A 法華寺、唐招提寺、西隆寺、広隆寺、 木津北遺跡、平城宮、京、長岡宮、平安京 6225L 片岡王寺 6663C 岡田池瓦窯参照 6664C 慈仁宮、木津北遺跡、平城宮、京、 長岡京
				瓦専業 地下式有段登窯 長2.2m残×幅1.5m 瓦専業 地下式平窯 長1.3m残×幅1.8m 瓦専業 地下式平窯 長1.2m残×幅1.5m 2回の補修有 瓦専業 半地下式平窯 3-A号窯の上に築窯 瓦専業 地下式有段登窯 長2.7m残×幅1.5m 改修有 瓦専業 地下式無段登窯 長4.1m残×幅1.5m 4-A号窯の上に築窯 改修有 瓦専業 地下式無段登窯 長6.1m×幅2.2m 日干煉瓦使用 瓦専業 地下式有段登窯 補修有 瓦専業 地下式平窯 長5.6m残 日干煉瓦使用 6-A号窯の上に築窯 瓦専業 地下式有段登窯 長5.0m残×幅1.9m	8世紀前半～中頃 " " " " " " " " "	平城宮所用瓦焼成 平城宮所用瓦焼成 6225A 法華寺、唐招提寺、西隆寺、広隆寺、 木津北遺跡、平城宮、京、長岡宮、平安京 6225L 片岡王寺 6663C 岡田池瓦窯参照 6664C 慈仁宮、木津北遺跡、平城宮、京、 長岡京
				瓦専業 地下式有段登窯 長2.2m残×幅1.5m 瓦専業 地下式平窯 長1.3m残×幅1.8m 瓦専業 地下式平窯 長1.2m残×幅1.5m 2回の補修有 瓦専業 半地下式平窯 3-A号窯の上に築窯 瓦専業 地下式有段登窯 長2.7m残×幅1.5m 改修有 瓦専業 地下式無段登窯 長4.1m残×幅1.5m 4-A号窯の上に築窯 改修有 瓦専業 地下式無段登窯 長6.1m×幅2.2m 日干煉瓦使用 瓦専業 地下式有段登窯 補修有 瓦専業 地下式平窯 長5.6m残 日干煉瓦使用 6-A号窯の上に築窯 瓦専業 地下式有段登窯 長5.0m残×幅1.9m	8世紀後半 " " " " " " " "	平城宮所用瓦焼成 平城宮所用瓦焼成 6225A 法華寺、唐招提寺、西隆寺、広隆寺、 木津北遺跡、平城宮、京、長岡宮、平安京 6225L 片岡王寺 6663C 岡田池瓦窯参照 6664C 慈仁宮、木津北遺跡、平城宮、京、 長岡京
				瓦専業 地下式有段登窯 長2.2m残×幅1.5m 瓦専業 地下式平窯 長1.3m残×幅1.8m 瓦専業 地下式平窯 長1.2m残×幅1.5m 2回の補修有 瓦専業 半地下式平窯 3-A号窯の上に築窯 瓦専業 地下式有段登窯 長2.7m残×幅1.5m 改修有 瓦専業 地下式無段登窯 長4.1m残×幅1.5m 4-A号窯の上に築窯 改修有 瓦専業 地下式無段登窯 長6.1m×幅2.2m 日干煉瓦使用 瓦専業 地下式有段登窯 補修有 瓦専業 地下式平窯 長5.6m残 日干煉瓦使用 6-A号窯の上に築窯 瓦専業 地下式有段登窯 長5.0m残×幅1.9m	8世紀後半 " " " " " " " "	平城宮所用瓦焼成 平城宮所用瓦焼成 6225A 法華寺、唐招提寺、西隆寺、広隆寺、 木津北遺跡、平城宮、京、長岡宮、平安京 6225L 片岡王寺 6663C 岡田池瓦窯参照 6664C 慈仁宮、木津北遺跡、平城宮、京、 長岡京
				瓦専業 地下式有段登窯 長2.2m残×幅1.5m 瓦専業 地下式平窯 長1.3m残×幅1.8m 瓦専業 地下式平窯 長1.2m残×幅1.5m 2回の補修有 瓦専業 半地下式平窯 3-A号窯の上に築窯 瓦専業 地下式有段登窯 長2.7m残×幅1.5m 改修有 瓦専業 地下式無段登窯 長4.1m残×幅1.5m 4-A号窯の上に築窯 改修有 瓦専業 地下式無段登窯 長6.1m×幅2.2m 日干煉瓦使用 瓦専業 地下式有段登窯 補修有 瓦専業 地下式平窯 長5.6m残 日干煉瓦使用 6-A号窯の上に築窯 瓦専業 地下式有段登窯 長5.0m残×幅1.9m	8世紀後半 " " " " " " " "	平城宮所用瓦焼成 平城宮所用瓦焼成 6225A 法華寺、唐招提寺、西隆寺、広隆寺、 木津北遺跡、平城宮、京、長岡宮、平安京 6225L 片岡王寺 6663C 岡田池瓦窯参照 6664C 慈仁宮、木津北遺跡、平城宮、京、 長岡京
				瓦専業 地下式有段登窯 長2.2m残×幅1.5m 瓦専業 地下式平窯 長1.3m残×幅1.8m 瓦専業 地下式平窯 長1.2m残×幅1.5m 2回の補修有 瓦専業 半地下式平窯 3-A号窯の上に築窯 瓦専業 地下式有段登窯 長2.7m残×幅1.5m 改修有 瓦専業 地下式無段登窯 長4.1m残×幅1.5m 4-A号窯の上に築窯 改修有 瓦専業 地下式無段登窯 長6.1m×幅2.2m 日干煉瓦使用 瓦専業 地下式有段登窯 補修有 瓦専業 地下式平窯 長5.6m残 日干煉瓦使用 6-A号窯の上に築窯 瓦専業 地下式有段登窯 長5.0m残×幅1.9m	8世紀後半 " " " " " " " "	平城宮所用瓦焼成 平城宮所用瓦焼成 6225A 法華寺、唐招提寺、西隆寺、広隆寺、 木津北遺跡、平城宮、京、長岡宮、平安京 6225L 片岡王寺 6663C 岡田池瓦窯参照 6664C 慈仁宮、木津北遺跡、平城宮、京、 長岡京
				瓦専業 地下式有段登窯 長2.2m残×幅1.5m 瓦専業 地下式平窯 長1.3m残×幅1.8m 瓦専業 地下式平窯 長1.2m残×幅1.5m 2回の補修有 瓦専業 半地下式平窯 3-A号窯の上に築窯 瓦専業 地下式有段登窯 長2.7m残×幅1.5m 改修有 瓦専業 地下式無段登窯 長4.1m残×幅1.5m 4-A号窯の上に築窯 改修有 瓦専業 地下式無段登窯 長6.1m×幅2.2m 日干煉瓦使用 瓦専業 地下式有段登窯 補修有 瓦専業 地下式平窯 長5.6m残 日干煉瓦使用 6-A号窯の上に築窯 瓦専業 地下式有段登窯 長5.0m残×幅1.9m	8世紀後半 " " " " " " " "	平城宮所用瓦焼成 平城宮所用瓦焼成 6225A 法華寺、唐招提寺、西隆寺、広隆寺、 木津北遺跡、平城宮、京、長岡宮、平安京 6225L 片岡王寺 6663C 岡田池瓦窯参照 6664C 慈仁宮、木津北遺跡、平城宮、京、 長岡京
				瓦専業 地下式有段登窯 長2.2m残×幅1.5m 瓦専業 地下式平窯 長1.3m残×幅1.8m 瓦専業 地下式平窯 長1.2m残×幅1.5m 2回の補修有 瓦専業 半地下式平窯 3-A号窯の上に築窯 瓦専業 地下式有段登窯 長2.7m残×幅1.5m 改修有 瓦専業 地下式無段登窯 長4.1m残×幅1.5m 4-A号窯の上に築窯 改修有 瓦専業 地下式無段登窯 長6.1m×幅2.2m 日干煉瓦使用 瓦専業 地下式有段登窯 補修有 瓦専業 地下式平窯 長5.6m残 日干煉瓦使用 6-A号窯の上に築窯 瓦専業 地下式有段登窯 長5.0m残×幅1.9m	8世紀後半 " " " " " " " "	平城宮所用瓦焼成 平城宮所用瓦焼成 6225A 法華寺、唐招提寺、西隆寺、広隆寺、 木津北遺跡、平城宮、京、長岡宮、平安京 6225L 片岡王寺 6663C 岡田池瓦窯参照 6664C 慈仁宮、木津北遺跡、平城宮、京、 長岡京

奈良山丘陵	29	押鹿瓦窯跡	奈良市押鹿町	瓦尊窯 半地下式平窯 長4.4m×幅1.2m	8世紀後半	平城宮所用瓦焼成
		1号窯		瓦尊窯 半地下式平窯 長3.5m残×幅1.8m		6291C 平城京、長岡京、平安京
		2号窯		瓦尊窯 半地下式平窯 詳細不明 改修有		6307D 西陸寺、長岡京
		3号窯		瓦尊窯 半地下式平窯 詳細不明		6307F
		4号窯		瓦尊窯 半地下式平窯 詳細不明		6307G 平城宮、京
		5号窯		瓦尊窯 半地下式平窯 詳細不明		6307H
	30	山陵瓦窯跡	奈良市山陵町	瓦尊窯 半地下式平窯 長4.4m×幅1.2m	8世紀前半～中頃	6652A 法隆寺
		1号窯		瓦尊窯 半地下式有段登窯 長7.5m×幅2.0m 日干煉瓦使用		6663A 上津遺跡、木津北遺跡、薬師寺、 興福寺、大安寺、法隆寺、平城宮、京、 慈仁宮、長岡京
		2号窯		瓦尊窯 半地下式平窯 長6.0m×幅1.8m 1号窯灰原下検出		6663E 西大寺、法起寺、法隆寺、平城宮、 長岡京、平安京
		3号窯		瓦尊窯 地下式有段登窯 長4.5m残×幅2.0m 2号窯が上に重なる		6681A 鞍岡鹿寺、法華寺阿弥陀浄土院、 唐招提寺、西陸寺、法華寺、平城宮、京、 長岡京、平安京
						6681D 平城京、長岡京
						6681E 法隆寺、平城宮、京、長岡京

第三章 国家仏教の完成と崩壊

はじめに

天平期の国家仏教がめざしたのは、天武朝以来の天皇の宗教的権威を背景としたものではなく、超国家的な「仏教国家」の建設にむかっていた。大仏建立は、人民を知識とする国家的規模の「知識結」により実現するのである。そして、民間への仏教の普及は、在来の神祇信仰の変質と仏教の融合を促し、神は「護法善神」となり、あるいは「神身離脱」して仏法に帰依することで「神仏習合」していく。「国華」とも称せられた国分寺の造営は、本来対立すべき氏寺（私寺）の造営主体である地方豪族層の協力により進展したのである。諸国国分寺体制の創出は、ある意味で国家仏教の完成であると同時に国家仏教崩壊のはじまりでもあった。

南山城における泉津は、大量の物資の集積地であると同時に、大量に都市下層民が集住する場でもあった。つまり、都市の歪がここに救済されるべき多くの民衆を生み出したのである。特に、平城京の造営以後、恭仁京造営と架橋事業、恭仁宮から紫香楽に通じる恭仁東北の道開削、そして大仏建立に続く事業に従事する民衆は、この地に集まり仏教に救いを求めたのである。行基は、都城によって生み出された彼ら大量の労働力を結集し、結縁することで仏国土の建設に邁進する。行基創建の四十九院の一つである泉橋院（発菩薩院、隆福尼院）が現在の泉橋寺であるとする、木津川対岸の泉津（上津遺跡）や泉橋は、そのまま長岡京における山崎院、山崎津、山崎橋に対応するのである。

諸国国分寺体制が成立すると、南山城の寺院ネットワークにも変化が生じる。国単位での仏教統制の体制が国分寺を中心として成立し、中央政権の意思を介した山背国衙の影響が大きくなる。そして、この影響は、山間部に立地する境界の寺に広がる新たな寺院ネットワークを形成していくのである。特に、特別な験力を得るため、あるいは特別な儀礼（法会）を必要とする聖地（境界、湧水、岩座等）に開かれた寺院には、すでに新たな時代の仏教への期待が感じられる。国家仏教の完成を示す山背国分寺や井手寺に対し、笠置寺、普賢寺、神雄寺（馬場南遺跡）の存在意義は大きい。特に、神雄寺においては、日常的な湧水（聖水）の祀りとともに、特別な儀礼（大規模な燃燈供養、歌会（仏前唱歌）、舞楽等）の様相が明らかとなっている。

宝亀元年（770）8月、「神祇の護るところ、社稷の祐るところ」により道鏡一派が追放されると、光仁・桓武朝では次の平安新仏教へとつながる新たな仏教政策を開始する。そこで理想とされるのは行基のような山林修行者的・実践的な浄行禪師なのである。ここに最澄・空海の登場を促した背景があった。律令国家の頂点に位置する天皇の宗教的権威の一部を構成することにより成立する国家仏教は、護国仏教を实践する平安の実践仏教の登場により終焉をむかえた。仏教は、天皇の宗教的権威からようやく独立し、仏法と王法は分立するのである。

第一節 日本靈異記と山寺

はじめに

『日本国現報善惡靈異記』（『日本靈異記』）は、9世紀前葉に奈良の右京薬師寺の沙門景戒によって著されたわが国最古の説話集である。上・中・下三巻に収められた120の説話（116縁）は、すべて現報善惡の因果の理を説く仏教説話であり、唱導教化のための実例集となっている。収録する説話の時代は、雄略天皇（5世紀後半）から嵯峨天皇（9世紀前葉）までであり、うち奈良時代（8世紀代）のものが大半を占める。

『日本靈異記』に登場する人物は、天皇から乞食僧まで総勢40人を越えるが、中心的な役割をなす階層といえばやはり僧侶であり、全体の六割強の説話に登場する。彼らは民衆の信仰世界と密に交渉し、死者の霊と生者とを呪力で結ぶ仲介役でもある。そして、当然のことながら、彼らが生活（修行）し活躍する場としての寺院（堂）が説話の舞台として随所に登場する。ちなみに、『日本靈異記』に記載されている寺院は、重複を含め86ヶ寺（上巻20ヶ寺、中巻32ヶ寺、下巻34ヶ寺）の多きにおよび、約68ヶ寺には何らかの寺院（堂）名が記されている。しかし、今も法燈を伝えるような大和の大寺の他は、現在では実態不明の中小寺院がほとんどである。

これら『日本靈異記』に記載のある寺院（堂）において注目すべきは、「・・・山寺」とする寺院（堂）が意外に多いことであり、15ヶ寺を明記している。これら「山寺」は、修行僧の拠点であり、平安時代以降の修験道ならびに天台宗・真言宗のひろまりに伴って造立された所謂「山岳寺院」の先駆をなすものと考えられる。このことは、奈良時代以前の国家仏教を体現した所謂「平地性寺院」とは異なる要件ということができ、ただ単に山中に立地するという以上の意義をもつことは明らかである。

ここでは、平安時代初期の比叡山「延暦寺」や高野山「金剛峯寺」の創建以前に山中・山麓に営まれた寺院を一応「初期山岳寺院」として位置付け、発掘調査などの考古学的な調査成果の乏しいこれら寺院（跡）について、『日本靈異記』に登場する「山寺」の記述を拠所として考えてみたい。なお、山岳寺院については、考古学的にまだ未開拓の研究分野であり、山岳祭祀遺跡との区分や「山岳」という立地条件の検討など多くの問題点をはらんでいる。このことは、逆に『日本靈異記』が示している「山寺」の具体的なイメージが、発掘資料の不足を補ううえで重要になるであろう。

山寺の諸相

『日本靈異記』では、上・中・下巻を通じてその聞の説話条はおおむね年代順に配列されている。登場する山寺は、上巻に三ヶ寺、中巻に五ヶ寺、下巻に七ヶ寺であり、奈良時代（8世紀代）と思われる説話に登場するものが13ヶ寺である。また、地域的にみると、大和9ヶ寺、和泉2ヶ寺、河内・紀伊・阿波各1ヶ寺、所在地不明ではあるが近江周辺と思われる地域に1ヶ寺がある。

まず、『日本靈異記』で確実に平城遷都前とする説話に登場する山寺は、上巻第二十六縁の「法器山

寺」のみである。説話の内容は、百濟からの渡来僧多羅常が修行を重ねて不思議な靈驗を発揮した話であるが、この僧は呪術によって病人を看る「看病禪師」であり、持統天皇の庇護を受けたとしている。福山敏男氏は、この法器山寺を蘇我蝦夷ほこ梓削寺（子島寺）としている。その旧地については諸話あり、高取山西北山中の小島山観音院の地（高市郡高取町大字上小島小字法華谷）に比定する説や高取山西麓山中の観音靈場である南法華寺（壺坂寺）の地（同町清水字壺坂）とする説がある。いずれにしても、山林修行者が住むにふさわしい雰囲気をもつ。なお、壺坂寺境内からは、川原寺式、藤原宮式の軒瓦が出土している。

他はすべて平城遷都後の説話に登場する山寺であり、聖武・称徳朝のものが多く、平安時代と考えられる説話に登場するものが1ヶ寺ある。

まず、聖武朝での説話からみると、上巻三十五縁は、生駒山麓の「平群の山寺」に住む沙弥尼の精進と放生の功德に感応する仏画の靈驗譚である。時代・人名とも不明であるが、説話の配列からみて聖武朝での民衆の口承譚を素材としている。民間の布教に伴って仏事に結縁した「知識」が建てた寺であろう。

中巻第八縁は民話の蟹報恩譚に通じる放生譚であるが、「生馬の山寺」に住む行基が登場する行基関係説話となっている。生馬の山寺は、生駒山麓の尾根上にある竹林寺跡（生駒市有里）が旧地と考えられ、大和での行基の布教により結縁した知識が建てたものであろう。なお、類話の中巻第十二縁にも収められており、深長寺（法禪院）を拠点とした山背での行基の布教に対応する。有名な蟹満寺（木津川市山城町大字綺田小字浜）縁起の源流である。

中巻第二十一縁は東大寺創建の前史を飾る説話であり、絹索堂（三月堂）と執金剛神像の由来靈驗譚として有名である。舞台となる「金就寺（金鷲山寺）」では、金就優婆塞が神像の脚に縄をかけて祈願し、得度を許されている。大仏建立前の地形を勘案するならば、修行地としての様相をもつ。なお、天平17年（745）に光明皇后により造営された「香山堂」である香山廃寺（奈良市春日野町）もまた、金就寺と同様に東大寺ゆかりの「山房」と考えられる。

中巻第三十八縁の舞台となる「馬庭の山寺」は、佐保川上流の東大寺北東の山中にあったものと考えられ、『東大寺山界四至図』中に記載のある馬庭の地であるという。やはり、金就寺と同様に東大寺と関連する「山房」であろうか。説話の内容は、貧欲な僧が大毒蛇となって銭を守る転生譚である。

中巻第十三縁と中巻第三十七縁は、和泉国「血渟の山寺」と「珍努の上の山寺」が舞台となる説話である。両者とも和泉市の槇尾山中にあったと思われる寺であり、同一のものである可能性はあるが、槇尾山での山林修行の拠点として小規模な山寺が散在していたことも考えられる。前者は、吉祥天女像を祀る堂内で修行する優婆塞が天女像と交わるという感応譚であり、後者は、「仏殿」に祀られた正観音菩薩像にかかる靈驗露である。

続いて、称徳朝での説話をみると、下巻第三縁に「泊瀬の上の山寺」が登場する。これは現在の長谷寺（桜井市大字初瀬）であり、巻向山東麓の初頭川にそった谷奥に立地する。平安時代には、壺坂寺と同様、観音信仰の靈場として発展した。なお、『續日本紀』には、仁明天皇の承和14年（847）

に「長谷山寺・壺坂山寺」を「定額」（官立寺院）とした記事がある。ここでの説話は、寺の公金を借りていた大安寺の僧弁宗が、返済に窮して長谷観音に祈念すると願いがかなったという感応靈驗譚である。また、僧弁宗の返済を肩代りした船親王（淳仁天皇の兄で、帝が廃されると藤原仲麻呂の乱に連座して配流された）の参祀もあり、長谷観音信仰の早期例といえよう。ここでも、金就寺例同様、仏像に縄をかける祈願方法がとられている。

下巻第六縁は、「海部が峯」と号す吉野の山寺で修行する高僧の法華経靈驗譚である。この海部が峯の所在地については、薊岳（吉野郡東吉野村表谷）とする説がある。説話中、高僧の弟子の童は、紀伊国の海辺へ魚を買うため紀の川沿いに往還しており、途中で魚が経典に経典が魚に変化するのをみた俗は、高僧に懺悔し後に大壇越となる。

下巻第九縁は、藤原広足が急病の身を治そうと「眞木原の山寺」で修行中に死に、その後蘇生して冥土のことを語った地獄説話である。舞台となる山寺は、宇陀郡漆原町の北にある香醉山のふもとの香醉峠付近に比定されている。

下巻第五縁は、妙見菩薩に献燈する河内国の「信天原の山寺」での菩薩靈驗譚である。同国安宿郡は北辰および北斗七星を祀る妙見所の地であり、『日本後紀』の大同3年（808）9月条にみる「妙見寺」とする説がある。説話中では、信天原の山寺のほか「市の辺の井上寺」が対として記されており、修行のための山寺に対して村の中に本拠の里寺があったのであろうか。両寺とも「平群の山寺」同様、知識たちにより発願・維持された寺である。

下巻第八縁は、瑜伽論百卷書写を発願した近江国の富人が、弥勒菩薩の出現によって初志を貫徹する靈驗譚である。寺名・所在など不明であるが、「ひとつの山寺」を拠点として俗人（優婆塞）が修行する。

道鏡事件後の光仁朝以降には畿内の山寺にかかる説話が減少し、紀伊・阿波国で各1ヶ寺をみることができる。

下巻第十七縁は、紀伊国で村人の造った「弥氣の山の室堂」が舞台となり、弥勒菩薩の脇士で未完の二体が知識により完成に至る脇士像の縁起譚である。この室堂の所在については、和歌山市の旧那賀郡小倉村とする説があり、説話文中からは街道に面した峠に立地していることがわかる。また、この山寺には仏堂・鐘堂・僧房などの存在が読み取れ、大和の官寺元興寺の僧の出講をみる。

下巻第二十縁は、阿波国の「苑山寺」で法華経の写経をする女人を誹謗した男が、仏罰をうける悪報譚である。この山寺の所在については、麻植郡と名方郡の境にある高越山付近とする説がある。

最後に、上巻第四縁に記載のある大和の「高宮山寺」は、聖徳太子に係る説話の類話の舞台として後段に登場するが、異本では下巻末に付すものがあり、説話の年代としては延暦年間以後に下るものと考えられる。しかし、現在、金剛山東斜面中腹に礎石を残す「高宮廃寺」（御所市鴨神）がこの高宮山寺と考えられており、採集された瓦の年代からは平城遷都前の寺跡とすることができる。説話は僧願覚の変化譚であり、百済の禪師円勢や優婆塞が登場する。「北の房」ほか複数の僧房のあったことがわかり、願覚の日常の行動からは寺が里からさほど遠くない位置に立地していたようである。

以上、『日本書紀』記載の「・・・山寺（堂）」を概観したが、後に大寺官寺として発展する大和の「金就寺（東大寺）」「泊瀬の上の山寺（長谷寺）」以外は現在すべて廃寺となっており、旧地すら比定できないものが多い。その規模は草庵程度のものやわずかな堂舎をもつ比較的小規模なものであり、今日のわれわれがひなびた「山寺」にもつ素朴なイメージに近いものであろう。その立地も、山中という俗界を離れた聖域的な雰囲気をもつとはいえ、比較的「里」に近く、俗人（里人）との接触が頻繁に行なわれている。このことは、『日本書紀』に登場する山寺が修行の場であると同時に民間布教（唱導）の場でもあったことを示している。

登場人物についてみると、これら山寺がいずれも修行者の集散する拠点となっており、官許を得ないで私に僧尼の体をなす私（自）度僧の活躍する場でもあったことがわかる。この自度僧には、流浪の乞食僧、俗生活の沙弥、私寺などで修行する沙弥（尼）、信心生活をおくる優婆塞・優婆夷などが含まれ、その裾野は広い。しかも、その周辺では知識が結成され、壇越の登場もみる。信仰に根ざして結縁する人々の支えがあったのである。

まとめ

通常、7世紀末から9世紀にかけてのわが国の仏教のあり方は、国家仏教と呼ばれる。これは、鎮護国家と王権維持を目的とした呪術の確立をめざすものであり、律令制に基づく国家の仏教に対する管理・統制が行なわれた。その結果、僧尼の活動は国家的呪術の範囲に限定されることとなり、その資格・地位も国家が認定し保証することとなる。

『日本書紀』に登場する「・・・山寺」の多くは、この鎮護国家思想に基づく国家仏教からは確実に離れた属性をもつ。

その第一は、国家仏教が律令支配の安全のためだけの国家的呪術であるのに対して、その救済の対象から除外された民衆による「民衆の寺院」がある点である。「弥気（やけ）の山の室堂」は村人たちが建てた道場であり、「平群（ひらぐむ）の山寺」「信天原（の）の山寺」には村（里）人の知識が存在する。また、「生馬（なま）の山寺」は行基に結縁する知識の建てたものであろう。なお、行基のまわりにはその徳を慕い、行動をともにする自度僧の群れがあった。

一般民衆への仏教の普及は、当然、彼らの現世利益を満足させるものであり、地域に密着した信仰の場が必要となる。そして、その場所は彼らが以前からもっていた素朴な山岳信仰と結びつく聖域的な地が選ばれた。そこでは、国家仏教とは無縁の自度僧ではあっても、受け入れる素地があったのである。当然、布教の場としても適地であった。

国家仏教から離れた属性のその第二は、山林修行にかかる側面である。大宝2年（702）に施行された『大宝令』の「僧尼令」では山林修行者の厳しい規制を設けているが、それ以後、山林修行者らを含む遊行の徒を禁王する詔がしばしば発せられており、逆に山林修行者らの旺盛な活躍を伝える。

『日本書紀』には、修行僧たちの山林修行地として、大和の吉野（上巻第二十八・三十一縁、中巻第二十六縁、下巻第一縁後段など）・葛城（上巻第四・十八・二十八縁）や紀伊の熊野（下巻第一縁前

段)、伊豫の石鎚山(下巻三十九縁後段)の記載があり、このことを裏付ける。

しかし、意外にも『日本霊異記』中の「・・・山寺」から山林修行の実態をつかもうとすると困難が生じる。わずかに「法器山寺」「海部が峯寺」に山林修行の存在をみるのみであり、「高宮山寺」「金就山寺」にその雰囲気を感じられようか。他の「山寺」については不明といわざるをえない。

一般に、山岳寺院とは「山林修行の場」と考えられている。この狭義の命題に従うなら『日本霊異記』中の「山寺」からは、「・・・山寺」すなわち「山岳寺院」とする図式を無批判に受け入れることはできない。むしろ、そこでは、「民間仏教の場」として「自度僧の寺」とするにふさわしい面が強調されている。いずれにしろ、奈良時代以前における「山寺」の存在は、国家仏教の対極に位置付けられるものであろう。

なお、上巻第五縁は、大部屋栖古の伝記とその功績をたたえる顕彰譚であるが、その中に「比蘇寺」の仏像縁起をいれている。この縁起はすでに『日本書紀』欽明天皇14年条(553)にみえ、「吉野寺」と記す郡名寺院であることがわかり、山林修行の場として著名である。しかし、ここでは、ことさらに「・・・山寺」と記す寺の存在に固執したため、検討の対象外とした。

	地域	名 称	巻・縁	所 在	説話年代	主要登場人物	備 考
1	大和	高宮山寺 (高宮庵寺)	上・4 (後)	「基木の上の部高宮」 (御所市鴨神)	(8世紀 末?)	百濟の禪師・円 勢、願覚 弟子の役婆塞	記載建物；「北の房」、立地；金剛山東斜面中腹。 現状；礎石残・瓦散布、「和州高宮寺沙門願覚伝」「本 朝高僧伝」巻75に引用
2	〃	法器山寺	上・26	「高市の郡の部内」 (高市郡高取町)	7 C末 (持統朝)	百濟の禪師・多 羅常	立地；高取山中、忍病禪師、蘇我蝦夷の粹削寺・子 島寺、小島山観音院や南法華寺（壺坂寺）とする説 あり、「多常伝」「本朝高僧伝」巻46に引用
3	〃	平群の山寺	上・35	「平群」 (生駒市三郷町)	(8 C前)	河内国の沙彌 尼、知識	立地；生駒山麓、感応靈験譚、「今昔」12—17に引 用
4	〃	生馬の山寺	中・8	「生馬」 (生駒市有里)	8 C前 (聖武朝)	置染臣綱女、行 基(蛇、蝦、蟹)	立地；生駒山麓、報恩放生譚、竹林寺跡、付近に行 基墓あり、「盤異記」中—12に類話、「三宝絵詞」中 —13に引用
5	〃	金就寺(山寺)	中・21	「今東大寺となる」 (東大寺三月堂)	8 C前 (聖武朝)	金就役婆塞 (執金剛神像)	立地；春日山麓、物語中の執金剛神像は東大寺綱索 堂(三月堂)のもの、靈験譚、「東大寺要録」巻2 ・「扶桑略記」聖武天皇下条・「今昔」17—49他に 引用
6	〃	馬庭の山寺	中・38	「諸案の京の馬庭」 (奈良市佐保川上流)	8 C前 (聖武朝)	僧、弟子	記載建物；「室(僧房)」、転生譚、立地；東大寺北 東の山中、「今昔」20—24に引用
7	〃	泊瀬の上の山寺 (長谷寺)	下・3	「泊瀬の上」 (接井市初瀬)	8 C後 (称徳朝)	大安寺の僧・弁 宗、船親王(十 一面観音菩薩)	立地；初瀬川上流の谷間の奥、長谷観音信仰の早期 例、感応靈験譚、「今昔」16—27・「弁宗伝」「本朝 高僧伝」巻75他に引用
8	〃	海部が峯寺 (山寺)	下・6	吉野の山にひとつの山寺 (吉野郡東吉野村?)	8 C後 (称徳朝)	高僧、弟子(童 子)、檀越	立地；吉野山中、大和国一紀伊国間を紀の川沿いに 往復、法華経靈験譚、「三宝絵詞」中—16・「今昔」 12—27に引用、「法華略記」巻上—10・「元亨釈書」 巻12・「本朝高僧伝」巻53は高僧の名を「広思」と する
9	〃	真木原の山寺	下・9	「真木原の郡其木原」 (宇陀郡榛原町の北)	8 C後 (称徳朝) 神護景雲2	藤原広足、亡妻、 閻羅王(地藏菩 薩)	立地；笠置山地、地獄説話、「宇治拾遺物語」83(巻 6—1)では内容は同じであるが藤原広足が広貴と なる
10	和泉	血澤の山寺	中・13	「泉の郡血澤」 (和泉市横尾山)	8 C前 (聖武朝)	信濃國の役婆 塞、弟子、里人 (吉祥天女像)	立地；横尾山麓、感応譚、「今昔」17—45に引用
11	〃	珍勢の上の山寺	中・37	「泉の郡の部内珍勢の上」 (和泉市横尾山)	8 C前 (聖武朝)	(正観自在菩薩 像)	11の「血澤の山寺」に同じか、記載建物；「仏殿」、 観音靈験譚、「今昔」16—12に引用
12	河内	信天原の山寺	下・5	「安宿の郡の部内信天原」 (南河内郡東部)	8 C後 (称徳朝)	室主、弟子、知 識(妙見菩薩)	記載建物；「室(僧房)」、「市の辺の井上の寺」と の往来、妙見菩薩の靈験譚
13	紀伊	弥氣の山の室堂 (慈氏禪定堂)	下・17	「那賀の郡弥氣の山」 (和歌山市の旧小倉村三毛 付近)	8 C後 (光仁朝) 宝龜2	沙彌行行、元興 寺の沙門豊慶、 知識 (弥勒菩薩の同 脇士)	記載建物；「堂」「鐘堂」「坊」「室」、脇士像の縁起 譚
14	阿波	苑山寺	下・20	「麻殖の郡の苑山」 (麻植郡西境の高越山?)	8 C後 (光仁朝)	忌部多夜須子、 忌部連板屋	現報譚、「今昔」14—27に引用
15	〃	山寺	下・8	「ひとつの山寺」 (不 明)	8 C後 (称徳朝) 天平神護2	近江国の富人 (弥勒菩薩)	弥勒菩薩の靈験利益譚、「今昔」17—34に引用

1. 表中の読みは、板橋倫行『日本盤異記』(角川文庫)1957により、寺(堂)として記載されているものに限り抽出した。
2. 他にも寺(堂)の存在が予想されるが、修行地の記載のみのものなどについては割愛した。
3. 一つの「縁」中に二つの説話を収めたものについては、該当する説話を前・後として区別した。
4. 『今昔物語集』への引用については、例(今昔物語集巻第12第1話—『今昔』12—1)により略記した。他も同様である。

№	遺跡名	所在地	立地	時期	概要	参考文献	備考
1	竹林寺跡(生馬山房?)	生駒市有原字文殊山	生駒山麓(尾根上)標高約120m	奈良時代・後	瓦葺敷布、付近に行基基有り	福山敏男『奈良朝寺院の研究』1948	生馬の山寺? (『重興記』中-8)
2	通山院寺	奈良市三雄町	生駒山麓(尾根上)標高約100m	奈良時代・前	瓦葺敷布	『奈良町史』1954	
3	靈山寺	奈良市中山	生駒山麓(尾根上)標高約100m	奈良時代・後	塔、瓦葺	奈良県教委『奈良県遺跡地図』第1分冊、1984	行基創建?
4	通分院寺	奈良市中山字通分	生駒山麓(谷間)標高約140m	奈良時代・前	瓦葺、散石、瓦葺瓦片	菅谷文則『奈良市大和郡通分の寺院遺跡』(『青陵』114、1971)	行基創建(隆福院)?
5	海寺	奈良市大和町	生駒山麓(尾根上)標高約155m	奈良時代・後	礎石、礎石仏、瓦葺	奈良県教委『奈良県遺跡地図』第1分冊、1984	
6	松尾山寺	大和郡山田町字高尾ほか	標高約270m	奈良時代・後	瓦葺	奈良県教委『重要文化財松尾山寺本堂修理工事報告書』1995	『關日本記』に延暦元年(787)の記載
7	阿陀山寺跡	奈良市秋篠町阿陀谷	生駒山麓(尾根上)標高約119m	奈良時代・後	建物遺構、瓦葺、礎石、土師器、須恵器	東大寺『阿陀山寺の調査』(『青陵』119、1970)	『西大寺院記資料集』に記載
8	般若寺	奈良市般若寺町般若寺	春日山西麓	奈良時代・前	瓦葺、十三重石塔	福山敏男『般若寺の創立に関する疑問』(『歴史地理』102-5、1993)	『正倉院文書』に天平14年(742)の記載
9	馬鹿山寺	奈良市	春日山麓(佐保川上流)東大寺北東山中	奈良時代・後	『東大寺山界西図』中に「馬鹿」の記載有り。東大寺山房?	田中重久『日本書紀に見える寺院の研究』(『史学』180-182、1947)	(『重興記』中-38)
10	金鼓寺(金鼓山寺)	奈良市御所町	春日山麓(中腹)標高約130m	奈良時代・後	東大寺起雲殿跡、羅漢堂(三月堂)と執金剛神像の由来の時、東大寺山房?	福山敏男『奈良朝寺院の研究』1948	(『重興記』中-21)
11	大伴寺跡	奈良市川上町	若草山西麓標高約200m	奈良時代・後	大安宮呂御遺跡?	福山敏男『奈良朝寺院の研究』1948	『東大寺實録』に記載
12	白鳥寺	奈良市白鳥寺町字白鳥寺	春日山麓標高約170m	奈良時代・後	大安寺の僧侶の開いた岩瀬干坊の一	前田真知雄『大和における飛鳥奈良時代の寺院の分布について』(『遺跡考古学研究所論集』第9、1988)	『遺跡考古学』
13	石瀬寺跡	奈良市白鳥寺町字カラシバ	春日山麓標高約150m	奈良時代・後	瓦葺・岩瀬干坊	中村孝寿『大和石瀬院に関する資料』(『大和』14-12、1937)	『三宅修撰』に記載
14	香山院寺(香山院跡)	奈良市春日野町	春日山中標高約450m	奈良時代・後 天平17年(745)創建	瓦葺、礎石 『東大寺山界西図』中に「香山」の記載有り。東大寺山房	毛利久『奈良春日山中の香山寺址について』(『考古学雑誌』32-7、1942)	光明皇后御願『続日本記』『正倉院文書』付近に春日山石置仏、地獄谷石置仏
15	智多林院寺	奈良市智多林町	春日山中(山腹)標高約450m	奈良時代・後	礎石、瓦葺、須恵器、土師器、東大寺山房?	奈良県教委『大安宮遺蹟』(『奈良県文化財報告』143、1981)	付近に香山堂跡
16	新廣師寺	奈良市高畑町	三疊山麓標高約120m	奈良時代・後	金堂、瓦葺、聖武天皇南無阿弥陀仏のため天平19年(747)建立	福山敏男『新廣師寺と香山寺』(『史学雑誌』143-2、1932)	
17	古市院寺	奈良市古市町高井戸	台地上標高約100m	飛鳥時代	四天王寺式(塔・金堂・講堂・中門・南門)、聖徳、瓦葺、羅漢、廣三劫ほか	中村孝寿『古市院寺の調査』(『奈良県文化財報告』143、1980)	
18	横井院寺	奈良市横井町下口	谷間標高約120m	飛鳥時代	四天王寺式? (塔・金堂)、瓦葺、金剛仏、須恵器、須恵瓦	石田茂洋『飛鳥時代寺院址の研究』1936	
19	下口院寺	奈良市山町下口	谷間標高約120m	奈良時代・前	塔、金堂、内堂、瓦葺、石造相輪、瓦葺ほか	横井町下口院寺出土石造相輪等の調査(『史前調査報告』第104、1929)	
20	毛原院寺	山辺郡山田村毛原	標高約270m	奈良時代・後	高師寺式配置? (金堂・中門)、瓦葺	西崎隆之助『毛原院寺跡』(『史前調査報告』第54、1917)	史跡
21	神野寺	山辺郡山田村	山野山麓標高約200m	飛鳥時代	飛鳥仏、瓦葺、三野陶器	前田真知雄『大和における飛鳥奈良時代の寺院の分布について』(『遺跡考古学研究所論集』第9、1988)	
22	竹原山寺跡	山辺郡御所町南之字堂ヶ平	尾根接部標高約870m	奈良時代	遺基	福山敏男『奈良朝寺院の研究』1948	『海風館』記載
23	真木原山寺	宇陀郡橋本町	香林山の東、香林寺付近標高約850m	奈良時代・後	藤原広成、地獄殿跡	福山敏男『奈良朝寺院の研究』1948	『重興記』下一0
24	五寺跡	保井町五	龍王山・春日山麓標高約480m	奈良時代・後	安山三層所	福山敏男『奈良朝寺院の研究』1948	『造大寺院實録』に記載
25	長谷寺(長谷山寺)	保井町初瀬	春日山麓、初瀬川上流谷間標高約200m	奈良時代・後	銅板法華説経図ほか、観音堂遺構、神護景雲2年(768)持徳天皇行幸奉迎14年(847)「定観」となる	福山敏男『長谷寺の千仏多宝仏塔銅板』(『日本建築史研究』続編、1971)	初瀬の上の山寺(『重興記』下一3)
26	大神寺跡	橿原市馬場字平井	三疊山麓(尾根上)標高約100m	奈良時代・後	瓦葺	福山敏男『奈良朝寺院の研究』1948	『延暦傳』に記載
27	慈恩寺	保井町慈恩寺北山	三疊山麓(尾根上)標高約100m	奈良時代・前	瓦葺	保井町『保井町史』	
28	宣生寺(宣生山寺)	宇陀郡宣生村大字宣生	春日山中標高約500m	奈良時代・後	開闢寺僧賢願により創建	福山敏男『宣生寺の創立年代』(『日本書紀の研究』1943)	『興隆寺別院宣生山寺』
29	加守院寺(電書寺)南遺跡・北遺跡	北葛城郡御所町加守トナニ字大林ほか	二上山麓(台地上)標高約125m	奈良時代・前	六角堂(長六角形)、瓦葺ほか 付近で金剛寺遺構出土	保井秀太郎『大和上代寺院志』1932 近江島司『新編東大寺研究』1932 『考古学雑誌』55-4、1970 『考古学雑誌』55-4、1970	加守氏の氏寺? 大津皇子の氏寺? 大和五ヶ寺の一角
30	石光寺	北葛城郡御所町染野	二上山麓(台地上)標高約100m	奈良時代・前	塔心礎、祭壇堂、瓦葺、弥生石仏、聖徳、土師器、須恵器ほか	保井秀太郎『大和上代寺院志』1932 『考古学雑誌』55-4、1970	染野氏の氏寺?
31	当麻寺	北葛城郡御所町当麻寺田	二上山麓(台地上)標高約100m	奈良時代・前	高師寺式配置(東西塔)、瓦葺、大南堂、弥生石仏、弥生瓦	保井秀太郎『大和上代寺院志』1932 福山敏男『当麻寺の歴史』(『山形県史』45、1961)	用命天皇御願 当麻氏の氏寺?
32	慈光寺跡	北葛城郡新庄町富吹字慈光寺ほか	葛城山東麓(台地上)標高約120m	奈良時代・前	近接して2寺院(東御堂は高師寺式、寺院の移建?)、瓦葺、土師器、須恵器	保井秀太郎『大和上代寺院志』1932 近江島司『新編東大寺研究』1932 『考古学雑誌』55-4、1970	富吹神社境内付近 忍満氏の氏寺?
33	成所山寺	御所市成所山	葛城山麓(尾根上)標高約870m	奈良時代・前	石造、建物遺構、瓦葺、土師器、瓦葺	奈良県『奈良・古墳の古瓦』1970 京都市『瓦と埴輪』1974	
34	朝雲院寺	御所市朝雲寺字堂	金剛山麓(台地上)標高約240m	飛鳥時代・前 奈良時代・前	金堂、回廊、瓦葺、瓦葺、瓦葺、礎石	保井秀太郎『大和上代寺院志』1932 『考古学雑誌』55-4、1970	
35	高富院寺跡	御所市幡神1867ほか	金剛山麓(中腹)標高約550m	奈良時代・前	塔礎、金堂跡、土壇、瓦葺	奈良県『葛城の古墳と古代寺院』1981	高富山寺? (『重興記』下一4後)
36	武吉寺跡	橿原市成井町	春日山西南麓標高約100m	奈良時代・前	瓦葺	保井秀太郎『大和上代寺院志』1932 近江島司『新編東大寺研究』1932 『考古学雑誌』55-4、1970	寺名は「春日山寺」の転訛?

No.	遺跡名	所在地	立地	時期	概要	参考文献	備考
37	青木庵寺(青木千坊)	桜井市橋本字地蔵谷	尾根上標高約100m	奈良時代・前	礎瓦、土師鉢、須恵器	水木実太郎『青木寺発掘の古瓦』 『史蹟調査報告』第2回 1914 近江島司 『新編唐文軒平瓦の研究』 『考古学雑誌』55-4 1970	
38	高田庵寺	桜井市高田時寺谷	谷間標高約120m	奈良時代・前	礎瓦	保井芳太郎『大和上代寺院志』1932 近江島司 『新編唐文軒平瓦の研究』 『考古学雑誌』55-4 1970	『続日本紀』天平宝字7年(763)に記載 高田氏の氏寺?
39	東原寺跡	桜井市東原字西出内	丘陵緩傾上標高約280m	奈良時代・前	塔跡、金堂跡、礎瓦、塔伏鉢(持統8年(694)起工)	上田三平『奈良県に於ける指定史跡』2(『史蹟調査報告』4 1927) 保井芳太郎『大和上代寺院志』1932 奈良県教育委員会『奈良県遺跡地図』第2版 1984 『新編唐文軒平瓦の研究』(竹林寺)と その遺構・遺物 『仏教史学雑誌』1977	史跡 『三重県伏鉢銘文』中臣大嶋免胤
40	小附庵寺	李陀郡大字陀町小附	谷間標高約360m	奈良時代・前	礎瓦	保井芳太郎『大和上代寺院志』1932 近江島司 『新編唐文軒平瓦の研究』 『考古学雑誌』55-4 1970 京都府『瓦と埴輪』1974	
41	真原寺	高市郡明日香村真原	尾根上標高約180m	奈良時代・前	礎石、墓壇化礎石、礎瓦	保井芳太郎『大和上代寺院志』1932 近江島司 『新編唐文軒平瓦の研究』 『考古学雑誌』55-4 1970 京都府『瓦と埴輪』1974	大和五ヶ庵寺の一つ
42	岡寺跡(竜蔵寺)	高市郡明日香村岡	谷間標高約170m	奈良時代・前	土壇、礎石、天人埴、鳳凰埴、礎瓦	保井芳太郎『大和上代寺院志』1932 近江島司 『新編唐文軒平瓦の研究』 『考古学雑誌』55-4 1970 京都府『瓦と埴輪』1974	大和五ヶ庵寺の一つ
43	妙楽寺跡	桜井市多武峰	多武峰(山腹)標高約450m	奈良時代・後	十三重石塔、ほか 付近に藤原鎌足墓あり	天沼俊一『法山神社十三重塔』 『寛文美術』1920	法山神社
44	小島寺跡(子嶋山寺)	高市郡高取町上子島	高取山麓標高約300m	奈良時代・前	礎石	福山敏男『奈良朝寺院の研究』1948 漢日出典 『奈良朝山岳寺院の真相』 『続日本史』2 1988	法勝山寺? 『聖武記』上-26
45	南庄墓寺(豊坂寺、豊坂山寺)	高市郡高取町豊坂	高取山麓標高約300m	奈良時代・前	八角堂、礼堂跡、礎瓦、埴、土師鉢、須恵器、越前鉢ほか 元興寺僧井高朝建、親善建 元正天皇御廟寺 承和14年(847)『定額』となる	越前鉢二『重要文化財南法華寺 礼堂修理工事報告書』1985 保井芳太郎『大和上代寺院志』1932 田中重久『日本書紀に見る 寺院の研究』(『史蹟と美術』 第180-182 1947) 福山敏男『奈良朝寺院の研究』1948	大宝3年(703)創建 『南法華寺古老伝』 法勝山寺? 『聖武記』上-26
46	龍門寺跡	吉野郡吉野町山口	龍門山麓標高約400m	奈良時代・前	塔跡、金堂跡、礎瓦	浅野清治『龍門寺の調査』(『奈良 県総合文化調査報告書』13 1954 奈良県博『高城の古蹟と古代寺 院』1981	大和五ヶ庵寺の一つ 『三代実録』元慶3年(879) 清和法皇行幸
47	駒嶋庵寺(安楽寺)	李陀郡安楽町駒嶋字 トグクボ	李陀山丘陵上標高約400m	奈良時代・前	礎石、礎瓦、礎像、埴、土師鉢	奥田野町・福西大学考古学研究所ほか 『駒嶋庵寺発掘調査報告』1971	
48	比叡寺(比叡寺) (吉野寺、現光寺、 比叡寺)	吉野郡大庭町比叡	高取山(山腹)標 高約200m	飛鳥時代- 平安時代	東西両塔跡(素師寺?)、礎瓦、大 安寺・元興寺・岡寺僧たちの山岳 修業の拠点、『自然僧堂』	上田三平『奈良県に於ける指定史 跡』2(『史蹟調査報告』4 1928) 岡田善雄『古代山岳における山岳修 業とその意義』(『南都仏教』4 1959) 近江島司『歴につづられた山岳寺院』 『古代の寺を巡る』(市原山考 古学研究会 1991) 福山敏男『奈良朝寺院の研究』1948	史跡 『日本書紀』欽明14年(563) に「吉野寺」と記す寺院 『聖武記』上-6に「比 叡寺」
49	栄山寺跡	五條市小島町	河岸段丘上標高約120m	奈良時代・前	八角堂、庫物跡、石壇、礎瓦、三野 毘盧	福山敏男『奈良朝寺院の研究』1948	史跡・栄山寺行幸跡 『南法華寺古老伝』
50	金峰山寺	吉野郡天川村洞川	吉野山麓標高約200m	奈良時代・後	修験道の聖地、龍王権現、役行者、 延の岩屋敷、金仏、藤原道長の埋蔵 ほか	奈良県『山岳信仰の遺宝』 (同館特別展図録)1985	金峰山は『聖武記』 上-28、中-26、下-1 に記載
51	海部墓寺	吉野郡東吉野村海部?	前山中央	奈良時代・後	北ノ山治いに住蓮、知模寺?	福山敏男『奈良朝寺院の研究』1948	『聖武記』下-8に記載

第73図 奈良県内古代山寺一覧

No.	遺跡名	所在地	立地	時期	概要	参考文献	備考
1	小原山開法寺跡	〔竹野郡〕 弥生町宮沢小原	山腹	奈良?	和銅3年(708)遷怒開基とし、近く に伝言年間創建の生蓮寺跡が食 料堂子屋に現る	南西山腹にあり詳細不明	
2	成相寺	〔富津市〕 成相寺白山後ほか	山腹	奈良?平安 中世	寺伝によると慶雲年間(高麗)に伝言 を安置した文武天皇御廟所とする寺 院で、天ノ橋立を見下ろす崖脚地に 堂宇がある	成相山の山腹にあり西国三十三 所の一つ 詳細不明	
3	普甲寺跡	大字寺尾敷	山腹	平安	門跡・礎石のほか瓦などが出土、普 賢菩薩を本尊とする寺院で、北の高 野山とも呼ぶ	普甲山にあり、詳細は不明	
4	大慈山寺(峰定寺)	〔京都市〕 左京区花背原地町	山腹～谷筋	平安～中世	久壽元年(1164)に親安西念が創建 と伝える貞和6年(1350)再建の経 施あり本堂が現存	大慈山南中腹、京都府環境保全 地区、詳細不明	
5	駿馬寺	左京区鞍馬末町	山腹	平安	延暦18年(798)藤原伊勢人の創建 と伝え、境内には平安後期からの鞍馬 社がある	鞍馬山の南中腹にあり、平安時 代の遺構は不明	
6	補陀庵寺跡	左京区神原町	山腹	平安	天台座立が天慶8年(945)に創建 山腹に平地あり礎石も残る。平安 期遺物が出土。『平安物語』(大原御 尊)に寺院があり	クダラコージ山の山腹。 堀川敏夫『京都神原補陀庵寺』 『古代文化』42-3	
7	江文寺跡	左京区大原野村町	山腹	平安?	山腹の摩平神社境内付近とされてい る。土師鉢・須恵器・埴輪陶器など 平安時代遺物が出土。『後拾遺生 伝』大治5年に寺院名あり	南向き山腹の湧水する場所に神 社が存在し、その南西山腹に平 地が点在。 『第47・48とれんち』	
8	比叡山寺(延暦寺)	大津市坂本・京都市 左京区	山腹～谷筋	奈良末～平安	養隆が延暦年間(800)に創建、後大和 (東塔・西塔・横川)に発展、多く の高僧を輩出する。鎌田信長の焼討 で壊滅し、後に再興される	史跡・天然記念物指定。比叡山 三千坊・三千十六谷などと呼ば が大伽藍	
9	如意寺跡	左京区鷹ヶ谷如意ヶ 敷町ほか	山腹～山筋	平安～中世	平安京に最も近い山岳寺院。106前 半頃創建か、山中に遺構が多数点在 し遺物も多い	『古代文化』43-6号ほか	
10	安祥寺上寺跡	山科区安祥寺山園有林	山腹～尾根	平安	960頃、仁明天皇女御藤原順子が入 唐僧智賢を開基として創建し、礼 仏堂・五大堂・僧坊・宝幢(僧堂支 柱)などがあつた。また山下にも下 寺が存在した	安祥寺山の中腹尾根にあって基 壇跡が良好に残る。八寶蓮(安 祥寺上寺跡)『京都社寺調査報 告』11『安祥寺伽藍縁起資料集』 裏文が残る	近年礎石多数発見。五大 堂は3×4間、東・西僧 房は2×6間と判明
11	清水山寺(清水寺)	東山区清水	山腹	奈良末～平安	平安京を東から見下ろす京都東山の 山腹斜面にあり、平安京遷都頃に坂 上田村麻呂と藤原氏が協力して創建 したとするが、詳細は現在のところ不詳 一休天竺の時に依伯公行が開創し、 長徳2年(990)に勧願所となる。大 治4年(1129)に焼亡し、のちに再 建。寺域東北五町・南北六町	清水音羽山腹にあり、西国三十三 所。 清水術『奈良時代』 『続日本史』ほか 清水音羽山山腹にあり、六条・ 高倉天皇御廟背後の山腹に平地 多数存在	
12	清閑山寺(清閑寺)	東山区清閑寺坂ノ中山 町	山腹～谷	平安	平安中期以後の観音信仰の聖地と考 えられるが詳細は不明	山科音羽山接吻の牛尾山の山腹 にあり	
13	法蔵寺	山科区小山長尾	山腹	平安?			

地	遺跡名	所在地	立地	時期	概要	参考文献	備考
14	上醍醐寺(醍醐寺)	伏見区醍醐醍醐山	山頂～山腹谷	平安	聖王が貞観16年(874)に造営を始めたとし、山中に醍醐水が湧き、加賀が多敷点に在る。平安後期(1121)建立の源氏堂現存	醍醐山にあり、上加賀(醍醐山腹)に坊跡が多数残る。(史跡)江戸期も絵図あり	
15	高山寺	左京区梅ヶ畑梅畑町	山腹～谷あい	平安～中世	第13天台座主草堂が貞観18年(877)の度賀尾寺に入山とあり。その後、建永元年(1308)には明恵上人が再興し、堂宇を建立	峰山の南麓、清滝川の溪谷を見下ろす山腹にある詳細は不明(史跡)	
16	高辻山寺(神護寺)	石京区梅ヶ畑高辻町	山腹谷地	平安～中世	和氣氏の氏寺河内(神護寺)を移して創建。後に空海が入寺、後を継いだ真言が加賀造営。文宣上人再興	境内からは平安時代の瓦・土器出土(絵図が残る)	
17	白雲寺(愛宕神社) 月輪寺・聖心寺跡	左京区嵯峨清滝	山頂～山腹	平安?	愛宕神社にあったとする寺院、明治期廃仏毀釈で消失。月輪寺には平安期の仏像が残る。聖心寺跡近年発見	愛宕山の山頂から清滝付近で詳細は不明(『佛教藝術』269号)	
18	水尾山寺	石京区水尾宮ノ脇町	山腹	平安	円覚寺の前身寺院とする清和天皇ゆかりの寺で『三代実録』元慶4年(880)に記載あり	調査は行われておらず詳細は不明	
19	善峰寺	西京区大原野小塩町	山腹	平安	長元3年(1030)僧録兼の創建と伝える。『山崎記』治承3年(1179)4月に記載あり	西国三十三所、天然記念物「迦葉松」。詳細不明	
20	神奈比寺跡	〔相模郡〕田辺町新	山頂～山腹	平安	平安京南方の霊山として後醍醐にために創建されたと考えられている。『今昔物語』に逸話あり。谷筋に平地が多数存在する。8世紀の灰地層や瓦が出土している。	甘南備山にあり、高橋久二『山城編纂郡神奈比寺跡について』同上『京都考古』61号等	
21	観音寺康寺	宇治田原町末奥新田	谷間の平地	平安?	古蹟(観音谷)に建物が埋かっている。須恵器が出土しており平安時代か?	久御山の東麓根にあり詳細不明	
22	蓮王教寺跡	宇治田原町奥山田	山頂	奈良?	標高約480mの尾根頂部にある。端田信長によって比叡山打打に伴い破壊。伝言良時代創建	『宇治田原町史』	
23	光明山寺跡	〔相模郡〕山城町神田	山間部谷あい	平安	平安時代中期に賀朝僧正が創建し、後醍醐に再興された。1892～3年に発掘が行われ多数の遺構や遺物が検出されトイシ遺構も確認された。	中島正『京都考古』68号ほか	本書121ページに報告あり
24	金胎寺	和東町原山	山腹	奈良?平安	7世紀末頃に役小角の創建との伝承あり。付近に峰崎山坊跡や五ノ瀬跡など坊跡とみられる遺跡も点在する。広範囲な山成基寺院	賀崎山にあり、修験道場として名高い。史跡	
25	海住山寺	加茂町例碑	山腹	平安	聖武天皇が良弁を勧誘に創建と伝えられ、保元3年(1373)に火災。130に再興される	谷仁堂を見下ろす北背後の山腹にあり。詳細不明	
26	笠置山寺(笠置寺)	笠置町	山腹	奈良～平安	天武白鳳11年(682)天武天皇の勅で創建と伝え建仁に中興。瓦が出土。	史跡・名勝。中世が主体の寺院	
27	鹿山寺跡	木津町鹿背山古寺	谷斜面地	奈良	西向き斜面地にあり、平成富武軒平瓦出土	高橋久二『山城の古瓦』京都府山城郷土資料館	
28	甘南備寺跡	鎌倉郡田辺町新甘南備山	甘南備山(山頂～山腹) 標高約200m	平安時代・前	平安京の真南。瓦瓦、灰釉陶器	高橋久二『平安時代と甘南備寺』(『新説』1991)	『今昔物語』巻11～25
29	善賢寺跡	鎌倉郡田部町善賢寺下大門	丘陵上標高約100m	飛鳥時代	塚跡(瓦積基壇)、瓦瓦 奈良仏	高橋久二『鎌倉郡田辺町甘南備寺跡の出土遺物』(『京大考古』1991)	
30	金胎寺	相模郡和東町大字原山小字峰崎山	峰崎山(山頂～山腹) 標高約800m	奈良時代・後	『北山上』修験道の霊地、坊跡跡、神堂寺と対し、良弁、仁義、道隆、神龍山、北山跡、珠、東大寺の山頂的存在、良弁、聖忠、銅刻形石刻(弥生時代)	京都府教委『相模郡誌』1926	史跡
31	笠置寺(笠置山寺)	相模郡笠置町大字笠置小字笠置山ほか	笠置山標高約270m	奈良時代・後	門跡、坊跡、トイシ状石組遺構、瓦瓦、土器群、須恵器ほか。東大寺の別所存在、永観、安観、以仁王、光明山寺鳥居前で死	佐藤虎雄『笠置山の史跡と名勝』(『京都府史名勝名蹟』11 1930) 藤野三郎『京都府笠置山』(『史蹟調査報告』7 1939)	史跡・名勝 『今昔物語』巻11～30、14～1
32	光明山寺跡	相模郡山城町大字神田小字光明山ほか	三上山西麓(谷間)標高約180m	平安時代・後	『北山上』修験道の霊地、坊跡跡、神堂寺と対し、良弁、仁義、道隆、神龍山、北山跡、珠、東大寺の山頂的存在、良弁、聖忠、銅刻形石刻(弥生時代)	角田文衛『光明山寺の研究』(『考古学雑誌』1 1936) 山城町教委『光明山寺跡発掘調査現地説明会資料』(『京都考古』第68号 1993)	
33	神直寺	相模郡山城町大字神直小字不晴谷ほか	三上山西麓(谷間)標高約100m伊賀街道沿い	平安時代・後	『北山上』修験道の霊地、聖王堂、平安仏、坊跡、土器群、須恵器、瓦瓦ほか	山城町教委『神直寺跡第1次調査報告』(『山城町報告』第11号 1993) 山城町教委『神直寺跡第2次調査報告』(『山城町報告』第12号 1994) 京都府教委『相模郡誌』1926	『神直寺加蓋略図』
34	海住山寺	相模郡加茂町大字例碑小字海住山	三上山南麓(尾根上)標高約230m	奈良時代・後	谷仁堂・山背園分寺・東大寺と関係、本尊慈恩仏、良弁跡山	京都府立山城郷土資料館『山城の古瓦』(展示図録2 1983) 中島正『山背における清和国府系瓦出土の背景』(『清和考古学』1980)	
35	鹿山寺跡	相模郡木津町大字鹿背山小字古寺	丘陵南斜面標高約100m	奈良時代・後	浄土宗と関係(遺木を分ける)、瓦瓦、瓦器、土器群ほか	京都府立山城郷土資料館『山城の古瓦』(展示図録2 1983) 中島正『山背における清和国府系瓦出土の背景』(『清和考古学』1980)	
36	神護寺跡	相模郡加茂町大字東小字井手口	谷間標高約160m	平安時代・後	『東小田原山』浄土宗と対し、興福寺僧入寺、興福寺大乗院末、破石遺物群、瓦瓦、瓦器群ほか	田中重久『南山城の寺々の創立と伝説に関する説』(『名城と史蹟』1952 1956) 京都府立山城郷土資料館『山城の古瓦』(展示図録2 1983)	
37	岩船寺	相模郡加茂町大字岩船小字三大ほか	谷間標高約280m	平安時代・後	興福寺一乗院末、平安仏、興福寺僧入寺、瓦瓦	京都府立山城郷土資料館『山城の古瓦』(展示図録2 1983) 京都府教委『相模郡誌』1926 肥田路典『浄土宗と南山城の寺々』(『日本の古寺美術』18 1987) 肥田路典『浄土宗と南山城の寺々』(『日本の古寺美術』18 1987)	付近に岩船庵遺仏
38	浄土宗寺(九休寺)	相模郡加茂町大字西小字札場ほか	谷間標高約190m	平安時代・後	『西小田原山』神護寺と対し、永享2年(1047)聖明上人創建、興福寺僧入寺、瓦瓦、興福寺一乗院末、年(1047)聖明上人創建、興福寺僧入寺、瓦瓦、興福寺一乗院末	京都府教委『相模郡誌』1926 肥田路典『浄土宗と南山城の寺々』(『日本の古寺美術』18 1987) 肥田路典『浄土宗と南山城の寺々』(『日本の古寺美術』18 1987)	特別名勝・史跡 付近に岩船庵遺仏

第74図 京都府南部古代山寺一覧

第二節 山背における播磨国府系瓦出土の背景

はじめに

木津川流域の南山背地域は、畿内における平城宮系軒瓦の分布において、調密でしかも多種の出土が知られている。このことは、奈良時代前半・後半を通じて見られる現象であり、その存在の背景として、平城京・恭仁京・長岡京など古代都城の造営事業があることは容易に想像のつくことである。しかし、古代都城の造営に用いられた瓦が、都城以外の私的寺院において使用されたという現象が、都城の造時期と連動しているとしても、(官)の生産品を用いる場合、律令体制下での調達方法が機構の中で成立しているという前提が必要であろう。森郁夫は、この前提に立脚して「半ば官に組こまれた形で『修造が加えられるか、あるいは寺そのものに対してさほど大規模なものとしてでなく、ある分野に対して技術援助が行われるという形』を想定し、平城宮系軒瓦の存在が畿内諸豪族に対する奈良朝政府の掌握過程を示し、古代要路の確保については律令体制の維持政策の一側面なすものと考えた。また、山中章は、長岡京周辺の古代寺院から出土する長岡宮式軒瓦の検討から敷衍して、南山背地域における特に奈良時代後半期の瓦についても、長岡京の後期の造営と桓武朝における仏教政策との関係から、その存在の背景を捉えている。つまり、長岡京の造営に伴う平城京の解体と資材の運搬、それと延暦 10 年 (791) の山背圏内における塔の修理に関する詔を背景とした既存寺院の修復事業の結果であるとするものである。

古代中央集権国家の頂点であった律令時代、特に平城京の存続した期間は、筑紫の太宰府と大和を結ぶ最大の幹線道路、山陽道が南山背の地を通っている。いわばこの地が、「中央」と「地方」の狭間にあって大和への玄関口となっていたわけである。この点も南山背地域におけるこの時期の古瓦の様相を複雑にしている大きな要件となろう。事実、本論の主題である山背における播磨国府系瓦出土の背景として当然考慮せねばならない点ではある。

ここでは、高麗寺跡より出土した 8・9 世紀代の軒瓦のあり方を検討することによって、山背地域での平城宮系軒瓦出土の背景を整理し、その上で播磨国府系瓦が山背へ流入したその時代背景と意義を採るための手立てを得ようと試みるものである。

1. 高麗寺跡出土軒瓦の様相 (8・9 世紀を中心として)

高麗寺跡は、木津川を望む北岸の河岸段丘上に立地し、京都府木津川市山城町上狛高麗寺を中心に広がる寺院跡である。現在は南北に、2 基の土壇を留めているにすぎないが、『山州名跡誌』等、江戸時代の地誌類にその所在が記され、はやくから渡来系氏族泊氏の氏寺として知られていた。しかし、寺院の創建にかかる記録はなく、高麗寺が天平年中に存在していたことが、『日本霊異記』中に読み取れる程度である。高麗寺跡についての調査は、1938 年、京都府史蹟勝地保存委員会を中心とした数回の調査が実施されており、所謂法起寺式伽藍配置の大要が判明している。その後、1984～1988 年に

わたる山城町教育委員会の調査では、東西約 200m×南北約 190m の寺跡が確定した。

高麗寺跡からは、飛鳥時代から平安時代にかけての瓦が出土していた。軒瓦の記述に際して使用した型式番号は、軒丸瓦に KMM、軒平瓦に KMH の頭記号を付し、二桁の数字で示した。十の位の数字 (1~4) は、I 期 (飛鳥時代)、II 期 (白鳳時代)、III 期 (奈良時代)、IV 期 (平安時代) にほぼ対応しており、おおよその年代観を表わす。一の位の数字は設定順である。

高麗寺跡出土軒瓦の最古例は、飛鳥寺創建時に使用された飛鳥寺 I 型式と同範の製品 (KMM1 1 A) で、桜花弁式の素弁 10 弁連華文軒丸瓦である。他には、海龍王寺・姫寺出土例と同範の (KMM1 1 B) がある。これもわずかではあるが飛鳥寺から出土しており、同範関係にあることを確認している。これらの高麗寺跡における出土量はわずかであるが、伽藍中核部で一定量出土している。高麗寺の伽藍が本格的に整えられたのは次の白鳳時代になってからである。軒丸瓦はすべて川原寺式で、範の違いから、8 型式 (KMM21~28) に分けることができる。伽藍整備期当初から造営の主体をなした型式には、川原寺跡出土 A 類と同範のもの (KMM21) があり、他の型式はすべてこの退化型式である。これら一群の軒丸瓦は、南山背を中心に分布する「高麗寺式軒丸瓦」のモデルとなっている。対応する軒平瓦はすべて型挽きによる重弧文軒平瓦である。

飛鳥寺・川原寺といった時の最高権力を背景とした寺院所要瓦との同範関係は、とりもなおさず高麗寺の創建に係る政治的背景を示すものであろう。続く奈良時代は、平城宮式軒瓦との同範関係が顕著である。軒丸瓦で 6 型式 9 種類、軒平瓦で 7 型式 7 種類の同範関係を確認している。他に、恭仁宮・長岡宮との同範関係を加えると、軒丸瓦で 7 型式 10 種類、軒平瓦で 7 型式 8 種類となる。これら軒瓦は、種類の多様さに比べその出土量は極めて少ない。軒丸瓦でわずか約 2%、軒平瓦ではさらにその値は減少する。これらの値を見るかぎり、たとえ時の政府からの「援助」があったとしても、決してそれが大規模なものであったとは考えがたい。しかし、出土量の僅少さはその同範関係の意義をいささかも損なうものではない。

以下、高麗寺跡から出上る 8 世紀以後の軒瓦について都城所要瓦との同範関係を中心として検討していくこととする。その場合、平城宮式軒瓦との同範関係がすべて直線的に平城宮と高麗寺との関係に結び付けられるものではない。遷都の度ごとに旧都の建築資材が大量に移動しており、恭仁宮・長岡宮の造営に際しても平城宮の瓦が運び込まれている。まずは、どの都城との関連で高麗寺に瓦が搬入されたかの検討が必要である。この時期の高麗寺における堂塔の修理に使用された瓦の調達形態としては、以下の 5 つの場合が考えられる。

- ①高麗寺の伽藍維持を目的に独自で生産し使用したもの
- ②平城京の造営と維持、あるいは時の政府の何らかの政策によって搬入されたもの
平城京——高麗寺
- ③恭仁京の造営と維持、あるいは時の政府の何らかの政策によって搬入されたもの
平城京——恭仁京——高麗寺
- ④長岡京の造営と維持、あるいは時の政府の何らかの政策によって搬入されたもの

平城京——長岡京——高麗寺

⑤時の政府あるいは何らかの機関を媒介として搬入されたもの

他遺跡——x——高麗寺

これら考え得る 5 つの場合について、それぞれ該当する軒瓦を抽出してみよう。最初に③の場合について検討する。

恭仁京との関連 天平 12 年 (740)、30 年間にわたって続いた平城京を棄て、恭仁京の造営が開始される。この遷都の原因については、藤原広嗣の乱や疫病の流行を背景とした政情不安が考えられている。しかし、造営を開始したばかりの恭仁宮も天平 16 年 (744) に難波宮への遷都がきまり、廃都となるのである。したがって、恭仁宮・京の造営事業は 3 年あまりで終止符が打たれたこととなる。なお、この期間、高麗寺が立地する地域は恭仁京右京城に組み込まれており、その影響は大きなものであったと思われる。恭仁宮では発掘調査が継続的に進められており、出土瓦についてもすでに詳細な検討が行われている。また、造営事業が極めて短期間であることから、高麗寺跡出土瓦との関連が比較的追いややすい面がある。

高麗寺と恭仁宮の間で同范関係を確認している軒瓦は、軒丸瓦で KMM32 (恭仁 KM05 型式軒丸瓦。以下「恭仁 KM05」という要領で略称)、KMM33A (恭仁 KM01)、KMM34A (恭仁 KM02A)、KMM36 (恭仁 KM03C)、KMM37 (恭仁 KM15)、軒平瓦で KMH32 (恭仁 KH01)、KMH34B (恭仁 KH04A) がある。個々の軒瓦について検討する。

KMM32 (恭仁 KM05) は、恭仁宮跡での出土状況の検討から、塔院地区での出土割合が高く、塔の建立にあたって主体的に使用されたことが判明している。恭仁宮大極殿は、廃都後の天平 18 年 (746) 9 月に山背国分寺に施入されており、塔はその後建立されたものである。したがって、山背国分寺造営時に新調したと考えられる恭仁 KM05 は、③の場合から除かれる。なお、現時点では、この型式が他の都城との間で同范関係を見ない点から考えて、高麗寺では⑤の場合の調達形態に属するものと思われる。

KMM33A (恭仁 KM01) は、平城宮 6320A a 型式軒丸瓦 (以下「平城 6320A a」という要領で略称) と同范である。平城宮では、平城 6320Aa の外区突線鋸歯文を凸鋸歯文に彫り直した Ab が主体であり、Aa はほとんど出土しない。これに対して恭仁宮では、すべて Aa 段階のものであり、大極殿造営に際して主体となった製品である。よって、恭仁 KM01 は恭仁宮造営時に新調したものとして、天平 12～15 年 (740～743) の製作・供給年代が与えられる。他遺跡での同范例は、京都府城陽市の平川廃寺、木津川市の上津遺跡で出土しており、平城京及び南都諸寺院での出土を見ない。このことは、平城 6320Aa の製作が恭仁宮を主な供給対象とし、恭仁京の造営に連動して南山背の諸寺院にも供給されたことを示している。したがって、KMM33A は③の形態で高麗寺に搬入されたものとすることができる。

なお、平城京の外港である「泉津」に関連した遺跡と思われる上津遺跡から同范例が出土している

点は、木津川の水運を利用した山背地域への供給ルートを考えると、木津川河床の木津北遺跡からも Aa・Ab の区別は不明であるが平城 6320A が採集されている点と合わせて、重要な意味をもつ。他の同範例においても同様の傾向が見られるのである。

KMM34A (恭仁 KM02A) は、平城 6282Ha と同範である。恭仁宮では、以下の理由からこの型式を恭仁宮造営時に新調したものとしている。まず、大極殿地区において恭仁宮造営時に新調した恭仁 KM01 (KMM33A) との組み合わせが明確な恭仁 KH01 (KMH32) が、内裏地区においては恭仁 KM02A と組み合わせられるとする点である。この点については、内裏地区における山背国分寺施入後の恭仁宮期遺物の廃棄状況が、KM02A—KH01 の組み合わせで行われており、さらに、大極殿地区と内裏地区において、KM02A 及び KH01 の胎土・焼成・製作技法が明確に二分されるとして、その蓋然性を示している。また、恭仁宮の造営と密接な関係が予想される平川廃寺では、KM02A・KH01 の同範例において胎土・焼成・製作技法が恭仁宮内裏での状況に対応しており、恭仁宮での KM02A—KH01 の組み合わせを妥当だとしている。次に、恭仁 KM02A が恭仁宮造営時に新調したものとする理由として、平城宮では恭仁 KM02A と同範の平城 6282Ha の他にこれを彫り直した Hb が存在するが、恭仁宮では Hb は出土していない点が上げられている。この点は、先述した恭仁 KM01 と平城 6320Ab との関係に似ており、恭仁 KM02A が恭仁宮造営時に新調したものであることを裏付けるとしている。

では、高麗寺における恭仁 KM02A と同範の KMM34A が、恭仁宮造営と連動して搬入されたものと言えるであろうか。高麗寺では、恭仁宮には存在しない平城 6282Hb (KMM34B) が出土しており、必ずしも一元的に恭仁宮造営と連動して KMM34A (平城 6282Ha・恭仁 KM02A) が搬入されたとは言いきれない面がある。この点は、恭仁宮には存在しない平城 6320Ab (KMM33B) が高麗寺で出土しており、しかも恭仁宮造営と連動して KMM33A (平城 6320Aa・恭仁 KM01) が出土している状況と似ている。しかし、平城宮では 6320Ab が主体であり Aa はほとんど出土しない点と、平城京及び南都諸寺院では Aa の出土を見ない点から、高麗寺における KMM33A の供給は、恭仁宮造営と連動すると考えた。平城 6282Ha の場合は、Hb と同様に平城宮内で出土しており、恭仁京の造営を放棄した後の平城宮造営にあたって積極的に使用されている。また、京内及び法華寺で同範例が出土している点も、高麗寺における平城 6282Ha 出土の背景を単純に恭仁宮造営に結び付けることを困難にしている。

高麗寺における KMM34A (平城 6282Ha・恭仁 KM02A) の出土状況で注目すべきは、塔基壇南面に設置されている石積の階段の裏込め中より出土したものである。この製品は筒部を半ば欠失しているが、瓦当部は完存しており、人頭大の河床礫とともに混入していた。また、かつての京都府史蹟勝地保存委員会の調査では、同裏込め中より KMH32 (平城 6691A・恭仁 KH01) のほぼ完形品が出土している。つまり、塔に付設された階段の裏込め中で KMM34A と KMH32 が共伴しており、しかも両者の胎土・焼成は近似している。おそらくは、塔の大規模な修理にともなって、再利用できない軒瓦を階段の裏込めに使用したのであろう。このことは、塔の修理直前の屋瓦の状況を反映して

いる。もちろん後述する 8 世紀末段階での塔の大規模な修理以前は、小規模な瓦の差し替え程度であって、KMM34A—KMH32 の組み合わせが塔において成立していたとはにわかに断じ難い。しかし、恭仁宮において、恭仁 KM02A—恭仁 KH01 の組み合わせが成立する蓋然性を考慮するなら、無視できない点と思われる。また、平城 6282Ha 同範瓦の分布状況を見ると、山背在地寺院では高麗寺と平川廃寺のみにみられ、既述した平城 6320Aa の状況に似ている。以上のことから、KMM34A・KMH32 は、恭仁京造営と関連して高麗寺に供給された③の場合に属するものと考えられる。

KMM36 (恭仁 KM03C) は、平城 6285B と同範である。高麗寺では、寺城北辺に接してその存在が予想される金属工房社の灰層下より細片が一片出土したのみである。この灰層からは多量の風鐸の鋳型が出土しており、大小 2 種類の鋳型は、それぞれ軒の風鐸と相輪の風鐸に対応する。このことから、この金属工房の少なくとも最終操業は、塔の修造に関係していることがわかる。KMM36 が高麗寺においてどの堂舎に使用されたのかはまったく不明である。平城宮では、この型式が積極的に使用された形跡はなく、恭仁宮でも出土量は少ない。しかし、他の遺跡での分布状況を見ると、KMM33A・KMM34A と同様の傾向を示しており、恭仁京造営と関連している可能性が高い。現段階では一応③の場合に属するものとしておく。

KMM37 (恭仁 KM15) は、平城 6291Ab と同範である。高麗寺では発掘調査による出土品はなくかつての表採資料として知られている。平城宮では瓦編年第Ⅱ期に位置づけられており、恭仁宮では造営時に平城宮から運び込んだものとしている。また、この型式は長岡宮の造営にあたって山背北部へも運ばれており、長岡宮・平安宮・北野廃寺で出土している。いずれの段階で高麗寺へ供給されたのかはにわかに決し難い。一応保留しておく。

KMH32 (恭仁 KH01) は、平城 6691A と同範である。KMH32 についてはすでに KMM34A との組み合わせを前提に恭仁京造営と関連した③の場合を考えた。再度、平城 6691A の分布状況から検討しておしこの型式の同範例は大和・山背地域に広く分布しており、恭仁京・長岡京の造営あるいは平城京との直接的な関係が個々の遺跡の状況に応じて考えられる。当然、平安宮・京および西寺からの同範例の出土は、長岡京の造営とそれに続く平安京の造営にあたって、平城の地から長岡京を経由して運び込まれたものであろう。井手寺については、その状況はやや複雑である。井手寺に隣接して、当寺との関連が予想される岡田池瓦窯がある。この瓦窯では平城 6691A の他に 6663C・6721D が確認されており、すべて平城瓦編年第Ⅲ期に位置づけられる。平城 6663C は長岡宮において特に内裏での使用が顕著であり、他の 2 型式も宮内で出土する。この点で長岡京との関連も予想されるが、平城 6663C は中山瓦窯でも生産されており、平城宮では第 2 次内裏所用瓦である。このように、岡田池瓦窯との関連を考えると井手寺で出土する平城 6691A の解釈が微妙になる。井手寺は橘諸兄の別業がおかれた地に営まれた寺院である。この点、恭仁京造営との関連が考えられるが、同範関係にあるのは平城 6691A のみである。また、軒丸瓦では、恭仁宮造営にあたって新調された平城 6320Aa ではなく次の段階の Ab が使用されている。以上のことから、井手寺での平城 6691A と恭仁宮造営とは連動しているとは言い難いようである。久世廃寺については、平川廃寺に隣接するが、平川廃寺に

みられるような恭仁宮造営との密接な関係は見られない。軒瓦で顕著なものは、平城 6663・6702 系統のものである。恭仁京以後の段階が考えられる。

このように見てくると、山背地域において恭仁宮との関連を平城 6691A でおえる遺跡は限定されてくる。平川廃寺については、恭仁宮内裏地区出土の恭仁 KH01（平城 6691A）と胎土・焼成・製作技術とも等しく、恭仁 KM02A（平城 6282H a）とも対応することは先述したとおりである。高麗寺においても両者が塔階段裏込め中で共伴することは既に記したが、胎土・焼成は恭仁宮内裏地区のものとは異なる。高麗寺のものはいぶし焼き風であり、むしろ大極殿地区のものに対応するものと思われる。このことは、同様に恭仁京造営と連動して搬入された製品でも一様ではないことを示しており興味深いことである。

KMH34B（恭仁 KH04A）は、平城 6721C と同類である。この型式の分布状況をみると、一見して平城 6691A（恭仁 KH01・KMH32）の分布傾向に近似していることがわかる。しかし、その分布地域はさらに限定され、大和では平城京内とその周辺、山背では長岡宮を除く南山背地域にみられる。平城宮では瓦編年第三期に位置づけられており、平城 6282 系の軒丸瓦と組み合わせられている。恭仁宮でのこの型式の使用状況は副次的で、主体的に使用されたとは言いがたいが、KM02A（平城 6282Ha）との組み合わせが考えられている。恭仁宮でのこの型式の使用状況が必ずしも明確になっているとは言いがたい現状で、他遺跡との関連を抽出することには困難がともなう。しかし、あえて既知の恭仁宮との同範関係あるいは平城 6691A で検討した分布状況から敷衍して考えるなら、平川廃寺・高麗寺についてのみ恭仁宮造営との関連をみるのが妥当であろう。

以上、長々と恭仁宮造営との関連について紙幅を費やしてしまったが、軒瓦でみる限り恭仁京造営と連動した動きが確実に追える遺跡は極めて限定されることがわかった。言葉を換えるなら極めて例外的な遺跡と言えよう。この場合、その遺跡とは平川廃寺と高麗寺である。両寺とも、恭仁宮造営にあたって新調され、しかも主体的に使用された恭仁 KM01（平城 6320A a）・KM02A（平城 6282Ha）・KH01（平城 6691A）との同範関係をもち、胎土・焼成・製作技法が共通するという同時性を備えている。しかし、その「援助」の規模には差があり、高麗寺ではせいぜい小規模な差し替え程度であるのに対して、平川廃寺でのありかたはその出土量からみても「手厚い」ものである。なお、ここでは恭仁宮出土瓦の中でも最も特徴的な文字瓦について触れる余裕はないが、高麗寺での「恭仁宮式文字瓦」の出土が顕著であり、刻印の意味が雇工の「出来高支払制」に由来するなら、平・丸瓦に刻印のない状況は恭仁宮付属の「西山瓦屋」でも司工の製品ということになる。このことは、恭仁宮に供給された瓦と平川廃寺・高麗寺に供給された瓦の生産形態の同一性に由来するものであろう。ならば、都城の造営に用いられた瓦が都城以外の私的寺院において使用される場合、その調達方法がどのようなものであったかを知る一要件となる。いずれにしても平・丸瓦の検討が必要である。

平城京・長岡京との関連 延暦 3 年（784）平城京は放棄され、長岡京への遷都が開始される。さらに、10 年後の延暦 13 年（794）には平安京の造営が開始され、長岡京は廃都となってしまうのである。長岡京の造営にあたっては、旧都城の造営がすべてそうであるように、過去の都城の殿舎を

解体し、その資材を再利用している。ただ、長岡京の造営が他の都城の場合と決定的に異なる点は、過去の都城の資材の転用比率が極めて高い点にある。軒瓦の出土量でみると長岡宮朝堂院造営にあたっては後期難波宮のものが主体を占め、内裏では平城宮のものが中心である。これらの中で長岡宮造営にあたって新調した長岡宮式の瓦は、補足的に使用されているにすぎない。長岡宮での軒瓦出土割合でみると、難波宮式・平城宮式軒瓦だけで 80%の高率を占め、長岡宮式は 15%前後に過ぎないという。

長岡宮における平城宮転用瓦の搬入は、基本的には延暦 6～9 年（787～790）頃に盛んになる後期造営時であることが、発掘調査結果や文献資料の検討から明かにされている。しかし、その使用状況は、平城宮の諸施設から雑多に集められたようで明確なまとまりを持たない。両宮での平城宮式軒瓦の同范状況をみると、各時代・各型式のものを含んでおり、このことを裏付けている。また、長岡宮式軒瓦の使用状況からは、明確なセット関係は抽出できないという。このことは長岡宮式軒瓦の生産目的が、あくまでも平城宮からの転用瓦の不足分を補うことにあるためと思われる。

長岡京の造営は国家的大事業であり、山背国内での都城の造営にあたって地元の在地寺院がそれに連動して影響をうけたであろうことは十分に考えられることである。さらに、はじめに既述した延暦 10 年（791）の山背国内における塔の修理に関する詔についての指摘も、可能性としては魅力的である。しかし、これらのことが南山背における平城宮系軒瓦の稠密でしかも多型式にわたる分布の背景として集約できるものでないことは明らかである。

高麗寺跡出土軒瓦でみると、KMM33B（平城 6320Ab）、KMM34B（平城 6282Hb）、KMM39（平城 6311C）、KMH35（平城 6725A）、KMH36（平城 6761A）については、恭仁宮・長岡宮での同范例が確認されていない。現状では、平城京との直接の関連を考えるべきであろう。しかし、KMH34A は長岡宮式 7721 型式軒平瓦（以下「長岡 7721」という要領で略称）と同范であり、長岡京造営とそれに続く寺院の修復事業との関連を示唆するものであろう。このようにみていくと、高麗寺跡出土平城宮式同范瓦のなかには、既に抽出した③（恭仁京造営）と関連して供給されたもの以外に、長岡京造営と桓武朝における仏教政策とに連動して搬入されたものが混入している可能性がある。これらを抽出するための手立てを得るため、まずは長岡宮式軒瓦について検討してみよう。

長岡宮式軒瓦を生産した瓦窯跡として確認されているのは、長岡京右在した谷田瓦窯、大阪府高槻市の萩之庄瓦窯の 2 ケ所である。両窯ともその操業開始時期は平城京期に遡り、谷田瓦窯では西大寺造営にともなう平城 6732Q を、萩之庄瓦窯では平城京で使用された平城 6775B を生産している。その後、両窯ではそれぞれ長岡京造営にあたって多用される長岡 7757 系、7133 系の軒瓦を生産し、これらの型式は多数の同文異范を生み出している。このように長岡宮の官窯的性格を有する瓦窯の生産品とは別に、主に長岡京周辺の北山背地域の古代寺院から出土し、瓦当文様の系譜を追うのが困難な一群の瓦がある。これらを総合して、長岡宮式軒瓦が考えられている。

主に長岡宮・京を中心に北山背地域に分布する長岡宮式軒瓦には、摂津・河内・大和・南山背に出土するものがある。ここでは、南山背地域での長岡宮式軒瓦の分布についてみてみよう。現在確認し

ている同範例では、先述した高麗寺における KMH34A（長岡 7721）がある。この型式は長岡京と北山背の諸寺院に分布しており、平安京や大阪府枚方市の百済寺でも出土しているが、南山背地域での他の出土例を聞かない。他には、木津川の河床（木津北遺跡）から雲文系の平成 6802A（長岡 7802B）が採集されている。これについても長岡京期のものとする意見があり、近江地方での生産が予想されているが半然としない。また、同範ではないが同文異範の製品として、山背国分寺から出土した「旨」の異字体「百」を中心飾りとして置く恭仁 KH13（長岡 7722C）がある。なお、長岡 7722 については、同様の「旨」字のスタンプをもつ長岡 7193 の存在からその組み合わせが予想されるが、長岡京内での長岡 7722 の出土は確認されていない。しかし、長岡京を中心とした北山背の寺院から同文の製品が多数出土しており、長岡京期のものとして大過ないものと思われる。

以上、長岡宮式軒瓦について見たが、南山背では山背国分寺・高麗寺でしかその存在は確認できない。しかし、先に予想した長岡京期に供給された平城宮式軒瓦が存在するならば、それは長岡宮式軒瓦の他地域への分布傾向と近似した形態をもつものと思われる。その近似した分布形態とは、北山背の在地寺院との同範関係がみられる点、摂津、河内などの地域で同範関係が広がる点などである。また、平城京内諸寺院との同範関係が奈良時代末期においてみられる点も重要な着眼点であろう。これらの点があくまでも可能性にすぎないことは言うまでもないことである。

高麗寺跡出土軒瓦についてみると KMM34C（平城 6282Bb）・KMM37（平城 6291Ab）・KMM38（平城 6225A）はいずれも平城宮瓦編年のⅡ・Ⅲ期の製品であるが、KMM37・38 は北山背の寺院との同範関係を持ち、KMM34C は大阪府高槻市の梶原寺との同範関係からその広がりを示している。また、KMH31（平城 6685C）・KMH33（平城 6732C）・KMH38（平城 6801A）もその可能性を残すものである。

周辺都城との直接的な関係をもたない瓦 ここまで見てきた高麗寺跡出土軒瓦は、すべて平城京・恭仁京・長岡京といった中央政府（中央造営官司）に付属する瓦窯の製品、あるいは少なくとも都城の造営を目的として操業した瓦窯の製品であった。高麗寺からは、これら以外に周辺都城との直接的な関係（同範関係）を確認できないものが出土している。それらは、①他遺跡との同範関係をもたず高麗寺の伽藍造営・維持を目的に独自で生産し使用したもの、⑤都城以外の遺跡との同範関係を持ち、時の政府あるいは何らかの機関を媒介として高麗寺に搬入されたことが予想されるものとに分けることができる。①に該当する製品としては KMM35・41・42、KMH42 があり、⑤には KMM32、KMH34C・37・41 がある。なお、KMM31 の重圈文軒丸瓦については同範関係を明確にできていないが、確認している2点の製品の間に範の彫り直しがみられ、また、出土量が少ない点からも搬入品と思われる。①以外のいずれの場合に属するかは半然としない。

①の場合についてみると、いずれも出土量が比較的多く、都城系軒瓦の文様系譜上に位置しない点が特長的である。ただ、KMM35 については、平城 6282 系の文様を模倣している可能性もあるが退化が著しい。KMM41・42、KMH42 は胎土・焼成とも近似しており、KMM35 と KMM42 の一部で胎土・焼成とも等しいものが見られる。これらのうち KMM41 については、高麗寺の寺域に

接して存在した高麗寺3号窯の製品であることを確認している。他の型式についても高麗寺近傍で生産された可能性が高い。これらの製品の生産目的は、高麗寺の塔の大規模な修造に関わるものと思われる。

塔の修造については、すでにKMM33A（恭仁KMOI）—KMH32（恭仁KH0I）の組み合わせに関連して述べたが、この両者が共伴して出土した塔の石積階段の構築年代は、ほぼ8世紀末～9世紀初頭段階に限定して考えることができる。この時期には、塔・金堂基壇の周囲に排水溝を設けたり、基壇外周を巡る石敷を高くするなどの造作も行われている。このような石積階段付設作業を伴う塔の大規模な修造は、塔の建立以来この時期において前後の時期に行われた形跡はない。軒瓦の出土量を比較しても、対応する型式は明らかである。なお、これらの型式の軒瓦が塔の修造だけに使用されているわけではない。塔の修造に連動して他の建物にも用いられ、その後の伽藍維持にも使用されたのであろう。

次に、⑤に該当する軒瓦について見てみよう。

KMM32（恭仁 KM05）については、先に恭仁京との関連で述べたように山背国分寺造営に伴って新調された製品である。このことは、恭仁宮造営に伴って新調した製品が恭仁宮造営官司の管轄下のものであるのに対して、山背国分寺造営に伴って新調された製品が山背国分寺造営官司の管轄下のものである点で明確に区別されねばならない。同範例は南山背のみならず、滋賀県信楽町の甲可寺・同大津市の近江国衙など近江地域に広がっている。なお、山背国分寺出土例と高麗寺出土例では胎土・焼成とも等しく、製品の移動は明らかであるが、甲可寺出土例については胎土が異なるという。工人とともに範が移動したのであろう。範が移動する背景には、国分の造営という国家目標があり、それと連動した国府の媒介によって製品が移動したものであると思われる。

KMH41の同範例は、大阪府茨木市の新芦屋瓦窯・奈良県奈良市の唐招提寺で出土している。新芦屋瓦窯については寺院跡の可能性もあり、遺跡の性格は不明であるが同所から出土したKMM41同範例は、高麗寺跡出土例と胎土・焼成・製作技法が等しく同一産地の製品である。この型式の軒平瓦は中心飾りから左右に3転させる蕨手4葉の先端が肥厚し、三角形状を呈している点に特徴をもつ。この特長は、先述した「旨」字の中心飾りをもつ長岡7722系の軒平瓦と酷似している。おそらく、KMH41は長岡7722系軒平瓦の直接の先行型式であろう。都城系の軒瓦ではないが、長岡京の造営に連動して搬入された可能性が考えられる。

KMH34C（播磨本町式）・KMH37（播磨古大内式）については次項で検討する。

以上、高麗寺跡出土軒瓦の様相についてその概要を述べた。奈良時代以降、平城宮式軒瓦が搬入される契機として、平城京・恭仁京・長岡京の造営と連動して供給された場合を想定してみた。平城宮式軒瓦が搬入される時期は、ほとんどが恭仁京遷都以後に限定される。恭仁京造営に連動して製品が確実に移動したと思われる寺院は、平川廃寺と高麗寺のみである。平城京との直接の関連については検討していないが、遷都後の官窯体制の変革に関連して都城以外の私的寺院にも「官」の製品が供給される状況が発生したのであろう。南山背地域には多量の平城宮式軒瓦が供給されている。長岡京期

には、より広範な地域での同範軒瓦の分布傾向が見られる。これは、前代の中央官衙系瓦屋の解体と長岡宮関連瓦屋や摂津・河内の在地系瓦屋との再編成がまだ完了していない、過渡的な状況を反映しているものと思われる。この状況は、より遠隔の地域の瓦が移動する条件ともなろう。

2. 山背の播磨国府系瓦

今里幾次氏が提唱した「播磨国府系瓦」については、当初、播磨国分寺出土の瓦を基準にして「播磨国分寺式瓦」「播磨国分寺系列瓦」の呼称が用いられていた。その後、これらの瓦の背後にある播磨国府の存在が浮き彫りになるにおよび、「播磨国府系瓦」と改称している。現在では「播磨国府系瓦」として軒丸軒平瓦各8種類の組み合わせが考えられている。これらの軒瓦は、奈良時代後期の様相を呈し播磨国内に広く分布している。高麗寺から出土した播磨国府系瓦は、KMH34C(本町式)、KMH37(古大内式)で、いずれも播磨国内での組み合わせが予想される軒丸瓦を欠いている。出土位置は、すべて塔跡とその近辺に限られる。出土量はわずかであるが、KMH37は他の補修瓦に比べやや多い傾向を示す。KMH34Cは、兵庫県姫路市の本町遺跡出土本町式軒平瓦と同範である。本町遺跡の性格については、播磨国府・草上駅家・飾磨郡衙などに比定する説があり、確定していない。本町式軒瓦は、重圈文軒丸瓦と平城6721系軒平瓦の組み合わせからなっている。本町式軒平瓦は、中心飾りの右C字形が歪む点に特長がある。高麗寺跡出土例には、胎土・焼成とも本町遺跡出土例に酷似し軟質で黄褐色を呈するものと、焼成が堅緻で青灰色を呈するものがある。なお、姫路市の辻井廃寺からは、本町遺跡出土例の退化型式が出土しており、播磨国内での同型式の展開を示している。

KMH37は、加古川市の古大内遺跡出土古大内式軒平瓦と同範である。この遺跡は賀古駅跡に比定されており、同じく布施駅跡に比定されている龍野市小犬丸遺跡からも同範例が出土している。この型式の軒平瓦は、樹状に立ち上がる中心飾りと左右に展開する蕨手に配された蕾の表現が特徴的である。対応する軒丸瓦は単弁13弁蓮華文軒丸瓦である。小犬丸遺跡出土同範例では瓦当面に箔キズを生じているものが見られるが、高麗寺出土例では確認できない。なお、小犬丸遺跡では、KMH37同範例以外にその退化型式を使用しており、KMH37同範例を先行型式とした一連の文様系譜を形成している。

KMH37同範例には製作技法上の顕著な痕跡が見られる。それは、凹面側両側縁に残る横位の棒状圧痕である。この痕跡は瓦当側と狭端側にそれぞれ形成されており、あらゆる調整はこの痕跡に先行する。おそらくは生瓦を乾燥させる際に、平行に渡した2本の俵の上に載せたことによって形成された痕跡であろう。この痕跡は、高麗寺跡・古大内遺跡・小犬丸遺跡出土同範例に共通する特長であり小犬丸遺跡出土の同退化型式にも見られる。よって、これらの製品が同一の技術伝統を有する造瓦集団のものであることは明らかである。

また、上記3遺跡出土同範例については、胎土分析結果が公表されている。高麗寺跡出土KMH34C(本町式)・KMH37(古大内式)について比較するため、古大内遺跡出土KMH37同範例で「古大内領域」を、高麗寺に付属する高麗寺瓦窯の製品を基準として「高麗寺領域」を設定した。「高麗寺領

域」と比較すると、あらゆる因子で対応せず、高麗寺瓦窯産の瓦とは別の胎土をもつことは明らかである。次に「古大内領域」と比較すると、KM37はすべての因子で対応し、同一の胎土をもつことがわかる。KM34Cについては、「高麗寺領域」と同様に「古大内領域」にも対応しないことがわかる。

以上の胎土分析結果から、KM37は古大内遺跡出土同範例と同一の産地の製品であることが明らかとなった。また、小犬丸遺跡出土瓦は、大半が古大内遺跡出土同範例の胎土と異なることが指摘されている。このことは、生産地が異なることを示しており、範が移動した結果である。範キズの増加や退化型式の出現などから、「古大内遺跡段階」から「小犬丸遺跡段階」への移行は明らかであろう。よって、KM37が高麗寺に供給された年代は、古大内遺跡への製品の供給年代にそれほど遅れるものではないと考えられる。播磨国府系瓦の搬入という一点で考えるなら、KM34Cもほぼ同時期に供給されたとして大過あるまい。

山背国内で播磨国府系瓦が出土する遺跡は、高麗寺だけではない。木津川を隔てて高麗寺の対岸に位置する木津川市鹿背山の鹿山寺からは、高麗寺と同じ古大内式の軒平瓦が出土している。鹿山寺についての詳細は不明であるが、享保5年(1720)の銘がある西念寺蔵『鹿山寺略縁起』によるとその創建は7世紀中葉に遡るといふ。出土瓦には、古大内式軒平瓦の他に平城6135A同範軒丸瓦がある。他には、『法金剛院古瓦譜』(文政10年(1827))に播磨国分寺式の軒平瓦の拓本が掲載されており、御池通千本ヨリニ町西於田間拾之」との註がある。また、『文所古瓦集』(元文5年(1740))には播磨国分寺式の軒平瓦の拓本を載せている。出土地は谷堂とあり、現在の西京区にあった最福寺跡と思われる。安元2年(1176)の創建という。

これら山背国内での播磨国府系瓦出土遺跡のうち、鹿山寺例については高麗寺に近接しており、他の出土軒瓦の年代観からも高麗寺跡出土播磨国系瓦同範例との同時代性は首肯できる。しかし、『法金剛院古瓦譜』『文所古瓦集』所載の平安京及び最福寺跡出土例については、前者が平安時代後期に生産された播磨系軒瓦といっしょに採集されている点、後者の創建が文献からは平安時代初頭まで遡り得ない点などから、前身寺院の存在を想定しない限り、高麗寺山土例との同時代性は考えられない。

山背国以外では、奈良県天理市の平等坊松ノ木遺跡で古大内式の軒瓦が出土している。この軒瓦は、1985年に埋蔵文化財天理教調査団が実施した発掘調査により出土したものである。時期的に関連すると思われる平安時代の堀立柱建物が3棟検出されているという。瓦類の出土量は少ない。平等坊という地名の由来と関連して、周辺に寺院あるいは官衙の存在した可能性が考えられている。古大内式軒瓦同範例については、表土中より採集されたものであり、伴う明確な遺構は不明である。他には、平城京内からも出土している。

以上、播磨国以外での播磨国府系瓦について見てきたが、高麗寺以外の遺跡ではその出土状況が明確であるとは言い難い。高麗寺ではKM34 C・37の出土が塔とその近辺および西回廊付近にみられる。また、高麗寺では他の遺跡との同範関係が広範囲に及ぶような状況を現出した時

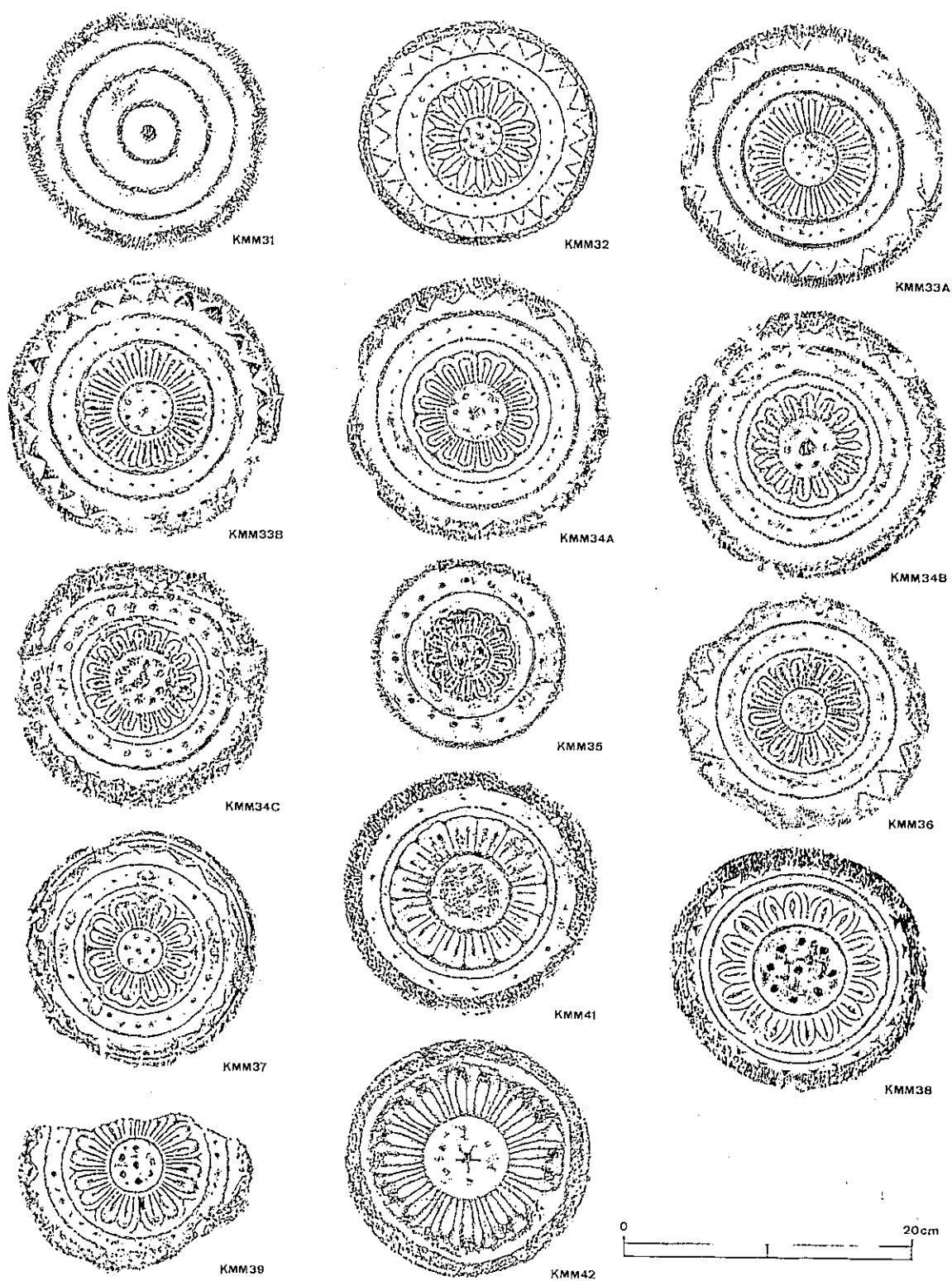
期は、長岡京期に顕著である。しかも、この時期に塔の大規模な修造が行われていることは、既述した通りである。ならば、播磨国府系瓦が搬入された直接の目的は、塔の修造に係る資材の調達にあったと見るべきであろう。ただ、高麗寺という私的寺院が、播磨国府系と呼ばれる播磨国府の管轄下の製品を用いるとすれば、高麗寺と播磨国府を媒介するより上位の機関の存在が当然想起される。たとえば時の政府の介在のもとに、高麗寺の塔の修理事業が行われたとするなら、それまで国家における広範な仏教政策に関わるものであろう。『續日本紀』延暦10年(791)4月18日の条に「山背国部内諸寺浮図経年稍久破壊处多 招遣使威加修修理駕」とある。これによって、桓武朝における仏教政策の一環として、山背国内諸寺の塔(浮図)の修理が行われたことがわかる。おそらくは、高麗寺において播磨国府系瓦が出土する背景には、上記詔に象徴される国家的な意志があったものと思われる。

しかし、高麗寺にそれが搬入された背景として、延暦10年の詔があったとしても、なぜ播磨国府系瓦なのかという疑問は残る。たとえば、同じ国家的な仏教政策が背後にあるとはいえ、国分寺造営の場合とは大きな隔りがある。長岡宮式軒瓦の分布に見られるような政府による直接の技術援助があったとしても、その範囲はたかだか北山背から大きく広がることはない。このことは、遷都に伴う旧官窯の解体と新都での官窯の再編成の重複期間であることに関係している。いまだ官窯体制が混乱した段階といえよう。このような中央官衙系瓦屋の混乱期に、新都の造営とそれに続く既存寺院の修復事業に用いられる瓦の需要を賄うには、当然旧都の瓦の再利用と、在地系瓦屋の官窯体制への組み込みが行われた。また、国府系瓦という呼称が暗示する「国府系瓦屋」の生産機能も、一時的にしろ利用された可能性がある。播磨国の場合、国府系の官窯体制が充実していたことは「播磨国府系瓦」の存在が雄弁に語っている。播磨国府系瓦導入の条件は満たしているといえよう。

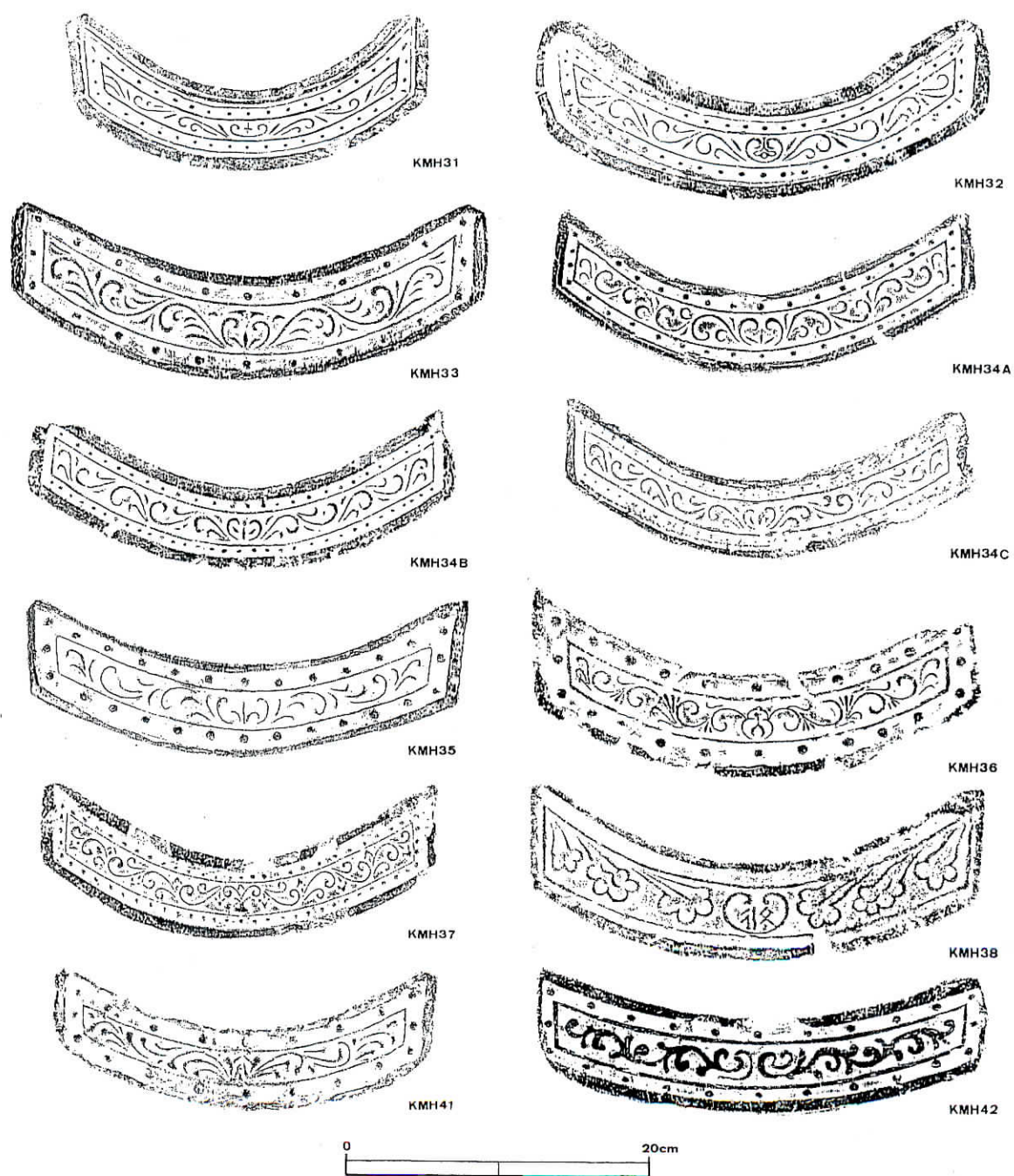
おわりに

高麗寺跡から出土した8・9世紀の軒瓦のあり方を検討することによって、播磨国府系瓦が山背へ流入したその時代背景を探ろうと試みた。しかし、その手立てを得るために、高麗寺跡出土の平城宮系軒瓦を各都城の造営と関連付けてみたが、不十分である。とくに、長岡京期に流入したものについては、ただその可能性を示したに過ぎない。また、平城京との関連についてはまったく触れなかった。ただ、南山背地域での平城宮系軒瓦のあり方が、単に平城京からの一元的な供給でなかったことは、示し得たものと思われる。

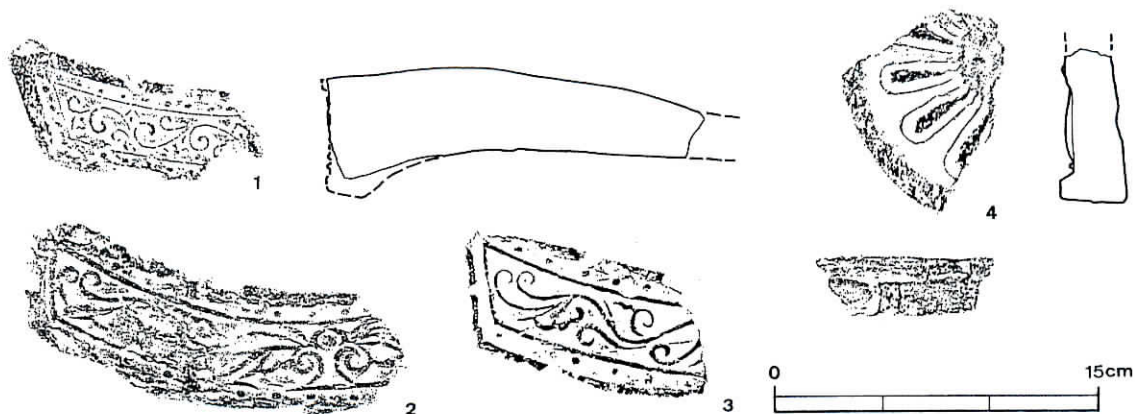
播磨国府系瓦出土の背景については延暦10年の詔と長岡京期における官窯体制の混乱があったものと考えた。今後、播磨国以外の地域での播磨国府系瓦の出土例は増えるであろう。その時点で、再度検討してみたい。



第75図 高麗寺跡出土8・9世紀軒丸瓦型式一覽

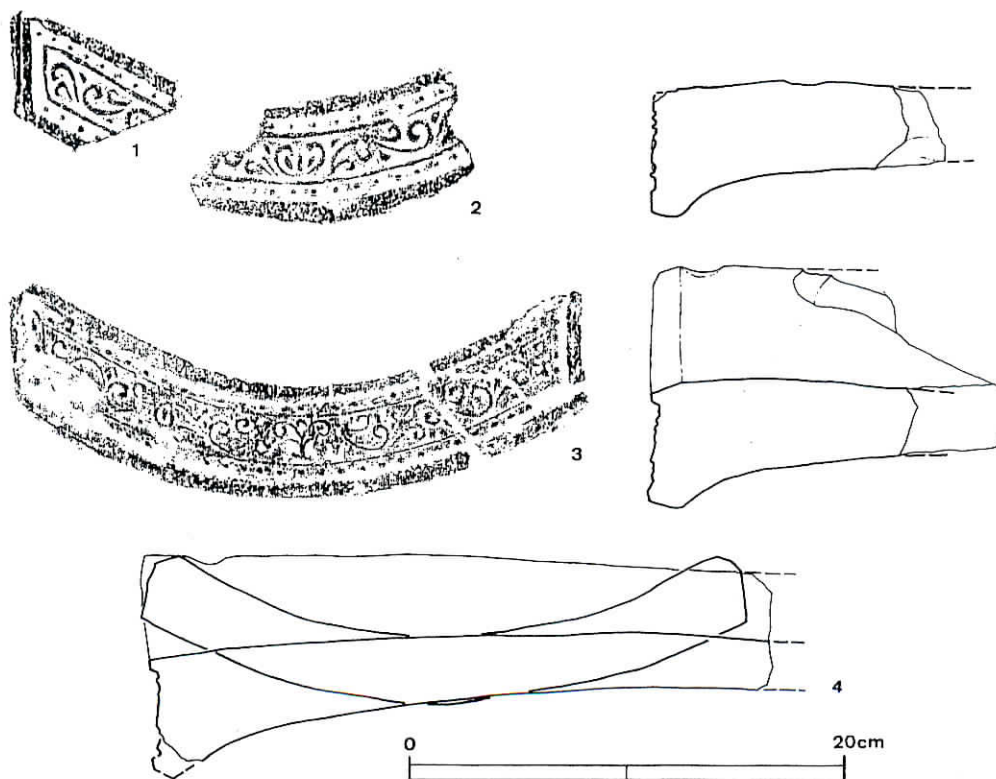


第76図 高麗寺跡出土8・9世紀軒平瓦型式一覧



第77図 播磨国外で出土した播磨国府系瓦

1. 京都府木津町鹿山寺「古大内式」 2. 京都府京都市平安京「国分寺式」
 3. 京都府京都市最福寺跡「国分寺式」 4. 奈良県天理市平等坊松ノ木遺跡「古大内式」



(1・2. KMH34C「本町式」 3・4. KMH37「古大内式」)

第78図 高麗寺跡出土播磨国府系瓦

第三節 南山城における平安初期古瓦の様相

はじめに

平城京の山の背に立地する南山城地域は、奈良時代以前建立寺院における平城宮式（系）軒瓦の稠密な分布で知られている。しかも、そこでは、平城宮・京の造営に使用された軒瓦との多様な同范関係が成立しており、あたかも、8世紀代における国家意志が、この地域の既存寺院に対して直接的に作用したかの様相をていしている。そして、このことから平城京・恭仁京・長岡京など各都城の造営と各時期の国家的政策の反映として、当然のことながら、その背景が論じられることとなった。

かつて、山城地域の古瓦を集成した高橋美久二氏は、山城国内におけるこの時期の古瓦の特長を「とくに、平城宮式 6282 形式軒丸瓦と 6721 形式軒平瓦の普及は著しく、『山背国式瓦』とでも呼ぶべき様相」と評している。ここで注目すべきは、氏が控え目な表現ながらも、山城国内における平城宮式同范軒瓦を中心とする一群に対して、わざわざ『山背国式瓦』という呼称を用いて、「都城での使用を前提とした瓦」と区別しようとしている点である。

つまり、都城の造営に用いられる瓦が都城以外の私的寺院において使用される場合、律令体制下での資材の調達方法として、当然両者を媒介する機構が存在し、その媒介を国単位で考えようとしているのである。私は、この高橋氏が暗示した視点を重要と考える。しかし、その媒介者がいかなるものであるかは別の問題としても、現状での分布論のみでは、山城国内における平城宮式同范軒瓦を中心とする古瓦の様相から、『山背国式瓦』とすべき山城国的要素を抽出することは困難であろう。

ここでは、南山城地域の諸寺において、平城京の造営とある程度きりはなして考えることが可能な平安初期（長岡京期を中心とする時期）の古瓦の様相から、山城国的要素の存在を検討してみたい。検討の対象とした資料は、山背国分寺跡出土瓦と南山城地域を中心とする諸寺から出土する同范および同系列の古瓦である。

1. 山背国分寺出土古瓦の様相

天平 12 年（740）、30 年間にわたって続いた平城京を捨て、聖武天皇は伊賀・伊勢・美濃・近江と続く奇怪な彷徨の末、恭仁京の造営に着手した。この遷都の原因については、藤原広嗣乱や疫病の流行を背景とした政情不安が考えられている。しかし、造営を開始したばかりの恭仁宮も、天平 16 年（744）、難波宮への遷都が決まり、廃都となるのである。この間、天平 13 年（741）には、国分寺造営の詔が出され、廃都後の天平 18 年（746）、恭仁宮大極殿は、山背国分寺に施入される。

恭仁宮および山背国分寺出土瓦については、すでに、上原真人氏による詳細な検討と明解な位置付けがなされており、造瓦組織の差異にまで言及した考察が行われている。

恭仁宮の造営に使用された軒瓦は、恭仁宮造営時に新調されたものが主体を占め、平城宮から転用されたものが補足的に使用されている。特に、恭仁宮 KM01 型式軒丸瓦（以下、「恭仁 K M01」と

いう要領で略称する)と恭仁KH01の組み合わせは明らかで、大極殿地区ではこの組み合わせが圧倒的多数を占める。ともに、平城宮からも同範例が出土しており、平城宮 6320Aa 型式軒丸瓦(以下、「平城 6320Aa」という要領で略称する)、平城 6691A の型式が設定されている。他に、恭仁宮造営時に新調されたと考えられている軒瓦には、軒丸瓦で恭仁KM02A(平城 6282Ha)、軒平瓦で恭仁KH04A(平城 6721C)・KH04B(平城 6721A)があり、これらについても組み合わせが考えられている。

山背国分寺の造営に使用された軒瓦は、恭仁宮造営時と同様、恭仁宮の資材が転用されたものと考えられるが、基本的には、山背国分寺造営時に新調されたものが主体となっているようである。特に、山背国分寺施入後に造営されたことが確実な塔院地区では、恭仁KM05・KH03の組み合わせが明らかであり、国分寺講堂跡所要瓦の様相を示すものと考えられる大極殿院北地区では、恭仁KM06・KH02の組み合わせが予想されている。2組とも、平城宮では同範例の出土をみない。

恭仁宮造営時・山背国分寺造営時の主体をなす新調された軒瓦の瓦当文様を比較すると、軒丸瓦では恭仁KM01⇒KM05・06、軒平瓦では恭仁KH01⇒KH02・03という系譜的な連続性をたどることができる。明らかに後者が前者を模倣しているのである。しかし、前者が平城宮の軒瓦と密接な関係をもつのに対し、後者は平城宮との同範関係をもたない点は注目される。この相違に対する上原真人氏の説明は明解であり、「造瓦にたずさわった造営組織の差異を反映している」とし、前者の製作主体を恭仁宮造営官司(中央官衛系瓦屋)、後者の製作主体を山背国分寺造営官司(＝国衛系瓦屋)と考えるのが妥当としている。

ならば、山背国分寺の造営以後、関連した建物の修理や再建はどのように進められたのであろうか。恭仁宮跡の発掘調査では、8世紀末から9世紀初頭と考えられる山背国分寺の軒瓦が少なからず出土している。特に、塔院地区での出土量は多く、この時期に大規模な塔の修造が行われたと考えられる。ここで注目すべきは、使用された軒瓦のなかに前記した瓦当文様系譜の延長線上に位置すると思われるものが存在するという点である。このことは、前代の造瓦状況との比較を可能にする。

まずは、抽出した瓦当文様の系譜をその変化に即してたどることとしたい。

軒丸瓦では、恭仁KM01(平城 6320Aa)が原型である。文様構成は、中央から順に、中房の蓮子1+8、間弁をもつ単弁24弁蓮華文、外区内縁の珠文24、外縁に突線鋸歯文を配している。

恭仁KM05は、24弁の花弁が17弁に減少し、花弁の形態もかなりくずれているが、外縁の突線鋸歯文を継承し、蓮子数・珠文数は原型に一致する。原型を直接模倣した結果である。

恭仁KM06は、外縁の突線鋸歯文を消失しており、蓮子数・花弁数・珠文数は恭仁KM01のちょうど半分になっている。花弁の形態は恭仁KM05の段階よりもさらにくずれ、間弁の認識はすでにない。恭仁KM05を直接簡略化したものであろう。

恭仁KM07は、やはり外縁の突線鋸歯を消失し、恭仁KM01に比べて花弁数・珠文数も減少しているが、中房の蓮子1+8は同じであり、花弁の形態についてもまだ間弁の認識を残している。恭仁KM01を直接模倣した結果である。

恭仁KM11は、恭仁KM07を模倣したものと考えられる。外区を画する圈線はすでに消失し、

中房の蓮子も1+5と変化しているが、18弁の花弁の幅に広狭の区別があるのは、花弁と間弁の区別に対する認識がないままに模倣した結果（＝痕跡器官化）であろう。花弁の割り付けも粗雑である。

恭仁 KM10 は、恭仁 KM11 をさらに簡略化したものと考えられる。中房の蓮子は1+4となり、9 弁の紡錘形に変化した花弁を配している。

以上のことから、山背国分寺の軒丸瓦には、恭仁 KM01 を原型とした2組の文様系列（恭仁 KM01⇒KM05⇒KM06, 恭仁 KM01⇒KM07⇒KM11⇒KM10）を見出すことができるのである。

軒平瓦については、恭仁 KH01（平城 6691A）が原型となる。文様構成は、内区の C 字上向内に花頭形を垂飾する中心飾、左右に各3 転半させる蕨手3 葉をもち、外区に珠文帯を配している。

恭仁 KH03 は、中心飾の花頭形下端を欠き花頭形上端が分岐しない点、右側の蕨手が4 転する点、上外区の珠文が1 個多い点など細部に異同はあるが、ほぼ忠実に恭仁 KH01 を模倣している。

恭仁 KH02 は、中心飾に飛燕状の花頭形を持ち、左右に蕨手3 葉を各3 転させている。単位文様・意匠ともに恭仁 KH01 とは大きく異なり、むしろ、平城 6689 系軒平瓦の瓦当文様に近似するが、平城 6689 にはみられない花頭形上端の分岐という稀有な特長を留めており、恭仁 KH01 を原型としていることがわかる。

恭仁 KH14 は、中心飾の花頭形下端をわずかに凹ませ茎は一体化していない点、上下外区と脇区を面す界線を消失している点、蕨手の形態が曲線的になっている点など、恭仁 KH01 に比べると単位文様ごとの変化が著しい。蕨手の展開が各3 転半に直っていることから、恭仁 KH03 を介さずに恭仁 KH01 を直接模したものとすべきであろう。

以上のことから、山背国分寺の軒平瓦には、恭仁 KH01 を原型とした文様系列（恭仁 KH01⇒KH03, 恭仁 KH01⇒KH02, 恭仁 KH01⇒KH14）を見出すことができる。これら山背国分寺所要軒瓦にみる文様系列の存在は、山背国分寺の造営以来、その修理や再建に関して、すくなくとも平安時代初頭までは何らかの系統的な造営がなされていた可能性を暗示している。しかし、その出土状況には、軒瓦の組み合わせなど相互の脈絡がなく、山背国分寺独自の造営組織による体系的な修理・再建の様相とはいえない。

2. 山背国分寺系列軒瓦の展開

前項で抽出した山背国分寺における文様系列の軒瓦と同範の製品は、広く南山背地域に分布する。ここでは、これら一群の軒瓦を「山背国分寺系列軒瓦」と仮に呼ぶこととし、分布と系列の意味を検討したい。なお、これら一群の瓦当文様から派生したと考えられる製品についても、ここでは補足的に検討の対象とした。

まず、原型としての恭仁 KM01・KH01 についてみると、平城宮・京、南都諸寺院、南山城在地寺院などに同範例が広く分布している。しかし、恭仁宮の造営に使用された恭仁 KM01 は、平城宮で主体をなす平城 6320 A b に先行する A a 段階（同範の改刻前）のものであり、南山城地域において恭仁京の造営と連動した動きが確実に追える遺跡は限られる。城陽市の平川廃寺と木津川市山城町の高

麗寺跡以外は、恭仁京廃都後に供給されたものである。しかも、恭仁 KM01・KH01 の出土状況からみて、これら軒瓦の主な生産目的は、恭仁宮の造営と平川廃寺の塔の大規模修造にあったことが予想される。

つぎに、山背国分寺造営時に新調された山背国分寺系列軒瓦（恭仁 KM05・06・07, KH 02・03）の分布についてみると、先述したように、平城宮との関連をもたない点が最大の特長である。また、恭仁 KM05・KH03 の同範例が、滋賀県大津市の近江国衙や甲賀郡信楽町の甲可寺からも出土しており、両者の組み合わせが成立している。南山城の在地寺院では、平川廃寺近傍の久世廃寺や高麗寺跡から恭仁 KM 05 同範例が出土しており、恭仁宮造営時のこの地域での分布状況に似る。

山背国分寺修理時（8世紀末から9世紀初頭）に用いられた山背国分寺系列軒瓦（恭仁 KM 10・11, KH14）については、恭仁 KH14 で、平川廃寺、久世廃寺や高麗寺と同じ木津川市山城町の蟹満寺に同範例があり、恭仁京・山背国分寺造営時における南山城地域の分布状況に近似している。

しかし、恭仁 KM11 では、いままで分布のみられなかった木津川西岸の八幡市志水廃寺や京田辺市の興戸廃寺・普賢寺で同範例が出土しており、注目される。しかも、山背国分寺塔院地区で恭仁 KM 10・11 と組み合わせる恭仁 KH05 は、山背国分寺系列の製品ではないが、志水廃寺・興戸廃寺でも出土しており、恭仁 KM11・KH05 の組み合わせが成立している。なお、高麗寺跡では、恭仁 KH05 の新たな展開をみる。

これら山背国分寺系列軒瓦以外にも、南山城地域の古代寺院からは、同系列に近似した瓦当文様をもつ軒瓦が出土している。

恭仁 KM01 の同範例を出土する平川廃寺からは、恭仁 KM06 に近似した単弁11弁蓮華文軒丸瓦が出土している。この製品は、花卉の先端に丸みをもつが、中房の蓮子数・外区内縁の珠文数はより原型に近く、恭仁 KM06 に先行する要素をもつ。相楽郡隋華町の里廃寺から出土した軒丸瓦は、単弁11弁の花弁先端を尖らせているが、すでに外区を画する圏線を消失しており、恭仁 KM06 に後出する要素をといえよう。八幡市の足立寺から出土した単弁14弁蓮華文軒丸瓦は、山城国分寺系列軒丸瓦からはやや乖離した文様構成であるが、組み合わせが予想される軒平瓦の様相から、同系列の延長線上に位置付けることができよう。

山城国分寺系列の瓦当文様に近似した軒平瓦例としては、足立寺（西山廃寺）のものがある。中心飾の形状は恭仁 KH02 に酷似しており、左右に蕨手4葉を各3転半させる。同範例は、足立寺の他に普賢寺・正道遺跡（廃寺）・蟹満寺で出土しており、その分布はほぼ木津川西岸に広がる。なお、足立寺では、調査の結果、塔の倒壊屋蓋中で軒瓦の組み合わせが確認されており、この一対は枚方市の百濟寺でも出土している。また、塔跡でこの一対と同時に葺かれていた平瓦には、横方向に粗い平行縄叩きをもつものが含まれており、注目される。この型式の平瓦は、山背国分寺でも出土しており（F型式平瓦）、蟹満寺では金堂瓦積基壇の補修用として使用されている。しかも、蟹満寺出土恭仁 KH14 同範例には、顎面に横方向の平行縄叩きの痕跡をとどめるものがあり、これら軒瓦の同時代性を示唆するものといえよう。

以上、山背国分寺系列軒瓦とその発展形態としての製品を、南山城地域での様相として概観してみた。その結果、恭仁宮造営時・山背国分寺造営時における同系列軒瓦の分布は、木津川東岸地域でも特定の地域に限定されるのに対し、山背国分寺修理時におけるその分布は、木津川西岸地域にも拡散しており、同系列の発展形態の製品をも含めてその分布をみるならば、ほぼ南山城地域全域におよぶといえよう。ここで注目すべきは、この分布相の著しい差異である。

恭仁宮・山背国分寺造営時に使用された山背国分寺系列軒瓦は、その造営を主目的として生産されたものであり、したがって、南山城地域におけるその分布は、恭仁宮・山背国分寺の造営に付随または連動した結果として理解できる。具体的には、平川廃寺・久世廃寺・高麗寺にその動きをみるこゝがきた。しかし、山城国分寺修理時に使用された同系列軒瓦は、国分寺内部においてさえ相互の脈絡を欠き、国分寺の修理に付随または連動した結果としてその分布を理解することはできない。ならば、逆に、この分布が広範囲におよぶという現象は、同系列軒瓦の生産が山背国分寺の修理を主目的としたものではなかったことを裏付けている。だとしたら、この分布の解釈としては、下記の場合が考えられる。

①. 山背国分寺系列軒瓦を用いた未知の大規模な造営事業に付随または連動した結果として、山背国分寺を含む南山城地域諸寺の修理がなされた場合。

②. 南山城地域全体の既存寺院を対象とした修理事業が、山背国分寺系列軒瓦を用いてなされた場合。

①の場合については、長岡京・平安京の大規模な造営事業以外に、該当するような事象は考えられない。しかし、山背国分寺系列軒瓦の上記都城における使用はなく、現状では①の場合は成立しない。

ところで、山背国分寺修理時における山背国分寺系列軒瓦の使用状況は、その出土量からみて塔院地区での使用が顕著である。このことは、山背国分寺修理時における同系列軒瓦の使用が塔の修造を主目的としていたことを示している。また、平川廃寺では、同系列の恭仁 K H14 が塔跡瓦積基壇の瓦積に挿入されており、塔の修理に用いられたことがわかっている。さらに、足立寺出土恭仁 K H02 近似例が塔の修理に使用されていることは、先述したとおりである。これら以外にも、志水廃寺や普賢寺から出土した同系列恭仁 K M11 は、塔跡の遺物と考えられる。

このようにみると、南山城地域における山背国分寺修理時（＝山背国分寺塔修造時）に使用された山背国分寺系列軒瓦は、この地域における既存寺院の塔を主とした建物の修理事業と関連している可能性が高い。だとしたら、『續日本紀』延暦 10 年（791）4 月 18 日の条にみる「山背国内諸寺の塔（浮図）の修理令が、その背景として想起される。桓武朝における仏教政策の一環として実施された塔の修理事業は、南山城地域での山背国分寺系列軒瓦の広範な分布という様相をもって顕在化したといえよう。

なお、山背国分寺塔修造時に使用された軒瓦には、山背国分寺系列軒瓦以外にも別の地域で文様系譜をたどれるものがあり、その分布相は多様をきわめる。この状況は、近傍の高麗寺において顕著であり、この時期の山背国分寺系列軒瓦の出土は確認していないが、より遠隔の播磨国府系軒瓦が塔の修造に使用されている。また、他の寺院における山背国分寺系列軒瓦の使用状況でも、恭仁宮・山

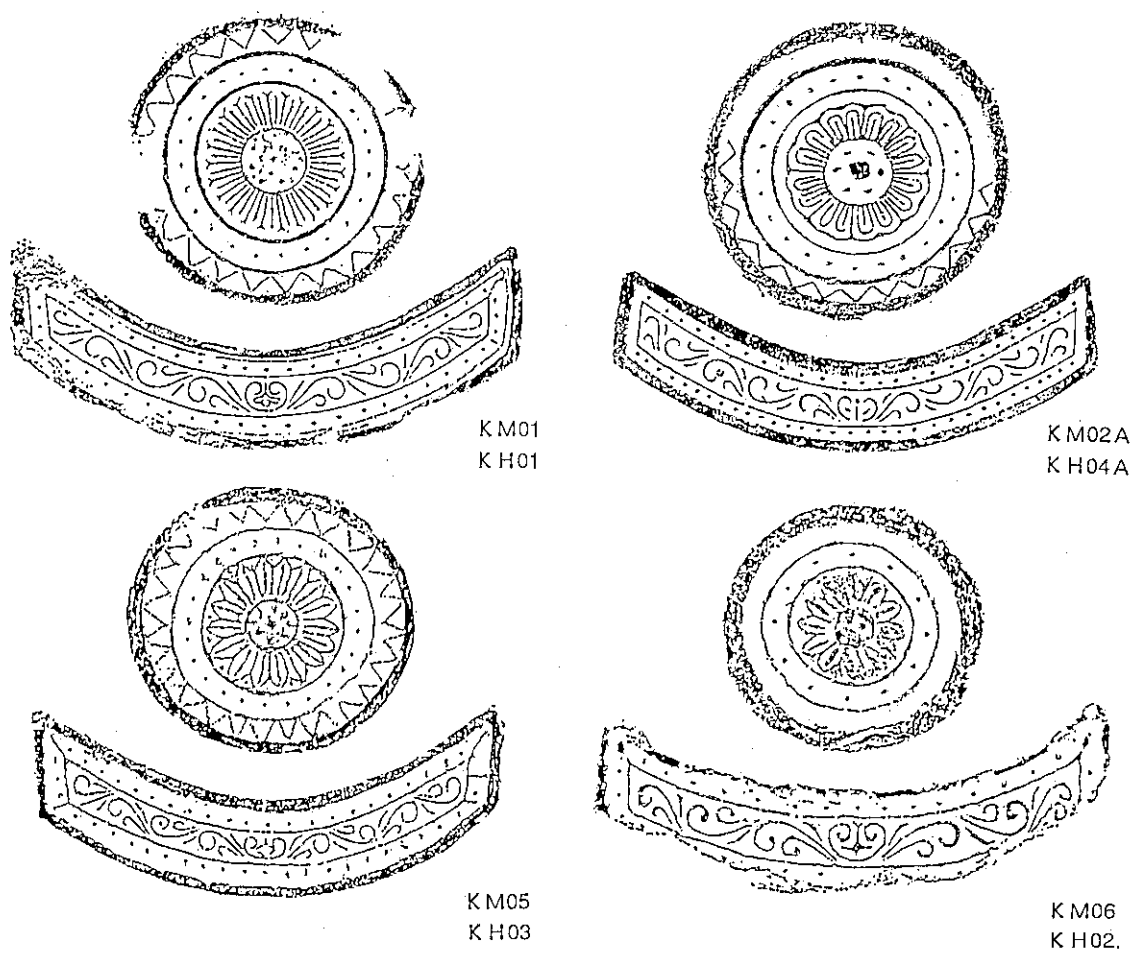
背国分寺造営時にみられた明確な組み合わせは考慮されていない。あくまでも、塔の修理を主とした山背国分寺系列瓦の積極的な利用であった。

まとめにかえて

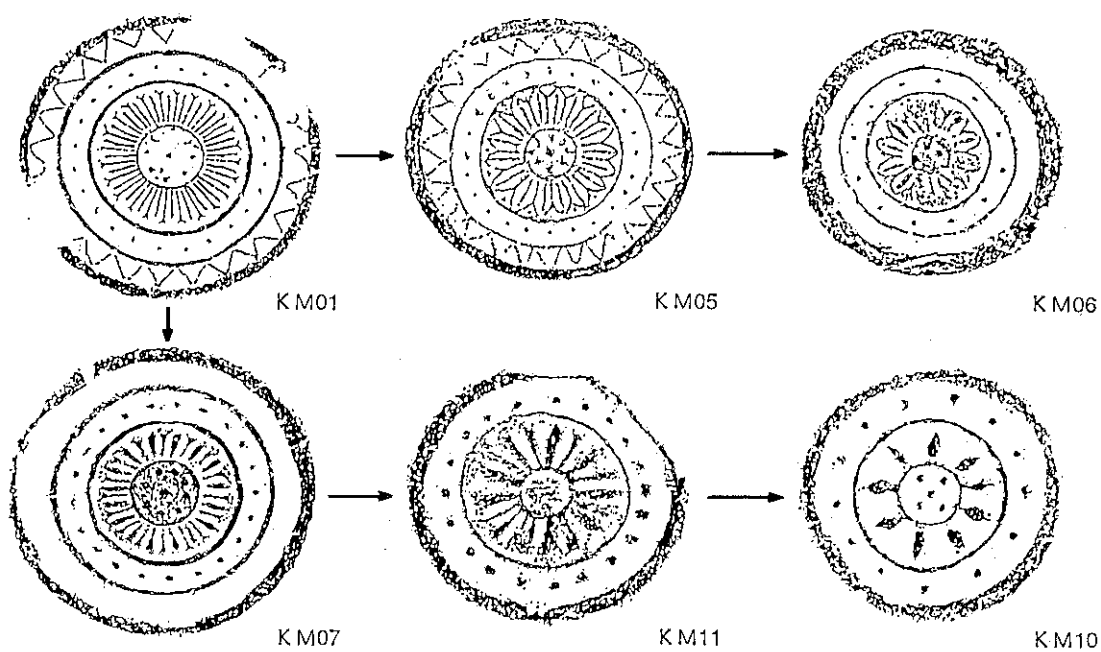
不十分ながらも、山背国分寺跡出土古瓦の様相から、山背国的要素の存在について検討を行った。山背国的要素の典型として抽出した「山背国分寺系列軒瓦」は、「山背国衙系瓦屋」の製品と考えられる国分寺造営時に新調された軒瓦を基準としている。この「山背国分寺系列軒瓦」とその発展型式は、広く南山城地域に分布しており、まさに『山背国式瓦』とでも呼ぶべき様相をていしている。

山背国分寺修理時（＝山背国分寺塔修造時）に使用された「山背国分寺系列軒瓦」の南山城地域における広範な分布は、延暦 10 年の修理令を背景としている可能性が高い。この詔による既存寺院の塔を主とした修理には、「山背国分寺系列軒瓦」が積極的に使用されている。

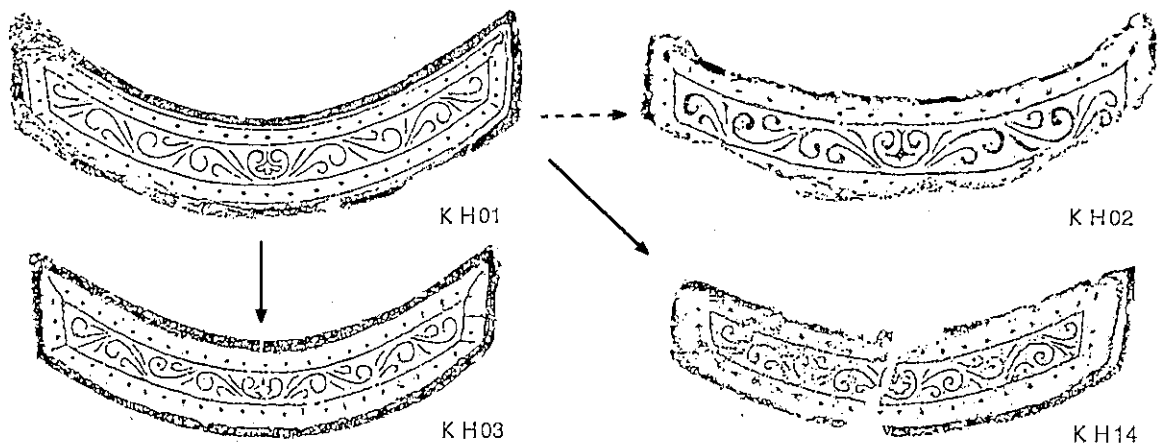
「山背国分寺系列軒瓦」の性格については、山背国分寺において系統がたどれる以上、「山背国衙系瓦屋」の製品または「山背国衙系瓦当文様」を使用することができる組織の製品とすることができる。だとしたら、「山背国分寺系列軒瓦」を掌握する機関として、「山背国府」の存在が想起されよう。本稿が検討の対象としたのは、南山城地域という限定された地域の古瓦であった。今後は、山背国全体を対象として、山背国的要素の検討を進めたい。



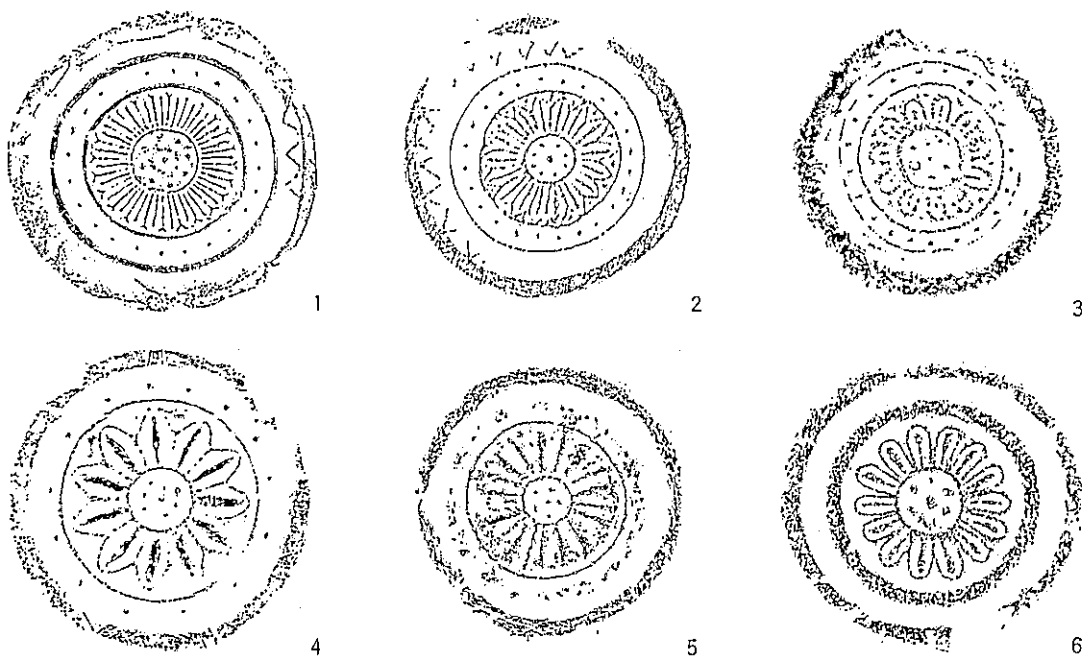
第 79 図 恭仁宮・山背国分寺造営時軒瓦の主要な組合せ



第 80 図 山背国分寺軒丸瓦の系譜

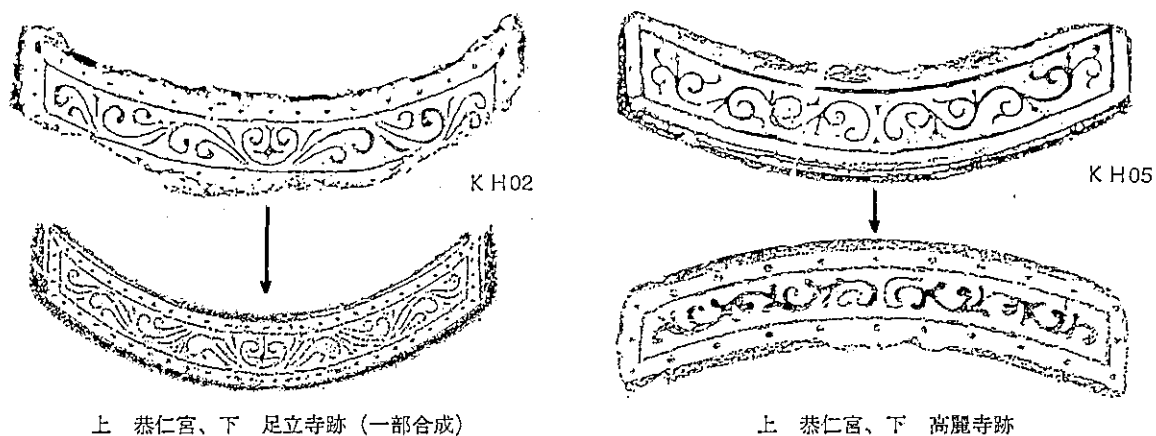


第81図 山背国分寺軒平瓦の系譜



- 1 : 平川廃寺 (恭仁KM01) 2 : 久世廃寺 (恭仁KM05) 3 : 平川廃寺
4 : 里廃寺 5 : 志水廃寺 (恭仁KM11) 6 : 足立寺

第82図 山背国分寺系列軒丸瓦の展開



上 恭仁宮、下 足立寺跡 (一部合成)

上 恭仁宮、下 高麗寺跡

第83図 山背国分寺系列軒平瓦の展開

第四節 神仏習合の寺院

はじめに

木津川の南、奈良山丘陵北裾の谷間に立地する神雄寺跡は、本堂・礼堂等の寺院中枢部が存する谷から西に開け、正面に生駒山を望むことができる地にある。遺跡のすぐ西側を東大寺、興福寺へ抜ける般若寺越えの道は、幣坂（平坂）越えの道とも呼ばれ、付近に鎮座する幣坂神社の存在からも、ここが大和から山城に出るまさに国境の地であることを知る。なお、この地は、平城宮と恭仁宮のほぼ中間に位置しており、両者へは直線距離にして約 5 km、泉津までで約 2 km と至近の位置にある。

1. 遺構の概要

これまでの発掘調査で検出した遺構は、天神山南裾の礎石立ち仏堂跡、その南側に一段低く軸線を揃えて建つ掘立柱の礼堂跡、この仏堂・礼堂とその前面の儀礼空間を東・南側で区画する曲水状池跡、仏堂跡西側約 100 尺の尾根上に建つ塔跡、曲水状池跡外東側で重複する掘立柱建物跡と柵跡および横板井籠組の井戸跡などがある。曲水状池跡の水源は仏堂東側の谷奥にあり、水源祭祀の様相からは湧水施設の存在が予想される。これら確認できた諸遺構は、出土遺物の様相から奈良時代中頃から後期のものとすることができる。

仏堂 仏堂跡は、側柱のみで建つ特異な構造の東西棟入母屋造り建物と考えられ、正面と背後にはさらに装階が付き正面の軒を長く礼堂に伸ばしている。柱間は、桁行が 16.5 尺（約 4.9m）で背面 5 間、正面 3 間で、梁間 15 尺（約 4.5m）4 間と復原できる。正面と背面で柱間が異なる点については、背面の中央 3 間分（10.5 尺）を二等分して、正面に扉を散けた結果と考えられる。したがって、正面中央の礎石は軒の荷重を受ける柱ではなく、扉を中央で支える中方立が立ち、取り外しが可能な構造であったと考えられる。なお、建物造営尺には天平尺が用いられている。建物の方位は、真北に対して 20 度程西に偏しており、火災により焼失していた。屋瓦類の出土量からは、屋根全体に瓦が葺かれていたとは考えられず、おそらくは大棟など一部に使用されたようである。仏堂内部の須弥壇は、13.5 尺（約 4.0m）×12.0 尺（約 3.6m）の規模をもち、側面には平瓦の狭端を上凸面を表にして貼り付けていた。検出状況は、この平瓦がすべて外側に剥れて凹面を上にした状態で出土しており、したがって、当初の須弥壇の高さは、平瓦一枚分の長さから 30 cm 程度と推定できる。建物と須弥壇の関係は、柱の心からで 1.5 尺（約 45 cm）程度の隙間しかなく、建物内部は仏の空間として人の出入りは不可能である。まさに巨大な厨子の様相を呈している。また、須弥壇中央は薬山状の高まりとなっており、等身大の四天王像がその四隅に祀られていた。

礼堂 礼堂は、桁行 3 間（9 尺等間）×2 間（7 尺等間）の南・東面に五尺幅の庇が付く構造となっており、東辺庇の柱列は縁東である可能性をもつ。すると、この建物は南面に庇をもつ切妻造り建物となり、床の存在も想定できよう。

塔 塔跡は、仏堂跡西側の丘陵上を地形に沿って三日月状に成形した狭い平坦地に存し、心柱を支える心礎とその周りの四天柱を支える四個の礎石あるいはその据付け痕跡で構成されている。他に礎石の据付痕跡はなく、四本の柱で屋根を支える1間（6尺＝約1.8m）四面の特異な構造の層塔であったと考えられる。建物の主軸は、仏堂・礼堂と同様、真北に対して西に約20度の偏りがみられる。基壇の規模等については明らかにし得ていないが、仏堂同様、明確な構造を持たなかった可能性がある。なお、瓦の出土量が少ないことから、全面瓦葺の建物であったとは考えられない。仏堂・礼堂・塔の主軸がそろることからは、一連の計画的な伽藍計画を知ることができる。また、塔の位置が曲水状池跡屈曲部のほぼ正面に置かれたことは、仏堂・礼堂の軸線に対して、いかにも考え抜かれた空間構成を示唆するものである。この池跡屈曲部周辺からかつて出土した相輪状の瓦製品や建築部材は、この塔に使用された可能性が考えられる。

曲水状池跡 仏堂・礼堂とその前面の儀礼空間東・南側で区画する曲水状池跡は、西側で一度北に屈曲したあと堤で堰き止められ、上下二段の木樋によって内部の水量調整がなされている。池内から溢れた水はさらに西流して現在の文廻池に注ぐ。おそらくはこの堤が渡り土手として儀礼空間への入口となるのであろう。池は幅4～5m、深さ1～2mを測り、丸太などで護岸がなされるが、礼堂の東側では一部池の埋立と東側への拡張が行われていた。そして、この池跡北岸から八千点を超す燈明皿が数ブロックに分かれて投棄されていたのである。なお、この曲水状の池の外側東方では、重複する二棟の掘立柱建物跡や井戸一基と柵列が検出され、内部の儀式空間とは異なる僧侶の生活空間が広がっていた。

大規模な燃燈供養が行われた儀式の空間を囲む池の水は、背後の天神山谷奥に湧き、本堂東側を通じて蓄えられていた。水源の調査では、多量の燈明皿を含む土器類が、儀式の場あるいは儀式終了後に投棄された状態で谷奥の水源近くから一括出土しており、水源祭祀の存在を示唆するものである。

なお、現天神山山中には、修行の痕跡が希薄であり、礼拝の対象として機能していたと考えられる。塔は、奈良山を越えて山背国に入る者にとって、聖域としての現天神山を象徴的に示す役割を担っていたのであろう。

2. 神雄寺の沿革

いまだ文献記載の判明していない「神雄寺」の読みについては、「カムノヲ寺」とすべき示唆的な意見がある。近隣の幣坂神社の存在から、ここが街道に面した大和と山城の国境であることも明らかであろう。神雄寺の創建には、神聖なる山とそこから湧き出る水に由来する特別な信仰が背景として存在していたのである。そして、ここは大和国北端に遷都した平城京にとって、境界神を祀る都の出入口でもあった。神雄寺創建の時期については、仏堂須弥壇に使用された梅谷瓦窯産平瓦の年代観から、聖武朝の天平初年に遡ることがわかる。

大規模な仏教法会（燃燈供養）を執り行う神雄寺の儀式空間を囲む池は、水源における湧水の祀りに象徴される清浄な水で満たされていた。この儀式空間は、仏堂・礼堂・塔とその前面の平坦面、背

後の現天神山で閉じられており、池の南側に西から東へ広がるであろう谷部の雑舎群とを峻別する。この状況は、現天神山の南裾に儀式空間が張り出すように設置されており、儀式の場として充足したものと言えよう。しかも、儀式空間を囲む池そのものが南側の尾根と現天神山によって遮蔽された空間となっているのである。大規模な仏教法会を執り行う特殊な装置としての「神雄寺」は、学解中心の平地寺院や山林修行を中心とした山岳寺院（山林寺院）とは異なる、別の寺院形態と言わざるを得ない。ただし、神雄寺では、特別に大規模な仏教法会（燃燈供養、読経、楽の演奏、歌の朗詠等）が行われただけではなく、寺院を維持していくための日常的な水源祭祀が行われていた。このことは、神雄寺が神山の清浄性を保つための日常的な機能と、その清浄性に裏打ちされた特別な仏教法会を行う儀式の場としての機能を併せ持つ寺院であることを示しているのである。しかし、その機能を必要とした都が長岡・平安京へ遷都するとき、神雄寺の存在もまた不要となったのであろう。神雄寺の終焉である。

3. 出土遺物の概要

出土遺物の大半は曲水状池跡から得たもので、八千点を超す燈明皿を含む土師器・須恵器や施釉陶器・墨書土器等の土器資料、木簡・建築部材等の木製品、瓦類等があり、他には、ガラス製の管状製品や土馬、和同開珎・万年通宝等の銭貨、繡の羽口、鉾滓などがある。また、本堂跡須弥壇周辺からは、多量の塑像片や埴仏片、焼壁土、鉄製円形鋸留扉金具や釘等の金属製品が出土しており、水源周辺の土器資料も多彩である。

施釉陶器には緑釉陶器や三彩陶器（奈良三彩）があり、緑釉の塔碗蓋や三彩の火舎型香炉（四足）・托・小壺・淨瓶・水瓶など多彩である。また、水波や巖を表現した山水施釉陶器片が多数出土しており、組合せ式の須弥山、本尊台座（瑠璃地・池敷）あるいは灌仏盤を据える調度とする説が唱えられている。

墨書土器もまた多彩である。「黄葉」「神」「寺」「神雄寺」「神尾」「山寺」「橘寺」「大殿」「造瓦」「□利諸□」「悔過」などの文字が半読でき、「神雄寺」「神尾」「山寺」は本寺の名を、「□利諸□」は経文の一部、「悔過」は本寺における供養を示すと考えられ、「大殿」は本寺に集う人物の性格を示唆するものであろうか。

木簡は五点出土しており、特に「阿支波支乃之多波毛美智・・・」（以下欠損）の墨書をもつ万葉集の歌木簡は貴重である。これは『万葉集』巻一〇の雑歌・相聞歌で、「秋萩の下葉もみちぬあらたまの月の経ゆけば風をいたみかも」の上の句であり、万葉集成立時の同時代資料となる。しかも、裏面には「越中守」とも読める墨書が残されており、直接ではないにしても大伴家持と無関係とは考えられない。

瓦類には軒瓦、丸・平瓦、鬼瓦、塼、塼仏などがある。軒瓦は、軒丸瓦七型式七種、軒平瓦三型式四種があり、平城宮瓦編年のⅡおよびⅣ期とそれ以後に大別できる。なお、平城宮式軒丸瓦には奈良市中山瓦窯の製品があり、このことは、本堂須弥壇の骨材として使用された平瓦に梅谷瓦窯産の製品

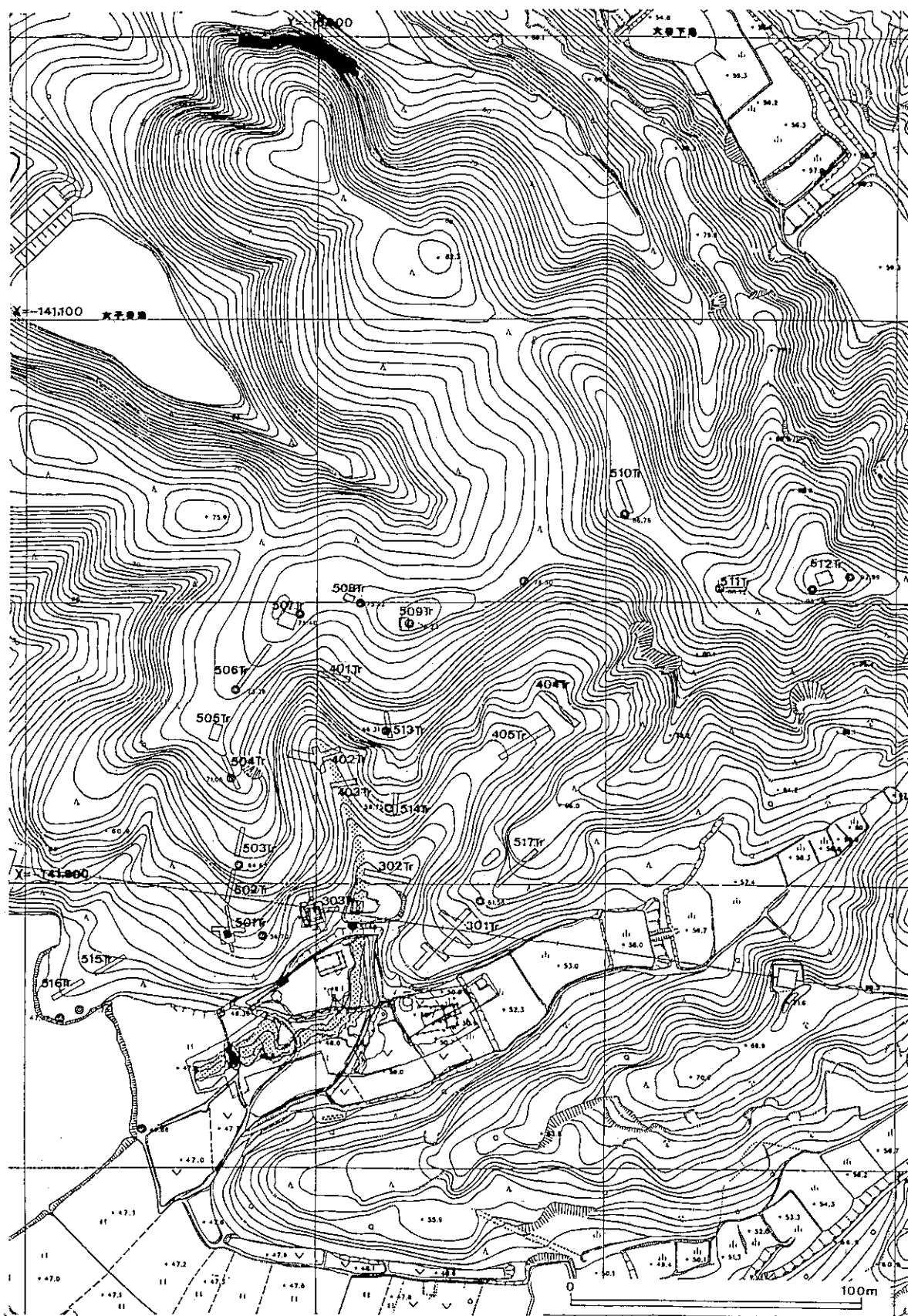
が含まれることから、神雄寺の創建時期を聖武朝初期に求める根拠となる。しかも、軒瓦のほとんどが平城宮式であることや皇后宮職（長屋王邸跡）出土例との同范関係の多さは、この寺の性格を端的に示している。また、埴仏片は、その形態を特定できるものは一点しかないが、三重県名張市の夏見廃寺出土の方形三尊埴仏と同じ原型によるものであることがわかる。

塑像片はその特徴から等身大の四天王像と考えられ、細片化しているもののその出土位置の偏りから須弥壇上での位置関係（持国天・増長天・広目天・多聞天）を特定することができた。鉄製の円形鋳留扉金具や釘・銅製鋳は、扉や堂内荘厳具の様子を窺わせるものである。

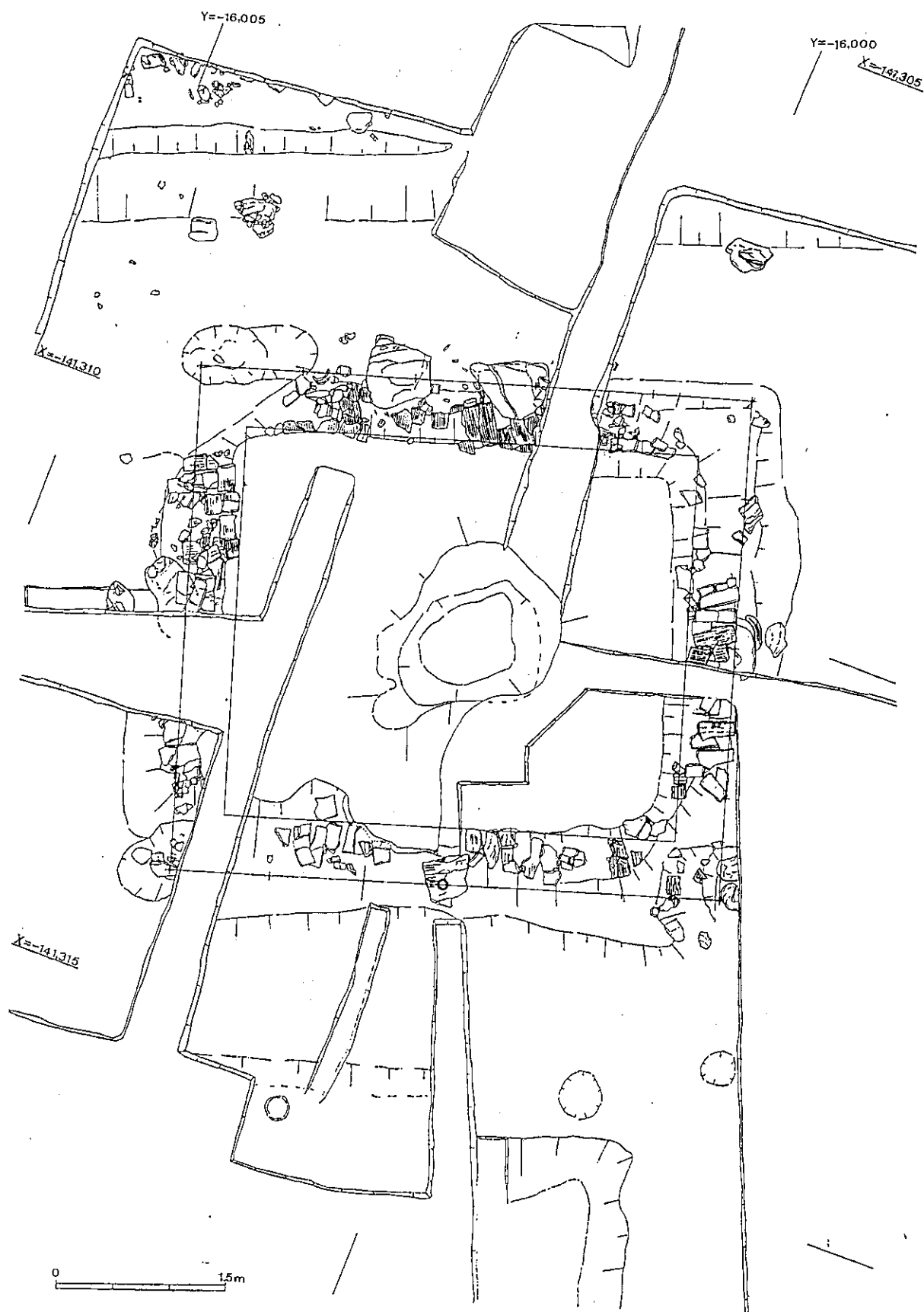
まとめ

奈良時代、諸国国分寺体制が成立すると、南山城の寺院ネットワークにも変化が生じる。国単位での仏教統制の体制が国分寺を中心として成立し、中央政権の強い意思を背景とした中核寺院や官立寺院と中小の在地寺院との二極化が進行するものの、中央政権の意思を介した山城国衙の影響が大きくなるようである。このことは、神仏習合と相まって山間部に立地する境界の寺に広がる新たな寺院ネットワークを形成していくのである。

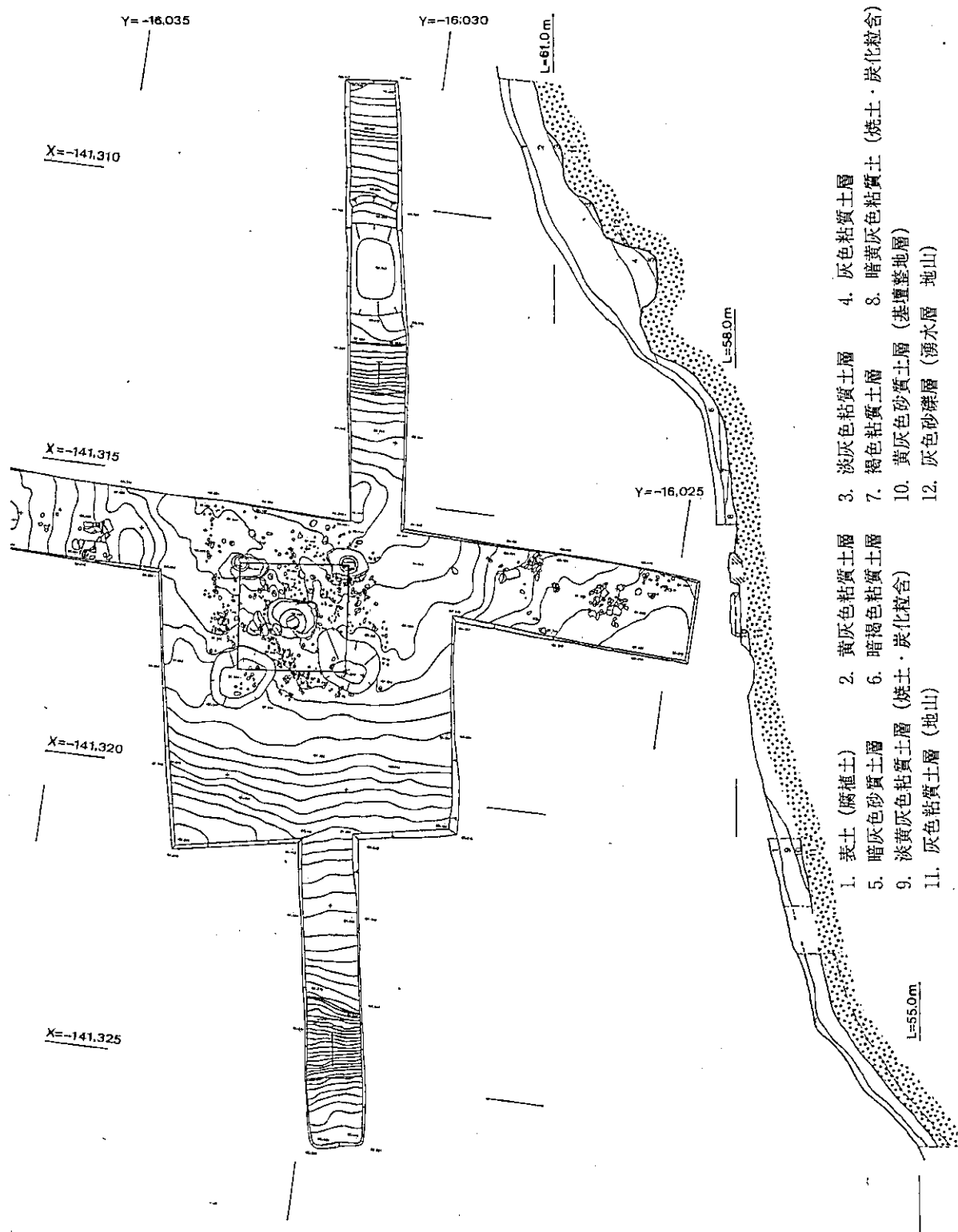
特別な験力を得るため、あるいは特別な儀礼（法会）を必要とする聖地（境界、湧水、岩座等）に開かれた寺院には、すでに新たな時代の仏教への期待が感じられる。国家仏教の完成を示す山城国分寺や井手寺に対し、笠置寺、普賢寺、神雄寺（馬場南遺跡）の存在意義は大きい。特に、神雄寺においては、日常的な湧水（聖水）の祀りとともに、特別な儀礼（大規模な燃燈供養、歌会（仏前唱歌）、舞楽等）の様相が明らかとなり、仏堂からは多量の塑像片が出土している。古代寺院における法会の実態を知る貴重な遺例である。



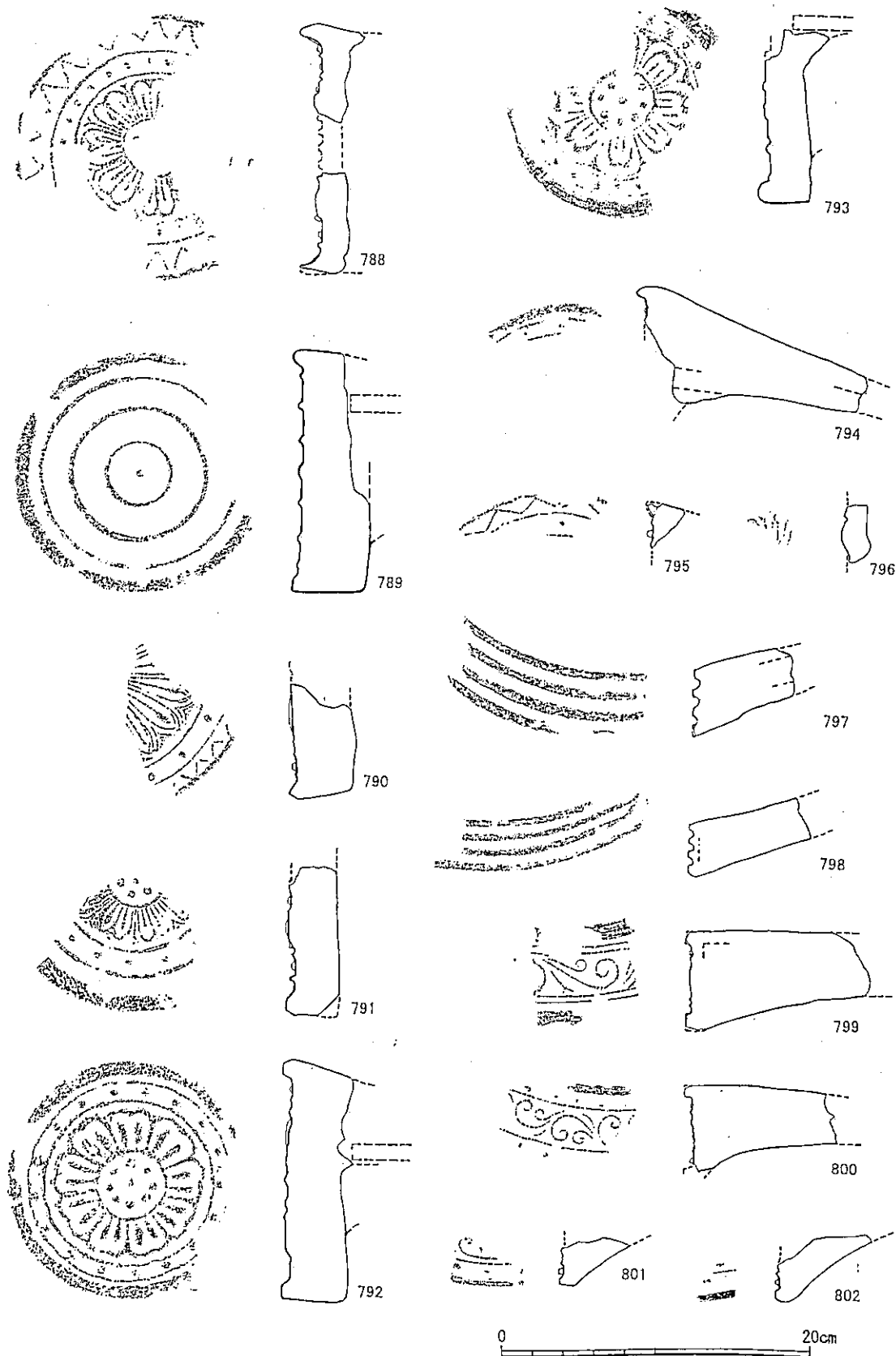
第 84 図 神雄寺跡発掘調査図



第 85 図 神雄寺仏堂跡発掘調査図



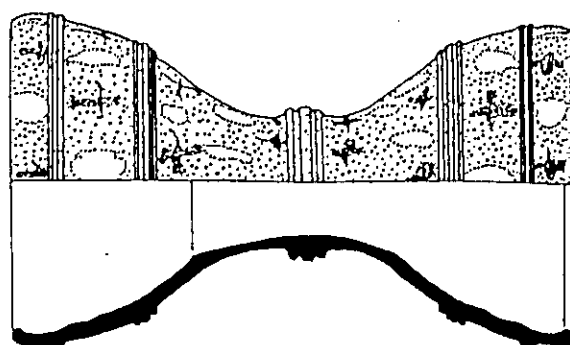
第86図 神雄寺塔跡発掘調査図



第 87 图 神雄寺曲水状池跡出土軒瓦

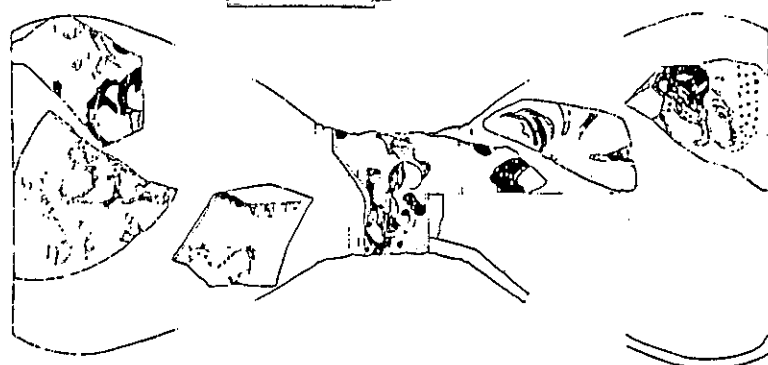


第 88 図 神雄寺曲水状池跡出土土師皿

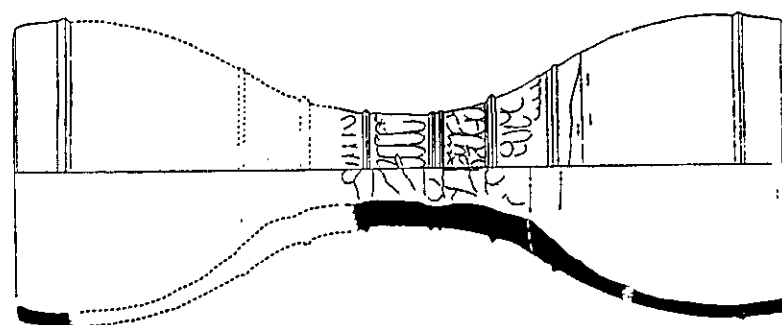


The image contains three line drawings of different roof types. The first drawing on the left shows a gabled roof with a vertical ridge line. The middle drawing shows a flat roof with a horizontal ridge line. The third drawing on the right shows a vaulted roof with a curved, arched structure.

4. 龍仁市西里窯跡出土 高麗鉄絵青磁長鼓



乳袋



229

終 章 考古学から見た国家仏教の本質

本論では、考古学的研究手法により、現在の京都府南部地域の南山城における仏教遺跡を対象として、「国家仏教」と「氏族仏教」の相克を視点とする仏教文化の受容と伝播の過程を追うことを試みた。律令制の確立期に編纂された『記・紀』等の正史では、日本列島における仏教文化の受容を、当初の段階から「公伝」と位置づけており、まさに国家仏教の視点で記述している。しかし、「国家仏教」の定義は実に曖昧であり、一応、大化改新から平安仏教の成立までが広い意味での「国家仏教」の時代と認識され、古代国家権力による仏教の保護と統制を基本的な要素として定義される。さらに、この古代国家の始点を律令国家体制の成立に求めるならば、狭義の「国家仏教」の時代は天武朝以後の奈良時代に限定され、いわゆる「奈良仏教」と同義となる。ここでは、「国家仏教」の定義に固執するつもりは毛頭なく、むしろ、後の国家に発展する大和の中央政権の意思（政策）が、南山城地域にどのように反映されたのかを検討し、在地の視点から仏教文化の受容と伝播の実相を追った。したがって、「氏族仏教と国家仏教の相克」とは、「在地の仏教」と「中央の仏教」の相克を意味しており、主に古代寺院にあらわれた「私」的な要素と「公（官）」的な要素を探ることにより、両者の相克として顕在化する試みなのである。その場合、考古学的な手法と在地の視点は、有効でありかつ重要と考える。

1. 仏教の受容とその主体

南山城の仏教遺跡を考える場合、仏教文化の導入期にあつてその地理的環境と渡来人の存在は大きな意義をもつ。時の中央政権が所在する大和国と地方をつなぐ大動脈である大和川と木津川にあつて、奈良山に接する木津川の屈曲部はまさに北の玄関口に相当する。3世紀末、三十数面の三角縁神獣鏡が出土した椿井大塚山古墳の出現以後、5世紀代には強大な地方勢力は久津川古墳群に引き継がれるが、その勢力が衰退した6世紀代には、古墳で見る限りこの地域での大きな勢力は存在しない。

椿井大塚山古墳は、全長約175mを測る前期古墳では山城地方最古最大の前方後円墳である。この墳丘規模は、明らかに木津川流域・淀川流域で突出しており、単に首長墳としての位置付けが可能だとしても、その存在は単独で系列が後に続くことはなく、在地の勢力としての性格は希薄とすべきであろう。むしろ、ヤマトの古墳時代前期前半の王墓ないし王墓級の大型前方後円墳に準ずるものとして評価できる。しかも、卑弥呼の墓ともされる最古の巨大古墳である箸墓古墳の2/3相似形となる可能性が指摘されている。後円部は2/3規模で4段築成の各段がほぼ一致し、前方部の墳端の位置や先端が緩形に開く点も整合する。そして、墳丘の高さや後円部と前方部の比高差もほぼ一致し、立体的にも極めて高い整合性をもつのである。箸墓古墳と椿井大塚山古墳との類似性は高く、その被葬者像を考える上で大きな注目点となる。また、かつて小林行雄が描いた三角縁神獣鏡の配布仲介者としての椿井大塚山古墳の被葬者像は、そのまま三角縁神獣鏡多量埋納の黒塚古墳の被葬者像と重なること

となり、三角縁神獸鏡の同範・同型鏡分有関係図は日本列島に二大拠点をもつこととなった。ところで、『記・紀』には、椿井大塚山古墳の所在する南山城が武埴安彦の反乱伝承の舞台として登場する。その時期は、初代ヤマト王権の王と考えられる崇神天皇の時代である。「邪馬台国を盟主とする倭国の時代」から「ヤマト王権の時代」への変革期、初代のヤマト王権に拮抗しその権威を篡奪しようと企てた勢力が『記・紀』に伝承され、しかも箸墓古墳や柳本行燈山古墳などの王陵との結びつきが伝えられているのである。

5世紀代には強大な地方勢力は久津川古墳群に引き継がれるが、その勢力が衰退した6世紀代には、古墳で見る限り南山城の地には大きな勢力は存在しない。後の山城国内における古墳時代後期は、北山城で嵯峨野に新たな卓抜した首長系譜（天塚古墳～蛇塚古墳）が誕生し、宇治郡域に単発的な首長（宇治二子塚古墳）が登場するが、南山城では中期の卓抜した首長系譜が途絶えたあと、モザイク状の地域支配がなされたようである。南山城の後期古墳を特徴づけるのは、その地域相である。古墳の主体部として積極的に横穴式石室を採用する地域、木棺直葬に固執する地域、横穴墓が稠密に分布する地域に分けることができるのである。山城地域における横穴式石室の導入は、5世紀末（TK47）の天竺堂1号墳で先駆的に開始され、6世紀前半（MT15）には南山城の群集墳に採用されて拡散する。ところで、この天竺堂1号墳で先駆的に横穴式石室が導入された時期、椿井大塚山古墳後円部の裾で、仰向けにした須恵器杯蓋の中に滑石製紡錘車が入った状態で、あたかも祀られたように出土しているのである。南山城における横穴式石室という新たな墓制の導入期、特別な祖霊を必要とした新たな勢力があったとすべきであろう。この「もう一つの墓前祭祀」が行われた頃の同時代資料として、埼玉県行田市の「稻荷山古墳出土金錯銘鉄剣」と熊本県和水町の「江田舟山古墳出土銀錯銘太刀」が有名である。稻荷山古墳の鉄剣には、被葬者であるオワケが雄略天皇に仕える武人であり、その8代前の始祖が崇神天皇に仕えたオオヒコであるとする「王統譜」を記している。5世紀後半の雄略天皇の時代、奈良時代の『記・紀』に記された武埴安彦の反乱伝承の登場人物が、稻荷山古墳の鉄剣に「王統譜」として登場するのである。確実な歴史認識がこの頃に成立している。また、『日本書紀』雄略天皇7年（是歳）には、百済からの渡来技術者らを「今来才伎」（イマキノテヒト）と記している。この5世紀後半の渡来人をあえて「今来」と表現する意識は、それ以前の渡来人を「古渡」とみなす『日本書紀』編者の観念が反映しているのである。

仏教文化導入の初期、飛鳥時代の仏教の担い手としては、蘇我氏と上宮王家以外に、渡来系の人々の存在が大きいことは、すでに多くの先学が指摘しているところである。後の山背国の寺院造営は、北山背は葛野郡の北野廃寺と南山背は相楽郡の高麗寺で、ほぼ同時期に開始される。その時期は、蘇我氏の氏寺・飛鳥寺の造営が終了する前後の時期、7世紀第Ⅰ四半期のことである。しかも、両寺とも、渡来系氏族・秦氏と高麗氏の両拠点に営まれた。北山背においては、5世紀の後半以後、葛野郡を拠点として渡来系氏族・秦氏の勢力が増大し、在地の勢力を駆逐・融合することによって、6世紀の後半には、北山背一体に絶大な影響力をもつようになる。7世紀初頭に秦氏は、自らの拠点でいち早く造寺活動を開始する。そこには、蘇我氏・上宮王家との密接な関係が伺えた。北山背における7

世紀第Ⅳ四半期までの長い造寺活動の空白については、秦氏の隔絶した勢力に起因すると解釈したい。南山背においては、6世紀代において隔絶した勢力は存在しない。そのかわり、古墳において、横穴式石室を採用する地域(相楽郡)、しない地域(久世郡)、横穴墳と横穴式石室墳が混在する地域(綴喜郡)の区別が可能である。7世紀初頭において、渡来系氏族・高麗(狗)氏がいち早く造寺活動に着手するが、蘇我氏・上宮王家と関係をもち得たのは高麗氏のみではなく、久世郡の在地勢力があり、綴喜郡では独自の造寺活動もみられた。7世紀後半になると、軒瓦の様相は北山背同様、相楽郡と久世郡の氏族に融合がみられる。南山城の古墳と寺院をみると、仏教文化導入の背景には木津川を介した文化の先取性と渡来人の存在が大きい。特に、北山背のように同じ渡来系氏族ではあるが秦氏のような隔絶した勢力が存在しない南山背においては、弱体化した旧豪族と高麗氏のような渡来系氏族が混在しており、そのモザイク構造が仏教文化導入の背景として存在するのである。南山背の古代豪族は、時の中央政権の新たな政治秩序を柔軟に受け入れる素地を持っていたのである。

飛鳥寺造営を契機とした寺院造営の波及は、山背国において7世紀第Ⅰ四半期に高麗寺と北野廃寺に及ぶが、主要堂塔(塔、金堂、講堂他)を備えた「伽藍」と呼べるような体裁を整えたかどうかは疑問である。伽藍と呼べるような形態が確実に認められるのは、今のところ7世紀の後半に至ってからである。それ以前に端緒を見出せる寺院においても、この時期に伽藍が整備されたと考えられるものがほとんどである。当時はまだ捨宅仏教、草堂仏教の時代であり、寺院を予想させる建築資材としての瓦の出土によってのみ想定されるものである。

2. 国家仏教の完成と在地寺院

律令国家の仏教政策の根幹をなすものは、官僧集団の形成と官寺体制の整備にある。その志向はすでに天武朝にあり、後に聖武朝の諸国国分寺体制の基本構想となるのである。仏法統制と仏法興隆の主導権を名実ともに確立した天武朝は、官寺制の整備により「中央集権的国家仏教」を志向したと考えられる。天武天皇9年(680)4月、国の大寺二・三以外の諸寺は「官司治むるなかれ」として、その内実はどうあれ、官寺体制の頂点に立つ官大寺以外の氏寺(私寺)を否定・抑制するのである。しかし、『扶桑略記』によると持統天皇6年(692)、天下の諸寺は545ヶ寺に達し、推古32年から約70年で十倍以上に増加したことになるのである。7世紀後半代の天武・持統期(白鳳期)が、本格的な伽藍整備を伴う氏寺の造寺活動の大きなピークなのである。その波及は陸奥国から肥後国の範囲に及び、当時の国家領域の大半をカバーする。

この伽藍造営の波及は、川原寺式軒丸瓦と瓦積基壇の使用により顕著な傾向を示す。川原寺式軒丸瓦とは、言うまでもなく大和の川原寺創建期に使用されたものを標識とする、面違鋸歯文縁複弁八弁蓮華文軒丸瓦とその退化型式を言う。山背国内では、特に相楽郡・久世郡の古代寺院に集中して出土し、相楽郡の高麗寺跡・蟹満寺・泉橋寺・松尾廃寺・里廃寺・下粕廃寺、久世郡の平川廃寺・久世廃寺・正道廃寺・広野廃寺、綴喜郡の山滝寺跡・普賢寺で確認されている。なお、北山背においても、宇治郡の大鳳寺跡、紀伊郡の御香宮廃寺、乙訓郡の宝菩提院廃寺でこの型式が出土する。山城国内に

おける川原寺式軒丸瓦出土の偏在ぶりは明らかであろう。南山城、特に相楽郡・久世郡における川原寺式軒丸瓦の稠密な分布については、以前から「壬申乱の論功行賞」的な要因を想定する説や「川原寺の寺領」との関連で捉える説、時の政権中枢部（官）における「主要交通路の確保」の過程を示すとする説などが唱えられ、その政治的・経済的な意義付けがなされてきた。しかし、高麗寺跡と蟹満寺から出土する川原寺式軒丸瓦を検討すると、山背国における七堂伽藍の造営は高麗寺の伽藍整備をもって開始されたと考えられ、天智天皇の大津宮遷都以後、宮周辺に営まれた諸寺の造営と連動する。そして、南山城における伽藍造営の伝播は、まず、高麗寺系軒丸瓦（高麗寺B系統）を用いて普及するが、その場合の定点となるのが高麗寺同範例を出土し高麗寺に近接する蟹満寺であった。この伝播は、高麗寺の伽藍造営第Ⅱ段階に連動するのである。なお、蟹満寺からは、大和の紀寺創建期軒丸瓦同範例が出土しており、山城東北部の宇治郡・紀伊郡・愛宕郡に偏在する紀寺式軒丸瓦導入の契機であった可能性がある。高麗寺については、その創建の段階から一貫して山背国の拠点であった。そして、高麗寺の伽藍整備が終盤に差し掛かった頃、この地に近接して新たな拠点寺院が出現する。蟹満寺である。このことは、天智そして天武・持統と続く国家仏教の形成期にあつて、その意志の本質と伝播の実態がいかなるものであるかを探るためのモデルとなる。仏法統制と仏法興隆の主導権を確立したとされる天武・持統期（白鳳期）は、南山背において拠点となる寺院を成立させる。この時期の官寺体制への志向は、拠点寺院としての氏寺の公（官）的要素を増幅する方向にあった可能性がある。

平城遷都以後、恭仁宮造営時に新調されたと考えられる軒瓦と密接な同範関係をもつ寺院は、山背国の中核寺院として、一国の仏事を修するに足る要件を満たしている。その要件とは、朝廷・国衙との密接な関係であり、後の山背国分寺に匹敵する仏教儀礼の場としての素地と言えよう。高麗寺、平川廃寺は、ともに聖武朝以前から朝廷との特別な関係があり、近接して燈籠寺廃寺、久世廃寺が、山背国分寺との関係を有していた。高麗寺―燈籠寺廃寺、平川廃寺―久世廃寺の関係は、後の国分（僧・尼）二寺の関係を彷彿とさせ、近接する官衙の存在は、その公（官）的性格を示している。井手寺については、橘諸兄との密接な関係が予想されるが、単なる地方寺院とは考えられないその格式は、前代からの寺院を圧倒している。しかもその位置は、相楽郡北端の恭仁京北郊の地であり、近傍には橘諸兄の相楽別業や玉井頓宮の所在も比定されている。葛野・乙訓郡への国衙の移転が、都に隣接してなされた様相を想起させる。諸国国分寺体制が整う新たな時代の寺院である。

諸国国分寺体制が成立すると、南山城の寺院ネットワークにも変化が生じる。国単位での仏教統制の体制が国分寺を中心として成立し、中央政権の意思を介した山背国衙の影響が大きくなる。そして、この影響は、山間部に立地する境界の寺に広がる新たな寺院ネットワークを形成していくのである。特に、特別な験力を得るため、あるいは特別な儀礼（法会）を必要とする聖地（境界、湧水、岩座等）に開かれた寺院には、すでに新たな時代の仏教への期待が感じられる。国家仏教の完成を示す山背国分寺や井手寺に対し、笠置寺、普賢寺、神雄寺（馬場南遺跡）の存在意義は大きい。特に、神雄寺においては、日常的な湧水（聖水）の祀りとともに、特別な儀礼（大規模な燃燈供養、歌会（仏前唱歌）、舞楽等）の様相が明らかとなった。

南山城における古代寺院とその出土瓦を見る限り、従來說かれてきた氏族仏教から国家仏教へとする図式は成立しない。むしろそこにあるのは、古代寺院における公（官）的要素の軽重であり、地域の拠点寺院であるか否かの差である。氏族仏教と国家仏教の相克において、公的側面が表面化していく過程と理解したい。ここに、南山城における古代寺院の普遍性と特異性があるのである。

[引用・参考文献一覧]

- 秋枝芳・山本博利 1986 「本町遺跡 ―播磨国府推定地― の調査」『日本歴史』第455号
- 秋山謙蔵 1932 「奈良朝における国分寺創建の問題」『史学雑誌』第43編第4号 史学会
- 足利健亮 1973 「恭仁京城の復原」『社会科学論集』第四・五号
- 足利健亮 1983 「恭仁京」『講座考古地理学』第二巻、学生社
- 飛鳥資料館 1986 『飛鳥寺』図録第15冊
- 足立 康 1944 「蟹満寺釈迦像の伝来について」『日本彫刻史の研究』 龍吟社
- 天沼俊一 1926 『續家藏瓦図録』
- 網 伸也 1995 「広隆寺創建問題に関する考古学的私見」『古代探微IV―滝口浩先生追悼考古学論集―』
- 家永三郎 1947 『上代仏教思想史』 叢書書房
- 家永三郎監修 1967 『日本佛教史』Ⅰ古代篇 法蔵館
- 猪川和子 1980 『観音像』日本の美術 No.166 至文堂
- 石岡市教育委員会 1982 『茨城廃寺 E』第3次発掘調査報告
- 石田茂作 1934 「佛教の初期文化」『岩波講座日本歴史』 岩波書店
- 石田茂作 1944 『総説飛鳥時代寺院址の研究』聖徳太子奉賛会
- 石田茂作 1959 『東大寺と国分寺』至文堂
- 石田茂作 1978 『仏教考古学論攷』1 思文閣出版
- 石野博信・関川尚功 1976 『總向』 奈良県教育委員会
- 泉森政編 2003 『大和の古墳1』新近畿日本叢書 大和の考古学2 人文書院
- 板橋倫行校註 1957 『日本霊異記』角川文庫1061
- 井手町教育委員会 1979 『小玉岩古墳群』井手町文化財調査報告書 第1集
- 井手町教育委員会 2003 『石橋瓦窯跡発掘調査概報』井手町文化財調査報告書 第4集
- 井手町教育委員会 2014 『井手寺跡発掘調査報告書』京都府井手町文化財調査報告第15集
- 井手町史編纂委員会 1983 『井手町の古代・中世・近世』 井手町
- 稲垣晋也 1971 「古瓦よりみたる飛鳥白鳳期の寺院」『古代の日本 研究資料』9 角川書店
- 伊野近富 1991 「恭仁宮と恭仁京の復原」『京都考古』第六三号
- 井上満郎 1987 『渡来人 日本古代と朝鮮』リブレポート
- 井上満郎 1991 「秦氏と宮都造営」『古代の日本と東アジア』小学館
- 井上光貞 1971 『日本古代の国家と仏教』 岩波書店
- 今井啓一 1968 「橘諸兄恭仁京経略の一考察」『皇学館論叢』第一巻第三号
- 今里幾次 1960 『播磨国分寺式瓦の研究 ―加古川市野口町古大内出土の古瓦―』
播磨郷土文化協会研究報告第四冊
- 今里幾次 1971 『姫路市辻井遺跡 ―その調査記録―』 古代播磨研究会

- 岩井武俊 1905 「山城国相楽綴喜両郡の古墳」『考古界』五の一
- 岩井照芳 1980 「山城国分尼寺は木津にあった」『広報木津』第185号 木津町
- 岩井照芳 1994 「恭仁京賀世山西道と上ツ道延長道」『京都考古』第七六号
- 上田正昭 1985 「渡来人と古代日本」『渡来人』別冊人物読本 河出書房新社
- 上田正昭 1991 「古代史の中の渡来人」『古代豪族と朝鮮』新人物往来社
- 上原真人 1983 「恭仁宮文字瓦の年代」『文化財論叢—奈良国立文化財研究所創立三〇周年記念論文集』
- 上原真人 1984 「天平一二・一三年瓦工房」『研究論集』Ⅶ 奈良国立文化財研究所
- 上原真人 1986 「仏教」『岩波講座 日本考古学』4 岩波書店
- 上原真人 1995 「畿内からみた豊前の古瓦 一顎面施文軒平瓦に関する予察一」

『古文化談叢』第34号

- 上原真人 1996 『蓮華文』『日本の美術』第三五九号 至文堂
- 上原真人 1997 『瓦を読む』(歴史発掘11 講談社)
- 上原真人 2011 「国分寺と山林寺院」『国分寺の創建』思想・制度編 吉川弘文館
- 植山 茂 1985 『小栗栖瓦窯跡発掘調査報告』財団法人古代学協会
- 宇治市教育委員会 1983 「隼上り瓦窯跡発掘調査概報」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第三集
- 宇治市教育委員会 1987a 『大鳳寺跡発掘調査報告書』宇治市文化財調査報告書第一冊
- 宇治市教育委員会 1987b 「岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要」
- 『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第十集
- 宇治市教育委員会 1991 「広野廃寺平成2年度発掘調査概要」
- 『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第一七集
- 宇治市教育委員会 1992 『五ヶ庄二子塚古墳発掘調査報告』宇治市文化財調査報告書第3冊
- 宇治田原町 1980 『宇治田原町史』
- 宇治田原町教育委員会 2006 『山瀧寺跡発掘調査報告書』

京都府宇治田原町埋蔵文化財調査報告書第2集

- 内田真雄 2007 「地域概説 山城の横穴式石室」『研究集会 近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会
- 梅原末治 1915 「山城國分寺址發見の文字瓦に就いて」『考古学雑誌』第五卷第一二号
- 梅原末治 1919a 「高麗寺址」『京都府史蹟勝地調査会報告』第一冊 京都府
- 梅原末治 1919b 「八幡町西車塚」『京都府史蹟勝地調査会報告』第一冊 京都府
- 梅原末治 1920a 「山城国八幡町の東車塚古墳」『久津川古墳研究』
- 梅原末治 1920b 「飯ノ岡ノ古墳」『京都府史蹟勝地調査会報告』第二冊 京都府
- 梅原末治 1920c 「川岡村岡ノ古墳」『京都府史蹟勝地調査会報告』第二冊 京都府
- 梅原末治 1920d 「大宅寺址(補遺)」『京都府史蹟勝地調査会報告』第二冊 京都府
- 梅原末治 1922a 「大住村車塚古墳」『京都府史蹟勝地調査会報告』第三冊 京都府
- 梅原末治 1922b 「大枝村妙見山古墳ノ調査」『京都府史蹟勝地調査会報告』第三冊 京都府

- 梅原末治 1922c 「太秦村天塚及び清水山古墳」『京都府史蹟勝地調査会報告』第三冊 京都府
- 梅原末治 1923a 「瓶原國分寺址」『京都府史蹟勝地調査会報告』第四冊 京都府
- 梅原末治 1923b 「井手寺跡」『京都府史蹟勝地調査会報告』第四冊 京都府
- 梅原末治 1923c 「乙訓郡寺戸ノ大塚古墳」『京都府史蹟勝地調査会報告』第四冊 京都府
- 梅原末治 1937 「乙訓村長法寺南原古墳の調査」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第17冊
京都府教育委員会
- 梅原末治 1939a 「高麗寺址の調査」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第17冊 京都府教育委員会
- 梅原末治 1939b 「北白川廃寺址」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第19冊 京都府教育委員会
- 梅原末治 1955 「八幡石不動古墳」『京都府文化財調査報告』第21冊 京都府教育委員会
- 梅原末治編 1938 『近畿地方古墳墓の調査』3 日本古文化研究所
- 江谷 寛 1978 『志水廃寺跡発掘調査報告』八幡市教育委員会
- 近江昌司 1991 「謎につつまれた山岳寺院」『古代の寺を考える』帝塚山考古学研究所
- 大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団 2005 『井ノ内稲荷塚古墳の研究』
大阪大学文学研究科考古学研究報告第3冊
- 大阪府教育委員会 1984 『河内高井田鳥坂寺跡』大阪府文化財調査報告19
- 大阪府立泉北考古資料館 1984 『記された世界』大阪府立泉北考古資料館友の会
- 大野城市教育委員会 1993 『牛頸月ノ浦窯跡群』大野城市文化財調査報告書第39集
- 大脇 潔 1989 「七堂伽藍の建設」『古代の宮殿と寺院』(古代史復元 第8巻) 講談社
- 小笠原好彦 2005 「高麗寺の性格と造営氏族」『日本古代寺院造営氏族の研究』東京堂出版
- 小笠原好彦・田中勝弘・西田弘・林博通 1989 『近江の古代寺院』近江の古代寺院刊行会
- 奥村清一郎 1987 「高麗寺跡(京都府)」『仏教芸術』174 毎日新聞社
- 奥村茂輝 1999 「梅谷瓦窯出土の特異な道具瓦」『京都府埋蔵文化財情報』第71号
(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 小田切淳 1987 「鞍岡廃寺の瓦」『長岡京古瓦聚成』向日市埋蔵文化財調査報告書 第20集
- 小野山節編 1981 「五塚原古墳」『王領の比較研究』京都大学考古学研究室
- 鹿児島県歴史資料センター・黎明館 1990 「(7) 肥後國分寺」『仏教文化の伝来』展示図録
- 笠置町教育委員会 1990 『笠置町と笠置山』
- 橿原考古学研究所附属博物館 1999 『逆華百相』(春季特別展図録)
- 柏倉亮吉 1937 「雪野寺跡発掘調査報告」『日本古文化研究所報告』第7
- 柏原市教育委員会 1996 『高井田山古墳』柏原市文化財概報1995-2
- 蟹満寺釈迦如来坐像調査委員会 2011 『国宝蟹満寺釈迦如来坐像―古代大型金銅仏を読み解く―』
八木書店
- 金子裕之 1983 「軒瓦製作技法に関する二・三の問題」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所
- 加茂町 1988 『加茂町史』第一巻

加茂町教育委員会 2006 『史跡山城国分寺跡・恭仁宮跡保存管理計画策定報告書』

川尻秋生 2013 「国分寺造営の諸段階—文献史学から—」『国分寺の創建—組織・技術編—』

吉川弘文館

河出書房新社 1985 『渡来人—海から見た古代日本史—』別冊人物読本

川西宏幸 1987 「国家の形成」『山城町史』本文編 山城町

川西宏幸 1991 「三角縁仏獣鏡」『考古学フォーラム』五（後に『古墳時代の比較考古学』所収）

岸 俊男 1993 『日本の古代宮都』岩波書店

木全敬蔵 1988 「条坊制と条里制」『季刊考古学』第二二号 雄山閣出版

喜田貞吉 1915 『帝都』『喜田貞吉著作集』第五巻 都城の研究 平凡社

木津川市 2010 『もうひとつの万葉の里 木津川市から』第二章

平城遷都 1300 年記念シンポジウム資料

木津川市 2011 『万葉歌をうたう 万葉歌をかく』

（『もうひとつの万葉の里 木津川市から』記念シンポジウム資料）

木津川市教育委員会 2008 「蟹満寺旧境内第7次調査概報」『山城町内遺跡発掘調査概報Ⅰ』

木津川市埋蔵文化財調査報告書 第2集

木津川市教育委員会 2009 「北綺田地区圃場整備事業に伴う遺跡発掘調査報告書」

木津川市埋蔵文化財調査報告書 第6集

木津川市教育委員会 2011 『史跡高麗寺跡Ⅱ』（木津川市文化財調査報告書第10集）

木津川市教育委員会 2014 『神雄寺跡』木津川市埋蔵文化財発掘調査報告書第15集

木津町 1984 『木津町史』資料編Ⅰ

木津町 1991 『木津町史』本文編

木津町教育委員会 1980 「上津遺跡第二次発掘調査概報」『木津町埋蔵文化財調査報告書 第三集』

木下 良 1984 「駅路との関係を主とする播磨国府跡の想定—一本町遺跡を草上駅跡と見て—」

『本町遺跡』姫路市教育委員会

京田辺市教育委員会 2006 『堀切古墳群発掘調査報告書Ⅱ』京田辺市埋蔵文化財調査報告書第36集

京都考古学研究会 1982 『小栗柄今昔物語』

京都国立博物館 1975 『京都国立博物館蔵 古瓦図録』

京都国立博物館 1988 『畿内と東国』特別展覧会図録

京都市開発局洛西開発室 1970 『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査

—福西古墳群の発掘調査報告—』

京都市文化観光局 1985 『中臣遺跡発掘調査概報』昭和59年度

京都市文化観光局 1986 『醍醐古墳群発掘調査概報』昭和60年度

京都大学考古学研究会 1967 『第20 トレンチ』

京都大学考古学研究会 1971 『嵯峨野の古墳時代』

- 京都大学考古学研究室 1989 『椿井大塚山古墳と三角縁神獣鏡』京都大学文学部博物館図録
- 京都府 1884 『相楽郡村史』京都府庁資料
- 京都府立山城郷土資料館 1983 『山城の古瓦』 京都府立山城郷土資料館
- 京都府教育委員会 1958 『名神高速道路路線地域内埋蔵文化財調査報告』
- 京都府教育委員会 1965 「坊主山古墳発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』
- 京都府教育委員会 1967a 「榎原廃寺発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』
- 京都府教育委員会 1967b 「乙訓寺発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』
- 京都府教育委員会 1979 『奈良山一Ⅲ』平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報
- 京都府教育委員会 1984 『恭仁宮跡発掘調査報告（Ⅰ編）』
- 京都府教育委員会 1986 「日本住宅公団木津東部地区遺跡分布調査概要」
『埋蔵文化財発掘調査概報（1981－1）』
- 京都府教育委員会 1985 『京都府遺跡地図』第5分冊
- 京都府教育委員会 2000 『恭仁宮跡発掘調査報告Ⅱ』
- 京都府教育委員会相楽郡部会 1926 『相楽郡誌』
- 京都府京都文化博物館 1991 『古代豪族と朝鮮』 新人物往来社
- 京都府埋蔵文化財研究会 2000 『京都の首長墳』
- 京都府埋蔵文化財研究会 2009 『京都府の群集墳』
- 京都府立山城郷土資料館 1983 『山城の古瓦』（展示図録2）
- 久保哲正 1996 「恭仁宮」『古代都城の儀礼空間と構造』古代都城制研究集会第一回報告集
奈良国立文化財研究所
- 熊本県立美術館 1985 「国分寺吉符天戯画丸瓦」『第10回熊本的美術展』 展示図録
- 小泉 道校注 1984 『日本霊異記』新潮日本古典集成
- 胡口靖夫 1977 「橘氏の氏寺について ―伝橘諸兄建立の井手寺を中心として―」
『古代文化』29-8 古代学協会
- 小林行雄 1955 「古墳の発生の歴史的意義」『史林』第38巻第1号
- 小林行雄 1961 『古墳時代の研究』青木書店
- 近藤喬一 1978 『西加茂瓦窯跡』平安京跡研究調査報告4 財団法人古代学協会
- 近藤喬一編 1990 『京都府平尾城山古墳』古代学研究所研究報告第1輯 財団法人 古代学協会
- 近藤義郎編 1992 『前方後円墳集成（近畿編）』 山川出版
- （財）京都市埋蔵文化財研究所 1980 『坂東善平收藏品目録』
- （財）京都市埋蔵文化財研究所 1981 『旭山古墳群発掘調査報告』
- （財）京都市埋蔵文化財研究所 1989a 「天皇ノ杜古墳」『平成元年度概報』
- （財）京都市埋蔵文化財研究所 1989b 『大枝山古墳群』京都市埋蔵文化財研究所調査報告書第8冊
- （財）京都市埋蔵文化財研究所 1996 『木村捷三郎収集瓦 図録』

- (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1986 「中ノ島遺跡—第45 地点」
『京都府遺跡調査概報』第21 冊
- (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991 『上人ヶ平遺跡』京都府遺跡調査報告書第15 冊
- (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1995a 「梅谷瓦窯・中ノ島遺跡」
『京都府遺跡調査概報』第61 冊
- (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1995b 「市坂瓦窯」『京都府遺跡調査概報』第61 冊
- (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1995 「燈籠寺廃寺跡」『京都府遺跡調査概報』第64 冊
- (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1996a 「梅谷瓦窯跡」『京都府遺跡調査概報』第68 冊
- (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1996b 「市坂瓦窯跡」『京都府遺跡調査概報』第68 冊
- (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997 『瓦谷古墳』京都府遺跡調査報告書第23 冊
- (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1999a 『奈良山瓦窯跡群』京都府遺跡調査報告書第27 冊
- (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1999b 「菟垣外遺跡第2 次発掘調査」
『京都府遺跡調査概報』第86 冊
- (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2002 「井手寺跡・栢ノ木遺跡」
『京都府遺跡調査概報』第102 冊
- (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2008 「鹿背山瓦窯跡第1 次」
『関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡平成18 年度発掘調査報告』
京都府遺跡調査報告集第126 冊
- (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2009 「鹿背山瓦窯」
『関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡平成19 年度発掘調査報告』
京都府遺跡調査報告集第131 冊—2
- (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2010 『馬場南遺跡』京都府遺跡調査報告集第138 冊
- 財団法人古代学協会・古代学研究所編 1994 『平安京提要』 角川書店
- (財) 枚方市文化財研究調査会 1980 「楠葉東遺跡内第五瓦窯」『枚方市文化財年報Ⅰ』
- 坂詰秀一 1982 「初期伽藍の類型認識と僧地の問題」『歴史考古学研究』Ⅱ ニューサイエンス社
- 佐久間竜 1980 「律令国家の氏寺対策」『仏教の歴史と文化』(仏教史学会30 周年記念論集)
- 佐藤虎雄 1930 「山瀧廃寺」『京都史蹟』1—6
- 佐藤虎雄 1932 「山瀧寺遺蹟」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第13 冊
- 滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 1975 『衣川廃寺発掘調査報告』
- 信楽町 1997 『天平の都 紫香楽—その実像を求めて—』
- 四天王寺文化財管理室 1986 『四天王寺市古瓦聚成』 柏書房
- 島田敏男 2007 「法隆寺再建・非再建論争史と若草伽藍」『法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告』
独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所
- 島谷 稔 1974 「高槻上代寺院跡の研究 (Ⅰ)」『大阪文化誌』季刊第1 巻第1 号

城陽市 1999 『城陽市史』第3巻

城陽市 2002 『城陽市史』第1巻

城陽市教育委員会 1971 「平川廃寺発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第1集

城陽市教育委員会 1974 「平川廃寺発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第2集

城陽市教育委員会 1975 「平川廃寺発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第3集

城陽市教育委員会 1976 「久世廃寺発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第4集

城陽市教育委員会 1980 「久世廃寺発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第9集

城陽市教育委員会 1981 「久世廃寺発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第10集

城陽市教育委員会 1993 『正道官衙遺跡』城陽市埋蔵文化財調査報告書第24集

城陽市教育委員会 2001 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第40集

白石太一郎 2009 『考古学から見た倭国』青木書店

菅谷文則 1973 「八角堂の建立を通じてみた古墳終末期の様相」『論集終末期古墳』 塙書店

杉本 宏 1998 「隼上り瓦窯と山背の高句麗系軒丸瓦」『飛鳥時代の瓦づくりⅡ』

(第2回古代瓦研究会発表要旨) 奈良国立文化財研究所

杉山二郎 1961 「蟹崎寺本尊考」『美術史』41 便利堂

鈴木嘉吉 1974 「寺院 伽藍の構成と配置」『古代史発掘9 埋もれた宮殿と寺』講談社

精華町 1989 『精華町史』資料編Ⅰ

精華町 1996 『精華町史』本文編

精華町教育委員会, 財団法人 古代学協会 1987

『京都府(仮称)精華ニュータウン予定地内遺跡発掘調査報告書一煤谷川窯址・畑ノ前遺跡』

園田香融 1976 「国家仏教と社会生活」『岩波講座日本歴史』四 岩波書店

平良泰久 1995 「山城」『全国古墳編年集成』(石野博信 編) 雄山閣出版

高槻市立埋蔵文化財センター 2000 『安満宮山古墳一発掘調査・復元整備事業報告書一』

高槻市埋蔵文化財調査報告書第21集

高槻市立埋蔵文化財調査センター 2007 『史跡・今城塚古墳一平成17年度第9次規模確認調査一』

高槻市立埋蔵文化財調査センター 2008 『史跡・今城塚古墳一平成18年度第10次規模確認調査一』

高橋 学 1998 「地形環境からみた巨大古墳」『別冊 歴史読本』新人物往来社

高橋美久二 1970a 「山城国葛野・乙順河部の古瓦の様相」『史想』15 京都教育大学考古学研究会

高橋美久二 1970b 「宇治田原町山滝寺跡出土の古瓦」『京都考古』第5号

高橋美久二 1982 「古代の山陽道」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集

高橋美久二 1984 「恭仁京と長岡京」『仏教芸術』第一五四号

高橋美久二 1987 「宝菩提院廃寺」『長岡京古瓦聚成』向日市埋蔵文化財調査報告書 第20集

高橋美久二 1991 「平安時代と甘南備寺」『薪誌』 薪誌刊行委員会

高橋美久二 1998 「高麗寺の謎」第二回山城町歴史シンポジウム資料『高麗寺 渡来文化の謎に迫る』

- 瀧川政次郎 1967 『京制並に都城制の研究』『法制史論叢』第2冊 角川書店
- 瀧浪貞子 1991 『日本古代宮廷社会の研究』 思文閣出版
- 竹原伸仁 1992 「南山城の古代瓦屋に関する一考察 一軒平瓦に見る雨仕舞と装飾について」
『考古学与生活文化』(同志社大学考古学シリーズ V)
- 太宰府町教育委員会 1979 『神ノ前竊跡』太宰府町文化財調査報告書第2集
- 伊達宗泰・小島俊次 1959 「桜井市児童公園の古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』11
奈良県教育委員会
- 伊達宗泰編 1981 『新沢千塚古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第39冊
奈良県教育委員会
- 田中重久 1938a 「高麗寺創建の研究」『考古学』9-6 東京考古学会
- 田中重久 1938b 「平安奠都前の寺址と其の出土瓦」『綜合古瓦研究』第一分冊(『夢殿論誌』十八)
奈良鵜飼郷舎
- 田中重久 1939 「瓦積及び甃積基壇の研究」『夢殿』19 奈良鵜飼郷舎
- 田中重久 1944a 「高麗寺址発掘調査報告」『聖徳太子御聖蹟の研究』 全国書房
- 田中重久 1944b 「広隆寺創立の研究」『聖徳太子御聖蹟の研究』 全国書房
- 田中重久 1947 「日本鑑異記に見える寺院址の研究」『史迹と美術』第180~182
- たなかしげひさ 1978 『奈良朝以前寺院址の研究』白川書院
- 田辺町教育委員会 1982 『田辺町遺跡分布調査概報』田辺町埋蔵文化財調査報告書第3集
- 田辺町教育委員会 1989 『堀切古墳群発掘調査報告書』田辺町埋蔵文化財調査報告書第11集
- 田村圓澄 1969 『飛鳥仏教史研究』塙書房
- 田村圓澄 1975 『飛鳥・白鳳仏教論』雄山閣
- 千賀久編 1988 『寺口忍海古墳群』新庄町文化財調査報告書第1冊 新庄町教育委員会
- 辻善之助 1944 『日本佛教史』第1巻上世篇 岩波書店
- 堤圭三郎 1964 「西山古墳群発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』 京都府教育委員会
- 都出比呂志 1974 「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』第20巻第4号
- 都出比呂志他 1990 『鳥居前古墳一総括編一』 大阪大学考古学研究室
- 角田文衛 1936 「廃光明山寺の研究 一蟹満寺釈迦如来坐像の傍証的論考一」『考古学論叢』1
考古学研究会
- 角田文衛 1996 『新修 国分寺の研究』(第六巻 総説) 吉川弘文館
- 坪井良平 1970 『日本の梵鐘』 角川書店
- 帝塚山大学考古学研究所 古墳部会 1990 『横穴式石室を考える 一近畿の横穴式石室とその系譜』
- 帝塚山大学考古学研究所 2004 『推古朝の四十六か寺をめぐる』シンポジウム報告書
- 寺沢 薫 1985 「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』 奈良県教育委員会
- 同志社大学校地学術調査委員会 1985 『下司古墳群』同志社大学校地学術調査委員会調査資料 No. 19

- 同志社大学歴史資料館 2010 『南山城の古代寺院』同志社大学歴史資料館調査研究報告第9集
- 百橋明徳 1983 『飛鳥・奈良絵画』日本の美術 No.204 至文堂
- 内藤政恒 1957 「奈良朝の戲画瓦について」『美術研究』194 美術研究所
- 内藤政恒 1961 「奈良朝の戲画」『世界考古学大系』日本4月報12 平凡社
- 中井真孝 1973 『日本古代の仏教と民衆』評論社
- 長岡京市教育委員会 1981 「恵解山古墳第3次発掘調査概要」『長岡京市文化財調査報告書第8冊』
- 長岡京市教育委員会 1992 『長法寺南原古墳の研究』長岡京市文化財調査報告書第30冊
- 中島 正 1990a 「京都府山城町高麗寺跡出土の線刻平瓦」『考古学雑誌』76→2
- 中島 正 1990b 「山背における播磨国府系瓦出土の背景」『今里幾次先生古稀記念 播磨考古学論叢』
今里幾次先生古稀記念論文集刊行会
- 中島 正 1991 「相楽郡木津町鹿背山瓦窯出土の古瓦」『京都考古』第61号 京都考古刊行会
- 中島 正 1993 「南山城における平安初期古瓦の様相」『平安京歴史研究』
杉山信三先生米寿記念論集刊行会
- 中島 正 1997a 「山背の古墳と寺院」『渡来系氏族の古墳と寺院』(『季刊考古学』第60号)
- 中島 正 1997b 「南山城における伽藍造営の伝播」『堅田 直先生古希記念論文集』
- 中島 正 2003 「高麗寺式軒瓦の様相」(第6回シンポジウム『飛鳥白鳳の瓦づくり VI』資料)
奈良文化財研究所
- 中島 正 2006 「7世紀における伽藍配置」『考古学ジャーナル』No.545 (特集 古代寺院の伽藍配置)
- 中島 正 2007a 「棚倉の地名とその広がりについて ―恭仁京造営に関連して―」『地名研究』第5号
- 中島 正 2007b 「恭仁宮と京の実態」『都城 ―古代日本のシンボリズム―』青木書店
- 中島 正 2009 「泉津周辺の都市的景観」『シンポジウム記録6
現代に生きる遺跡・古墳時代の備讃瀬戸・都城周辺の都市的景観』考古学研究会
- 中島 正 2010a 「蟹満寺旧境内発掘調査概要」『蟹満寺銅造釈迦如来坐像修理報告書』蟹満寺
- 中島 正 2010b 「恭仁宮大極殿施入前の寺院に関する憶測」『考古学論叢』
坪井清足先生卒寿記念論文集
- 中島 正 2010c 「神雄寺」『南山城の古代寺院』同志社大学歴史資料館調査研究報告第9集
同志社大学歴史資料館
- 中島 正 2010d 「里麿寺」『南山城の古代寺院』同志社大学歴史資料館調査研究報告第9集
同志社大学歴史資料館
- 中島 正 2010e 「井手寺跡」『南山城の古代寺院』同志社大学歴史資料館調査研究報告第9集
同志社大学歴史資料館
- 中島 正 2014 「南山城の仏教遺跡について」『上代南山城における仏教文化の伝播と受容』
公益財団法人仏教美術研究上野記念財団研究報告書第四十冊
- 中谷雅治 1983 「恭仁宮の造作工事について」『角田文衛博士古稀記念古代学叢論』

- 中谷雅治・磯野浩光 1991 「山城」『新修国分寺の研究』(第2巻 畿内と東海道) 吉川弘文館
- 中津川保一 1969 「山城町高麗寺のこと」『日本の中の朝鮮文化』1 朝鮮文化社
- 奈良県立橿原考古学研究所 1996 『中山大塚古墳』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第82冊
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1985 「最近の発掘調査」『法隆寺考古展』展示図録
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1999 『道華百相』特別展図録第51冊
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館他 2001 『大古墳展 ヤマト王権と古墳の鏡』展示図録

東京新聞

- 奈良県立橿原考古学研究所編 1997 『下池山古墳 中山大塚古墳調査概報 付. 箸墓古墳調査概報』

大和の前期古墳2 学生社

- 奈良県立橿原考古学研究所編 1999 『黒塚古墳調査概報』大和の前期古墳3 学生社

- 奈良国立博物館 1970 『飛鳥白鳳の古瓦』東京美術

- 奈良国立文化財研究所 1958 『飛鳥寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第五冊

- 奈良国立文化財研究所 1960 『川原寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第九冊

- 奈良国立文化財研究所 1975 『奈良国立文化財研究所基準資料』II 瓦編2解説

- 奈良国立文化財研究所 1975 『平城宮跡発掘調査報告』VI

- 奈良国立文化財研究所 1978 『平城宮出土軒瓦型式一覧』

- 奈良国立文化財研究所 1979 『奈良山』III

- 奈良国立文化財研究所 1984 『平城宮出土軒瓦型式一覧(補遺編)』

- 奈良国立文化財研究所 2000 『古代瓦研究 I』(古代瓦研究会シンポジウム記録)

- 奈良国立文化財研究所 2005 『奈良山発掘調査報告 I』

- 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1981 『山田寺展』飛鳥資料館図録第八冊

- 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター 1983 『飛鳥白鳳寺院関係文献目録』

- 西田 弘 1989 「小川廃寺」『近江の古代寺院』 近江の古代寺院刊行

- 八田達男 1989 「南山城蟹満寺にみる古代寺院の歴史的展開

—本尊銅造釈迦如来坐像の来歴を中心として—」『龍谷史壇』93・94

- 八賀 晋 1981 『図説日本の古典』第三巻月報、集英社

- 花園大学文学部考古学研究室 1997 『黄金塚2号墳の研究』花大考研報告10

- 花谷 浩 1995 「出土古瓦からみた本薬師寺堂塔の造営と平城移建について」『展望考古学』

考古学研究会40周年記念論文集

- 濱田 隆 1985 「山岳信仰の足跡」『山岳信仰の遺宝』奈良国立博物館特別展図録

- 林 享 1987 「大山崎町出土軒瓦」『長岡京古瓦聚成』向日市埋蔵文化財調査報告書 第20集

- 林 博通 1989 「穴太廃寺」『近江の古代寺院』 近江の古代寺院刊行会

- 速水 侑 1986 『日本仏教史 古代』吉川弘文館

- 菱田哲郎 1988 「瓦の範と製作技術—高麗寺系軒丸瓦の検討—」

- 菱田哲郎 2000 「山背の山田寺式軒瓦」第4回シンポジウム『飛鳥白鳳の瓦づくり IV』資料
奈良国立文化財研究所
- 菱田哲郎 2005 「古代日本における仏教の普及」『考古学研究』52-3 考古学研究会
- 菱田哲郎 2013 「国分寺と窯業生産」『国分寺の創建』組織・技術編 吉川弘文館
- 兵庫県教育委員会 1987 『小犬丸遺跡Ⅰ』兵庫県文化財調査報告書第47冊
- 星間孝志 2000 「寺谷廃寺の創建瓦」『古代瓦研究 1』(古代瓦研究会シンポジウム記録)
奈良国立文化財研究所
- 福山敏男 1968 「聖徳太子時代の寺院」『日本建築史研究』 墨水書房
- 福山敏男 1978 『奈良朝寺院の研究』 綜芸舎
- 藤井直正 1984 「山岳寺院」『新版仏教考古学講座』第二巻寺院 雄山閣 出版
- 藤沢一夫 1938 「山城北野廃寺」『考古学』9-2
- 藤沢一夫 1961 「屋瓦の変遷」『世界考古学大系』日本 4 平凡社
- 藤沢一夫 1965 「四天王寺出土の古代屋瓦」『仏教芸術』56 毎日新聞社
- 藤沢一夫、堀江門也 1968 『岸边瓦窯跡発掘調査概報』大阪府教育委員会
- 二葉憲香 1962 「大化改新と仏教」『古代仏教思想史研究』 永田文昌堂
- 星野猷二 1981 「鐙瓦製作と分割型」『考古学雑誌』第六七巻第二号
- 星野猷二 2000 『塩澤家蔵瓦図録』 伏見城研究会
- 埋蔵文化財研究会 1997 『古代寺院の出現とその背景』(第42回埋蔵文化財研究会資料)
- 町田章編 1989 『古代の宮殿と寺院』(古代史復元8 講談社)
- 宮城県多賀城跡調査研究所・宮城県教育委員会 1982 『多賀城跡 政庁跡本文編』
- 向日市教育委員会 1987 『長岡京古瓦聚成』向日市埋蔵文化財調査報告書 第20集
- 向日市教育委員会 1988 『物集女車塚古墳』向日市埋蔵文化財調査報告書 第23集
- 向日市教育委員会 2014 『元稲荷古墳』向日市埋蔵文化財調査報告書 第101集
- 陸日出典 1986 「奈良朝山岳寺院の実相」『論集日本仏教史』二
- 光島市太郎・川勝政太郎 1930 「山瀧廃寺発見の古瓦」『京都史蹟』1-7
- 村上久和・吉田寛・宮本工 1987 「豊前における初期瓦の一樣相」『古文化談叢』第18集
- 毛利 久 1942 「奈良春日山中の香山寺社について」『考古学雑誌』第32巻第7号
- 森 郁夫 1977 「畿内における平城宮式軒瓦の一側面」『國學院雑誌』78-9 國學院大學
- 森 郁夫 1986 「古代山背の寺院造営」『學叢』第八号 京都国立博物館
- 森 郁夫 1998 『日本古代寺院造営の研究』
- 森岡秀人 1990 「山城地域」『弥生土器の様式と編年』 木耳社
- 森下 衛 1988 「南山城における川原寺式軒丸瓦について」『史想』第二一号

- 毛利光俊彦 1983 「近畿地方の瓦窯」『仏教芸術』148 毎日新聞社
- 山崎信二 1983 「後期古墳と飛鳥白鳳寺院」『文化財論叢』 奈良国立文化財研究所
- 山路直充 2011 「寺の空間構成と国分寺 ～寺院地・伽藍地・付属地～」『国分寺の創建』思想・制度編
吉川弘文館
- 山城町 1987 『山城町史』本文編
- 山城町 1990 『山城町史』資料編
- 山城町 1997 『椿井大塚山古墳の謎にせまる』第1回山城町歴史シンポジウム資料
- 山城町 1998 『高麗寺 渡来文化の謎にせまる』（山城町総合文化センター開館1周年記念
第2回山城町歴史シンポジウム資料）
- 山城町 2001 『戦後考古学の原像 ～椿井大塚山古墳と戦後考古学の到達点～』
椿井大塚山古墳国史跡指定記念 第3回山城町歴史シンポジウム資料
- 山城町教育委員会 1989a 『山城町遺跡地図』京都府山城町埋蔵文化財調査報告書 第6集
- 山城町教育委員会 1989b 『史跡高麗寺跡』京都府山城町埋蔵文化財調査報告書第7集
- 山城町教育委員会 1994 「蟹満寺第3次調査」『山城町内遺跡発掘調査概報Ⅴ』
京都府山城町埋蔵文化財発掘調査報告書 第13集
- 山城町教育委員会 1995 『蟹満寺』京都府山城町埋蔵文化財調査報告書第14集
- 山城町教育委員会 1998 『昭和28年 椿井大塚山古墳発掘調査報告』
（京都府山城町埋蔵文化財発掘調査報告書第20集）山城町
- 山城町教育委員会 1999 『椿井大塚山古墳』（京都府山城町埋蔵文化財発掘調査報告書第21集）
- 山城町教育委員会 2000a 『高井手瓦窯跡』（京都府山城町埋蔵文化財調査報告書第23集）
- 山城町教育委員会 2000b 『上粕東遺跡』（京都府山城町埋蔵文化財調査報告書第24集）
- 山城町教育委員会 2000c 「Ⅰ 椿井天上山古墳第1次調査」『山城町内遺跡発掘調査概報Ⅸ』
京都府山城町埋蔵文化財調査報告書第22集
- 山城町教育委員会 2001a 『神童子稲葉古墳群』京都府山城町埋蔵文化財発掘調査報告書第27集
- 山城町教育委員会 2001b 『光明山寺跡』京都府山城町埋蔵文化財発掘調査報告書 第28集
- 山城町教育委員会 2001c 「椿井天上山古墳第2次調査」『山城町内遺跡発掘調査概報Ⅹ』
京都府山城町埋蔵文化財調査報告書 第26集
- 山城町教育委員会 2002a 『車谷古墳群』京都府山城町埋蔵文化財発掘調査報告書第31集
- 山城町教育委員会 2002b 『史跡高麗寺跡保存活用計画策定報告書』
（京都府山城町文化財保存管理計画策定報告書第1集）
- 山中 章 1987 「長岡京の造営と瓦」『長岡京古瓦聚成』
- 山中 章 1989 「長岡宮式軒瓦と寺院の修理 ―延暦10年の山背国の浮図の修理をめぐる―」
『古瓦図考』
- 八幡市教育委員会 1971 『西山廃寺（足立寺）発掘調査概報』

- 八幡市教育委員会 1978 『志水廃寺跡発掘調査概報』
- 八幡市教育委員会 1985 『平野山瓦窯跡発掘調査概報』
- 八幡市教育委員会 1990 『ヒル塚古墳発掘調査概報』
- 吉村武彦 2010 『ヤマト王権』シリーズ日本古代史② 岩波書店
- 米田敏幸 1981 「古墳時代前期の土器について」『八尾南遺跡』 八尾市教育委員会
- 龍谷大学文学部考古学資料室 1972 『南山城の前方後円墳』龍谷大学文学部考古学資料室研究報告 1
- 和束町 1995 『和束町史』第一巻

[既発表論文対応]

本書は、以下の既発表論文を大幅に加筆・修正して再録しているところがある。原典と本書の対応関係は、以下の通りである。他は、新たに執筆したものである。

第一部 仏教の受容とその主体 ― 南山城における古墳と寺院 ―

第一章 仏教の受容と南山城の前方後円墳

第一節 椿井大塚山古墳と三角縁神獸鏡

1. 椿井大塚山古墳の築造過程

「椿井大塚山古墳の築造過程」『東アジアの古代文化』99号 大和書房 1999年

第二節 椿井大塚山古墳の被葬者像

1. 墳丘からみた被葬者像

「椿井大塚山古墳」『季刊考古学』第65号（前・中期古墳の被葬者像）雄山閣出版 1998年

第二章 歴史認識の成立と横穴式石室の導入

第三節 南山城における古墳と寺院

「山背の古墳と寺院」『季刊考古学』第60号（渡来系氏族の古墳と寺院）雄山閣出版 1997年

第三章 仏教の受容と渡来人

第一節 高麗寺と推古朝の寺四十六所

「山背・近江と東國の寺々」『推古朝の四十六か寺をめぐって』（シンポジウム資料）

帝塚山考古学研究所 2003年

第二節 高句麗移民の痕跡

「高句麗移民の痕跡 ～史跡高麗寺跡の発掘調査成果から～」

『環東海交流 高句麗と倭』第1冊 東北亜歴史財団（大韓民国）2010年

第三節 山背画師と高麗寺跡出土観世音菩薩像線刻平瓦

「京都府山城町高麗寺跡出土の仏像線刻平瓦」『考古学雑誌』76-2 1990年

第二部 国家仏教の完成と在地寺院 ― 南山城における古代寺院とその出土瓦 ―

第一章 飛鳥白鳳寺院の創建

第一節 7世紀の伽藍配置

「7世紀における伽藍配置」『考古学ジャーナル』No. 545（特集 古代寺院の伽藍配置）2006年

第二節 南山城における伽藍造営の伝播

「南山城における伽藍造営の伝播」『堅田直先生古稀記念論文集』

堅田直先生古稀記念論文集刊行会 1997年

第三節 南山城における古瓦の特質

1. 山田寺式軒丸瓦導入以前の古瓦の様相

「山背の「船橋麿寺式」軒丸瓦」『古代瓦研究Ⅰ』 奈良国立文化財研究所 2000 年

2. 川原寺式軒丸瓦の様相

「高麗寺式軒瓦の様相」『古代瓦研究Ⅲ』 奈良文化財研究所 2003 年

第四節 蟹満寺と丈六金銅仏の謎

「蟹満寺発掘調査からの検証」『国宝蟹満寺釈迦如来坐像』 八木書店 2011 年

第五節 白鳳の山林寺院 山瀧寺

「出土遺物 1 瓦類」『山瀧寺跡発掘調査報告書』

京都府宇治田原町埋蔵文化財調査報告書第 2 集 宇治田原町教育委員会 2006 年

第二章 二つの都城と古代寺院

第一節 恭仁宮と京の実態

「恭仁宮と京の実態」『都城 ―古代日本のシンボリズム 飛鳥から平安京へ―』

青木書店 2007 年

第二節 恭仁宮大極殿施入前の山背国分寺

「恭仁宮大極殿施入前の寺院に関する憶測」『坪井清足先生卒寿記念論文集』

坪井清足先生卒寿記念論文集刊行会 2010 年

第三節 橘諸兄と井手寺の造営

「井手寺跡」『南山城の古代寺院』同志社大学歴史資料館調査研究報告第 9 集

同志社大学歴史資料館 2010 年

第三章 国家仏教の完成と崩壊

第一節 日本霊異記と山寺

「日本霊異記と山寺」『季刊考古学』別冊 4（考古学から古典を読む） 雄山閣出版 1993 年

第二節 山背における播磨国府系瓦出土の背景

「山背における播磨国府系瓦出土の背景」『播磨考古学論叢』（今里幾次先生古稀記念論文集）

今里幾次先生古稀記念論文集刊行会 1990 年

第三節 南山城における平安初期古瓦の様相

「南山城における平安初期古瓦の様相」『平安京歴史研究』（杉山信三先生米寿記念論文集）

杉山信三先生米寿記念論文集刊行会 1993 年

氏族仏教と国家仏教の相克

— 南山城における仏教の受容と展開 —

学位請求者 史学 専攻
中 島 正

内 容 の 要 旨

1. 本研究の問題意識と目的

国家仏教の観点で古代の日本仏教史を概観すると、その定義は実に曖昧であり、一応、大化改新から平安仏教の成立までが広い意味での「国家仏教」の時代と認識され、古代国家権力による仏教の保護と統制を基本的な要素として定義される。しかし、この古代国家の始点を律令国家体制の成立に求めるならば、狭義の「国家仏教」の時代は天武朝以後の奈良時代に限定され、「奈良仏教」と同義となる。さらに、律令国家体制の頂点にある天皇の宗教的権威を構成する神祇と仏教の一元化が揺らぎ分裂する天平期以後を除くと、真の意味での「国家仏教」の時代は、天武朝以後の奈良時代前期（盤亀・養老年間）までに限定されるのである。逆に、「国家」というものをより幅広く捉え、蘇我氏が天皇の外戚として当代ならぶものない政治的地位を確立し、法興寺において仏教の保護統制という国家的な役割をになったと評価すれば、推古朝まで「国家仏教」の形成を遡らせることは可能である。法興寺は蘇我氏の氏寺ではあっても、天武・持統朝でさえ官大寺として特別な存在であった。さらに、国家から国家へとするいわゆる「公伝」のあり方を、天皇の仏教受容の如何に関係なく考えるならば、欽明朝に「国家仏教」の起点を置くこともあながち無理とは言えないのである。ならば、「国家仏教」の内実はどうであろうか。

中央集権的律令国家体制を確立した天武朝は、中央の大寺と国衙単位の地方仏教施設による全国官寺体制を志向して氏寺（私寺）を否定するが、天武・持統朝（白鳳期）は氏寺の造営が全国に爆発的に波及する時期である。奈良時代前期（盤亀・養老年間）には、「寺院併合令」により氏寺の整理統合政策を推進するが、官僧集団の形成と官寺体制の整備が行われた国分寺造営事業の最終的な推進者は、三世一身法、墾田永年私財法の下で力をつけた郡司ら地方豪族層であり、彼らこそ各地の氏寺（私寺）の造営主体者な

のである。日本古代の仏教は、国家権力により保護・統制がなされる従来の「国家仏教」の視点だけではその実相に迫ることはできない。むしろ、「国家仏教」と「氏族仏教」の相克のうちに、その実像があらわれるのではないだろうか。

本論では、考古学的研究手法により、現在の京都府南部地域の南山城における仏教遺跡を対象として、「国家仏教」と「氏族仏教」の相克を視点とする仏教文化の受容と伝播の過程を追うことにより、その特異性と普遍性を論述する。

2. 本研究の構成ならびに各章の要約

第一部「仏教の受容とその主体」では、仏教文化導入の背景として、氏寺造営の主体者である地域豪族の特色とその動向について、南山城の古墳と初期寺院の様相から把握する。第一章「仏教の受容と南山城の前方後円墳」では、まず、3世紀後半の大前方後円墳である椿井大塚山古墳の実態について確認し、「邪馬台国を盟主とする倭国の時代」から「ヤマト王権の時代」への変革期、初代のヤマト王権に拮抗しその権威を簞簞しようと企てた勢力が『記・紀』に伝承され、しかも箸墓古墳や柳本行燈山古墳などの王陵との結びつきが伝えられていることを示した。そのうえで、椿井大塚山古墳で行われた「二つの墓前祭祀」の比較から、5世紀後半段階で『記・紀』に記載された伝承が、成立していることを示した。

第二章「歴史認識の成立と横穴式石室の導入」では、まず、山城における首長墳の系譜を概観し、古墳時代後期の南山城における突出した勢力の不在状況を把握するとともに、5世紀後半以降の渡来人の動向と横穴式石室の導入について論じた。そして、南山城における古代氏族を概観し、そのうえで、後期古墳と初期寺院の相関関係から、北山城における秦氏と南山城における狛（高麗）氏の動向を顕在化させた。最後に、第三章「仏教の受容と渡来人」で

は、南山城における狛（高麗）氏の渡来からその後の活躍の実態を確認し、仏教文化の導入期にあってその地理的環境と渡来人の存在が、南山城の仏教文化を大きく特徴付けていることを示した。

第二部「国家仏教の完成と在地寺院」では、南山城における古代寺院とその出土瓦の分析を通して、「在地」の観点から、主に古代寺院にあらわれた「私」的な要素と「公（官）」的な要素を探ることにより、「在地の仏教」と「中央の仏教」両者のあり方を論じた。第一章「飛鳥白鳳寺院の創建」では、まず、南山城における飛鳥白鳳寺院の実態を概観し、高麗寺、蟹満寺、平川麿寺が南山城の拠点寺院として、氏寺でありながら「公（官）」的な要素が強いことを示した。そのうえで、7世紀後半の川原寺式軒丸瓦と瓦積基壇の採用により、この地域で伽藍造営が急速に進展する様相を示した。

第二章「二つの都城と古代寺院」では、まず、奈良山を介して近接する平城京、南山城に遷都した短命の都・恭仁京の二つの都城が、南山城の既存寺院に与えた影響を概観し、第一章で抽出した拠点寺院に加え、新たに井手寺が造営される様子を確認した。そして、聖武朝における仏教政策と山城における国分寺の造営の実態に迫った。最後に、第三章「国家仏教の完成と崩壊」では、国分寺の造営と大仏造立により国家仏教の完成とも目される聖武朝以後の南山城の寺院を概観し、桓武朝にいたる「山寺」の存在意義を示した。そのうえで、南山城の寺院ネットワークにも変化が生じたこと、国単位での仏教統制の体制が国分寺を中心として成立し山背国衙の影響が大きくなることを論じた。

3. 結論

南山城の仏教遺跡を考える場合、仏教文化の導入期にあってその地理的環境と渡来人の存在は大きな意義をもつ。時の中央政権が所在する大和国と地方をつなぐ大動脈である大和川と木津川にあって、奈良山に接する木津川の屈曲部はまさに北の玄関口であり、南山城の地は人と文化が行き交う重要地点である。にもかかわらず、『記・紀』には武埴安彦に代表されるこの地での反乱伝承が頻出する。3世紀末、三十数面の三角縁神獣鏡が出土した椿井大塚山古墳の出現以後、5世紀代には強大な地方勢力は久津川古墳群に引き継がれるが、その勢力が衰退した6世紀代には、古墳で見える限りこの地域での大きな勢力は存在しない。7世紀初頭の仏教文化導入期、南山城は既存の中小勢力と「今来」の渡来人が混在する地域であった。そのような中、この地で蘇我氏との強固な結びつきをもって、高麗寺が造営

されるのである。その背景となっているのは、強力な地域支配勢力による新たな祖先崇拜のシステム導入としての寺院造営ではなく、新たな理念としての仏教文化の受容に適した渡来人としての役割と中央政権の強い意思によるものと考えられる。

日本列島における仏教文化の導入期、旧来の豪族たちの伝統的な富と力を基盤とした「氏姓制度」による秩序は、蘇我氏への権力の集中により淘汰され、結果的に東アジア全体の共通秩序である「律令制」導入へと大きく動き出す。交通の要衝である南山城においては、旧来の勢力はすでにこの時期に弱体化しており、時の中央政権の新たな政治秩序を柔軟に受け入れる素地を持っていた。しかも、モザイク状の地域勢力は、それぞれに新たな秩序の受容体となるのである。その端緒は高句麗系渡来氏族・高麗（狛）氏により開かれる。

南山城における飛鳥白鳳期の寺院造営の伝播は、常に高麗寺を出発点とする。飛鳥寺や川原寺と大津宮周辺寺院との軒瓦の同范関係は、時の中央政権の強い関与を示しており、この状況は平城京・恭仁京・国分寺の造営とも連動する。南山城における中核寺院の存在は、一貫してその官的要素の強さを示しており、氏族の枠を越えた寺院ネットワークを当初の段階からすでに備えていたようである。このことは、我が国の仏教文化受容の特色として説かれることの多い「氏族仏教から国家仏教へ」とする図式が、この南山城では極めて早い段階で成立していた可能性を示している。あるいは、この図式そのものが存在しないのかもしれない。氏寺としての性格が希薄であることは、この地域の古代寺院における大きな特色とすることが可能である。高麗寺、蟹満寺、平川麿寺の様相には、注目すべきものが特に多い。

奈良時代、諸国国分寺体制が成立すると、南山城の寺院ネットワークにも変化が生じる。国単位での仏教統制の体制が国分寺を中心として成立し、中央政権の強い意思を背景とした中核寺院や官立寺院と中小の在地寺院との二極化が進行するものの、中央政権の意思を介した山城国衙の影響が大きくなるようである。そして、この影響は、神仏習合と相まって山間部に立地する境界の寺に広がる新たな寺院ネットワークを形成していくのである。このことは、従前からの飛鳥白鳳創建寺院の変質を促し、新たに創建された寺院との結び付きを生じさせた。特に、特別な験力を得るため、あるいは特別な儀礼（法会）を必要とする聖地（境界、湧水、岩座等）に開かれた寺院には、すでに新たな時代の仏教への期待が感じられる。国家仏教の完成を示す山

城国分寺や井手寺に対し、笠置寺、普賢寺、神雄寺（馬場南遺跡）の存在意義は大きい。特に、神雄寺においては、日常的な湧水（聖水）の祀りとともに、特別な儀礼（大規模な燃燈供養、歌会（仏前唱歌）、舞楽等）の様相が明らかとなり、仏堂からは多量の塑像片が出土している。古代寺院における法会の実態を知る貴重な遺例である。

南山城における古代寺院の普遍性と特異性は、仏教文化導入の初期にあつてはその先取性にある。そこには、交通の要衝としての木津川が存在と、渡來人を介した地域勢力のモザイク状構造があつた。しかし、その先取性は中央政権の強力な意思のもとに、氏寺には公（官）的要素が本来備わっていた。このことは、諸国国分寺体制の成立にあつても、国衙の管理体制へのスムーズな順応を可能としたのである。

南山城における古代寺院とその出土瓦を見る限り、従来説かれてきた氏族仏教から国家仏教へとする図式は成立しない。むしろそこにあるのは、古代寺院における公（官）的要素の軽重であり、地域の拠点寺院であるか否かの差である。氏族仏教と国家仏教の相克において、公的側面が表面化していく過程と理解したい。ここに、南山城における古代寺院の普遍性と特異性があるのである。

氏族佛教와 國家佛教의 相克

— 南山城에 있어서 불교의 수용과 전개 —

학위청구자 사학 전공
나카시마 마사시

내 용 의 요 지

1. 본 연구의 문제의식과 목적

國家佛教의 관점에서 고대의 일본 불교사를 개관하면 그 정의는 실로 모호하다. 우선 大化改新으로부터 平安佛教의 성립까지 넓은 의미에서 「國家佛教」의 시대로 인식되어, 고대 국가권력에 의한 불교의 보호와 통제를 기본적인 요소로 정의되었다. 그러나 이 고대국가의 시점을 律令國家體制의 성립이라고 한다면, 협의의 「국가불교」 시대는 天武朝 이후의 나라시대에 한정되어, 「奈良佛教」와 같은 의미가 된다. 또한 율령국가체제의 정점인 천황의 종교적 권력을 구성하는 신기와 불교의 일원화가 동요하여 분열되는 天平期 이후를 제외하면 진정한 의미의 「국가불교」 시대는 天武朝 이후인 나라시대 전기(靈龜・養老年間)까지로

한정된다. 반대로 「국가」를 보다 넓은 의미로 보면 蘇我氏가 천황의 외척으로서 당대에 건주기 어려울 정도로 정치적 지위를 확립하고, 法興寺에 불교의 保護統制라는 국가적 역할을 하였다고 평가한다면, 推古朝까지 「국가불교」의 형성을 거슬러 올라갈 가능성이 있다. 法興寺는 蘇我氏의 氏寺이기는 하였지만, 天武・持統朝에만 官大寺로서 특별한 존재였다. 더욱이 국가에서 국가로 이른바 「公傳」의 방법을 천황의 불교수용의 여하와 관계없다고 생각하면, 欽明期에 「國家佛教」의 시점을 산정하는 것에 무리는 없다고 본다. 만약 그렇다면 「國家佛教」의 내실은 어떻게 되는 것인가.

중앙집권적 율령국가체제를 확립한 天武朝는 중앙의 대사와 관아단위의 지방불교시설에 의해 전국 국가사찰체제를 지향하는 氏寺를 부정하지만, 天武・持統朝(白鳳期)는 氏寺의 조영이 전국에 폭발적으로

의해 氏寺의 整理統合政策을 추진하였고, 官僧集團의

형성과 官寺體制의 정비가 이루어지는 國分寺造營事業의 최종적인 추진자는 三世一身法, 額田永年私財法の 아래에서 힘을 쓴 군사들인 地方豪族層이었으며, 그들이야말로 각지의 氏寺의 조영주체자였다. 일본 고대의 불교는 국가권력에 보다 보호・통제가 이루어져 종래의 「국가불교」의 시점뿐만 아니라 실상에 다가가기 어렵다. 오히려 「국가불교」와 「씨족불교」의 양극상에서 그 실상을 밝힐 수 있을 것으로 본다.

본 논문에서는 고고학적 연구수법에 의하여 현재 京都府南部地域の 南山城에 있는 불교유적을 대상으로 「국가불교」와 「씨족불교」의 양극에 대한 시점을 둔 불교문화의 수용과 전파의 과정을 구명하고, 이에 대한 상이성과 보편성을 논술하고자 한다.

2. 본 연구의 구성과 각 장의 요약

제 1 부 「불교의 수용」과 그 주체에서는 불교문화도입의 배경으로서, 氏寺조영의 주체자인 지역호족의 특색과 그 동향에 대하여 미나미야마시로와 고분과 초시사원의 양상으로부터 파악하였다. 제 1 장 「불교의 수용과 南山城의 전방후원분」에서는 먼저 3세기 후반의 대형전방후원분인 椿井大塚山古墳의 실태에 대하여 확인하고, 「邪馬台國」을 맹주로 한 倭國시대」부터 「야마토왕국시대」로의 변혁기, 초기 야마토왕권에 대응하는 권위를 찬탈하려는 세력이 「記・紀」에 전승되었다. 게다가 箸墓古墳과 柳本行燈山古墳 등 왕릉과의 관련이 엿보인다. 椿井大塚山古墳에서 일어난 「두 가지 墓前祭祀」의 비교로 보면 5세기 후반 단계에서 「記・紀」에 기재된 전승이 성립되었다는 것을 알 수 있다.

제 2 장 「歷史認識의 성립과 横穴式石室의 도입」에서는 먼저 山城에 있어서 首長墳의 계보를 개관하고, 고분시대후기의 南山城에 돌출된 세력의 부재상황을 파악함으로써 5 세기 후반 이후 渡來人의 동향과 横穴式石室의 도입을 논하였다. 그리고 南山城의 古代氏族을 개관하고, 후기고분과 초기사원의 상관관계로부터 北山城의 秦氏와 南山城의 狛(高麗)氏의 동향을 顯在化하였다. 마지막으로 제 3 장 「불교의 수용과 渡來人」에서는 南山城의 狛(高麗)氏의 도래부터 이후에 활약한 실태를 확인하고, 불교문화의 導入期의 지리적 환경과 도래인의 존재가 南山城의 불교문화를 크게 특징짓는 것으로 보인다.

제 2 부 「국가불교의 완성과 在地寺院」에서는 南山城의 고대사원과 각 유적에서 출토된 기와를 분석하여 「在地」의 관점에서 주된 고대사원에 나타나는 「私」적인 요소와 「公(官)」적인 요소를 찾아보고, 이를 통해서 「在地의 불교」와 「중앙의 불교」간의 특징을 논하였다. 제 1 장 「飛鳥白鳳寺院의 創建」에서는 먼저 南山城의 飛鳥白鳳寺院의 실태를 개관하고, 高麗寺, 蟹滿寺, 平川廢寺가 南山城의 拠点寺院으로서 氏寺인 점을 들어 「公(官)」적인 요소가 강한 것을 알 수 있었다. 더욱이 7 세기 후반의 川原寺식 수막새와 瓦積基壇의 채용으로 보아 이 지역에서 伽藍造營이 급속도로 진전된 양상을 파악되었다.

제 2 장 「두 개의 都城과 古代寺院」에서는 먼저 奈良山을 소개하고 근접한 平城京, 南山城로 遷都한 短命의 都·恭仁京 두 개의 都城이 南山城의 既存寺院에 끼친 영향을 개관하고, 제 1 장에서 추출한 拠点寺院에 더해져 새로운 井手寺가 조영된 점을 확인하였다. 그리고, 聖武朝의 불교정책과 山城의 國分寺조영의 실태를 파악하였다. 마지막으로 제 3 장 「국가불교의 완성과 붕괴」에서는 國分寺의 조영과 大佛造立에 의한 국가불교의 완성에도 주목하여 聖武朝 이후의 南山城의

寺院을 개관하여 桓武朝까지의 「山寺」의 존재의의를 검토하였다. 南山城의 사원네트워크에 변화가 일어나는 점과 國單位의 불교통제체제가 國分寺를 중심으로 성립되어 山背國衙의 영향이 컸다는 점을 논하였다.

3. 결론

南山城의 불교유적을 살펴본 경우, 불교문화의 도입기에 있었던 지리적 환경과 도래인의 존재는 큰 의미가 있다고 본다. 중앙정권이 소재한 大和國 지방을 잇는 大動脈인 大和川과 木津川가 있으며, 奈良山에 인접한 木津川의 屈曲部는 실로 북쪽의 현관이었으며, 南山城는 사람과 문화가 교류하는 중요지점이었다. 그럼에도 불구하고 「記·紀」에는 武埴安彦에 代表하는 곳으로 反亂傳承이 頻出하였다. 3世紀末, 三十數面の

三角縁神獸鏡이 출토된 椿井大塚山古墳의 출현 이후 5世紀代에는 강대한 地方勢力이 久津川古墳群까지 이어졌으며, 그 세력이 쇠퇴한 6世紀代에는 古墳만을 보았을 때 지역에서의 커다란 세력은 존재하지 않는다. 7 世紀初頭の 불교문화도입기, 南山城는 기존의 중소세력과 「今來」의 도래인이 혼재된 지역이었다. 이러한 중에 蘇我氏와의 강고한 관계로 高麗寺가 조영되었다. 그 배경에 있었던 것은 강력한 地域支配勢力에 의한 새로운 祖先崇拜의 시스템이 도입된 사원조영이 아닌 새로운 개념으로서 불교문화의 수용에 적절한 도래인의 역할과 중앙정권의 강한 의지라고 생각한다.

日本列島에 있어서 불교문화의 도입기, 旧來의 豪族들의 정통적인 풍부한 힘을 기반으로 한 「氏姓制度」에 의한 질서는 蘇我氏로의 권력의 집중으로부터 도태되어 결과적으로 동아시아 전체의 共通秩序인 「律令制」 도입으로 크게 움직인 듯 하다. 交通의 要衝인 南山城에는 旧來의 勢力은 이미 이 시기에 약화되어 중앙정권의 새로운 정치질서의 유연에 수용되어 素地를 얻었다. 하지만 모자이크상의 地域勢力은 각각 새로운 질서의 受容體가 되었다. 그 단서는 高句麗系 渡來氏族·高麗(狛)氏에 있다.

南山城의 飛鳥白鳳期の 사원조영의 전파는 대부분 高麗寺를 출발점으로 한다. 飛鳥寺와 川原寺, 그리고 大津宮周辺寺와의 막시 同范關係는 당시의 중앙정권이 강하게 관여하였다는 점을 시사한다. 이러한 상황은 平城京·恭仁京·國分寺의 조영과도 연동된다. 南山城에 있어서 中核寺院의 존재는 일괄하여 그 官的要素를 강하게 시사하며, 氏族의 범위를 넘어 사원네트워크를 당초의 단계부터 준비한 것으로 판단된다. 이러한 점은 일본의 불교문화수용의 특색으로서 설명되는 것이 많으며, 「氏族仏教에서 국가불교까지」라는 도식이 이 南山城에는 상당히 이른 단계에 성립되었을 가능성을 나타낸다. 또는 이 도식자체가 존재하지 않을 수도 있다. 氏寺로서의 성격이 희박한 점은 이 지역의 고대사원의 커다란 특색으로 볼 가능성이 있다. 高麗寺, 磐城寺, 平川廢寺의 양상에는 주목되는 점이 많다.

奈良時代에는 諸國國分寺体制이 성립되며, 南山城의 사원네트워크에도 변화가 일어난다. 國單位에서의 불교통제의 체제가 國分寺를 중심으로 성립되고, 중앙정권의 강한 의지를 배경으로 中核寺院과 官立寺院의 중소 在地寺院과의 二極化가 진행되며, 中央政權의 의지를 보인 山城國衙의 영향이 컸던 것으로

보인다. 그리고 그 영향은 神仏習合과 맞물려 山間部에 立地하는 境界의 寺에 넓게 새로운 사원네트워크를 형성하게 되었다. 이러한 점은 종전부터 鳥白鳳創建寺院의 變質을 추구하고 새롭게 창건된

사원과의 관계를 이루었다. 특히 특별한 驗力을 얻기 위하여나 특별한 儀禮(法會)를 필요로 하는 聖地(境界, 湧水, 岩座 등)에 위치하는 사원은 이미 새로운 시대의 불교를 기대하였다. 국가불교의 완성을 나타내는 山城國分寺와 井手寺에 대해 笠置寺, 龍興寺, 神雄寺(馬場南邊)의 존재의의는 크다. 특히 神雄寺에는 일상적인 湧水(聖水)를 기원하고 특별한 儀禮 대규모의 燃燈供養 歌会(佛前唱歌, 舞樂 등)의 양상이 밝혀졌으며, 불당에서는 다량의 塑像片이 출토되었다. 고대사원에 있어서 법회의 실태를 이르는 것은 중요한 遺存이다.

南山城의 고대사원의 보편성과 특이성은 불교문화도입의 초기에 先取生이 있다. 이러한 점은 交通의 要衝로서 木津川の

존재와 도래인을 개재시키는 地域勢力의 모자이크상의 구조가 있다. 그러나 그 先取生은 중앙정권의 강력한 의지에서 氏寺에는 公(官)적 요소가 본래 준비되었다. 이는 諸國國分寺体制의 성립에도 國衙의 管理體制로의 순조로운 順應을 가능하게 하였다.

南山城의 古代寺院과 출토기와만을 보면 氏族佛教에서 國家佛教로의 도식은 성립하지 않는다. 오히려 거기에 있는 것은 古代寺院의 公(官)적 요소의 輕重이며, 地域의 拠点寺院의 차가 있다. 氏族佛教과 國家佛教의 相克에 있어서 公的側面이 表面化되는 과정으로 이해하고자 한다. 여기에 南山城 古代寺院의 普遍성과 特異성이 있다고 생각한다.

Rivalry between “Clan Buddhism” and State Buddhism
—Acceptance and Development of Buddhism in
Southern Yamashiro Province of Ancient Japan—

NAKASHIMA Masashi

This dissertation discusses the nature of Buddhism in ancient Japan with particular reference to the case of the southern Yamashiro Province. The nature of Buddhism may be characterized by a rivalry between temples erected by local elites and a nationally-erected temple in the province. The discussion starts with the growth of local elites in the late third century, who eventually laid the foundation for the introduction of Buddhism in the seventh century. In the process of the introduction of Buddhism, people who moved from the Korean peninsula played an important role in the province. To achieve the purpose of this study, this dissertation is structured as follows: Part I) Introduction of Buddhism by local elites in southern Yamashiro, and Part II) State Buddhism and local Buddhist temples, each of which consists of three chapters.

In Chapter One, entitled “Introduction of Buddhism and keyhole-shaped tumuli in southern Yamashiro,” the author argues that some of old articles recorded in the *Kojiki* and the *Nihon Shoki*, compiled in 712 and 720 respectively, may be facts because of the possibility that local people in the late fifth century were aware of third century history. This possibility is based on the evidence for late fifth century funerary rituals taking place at the foot of the late third century Tsubai-Otsukayama keyhole-shaped tumulus.

In Chapter Two, entitled “Recognition of history and the introduction of corridor-style horizontal burial chambers,” the author traces evidence for Korean immigrants in the Yamashiro province, in particular the Koma Clan in southern Yamashiro. To achieve the goal, the author investigates the locations of seventh century Buddhist temples and nearby sixth century tumuli.

In Chapter Three, entitled “Introduction of Buddhism and Korean immigrants,” the author shows that two factors contributed to the introduction of Buddhism to southern Yamashiro. One is its geographical position, located along the Kizu River that flows into the eastern end of the Inland Sea which was the major transportation route to the Korean peninsula and Chinese continent. The other is the presence of Korean immigrants, particularly the Koma Clan.

In Part II, the author discusses the nature of “local Buddhism” and “state Buddhism” based on careful analyses of rooftiles and Buddhism temple sites, in attempt to distinguish “local elite clan” elements from “central government” elements. In its Chapter One, entitled “Erection of Buddhist temples in the seventh century,” the author discusses that the Koma, Kaniman, and Hirakawa Buddhist temples built in the seventh century acted as the “core” of southern Yamashiro and that “central government” elements were apparent in these temples. In particular, the adoption of the

Kawahara temple type eaves tiles and the foundation platform constructed with roof tiles expedited the spatial spread of temple compound in this province.

In Chapter Two, entitled "Two capitals and ancient Buddhist temples," the author discusses the possible influence of the Kuni Palace (741-745) built in southern Yamashiro and the Nara Imperial Palace (710-784) located only ten kilometers south of Kuni on the three temples erected in the seventh century in this region. Archaeologically, the Ide Buddhist temple was newly erected in the eighth century in this province, in addition to the Yamashiro Provincial Temple built at the site of the Kuni Palace after 745.

In the final Chapter Three, entitled "Rise of state Buddhism system and its collapse," the author traces a temporal change in network of local Buddhist temples from the middle eighth century to the end of the eighth century. With the completion of the colossal Buddha statue at the Todai-ji temple or the central Provincial Temple in 752, the state Buddhist system characterized by network of the provincial temples all over Japan reached its peak. Soon after the 752, new type of Buddhist temples appeared, in particular in mountainous areas. The appearance of this new type of Buddhist temples also affected a network of local temples in southern Yamashiro. In this process, local temples came to be under the control of the Yamashiro provincial government, rather than the central government of Nara.

Though it may be repetitive, the author considers it necessary to summarize the points of this dissertation here. In consideration of archaeological sites related to Buddhism in the southern Yamashiro, its geographical environment and the presence of Korean immigrants were important factors. First, the southern Yamashiro acted as the northern entrance to Yamato (present Nara), where the central polity was located in the preceding Kofun Period (ca. middle third to early seventh centuries) and the Asuka Period (seventh century). Yet, the *Kojiki* and the *Nihon Shoki* record several articles on rebellions of local elites in Yamashiro against the central polity of Yamato. Indeed, a local polity does seem to be very dominant during the early and middle Kofun Period (before the sixth century). In the late third century, the Tsubai-Otsukayama keyhole-shaped tumulus of 180 meters was built, where more than 33 Wei Dynasty Chinese bronze mirrors were deposited with the dead. In the fifth century, the Kutsukawa-Kurumazuka keyhole-shaped tumulus of 180 meters were built, where oblong-chest-shaped sarcophagus was installed. This type of sarcophagus was used among keyhole-shaped tumuli of more than 300 meters in the central polity at that time.

The strength of local elites in the southern Yamashiro declined in the sixth century because there were no major tumuli dated to the sixth century in this province. Yet, the Koma Buddhist temple was erected in the early seventh century (Koma meaning Koguryo). The background to this was not the power of local elites who chose a Buddhist temple as the symbol of authority instead of

a keyhole-shaped tumulus. Rather, the erection of the Koma Buddhist temple was possible because the Korean immigrants were already familiar with Buddhism and also because the central polity wanted to use the state Buddhism as an apparatus of control over local regions.

When Buddhism was introduced to Japan in the middle sixth century, the “clan system” that defined a social and political order of local elites was about to be replaced by the centralized political system. This replacement eventually led the central polity to the adoption of the *ritsuryo* code shared by China and other states in East Asia in seventh and eighth centuries. At that time, the local elites of southern Yamashiro was already weak, and were ready to accept the order from the central polity. Moreover, immigrants from Koguryo, Korea seem to have greatly contributed to this acceptance of the central order. This may have necessary because the spatial distribution of local elites in Yamashiro was very uneven.

The erection of the Koma Buddhist temple in the seventh century in southern Yamashiro was significant and epoch-making in the history of this province. Sharing the molds of eaves tiles of the Koma Buddhist temple with the Asuka and Kawahara Buddhist temples in Yamato and other temples located in the vicinity of the Otsu Palace indicates the central polity’s strong involvement in local affairs. The presence of the major Buddhist temple in southern Yamashiro indicates to me the strength of the central government throughout the seventh century. Furthermore, this situation suggests to me that the “transformation from a local clan Buddhism to a state Buddhism” happened in southern Yamashiro early in the seventh century, rather than in the eighth century in other provinces. Or, the weakness of clan Buddhism and relative strength of state Buddhism was the nature of Buddhist temples in southern Yamashiro, including the Koma, Kaniman, and Hirakawa Buddhist temples.

In the middle eighth century, a national system of provincial temples was established, and this system invited in considerable change in a network among Buddhist temples in southern Yamashiro. This change was bipolarization between the provincial temple and major temple under the strong governmental influence on one hand and minor local temples on the other. In southern Yamashiro, the influence of the Yamashiro provincial government compound as a local representative of the central government was stronger on a change in network of local Buddhist temples.

At that time, as Buddhism became more and more fused with indigenous Shintoism, temples came to be erected in mountainous, peripheral areas. The new network incorporated not only Buddhist temples originally built seventh centuries but also these new temples built in mountainous areas. These new temples were located in sacred places at a boundary between provinces, by a spring, and at the top of a giant rock. In southern Yamashiro, while the Yamashiro Provincial temple symbolized the state Buddhism, such Buddhist temples as Kasagi, Fugen, and Kamio represented a new move toward the fusion with Shintoism. The Kamio Buddhist temple, in

particular, was located by a spring and the site of water ritual, and apparently other important rituals took place, as evidenced by a large quantities of miniature ceramic Buddha figurines.

In conclusion, the nature of Buddhism in seventh-century southern Yamashiro was characterized by its progressiveness. This progressiveness was facilitated by its location as the northern entrance to Yamato and the presence of Korean immigrants. More importantly, this progressiveness was a reflection of the strong control of the central government over this province, and this control resulted in the more "state" aspect of local Buddhist temples in southern Yamashiro than "clan" aspect. This strong control in the seventh century greatly facilitated the establishment of the national network of the provincial temples and provincial government compound as a representative of the central government in the eighth century.

The case of southern Yamashiro does not support the well-accepted model of evolution from "clan Buddhism" to "state Buddhism." Rather, I would argue that it was a matter of to what extent influence by the central government was strong and that whether a Buddhist temple was the core in a region or not. The evolution should be considered as the process of the influence by the central government coming to the surface. In this sense, the case of southern Yamashiro may be generalized although some aspects may be unique.

